續國譯漢文大成

文學部 六十五の上

309
65

缺入

始

續國譯漢文大成

文學部　第六十五册（第十七帙の上ノ一）

蘇東坡詩集　五の一

309
65

蘇東坡詩集 第五卷 目次

卷三十四

古今體詩

西湖秋涸東池魚窘甚戲作放魚一首……一
復次放魚韻答趙承議陳教授……五
九月十五日觀月聽琴西湖示坐客……九
復次韻謝趙景貺陳履常見和……一一
送歐陽主簿赴官韋城四首……一五
美哉一首送韋城主簿歐陽君……一九
泛潁……二二
六觀堂老人草書……二四
次韻劉景文見寄……二七
贈朱遜之……三〇
次韻趙景貺督兩歐陽詩破陳酒戒……三三
叔弼云履常不飲故不作詩勸履常飲……三六
臂痛謁告作三絕句示四君子……三八
到潁未幾公帑已竭齋廚索然戲作……四一
景貺履常屢有詩督叔弼季默倡和已許諾矣……四三
贈月長老……四六
次韻答錢穆父穆父以僕得汝陰用杭越酬唱韻……四九
韓退之孟郊墓銘云以昌其詩舉此問王定國……五一
送歐陽推官赴華州監酒……五四
十月十四日以病在告獨酌……五七

獨酌試藥玉滑盞有懷諸君子……六〇
歐陽季默以油煙墨二丸見餉各長寸許……六三
明日復以大魚爲饋重二十斤且求詩故復戲之……六四
和趙景貺栽檜……六五
葉待制求先墳永慕亭詩……六八
與趙陳同過歐陽叔弼新治小齋戲作……七〇
歐陽叔弼見訪誦陶淵明事嘆其絕識……七三
聚星堂雪……七七
喜劉景文至……七九
綺雨張龍公旣應劉景文有詩次韻……八二
劉景文家藏樂天身心問答三首戲書一絕其後……八五
西湖戲作……八六
送歐陽季默赴闕……八七
用前韻作雪詩留景文……九〇
和劉景文見贈……九三
和劉景文雪……九四
次前韻送劉景文……九五
以屛山贈歐陽叔弼……九八
新渡寺席上次趙景貺陳履常韻送歐陽叔弼……一〇〇
次韻趙景貺春思且懷吳越山水……一〇四
次韻陳履常張公龍潭……一〇六
小飲西湖懷歐陽叔弼兄弟贈趙景貺陳履常……一〇九
蠟梅一首贈趙景貺……一一三
送王竦朝散赴闕……一一四
次韻致政張朝奉仍招晚飲……一一六
閻立本職貢圖……一二〇
次韻王滁州見寄……一二三
趙景貺以詩求東齋榜銘戲和其韻……一二五
洞庭春色……一二七
送路都曹……一三〇

次韻陳履常雪中……一三五
二鮮于君以詩文見寄作詩爲謝……一三七
次韻趙德麟雪中惜梅且餉柑酒三首……一四〇
和陳傳道雪中觀燈……一四二
閱世堂贈任仲微……一四四
新渡寺送任仲微……一四七
送運判朱朝奉入蜀……一四八
病中夜讀朱博士詩……一五一
趙德麟餞飲湖上舟中對月……一五四
和趙德麟送陳傳道……一五五

卷三十五

古今體詩

上巳日與二子迨過游塗山荊山記所見……一五七
淮上早發……一六〇
次韻徐仲車……一六一
次韻林子中春日新隄書事見寄……一六三
送陳伯修察院赴闕……一六四
送張嘉父長官……一六六
軾在潁州與趙德麟同治西湖未成……一六八
次韻德麟西湖新成見懷絕句……一七二
再次韻德麟新開西湖……一七三
到官病倦未嘗會客毛正仲惠茶……一七六
雙石……一七九
和陶飲酒二十首……一八一
次韻晁无咎學士相迎……二〇四
次韻范淳父送秦少章……二〇八

聞林夫當徙靈隱寺寓居戲作靈隱前一首……二二一
滕達道挽詞二首……二二三
雲夢連江雨樊山落木秋……二二五
次韻蘇伯固遊蜀岡送李孝博奉使嶺表……二二六
太夫人以无咎生日置酒書壁一絕……二二九
石塔寺……二三〇
送晁美叔發運右司年兄赴闕……二三二
王文玉挽詞……二三四
山光寺送客回次芝上人韻……二三六
送芝上人游廬山……二三七

卷三十六

古今體詩

召還至都門先寄子由……二四七
次韻定國見寄……二四九
送程德林赴眞州……二三八
古別離送蘇伯固……二三一
谷林堂……二三二
雲師無著自金陵來見予廣陵……二三三
予少年頗知種松手植數萬株皆中梁柱矣……二三六
行宿泗間見徐州張天驥次舊韻……二三八
次韻劉景文贈傳義秀才……二三九
在彭城日與定國爲九日黃樓之會……二四一
九日次定國韻……二四三
次韻蔣穎叔錢穆父從駕景靈宮二首……二五〇
憶江南寄純如五首……二五三
軾近以月石硯屏獻子功中書公……二五六
次韻范純父涵星硯月石風林屏詩……二六〇
次韻錢穆父會飲……二六四
次韻穆父尙書侍祠郊丘瞻望天光……二六六
郊祀慶成詩……二六八
次韻王仲至喜雪御筵……二七二
次韻奉和錢穆父蔣穎叔王仲至詩四首……二七四
見和西湖月下聽琴……二七四
見和仇池……二七五
玉津園……二七七
藉田……二七八
頃年楊康功使高麗還奏乞立海神廟於板橋……二七九
沐浴啓聖僧舍與趙德麟邂逅……二八二
余舊在錢塘伯固開西湖伯固有詩因次韻……二八四
僕所藏仇池石希代之寶也王晉卿以小詩借觀……二八五
次天字韻答岑巖起……二八九
次韻蔣穎叔二首……二九〇
扈從景靈宮……二九〇
凝祥池……二九二
和叔盎畫馬……二九三
王晉卿示詩欲奪海石復次前韻……二九四
軾欲以石易畫晉卿難之……二九八
生日蒙劉景文以古畫松鶴爲壽次韻爲謝……三〇二
程德孺惠海中柏石兼辱佳篇輒復和謝……三〇五
次秦少游韻贈姚安世……三〇六
次丹元姚先生韻二首……三〇八
次韻秦少游王仲至元日立春三首……三一三
上元侍飲樓上三首呈同列……三一四
戲答王都尉傳柑……三一七
送蔣穎叔帥熙河……三一八

再送二首……三二二
次韻穎叔觀燈……三二三
次韻王晉卿奉詔押高麗宴射……三二四
次韻錢穆父王仲至同賞田曹梅花……三二六
送襄陽從事李友諒歸錢塘……三二七
次韻吳傳正枯木歌……三二九
送黃師是赴兩浙憲……三三二
送范中濟經略侍郎分韻賦詩軾得先字……三三四
書晁說之考牧圖後……三三七
呂與叔學士挽詞……三四〇
丹元子示詩飄飄然有謫仙風氣……三四二
次韻王定國書丹元子寧極齋……三四四
王仲至侍郎見惠稚栝種之禮曹北垣下……三四七
次韻錢穆父馬上寄蔣穎叔二首……三五〇
表弟程德孺生日……三五二
七年九月自廣陵召還復館於浴室東堂……三五四
吳子野將出家贈以扇山枕屏……三五六
聞潮陽吳子野出家……三五八
贈王覲……三六一

卷三十七

古今體詩

東府雨中別子由……三六三
謝運使仲適座上送王敏仲北使……三六五
書丹元子所示李太白眞……三六七
次韻曾仲錫承議食蜜漬生荔支……三七〇
大行太皇太后高氏挽詞二首……三七一
再次韻曾仲錫荔枝……三七四
次韻滕大夫三首……三七五
雪浪石二首……三七五
沈香石……三八〇
石芝……三八一
鶴歎……三八四
送曾仲錫通判如京師……三八七
和錢穆父送別并求頓遞酒……三八八
劉醜廝詩……三九〇
題毛女眞……三九四
寄餾合刷餅與子由……三九五
次韻子由清汶老龍珠丹……三九六
次韻子由書清汶老所傳秦湘二女圖……三九八
柴圜參寄王定國……四〇一
次韻劉燾撫勾蜜漬荔支……四〇三
立春日小集戲李端叔……四〇五
次韻曾仲錫元日見寄……四〇八
子由生日以檀香觀音像及銀篆盤爲壽……四〇九
次韻李端叔送保倅翟安常赴闕兼寄子由……四一三
中山松醪寄雄州守王引進……四一四
次韻李端叔謝送牛戩鴛鴦竹石圖……四一五
次韻聽上人見寄……四一八
次韻王雄州還朝留別……四二〇
三月二十日多葉杏盛開……四二一
三月二十日開園三首……四二三
次韻王雄州送侍其涇州……四二五
初貶英州過杞贈馬夢得……四二七
臨城道中作……四二八
過湯陰市得豌豆大麥粥示三兒子……四三〇

被命南遷途中寄定武同僚……四三一
子由新修汝州龍興寺吳畫壁……四三三
過高郵寄孫君孚……四三六
僕所至未嘗出游過長蘆聞復禪師病甚……四三八
六月七日泊金陵阻風得鍾山泉公書寄詩爲謝……四四一
贈清涼寺和長老……四四四
予前後守倅餘杭凡五年秋夏之間蒸熱不可過……四四五
慈湖夾阻風五首……四四七

卷三十八

古今體詩

過廬山下……四五一
壺中九華詩……四五三
南康望湖亭……四五六
江西一首……四五七
秧馬歌……四五九
八月七日初入贛過惶恐灘……四六四
鬱孤臺……四六六
廉泉……四六八
塵外亭……四七〇
天竺寺……四七二
過大庾嶺……四七四
宿建封寺曉登盡善亭望韶石三首……四七六
月華寺……四七八
南華寺……四八一
碧落洞……四八四
何公橋詩……四八六
峽山寺……四九〇
散郎亭……四九二
柏家渡……四九三
清遠舟中寄耘老……四九五
舟行至清遠縣見顧秀才極談惠州風物之美……四九八
廣州蒲澗寺……五〇〇
贈蒲澗信長老……五〇一
發廣州……五〇三
浴日亭……五〇四
游羅浮山一首示兒子過……五〇五
十月二日初到惠州……五〇九
寓居合江樓……五一一
惠州靈惠院壁間畫一仰面向天醉僧……五一三
白水山佛跡巖……五一四
詠湯泉……五一八
自笑一首……五二〇
無　題……五二二
朝雲詩……五二三
寄虎兒……五二五
十一月二十六日松風亭下梅花盛開……五二六
再用前韻……五二九
新釀桂酒……五三一
惠守詹君見和復次韻……五三二
花落復次前韻……五三四
江　郊……五三六
詹守攜酒見過用前韻作詩聊復和之……五三八

卷三十九

古今體詩

寄鄧道士……五四一
上元夜……五四三
正月二十四日同游羅浮道院及棲禪精舍……五四五
正月二十六日偶與數客野步……五四八
龍尾石硏寄猶子遠……五五〇
贈王子直秀才……五五一
惠州近城數小山類蜀道春與進士許毅野步……五五三
眞一酒……五五五
游博羅香積寺……五五六
二月十九日攜白酒鱸魚過詹使君食槐葉冷淘……五六〇
贈陳守道……五六一
辨道歌……五六四
江漲用過韻……五七〇
連雨江漲二首……五七二
贈曇秀……五七四
和郭功甫韻送芝道人游隱靜……五七七
次韻定慧欽長老見寄八首……五七八
和陶歸園田居六首……五八五
聞正輔表兄將至以詩迎之……五九四
正輔既見和復次前韻慰鼓盆勸學佛……五九七
同正輔表兄游白水山……六〇一
與正輔游香積寺……六〇四
次韻正輔同游白水山……六〇六
次韻程正輔游碧落洞……六一一
次韻正輔表兄江行見桃花……六一四
追餞正輔表兄至博羅賦詩爲別……六一七

再用前韻……六一九
戲和正輔一字韻……六二三
桄榔杖寄張文潛一首……六二四
四月十一日初食荔支……六二五
答周循州……六二八
荔支嘆……六三〇
六月十二日酒醒步月理髮而寢……六三四
和子由次月中梳頭韻……六三五
和陶貧士七首……六三七
食檳榔……六四六
送惠州押監……六五〇
江月五首……六五一
送佛面杖與羅浮長老……六五六
十一月九日夜夢與人論神仙道術……六五七
章質夫送酒六壺書至而酒不達……六五九
小圃五詠……六六一
人參……六六一
地黃……六六三
枸杞……六六五
甘菊……六六七
薏苡……六六九
雨後行菜圃……六七一
殘臘獨出二首……六七三
贈包安靜先生茶二首……六七六

卷四十

古今體詩

新年五首……六七九
和陶形贈影……六八三
和陶影答形……六八五
和陶神釋……六八六
和陶詠二疏……六八八
和陶詠三良……六九一
和陶詠荊軻……六九四
與黃蕃僧曇穎過逍遙堂何道士宗一問疾……六九八
次韻高要令劉湜峽山寺見寄……六九九
食荔支二首……七〇四
寄高令……七〇六
遷　居……七〇七
和子由盆中石菖蒲忽生九花……七一一
和陶讀山海經……七一三
兩橋詩……七二六
東新橋……七二七
西新橋……七三一
悼朝雲……七三四
縱　筆……七三六
丙子重九二首……七三七
次韻子由所居六詠……七四一
吳子野絕粒不睡過作詩戲之……七四六
擷　菜……七四八
和陶歲暮作和張常侍……七五〇
海上道人傳以神守氣訣……七五二
和陶移居二首……七五三
白鶴峯新居欲成夜過西鄰翟秀才二首……七五六
和陶時運……七六〇
和陶東方有一士……七六四
次韻惠循二守相會……七六五

又次韻二守許過新居……七六七
又次韻二守同訪新居……七六八
循守臨行出小鬟復用前韻……七六九
和陶答龐參軍……七七一
種　茶……七七六
白鶴山新居鑿井四十尺遇盤石石盡乃得泉……七七八
三月二十九日二首……七八〇

卷四十一

古今體詩

吾謫海南子由雷州被命即行了不相知……七八三
和陶止酒……七八六
行瓊儋間肩輿坐睡夢中得句戲作此數句……七八九
次前韻寄子由……七九二
過海得子由書……七九五
安期生……七九六
儋耳山……七九九
夜　夢……八〇〇
遷居之夕聞鄰舍兒誦書欣然而作……八〇三
和陶還舊居……八〇五
和陶和劉柴桑……八〇六
和陶酬劉柴桑……八〇八
和陶勸農……八一〇
和陶九日閒居……八一五
聞子由瘦……八一七
客俎經旬無肉又子由勸不讀書……八二〇

去歲與子野游逍遙堂……八二一
和陶停雲……八二三
過子忽出新意以山芋作玉糝羹……八二七
和陶己酉歲九月九日……八二八
宥老楮……八三〇
觀棊……八三三
糴米……八三六
入寺……八三八
次韻子由三首……八三九
東亭……八三九
東樓……八四一
椰子冠……八四二
次韻子由月季花再生……八四四
次韻子由浴罷……八四六
借前韻賀子由生第四孫斗老……八四九
獨覺……八五二
十二月十七日夜坐達曉寄子由……八五四
謫居三適……八五五
旦起理髮……八五五
午窗坐睡……八五七
夜臥濯足……八五九

蘇東坡詩集　巻三十四

文學博士　久保天隨　譯解

古今體詩　六十七首

西湖秋涸、東池魚窘甚、因會客、呼網師、遷之西池、爲一笑之樂、夜歸、被酒不能寐、戲作放魚一首

西湖秋涸れ、東池魚窘むこと甚だし。因つて客を會し、網師を呼び、之を西池に遷して、一笑の樂を爲す。夜歸り、酒を被りて寐ぬること能はず。戲に放魚一首を作る

東池(一)浮萍(二)半黏塊(三)。　東池の浮萍、半ば塊に黏し、
裂碧(四)跳青(五)出魚背。　碧を裂き、青を跳らして、魚背を出す。
西池(六)秋水尙涵空。　西池の秋水、尙ほ空を涵し、
舞闊搖深吹荇帶(七)。　闊きに舞ひ、深きに搖いて、荇帶を吹く。

【字解】〔一〕東池　西湖の東方なる稍や深い湫潭を指す。〔二〕浮萍　萍は浮草。〔三〕黏塊　黏著して塊を成す。〔四〕裂碧　碧色の水面を裂く。〔五〕跳青　浮草の青いのが水上に跳り出す。〔六〕西池

(八)吾儕有意爲遷居。　吾儕意ありて、爲に居を遷し、
(九)老守縱(一〇)饞那忍膾。　老守、饞を縱にするも、那ぞ膾にするに忍びむ。
縱橫爭看銀刀(一一)出。　縱橫、爭うて看る銀刀の出づるを、
(一二)瀺灂初驚玉(一三)花碎。　瀺灂、初めて驚く玉花の碎くるを。
但愁數罟損(一四)鱗鬣。　但だ愁ふ、數罟の鱗鬣を損するを、
未信長堤隔(一五)濤瀨。　未だ信せず、長堤の濤瀨を隔つるを。
(一六)濊濊發發須臾間。　濊濊發發、須臾の間、
(一七)圉圉洋洋尋(一八)丈外。　圉圉洋洋、尋丈の外。
安知中無蛟(一九)龍種。　安んぞ知らむ、中に蛟龍の種なきを、
或恐尙有風(二〇)雲會。　或は恐る、尙ほ風雲の會あるを。
明年春水漲西湖。　明年春水、西湖に漲らば、
好去相(二一)忘渺(二二)淮海。　好し去つて相忘れ、淮海渺たり。

東池に對して、西湖の西方なる積潭を指す。【七】荇帶　荇は一種の水草、和名はなじゆんさい、葉は圓形、紫赤色にして水面に浮び、莖は水底に在る。從つて、莖の長短は、水の深淺に等しく、上青く、下白く、食ふことが出來る。その莖が長く搖いて水面に搖動する有様が、帶に似たるが故に、荇帶といふ。【八】吾儕　吾輩、吾曹に同じ。【九】老守　老太守。この時、東坡は潁州軍州事に知たりしが故に云ふ。【一〇】縱饞　饞は食貪。【一一】銀刀　白魚を形容して云ふ、杜甫の詩に出レ網銀刀亂とある。【一二】瀺灂　小水の聲。【一三】玉花　魚の口より吐く沫を形容して云ふ。【一四】鱗鬣　鬣は鰭。【一五】濤瀨　蜀都賦に驚濤飜瀨、中淮相忘とあり。呉都賦に、輕擧引鶴、泯濤井瀨とあつて、大波の立つ早瀨。【一六】濊濊發發　詩經に施罛濊濊、鱣鮪發發とあつて、濊濊は網を水中に施す貌、發發は盛な貌。【一七】圉圉洋洋　孟子に見えた字面、趙注に「圉圉は、魚、水に在つて羸劣なる貌。洋洋は舒緩、尾を搖かす貌」とある。【一八】尋丈　尋は一ひろ、普通八尺。【一九】蛟龍種　褒河記に「龍煥、字は世文、晉の太康中、菲河の太守、官を去つて鄉里に還るや、里人語つて曰く、我が家の池裏、龍種來り歸る」とあり、北戶雜錄に引ける陶朱公の養魚經に「魚、三百六十頭に至れば、蛟龍あつて之に長たり、風雨に因つて飛び去る」とある。ここでは、東坡が太守たるより龍煥の故事を用ひて、暗に自ら比したのであらう。【二〇】風雲會　易に「雲は龍に從ひ、風は虎に從ふ」とあり、陸機の樂府に飄颻風雲會とあり、その江離の詩に披レ蒙ニ風雲會一、移レ居華池邊とあり、杜甫の詩に生當ニ風雲會一とあり、又、慘澹風雲會とある。時を得て變化を爲すこと。【二一】相忘　莊子に本づいたので、前に李杞見和の詩の註に詳述して置いた。なほ白居易の放魚詩に、憐ニ其不レ得レ所、移放ニ于南湖一、南湖連ニ西江一、好去莫ニ迴顧一とある。【二二】淮海　淮は淮水、卽ち揚子江の一派。海は東海。江海といふに同じ。

【題義】元祐六年八月、東坡は、龍圖閣學士を以て潁州軍州事に知となり、七年三月、淮南東路鈐轄に充てられて、揚州軍州事に知となるまで、半年餘りも、潁州に居たので、この一卷は、すべて潁州在任中の作である。西湖は、杭州の西湖とは丸で違ふので、查註に「名勝志、潁州の西二里、湖あり、袤十里、廣さ二里、翳然林木、一邦の勝たり。歐陽公、揚より汝に移り、都將ニ二十四橋月一、換得西湖十頃秋の句あり、秦少游、亦た詩あり、云ふ、十里荷花菡萏初、我公所レ至有ニ西湖一とある。その西湖が、暑中旱つづきの爲に、東池の水が涸れ、魚がひどく窘んで見えたから、因つて、客を會し、又漁人を呼んで、その魚どもを西池に移して、一笑の樂を爲した。かくて、夜、家に歸つた處が、酒を飲んだ爲に、昂奮して寐つかず、そこで、放魚と題する短古一首を作つたといふのである。

【詩意】東池は、水が涸れかかり、浮草は、黏著して塊を爲し、碧色の池面を裂いて、その青色を跳らして居る爲に、魚の背が水面に出て居る位、これでは、とても活きて居られまい。しかし、西池は、

秋水滿ち湛へ、依然として天空を涵し、帶の如き花蕈菜の葉は、その潤い處に舞ひ、深い處に揺いて居る。そこで、吾輩は、ふと思ひ付いて、東池の魚を西池に遷して遣つたので、身は貪食飽くなき老太守であるが、如何にも苦んで居る此魚を取り押へて膾にすることは、到底忍び得ない。遷された魚を見ると、機嫌よく遊び戯れて、縱橫に銀刀が閃き出づるが如く、口から沫を吐く時は、音を爲して、玉花の碎くるに驚くばかり。手網で掬ふ時に、此等の魚の鱗や鰭を損ずる樣なことがあつては成らぬと氣遣はれる。湖水の中央に長隄があつて、ここ西池の水が十分にして大波の立つ早瀨を隔てて居るとは、前以て信じなかつた位。何しろ、魚も、かういふ處に移されれば、命も助かる。手網で掬ひ上げる其時は、發發として、跳り騷いで居るが、それも、須臾の間で、愈よ移されると、尋丈の外なる廣い處に泳ぎ出し、處得顔に圉圉洋洋として、さも長閑らしく見える。その移された魚どもの中には、蛟龍の種が無いとも斷言することが出來ないので、他日、風雲の會を得れば、變化して昇天する樣なこともあらう。そこで、來年に成つて、溶溶たる春水が西湖に滿ちたならば、われも又その處に往つて、魚と共に相忘れ、江海の滄滄たる想を爲すであらう。

【餘論】はじめに、東西兩池の現狀を敍したのは、奕者が先づ勢子を布くと一般。次に、吾僚有レ意爲レ遷レ居に至りて、分明題に入り、但愁數罟損二鱗鬣一は、網師を補出して、題意を全うして居る。結末二句に就いては、紀昀が「結び得て濶遠」と云つて居る。なほ、乾隆御批には「忽ち蛟龍雲雨に想到し、通篇字鍊句琢、盡く澎湃の觀を成すを覺ゆ」とある。

復次放魚韻、答趙承議、陳敎授　　復た放魚の韻に次し、趙承議・陳教授に答ふ

(一)擾擾(二)萬生同(三)大塊。　　擾擾たる萬生、大塊を同じうし、
(四)搶榆不羨培風背。　　榆を搶いて、羨まず培風の背。
(五)青邱已呑雲夢芥。　　青邱、すでに呑む雲夢の芥、
(六)黃河復繚天門帶。　　黃河、復た繚る天門の帶。
長譏(七)韓子隘且陋。　　長く譏る、韓子が隘にして且つ陋なるを、
一飽(八)鯨鯢何足膾。　　一飽鯨鯢、何ぞ膾とするに足らむ。
東坡也是(九)可憐人。　　東坡、也た是れ可憐の人、
(一〇)披抉泥沙收(一一)細碎。　　泥沙を披抉して、細碎を收む。
逝將(一二)歸休(一三)八節灘。　　逝いて、將に八節灘に歸休せむとし、
又欲往釣(一四)七里瀨。　　又往いて、七里瀨に釣らむと欲す。
正似此魚逃網中。　　正に似たり、この魚の網中を逃るるに、
未與造物游(一五)數外。　　未だ造物と數外に游ばず。
且將新句(一六)調二子。　　且つ新句を將て二子に調し、

【字解】[一] 擾擾　極めて多數にして亂りがはしき貌。[二] 萬生　萬種の生物、萬物といふに同じ。[三] 大塊　大地、卽ち地球。[四] 搶榆不羨培風背　莊子の逍遙游に、「鵬の背、その幾千里なるを知らざるなり。風の積むや、厚からざれば、その大翼を負ふや力なし。故に九萬里なれば、風、斯れ下なり。而して後、今、風を培ひ、背に青天を負うて、これを夭閼するものなし。而して後、乃ち今、將に南を圖らむとす。蜩と鷽鳩と、これを笑うて曰く、われ決起して飛び、榆枋を搶く、時に至らずして地に控つのみ、奚ぞ九萬里を以て南するを爲さむ」とある。[五] 青邱已呑雲夢芥　子虛賦の服虔註に「青邱國は海東三百里に在り」とある。朝鮮人は、これを以て自ら

湖上秋高風月會。　湖上、秋は高し風月の會。
爲レ君更喚木腸兒。[一七]　君が爲に更に喚ぶ木腸の兒、
[一八]脚扣二兩舷一歌二小海一。　脚は兩舷を扣いて、小海を歌はむ。

其國を稱して居る。雲夢は江南の大澤、洞庭附近一帶の總名。雲夢を呑んで芥蔕となすといふこと、そして、ここの芥蔕は刺の義。【六】黃河復繞天門帶　漢官儀及び泰山記に「泰山は、盤道屈曲して上る、凡そ五十餘盤、小天門を經、仰いで天門を視れば、穴中より天窻を視るが如し」とあり、又「黃河、泰山を去ること三百餘里、祠の所に於て黃河を職る、帶の如し」とある。【七】韓子睢且陋　韓子は卽ち韓愈、その心、ただ狹く且つ固陋なりとの意。【八】鯨鯢何足膾　韓愈の詩に互鎖東鈞儻可レ期、與レ子共膾鯨魚膾とある。【九】可憐人　愛すべき人、杜甫の詩に蘇侯得二數過一、歡喜每傾倒、也復可憐人、呼レ兒具二梨棗一とある。【一〇】抉抉　漢書薛宣傳に抉二抉其闔門一而殺レ之とあつて、その註に「抉は發なり、抉は挑なり」とあつて、くじり開くといふ義。【一一】細碎　書顏の註に「細碎は大略なきなり」とある、ここでは魚族を指して云ふ。【一二】歸休　官を罷めて歸住する。【一三】八節灘　白居易の開八節灘詩の序に「東都龍門潭の南に八節灘あり」と記し、前に郭熙畫秋山平遠の詩の註にも見えて居た。【一四】七里瀨　顧野王の輿地志に「七里瀨は、東陽江に在り、下、嚴陵瀨と接す」とあり、駱賓王の釣磯文に「余、嘗に行いて七里灘に至る、嚴子陵の釣磯あり」と記してある。査註には「元和郡縣志、釣臺は桐廬縣西十里に在り。太平寰宇記、嚴子陵の釣臺、下、七里瀨に連り、亦た之を嚴陵瀨といふ。按ずるに、施氏の原註、七里瀨と嚴陵瀨とを分つて二となすものは訛なり」とある。【一五】數外　測算し得べき世界の外、卽ち超人間の靈域、物外と略ぼ同じ。【一六】謝　斂れる。【一七】木腸兒　木石の腸の人、卽ち無情漢。【一八】脚扣兩舷歌小海　晉書隱逸傳に「賈充、夏統に謂つて曰く、頗る能く鄕の土地間の曲を作すか。統曰く、伍子胥、戮せられて海に投ず、國人、その忠烈を痛み、爲に小海唱を作る。今、これを歌はむと欲す。衆人僉曰く、善しと。統、ここに於て、足を以て船を叩き、聲を引いて喉轉じ、淸激慷愴、風至り、雨集まり、雷電晝冥く、王公以下、皆恐れて之を止めしむ、乃ち已む。充、妓女の徒をして、袿襡を服し、金翠を炫し、その船を繞つて三匝せしむ。統、危坐して聞くところなきが若し。充曰く、この吳兒、木人石心なり」とある。又扣舷に就いては、韓愈の荷花詩に脚敲二兩舷一叫二吳歌一とあり、文選郭璞の江賦に

歎二探菱一以叩レ舷とある。

【題義】趙承議、名は令時、初の字は景貺、時に承議郎を以て、潁州簽判と爲つて居た。陳教授、名は師道、字は履常、一字は無已、彭城の人。續通鑑長篇に「元祐二年四月、徐州の布衣陳師道、亳州司戶參軍となり、徐州州學教授に充てらる。これより先、蘇軾、十科を以て師道を薦む、故に是命あり」とあり、宋史に「薦を以て、起つて徐州教授となり、汝より潁に改む、言者、その進む、科第に非ざるを謂ひ、罷めて歸り、これに久しうして、祕書省正字となる」とあり、魏衍の後山集記に「元祐の初、蘇公、侍從たり、列薦して乃ち之を官にし、その鄕に教授せしめ、未だ幾ならずして、太學博士に除せらる。言者謂ふ、先生、かつて謁告して南郡に詣り、蘇公を見て私を爲す、と。遂に潁州教授に移る」とあつて、二人とも、この時、潁州に在官して居たから、東坡の放魚詩を見て次韻し、東坡も亦た其韻を疊んで、この詩を賦し、仍つて、二人に答へたのである。陳師道の次韻は、後山集に見えて、卽ち左の通りである。

赤手取レ魚如レ拾レ塊。布レ網鳴レ舷攻二腹背一。豈知激濁與二清流一。恐懼騈頭牽二翠帶一。居士仁心到二魚鳥一。會有二微生化一餘腧一。寧容網目漏二呑舟一。誰肯牽レ鮮作二苛碎一。我亦江湖釣竿手。惧逐二輕車一從二下瀨一。生當三得意落二鷗邊一。何用封侯墮二鳶外一。不レ如此魚今得レ所。當レ身暗與二神明一會。徑須三作レ記戒二鯨鯢一。防有三任公釣二東海一。

査初白は、この詩を趙令時の作だといつて居るので、王文誥は、乃ち之を駁し「査註、強ひて、この詩を以て趙景睨の作と爲す。その說に云ふ、この詩、誤つて後山集に入る、詩中、慢逐輕車從下瀬、何用封侯隨鴛外の二句を觀るに、蓋し、景睨、宗室の子弟を以て、身を幕職に降す、故にこの感慨の語を作す、履常の作に非ざるなり、と。見るところ、誤、甚し。履常、布衣を以て官を得たり、故に云ふ、我亦江湖釣竿手、慢逐輕車從下瀬と。豈に下句を割截し、指して宗子の口吻と爲すべけむや。何用封侯は、人人道ふべし、江湖釣竿手は、宗子必ず道はざるなり。今、仍つて更正す」とある。すると、前に掲げたのは、矢張、陳履常の作で、趙令時の次韻は、不幸にも佚亡したものと見え、今考ふることが出來ない。

【詩意】萬物は、種類も多く、紛紛雜雜として、同じく世界てふ大塊の上に棲息し、小大各その分に安んじて居る。されば、蜩と鷽鳩とは、決起して飛ぶも、唯だ楡枋を衝くに過ぎぬが、かの大鵬の風を培うて、背に青天を負ふを見ても羨ましいとも思はない。青邱の仙土に遊ぶものは、胸に雲夢を吞んで、芥蔕にも若かずと爲し、泰山に登つて天門の畔に立てば、黄河は、帶の如く繚繞して居るので、その身が人世を超越すれば、如何なる物でも、必ず小さく見える。ここに、われ東坡は、方外に遊ぶを旨とし、かの韓愈を以て、心狹く且つ固陋なるものとなし、これを譏つて止まず、韓愈が鯨魚の膾を食ひ飽きたいといつたのを嘲つて、鯨魚の如きは、膾とするに足らず、それを食ひ飽きたいといふのは、如何にも愚の極であるといつて居る。その癖、東坡は、無邪氣で愛すべき人であるから、東池の魚の死にかかつて居るのを哀れに思ひ、泥沙を抉り開いて、こまかな雜魚どもを拾ひ聚め、それを西池に放つて遣つたといつて、ひとりで得意がつて居る。東坡は、やがて、八節灘に歸住しやうと思ひ、さては、態態出かけて七里瀨に釣を垂れやうと欲して居るので、その願が叶ひさへすれば、丁度、この魚が網の中から逃れ出た樣なものであるが、今しも、依然として塵底に跼蹐し、未だ造物者と共に超人間の靈域に遊ぶことも出來ず、相變らず苦んで居る。そこで、趙陳二君の次韻を得て、技癢に堪へず、又ぞろ、新篇を拈出して、二君に戯れる次第で、湖上秋高き頃、風月の雅會を催して、おもふ存分、二君と唱酬を試みたいものである。その時は、木人石心の吳兒と稱せられた彼の夏統の如き人を呼び出し、脚で兩枝を扣きつつ、得意らしく、小海唱の一曲を歌ふのを共に聞かうと思ふのである。

【餘論】紀昀は正似此魚逃網中の句を評して「明かに、綰合を作す、又是れ一法」といつたが、且つまり、この句は、魚と自己とを一處に片づけたので、まことに、靈心妙腕を推すべく、その下、將新句調二子の句は、趙陳二人を清出して、題意に副はしめた。乾隆御批には「現身說法、又一變し、方の外に遊ぶを以て高しと爲す、これ前篇、好去相忘渺淮海、一句の轉語なり」とある。

九月十五日、觀月聽琴西湖視坐客

九月十五日、月を觀て琴を西湖に聽き、坐客に視す

白露下衆草、碧空卷微雲。　白露、衆草に下り、碧空、微雲を卷く。

(一)孤光爲誰來。似爲我與君。　孤光、誰が爲に來る、我と君との爲にするに似たり。
水天浮四座。(二)河漢落酒尊。　水天、四座に浮び、河漢、酒尊に落つ。
使我冰雪腸。不受(三)麴蘖醺。　我が冰雪の腸をして、麴蘖の醺を受けざらしむ。
尙恨琴有絃。(四)出魚亂(五)湖紋。　尙ほ恨む、琴に絃あり、出魚、湖紋を亂るを。
哀彈奏舊曲。妙耳非昔聞。　哀彈、舊曲を奏し、妙耳、昔聞に非ず。
良時失(六)俯仰。此見寧朝昏。　良時、俯仰を失ひ、此に見る、寧ろ朝昏。
(七)懸知一生中。(八)道眼無由渾。　懸に知る、一生の中、道眼、渾るに由なし。

【字解】〔一〕孤光　孤月の光。〔二〕河漢　天の河。〔三〕麴蘖醺　麴蘖は酒、酒の醉。〔四〕出魚　跳り出た魚。〔五〕湖紋　湖面の波紋。〔六〕失俯仰　俯仰の間に失はれる、一瞬間に跡方も無い様になる。〔七〕懸知　懸ははるかにと訓す、十分に斷定せぬ様な場合に用ひる。〔八〕道眼　道を體得した人の眼、俗眼の反對。

【題義】この詩は、九月十五日の夜、西湖に游んで月を觀、且つ琴を聽きたるに因り、賦して、座客に示したのである。

【詩意】白露は、しとしとと衆草を濕し、仰ぎ見れば、碧空高く晴れて、微雲も、いつの間にか卷き去られ、一輪の明月、天に冲し、その光は、誰が爲に輝くかといへば、さながら、われと諸君との爲に輿を添へむとして居る樣である。ここ湖上に坐せば、水と天と、兩つながら座間に浮ぶが如く、銀河は、斜に流れて、酒樽の中に注ぎ込み、氷雪の如く淸らかなる我が心腸をして、酒の醉を受けしめぬ樣にして居る。殊に、琴の音のしをらしき、水底の魚を跳らしめて、湖面の波紋を亂すばかり。悲しげに彈じ出したのは、もとより聞き慣れた舊曲であるが、耳に入つて絕妙なるは、今まで聞いたことも無い樣に思はれる。顧みれば、良時は、俯仰の間に失ひ易く、この美景は、朝暮打つづけて、何時でも見られるものではない。かう考へると、人生は、まことに詰まらぬものであるが、俗眼ならぬ道眼を持つて居れば、一生の中、濁つて物を見損ふことは、先づ無からうと思はれる。

【餘論】起首八句は、月夜の淸景を敍し、淸思裊裊、靜意掬すべく、俗手これを覩して惝悅の語を爲すに似ず、次に一轉して琴に入る處、神あつて跡なく、もし俗手以て之を爲さば、必ず琴月を對寫すべく、然らざれば、別に琴聲の一段を寫すに相違ない。かういふ處は、筆意簡淨、愈よ其妙を見るべきものである。乾隆御批には「月色の明、琴聲の淸、詩を誦すれば、以て臥游に當つるも亦た得む」とある。

復次韻謝趙景貺陳履常見和兼簡歐陽叔弼兄弟

復た次韻して、趙景貺・陳履常の和せられしを謝し、兼ねて歐陽叔弼兄弟に簡す

(一)能詩李長吉。(二)識字揚子雲。　詩を能くするの李長吉、字を識るの揚子雲。

(三)端能望(四)此府。坐嘯獲(五)兩君。
逝將江湖去。浮我五(六)石尊。
(七)眷焉復(八)少留。尙爲(九)世所醺。
或勸莫作詩。(一〇)兒輩工織紋。
(一一)朱紘寄三歎。未害俗耳聞。
共尋兩(一二)歐陽。(一三)伐薪照黃昏。
是家有甘井。汲多終不渾。

端に能く此府を望む、坐嘯、兩君を獲たり。
逝いて將に江湖に去り、我が五石の尊を浮べむとす。
眷焉として、復た少く留まり、尙は世に醺せらる。
或は勸む、詩を作る莫れ、兒輩、織紋に工なり。
朱紘、三歎を寄す、未だ害せず俗耳の聞くを。
共に尋ぬ兩歐陽、薪を伐つて黃昏を照らす。
この家に甘井あり、汲むこと多きも終に渾らず。

【字解】【一】能詩李長吉　唐書に「李賀、字は長吉、七歲、長短の製を以て、名、京華を動かす」とあり、唐書の本傳に「七歲にして辭章を能くす。韓愈、詩を賦せしむ、筆を援つて輒ち就る」とある。【二】識字揚子雲　漢書の本傳に「揚雄、字は子雲。劉棻、かつて雄に從つて奇字を作るを學ぶ」とある。【三】端能　まさに能くと訓ずべし。【四】此府　潁州の州衙、趙陳二君の出仕する處。【五】兩君　趙景貺・陳履常の二人をいふ。【六】五石尊　莊子の逍遙遊に「今、子、五石の瓠あり、何ぞ以て大樽となして、江湖に浮ぶことを慮らざる、而して、その瓠落して容るるところなきを憂ふ、すなはち、夫子、猶は蓬の心あるかな」とある。【七】眷焉　なつかしき貌。【八】少留　文選王粲の登樓賦に曾何足以少留とある。【九】世所醺　世俗に醺はされる。【一〇】兒輩工織紋　織紋は讒言、詩經に萋兮斐兮、成是貝錦とあり、書經に厥能織紋とあるに本づく。王註に「元豐間に當つて、公、詩に坐して遷謫せらる。ここに至つて、賈易・趙君錫、又揚州竹西寺の詩を以て、神宗上仙の報を聞くが爲にして作るとなす、宣仁、力めて辨明を爲し、公、赤た頸をもうて以て去る、この場の意、實に此に在り」といひ、王文誥の案に「公、杭州に赴く、文彥博、書に詩を作らざるを勸む。歸るに及びて、遂に易・君錫の誣あり、その意、蓋し彥博を指すなり」とあり。【一一】朱紘　禮記に「淸廟の瑟朱紘、一倡三歎」とあつて、その音を解するもの極めて少きを云ふ。【一二】兩歐陽　叔弼・季默の二人、時に母の喪に丁つて潁州に居た。【一三】伐薪照黃昏　杜甫の宿贊公土室の詩に明燃林中薪、暗汲石底井とあるを用ふ。

【題義】趙景貺・陳履常二人の略傳は、前に載せたが、施註に「趙景貺、名は令時、建隆より以來、理國治民、宗子に及ばず。神宗、外に出でて、天下と之を共にす。景貺、承議郎簽書判官を以て、東坡潁州の幕府に在り。公、その吏事通敏、文彩俊麗、志節端亮、議論英發なるを謂ふ。時に敎授陳履常、實に公の門人、相與に倡酬し、すでにして力めて朝に薦め、又爲に說を著して字を德麟と改め、潁より揚に徙り、揚より召し入れ、又再び上疏して之を薦め、遂に光祿丞に除せられ、紹興の間、安定郡王に封せらる。履常、彭城に家し、少にして學を好んで苦志、年十六、文を以て曾子固に謁するや、その必ず文を以て世に高きを知る。諸經に通じ、尤も詩禮に邃、文を爲る、精深雅奧、喜んで詩を爲り、すこしく意に中らざれば、輒ち焚いて去り、存するもの、わづかに十の一。熙寧中、王氏の學盛行す。履常、心に其說を非とし、遂に意を進取に絕つ。元祐の初、東坡、傅欽之堯兪、孫莘老覺と、その文行を薦め、家を起して徐州敎授となる。坡の杭に守たるや、履常、知己の義を以て、郡檄を求めて行を送らむとす。守、聽かず、疾を以て謁告す。南京に別るるの詩に云ふ、豈不畏簡書、放麑誠不忍と。後、太常博士に除せらる。言者、これを用つて之を論じ、改めて潁州に敎授とし、復た此に相從ふ。家もとより窮空、或は日を經て炊がざるも澹如たり。召されて祕書省正字となつて卒

す」とある。歐陽叔弼兄弟は、歐陽修の子で、査註に「歐陽文忠の四子、發、字は伯和、次は奕、字は仲純、皆早く卒す。次は棐、字は叔弼、次は辯、字は季默、時に母の艱に丁つて、潁に居る」とあり、施註に「叔弼、乙科に登りしが、文忠の老いたるを以て、終に出でて仕へず。季默、わづかに中書、官、承議郎に止まる」とある。なほ宋史の歐陽棐傳には「はじめ、審官主簿となり、職方員外郎に遷り、襄州に知たり。曾布、政を執る。その婦兄魏泰、來つて襄に居り、州門東偏官邸の廢址を以て天荒となす。棐、覺に持して與へず。泰、布に譖せられ、徙つて潞州に知たり。旋ち罷む。元符の末、吏部右司二郎中を歴、直祕閣を以て蔡州に知たり、未だ幾ならずして、黨籍に坐し、廢せらること十餘年にして卒す」とあり、續通鑑長篇に「元祐三年五月、考功員外郎歐陽棐、著作郎實錄院檢討となる。劉安世、その諂佞淺薄、公に背いて朋を成すを言うて、新命を追還せむことを望む、これに從うて、集賢校理權判登聞鼓院に改め、八月、職方員外郎となり、七年正月、禮部員外郎となる」とある。この詩は、趙景貺・陳履常の二人が前に掲げた觀月聽琴西湖の詩に和せしに因り、更に其韻を疊んで之に謝し、序に歐陽叔弼・季默の兄弟に簡したのである。

【詩意】君等二人、一は總角にして詩を能くせし李長吉の如く、一は多く奇字を識れる揚子雲の如く、まことに天晴の逸才、われ偶ま君等の官衙を望む時、坐嘯せる二君が、態態和詩を寄せられたのは、まことに喜ばしい。われは、莊子の云へる如く、五石を盛る大匏を浮べ、江湖に向つて立ち去らうと思つて居た處が、二君が懷かしい爲め、又ぞろ、しばらく、ここに淹留して居る始末、動もすれば、塵世の爲に醉はされて、心ならずも、俗化することを免れない。或人は、予に勸めて詩を作るなといつたが、成程、滿廷の小人どもは、譏誣に巧であるから、うツかりすると、如何なるひどい目に逢ふか分からない。清廟の瑟の朱絃は、解するもの極めて少く、一倡すれば、唯だ三人感心するだけだといふが、詩を作つても、さういふものならば、俗人の耳に聞かれたとて、すこしも差支はないので、何でも、高尙にして尋常人に分らない樣なものに限る。聞けば、歐陽氏の倅二人は、母の喪に丁つて、今しも、この地に居るとのことで、君等と共に之を尋ね、薪を伐つて黄昏を照らし、緩ツくりと話し込むも善からう。歐陽氏の先代文忠公の遺德は、甘井の如く、依然として猶は存し、その井は、いくら汲んでも、決して水の濁ることなく、その流風餘韻は、後生小子を薰化することも、決して少くない。

送歐陽主簿赴官韋城四首

歐陽主簿が官に韋城に赴くを送る　四首

（一）鳳雛驥子日（二）相高。　鳳雛驥子、日に相高く、

白髮蒼顏笑我曹。　白髮蒼顏、我が曹を笑ふ。

讀徧牙籤（三）三萬軸（四）。　讀み徧ねし牙籤三萬軸、

却來小邑試（五）牛刀。　却つて、小邑に來つて牛刀を試む。

【字解】【一】鳳雛驥子　鳳凰の雛、名馬の子、歐陽主簿が名門の出なるが故に云ふ。【二】日相高　名聲が日日に高くなる。【三】牙籤　書帙に挿んで書名を記した札、象牙で造るが故に云ふ。【四】三萬軸　むか

しの書籍は皆卷物なりしが故に、軸といつたので、韓愈の送二諸葛覺一の詩に鄴侯家多レ書、挿架三萬軸、一一懸二牙籤一、新若二手未一レ觸、爲レ人强記覽、過レ眼不二再讀一とある。【三】試牛刀　子游が武城の宰となつて在任して居た時、孔子が其地を過ぎて、絃歌の聲を聞くと「鷄を割くに、何ぞ牛刀を用ひむや」といつたことで、その詳は、論語に見えて居る。

【題意】歐陽主簿、名は憲、發の子、修の孫。査註に「欒城集、薛夫人墓志、孫六人あり、憲、元祐中、滑州韋城縣主簿を授けらる。宛邱集、歐陽伯和墓志、男一人、憲といふと。これに據れば、歐陽主簿は、乃ち醉翁の孫、伯和の子なり。隋書、東郡に韋城縣あり。元和郡縣志、東郡白馬縣の東南に韋城あり、隋の開皇元年、白馬の南境を分つて韋城縣を置く、初め沃州に屬し、後、滑州に屬す。太平寰宇記、韋城は滑州の東南六十里に在り、古しへの豕韋の國」とある。この詩は、歐陽憲が新に韋城縣の主簿となつて、その地に赴任するを送つて作つたのである。

【詩意】君は名門の出、鳳凰の雛、名馬の子に比すべく、從つて、その名聲は日日に高く、これに反して、予は老境寂寞、白髮蒼顏、自ら其窮を笑ふばかり。君は、これまで刻苦力學、象牙の札を付けてある家藏の書三萬卷を殘りなく讀み盡し、天晴の才學を持つて居ながら、今次、韋城縣などいふ小邑の主簿に任せられたのは、まことに、牛刀を以て 雞 を割く樣なもので、もとより、職、未だ其器に稱はざれども、マア、精精、勉强せられむことを希望する。

【餘論】紀昀の評に「多く六一より情を生ず、便ち泛泛の筆に非ず」とある。六一居士は、いふまでもなく、歐陽修の別號である。

（一）出處年來恨レ不レ齊。　出處、年來、恨むらくは齊しからず、

一尊臨レ水記二分攜一。　一尊、水に臨んで分攜を記す。

（三）江湖咫尺吾將レ老。　江湖咫尺、吾、將に老いむとす、

（四）汝潁東流子却西。　汝潁東流、子、却つて西す。

【字解】【一】出處　出でて仕官すると退いて歸休すると、進退に同じ。【二】分攜　分離、離別に同じ。【三】江湖　世間、塵閒に對して云ふ。【四】汝潁　二水の名。

【詩意】君と予と、從前、出處進退の同じからざるは、まことに遺憾で、水に臨んで離筵の一尊を酌み、やがて手を分つたことは、今でも記憶して居る。予は、遠からず、官を罷めて、咫尺江湖の廣い處で、老後を暢氣に暮らさうと思つて居るのに、汝潁二水の東流するに關せず、君が今頃西行せらるに就いて、又ぞろ、お別れとなるのは、まことに傷心の至である。

【餘論】紀昀の評に「この首、三首の中に夾んで便ち好し、もし單に此一首のみならば、即ち是れ窠臼」とあつて、連作の決して徒爾ならざるを推知すべきである。

（一）白馬津頭春水來。　白馬津頭、春水來る、

白魚猶喜レ似二江淮一。　白魚、猶は喜ぶ江淮に似たるを。

（三）使君已復冰堂酒。　使君、すでに復す冰堂の酒、

【字解】【一】白馬津　九域志に「滑州黎陽津、一名白馬津」とあり、漢書酈食其傳に「白馬の津を守る」とある。【三】使君　地方長官の尊

更望重新畫舫齋。(三)　更に望む、重ねて畫舫齋を新にせむことを。

稱、滑州の太守を指す。〔三〕畫舫齋　歐陽修に記文があつて「予、滑州に至るの三月、その序東偏の室に即いて燕居を爲り、名づけて畫舫齋といふ」とあり、王註に「醉翁、滑州に知たり、氷臺酒法あり、畫舫齋を作る」とある。

【詩意】今しも春、君が行かれる滑州に於ては、白馬津の邊、春水溶溶として滿ち湛へ、水中に羣る白魚が、江淮と同じなのは、まことに、旅情を喜ばすことが出來る。滑州の太守は、例の氷堂酒法を復活したさうだから、君の祖父の遺蹟たる畫舫齋を再興するの一事は、殊に、予の希望するところである。

道旁垂白(一)定沾巾。　道旁の垂白、定めて巾を沾す、

正似當年綠髮新。　正に似たり、當年綠髮の新なるに。

故國依然喬木在。　故國、依然として喬木在り、

典刑(二)復見老成人。　典刑、復た見る老成の人。

【字解】〔一〕垂白　漢書杜欽傳の註に「白髮の下垂するなり」とある。〔二〕典刑　蔡邕の死後、孔融が其門下の小吏の狀貌酷似せるものを懇に待遇し「老成人なしと雖も、なほ典型を見る」といつたので、その詳は、前に次韻初到陳州の註に記して置いた。

【詩意】滑州に著任される時、道傍に出迎へた州人中の白髮を垂れたものどもは、君が恰も綠髮新なる當年の歐陽公に似て居るのを見て、感慨の餘、涙下つて衣巾を霑すことであらう。げにや、故國は依然として、喬木なほ存し、そして、そツくり俤を留めて、宛然、典型たるべき君に依つて、再び老成人を見たのであるから、かくなれるも、尤も千萬な事である。

美哉一首、送韋城主簿歐陽君

美なるかな一首、韋城主簿歐陽君を送る

美(一)哉水洋洋乎。　美なるかな水、洋洋乎たり。

我懷先生(二)送之子(三)于城隅。　我、先生を懷ひ、之子を城隅に送る。

洋洋乎美哉水。　洋洋乎たり、美なるかな水。

我送之子至於新渡(四)。　我、之子を送つて新渡に至る。

念彼嵩(五)雒。眷焉西顧。　かの嵩雒を念うて、眷焉として西に顧る。

之子于邁。至于白馬(六)。　之子于き邁いて、白馬に至る。

白馬舊邦。其(七)構維新。　白馬は舊邦、その構、維れ新なり。
邦人流涕。畫(八)舫之孫。　邦人流涕、畫舫の孫。
相(九)其口髯。尙克似之。　その口髯を相るに、尙は克く之に似たり。
先(一〇)生遺民。之子往(一一)字。　先生の遺民、之子、往いて字へ。

【字解】【一】美哉水洋洋乎　孔子が趙に之かむとして河に臨んで作りし詩中に見ゆ、前に送呂希道の詩中に注して置いた。【二】先生　歐陽修を指す。【三】之子　詩經の召南に之子于歸、宜其家室とある。【四】新渡　寺の名、前に見ゆ。【五】嵩雒　雒は洛、嵩山と洛水。【六】白馬　卽ち白馬津、前首に見ゆ。【七】其構維新　論語に「周は舊邦と雖も、その命、維れ新なり」とあるを用ひたのである。【八】畫舫　卽ち畫舫齋、前首に見ゆ、歐陽修を指す。【九】相　見る。【一〇】先生遺民　當日歐陽公の治下たりし人民。【一一】往字　字は撫養、卽ち養ふ。

【題義】美哉は、この詩の起首二字を取つたので、格別の深義もなく、もとより、前首と同時の作であらう。

【詩意】春の水は、洋洋として、まことに美はしい。予は、歐陽公の遺德を念ふこと深きに因り、その令孫たる此人の赴任を送つて、態態、城隅まで來た。春の水は、洋洋として、まことに美はしい。予は、此人を送つて、早くも新渡まで來た。君の行く手には、嵩山洛水があつて、予は之を念ふに因り、なつかしげに、西の方を顧みて、感慨愈よ增すばかり。君は、行き行きて、白馬津に至り、恙なく著任するであらう。白馬津の在る滑州は、舊邦ではあるが、その建設物は、すべて歐陽修が改築したので、まだ新しい。滑州の人民は、涙を流して、畫舫齋の主人であつた歐陽公の令孫たる君を迎へるであらうし、君の口邊の長髯を見ると、歐陽公にそツくりだといつて、愈よ慕はしく思ふであらう。これ等の人人は、元と公の治下の遺民であるから、君も其心して、その地に往つたならば、撫養の仁を布いて、これを劬つて遣らねばならぬ。

【餘論】紀昀の評に「何ぞ必ずしも、定めて、この格を作さむ。雅士案頭、忽ち一斑の僞古器を雜ふるが如し」とあつて、いささか苛酷ではあるが、必ずしも中らないでもない。

泛潁

潁に泛ぶ

我性喜臨(一)水。得潁意甚奇。　我が性、喜んで水に臨む、潁を得て、意、甚だ奇とす。
到官十(二)日來。九日河之湄(三)。　官に到つて十日來、九日、河の湄。
吏民笑相語。使君老而癡。　吏民、笑うて相語る、使君、老いて癡なりと。
使君實不癡。流水有令(四)姿。　使君、實は癡ならず、流水、令姿あり。
遶郡十餘里。不(五)駛亦不遲。　郡を遶る十餘里、駛せず、亦た遲からず。

上流直而清。下流曲而漪。　上流は直にして淸、下流は曲にして漪。
畫船俯明鏡。笑問汝爲誰。　畫船、明鏡に俯し、笑ひ問ふ、汝、誰とか爲すと。
忽然生鱗甲。亂我須與眉。　忽然として鱗甲を生じ、我が須と眉とを亂す。
散爲百東坡。頃刻復在茲。　散じて百東坡と爲り、頃刻、復た茲に在り。
此豈水薄相。與我相娛嬉。　これ豈に水の薄相、われと相娛嬉せむや。
聲色與臭味。顚倒眩小兒。　聲色と臭味と、顚倒して小兒を眩す。
等是兒戲物。水中少磷緇。　等しく是れ、兒戲の物、水中、磷緇少し。
趙陳兩歐陽。同參天人師。　趙陳兩歐陽、同じく參す天人の師。
觀妙各有得。共賦泛潁詩。　妙を觀て、各〻得るあらば、共に賦せよ泛潁の詩。

【字解】〔一〕臨水　臨は高處より俯して見ること。〔二〕十日來　白樂天の詩に「到官十來日、覽鏡生二毛」とあつて、十餘日に同じ。〔三〕河之湄　爾雅に「水草交はる、これを湄といふ」とあり、詩經に彼何人斯、居河之湄とある、河邊といふに同じ。〔四〕令姿　よき姿態。〔五〕不駛亦不遲　早くもなく、さうかといつて遲くもない。陶淵明の和胡西曹の詩に、蕤賓五月中、淸朝起南颸、不駛亦不遲、飄飄吹我衣とある。〔六〕明鏡　水面をいふ、韓愈の酬盧給事の詩に、曲江千頃秋波淨、平鋪紅蕖蓋明鏡とある。〔七〕生鱗甲　水面に細浪の生ずる形容。白樂天の詩に、伊水細浪鱗甲生とある。〔八〕薄相　輕薄の相。〔九〕磷緇　論語に「磨して磷せず、涅して緇せず」とあつて、他の影響を受けて本色を失ふこと。〔一〇〕趙陳兩歐陽　前に見えた趙景貺・陳履常、及び歐陽叔弼・季默兄弟をいふ。〔一一〕天人師　佛を云ふ、法華經に「無上十調御丈夫天人師佛世尊」とある。〔一二〕觀妙　老子に「常に無欲にして、以て其妙を觀る」とある。

【題義】水經注に「潁水、東南して淮に入る。春秋、楚子州來に狩し、潁尾に次す。蓋し、潁水の淮に會するなり」とあり、潁州志に「潁水、舊と黃河、項城縣界より流れて州に入り、潁上・太和等の縣に屬す。古語に、世亂潁水濁、世治潁水淸の句あり」と記してある。この詩は、東坡が舟を潁水に泛べだ時に作つたのである。

【詩意】予の天性として、水を俯瞰することを喜んで居るが、ここに潁水を得て、心に甚だ之を奇とした。そこで、著任の後、わづかに十餘日しか過ぎないのに、九日は河岸に出かけて、その景色に看惚れて居た。吏民どもは、笑つて相語り、太守公は年を取つて餘程とぼけて居ると噂し合つて居た。しかし、使君は實際とぼけては居らぬので、流水の姿態、自然に宜しきを愛づるだけである。抑も、潁の水たるや、郡を遶つて流るること十餘里、水勢は、格別早くもなく、さうかといつて遲くもなく、上流は一直線にして水淸く、下流は曲りくねつて漣波が起つて居る。われは、畫船に乘じ、鏡なす水面に俯し、そこに映れる我が姿を見て、汝は誰かといつた。すると、見る間に細浪起つて、鱗甲を皺めるが如く、我が鬚眉を攪き亂し、散じて百個の東坡となつたが、頃刻の間に、波が靜まると、依然として復た元の處に居た。かくの如きは、水に輕薄の相があつて、わざと我と娛嬉を縱にして居る譯でもない。わが水を玩ぶことを愛するは、聲色臭味にも過ぎ、心も顚倒して、まるで小兒が目を

くらましたと同じである。さはれ、等しく是れ兒戲同樣な物であつて、水中に於ける我が影の遂に變せず、磷緇の厄を受くることなく、本來の眞相を失はぬことは、流石になつかしい。ここに、趙景睨・陳履常、竝に歐陽叔弼・季默の諸君は、いづれも佛を信じて居られるから、もとより無慾にして、物の妙を觀ることに就いては、各〻得るところがあつて、奇想橫逸して居るであらうから、一緒に潁水に泛ぶ詩を作つて見たら善からうと思はれる。

【餘論】　畫船俯二明鏡一以下の數句は、一篇の精彩で、紀昀は「眼前の語、寫して奇彩を成す、これを自在神通となす」といつて居る。なほ全篇に就いて、査評には「游戲篇を成し、理趣具足、禪語に深く、手敏にして心靈」といひ、紀昀は一源、火山より出でて、運らすに本色の機軸を以てし、遂に奇調を成す」といひ、乾隆御批には「楞嚴圓覺の理、栗里香山の筆。むかし、沈敦謨、傳燈錄、良价禪師の過水觀影偈を引いて曰く、我今獨自往、處處得レ逢レ渠、渠今正是我、我今不二是渠一と。以て、此詩、散爲二百東坡一、頃刻復在レ茲の二語を解すれば、最も之を得たりと爲す」とある。但し、結末の稍や粗率なることは、紀昀も既に公言して居る。

六觀堂老人草書

六觀堂老人の草書

物生有レ象象乃滋(一)。
物生まれて象あり、象、乃ち滋し、

夢幻無レ根(二)成二斯須(三)一。
夢幻、根なくして、斯須を成す。

方二其夢時一了非(四)レ無。
その夢みる時に方つて、了に無に非ず、

泡影一失俯仰殊。
泡影一失、俯仰殊なり。

清露未レ晞電已徂。
清露未だ晞かず、電、すでに徂く、

此滅滅盡(五)乃眞吾。
ここに滅し、滅し盡さば、乃ち眞吾。

云レ如二死灰一實不レ枯。
死灰の如しと云ふも、實は枯れず、

逢場作レ戲(六)三昧(七)俱。
逢場、戲を作して、三昧俱にす。

化レ身爲レ醫忘二其軀一。
身を化して醫となし、その軀を忘る、

草書非レ學聊自娛。
草書、學ぶに非ず、聊か自ら娛む。

落筆已喚(八)二周越一奴。
落筆、すでに周越を喚んで奴とす、

蒼鼠奮(九)レ髯飲二松腴(一〇)一。
蒼鼠、髯を奮つて、松腴を飲む。

剡藤玉版(一一)開二雪膚(一二)一。
剡藤玉版、雪膚を開き、

游龍(一三)天飛萬人呼(一四)。
游龍、天に飛んで、萬人呼ぶ。

莫レ作二羞澀(一五)羊氏姝一。
作る莫れ羞澀羊氏の姝。

【字解】【一】象乃滋　左傳僖公十五年に「韓簡曰く、龜は象なり、筮は數なり、物生まれて後に象あり、象して後に滋あり、滋して後に數あり」と見ゆ。【二】無根　陶淵明の雜詩に人生無二根蔕一、飄如二陌上塵一」とある。【三】斯須　莊子の田子方に「彼、直に斯須に謂ふに似たるなり」とあり、杜甫の詩に且爲王孫立斯須とある。暫時といふに同じ。【四】了非無　圓覺經に「夢中の人、夢みる時、無に非ざるが如し。醒むるに至るに及びて、了に得るところなし」とある。【五】此滅滅盡　涅槃經に「諸行無常、是れ生滅の法」とある。【六】逢場作戲　傳燈錄に「竿木、身に隨ひ、逢場、戲を爲す」とあつて、どこでも、その場所に臨めば、百戲を演ずる。【七】三昧　事物の奥義。【八】已喚周越奴　王註に「周越、草書を善くし、しかも、慣業に違ばず、

喚んで奴となすとは、騎は李賀の詩、奴僕もて騒を命ずるがごとし」とあり、査註に「東軒筆錄、本朝の尚書郎周越、書名を以て天聖景祐の間に盛行す、然れども、筆法軟俗にして古氣なし」とある。【九】蒼鼠奮髯　鼠の髯で造つた筆。【一〇】松膜　松の油煙で造つた墨。【一一】剡藤玉版　剡溪の藤の纖維で造つた紙で、玉版と名づく。【一二】雪膚　紙の純白なるをいふ。【一三】游龍　晉書王羲之傳に「隸書を善くす。論者、その筆勢を稱して以爲へらく、飄は游雲の若く、矯は驚龍の若し」とあり、隋の智果の論書に「王羲之の書は、龍の天門に跳るが如く、虎の鳳閣に臥するが如し」とある。【一四】萬人呼　杜甫の詩に、身輕一鳥過、槍急萬人呼とある。【一五】羞澀羊氏妹　施註に「韋續の書訣墨藪に、梁の武帝、羊欣の書を許し、大家の婢、夫人と爲り、位遇を加ふと雖も、しかし、舉止羞澀、終に近似せざる如しといふ。法書苑にも、亦た云ふ」とある。

【題義】　題下の自註に「六觀は金剛經、夢幻等六物に取るなり。老人は僧了性、醫に精しくして草書を善くし、筆を下せば遠韻あり、しかも、人、貴ぶを知るなし、故に此詩を作る」とある。次に、王註には「圖經、千頃廣化院、杭州城中木子杭橋の北に在り、院に六觀堂慈化大師塔銘あり。師、名は了性、餘杭の人、俗姓は朱氏」とあり、査註には「武林梵志、廣化院は木子巷に在り、吳越王建つ。僧了性、亦た垂慈老人と號す。醫に精しく、草書を善くす。東坡、爲に詩を作る。本集六觀堂の贊に云ふ、垂慈老人、嘗作㆓是觀㆒、自㆑一至㆑六、六生㆓千萬㆒」とある。すると、六觀堂老人は卽ち僧了性、杭州に居たのであるが、東坡が潁州に著任せし後、その人を思ひ出でて、特に此詩を作つたものと見える。

【詩意】　萬物の生ずるや、もとより形象があつて、その形象は、漸次に滋殖するものである。しかし、この世界は、もと夢幻に過ぎねば、何等の根據もなく、唯だ暫時の間、形象を成して居るだけである。夢中に於てこそ、實在の物と考へて居るが、やがて、夢醒むれば、泡影忽ち消え去り、俯仰の間、先後その觀を異にし、あらゆる物は、跡だになく、露未だ乾かざる間に、電影に隨つて去つて仕舞ふ。かくの如く、諸行無常、萬法皆滅し、そして滅し盡す間に於て、眞正の自我だけは、依然として存在して居るので、死灰の樣だといつて居るが、實は枯れ盡さずして、永久に亙り、そして、その場所にさへ出遇へば、百戲を縱にして三昧の妙境に入るのである。了性師は、六觀を以て堂に名づけた位で、萬物起滅の理を知つて居る以上、その醫に精しいのも、草書を善くするのも、ともに游戲三昧である。すでに、その身を化して醫師となし、平生忙がしげに立ち廻つて、起死回生の爲に、殆んど其軀を忘れ、又草書を善くすとはいへ、決して、刻苦して之を學んだ譯ではなく、聊か以て自ら娛むに過ぎぬ。醫術は、姑らく之を措き、その草書の妙なるや、一たび筆を落せば、本朝の名手たる周越を呼んで奴僕となす位。鼠鬚の筆に佳墨を十分に含ませ、雪の如く白き剡藤の玉版箋に書きなぐると、さながら游龍の天に昇るが如く、これを見た人は、覺えず聲を揭げて感心する位。かの舉止羞澀、下婢が大家の夫人に成り上つた樣だといはれた羊欣などの眞似は爲さず、全く天稟の名筆である。

【餘論】　紀昀の評に「後半、頗る山谷に似たり」とある。

次韻劉景文見寄

劉景文が寄せらるるに次韻す

淮上東來雙鯉魚。(一)　淮上、東より來る雙鯉魚、

【字解】【一】雙鯉魚　手紙を云

巧將詩信渡江湖。　巧に詩信を將て、江湖を渡る。
細看落墨皆松瘦。　細に看れば、落墨、皆松瘦、
想見掀髯正鶴孤。　想ひ見る掀髯、正に鶴孤。
烈士家風安用此。　烈士の家風、安んぞ此を用ひむ、
書生習氣未能無。　書生の習氣、未だ無き能はず。
莫因老驥思千里。　老驥に因つて千里を思ひ、
醉後哀歌缺唾壺。　醉後の哀歌、唾壺を缺く莫れ。

ふ、雙の字には、格別の意味も無い。古しへは、手紙を魚の形に疊んだから此稱が始まつたとのこと。【二】詩信 詩の便り。【三】松瘦 文字は松の如く瘦せる、その瘦硬なるをいふ。皮日休の詩に、雙松格爭瘦とある。【四】掀髯 髯を掀き上げて大笑すること。王註に「景文美髯、故に之を髯劉といふ」とある。【五】鶴孤 その風貌が孤鶴の様である。東方朔の七諫に、鵾鶴孤而夜號とある。【六】烈士 劉景文、字は季孫、平の第六子、そして平は烈士を以て稱せられた。東都事略に「劉平、字は士衡、祥符の人。父漢凝、官、崇儀使に至る。平、人と爲り、任俠、弓馬を善くす。進士に舉げられて御史となる。上書して事を言ひ、丁謂に惡まる。眞宗、その才を知つて、將に之を用ひむとす。丁謂曰く、平は將家の子、兵を知る、もし西北に將たらしむれば、以て夷狄を制すべし、と。後、尙衣庫使に改められ、邠州に知たり。元昊反するや、延帥范雍、平を召して保安に至り、石元孫と合せしむ。平、土門に趨き、轉鬭三日、執へられて殺さる」とあり、曾鞏の隆平集に「劉平は、景德三年の進士。寶元の初、事に延州に死し、壯武と諡せられ、平の家を信陵坊第一區に賜ふ。子慶孫・宜孫・昌孫・貽孫・孝孫・季孫、咸な官を賜ふ」とある。【七】書生習氣 その慷慨激烈なるを云ふ。東都事略に「蘇軾奏す、季孫、詩に工に、文を能くし、忠義勇烈に至つては、平の風あり」と見えて居る。【八】老驥思千里 この五字は杜甫の句を其儘取つたので、なほ次の項を見よ。【九】缺唾壺 晉書王敦傳に「酒後ごとに、輒ち魏の武帝の樂府を詠じ、歌うて曰く、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已と。如意を以て、唾壺を打つて節となし、壺邊盡く缺く」とある。

【題義】 劉景文は、東坡と親交があつて、この頃、左の詩を寄せて來た。

倦壓鼇頭請左魚。笑尋穎尾爲西湖。二三賢守去非遠。六一清風今不孤。四海共知霜鬢滿。
重陽能插菊花無。聚星堂上誰先到。欲傍金樽倒玉壺。

そこで、東坡は次韻して之に答へたのである。

【詩意】 東から來て淮水を通り越し、はるばる雙鯉魚を寄せられ、一片の詩信、巧に江湖の遠きを渡つて無事に接手したのは、まことに喜ばしい。その詩箋を見ると、落墨の痕、鮮に、文字は勁硬にして、皆松樹の如く瘦せ、これを書く時、髯を掀げて大笑し、その風貌、さながら孤鶴の如く淸かりしことを想像する。君の御親父は、名だたる烈士であるから、その家風として、詩文などは、丸で必要もないのに、君の之を能くせられるのは、まことに感佩の至。しかも、君とても、慷慨激烈、書生の習氣は全く無い譯には行かぬ。但し、この世では、事、志と違ふことが普通であるから、名馬は年を取つても、その志、なほ千里に在るといふが如く、一廉の功名を立てむと欲し、醉後悲しげに高歌し、唾壺を打ち碎く樣な事を爲さず、精精落ち付いて、心のどかに構へて居るが善からうと思はれる。

【餘論】 紀昀の評に「後半沈鬱」とあるが、まさしく、その通りである。

贈朱遜之

朱遜之に贈る

元祐六年九月、與朱遜之會議於潁、或言洛人善接花、歲出新枝、而菊品尤多、遜之曰、菊當以黃爲正、餘可鄙也、昔叔向聞鬷蔑一言、知其爲人、予於遜之亦云。

【訓讀】元祐六年九月、朱遜之と潁に會議す、或は言ふ、洛人善く花を接し、歲ごとに新枝を出し、而して、菊品尤も多しと。遜之曰く、菊は當に黃を以て正と爲すべし。餘は鄙むべきなりと、むかし、叔向、鬷蔑の一言を聞いて、この人と爲りを知る、予、遜之に於て亦た云ふ。

黃花候秋節（一）、遠自夏小正（二）。　黃花、秋節を候し、遠く夏小正よりす。

坤裳（三）有正色、鞠衣（四）亦令名。　坤裳、正色あり、鞠衣、亦た令名。

一從人僞（五）勝、遂與天力爭。　一たび、人僞の勝ちしより、遂に天力と爭ふ。

易姓寓非族（六）、改顏隨所令。　姓を易へて非族に寓し、顏を改めて、令するところに隨ふ。

新奇既易售、粹駁（七）宜相傾。　新奇、既に售れ易く、粹駁、宜しく相傾くべし。

疾惡逢伯厚（八）、識眞似淵明（九）。　惡を疾む、伯厚に逢ひ、眞を識る、淵明に似たり。

君言我所印、世論誰敢評。　君の言、わが印するところ、世論、誰か敢て評せむ。

願君爲霜風、一掃紫（一〇）與赬。　願はくは、君、霜風となり、一掃せよ紫と赬と。

【字解】〔一〕秋節　秋の季節、月令に「季秋の月、菊に黃花あり」と見ゆ。〔二〕夏小正　王註に「夏小正は大戴禮の篇名。蟲魚草木を以て、十二月の節候を正し、夏后氏に起る、故に夏小正といふ」とあつて、その夏小正の中に「九月榮鞠」とある。〔三〕坤裳　易の坤卦六五に「黃裳元吉」とある。〔四〕鞠衣　王註に「周官、后妃の服に鞠衣あり、鞠の花黃、黃は陰中の色、蠶を治むるに鞠衣を服するは、陰事なればなり」とある。〔五〕人僞　僞は人爲、卽ち人工。〔六〕非族　同族ならぬもの。〔七〕粹駁　純粹と雜駁。〔八〕伯厚　前に林子中以詩寄の詩中に注して置いた。〔九〕淵明　卽ち陶淵明、性、菊を愛し、その詩にも、秋菊有佳色、裛露掇其英、汎此忘憂物、遠我遺世情とある。〔一〇〕紫與赬　赬は赤色、紫菊に就いては、賓懷記に「宣帝の時、異國、紫菊一莖を貢す、蔓延數畝、味甘し、食するもの、死に至つて飢渴せず」とある。

【題義】朱遜之、名は勃、潁に會議すといふのは、陳州に八丈の溝を開くに就いて、打合せをしたのである。序中に見えた叔向の事は、前に弔李臺卿の詩中に注して置いた。それから、序の意味は――元祐六年九月、州事打合せの爲に、朱遜之と潁州に於て會議を開催した。その時、ある人の云ふには、洛陽の人は、花を接ぐことが上手で、年年新種を出し、就中、菊は其品種が殊に多いとのこと。すると、遜之の云ふには、菊は黃色が正しいので、その餘は、皆賤むべく、新種は全く取るに足らぬと斷言した。むかし、晉の叔向は、鬷蔑の一言を聞いたばかりで、直にその人と爲りを看破したが、予も亦た朱遜之の此一言を聞いて、その人、妄りに新を好まず、又世俗と趣向を異にして居る天晴の人物だといふことを知り、仍つて、この詩を作つたといふのである。

【詩意】黄花と稱せらるる菊は、晩秋九月に咲くもので、遠き古しへの夏小正にも、ちやんと見えて居る。そして、易の坤の卦に黄裳とあつて、黄色こそ正色であるし、周官の鞠衣といふのも、矢張、黄衣で、久しく、その令名を擅にして居た。それだのに、一たび人工が勝を占めてより、遂に天然の力と爭うて、造化を壓倒する樣になり、菊は黄色ならぬものが持て囃され、いつしか、その本姓を易へて、非族の間に寄寓し、本來の顔色を改めて、人の命ずるままに咲き出でる樣に成つた。何にしても、新奇なものは、世俗の間に流行し易く、そして、純粹なのと雜駁なのとが互に傾奪するのは、今更致し方もない。ここに、朱遜之が惡を憎むことは、彼の伯厚の如く、そして、菊花の眞相を識別するは、古しへの陶淵明の如くである。君の言葉は、我が丹田に印して、長しへに記憶すべく、區區たる世論などは、もとより批評すべき限りでない。願はくは、君、霜を帶びたる冬の風となり、かの紫だの赤だのの菊を盡く一掃して、根絶せしめ、ひとり黄色の者だけを殘す樣にして貰ひたい。

【餘論】紀昀は、この詩の起首數句を評して「莊論、腐ならざるに妙」といひ、伯厚、淵明の數句に就いては「點綴巧合、切姓の陋格に同じきに非ず」といひ、結末に關しては「勢、須らく推開すべし、方に作意を見る」といつて居る。

次韻趙景貺督兩歐陽詩破陳酒戒

趙景貺に次韻し、兩歐陽の詩を督し、陳が酒戒を破らしむ

(一)商也哀未忘。歲月忽已秋。　商や、哀、未だ忘れず、歲月、忽ち已に秋。
(二)祥琴雖未調。餘悲不敢留。　祥琴未だ調せずと雖も、餘悲、敢て留まらず。
娟此乃(三)韻語。未入(四)金石流。　娟んや、此は乃ち韻語、未だ金石の流に入らず。
(五)羲之生五子。(六)總角出(七)銀鉤。　羲之、五子を生み、總角、銀鉤を出す。
(八)吾家有二許(九)。下筆兩(一〇)不休。　吾が家に二許あり、筆を下して兩つながら休まず。
君言不能詩。此語人信不。　君は言ふ、詩を能くせずと、この語、人信ずるや不や。
(一一)千鍾斯爲堯。百榼斯爲邱(一二)。　千鍾、これを堯となし、百榼、これを邱となす。
(一三)陋矣陶士衡(一四)。當以大白(一五)浮。　陋なり陶士衡、當に大白を以て浮ぶべし。
酒中那(一六)有失。醉則不驚鷗(一七)。　酒中、那ぞ失あらむ、醉ふも、則ち鷗を驚かさず。
(一八)明當罰二子。已洗兩玉舟(一九)。　明、當に二子を罰すべく、すでに洗ふ兩玉舟。

【字解】【一】商也哀未忘　商は卜商、字は子夏、禮記の檀弓に「子夏、すでに喪を除いて見ゆ、これに琴を與ふ、これを和すれども和せず、これを彈ずれども聲を成さず、作つて曰く、哀、未だ忘れざるなり、先王禮を制す、敢て過ぐる勿れ」とある。欒城集に載する墓志に據ると、兩歐陽の母薛夫人は、元祐四年八月を以て京師で歿り、三年の喪は、六年の冬を以て終るので、丁度、今その時である。【二】祥琴　琴は心を和げるものであるから、特に祥といつたのである。【三】韻語　王註に「晉宋人、韻に叶ふの説話を韻語といふ、今、先生、詩を以て韻語となす」とあり、南史謝靈運傳に「何長瑜、臨川王の記室となり、韻語を以て僚佐を序す」とある。【四】金

石泫　泫は類、もしくは比の義。【五】羲之生五子　晉書に「王羲之、七子あり、名を知らるるもの五人、元之・凝之・徽之・操之・獻之」とある。【六】總角　杜甫の詩に總角草書又神速とある。あげまき。未だ冠せざる少年の頃、髮を兩歳に束れて角の如きをいふ。【七】銀鉤　字體の妙を形容して云ふ。【八】吾家　即ち蘇氏。【九】二許　王註に「二許は大許公蘇瓌、小許公蘇頲」とあり、舊唐書に「蘇瓌、許國公に封ぜらる、子頲、父の爵許國公を襲ふ」とあり、唐語林に「蘇頲の文章、代を蓋ふ、時に小許公と稱す」とある。【一〇】雨不休　傳毅、字は武仲、班固と伯仲の間に在れども、固は之を小なりとし、かつて、その弟超に書を與へて「武仲、能く文を屬するを以て、蘭臺令史となり、筆を下して自ら休む能はず」とある。【一一】千鍾斯爲堯　後漢書孔融傳に「曹操、酒禁を制す、融、頻りに書して之を爭うて曰く、堯、千鍾ならざれば、以て太平を建つるなく、孔、百觚ならざれば、以て上聖に堪ふるなし」とある。古しへより、聖賢は、皆、酒を嗜んだといふこと。【一二】斯爲邱　邱は孔子の名。【一三】陋矣　固陋にして通達ならざること。【一四】陶士衡　晉書陶侃傳に「字は士衡、酒を飲む毎に、定限あり。殷浩等、更に少しく進めむことを勸む、侃、悽懷良や久しうして曰く、年少、かつて酒失あり、亡親約せらる、故に敢て踰えず」とある。【一五】大白　杯をいふ。【一六】那有失　失は酒の上の過失。【一七】不驚鷗　列子に「海上の人、漚鳥を好むもの、毎旦、漚鳥に從つて游ぶ、至るもの百、往いて止まず」とあり、杜甫の題元武禪師壁の詩に錫飛常近鶴、杯渡不驚鷗とあり、顧況の酬李侍郎の詩に刺船入荷花不驚鳧與鷗とある。【一八】明　明日。【一九】兩玉舟　玉舟は玉で造つた舟の形せる杯。周禮に「秋嘗冬蒸、祼には斝彝・黃彝を用ふ、皆舟あり」とあつて、舟は杯。東坡の文與可に與ふる書に「浙を離れて、すでに四年、向に浙物あり、すでに分散す、乘玉船兩隻あり、獻上す」とあつて、藥を飲む爲に用ひたものであらうが、この時、現に所持して居たものと見える。

【題義】歐陽叔弼・季默の二人は、その母薛夫人の喪に籠つて居て、久しく詩を作らず、陳履常は、戒律を持して酒を飲まなかつた。そこで、東坡は、趙景貺の韻に次して、この詩を作り、歐陽兄弟には、もう詩を作つても善からうといつて催促し、陳履常には、戒律などは詰まらぬことだから、早く止めて、酒を飲めといつたのである。趙景貺の原詩は、今傳はらぬから、よくは分からぬが、矢張、同じ樣な構想に本づいたものだらうと思はれる。

【詩意】君は、古しへの卜商と同じく、久しく母の喪に居て、悲哀の情を忘れ兼ね、歳月推移して、今年も、すでに秋となり、最早、喪も明けかかつて居るから、琴は未だ調へずとも、餘悲を留めぬ樣にして、思ひ諦めるが善からう。まして、君は詩に長じ、その作るところは、區區たる金石音韻の比ではなく、まことに大したものであるから、作らずに居るのは、まことに遺憾の至である。むかし、王羲之は五子を生んだが、揃ひも揃つて、皆秀才であつて、いづれも、未だ冠せざる少年の頃、銀鉤鐵畫、父に亞ぐ能書と稱せられ、蘇氏の瓌頲父子は、大許小許といひ、詞名相下らず、二人ともに專心に文を屬し、筆を下して少しも休むことが無かつたといふが、歐陽公の令息たる二君も、矢張、その通りで、その才藻は、親讓りで頗る觀るべきものがある。君は、本來詩が出來ないといつて謙遜された處で、これを聞いた人は、果して信ずるや否や、無論信じないに決つて居る。兎に角、母の喪も最早明けたから、これから、詩を作つて、傳家の名を一層高く揚げらるることは、まことに囑望の至に堪へない。次には、酒の事であるが、酒は古しへの聖賢も、常に愛飲したので、千鍾を飲んで、はじめて堯と稱し、百榼を傾けて、すなはち孔丘と稱した位。かの陶侃の如きは、頑冥固陋、到底濟度すべからざる變人であつて、兎に角、大白を浮べて快飲すべきである。酒を飲んだからとて、過失を仕出かす譯でもなく、又醉つた處で、依然塵機を忘れて居るから、決して、海上の鷗鳥を驚かすこともない。陳君も之に鑒みて、戒律など、六つかしいことは言はずに、矢張、飲んだら善からう。もし歐陽叔弼にして

詩を作らず、陳履常にして酒を飲ます、どうしても、我が言を聴き入れぬとならば、明日は、屹度二君を罰すべく、その積りで、兩隻の玉杯を洗ひ清めて、ちやんと準備を致して置かう。

【餘論】紀昀が「この種、すべて戲筆を以て論ず」といつた通り、これ等は、諧謔を以て詩を爲したものであるが、相當にまとまつて居て、卑俗に陷らぬ處は、流石に東坡の才筆である。

叔弼云、履常不飲、故不作詩、勸履常飲

叔弼云ふ、履常飲ます、故に詩を作らずと、履常に飲を勸む

我本畏（一）酒人。臨（二）觴未嘗訴。　我、本と酒を畏るるの人、觴に臨んで、未だ嘗て訴へず。

平生坐詩窮。得句忍不吐。　平生、詩に坐して窮するも、句を得て吐かざるに忍びむや。

吐（三）酒茹（四）好詩。肝胃生滓（五）汚。　酒を吐いて好詩を茹へば、肝胃、滓汚を生ず。

用此較得喪。天（六）豈不足付。　此を用つて得喪を較ぶ、天、豈に付するに足らざらむや。

吾儕非二物。歲月誰與度。　吾儕、二物に非ずんば、歲月、誰と與に度らむ。

悄然得長愁。爲計已大誤。　悄然として長愁を得、計を爲す、已に大に誤れり。

二歐非無詩。恨子不飲故。　二歐、詩なきに非ず、恨むらくは、子が飲まざるの故なり。

强爲釂（七）一酌。將非作愁具。　强ひて爲に一酌を釂す、將に愁を作すの具に非ざらむとす。

成言如皎（八）日。援筆當自賦。　言を成すこと、皎日の如く、筆を援つて當に自ら賦すべし。

他年五（九）君詠。山（一〇）王一時數。　他年五君詠、山王一時に數へむ。

【字解】【一】畏酒　酒を好まざること甚しきをいふ。【二】臨觴　杯を手にする。【三】吐酒　吐は受けずして之を却くるの意。【四】茹　納めて之を入るること。【五】滓汚　滓は塵穢。【六】天豈不足付　白居易の思舊の詩に、且進＝杯中物＝、其餘皆付＝天とある。【七】釂一酌　釂は酒を飲んで盡すこと。【八】皎日　詩經に謂＝予不＝信、有＝如＝皎日＝とある。【九】五君詠　前に李誠之挽詞の中に注して置いた。顏延年の作で、阮籍・嵇康・劉伶・阮咸・向秀、凡そ五人の事を詠じて、自ら喩へたもの。【一〇】山王　顏延年、五君詠の序に「山濤王戎は貴盛にして黜けらる、而して取らず」とある。

【題義】東坡が折角前詩を作つて、歐陽二子に詩を作ることを、陳履常に酒を飲むことを勸めた處が、やがて、歐陽叔弼が來て云ふには、詩を賜はつて勸告されたのは、まことに有り難いが、陳履常は、どうしても酒を飲まないといふから、從つて、自分も、詩を作らないとのことであつた。それでは、まことに詰まらぬから、又この詩を作つて、陳履常に是非酒を飲めといつて勸めた。

【詩意】予は、本來、酒が大嫌ひの人であるが、それでも、杯を手にすれば、躊躇せずに飲み、決して、厭だといつて他に訴へたこともない。それから、平生、詩の爲に、隨分ひどい目に逢ひ、わが命、數ば窮せしに拘はらず、句を得た上は、これを吐かすして置くに忍びず、どうやら、まとめて物にするのが常である。しかし、酒は嫌ひだといつて、之を吐き出し、詩が好きだといつて、好詩を矢鱈に

詰め込むと、肝胃の間に塵穢を生じて、まことに閉口する。そこで、得失如何を比較すると、萬事天に任かせる外はない。つまり、嫌ひだからといつても、酒を飲むし、好きだといつても、詩は程程にして置く。何は兎もあれ、吾吾は、詩酒の二物に非ざれば、誰と共に歳月を度り行くことが出來やう か。君等の如く、本來好きであるのに、酒も飲ます、詩も作らす、悄然として、いつまでも愁へ惱んで居るといふのは、計を爲すこと、すでに甚だ誤つたものである。歐陽叔弼・季默の二人は、詩を作らぬでもないが、君が酒を飲まぬ故に、わざと差し扣へて居るとのこと。そこで、無理にも、君に酒を勸めて、一杯を盡して貰はうと思ふので、酒は、愁を催すものでは無からう。すでに、言を成すことは皎日の如く、約束したことは必ず履行すべきであるから、歐陽兄弟も、やがて、筆を援つて詩を賦するのであらう。さうすると、他日、五君詠を作る時、今度は山濤・王戎の二人をも一緒に數へると同じく、吾吾の仲間として、君等を除外せずとも善からうと思ふ。

【餘論】紀昀は「未嘗訴は妥を欠く」といひ、「天豈の句、醒豁せず」といひ、「將非の句、亦た醒せず」といひ、遠慮なく、その缺點を攻擊して居るが、前にも云へる如く、もとより、戲筆であるから、さうひどく言はぬ方が善からうと思はれる。

臂痛謁告作三絶句示四君子

臂痛謁告し、三絶句を作つて、四君子に示す

（一）公退清閒如致仕。　公退清閒、致仕の如く、

（三）酒餘歡適似還鄉。　酒餘の歡適、鄉に還るに似たり。

不妨更有（四）安心病。　妨げず、更に安心の病あるを、

臥看（五）縈簾一炷香。　臥して看る、簾を縈る一炷の香。

【字解】【一】公退　役所より退出して居ること。【二】致仕　禮記に「大夫、七十にして事を致す、もし謝を得ざれば、必ず之に几杖を賜ふ」とある。【三】酒餘　醉後に同じ。【四】安心病　格別心配するにも及ばぬ様な輕い病氣。【五】一炷　香の煙の一縷を云ふ。

【題義】臂痛は、多分リウマチの樣な氣味で、兩方の臂が痛んだのであらう。謁告とは、缺勤を屆け出でて家居すること。四君子は、例の趙陳竝に歐陽兄弟。この詩は、東坡が、病氣引籠中、賦して、例の同好四人に示したのである。

【詩意】缺勤して家に籠つて居ると、まことに幽清閒雅であつて、役を罷めて隱居した樣であるし、醉後、暢氣にして心情太だ快適なるは、さながら、故鄉に還つた樣である。加之、格別心配する程でもなき臂の痛み位は、もとより妨げず、寐そべつて、一縷の香煙、簾を縈つて立ち上るのを眺めて居るのは、まことに、心長閑の至である。

心有何求遺病安。　心何の求むるあらむ病をして安からしむ、【字解】【一】古井不生瀾　白居

年來古井不生瀾。　年來、古井、瀾を生せず。

祇愁戲瓦閒童子。　祇だ愁ふ、戲瓦の閒童子、

却作冷冷一水看。　却つて作す冷冷一水の看。

弟子あり、隙を窺うて室を觀、惟だ淸水の遍く室中に在るを見る。童稚無知、一瓦礫を取つて水内に投じ、水を激して聲を作す。我、定を出でし後、頓に心痛を覺ゆ。我、すなはち告げて言ふ、汝、更に水を見て瓦礫を除き去れ、と。童子、敎を奉じ、門を開いて之を除く、我、後に定を出づ、身質、初の如し」とある。

【意意】わが心は、何を求むるとしもなく、全く無念無想であるが爲に、病氣も、至つて安らかである。年ごろ悟り澄ました心は、古井に波瀾を生せざると一般。唯だ惡戲な童子輩が、我が室を窺うて、冷冷たる一水が滿ち湛へて居ると思ひ、瓦礫を拾つて投げ込み、そして、我が心をして病ましめる樣なことがあつては困まると思ふだけである。

易の贈元稹の詩に、豈無山上苗、徑寸無歳寒、豈無要津水、咫尺有波瀾、之子異於是、久處誓不諼、無波古井水、有節秋竹竿とある。[二] 戲瓦閒童子　楞嚴經に、「我に

(一)小閣低窗臥宴溫。(二)　小閣低窗、宴溫に臥す、

了然非默亦非言。　了然、默するに非ず、亦言ふに非ず。

(三)維摩示病吾眞病。　維摩は病を示し、吾は眞に病む、

誰識東坡不二門。(四)　誰か識らむ、東坡不二の門。

【字解】[一] 小閣低窗　白居易の詩に重衾嗔帽寛氈履、小閣低窗深地爐とある。[二] 宴溫　宴は晏、日が出て暖かきこと。史記武帝本紀に「中山に至つて宴溫、黄雲あつて蓋ふ」とあつて、如淳の注に「三輔、日、淸濟に出づるを謂うて、晏晏にして溫となすなり」とある。[三] 維摩示病　前に游諸佛舍の詩中に注して置いた。維摩は天竺の居士、毘耶離城に於て病を示した。[四] 不二門　前に維摩像の詩中に注して置いた、唯一の法門。

【詩意】小閣低窗の中に臥せば、折から晴れた冬の日の暖かさは、まことに氣持がよく、了然として、默するでもなく、さうかといつて、物いふでもなく、語默以上に超越して居る。むかし、天竺の維摩居士は、病を示したが、吾は今本當に病に臥して居るので、この臥病こそ、わが悟道を爲す唯一の法門である。

【餘論】紀昀の評に「三首、骨に到るまで宋格、これを廢すれば能はず、これに效へば必せず」とある。但し王文誥は、中の一首を賞して「この詩、運意ひとり佳、妙は釋乘を驅遣し、絕えて障礙なきに在り、故に喜ぶべきなり」といつて居る。

到潁未幾公帑已竭齋廚索然戲作
潁に到りて未だ幾ならず、公帑已に竭き、齋廚索然たり、戲に作る

我昔在東武。(一)　我、むかし東武に在り、

吏方謹新書。(二)　吏、方に新書を謹む。

(三)齋空不知春。　齋、空しくして、春を知らず、

客至先愁予。　客、至つて、先づ予を愁へしむ。

采（一）杞聊自誑。食菊不敢餘。　杞を采つて、聊か自ら誑き、菊を食うて、敢て餘さず。
歲月今幾何。齒髮日向疏。　歲月、今幾何ぞ、齒髮、日に疏に向ふ。
幸此一郡老。依然十年初。　幸にこの一郡の老、依然たり十年の初。
夢（五）飮本來空。眞飽竟亦虛。　夢飮、本來空しく、眞飽、竟に亦た虛し。
尙有赤（六）脚婢。能烹赬（七）尾魚。　尙ほ赤脚の婢あり、能く赬尾の魚を烹る。
心知皆夢耳。愼勿歌歸（八）歟。　心に知る、皆夢のみ、愼んで歸歟を歌ふ勿れ。

【字解】【一】東武　前に登段屯田の詩中に注して置いた、膠西を指す。【二】新書　新法を云ふ、その爲に、公使庫の錢を減じた。【三】齋空　齋は公廚。【四】采杞　杞は枸杞、東坡の後杞菊賦の敍に「移つて膠西に守たり、しばらく一飽を欲して、齋廚索然、その憂に堪へず、日に通守劉君庭式と古城の廢圃に循ひ、杞菊を求めて之を食ふ」とある。【五】夢飮　夢に酒を飮む。【六】赤脚婢　冬に成つても足袋を穿かぬ下婢。【七】赬尾魚　前に金山寺の詩中に注して置いた。赬は赤色。魚が疲れると、尾が赤くなるといふので、これは弱つて居た魚。【八】歸歟　論語に「歸らむ歟、歸らむ歟。吾が黨の小子」とある。

【題義】公帑は公使庫の錢。王明清の揮麈後錄に「太祖、すでに藩鎭を廢し、士人に命じて州を典らしむ。ここに於て、公使庫を置いて、過客を遇せしめ、館置供餽、人、旅寓の嘆なし。或は州郡廚傳を飾ふるを以て非となすもの、未だ祖宗の命意を解せず」とある。齋廚の齋は公廚。東坡が潁州に著任せし後、未だ幾日をも經ざるに、あてがはれた錢が無くなつたといふことで、公庫の接待も手薄に、毎日の御馳走も甚だ乏しくなつた。そこで、戲に此詩を作つたのである。

【詩意】われ曩に膠西に赴任せし時、役人どもは、新法を嚴守し、費額を節減して仕舞つた爲に、太守の供給も缺乏し、公庫は空になつて、賑はしき春をも知らず、客が來ても、接待に事を缺いて、第一に予を愁へしめた。そこで、日日枸杞を摘んで、枉げて自ら足れりとし、菊の芽を食して、少しも餘さなかつた位。それから、今日まで、どれだけの年月が過ぎ去つたか。われは、齒も落ち、髮も拔けて、日日疏らに成つて來る。幸に、潁州軍州事に知として、一郡の長老と稱せられて居るものの、十年前と矢張同じである。そして、今日の境涯、公庫の供給も不十分である處から、夢に酒を飮んだ處で、本來空であるし、實際、おもふ存分に飽食することは、及びなき願である。しかし、足袋だに穿かぬ樣な賤婢が居て、弱り切つて尾の赤くなつた魚を烹て呉れた。顧みれば、萬事皆夢なることは、心に知つて居るから、その分に安んじて、格別不滿足とも思はず、決して、歸らむか、歸らむかなどいつて、歌ひ出すにも及ばない。

【餘論】紀昀の評に「亦た是れ率筆」とある。

景晛履常屢有詩、督叔弼季默倡和、已許諾矣、復以此句挑之

景晛・履常屢詩有り、叔弼・季默を督して倡和せしめ、已に許諾せり。復た此句を以て之を挑む

君家文律(一)冠西京(二)。　君が家の文律、西京に冠たり、
旋築詩壇按酒兵。　旋ち詩壇を築いて酒兵を按ず。
(三)袖手莫輕(四)眞將種。　手を袖にして、輕んずる莫れ眞將種、
(五)致師須得(六)老門生。　師を致す、須らく得べし老門生。
明朝(七)鄭伯降誰受。　明朝、鄭伯、降、誰か受く、
昨夜(八)條侯壁已驚。　昨夜、條侯、壁、すでに驚く。
從此(九)醉翁天下樂。　これより醉翁天下の樂、
還應(一〇)一舉百觴傾。　還た應に一舉百觴を傾くべし。

【字解】〔一〕文律　文字上の規律、文選陸機の文賦に、皆、辭條與文律、予膺之所服とある。〔二〕西京　前漢、西、長安に都せしが故に云ふ。〔三〕袖手　傍觀の貌。〔四〕眞將種　晉書胡貴嬪傳に「帝、かつて之と樗蒱す、矢を爭うて遂に上の指を傷つく、帝怒つて曰く、これ固より將種なり」とある。ここでは、兩歐陽が文忠公の子息なるが故に云ふ。〔五〕致師　左傳僖公二十八年に「鄭伯、楚に如いて、その師を致す」とあり、王註に「周禮、夏官司馬、上環人、師を致すを掌る」注に云ふ、師を致すとは、その必戰の志を致す。古しへは、守戰必ず勇力の士を以て先づ敵を犯さしむ」とあつて、つまり開戰すること。〔六〕老門生　唐書選擧志に「擧人、すでに及第するや、綴行通名、主司の第に詣れば門生といふ」とあつて、東坡は、歐陽公に對して毎に門生と稱して居た。〔七〕鄭伯　左傳宣公十二年に「楚子、鄭を圍む。鄭伯、肉袒、羊を牽いて、以て逆へて曰く、孤不天、君に事ふる能はず、君をして怒を懷いて以て敝邑に及ばしむ、孤の罪なり」とある。〔八〕條侯　卽ち周亞夫、漢書吳王濞傳に「吳兵、西せむと欲す。梁、城守して敢て西せず。糧絕え、卒飢ゆ。夜、條侯の壁に奔り、東南を驚かす。條侯、西北に備へしむ。果して西北よりして、入るを得ず、吳、大に敗る」とある。〔九〕醉翁　歐陽公自ら稱す、醉翁亭記に「これを名づくるものは誰ぞ、太守自ら謂ふなり。太守を誰と爲す、廬陵の歐陽修なり」とある。〔一〇〕一舉百觴　杜甫の詩に一擧累十觴とあり、東坡の自註に「文忠公、蘇梅を贈るの詩に云ふ、我亦願助勇、鼓旗譟其傍、快哉天下樂、一醉宜百觴」とある。

【題義】趙景貺・陳履常の二人は、屢ば詩を作つた。そこで、歐陽叔弼・季默の二人を催促して倡和を致せといつた處が、すでに承諾したから、又この詩を作つて、愈よ唱和を挑んだ。それから、陳履常の後山集を觀ると、大に詔蘇公督兩歐陽と題せる左の詩がある。

吟聲正可候蟲鳴。酒面猶須作老兵。豈有文章妨要務。孰知詩律自前生。向來懷璧眞成罪。未必含光不屢驚。血指汗顏終縮手。此懷端復向誰傾。

【詩意】歐陽氏の文律の嚴重なることは、前漢に持ち出しても比類なき位。そこで、詩壇を築いて酒兵を按じ、唱和の開戰に準備して居る。君等二人は、歐陽公の令息で、もとより將種であるから、袖手傍觀して、これを輕んずる譯には行かぬし、やがて開戰となれば、老門生たる予が、愈よ出馬しなければならぬ。明日、鄭伯が肉袒して羊を牽き、愈よ降參するといつた樣な場合に、誰が之を受くべきか。君は、しッかり遣つて、鄭伯の眞似などせぬ樣にするが善い。しかし、吳軍は、昨夜、すでに條侯の壁に奔り、その東南を驚かしたといふが、君は、その吳軍の如く大敗せぬ樣に用心せねばなるまい。かくて、今後、唱和が盛になると、醉翁の謂はれた天下の樂も、此に外ならざるべく、一擧に百觴を傾けて、逸興を縱にすることも出來やう。

贈月長老

(一)天形倚一笠。(二)地水轉兩輪。
(三)五伯之所運。(四)毫端棲一塵。
功名(五)半幅紙。兒女浪苦辛。
子有(六)折足鐺。中容(七)五合陳。
十年此中過。却是英特人。
延我(八)地爐坐。(九)語軟意甚眞。
白灰如積雪。中有(一〇)紅麒麟。
勿觸紅麒麟。作灰(一一)維那瞋。
拱手但默坐。(一二)墻壁徒諄諄。
今宵恨客多。汚子(一三)白氎巾。
後夜當獨來。不須主與賓。
(一四)蒲團坐紙帳。自要(一五)觀我身。

月長老に贈る

天形、一笠に倚り、地水、兩輪を轉す。
五伯の運するところ、毫端、一塵を棲ましむ。
功名は半幅の紙、兒女、浪りに苦辛。
子に折足の鐺あり、中に五合の陳を容る。
十年、この中に過ぐ、却つて是れ英特の人。
我を延いて地爐に坐せしめ、語、軟にして意甚だ眞。
白灰、積雪の如く、中に紅麒麟あり。
紅麒麟に觸るる勿れ、灰と作つて、維那瞋る。
手を拱して但だ默坐、墻壁、徒に諄諄。
今宵、客多くして、子の白氎巾を汚すを恨む。
後夜、當に獨り來るべし、主と賓とを須ひず。
蒲團、紙帳に坐し、自ら我が身を觀るを要す。

【字解】【一】天形倚一笠　廣洪穹の天論に「天の形、笠の如くして地の表を冒ふ」とある。【二】地水轉兩輪　晉書天文志に葛洪を引いて「渾天儀の注に云ふ、天は雞子の如く、地は雞中の黃の如く、天の表裏に水あり、天地各〻氣に乘じて立ち、水を載せて行く、周天三百六十五度四分度の一、これを中分すれば、半ば地上を覆ひ、半ば地下を繞る、天の轉するは車轂の運するが如きなり」とある。【三】五伯　卽ち五霸、風俗通に「春秋、齊桓・晉文・秦穆・宋襄・楚莊、これを五伯となす」とある。【四】毫端　毛の末端。【五】半幅紙　唐書裴度傳に「天下忠義の心を收めむと欲すれば、唯だ半紙の詔書を下すあるのみ」と見ゆ。【六】折足鐺　足の折れた鍋、傳燈錄に「汾州無業國師云ふ、仙の古德道人得意の後を看るに、茅茨石室、折脚鐺子裏に向つて飯を煮て喫し、三十、二十年を過す」とある。【七】五合陳　陳は陳粟、卽ち古米。漢書に「太倉の粟、陳陳相因る」とある。【八】地爐　地を掘つて造つた閑爐裏、寒山の詩に石室地爐砂鼎沸とある。【九】語軟　維摩經に「大富梵行、言ふところ、誠諦、常に軟語を以てす」とある、言葉の角だたぬこと。【一〇】紅麒麟　麒麟の形に造つた炭團で、それが丁度眞赤になつて居る。語林に「羊琇、炭屑を擣いて獸形を作り、以て酒を溫む。洛下の豪貴、競うて之に效ふ」とある。【一一】維那　查註に「翻譯名義、維は是れ綱維、華言なり。那は是れ梵語、譯して知事となす、亦た悅衆といふ。維那は典座なり」とある、卽ち執事僧。【一二】墻壁　傳燈錄に「墻壁瓦礫、亦た能く法を說く」とある。【一三】白氎巾　前に紙帳の詩中に注して置いた、毛織の白頭巾。【一四】蒲團　前に臘月游孤山の詩中に注して置いた、蒲の穗を入れて造つた坐布團。【一五】觀我身　維摩經に「世尊、維摩詰に問ふ、何等を以て如來を觀るか。維摩詰云ふ、自ら身の實相を觀るが如し」とある。

【題義】月長老は如何なる僧か、馮應榴は「考を失ふ」といつて居る。王文誥は「月長老は、乃ち潁州の僧なり。かつて公に法施堂銘を作るを求む、公、後、揚州に在り、趙德麟に書を與へて云ふ、月長老亦た意を致す、熱甚しく又病多く、未だ法施堂銘を作るに暇あらず」と云つて居るが、その他の事は、一切分からぬ。蓋し潁州に在住した一かどの高僧であらう。

【詩意】天の形は笠の如く、地が其心をなし、水が表裏を爲し、絶えず旋轉する有樣は、恰も車轂の運行するが如くである。むかし、五霸の人人が大事業を成した處とても、その内の一小部分で、たとへば、毛の先に止まつた一點の塵の樣なものである。功名は、半ぴらの詔書で如何でも成るものであるのに、兒女輩の短見なる、これを求めむが爲に、妄りに苦辛して居る。君は高僧であるから、萬事足らぬ勝なるに安んじ、足の折れた破鍋に、わづか五合ばかりの古米を入れ、それを炊いで一日の食として居る。こんな事をして、十年の久しきを過ごしたのであるから、英異雄特の人たることは、申すまでもない。試に訪問すると、予を案内して、地爐の邊に坐せしめ、その言葉は、至極やはらかであるが、その心意は、甚だ眞摯である。爐中には、白い灰が積雪の如く堆く、その中に、丁度眞赤におこつた麒麟の形せる炭團がある。いたづら半分、その紅麒麟に觸れぬが善く、もし之に觸れ碎いて灰となつたならば、執事の坊さんが定めて腹を立てるであらう。そこで、手を拱いたまま、つくねんと默坐して居ると、牆壁までが法を說くが如く、諄諄として、何かつぶやいて居る樣である。今夜は、生憎、來客が多く、君の毛織の白頭巾も、汚れる位であるから、いづれ、後日の夜、ひとりで來り、主賓の別なく打解けて、篤と話をしたいものである。かくて、紙帳の中に在つて、蒲團に坐すれば、自然、われと我が身の實相を觀る樣に成るであらう。

【餘論】子有折足鐺の數句は、月公の人と爲りを寫したので、紀昀の評に「波瀾閒逸、月公の戒律を寫し出す、これ呆遂ならざるに妙」といひ、結末に就いては「結び得て脫洒」といひ、なほ全篇の總評としては「純ら禪語を作す、却つて偈頌の氣なし」といつて居る。

次韻答錢穆父穆父以僕得汝陰用杭越酬唱韻作詩見寄

次韻、錢穆父に答ふ。穆父、僕の汝陰を得たるを以て、杭越酬唱の韻を用ひて、詩を作りて寄せらる

（一）大耿疲勞已離羣。　大耿疲勞、すでに離羣、

（二）小馮慈愛且當門。（三）　小馮慈愛、且つ門に當る。

（四）玉堂不著扶犁手。　玉堂、著けず扶犁の手、

霜鬢偏宜畫鹿幡。（五）　霜鬢、偏に宜し畫鹿の幡。

豪傑雖無兩王繼。（六）　豪傑、兩王の繼ぐなしと雖も、

風流猶有二歐存。（七）　風流、なほ二歐の存するあり。

清詩已入新歌舞。　清詩、すでに入る新歌舞、

要使邦人識雅言。（八）　邦人をして、雅言を識らしむるを要す。

【字解】【一】大耿　後漢書耿弇傳に「弇、張步を攻む、步、聞いて大笑して曰く、尤來大槍、十餘萬の衆を以てするも、吾、皆これを破る。今、大耿の兵、彼より少く、又皆疲勞す、何ぞ懼くに足らむや」とあつて、その註に「弇は況の長子、故に呼んで大耿となす」とある。【二】小馮　漢書馮奉世傳に「子野王、野王の弟立、相代つて上郡太守となり、治行、野王と相似て、多知、恩貸あり」と見え、東坡の自註に「軾、本と舍弟の親族を以て郡を請ふ」とある。【三】當門　貴淑の詩に種蘭忌當門とある。【四】玉堂不著扶犁手　歐陽修の詩に收取玉堂揮

翰手ニ、却導ニ南畝ニ、把ニ犂鋤ニとある。玉堂は翰林を指す。【五】 聳鹿轓 後漢書輿服志に「公列侯、安車朱斑輪、倚鹿は伏熊に較ぶ」とあり、鄭安傳「淮陰太守に遷る」の註に「宏、春を行る、白鹿、道に方り、轂を挾んで行く。主簿黃國、拜賀して曰く、聞く、三公の車轓、鹿を畫いて飾を作る、と。明府、必ず宰相たらむ」とある。【六】 兩王 東坡の自註に「子直・深父を謂ふ」とあつて、施註に「王子直、名は向、弟深父、名は回、河南の人、從つて、潁の俟官に居て、三世を歷たり。父兵部、潁の汝陰に葬り、遂に汝陰の人となる。皆、進士に第し、文學行義、一時に卓然たり。王介甫、蘇子容と友たり、二公の集、皆、子直を哭するの詩あり。介甫、深父の墓を志す。仕へて、忠武軍節度推官となり、南頓縣に知たり。歐陽文忠公、潁に守たり、毎に深父に從つて、疑を質し、慈を問ふ、後、薦めて館職に充てむとせしが、用ふるに及ばずして卒す」とある。【七】 二歐 歐陽叔弼・季默、東坡の自註を引くまでもない。【八】 雅言 論語に「子の雅言するところは云云」とあるが、ここのは稍や異にして、風雅なる文辭の義。

【題意】 錢穆父は、東坡の舊知で、この時、瀛州に知となつて居た。穆父は、東坡が今次、潁の汝陰に來たことを聞いて、さきに杭越に在りし時、唱酬せし韻を用ひ、詩を作つて寄せて來たから、東坡も亦た其韻に次して、これに答へたのである。

【詩意】 予は、大耿といはれた耿弇の如く、いたく疲勞し、そして、羣を離れて、獨り此地に來たのであるが、小馮に比すべき予の弟の慈愛は、少しも變せず、蘭を種ゑて門に當ることを顧みない。身、玉堂に上れば、犂鋤を持つ手を著けるに及ばず、鬢に霜置く老年に成つては、鹿を畫いた車轓を押し立てて、三公に任せられる樣でなくてはならぬので、この點から見れば、わが剡下の境涯は、もとより言ふに足らぬことである。王子直・深父の二人は、すでに死して、わが豪傑ぶりを繼ぐものはないが、風流の詞辭に就いては、歐陽叔弼・季默の二人が幸にも猶は存して居る。わが清詩は、すでに新に譜して、これを歌舞するものさへある位で、僻遠の地なる、ここ潁州の邦人をして、風雅の文詞を識別せしめる樣に致したいと、平生、心に念じて居る。

【餘論】 紀昀は、後聯を評して「竟に時人を用ひて對偶となす、この格、香山より始まる、然れども、終に正格に非ず」といつて居る。

韓退之孟郊墓銘云、以昌其詩、舉此問王定國、當昌其身耶、抑昌其詩也、來詩下語未契、作此答之

韓退之の孟郊墓銘に云ふ、以て其詩を昌にすと、此を舉げて王定國に問ふ、當に其身を昌にすべきや、抑も其詩を昌にするやと。來詩語を下すこと未だ契せず、此を作つて之に答ふ

昌身如飽腹。飽盡還當飢。
身を昌にするは、腹を飽かすが如し、飽き盡せば、還た當に飢うべし。

昌詩如膏面。爲人作容姿。
詩を昌にするは、面に膏するが如し、人の爲に容姿を作す。

不如昌其氣。鬱鬱老不衰。
如かず、その氣を昌にせむには、鬱鬱として老いて衰へず。

雖云老不衰。劫壞安所之。
老いて衰へずと云ふと雖も、劫壞、安くに之くところ。

不如昌其志。志壹氣自隨。
如かず、その志を昌にせむには、志、壹にして氣自ら隨ふ。

養之塞天地。孟軻不吾欺。　これを養へば天地に塞がり、孟軻、吾を欺かず。

人言魏勃勇。股栗向小兒。　人は、魏勃の勇を言ふも、股栗して小兒に向ふ。

何如魯連子。談笑却秦師。　何ぞ如かむ、魯連子、談笑して秦師を却くるには。

愼勿怨謗讒。乃我得道資。　愼んで、謗讒を怨む勿れ、乃ち我が道を得るの資。

淤泥生蓮花。糞壤出菌芝。　淤泥、蓮花を生じ、糞壤、菌芝を出す。

賴此善知識。使我枯生荑。　この善知識に賴り、我をして枯に荑を生ぜしむ。

吾言豈須多。冷暖子自知。　吾が言、豈に多きを須ひむや、冷暖、子、自ら知る。

【字解】【一】胥面　顔に鉛粉などを傅ける。【二】劫壞　世界破滅の大變に遇うて敗壞する。楞嚴經に「諸人天燒、乃ち劫壞に至るも、三災、及ばず、かくの如きの一類、兜率陀天と名づく」とある。【三】養之塞天地　孟子の浩然之氣の章に見ゆ。【四】孟軻不吾欺　前に次韻蔡十七の詩中に注して置いた。【五】魏勃　前に趙郎中捕蝗の詩中に注して置いた。【六】小兒　灌嬰を云ふ。【七】魯連子　卽ち魯仲連、史記の本傳に「新垣衍と秦をして帝と稱せしむるの害を論ず。新垣衍曰く、吾、請ふ、出でむ、敢て復た秦を帝とするを言はずと。秦將、これを聞いて、爲に軍を却くること五十里」とあり、文選左思の詠史に吾慕魯仲連、談笑却秦軍」とある。【八】得道資　大道に到達する根本。【九】淤泥生蓮花　維摩經に「譬へば、高原陸地に蓮華を生ぜず、卑濕淤泥、乃ち此華を生ずるが如し」とある。【一〇】菌芝　きのこと靈芝。【一一】枯生荑　枯れた古木から芽を出す、易に「枯楊、荑を生ず、老夫、その女妻を得、利あらざるなし」とある。【一二】冷暖　傳燈錄に「明上座、盧行者に語つて曰く、今、入る處を指授するを蒙り、人の水を飮んで、冷暖自ら知るが如し」とある。

【題義】孟郊は卽ち貞曜先生、字は東野。韓愈は、死後、その銘を作つて、於戲貞曜、維世不譽、維執不猗、雖卒不施、以昌其詩といつた。東坡は、以昌其詩の一句を擧げて、王定國に問ひ、吾吾は、今その身を昌にするといふべき處か、それとも、矢張、その詩を昌にするのかといつた。すると、王定國から答詩が來たが、その文句は、どうも、我が意に協はなかつたから、この詩を作つて、これに答へたといふのである。

【詩意】身を昌にするとは、腹を飽かして、食物を十分にするといふ樣なもので、食ひ飽きて仕舞へば、又ぞろ、腹が減つて饑ゑて居る。詩を昌にするとは、顔に鉛粉をつける樣なもので、人の爲に容姿を作るに過ぎぬ。されば、その氣を昌にするに如かず、氣さへ昌なれば、元氣鬱鬱として中に積み、年を取つても、決して衰へない。しかし、年を取つても衰へぬとはいへ、世界の破滅に出合へば、敗壞して、少しも、殘つて居るものはない。この上は、その志を昌にすることが一番宜しく、志が專一なれば、氣も亦た自然これに隨つて盛になる。志を養ひさへすれば、浩然として、天地の間に充塞するので、當年の孟軻は、決して吾を欺かず、その言ふことは、まさしく眞理である。人は、魏勃の勇を稱すれども、灌嬰の如き小兒に向つてさへ、股が顫へたといふ位だから、丸でお話に成らぬ。それよりも、魯仲連が談笑して、秦軍を卻けた方が、はるかに偉らいので、つまり、その志を昌にすると然らざるとに因つて、かくの如く、截然として別がある。今しも、吾吾は讒謗を蒙つて、失意の境涯に居るが、決して、これを怨まぬが善いので、これも、畢竟、道を得るところの根本と

いふべく、例せば、汚い泥の中から蓮花を生じ、糞壤から菌や靈芝を出す樣なものである。かくの如き善知識あれば、吾をして、枯木に芽を生せしめ、その儘、長しへに枯死することは決して無いので、つまり、志は一身の帥であり、これを昌にすることが、生生發展の要諦である。上述の吾が言は、至極簡單であるが、その冷暖の如何は、君自ら旣に御承知の事であるから、ここに詳述するに及ばない。

【餘論】乾隆御批に「志一にして氣隨ふ、もとより是れ、これを孟子に本づく。而して、謗譏道を得とは、すでに西銘憂戚玉成の旨と協合す、豈に惟だ與に詩を言ふべきのみならむや」とある。次に困學紀聞に「愼勿レ怨ニ謗譏一」の數句、これ尹和靜の謂はゆる、困窮拂鬱、能く人の志を堅くして、人の仁を熟するなり、詩に曰く、他山之石、可ニ以攻レ玉」とあり、施元之の言に「王定國は、吳正憲充・馮文簡京と素より善くして、東坡を師友とす。舒亶輩、二公を傾けむと欲し、坡の詩獄に因つて定國を羅織し、遂に南行萬里、三年にして歸る。司馬溫公、國に當つて之を器遇す。東坡、翰林に在り、人言を以て力めて郡を請ふ。去つて、未だ幾ならす、定國亦た報罷む。この詩、愼勿レ怨ニ謗譏一より以下、端に定國の爲に發するなり」とある。

送歐陽推官赴華州監酒

歐陽推官が華州に赴いて酒を監するを送る

我觀文忠公。(一)四子皆超越。　われ文忠公を觀るに、四子皆超越。

(二)仲也珠(三)徑寸。照夜光如月。　仲や、珠、徑寸、夜を照らして、光、月の如し。

(四)好詩眞脫兎。(五)下筆先落鶻。　詩を好んで眞に脫兎、筆を下せば先づ鶻を落す。

(六)知音如周郞。(七)議論亦英發。　音を知ること、周郞の如く、議論亦た英發。

(八)文章乃餘事。學道探(九)元窟。　文章は乃ち餘事、道を學んで元窟を探る。

死爲(一〇)長白主。名字書(一一)絳闕。　死しては、長白の主となり、名字、絳闕に書す。

傷心(一二)清潁尾。已伴白鷗沒。　傷心、清潁の尾、すでに、白鷗を伴うて沒す。

喜見三少年。倶有(一三)千里骨。　喜び見る三少年、ともに、千里の骨あるを。

千里不難到。莫遣(一四)歷塊蹶。　千里到り難からす、歷塊して蹶かしむる莫れ。

臨分出苦語。願子書(一五)之笏。　分るるに臨んで苦語を出す、願はくは、子、之を笏に書せよ。

【字解】〔一〕四子　査註に「按ずるに、歐陽文忠公の四子、長、名は發、字は伯和、進士出身、官、擢少府監丞に至り、張文潛、爲に墓志を作る。次は奕、字は仲純、次は棐、次は辯、註、本卷に見ゆ」とある。〔二〕仲也　仲は伯仲叔季の仲で、卽ち次子、名は奕、推官の父。〔三〕珠徑寸　直徑一寸ある珠、搜神記に「隋侯、大蛇の傷けられて中斷するを見、藥を以て之を封ず。歲餘、蛇、珠を銜んで以て報ゆ。珠、徑寸に盈ち、純白、夜、光明あり、月の照らすが如し、これを隋侯珠といひ、又明月珠といふ」とある。〔四〕好詩眞脫兎　孫子の九地篇に「はじめは、處女の如く、敵人、戶を開く。終は脫兎の如く、敵、拒ぐに及ばず」とあり、韓詩外傳に「臨武君曰く、善く兵を用ふるものは、猶は脫兎の如く、その出づるところを知るなし」とある。佳篇を作ることは、脫兎の如く、何處か

ち出て來るか分からぬといふ意。【五】下筆先落鶻　筆を下して篇を成すこと、鶻が飄へり落つるかと疑ふ位といふ意。【六】知音如周郎　前に夫傾王都尉の詩中に注して置いた。周郎は周瑜、當時、曲有レ誤、周郎顧といふ諺さへあつた。【七】議論亦英發　三國志に「孫權、呂蒙を論じて曰く、子明學問開益、籌略奇至、以て公瑾に次ぐべし、但だ言議英發、これに及ばざるのみ」とある。【八】文章乃餘事　韓愈の詩に多情懷二酒伴一、餘事作二詩人一とある。【九】元宮　玄妙の宮宅、文選孫綽の天台山賦に皆元聖之所二游化一、靈仙之所二窟宅一とある。【一〇】長白主　東坡の自註に「熙寧の末、仲純父、僕を京城の東に見て曰く、吾が夢に、道士、告身を持して吾に授けて曰く、上帝、汝に命じて長白山主と爲らしむと。これ何の祥ぞや、と。明年、仲純父歿す」とあり、松漠紀聞に「長白山は、冷山の東南に在り、その山、禽獸皆白し。人、或は其間に穢すれば、蛇虺の害を致す」とある。【一一】詩鬪　仙宮。【一二】清潁尾　左傳昭公十二年の註に「潁水の尾は、下蔡の西に在り」と見ゆ。【一三】千里骨　千里を馳する名馬の骨相。【一四】歷塊蹶　土塊に打ちつけて蹶く、王褒の聖主得賢臣頌に過レ都越レ國、蹶如レ歷レ塊とあつて、顏師古の註に「一塊を經歷するが如しとは、その速疾の甚しきを言ふ」とあり、范傳正の李白墓碑に「獻賦、筋力、章を成すは萬里の外に在り、歷塊一蹶、空谷に死す」とあり、杜甫の詩に當時歷塊誤一蹶とある。【一五】書之笏　施註に「晉書輿服志、古しへは、貴賤皆笏を執り、事あれば、之を書す。釋名、笏は忽なり、敎命及び啓白するところあれば、その上に書して、忽忘に備ふるなり」とある。又唐書に「太宗曰く、魏徵逝く。朕、このごろ、人をして其家に至らしめ、書一紙を得たり。はじめ手藁、その識るべきもの、曰く、邪を去つて疑ふ勿れ、賢に任じて猜む勿れ、と。朕、顧みて之を思ふに、恐らくは、斯過を免れず、公卿侍臣、これを笏に書し、知つて必ず諫むべきなり」とある。

【題義】歐陽推官、名は恕、文忠公の孫、奕の子、雄州防禦推官であつたが、今次、税官となり、華州に赴いて酒税を監するに付き、この詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】歐陽文忠公には、四人の子息があつて、皆凡俗を超越して居た。就中、仲子、名を奕といふ人は、徑寸の珠、光明、夜を照らして月の如きと一般、特にすぐれて居た。詩を好んで、その篇を成すの早いことは、さながら脫兎の如く、筆を下せば、第一に、鶻の落つるを疑ふばかり。加之、音律を解することは、古しへの周瑜の如く、議論も亦た英發であつた。文章など、この人に取つては、ほんの餘事といふべく、道を學んで、玄妙の奧を探らむことを期し、死しては、長白山の主となつて、その名字は、仙宮の中に書き留められて居る。惜むべし、この人は、清潁の下流なる下蔡の地に於て病歿し、白鷗に伴はれて、跡を沒して仕舞つた。その子たる三少年は、いづれも、名馬の骨相を備へ、千里の遠きも、決して到り難しとせず、唯だ餘り勢よく馳せる爲に、土塊に當つて蹶きはせぬかと、聊か心配されるだけである。今や、三少年中の最長たる君と別るるに際し、一寸、苦い樣な言葉を呈するから、願はくは、これを笏に書きつけて、日夕服膺し、緩ツくり構へ、あせり過ぎぬ樣に心がけて貰ひたい。

【餘論】紀昀は「知音の二句、率易、文章の二句、笨」といつて居るが、篇末數語に就いては「歐蘇の交にして、その子を送る、自ら世俗の語を作すべからず」といつて、聊か之を賞して居る。しかし、父祖の事を言ふに過ぎて、肝腎の當人の事は、あまり簡單に濟ましてあるから、これでは、推官たるもの、果して滿足せしや否や、聊か危ぶまれる樣である。

十月十四日、以レ病在レ告、獨酌　　十月十四日、病を以て告に在り、獨り酌む

翠柏不レ知レ秋。空庭失二搖落一。　翠柏、秋を知らず、空庭、搖落を失ふ。

幽人得嘉蔭。露坐方獨酌。　幽人、嘉蔭を得、露坐、方に獨酌。

月華稍澄穆。露氣尤清薄。　月華、稍や澄穆、露氣、尤も清薄。

小兒亦何知。相語翁正樂。　小兒、亦た何をか知らむ、相語る、翁正に樂む、と。

銅爐燒柏子。石鼎煮山藥。　銅爐に柏子を燒き、石鼎に山藥を煮る。

一杯賞月露。萬象紛酬酢。　一杯、月露を賞す、萬象、紛として酬酢。

此生獨何幸。風纜欣初泊。　この生、ひとり何の幸ぞ、風纜、初めて泊するを欣ぶ。

誓逃顏跖網。行赴松喬約。　誓つて、顏跖の網を逃れ、行く〻松喬の約に赴く。

莫嫌風有待。漫欲戲寥廓。　嫌ふ莫れ、風、待つあるを、漫に寥廓に戲れむと欲す。

冷然心境空。彷彿來笙鶴。　冷然として心境空しく、彷彿として笙鶴來る。

【字解】【一】搖落　落葉すること。【二】嘉蔭　よき木かげ。【三】露坐　地上に坐すること。【四】月華　月色に同じ。【五】澄穆　澄み切つてむくやかなること。【六】柏子　柏樹の實。【七】山藥　山の芋、歐陽修の詩に夜燃柏子煮山藥、惜此東望無時休とあり、韓愈の石鼎聯句に豈能煮山藥とある。【八】酬酢　周旋する。【九】風纜欣初泊　韓愈の詩に有如乘風船、一縱不可纜とあるを反用す。【一〇】顏跖網　史記伯夷傳に「七十子の徒、仲尼、ひとり顏淵を稱して、學を好むと爲す。然れども、回や屢ば空しく、糟糠だに厭かずして、卒に早く夭す。盜跖は、日に不辜を殺し、人の肉を肝にし、暴戾恣睢、黨を聚むる數千人、天下に横行し、竟に壽を以て終る。余、甚だ惑ふ。もしくは謂はゆる天道は是か非か」とあつて、應報常なき浮世といふこと。【一一】松喬　赤松子と王喬、ともに上代の神仙。【一二】風有待　莊子に「列子の風に御して行く、冷然として善きなり。旬有五日にして然る後に反る。これ、行くに免ると雖も、猶ほ待つところあるなり」とある。【一三】寥廓　大空。【一四】笙鶴　笙を吹き鶴に乘る、即ち仙人を云ふ。

【題義】十月十四日、病氣の爲に、その旨を届け出でて引籠中、夜、獨酌して、この詩を作つた。

【詩意】柏樹は、四時青翠、全く秋を知らざるが如く、空庭の中、落葉だにせず、幽人は、その木かげに就いて、地上に露坐せしまま、ひとりで酒を酌んで居る。時しも、月色は漸く澄み切つて、むくやかに、露氣は清げにして、且つ薄い。小兒輩は、何も知らず、唯だ主人の翁が今しも樂んで居ると噂し合つて居る。われは、銅爐に柏子を焚やし、そして、石鼎に山の芋を盛り、それを煮て居たが、やがて、愈よ煮え上つたので、それを肴にして、一杯を傾けつつ、月露の涼しげな夜景を賞すると、萬象、紛として、吾が爲に周旋するが如く、清景變化して極まらぬ。わが生、ここに至りて、獨り何等の幸ぞ、どうやら、少し落ち付いて、風中に纜を切つて漂泊して居た舟が、初めて泊することが出來た樣である。これより、天道の是非を疑ひ、應報毎に其當を得ざる浮世を脫出して、赤松・王喬などの神仙に對し、かねての約束を履行して、愈よ其處に往つて見たいと思ふ。風を待つて居るのは、まだ至らぬものだといつて嫌はれない樣に願ひたいので、唯だ氣まぐれに、寥廓に戲れむとする外、他意なく、冷然として、心境空しき時、彷彿として、笙を吹き鶴に乘る仙人どもが、此方に來る樣な氣がする。

【餘論】紀昀の評に「清酒の至」とある。

獨酌試藥玉滑盞有懷諸君子明日望夜月庭佳景不可失作詩招之

獨酌、藥玉滑盞を試み、諸君子を懷ふあり、明日望夜、月庭の佳景、失ふべからず、詩を作つて之を招く

鎔鉛煮白石。作玉眞自欺。　鉛を鎔し、白石を煮、玉と作して眞に自ら欺く。

琢削爲酒杯。規摹（一）定州瓷（二）。　琢削して酒杯と爲し、規摹す定州の瓷。

荷心（三）雖淺狹。鏡面良渺瀰。　荷心は淺狹と雖も、鏡面、まことに渺瀰。

持此壽佳客。到手不容辭（四）。　これを持して、佳客を壽す、手に到つて辭するを容さず。

曹侯（五）天下平（六）。定國（七）豈其師。　曹侯は天下の平、定國、豈に其師。

一飮至數石。溫克（八）頗似之。　一飮、數石に至る、溫克、頗る之に似たり。

風流越王孫（九）。詩酒屢出奇（一〇）。　風流越王の孫、詩酒、屢ば奇を出す。

喜我有此客。玉杯不徒施。　我が此客あるを喜び、玉杯、徒に施さず。

請君詰歐陳（一一）。問疾來何遲。　請ふ、君、歐陳を詰れ、疾を問うて來る何ぞ遲き。

呼兒掃月榭（一二）。扶病良及時。　兒を呼んで月榭を掃ひ、病を扶くる、まことに時に及ぶ。

【字解】（一）規摹　眞似る、模造する。（二）定州瓷　瓷は硬質の陶器。（三）荷心　蓮の葉の心。（四）不容辭　辭することを許さぬ。（五）曹侯　王註に「同時の姓曹なる人を指言するなり、豈に大理に官するものか」とある。（六）天下平　漢書張釋之傳に「廷尉は天下の平なり」とあつて、裁決の公平を旨とするをいふ。（七）定國　漢書于定國傳に「廷尉となり、疑を決し、法を平にし、酒を食ふこと、數石に至つて亂れず、冬月、請讞を治し、酒を飮んで益す精明」とある。（八）溫克　詩經の小宛に人之齊聖、飮酒溫克とある。（九）越王孫　趙景貺を指して言ふ、越王の孫にして、華原公の子である。（一〇）出奇　さまざまの珍趣向を凝らす。（一一）歐陳　歐陽叔弼・季默兄弟と陳履常とを併稱す。（一二）月榭　榭は亭閣。

【題義】藥を飮む時に用ふる玉滑盞で、獨り酒を酌んで居る内に、知友諸君の事を思ひ出し、殊に明日は十月十五の望の夜で、月下庭宇の佳景は拋棄して置くことも出來ぬ處から、この詩を作つて、諸君に明夜必ず來訪せられよと申し送つた。

【詩意】名は、玉滑盞といふものの、もとより五色の美玉ではなく、鉛を鎔かし、白石を煮、兩者を和せて煉り上げたもので、それを琢いたり削つたりして、定州の硬質陶器を摹造したと見える。蓮葉の形せる其中心は、淺く且つ狹いけれども、これに酒を一ぱい注ぐと、鏡面は、渺瀰たるが如く見える。この杯を持つて、佳客の爲に壽をなし、一たび手にした上は、辭退を許さず、是非飮まねばならぬことにしてある。曹君は、天下の平を持して、大理に居られるが、古しへの于定國を師としたの

であらうか、酒に對しては、一飲、數石を盡くし、そして落ち付いて泰然たる樣子まで、そツくり似て居る。趙景晲は、その風流、越王の孫たるに負かず、詩酒の間、往往、珍趣向を凝らして、興を添へられる。かういふ佳客のあるのは、まことに喜ばしく、折角の玉杯も、無益に施すことなくして濟むのである。それから、兩歐陽・陳履常は、今以て病氣見舞にも來ぬが、どうして居るか。篤と詰問して與れろ。明日は、倅どもに命じて、月下の亭閣を掃持して置き、予も、亦た丁度よい時であるから、病を扶けて起き出で、そして、諸君の御相手を致すであらう。

【餘論】紀昀の評に「これ只だ東に代ふるのみ、詩を以て論せず」とある。

歐陽季默以油煙墨二丸見餉、各長寸許、戲作小詩

歐陽季默、油煙墨二丸を以て餉らる。各、長さ寸許、戲に小詩を作る

書窗拾(一)輕煤。佛帳掃餘馥。
書窗、輕煤を拾ひ、佛帳、餘馥を掃ふ。

辛勤破(二)千夜。收此一寸玉。
辛勤、千夜を破り、この一寸の玉を收む。

癡人畏老死。腐朽同(三)草木。
癡人は、老死を畏る、腐朽、草木に同じ。

欲將(四)東山松。涅(五)盡南山竹。(六)
東山の松を將て、南山の竹を涅し盡さむと欲す。

墨堅人苦脆。未用歎不足。
墨堅く、人苦だ脆、未だ不足を歎ずるを用ひず。

且當注(七)蟲魚。莫草三(八)千牘。
且つ當に蟲魚を注すべし、草する莫れ三千牘。

【字解】〔一〕拾輕煤　薄く著いて居る煤を拾ひ集める。〔二〕破千夜　千夜を過ぎる。〔三〕同草木　後漢書朱穆の崇厚論に「彼は草木と俱に朽ち、此は金石と相傾く」とあり、唐書高賢傳の贊に「古來、賢豪、興運に遭はず、光を埋め、采を鏟し、草木と俱に腐するもの、咤するに勝ふべけむや」とある。〔四〕東山松　墨經に「兗沂登密の間の山、すべて之を東山といふ、むかしより、東山の松、色澤肥膩、性質沈重、品、上上を推す」とある。〔五〕涅盡　涅は黑くする。〔六〕南山竹　漢書公孫賀傳に「朱安世曰く、南山の竹、わが辭を受くるに足らず、斜谷の木、わが械と爲すに足らず」とある。〔七〕注蟲魚　韓愈の詩に爾雅注蟲魚、定非磊落人とある。〔八〕三千牘　前に設千之經の詩中に注して置いた。東方朔が公車に上書した時、三千牘を用ひたといふこと。

【題義】晁以道の墨經に「凡そ丸劑は熱せざるべからず、又熱に病む、急手を光劑となし、緩手を皴劑となす。一丸卽ち成らば、再に利あらず」とあり、葉夢得の言に「兩漢の間、墨を稱して多く丸といふ。魏晉以後、螺と稱す」とある。歐陽季默から松の油煙で造つた墨二丁を送つて來たが、長さ一寸ばかりの小さいものである、そこで、戲に小詩を作つて之に謝した。

【詩意】油煙の墨を造るのは、元と容易なことではないので、書窓佛帳の間に少しばかり附著して居る煤を搔き取り、餘馥を拂ひ落し、極力これを集め、千夜にも過ぎて、はじめて、この一寸ばかりの光澤爛然たるものが出來る。吾輩の如き癡人は、無事に老死して、何事も仕出かさず、草木と同じく腐朽せむことを畏れ、東山の松をすツかり油煙にして、それで墨を造り、南山に叢生する竹で造つた簡冊を塗りたくつて、文辭を世に傳へやうと心がけて居る。墨の堅きに反して、人の命は、極めて

脆いものであるから、たとひ、一寸ばかりの短小なものであつても、不足を嘆ずるに及ばない。されど、予が刻下の境涯としては、爾雅を研究し、この墨を用ひて蟲魚を註すべく、かの東方朔に倣うて、三千牘の上書を起草するにも及ばない。

【餘論】紀昀の評に「分明、その輕鮮を請る、しかも、自ら感慨を以て之を出す。詩人の筆、もとより應に是の如くなるべし」とある。

明日復以大魚爲饋、重二十斤、且求詩、故復戲之

明日復た大魚を以て饋られ、重さ二十斤、且つ詩を求めらる。故に復た之に戲る

漢廷九尺人。誰似老方朔(一)。　漢廷九尺の人、誰か似たる老方朔。
那將一(二)寸金。令足三(三)冬學。　那ぞ一寸の金を將て、三冬の學を足らしめむ。
餉(四)魚欲自(五)洗。鱗尾光卓(六)犖。　魚を餉つて、自ら洗はむと欲す、鱗尾、光、卓犖。
我是騎(七)鯨手。聊堪充鹿(八)角。　われは、是れ騎鯨の手、聊か鹿角に充つるに堪へたり。

【字解】【一】方朔　卽ち東方朔、漢書に、その上書を載せて「臣、年二十二、長九尺三寸、勇は孟賁の若く、捷は慶忌の如し」とあり、その武帝に奏したる言を記して「朱儒、長三尺餘、奉は一囊の粟、錢二百四十、臣、朔、長九尺餘、亦た奉は一囊の粟、錢二百四十」とある。【二】一寸金　前詩に見えた長一寸ばかりの墨。【三】三冬學　漢書に載する東方朔の上書に「臣、年十二、書を學び、三冬、文史用ふるに足る」とある。【四】餉魚　餉は贈る。【五】自洗　小さな墨を贈つた儉吝を洗ひ清める。【六】卓犖　尋常と異なる貌。【七】騎鯨　文選揚雄の羽獵賦に乘巨鱗、騎京魚とある。【八】鹿角　小魚、梅聖兪の實鹿角の詩に水中龍、角而足、海小魚、角矗矗、不擬龍、乃擬鹿とあり、歐陽修の迭頭魚の詩に吾聞海之大、物類無窮極、毛魚與鹿角、一龠數千百とある。

【題義】その明日、歐陽季默は、大魚を贈つて寄越したが、その重さは、二十斤もあつて、なかなか大きい。そして詩を求めたから、再び之に戲れて、この詩を作つた。

【詩意】われは、漢廷の東方朔の如く、身の長九尺、誰も之に似たものも無い位。一寸ばかりの小さい墨を呉れたとて、三冬の間、勉强する時、何の補足にも成らない。そこで、歐陽季默は、魚を贈つて儉吝の誚を洗ひ雪めむとしたが、その魚は、まことに大きいもので、鱗も、尾も、光彩發越、世の常ならぬものである。しかし、われは、もとより鯨にさへ騎つて、天地の間に逍遙するものであるから、折角ながら、これを格別の大魚とも見ず、聊か鹿角の小魚位にしか思つて居らぬ。

和趙景貺栽檜

趙景貺が檜を栽うるに和す

汝(一)陰多老檜。處處屯蒼雲。　汝陰、老檜多く、處處、蒼雲を屯す。
地連丹砂(二)井。物化靑(三)牛君。　地は丹砂井に連り、物は靑牛君に化す。
時有再(四)生枝。還作左紐(五)紋。　時に再生の枝あり、還た左紐の紋を作す。

王孫(六)有古意。書室延清芬(七)。
應憐(八)四孺子。不墮凡木羣。
體備松柏姿。氣含芝朮(九)薰。
初扶鶴立骨。未出龍纏筋。
巢根白蟻(一〇)亂。網葉秋蟲紛。
乃知蔽芾(一一)初。甚要封殖(一二)勤。
他年皮三寸(一三)。狐鼠了不聞(一四)。

王孫、古意あり、書室、清芬を延く。
應に憐むべし、四孺子、凡木の羣に墮ちざるを。
體は松柏の姿を備へ、氣は芝朮の薰を含む。
初め扶けられて鶴、骨を立て、未だ出でずして龍、筋を纏ふ。
根に巢うて白蟻亂れ、葉を網して秋蟲紛たり。
乃ち知る蔽芾の初、甚だ封殖の勤を要するを。
他年、皮三寸、狐鼠、了に聞かず。

【字解】【一】汝陰　汝水の南、潁州の地を指す。【二】丹砂井　王註に「潁州の東、亳州と境を接す、亳州の老君觀に丹砂井あり、檜あり、その文左紐、その枝、枯れて再生す」とある。【三】靑牛君　元中記に「千歲の樹精、化して靑羊となり、萬歲の樹精、化して靑牛となる。秦の始皇、人をして大樹を伐らしむ、靑牛あり、躍り出でて、走つて豐水に入る」とあり、嵩山記に「嵩山に大松樹あり、千歲、化して靑牛となり、或は伏龜となる」とある。【四】再生枝　東坡の自註に「潁の靈壇觀に再生の檜あり」と見ゆ。【五】左紐枝　左向によぢれて居る、范文正公の太淸九詠の序に「太淸宮に左紐檜あり」と記し、石曼卿の詩註に太淸記を引いて「老子、手づから此檜を植う、根株枝幹、皆左紐」とある。【六】王孫　趙景貺を云ふ。【七】淸芬　淸き香氣。【八】四孺子　檜の若木四本、王註に「杜羙に種二四小松一の詩あり、而して管子、齊侯の苗を問ふに對へて曰く、苗、はじめ、その少なるや、煦煦乎として、何ぞ其れ孺子なると。今檜を栽う、亦た適ま四、故に云ふ」とある。【九】芝朮　靈芝と蒼朮。【一〇】白蟻　本草に「白蟻は、地に穴して居り、木を蠹して食ふ」とある。【一一】蔽芾　詩經に蔽芾甘棠とあつて、生ひ茂りたる貌。【一二】封殖　根を堅くして幹を押し立てる。【一三】皮三寸　漢書晁錯の上書に「胡貉の地は、積陰の處なり、木皮三寸、氷厚さ六尺」とある。【一四】了不聞　了は終に、證にと訓すべし。

【題義】趙景貺が檜を栽うる詩を作つて、東坡に見せたから、乃ち之に次韻したのである。

【詩意】汝水の南なる潁州には、檜樹が多くあつて、處處に蒼雲の屯せるが見える。この地は、東、亳州に接し、そこには丹砂井があるし、そこの檜樹は、千萬年を經て靑牛に化した。その檜には、根から再生した株があつて、根株枝幹、ともに左紐をなし、世間普通の物とは自然異なつて居る。趙君は、崇古の意あり、又書齋の中に淸芬の氣を導き入れむが爲に、その檜の若木四本を取り寄せて植ゑたが、斷じて、凡木の羣に墮ちるものではない。その體は、松身柏葉、その氣は、靈芝蒼朮の匂を含み、はじめて扶けられて植ゑた時は、骨立して鶴の如く、地下に在る根は、筋が纏ひ付いて、龍の如くである。どうかすると、白蟻が羣を爲して、根元に巢ふことがあるし、秋蟲が集まつて、葉の肉を食ふと、筋だけ殘つて、網の樣に見えることがある。そこで、これを生育繁茂せしめむとならば、移殖した當初に於て、隨分、面倒を見て遣らねばならぬ。しかし、木皮三寸の厚さにも成つて、追追生長すると、狐鼠などは、遂に聞かざるが如く、決して、邪魔をひろげることはない。

【餘論】紀昀の評に「結句甚だ激」とある。東坡は、初め、檜樹の詩を以て罪を得たので、ここに、その便につけ、檜樹が生長すれば、狐鼠も相聞かざるが如くする、つまり、自分がうんと偉らくなれば、滿廷の小人どもも、恐れ入つて仕舞ふといふ意を逗露したものらしく、そこで、上記の評があるのである。

葉待制、求先墳永慕亭詩

靈區有異產。化國(一)無潛珍。
承平百年間。簪纓(二)半齊民(三)。
建溪富奇偉。葉氏初隱淪(四)。
森然見喬木。其下維德人(五)。
佳哉鬱葱葱。氣若鳳與麟。
聯翩(六)出儒將。豈惟十朱輪(七)。
新松無鹿觸。舊柏有烏馴(八)。
待公歸上冢(九)。淚葉(一〇)乃肯春。

葉待制、先墳永慕亭の詩を求む

靈區に異產あり、化國に潛珍なし。
承平百年の間、簪纓、半ば齊民。
建溪、奇偉に富む、葉氏、初めは隱淪。
森然として喬木を見る、その下、維れ德人。
佳なるかな、鬱葱葱、氣は鳳と麟との若し。
聯翩として儒將を出す、豈に惟だ十朱輪。
新松、鹿の觸るるなく、舊柏、烏の馴るるあり。
待て、公が歸つて冢に上るを、淚葉、乃ち肯て春ならむや。

【字解】〔一〕化國　敎化の行はれる國。〔二〕簪纓　簪は冠を止める爲に用ふ。纓は冠の紐。高官者の禮裝。〔三〕齊民　一般の人民、卽ち平民。〔四〕隱淪　桓譚の新論に「天下の神人五、二に曰く隱淪」とあり、杜甫の詩に、行歌非隱淪とある。〔五〕德人　莊子に「德人は、居るに思なく、行くに慮なし」とあつて、行止、ともに思慮を超越した人。〔六〕聯翩　引き續いて絕えざる貌。〔七〕朱輪　前に會景亭の詩に注して置いた、大官の車。〔八〕烏馴　北史に「裔放、字は希逸、喪に居るや、廬前に二慈烏あつて、來り集まり、各〻一樹に據つて巢を爲り、午より已前は、庭に馴れて飲啄し、午後は、更に樹を下らず、時に臨む每に、翅を舒べて悲鳴し、全く哀泣するに似たり」とある。〔九〕歸上冢　晉書に「王裒の父儀、文帝の司馬となる、東關の役、引き出でて之を斬る。裒、常に墓所に至つて拜跪し、柏を攀ぢて悲號す、涕泣、樹に著き、樹、これが爲に枯る」とある。〔一〇〕淚葉　孟郊の古薄命妾に北山有涙葉、淚葉長不乾とある。

【題義】施註に「葉待制、名は康直、字は景溫、建州の人、進士の第に擢んでられ、光化縣に知たり。その政、民に便するを務め、治績を以て顯はる。秦鳳陝西轉運を經て、涇原の師に饒し、秦州に知たり。夏人、甘谷に寇するや、景溫、諸將を戒め、伏を設けて以て待ち、その二酋を殲し、直龍圖閣より待制陝西都轉運使に進み、亳州を請ふ。召されて、兵部侍郞となつて卒す」とあり、合註に、「續通鑑長編、元祐六年五月、葉康直、亳州に知たりと。先生、詩を作る、正にその亳に官するの時なり」とある。永慕亭は、その先塋の傍に設けた小亭と見える。この詩は、待制葉康直が、その先塋なる永慕亭に題せむことを求めたから、賦して贈つたのである。

【詩意】秀靈なる區域には、必ず他と異なりたる產物があるし、王化の行はれたる邦國に於ては、潛み匿れて居る樣な奇珍は無い。今や昇平百年の久しきに亙つて、廟堂の御歷歷も、半は一般平民から出身したものである。ここに、建溪の地は、奇偉の人物を多く出し、中にも、葉氏の一家は、その初、隱淪と稱して、容易に世間に出なかつた。そこで、その墓所に行つて見ると、喬木森然として生ひ茂り、その下に葬られたのは、皆德人と稱すべき方方である。されば、墓所に磅礴する佳氣は、鬱葱葱として、麟鳳が羣れ集うて居るかと疑ふばかり。果然、その子孫中には、打續いて、葉待制の如き儒將を出し、朱輪に乘るもの十人を出したといふ位なことではない。その墓所なる稚松には、鹿の觸る

ることなく、翠色蒼然として、勢よく伸び、古い柏樹には、鳥が止まつて、哀泣するが如く悲鳴し、禽獸草木までも、處がら、自然ふさはしく見える。葉待制は、やがて歸國して、ここに參詣されるであらうが、淚に濡れた木の葉は、長しへに乾くことなく、又決して春らしくも見えぬであらう。

與趙陳同過歐陽叔弼新治小齋戲作

趙陳と同じく歐陽叔弼の新治の小齋を過ぎ、戲に作る

(一)江湖渺故國。風雨傾舊廬。　江湖、故國渺たり、風雨、舊廬を傾く。
東來三十年。愧此一束書。　東來三十年、この一束の書に愧づ。
(二)尺椽亦何有。而我常客居。　尺椽、亦た何かあらむ、而して、我、常に客居。
羨君開此室。(三)容膝眞有餘。　羨む、君が此室を開き、膝を容るる、眞に餘あり。
拊牀琴動搖。弄筆窗明虛。　牀を拊てば、琴動搖、筆を弄すれば、窗明虛。
(四)後夜龍作雨。天明雪塡渠。　後夜、龍、雨を作し、天明、雪、渠を塡む。
夢回聞(五)剝啄。誰呼(六)趙陳予。　夢、回つて、剝啄を聞く、誰か呼ぶ趙陳予。
(七)添丁走沽酒。(八)通德起挽蔬。　添丁、走つて酒を沽ひ、通德、起つて蔬を挽く。
(九)主孟當啗我。玉鱗金尾魚。　主孟、當に我に啗はすべし、玉鱗金尾の魚。
一醉忘其家。此身自(一〇)籧篨。　一醉、その家を忘る、この身、自ら籧篨。

【字解】【一】江湖　世間、簷閣に對して云ふ。【二】尺椽　椽はたるき、狹小なる家屋。【三】容膝　陶淵明の歸去來辭に「倚南窻以寄傲、審容膝之易安」とある。【四】後夜龍作雨　東坡の自註に「時、方に雨を龍祠に禱り、この句を作る、時に星斗燦然、四更風雨大に至り、明日、乃ち、雪、渠を塡む」とある。【五】剝啄　足音。【六】趙陳予　趙景貺・陳履常及び東坡の三人。【七】添丁　韓愈の寄盧仝の詩に「去歲生兒名添丁」とある。【八】通德　前に舟中九日詩中に注して置いた。伶元の飛燕外傳の自序に「子于（伶元の字）妾樊通德を買ふ、頗る能く飛燕姊弟の故事を言ふ」とある。【九】主孟　國語に「優施、里克の妻に謂つて曰く、主孟、我に啗はしむ、我、玆に暇豫君に事ふるを敎ふ」とあつて、その註に「大夫の妻、夫に從つて主と稱す、而して、孟は里克の妻の字なり」とある。ここでは主婦の義に用ふ。【一〇】籧篨　王註に「籧篨に二義あり、此身自籧篨とは、麤竹席の謂、言ふは、身の臃腫、麤席の耐ふるが如きなり」とある。

【題義】この詩は、例の趙景貺・陳履常の二人と共に、歐陽叔弼の新築せる書齋を過訪し、その席上に於て戲に作るものである。なほ、後山集に和蘇公題歐陽叔弼息齋一首といふ詩題あるより見れば、この小齋を息齋と號して居たといふことが分かる。

【詩意】江湖萬里、遠く我が故鄉を隔て、そこに在る舊草廬は、風雨の爲に傾圮して仕舞つた。われは、鄉を辭して東に來りしより、すでに三十年、依然として立身もせず、常に攜帶して居る一束の書物に對しても愧ぢ入る位。その間、官游して居た爲に、狹小なる住宅だになく、常に客居して、すこしも落ち付かない。ここに、君が書齋を新築されたのは、まことに羨ましく、膝を容るるには、もと

より不足なく、牀を敲けば、琴が動揺して、そら音を發し、筆を執つて書かうとすれば、窓は明るくて、からりとして居る。予は、昨日雨を龍祠に禱つた處が、應驗虛しからず、夜中過ぎには、龍が風雨を起し、そして、夜あけには、雪が溝渠を塡めた位。やがて、剝啄の足音に驚かされて夢が醒めると、貴下は、態態來訪されて、趙・陳二君と予とを呼び集められるとのことで、仰せに從つて、君の小齋を過訪した。すると、息子は走つて酒を買ひに出かけ、婢妾は、やをら身を起して、裏の畑の菜を摘み、令閨は、予に馳走される爲に、玉鱗金尾の魚を料理された。一醉すれば、わが家に歸ることをさへ忘れる位。この身は、粗末な竹むしろの如く、行きあたりばッたりで、すこしも、閉口することはない。

【餘論】紀昀は、起筆を稱して「氣機疏暢、平衍を覺えず」といひ、書齋訪問の一段には「平常の事、寫し得て飛動を極む、これを興到れりと爲す」といひ、結末には「仍つて、起に織す、意密」といつて評して居る。

聚星堂雪

聚星堂の雪

元祐六年十一月一日、禱雨張龍公、得小雪、與客會飲聚星堂、忽憶歐陽文忠公作守時、雪中約客賦詩、禁體物語、于艱難中、特出奇麗、爾來四十餘年、莫有繼者、僕以老門生、繼公後、雖不足追配先生、而賓客之美、殆不減當時、公之二子、又適在郡、故輒擧前令、各賦一篇。

【訓讀】元祐六年十一月一日、雨を張龍公に禱りて、小雪を得たり。客と聚星堂に會飲す、忽ち憶ふ、歐陽文忠公、守と作りし時、雪中、客に約して詩を賦し、體物の語を禁じ、艱難中に于て、特に奇麗を出せしを。爾來四十餘年、繼ぐものあるなし。僕、老門生を以て、公の後を繼ぐ。先生に追配するに足らずと雖も、しかも、賓客の美、殆んど當時に減せず。公の二子、又適ま郡に在り。故に輒ち前令を擧げて、各〻一篇を賦す。

窗前暗響鳴枯葉。　窗前、暗に響いて枯葉鳴り、
龍(一)公試手行初雪。　龍公、手を試みて初雪を行る。
映空先集疑有無。　空に映じて、先づ集まり、有無を疑ひ、
作態斜飛正愁絕。　態を作して斜に飛び、正に愁絕。
衆賓起舞風竹亂。　衆賓、起つて舞うて、風竹亂れ、
老守先醉霜松折。　老守、先づ醉うて、霜松折る。
恨無翠(二)袖點橫斜。　恨むらくは、翠袖の橫斜に點ずるなく、

【字解】(一) 龍公　詩の小引に見えた通り、東坡は、元祐六年十月二十六日、雨を張龍公に禱つた、即ち前詩の自註に見えた龍祠である。(二) 翠袖　前に寓居定惠院の詩中にも注したが、杜甫の詩に、天寒翠袖薄、日暮倚修竹とある。(三) 更鼓　夜の刻限を報ずる街鼓。(四) 鈴索擊　王註に「太守に鈴閣あるなり」と記し、李白の詩に擊鈴交通二

祇有微燈照明滅。
歸來倘喜更鼓永。
晨起不待鈴索掣。
未嫌長夜作衣稜。
却怕初陽生眼纈。
欲浮大白追餘賞。
幸有回飈驚落屑。
模糊檜頂獨多時。
歷亂瓦溝裁一瞥。
汝南先賢有故事。
醉翁詩話誰續說。
當時號令君聽取。
白戰不許持寸鐵。

祇だ微燈の明滅を照らすあり。
歸來、倘ほ喜ぶ更鼓の永きを、
晨起待たず、鈴索の掣するを。
未だ嫌はず、長夜、衣稜を作すを、
却つて怕る、初陽、眼纈を生ずるを。
大白を浮べて、餘賞を追はむと欲す、
幸に回飈の落屑を驚かすあり。
模糊、檜頂ひとり多時、
歷亂、瓦溝、わづかに一瞥。
汝南の先賢、故事あり、
醉翁の詩話、誰か續說。
當時の號令、君聽取、
白戰許さず、寸鐵を持するを。

千石とある。太守の應接室には、鈴をつけてあつて、訪問する人は其索を引く。【五】作衣稜　寒氣甚しく、衣服の折れ目が堅くなつて肌を刺すに似たりと云ふ意。【六】初陽　即ち初日、朝日。【七】眼纈　日が霞む。【八】大白　酒杯。【九】落屑　雪片。【一〇】瓦溝　瓦を敷き詰めた溝。【一一】裁　纔に同じ、わづかに。【一二】汝南先賢　歐陽修を指す、王註に「三國志、多く汝南先賢傳を引く、今、潁州は汝南の地なり、故に汝南先賢の字を用ふ」とある。【一三】醉翁詩話　醉翁は歐陽修の別號、王註に「廬陵集中、詩話上下一卷あり、詩話は醉翁より始まる、今、文忠公の前令を擧ぐ、故に爾か云ふ」とある。【一四】白戰　から手で戰ふ。

【題義】小引の意味は――元祐六年十一月一日、雨を張龍公の祠に禱つた處が、幸に雪が少し降つた。そこで、客と共に聚星堂に會飮したが、ふと憶ひ出したのは、歐陽文忠が此地に太守たりし時、雪中客と約して詩を賦し、ありふれた形容の言葉を禁じ、艱難中に於て奇險を出すを主眼として、銘銘、苦心して作つたことがあつた。爾後、四十餘年を經たるも、その眞似をして、跡を繼ぐものもない。予は、歐陽公の老門生であり、又その公の後を繼いで、今この地に居るので、たとひ、その學德は公に追配するに足らずとするも、賓客の美は、殆んど、その當時に減じないし、公の二子、叔弼・季默も、折よく此郡に居られる。そこで、前の詩令を擧げ、門客をして各〻詩一篇を賦せしめたといふのである。聚星堂に就いては、名勝志に「歐陽文忠公、潁に守たる時、州治に於て聚星堂を起し、侯官の王回深父・臨江の劉攽貢父、州人常秩夷甫・六安の焦千之伯强と日夕燕遊の所となす」とあつて、歐陽修の新陽力徵初破蓐の七古があるが、ここには引抄を見合はせる。それから「體物の語を禁ず」といひ、前令と云つたのは、廬陵集に載せた雪の詩の註に「時に潁州に在り、その序を作つて曰く、玉月梨梅練絮白舞鵝鶴銀等の字、請ふ用ふる勿れ」といつた其事を指したのである。

【詩意】窓の前に微けき響がして、枯葉を打ち鳴らしたが、そは龍公が吾が禱に應じ、自ら手を試みて、初雪を降らすのであつた。雪片が空に映じて、先づ集まる時は、有無を分かず、態を作つて、斜に飛ぶに至りては、愈よ人心を愁へしめる。この雪に對して、衆賓の起つて舞ふは、さながら風竹の亂るるが如く、老太守は、眞先に醉ひ潰れて、霜松が折れたとでも形容したい位。その横に斜に飛ぶ雪片を翠袖に受けて、その跡を點せしめる佳人なきは、いささか慊らず、唯だ殘燈明滅定まらずして、

默つて居るだけである。かくの如く、興を縱にして、家に歸つて來ても、冬の事なれば、時刻を報する街鼓が永く響いて、さう遲くもなく、明朝、早く目をさまして、訪問者が鈴の索を引くをも待たぬ位。冬の夜具は、寒氣劇しくして、衣服の疊み目の角立つは、さして嫌ふべきことでもないが、朝日が上つて、目にまばゆきには、却つて閉口する。そこで、又ぞろ、杯を浮べて餘賞を追はうすると、折から、吹き廻る疾風が、雪の塊を吹き落して、塵屑の如く碎けるのも面白い。高い檜の頂にだけは、模糊として、久しく殘つて居るが、瓦で疊んだ溝の中には、歴亂として、唯だ一目見たばかりで、消えて仕舞ふ。歐陽公は、汝南の先賢として、故事を傳へて居るが、その作りし詩話は、誰も繼ぐものなく、そこで、吾輩が之を復興して、雪の詩を作らうといふ次第。その當時の詩令は、諸君に聞いて置いて貰ひたいので、たとへば、から手で搏鬪するに際し、寸鐵を持するを許さざるが如く、有りふれた形容は、一切拔きにして、卽興を詠出しようといふのである。

【餘論】この詩は、頗る有名であつて、後人は、往往にして其韻を用ひ、且つ其體に擬して居るが、首尾各二句を除いて、その中間は、すべて對偶を以て成り、しかも、古體であるだけに、さう嚴密でないといふことが、その特色である。乾隆御批には「雪を賦するもの、多く悠揚飄蕩を以て、その韻致を取る。これ獨り生劖の筆を用ひ、硬盤の語を作し、常態を擺脫す、徒だ體物の語を禁するを以て、奇を標し勝を競ふのみに非ず」といひ、紀昀は「句句恰も是れ小雪、體物神妙、名篇に愧ぢず」といつて居る。

歐陽叔弼見訪、誦陶淵明事、嘆其絕識、既去、感慨不已、而賦此詩

歐陽叔弼訪はれ、陶淵明の事を誦して、其絕識を嘆す。既に去つて、感慨已まずして、この詩を賦す

淵明求縣令。本緣食不足。
淵明、縣令を求む、本と食の足らざるに緣る。

(一)東帶向督郵。小屈未爲辱。
束帶して督郵に向ふ、小屈、未だ辱と爲さず。

翻然賦(二)歸去。豈不念窮獨。
翻然として歸去を賦す、豈に窮獨を念はざらむや。

(三)重以(四)五斗米。折腰營口腹。
五斗米を以て、腰を折つて口腹を營むを重かる。

云何(五)元相國。萬鍾不滿欲。
云に何ぞ元相國、萬鍾、欲に滿たす。

胡椒銖兩多。安用八百斛。
胡椒、銖兩多く、安んぞ八百斛を用ひむ。

以此殺其身。何啻(六)鵠抵玉。
此を以て其身を殺す、何ぞ啻だ鵠の玉を抵つのみならむや。

往者不可悔。吾其(七)反自燭。
往者、悔ゆべからず、吾、其れ反つて自ら燭せむ。

【字解】【一】東帶向督郵　昭明太子の陶淵明傳に「歲終、會ま郡督郵を遣はして縣に至らしむ、吏請うて曰く、應に束帶して之を見るべし」とある。【二】歸去　即ち歸去來辭、同傳に「即日印綬を解いて、職を去り、歸去來を賦す」とある。【三】重　はばかると訓すべし、非常な事と思ふ。【四】五斗米　同傳に「淵明、歎じて曰く、我、豈に能く五斗米の爲に、腰を折つて、鄉里の小兒に向はむ

や」とある。【五】元相國　唐書に「元載、字は公輔、代宗立ち、中書侍郎に進み、大曆十二年、自盡を賜ふ。その家を籍するに、胡椒八百石に至り、他物これに稱ふ」とある。【六】鵲抵玉　王註に「鹽鐵論崇禮篇、南越、孔雀を以て門戸に珥し、昆山の傍、璞玉を以て烏鵲を抵つ。抵は擲つなり、蓋し玉の多きを云ふなり。今、先生の意、身を以て貨に狥ふは、猶ほ貨を以て賤を逐ふがごときに譬ふるなり。隋侯の珠を用ひて千仞の雀を彈ずると同意」とある。【七】反自燭　鍾嶸の詩品に「餘暉に映じて以て自ら燭らす」とあつて、それを以て、吾が身に反照する、卽ち自ら戒めるといふ義。

【題義】この詩は、歐陽叔弼が來訪し、陶淵明の事蹟を語り出でて、その卓絶せる識見を感嘆したので、叔弼、すでに辭し去りし後、予も亦た感慨已まず、仍つて、これを賦したといふのである。

【詩意】陶淵明が、彭澤の令たることを求めたのは、もと食が足らず、生活に差支へたからである。そこで、束帶して督郵に遇つた處で、一寸身を屈するだけで、格別恥辱とするにも及ばないが、淵明は、翻然として歸去來辭を賦し、印綬を解いて、歸つて仕舞つたので、その困窮獨處の苦を思はぬ譯でもないが、區區たる五斗米位の微俸の爲に、腰を曲げて口腹を營むことを非常視したからである。これに反して、唐の元載の如きは、宰相となり、萬鍾の祿を頂戴しても、その慾心を滿たす能はず、胡椒の如きものは、いかに貯藏して、銖兩を多くするとも、八百斛は到底用ひ切れるものではない。そして、元載は、遂に貪慾の爲に其身を殺すことに成つたので、その貴を以て賤を逐ひしは、美玉を以て鵲に擲つより以上の事である。過去の事は、いくら悔やんだとて仕方が無いので、予は、唯だ之を以て反省し、自ら戒とすれば善い。

【餘論】この詩は、格別の者でもないが、それでも、東坡は、いささか苦心したといふので、何蘧の春渚紀聞に「蘧、かつて東坡先生の詩藁を得たり、云ふ、淵明爲小邑と。繼いで爲の字を圈し去り、改めて求の字となし、又小邑の二字を連塗して、縣令の字となす。胡椒銖兩多、安用八百斛に至りては、初めに胡椒亦安用、乃貯八百斛と云ふ。乃ち知る、大手筆と雖も、一時の筆快なるを以て定まれりとなして屢ば改むるに憚らざるを知るなり」とある。黃山谷は、又この詩に跋して「東坡、潁州に在り、歐陽叔弼が元載傳を讀んで淵明の智を歎ずるに因り、遂に此詩を作る、淵明、栗里柴桑の間に隱れ、或は飯足らざるなり、顏延年、錢二十萬を送る、卽日盡く酒家に送つて、ともに蓄積して紀極を知らず、胡椒八百斛を藏する者に至りては、相去る遠近、豈に直に睢陽の蘇合丸と蜣蜋の糞丸との比のみならむや」といつて居る。

喜劉景文至

(一)
天明小兒更傳呼。
(二)
髯劉已到城南隅。
(三)
尺書眞是髯手跡。
(四)(五)
起坐騣眼知有無。
今人不作古人事。

劉景文の至るを喜ぶ

天明、小兒更る〻傳呼す、
髯劉、すでに到る城南の隅。
尺書、眞に是れ髯の手跡、
起坐、眼に騣して有無を知る。
今人作さず古人の事、

【字解】【一】小兒　東坡の幼子、迨・過の二人を指したのであらう。【二】髯劉　髯の長い劉君。【三】尺書　一尺の書、短い手紙。【四】騣眼　騣は押し當てる。【五】知有無　事の眞否を驗ふ。【六】吳會　會は會稽、蘇杭一帶の地方。【七】冷落

今世有此古丈夫。　今世、この古丈夫あり。
我聞其來喜欲舞。　我、その來るを聞いて、喜んで舞はむと欲す、
病自能起不用扶。　病、自ら能く起つ、扶くるを用ひず。
江淮旱久塵土惡。　江淮、旱久しくして塵土惡しく、
朝來淸雨濯鬢須。　朝來、淸雨、鬢須を濯ふ。
相看握手了無事。　相看て、手を握つて了に事なし、
千里一笑毋乃迂。　千里一笑、乃ち迂なるなからむや。
平生所樂在(六)吳會。　平生、樂むところは吳會に在り、
老死欲葬杭與蘇。　老死、葬らむと欲す杭と蘇と。
過江西來二百日。　江を過ぎて、西來、二百日、
(七)冷落山水愁(八)吳姝。　冷落山水、吳姝を愁へしむ。
(九)新隄舊井各無恙。　新隄舊井、各ゝ恙なし、
(一〇)參寥六一豈念吾。　參寥六一、豈に吾を念はむや。
別後新詩巧摹寫。　別後の新詩、巧に摹寫、

山水　山水の間に冷落する、旅中の苦痛よりして形容枯槁せるをいふ。【八】吳姝　姝は少女。【九】新隄舊井　施註に「新隄は築くところの蘇公隄を謂ひ、舊井は治するところの唐の六井を謂ふ」とある。【一〇】參寥六一　王註に「參寥六一は二泉の名。先生、參寥泉の銘あり、謂はゆる石泉槐火、九年而信といふものなり。又、六一泉の銘は謂はゆる君子之澤、豈因五世而已といふものなり。これは皆杭州の事」とある。

袖中知有錢塘湖。　袖中、知る錢塘湖あるを。

〜

【題義】劉景文は、前に小傳が見えて居た。王文誥の案に「公、すでに劉景文を薦む、これに由つて、文資を換へ、除せられて隰州に知たるを得たり。時に、景文、隰州の任に赴く、因つて、公を過ぐるなり」とある。

【詩意】夜が明けると、小伜どもは、更る〲傳呼して、髯の長い劉君は、すでに城の南隅まで來て居るといつた。そして、枕元に在る短い手紙は、髯劉の自筆である處から、起坐して、それを目に押しあて、さては夢では無いかと疑ふばかり。今人は輕薄にして、古人の樣な事を爲さざれども、今の世にも、髯劉の如き古丈夫があるので、その人は、わが平生欽慕して措かざるところ。その劉君が愈よ來ると聞いて、われは喜びの餘りに、起つて舞はむとし、すこし加減が惡かつたが、自ら能く起き上つて、格別、人の厄介にも成らなかつた。江淮地方は、久しく旱が續いて、塵土の氣が毒毒しかつたが、幸ひ朝來すがすがしき雨が降つて、わが鬢や鬚を濯ふ心地よさ。そこで、劉君と相見ると、手を握つたまま、何をするでもなく、千里の遠きを辭せず、態態遣つて來て、唯だ一笑するだけでは、如何にも間が拔けて居るといはれるかも知れない。わが平生樂むところは、吳中會稽に在るので、年を取つて死んだならば、杭州か蘇州かに葬つて貰ひたいと思つて居る。處が、今次、潁州に轉任し、江を過ぎて西より來り、著到の後、すでに二百日にも成るが、山水の間に冷落して瘦せ衰へ、吳地の少

女をして愁へしむる位で、さツぱり、御話に成らぬ始末。君は、杭州から來たといふが、さきに、予が手をかけて修治した新隄も、舊井も、異變は無かつたらうし、參寥・六一の二泉を見ても、その銘を作つた予を思ふ暇だに無かつたらう。一別以來、君は作詩が大へん上手に成り、到る處の佳景を巧に摹寫したに相違なく、袖中には、錢塘西湖の名作が屹度有らうから、第一に、それを拜見したいものである。

【餘論】 紀昀は「起數語、旁面より寫し出し、愈よ出でて愈よ飛動を加ふ。多少の交情、すべて字句なき所に在り」といつたが、王文誥は之を駁して「喜の字、これより入手し、乃ち事に據つて直起す、傍面に非ざるなり」といつて居る。次に、紀昀は、吳會杭蘇の二句に就いて「寫し得て十分滿足、ここに至つて、更に語を下し難し、只だ好し傍波を蹙起す」といつたが、王文誥は、又之を駁し「これより以下、皆兩公應に有るべきの語、故に錢塘湖を以て結となし、至の字を收到するを得たり、これ正面、傍波に非ざるなり」といつて居た。但し、紀昀が結末を稱して「一筆勒轉、輕妙の至」といつたのに就いては、誰とて異議の有らう筈が無い。

禱雨張龍公既應劉景文有詩次韻

雨を張龍公に禱り、既に應あり。劉景文詩あり、次韻す

張公晚爲龍。(一)抑自龍中來。(二)　張公、晩に龍となるか、抑も龍中より來れるか。

伊昔風雲會。咄嗟潭洞開。　伊れ昔、風雲の會、咄嗟、潭洞開く。

精誠苟可貫。賓主眞相陪。　精誠、苟くも貫くべくんば、賓主、眞に相陪せむ。

洞簫(三)振羽舞(四)。白酒浮雲罍(五)。　洞簫、羽舞を振ひ、白酒、雲罍に浮ぶ。

言從關州妃(六)。遠去焦氏臺(七)。　言ふ、關州の妃より、遠く焦氏臺に去ると。

傾倒缾中雨(八)。一洗麥上埃。　缾中の雨を傾倒して、一洗す麥上の埃。

破旱不論功。乘雲却空回。　旱を破つて功を論ぜず、雲に乘じて、却つて空しく回る。

嗟龍與我輩。用意豈遠哉。　嗟す龍と我輩と、用意、豈に遠からむや。

使君(九)今子義(一〇)。英氣冠東萊。　使君、今の子義、英氣、東萊に冠たり。

笑說龍爲友(一一)。幽明莫相猜。　笑ひ說く、龍は友たりと、幽明、相猜む莫れ。

【字解】 (一) 晚爲龍　晚年化して龍となる。(二) 抑自龍中來　抑はさなくばの意、唐の趙耕の撰せる張龍公碑に「君、諱は路斯、宣城の令となる、罷めて歸るや、毎夕出づ、常體冷且つ濕、夫人石氏、異んで之を詢ふ。公曰く、吾は龍なりと。後、九子と復た龍となる」とある。(三) 洞簫　前赤壁賦にも見えて居る、普通尺八の如きものといふが、その制は固より異なつて居る。(四) 羽舞　周禮樂師に「凡そ舞には羽舞あり」とあつて、その註に「羽舞は祈雨なり」とある、雨乞の時にするものと見える。(五) 雲罍　雲形の模樣ある酒樽、周禮の鄭註に「山罍、刻畫して、山雲の形を爲す」と見ゆ。(六) 關州妃　趙耕の張龍公碑に「潁上百社村の人なり、夫人は關州の石氏」とある。(七) 焦氏臺　集古錄に「景龍より以來、潁人、世〻これを焦氏臺に祠る」とある。(八) 傾倒缾中雨　讀

玄怪錄に「李靖、微なる時、かつて靈山中に射獵す。會ま暮るるや、一朱門の家に投宿す。夜半、門を叩くこと甚だ急なるを聞く。一婦人を見る、靖に謂つて曰く、これは人宅に非ず、乃ち龍宮なり。適ま、天符を奉す、命じて雨を行らしむ。二子、皆在らず、頃對の間を煩はし來らむと欲す。如何と。遂に黃頭騧・青鬃馬を命じ、又命じて雨器を取らしむ、乃ち一小瓶、戒めて曰く、瓶中の水を取つて馬鬃の上に滴らせば、即ち雨偏れし」とある。【八】使君　地方長官の尊稱、ここでは劉景文を指す。【一〇】今子義　三國志に「太史慈、字は子義、東萊、黃の人なり、最も膽烈あり」と見ゆ。【一一】龍爲友　漢の樂府天馬歌に今安匹、龍爲レ友とある。

【題意】張龍公の事は、字解の項に分說してあるが、諱は路斯、もと潁上の人、はじめ仕宦したが、死後、龍となり、因つて潁人が之を祀り、久旱には雨を禱る例に成つて居る。前詩に見えた通り、東坡は、ここに雨を禱ると、應驗虛しからずして、小雪が降つた。その事を劉景文が聞いて詩を作つたから、東坡は、取り敢へず、次韻したのが、即ち此首である。但し、劉景文の原作は、今傳はつて居らぬ。

【詩意】張公は、晩年化して龍となれるか、それとも、龍中から來たか、いづれとも分からぬが、むかし、風雲の會に際し、咄嗟の間に、潭底の洞窟が開いて、その中に籠つて仕舞つた。しかし、その靈長く存し、苟くも精誠を以て一貫することが出來る上は、雨を禱るのも、決して偶然ではないので、賓主、ここに相陪し、洞簫の聲につれて、羽舞を爲さしめ、御供へにする白酒は、雲形の模樣ある酒樽に滿ちて居る。すると、張龍公は、その夫人たる關州の石氏の處に往つて居たが、遠く焦氏臺まで歸り來り、そして、瓶中の雨水を倒に注いで、麥の葉にかかれる塵埃を一洗して仕舞つた。その久旱を破つたのは、大したことであるが、決して、その功を論することなく、又ぞろ、雲に乘じて、空しく歸つて仕舞つた。ああ、龍と我輩太守とは、用意全く同じく、民を救ふ外、他意なきものである。劉君は、今の世の太史慈と稱すべく、膽烈を以て稱せられ、その英氣は、東萊第一であるが、笑ひながら、龍こそ我が友だといひ、幽明處を異にするも、決して相猜むことなく、仍つて、詩を作られた次第である。

【餘論】紀昀は「起し得て奇矯」といひ、又、龍公行雨の一段を評して「忽ち此意に入る、警動異常」といつて居る。

劉景文家藏樂天身心問答三首戲書一絶其後

劉景文の家、樂天の身心問答三首を藏す。戲に一絶を其後に書す

淵明形神自我。　淵明は、形神、自ら我とし、

樂天身心相物。　樂天は、身心、相物とす。

而今月下三人。　而今、月下三人、

他日當成幾佛。　他日、當に幾佛と成るべき。

【字解】【一】淵明　陶淵明に形贈影、影答形、神釋の三首があつて、その序に「貴賤賢愚、營營として以て生を惜まざるなし、これ甚だ惑ふ、故に形影の苦を極陳し、神辨を言うて、自然以て之を釋す」とある。【二】身心相物　白樂天は、心を以て吾が身の主とし、身を以て心の役とし、心身を對立せしめた。【三】月下三人　身心と月下の影と三個を并せて云ふ。

【題義】白樂天の集中に、自戲三絶句といふ題があつて、その序に「閒臥獨吟、人の酬和するなし、聊か身心を假りて相戲れ、往復、偶ま三章を成す」とあつて、その全篇は左の通りである。

心問レ身云何泰然。嚴冬暖被日高眠。放二君快活一知レ恩否。不二早朝一來十一年。心問レ身。
心是身王身是宮。君今居在二我宮中一。是君家舍君須レ愛。何事論レ恩自說レ功。身報レ心。
因二我疏慵一休罷早。遣二君安樂一歲時多。世間老苦人何限。不レ放二君閒一奈二我何一。心重答レ身。

劉景文の家には、白樂天の此詩の原稿を藏して居たから、東坡は、戲に六言絶句一首を作つて、その後に題したのである。

【詩意】陶淵明は、形神の兩者を以て、ともに自我に外ならずとし、白樂天は、身心の兩者を以て、主從の關係あるものと云つて居た。今は、月下に於て、身心と影と、唯だ三人であるが、他日、成佛すれば、幾個の佛となるであらうか。

西湖戲作

西湖、戲に作る

（一）一士千金未レ易レ償。　一士千金、未だ償ひ易からず、
我從陳趙兩歐陽。　我は從ふ陳趙兩歐陽。
擧レ鞭拍レ手笑二山簡（二）一。　鞭を擧げ、手を拍つて、山簡を笑ふ、
祇有二幷州一葛强一。　祇だ幷州の一葛强あり。

【字解】【一】一士千金　後漢書に「子貢曰く、むしろ千金を喪ふも、一士心を失ふ無れ」とあつて、一士は千金よりも價値あるものとしてある。【二】山簡　前に出る徐州の詩中に注して置いたが、晉書山簡傳に「兒童、これを歌うて曰く、擧レ鞭向二葛彊一、何如幷州兒」とある。葛彊は山簡の愛將、その家は、幷州に在つた。

【題義】この卷の初に在る西湖秋涸の題下に述べた通り、杭潁二州、ともに西湖があつて、ここのは、矢張、潁州の西湖。ある時、東坡は、諸友と共に此に游び、因つて、戲に作つたのである。

【詩意】一士は、千金に比して更に多く、容易に償ふことが出來ない。さればこそ、予は、陳履常・趙景貺、竝に兩歐陽に從つて、今日も、ここに游び暮らしたのである。むかし、山簡には、唯だ一人、幷州の葛强のみが其愛將であつたといふが、その餘りに匱少なるは、鞭を擧げ、手を拍つて笑ふべき程である。

【餘論】紀昀は「一時興到の口占、これを集中に編す、殊に必せず」といつたが、如何にも、尤も千萬である。

送二歐陽季默赴一レ闕

歐陽季默の闕に赴くを送る

（一）先生豈止一懷祖（二）。　先生、豈に止だ一懷祖、
（三）郎君不レ減王文度（四）。　郎君、減せず王文度。

【字解】【一】先生　歐陽修を指す。【二】懷祖　晉書に「王述、字は懷祖、その子坦之を愛し、長大と雖

膝上幾日今白須。
今我眼中見此父。
汝南相從三晦朔。
君去苦早我來暮。
霜風淒緊正脫木。
潁水淸淺可立鷺。
莫辭白酒瀉香泉。
已覺扁舟掠新渡。
坐看士衡執別手。
更遣夢得出奇句。
郞君可是堯庫人。
乃使騄驥隨蹇步。
置之行矣無足道。
賢愚豈在遇不遇。

膝上幾日、今白須、
今我眼中、この父を見る。
汝南相從ふ、三晦朔、
君去ること苦だ早く、我來ること暮し。
霜風淒緊、正に木を脫す、
潁水淸淺にして鷺を立つべし。
辭する莫れ、白酒の香泉を瀉ぐを、
すでに覺ゆ、扁舟の新渡を掠むるを。
坐に看る、士衡の別手を執るを、
更に夢得をして奇句を出さしむ。
郞君、これ堯庫の人なるべし、
乃ち騄驥をして蹇步に隨はしむ。
これを置いて行け、道ふに足るなし、
賢愚、豈に遇不遇に在らむや。

も、猶ほ抱いて膝上に置く」とある。【三】郞君　歐陽季默を指す。【四】王文度　名は坦之、晉書の本傳に「時人語つて曰く、江東獨坐王文度」とあり、王羲之傳に「諸子に謂つて曰く、吾は懷祖に減ぜず、しかも、位遇懸邈、當に汝等が坦之に及ばざるが故に由るべきのみ」とある。【五】見此父　南史に「王彧、字は景文。袁粲、これを見て、その風流を稱す。謝叔源に方ぶれば野父たりと。粲、惆悵良や久しうして曰く、恨むらくは、眼中、この人を見ず」とあつて、その語を翻用したのである。【六】三晦朔　三個月。【七】來暮　暮はおそしと訓すべし。【八】淒緊　景色すさまじく、且つ寒さ厳しきこと。【九】士衡　陸機の字、雲の兄。ここでは、叔弼に比して云ふ。【一〇】夢得　劉禹錫の字、同姓の故を以て、劉景文に擬して云ふ。【一一】堯庫人　季默、かつて宣德郞を以て、滄州の酒稅を監せしを云ふ。【一二】騄驥　ともに名馬。

【題義】歐陽季默は、前に數ば見えたが、母の喪が終り、愈よ上京するに就いて、東坡が賦して、その行を送つたのである。

【詩意】令尊永叔先生は、古しへの王懷祖どころではなく、そして、郞君の才は、その子の王坦之に減じない。令尊は、郞君がかなり大きくなるまで、膝の上に置いて寵愛されたが、郞君も、今白鬚を生ずる樣になり、郞君に對すれば、わが眼中、常に彷彿として令尊を見る心地がする。われは、汝南に著任せしより、三個月の間、追隨して居たが、今次、愈よ御別れと成り、君の去ること甚だ早く、我が來ること何ぞ遲きといひたい位。今しも、霜を帶びたる冬の風は、すさまじく、又寒けく、木の葉を振ひ落し、潁水は淸淺にして、白鷺が立つて居る。貯への白酒を泉の如く注ぐを辭せず、せめては、十分に召し上つて貰ひたいので、やがて、舟は新しき渡頭を掠めて漕ぎ出すであらう。陸機に比すべき令兄は、別れに際して、手を執られ、劉夢得と同姓の景文は、送別の詩を作つて、奇句を出すことであらう。郞君は、監稅の職に居られるが、たとへば、騄驥の如き名馬をして蹇步の駑馬に隨はしむると一般、まことに、御氣の毒であるが、そんな事は、どうでも善いとして、早に角、出發せられよ。人の賢愚は、もとより、その遇不遇には關係しないので、官が卑いからといつて、必ずしも嘆息するには及ばない。

【餘論】紀昀は「起、太だ突」といひ「結亦た直率」といつた。そして、査初白は、中段の數句を稱して「淸峭」といつて居る。

用前韻作雪詩留景文

前韻を用ひて、雪の詩を作り、景文を留む

(一)萬松嶺上(二)黃千葉。 萬松嶺上、黃千葉、
載酒年年踏松雪。 酒を載せて、年年、松雪を踏む。
劉郎去後誰復來。 劉郎去る後、誰か復た來る、
花下有人心斷絶。 花下人あり、心斷絶。
東齋夜坐搜雪句。 東齋夜坐、雪の句を搜り、
兩手(三)龜拆霜須折。 兩手龜拆して霜須折る。
無情豈亦畏嘲弄。 無情、豈に亦た嘲弄を畏れむや、
穿簾入戸吹燈滅。 簾を穿ち、戸に入つて、燈を吹いて滅す。
紛紛兒女爭所似。 紛紛、兒女、似るところを爭ふ、
(四)碧海長鯨君未掣。 碧海の長鯨、君、未だ掣せず。
(五)朝來雲漢接天流。 朝來、雲漢、天に接して流る、
顧我小詩如(六)點纈。 顧みるに、我が小詩、點纈の如し。
歐陽趙陳在戸外。 歐陽趙陳、戸外に在り、
急掃中庭鋪(七)木屑。 急に中庭を掃うて、木屑を鋪く。
交游雖似雪柏堅。 交游、雪柏の堅きに似たりと雖も、
聚散行作(八)風花瞥。 聚散、行く〳〵風花の瞥を作す。
晴光融作一尺泥。 晴光、融けて一尺の泥と作る、
歸有何事眞無說。 歸つて何事かある、眞に說なし。
泥乾路穩放君去。 泥乾き路穩に、君を放つて去らしめむ、
莫倚馬蹄如踏鐵。 馬蹄、鐵を踏むが如きに倚る莫れ。

【字解】【一】萬松嶺 杭州の西湖附近に在る。長公外記に「元祐五年、東坡、錢塘に守たり、景文、東南の將領となりて公を佐け、西湖を開くの日、萬松嶺より、以て新堤に至る」とあつて、その時の事を追憶したのである。【二】黃千葉 八重の蠟梅、東坡は、後に蠟梅の詩を作つて君不見萬松嶺上黃千葉、玉蕊檀心兩奇絶といつて居る。【三】龜拆 ひびが切れて皮が裂ける。【四】碧海長鯨 杜甫の詩に、爭看翡翠蘭苕上、未掣鯨魚碧海中とあつて、詩筆の雄壯を極めたるをいふ。【五】雲漢 銀河。【六】點纈 しぼり模様を集める。【七】木屑 かんな屑、雪が解けて、路が堅いから鋪いたのであらう。【八】風花瞥 風に吹かるる落花の日にも留まらぬ如きを云ふ。杜甫の詩に古來聚散地、宿昔長荊棘とあり、庾信の詩に風花直亂回とある。

【題義】これは、前に見えた聚星堂の詩韻を用ひて、雪を詠じ、そして、劉景文を引き留めたのである。

【詩意】さきに杭州に在りし時、萬松嶺の上に八重の蠟梅が黃に綻ぶ折から、酒を載せて、松に積む雪を踏みつつ、佳景を賞するを例とした。しかし、劉君が一たび去りし後は、誰も來て異れる人なく、

予は、蠟梅花下に居て、ひとり心緒斷絕の想に堪へなかつた。今しも、ここ潁州に在つて、夜、ひとり東齋に坐して、雪の詩を作らうと思つて苦吟して居ると、寒氣甚しき爲め、兩の手はひび裂け、白い鬚もちぎれる位。雪は、元と無情の物であるから、詩人輩に嘲弄されるを畏れる譯でもないが、やがて、風に隨つて、簾を穿ち、戸に入り、はては、燈火を吹き消して仕舞つた。兒女輩は、鵞毛とか楊花とかいひ、雪は何に似て居るかと、紛紛として爭つて居るが、碧海に長鯨を掣する樣な雄壯なる君の名作は、なかなか出來なかつた。朝來、空がよく晴れて、雲漢が天に接して流るるが如く、この天地の大文章に對して、わが小詩を見ると、一寸、しぼり模樣を染め出したに過ぎぬ。毎日、來訪する歐陽趙陳の諸君は、すでに戸外まで遣つて來たから、急に命じて、中庭を掃除し、歩き惡くない樣に、かんな屑を鋪かしめた。われ等の交情は、雪を帶びた松柏の如く堅いけれども、浮世の常として、聚散離合の定めなき、風に亂るる落花の目にも留まらぬと同じであるから、すでに、相逢ふ上は、出來るだけ、歡を盡さねばならぬ。やがて、晴日高く上れば、滿地の積雪は解けて、一尺の新泥となり、路が惡くなることは受合であるし、君は歸つた處で、所用のある譯でもなく、何も言ひ草は無い筈である。そこで、泥が乾いて、路が歩きよく成れば、君を放つて去らしむべく、それまでは、落ち付いて、ここに居たら善いので、何も鐵を踏むが如き馬蹄に倚賴して、さう急いで歸るにも及ぶまい。

【餘論】紀昀は「通篇遒緊、一懈筆なし」といひ、又、交游難似雪柏堅の句を評して「手に隨つて綰合し、入れ得て痕なし」といつて居る。

和劉景文見贈　　劉景文の贈らるるに和す

(一)元龍本志陋(二)曹吳。　元龍の本志、曹吳を陋とす、
豪氣(三)崢嶸老不除。　豪氣崢嶸、老いて除かず。
失路今爲(四)噲等伍。　失路、今、噲等の伍となり、
作詩猶似(五)建安初。　詩を作つて、猶ほ建安の初に似たり。
西來爲我風(六)黧面。　西來、我が爲に、風、面を黧くし、
獨臥無人雪(七)縞廬。　獨臥、人なく、雪、廬を縞くす。
留子非爲(八)十日飲。　子を留めて十日の飲を爲すに非ず、
要令(九)安世誦亡書。　安世をして亡書を誦せしむるを要す。

【字解】【一】元龍　陳登の字、前に次韻答邦直子由の詩中に注して置いた。【二】曹吳　魏の曹操、吳の孫權。【三】崢嶸　高く聳えて居る貌。【四】噲等伍　漢書韓信傳に「信廢せられて淮陰侯となる。かつて、樊將軍噲を過ぐ。噲、趨拜送迎、言うて臣と稱して曰く、大王、乃ち肯て臣に臨むと。信、門を出でて笑うて曰く、生きては乃ち噲等と伍を爲す」とある。【五】建安初　建安は後漢の末の年號。魏の文帝の典論に「今の文人、魯國の孔融文擧、廣陵の陳琳孔璋、山陽の王粲仲宣、北海の徐幹偉長、陳留の阮瑀元瑜、汝南の應瑒德璉、東平の劉楨公幹、この七子は、學に於て遺すところなく、辭に於て假すところなし」とあり、韓愈の薦士の詩に五言出漢時、蘇李首更號、東都漸瀰漫、派別百川導、建安能者七、卓犖變風操とある。【六】黧面　黧は黒くする、列子に「顧みて商邱開を見るに、年老い、力弱く、面目黧黒」とあり、杜甫の詩に會面嗟黧黒とある。【七】縞廬　縞は白くする、謝惠連の雪賦に眞頃同縞とあるに同じ。【八】十日飲　前に趁杜公揮、及び今年正月の詩中に注して置いた。【九】安世誦亡書　漢書張安世傳に「上、行いて河東に幸し、かつて、書三箧を亡ひ、詔して問ふも、能く知るなし。惟だ安世、これを識り、具に其事を作る。後、購求して書を得、以て相校するに、遺失す

ろところなし」とある。

【題義】 この詩は、劉景文の贈られたのに次韻して、乃ち之に酬いたのである。

【詩意】 君は、古しへの陳元龍が、その本志、曹操・孫權輩を陋として、眼中人なきと一般、崢嶸たる豪氣は、年を取つても、依然として殘つて居る。しかし、浮世の行路を誤つて、さのみ榮達せず、かの淮陰侯が、生きては噲等と伍を爲すと云つた樣に、下らぬ手合と相追隨するを免れないが、詩を作ると、その體の純古なる、さながら、建安七子に似て居る。今しも、西から來て我を尋ね、風に其顏を黑くするのみを顧みず、そして、旅宿に居ると、獨臥人なく、雪が白く積つて、まことに寒げである。君を留めるのは、十日の會飲を致さうといふのではなく、むかしの張安世の如く、君だけ知つて居る亡書を讀誦せしめて、それを拜聽したいと思ふからである。

和二劉景文雪一

劉景文の雪に和す

占レ雨又得レ雪。龜(一)寧欺レ我哉。　雨を占して又雪を得たり、龜、むしろ我を欺かむや。
似レ知二吾輩喜一。故及二醉中一來。　吾輩の喜ぶを知るに似て、故に醉中に及んで來る。
童子愁二冰硯一。佳人苦二膠杯(二)一。　童子は冰硯を愁へ、佳人は膠杯に苦む。
那堪李(三)常侍。入(四)レ蔡夜銜(五)レ枚。　那ぞ堪へむ、李常侍、蔡に入つて、夜、枚を銜む。

【字解】 (一) 龜寧欺我哉　龜は龜卜、龜の甲を灼き、その裂け目に因つて占を爲す。(二) 膠杯　膠は白樂天の「一碗膠」の膠と同じく、ここでは酒の凍るを云ふ。(三) 李常侍　唐書李愬傳に「吳元濟を討ち、夜半、雪を冒し、入つて元濟の外宅に駐まる。蔡の吏、驚いて曰く、城陷る、と。元濟、なほ信ぜず、號令を聞くに及んで曰く、常侍傳語す、と。はじめて、驚いて曰く、何の常侍か、此に至るを得たる」とある。(四) 入蔡　蔡は蔡州、吳元濟の根據地。(五) 銜枚　周禮の註に「枚は箸の如く之を銜む」とある。口にくはへて聲の出ぬ樣にする。

【題義】 この詩は、劉景文の雪の詩に次韻したのである。

【詩意】 占では、雨が降るとあつたのに、雪が降つた。しかし、雪も雨も、もと同じ物であるから、龜卜が我を欺いた譯でもない。雪は、吾輩の喜ぶを知るに因つて、わざと醉中に及んで降つて來た。何分寒い爲に、童子は硯の氷れるを愁へ、侍婢は、酒が杯にへばり付くのを苦にして居る。むかし、唐の李愬は、雪夜、枚を銜んで、蔡州城に攻め入つたといふが、定めて、難儀で堪へられぬ程であつたらう。

【餘論】 紀昀は「次句、語を成さず」といつて、一擊の下に薙ぎ倒したが、實際、近體の句としては、生硬に失したものである。

次二前韻一送二劉景文一

前韻に次し、劉景文に送る

白雲(一)在レ天不レ可レ呼。　白雲天に在り、呼ぶべからず、

【字解】 (一) 白雲在天　仙傳拾

明月豈肯留庭隅。
怪君西行（二）八百里。
清坐十日一事無。
路人不識呼（三）尚書。
但見凜凜雄千夫。
豈知入骨愛詩酒。
醉倒正欲蛾眉扶。
一篇向人寫肝肺。
四海知我霜鬢鬚。
歐陽趙陳皆我有。
豈謂夫子駕（四）復迂。
爾來又見三（五）黜柳。
共此煖熱餐（六）氈蘇。
酒肴酸薄紅（七）粉暗。

明月、豈に肯て庭隅に留まらむや。
怪む、君が西行八百里、
清坐十日、一事なきを。
路人は識らずして尚書を呼ぶ、
但だ見る、凜凜、千夫に雄なるを。
豈に知らむや、骨に入つて詩酒を愛す「るを。」
醉倒、正に蛾眉をして扶けしめむと欲す。
一篇、人に向つて肝肺を寫し、
四海、わが霜鬢鬚を知る。
歐陽趙陳、皆我が有、
豈に謂はむや、夫子、駕、復た迂ぐる「あらむとは。」
爾來、又見る三黜の柳、
この煖熱を共にす、氈を餐するの蘇。
酒肴酸薄、紅粉暗く、

遺に載する西王母の謠に白雲在天、山陵月出、道里悠遠、山川間之とあり、謝朓の詩に白雲在天、龍門不見、去德滋永、思德滋深とある。【二】 西行八百里　劉景文は、これより隰州に赴任するが故に云ふ。【三】 呼尚書　東坡の自註に「君、一馬兩僕、率然として相訪ふ、道旅多く尚書と呼ぶ、意、君を都頭と謂へるなり」とある。【四】 駕復迂　まはり路なして駕を寄せる。【五】 三黜柳　柳下惠が三たび黜けられたといふことがあつて、同姓に因んで柳戒之を指す。矢張、東坡の知人で、この時、丁度来合はせたのである。東坡の自註に「郡中、日に歐陽叔弼・趙景貺・陳履常と相從ふ。而して、景文、復た至る、數日ならずして、柳戒之、亦た過ぎらる。賓客の盛、頃ろ未だ有らざるところ、然れども、數日ならすして、叔弼・景文・戒之皆去る」とある。【六】 餐氈蘇　蘇武が匈奴に居る時、食なきに因り、氈毛を雪にまぜて噛んで、幸に死なずに居たといふことがあつて、又同姓に因み、東坡自ら指して云ふ。【七】 紅粉暗　女の顏色愁を含めるをいふ。【八】 清而姝　姝は鮮麗なること。【九】 甘棠湖　東坡の自註に「景文、近ごろ居を九江にトして、甘棠湖に近し」とあり、九江志に「甘棠湖は、唐の長慶二年、刺史李渤、湖心を徑して隄を築り、長さ七百歩、以て行旅を利し、斗門を立て、以て水勢を蓄ふ、人、以て甘棠に比す、李翺、爲に銘を作る」とある。

祇有潁水清（八）而姝。
一朝寂寞風雨散。
對影誰念月與吾。
何時歸帆泝江水。
春酒一變甘（九）棠湖。

祇だ潁水の清にして姝なるあり。
一朝、寂寞、風雨散ずれば、
影に對して誰か念はむ、月と吾と。
何の時か、歸帆、江水を泝り、
春酒、一たび變せむ甘棠湖。

【題義】　この詩は、前の喜劉景文至の詩韻を用ひて、景文の愈よ出立して赴任するのを送つたのである。

【詩意】　君の一身は、白雲の天に在つて、呼び止めることが出來ぬと同じく、明月がこの庭隅に留まつて居ないと同じである。君は、これより、西へ八百里の道程を經て、赴任されるのであるが、この地に逗留すること十日、その間、淸坐して、一事なきが如く、至極暢氣に過ごされたのは、平生、修養の程も窺はれて、まことに頼母しい。行路の人は、君を識別せずして、尙書と呼び、ひどく恐れ入つたといふが、それも其筈、君の狀貌は、凜凜として千人に傑出して居るからである。しかし、柄に似合はず、君は骨の髓に透る程も詩酒を愛し、醉ひ潰れると、美人に介抱して貰はうと思つて居

る。予は、詩を作る毎に、人に對して、おのが肺肝を寫すを常とし、すでに、老年になつて、鬢鬚ともに白いことは、誰でも知つて居る。趙陳歐陽は、皆わが友であるのに、料らずも、君も亦た態態まはり路をして來訪されたのは、まことに辱い。その後、柳戒之も遣つて來つたから、今日、この席上、酒を縦にして、平生ひもじく過ごして居た予を煖めることに成つた。しかし、何分、田舍の事とて、酒も肴も甚だ貧弱で、座に侍する女までが、不景氣な顔をして、一向浮き立たず、ただ穎水の流清くして、且つ風光鮮美なるは、せめてものことである。やがて、一朝寂寞として、風雨の散ずるが如く、各〻東西に別れ去れば、誰がおのが影に對して、今宵の月と予とを思ひ出すであらうか。君は、何時官を罷め、片帆、江水を溯つて歸休されるか知らぬが、その時は、君の幽居に近き甘棠湖の水を變じて春酒となし、かの詩酒を愛する君を滿足させたいものである。

【餘論】乾隆御批には「情事曲折裁約、以て有韻の言に入る、徘徊俯仰、逸趣横生」といひ、査初白は「跌宕喜ぶべし」といひ、紀昀は「墨氣淋漓、一往酣暢」といつて居る。

以屏山贈歐陽叔弼

屏山を以て歐陽叔弼に贈る

（一）漫郎天骨淸。生與世俗異。　漫郎、天骨淸く、生まれて世俗と異なり。

學道新有得。爲貧聊復仕。　道を學んで、新に得るあり、貧の爲に、聊か復た仕ふ。

每于紅塵中。嘗起靑霞志。（二）　每に紅塵の中に于て、かつて起す靑霞の志。

（三）屏山輟贈子。莫遣汚簪珥。（四）　屏山、輟めて子に贈る、簪珥に汚さしむる莫れ。

寓目紫翠間。（五）安眠本非睡。　目を寓す紫翠の間、安眠、本と睡るに非ず。

夢中化爲鶴。飛入長松寺。（六）　夢中化して鶴とならば、飛んで入れよ長松の寺。

【字解】【一】漫郎　唐の元結が自ら號した。前に次二韻秦觀一、及び游二西山寺一の詩中に注して置いた。【二】靑霞志　世外に脫出せむとする志、江淹の恨賦に中散下レ獄、神氣激揚、鬱二靑霞之奇意一、入二修夜之不暘一とある。【三】屏山　題義の項に見ゆ。【四】簪珥　有官者の禮裝。簪は冠を止めるに用ふ、珥は耳の飾り。【五】紫翠　山色を云ふ、杜牧の詩に千峰横二紫翠一、雙岡見二闌干一とある。【六】長松寺　長松のある寺といふので、寺の名ではあるまい。

【題義】屏山は、山の形をした石で、硯屏として机上に置くもの。それを歐陽叔弼に贈るにつけて、併せて、この詩を示したのである。

【詩意】古しへの漫郎に比すべき君は、天成の骨相、極めて淸癯、生まれながらにして、世俗と異なつて居る。平生道を學んで、新に得るところがあるし、貧の爲に聊か出仕して居るので、毎每、紅塵の中に居ながら、靑霞の志を起すことがある。今、この屏山を取り外して、君に贈るが、決して、簪珥に汚されぬ樣にして貰ひたい。紫翠とまがふ其山の間に目を寓して、睡るともなく、うつらうつらと安眠して居たならば、隨分、快適な事であらう。そして、夢の中に、その身、化して鶴とならば、

長松の叢生する古寺に、遠く飛んで往くが善からう。

【餘論】 紀昀の評に「脱灑致あり、輕淺を嫌はず」とある。

新渡寺席上、次趙景貺・陳履常韻、送歐陽叔弼、比來諸君唱和、叔弼但袖手旁睨而已、臨別忽出一篇、頗有淵明風致、坐皆驚嘆

新渡寺席上、趙景貺・陳履常の韻に次して、歐陽叔弼を送る。比來諸君唱和し、叔弼は但だ手を袖にして旁睨せしのみ。別に臨み、忽ち一篇を出す。頗る淵明の風致あり、坐皆驚嘆す

（一）神屠不目全。（二）妙額惟妝半。　神屠は全を目せず、妙額は惟だ半を妝ふ。

（三）更刀乃族庖。（四）倚市必醜悍。　刀を更ふるは、乃ち族庖、市に倚るは必ず醜悍。

平生（五）魏公籌。忽斷（六）郢人墁。　平生魏公の籌、忽ち郢人の墁を斷る。

詩書亦何用。適道須此館。　詩書、亦た何の用ぞ、道に適くには須らく此に館すべし。

多言雖數窮。（七）微中或（八）排難。　多言、數ば窮すと雖も、微中、或は難を排す。

子詩如清風。（九）翏翏發將（一〇）旦。　子の詩は清風の如く、翏翏、發して將に旦ならむとす。

胡爲久閉匿。綺語眞自患。　胡すれぞ久しく閉匿、綺語、眞に自ら患ふ。

（一一）許時笑我癡。隔屋相詠嘆。　許時、わが癡を笑ふ、屋を隔てて相詠嘆す。

竟識（一二）彥道不。絶叫呼百萬。　竟に彥道を識るや不や、絶叫、百萬を呼ぶ。

清朝固多士。（一三）人門子皆冠。　清朝、もとより多士、人門子皆冠す。

莫言清潁水。從此隔（一四）河漢。　言ふ莫れ、清潁の水、これより、河漢を隔つと。

異時我獨來。得魚楊柳貫。　異時、われ獨り來る、魚を得ば、楊柳に貫かむ。

持歸不忍食。（一五）尺素解（一六）淒斷。　持ち歸つて食ふに忍びず、尺素、淒斷を解す。

中有清圓句。（一七）銅丸飛柘彈。　中に清圓の句あり、銅丸、柘彈に飛ぶ。

春愁結（一八）凌澌。正待（一九）一笑泮。　春愁、凌澌を結び、正に一笑して泮くるを待つ。

百篇儻寄我。（二〇）呻吟鄭人緩。　百篇、もし我に寄すれば、呻吟せむ鄭人の緩。

【字解】 【一】 神屠　屠牛の名人、莊子に「庖丁、文惠君の爲に牛を解く。刀を釋てて對へて曰く、臣の好むところの者は道なり、技に進む。はじめ、臣、牛を解くの時、見るところ、全牛に非ざるものなし、三年の後、未だ嘗て全牛を見ざるなり。今、臣、神を以て遇ふ、而して目を以て視ず」とある。【二】 妙額　南史后妃傳に「梁の元帝の徐妃、帝が一目を眇するを以て、帝が將に至らむとするを知る毎に、必ず半面の妝を爲して以て俟つ」とある。王次公の說に「意、唐の壽鍛、宏詞に應じて賦を爲り、止だ四韻、遂に白を曳いて去る、頃刻にして人口に播す、或は之を稱して、白頭花鈿滿面なるは、徐妃の半妝に若かずといひしに取る」とある。【三】 更刀乃族

庖　族庖は普通の庖人、莊子に「良庖は歲ごとに刀を更ふ、割くればなり、族庖は月ごとに刀を更ふ、折るればなり」とある。【四】倚市　市門に倚つて笑を賣る。【五】魏公鋒　晉書魏舒傳に「舒、鍾毓の長史となる、毓、每に參佐と射る。舒、常に爲に籌を畫するのみ、後朋人の足らざるに遇ひ、舒を以て數に滿たす、發して中らざるなし」とある。【六】郢人堊　前に次韻讓「杜詩」の詩中に注して置いた。郢人が塑像の鼻端に付いた汚點を巧に削り落せしこと。【七】微中　史記に「太史公曰く、天道恢恢、豈に大ならずや、談言微中、亦た以て紛を解くべし」とある。【八】排難　史記魯仲連傳に「人の爲に、患を排し、難を釋く」とあり、舊唐書盧藩傳に「難を排し、紛を解かむと欲す」とある。【九】翏翏　風聲を云ふ、莊子に「大塊の噫氣、その名を風となす、作れば萬竅怒號す、しかも獨りこの翏翏を聞かざるや」とある。【一〇】特且　後書李尋傳に「日は衆陽の長、人君の表なり、故に曰く、特に且ならむとすれば、淸風發し、羣陰伏す」とある。【一一】許時　いくばく時の意。【一二】彥道　袁彥道、博奕の名人、前に「會客有美堂」の詩中に注して置いた。【一三】人門　陳書に「高祖、蔡凝に謂つて曰く、われ義興の主壻錢肅を用ひて黃門郎と爲さむと欲す、卿の意何如。凝曰く、黃散の職、もと須らく人門美を兼ぬべし、惟だ陛下これを裁せよ」とある。【一四】河漢　銀河。【一五】尺素　手紙。【一六】淒斷　前に「泣頓起」の詩中に注して置いた、悽然たる斷腸の思。【一七】銅丸飛柘彈　柘の木で作つた弓で銅丸を飛ばす、西京雜記に「長安五陵の人、柘木を以て彈となし、眞珠を丸となし、以て鳥雀を彈す」とあり、何遜の輕薄篇に柘彈隋珠丸とあり、車敷の聽馬篇に「柘彈落金丸」とあり、白樂天の人貧鳥の詩に、主人憎燕鳥、命子削彈弓、弦鑛會稽竹、丸鑄荊山銅とある。【一八】結凌澌　氷の張ること。【一九】一笑泮　泮は解ける。【二〇】呻吟鄭人緩　莊子に「鄭人緩や、裘氏の地に呻吟し、祇だ三年にして、緩、儒となる」とある。呻吟は吟誦の意。

【題義】新渡寺に於ける送別の筵の席上、趙景貺・陳履常の韻に次して、歐陽叔弼の都に還るを送つた。近來、諸君は盛に唱和をして居るが、叔弼のみは、手を袖にして傍觀し、丸で詩も出來なく成つたかと疑はれた。しかし、別に臨んで、忽ち一首の詩を出して見せた處が、格別の出來で、餘程、陶淵明の風致がある處から、一座の人人は、皆驚嘆したといふので、この事から、構想の端緒を得たものと見える。續通鑑長編に「元祐七年、正月、右朝請郎歐陽棐、禮部員外郎となる」とあつて、この時、東坡と別れて汴京に歸つたものと見える。

【詩意】屠牛の名人は、目に全牛を見ず、美人の額は、半面を粧うただけで、殊に風情を覺えるので、矢鋒に刀を更へて新しくするのは、凡庸の庖人であるし、市門に倚つて笑を賣るものは、必ず悍悍しい醜婦である。魏舒は、平生、矢の勘定ばかりさせられて居たが、自然と射術の妙を覺えこみ、郢人が塑像の汚點を削るのに、少しも遲疑せずして、見事遣つて除けた樣にするのは、自然悟入したものと見える。詩書は、何の役に立つかといへば、大道に到達するには、是非とも、一たびは、此に宿つて行かねばならぬし、多言は、往往にして行き詰ることもあるが、これに反して、ひよつと中つて往往難を排することもある。つまり、詩は神悟に本づくべく、又必ずしも、多作を要しない。君の詩は、淸風の如く、翏翏として聲を爲し、夜あけの淸淸しき時に於て發する。如何なれば、近ごろ、久しく閉匿し、一首も作らずして居たのか。まことに、綺語に流れて、眞率の趣に遠きは、自ら愚とするところであつた。これまで鄰同士で、互に詠嘆の聲を聞きつつ、わが癡絕を笑ひしは、幾ばく時なりしか。すでに詩を作る上は、冒險的に大作を試みるも面白いので、たとへば、袁彥道の如き博奕の名人が百萬錢を張り、一かばちかといつて絕叫する樣なものである。今しも、太平の御世で、朝廷には、濟濟たる多士が居て、黃門郎の職に居る人人は、皆冠を正して出仕される。君も、京に歸れば、矢張、この官に復するのであらうが、一別音信なく、淸穎の水が、さながら河漢の如く、兩地全く隔絕するこ

との無い樣にして貰ひたい。他日、われ獨り此地に來り、魚を釣つたならば、柳の枝に鰓を貫いて持ち歸るが、到底、これを食ふに忍びず、やがて魚の腹の中からは、君の手紙が出て、わが侘しき思を慰めるであらう。又その手紙には、詩が書いてあつて、中にも、清超圓熟せる名句は、柘の木で造つた弓で銅丸を飛ばす如く、何等の支障もなく、まことに、自由自在であらう。但し、今しも、春愁消し難く、結んでは氷となる折から、その一笑して解けるのを待つて、上に言つた樣な事もあらうと豫想される。そこで、百篇の詩を寄せられたならば、予は、古しへの鄭國の緩といふ人の樣に、絶えず、それを吟誦して居るであらう。

【餘論】紀昀は「不目」全は姿を欠く」といひ「館の字、韻を趁ふ」といひ、はては「前半篇は牽掣して、自然ならず」といつたが、結末數句に就いては「數語、點綴して姿を生ず」といつて、聊か之を賞美して居る。

次韻趙景貺春思且懷吳越山水

趙景貺の春思に次韻し、且つ吳越の山水を懷ふ

歲華來無窮。老眼久已靜。　歲華、來つて窮まりなく、老眼、久しく已に靜なり。

春風如繫馬。未動意先騁。　春風は馬を繫ぐが如く、未だ動かずして、意、先づ騁す。

（一）西湖忽破碎。鳥落魚動鏡。　西湖忽ち破碎、鳥落ちて、魚、鏡を動かす。

禁城理枯瀆。（二）放閘起膠艇。（三）（四）　城を禁つて枯瀆を理め、閘を放つて膠艇を起す。

願君營此樂。官事何時竟。　願はくは、君、この樂を營めよ、官事、何の時か竟らむ。

思吳信偶然。出處付前定。　吳を思ふ、信に偶然、出處、前定に付す。

飄然不繫舟。乘此無盡興。　飄然たり繫がざるの舟、この盡くるなきの興に乘ず。

（五）醉翁行樂處。草木皆可敬。（六）　醉翁、行樂の處、草木皆敬すべし。

明朝游北渚。急掃黃葉徑。　明朝、北渚に游ばば、急に黃葉の徑を掃はむ。

白酒眞到齊。（七）紅裙已放鄭。（八）　白酒、眞に齊に到る、紅裙、すでに鄭を放つ。

【字解】〔一〕西湖忽破碎　湖水の氷が解けて波の騷ぎ立つな形容したものと見える。〔二〕枯瀆　涸れて居た溝渠。〔三〕放閘　閘は水門。〔四〕膠艇　沙泥にくッ付いて動かなく成つて居た小舟。〔五〕醉翁　歐陽公を云ふ。〔六〕草木皆可敬　詩經に、維桑與梓、必恭敬止とある。〔七〕眞到齊　齊は臍。〔八〕放鄭　鄭聲を放つといふ意。

【題義】この詩は、趙景貺の春思と題する詩に次韻し、且つ吳越の山水を懷つて作つたのである。

【詩意】年月の來ることは、窮まりなけれども、われは、久しい間、老眼靜にして、浮かれ立つ樣なことは無い。春風は、繫いだ馬の如く、まだ動かぬ中から、その心意は、すでに遠くに馳せる。春が漸く

催しかかると、西湖の氷も破砕して波だち、鳥は湖汀に下り、魚は鏡面を動かす樣である。われは、杭州に在任中、州城を築つて、埋れたる溝渠を修理し、水門から水を湖中に入れ、泥沙に膠せる小舟を起して動ける樣にした。君も、工事を管督されたから、官事は、何時終るか分からぬが、この樂を營むが善からう。わが吳地を思ふは、まことに偶然の事で、出處は、すべて前以て定まつて居るから、くよくよ思ふにも及ばず、身は飄然として繋がざる舟の如く、そして、この盡きざる興に乘じて嬉游するのは、まことに、愉快なことである。この潁州は、むかし、歐陽公の行樂された處で、遺愛の草木は、皆敬すべきものである。明日、潁水の北渚に游んだならば、急いで、黄葉の散り鋪く小徑を掃除し、當年の遺蹟を弔ふことに致さう。白酒は十分に飲んで臍に至るとも、侍坐の女どもには鄭聲を禁じ、いささか、公の爲に喪に服して居る心持を忘れぬ積りである。

【餘論】乾隆御批には「行樂の處、敬すべきに至る、ここに於て、賢者の澤長きを見る。これ乃ち詩の名教に關するあるもの。前路名句紛沓、尤も是れ力を竊めて新を追ふ」とあるが、紀昀は「惜むべし、結、語を成さず」といつて居る。

次韻陳履常張公龍潭

陳履常の張公龍潭に次韻す

(一)明經(二)宣城宰。家此百尺瀾。　明經、宣城の宰、この百尺の瀾に家す。

(三)鄭公(四)不量力。敢以非意干。　鄭公、力を量らず、敢て非意の干を以てす。

(五)元黃(六)雜兩戰。(七)絳青表雙蟠。　元黃、兩戰雜はり、絳青、雙蟠を表す。

烈氣斃強敵。仁心惻飢寒。　烈氣、強敵を斃し、仁心、飢寒を惻む。

精誠禱必赴。(八)苟簡求亦難。　精誠、禱らば必ず赴き、苟簡、求むる亦た難し。

蕭條(九)麥麰枯。浩蕩日月寬。　蕭條、麥麰枯れ、浩蕩、日月寬なり。

念子無吏責。十日勤征鞍。　念ふ、子が吏責なく、十日征鞍を勤めしを。

春蔬得雨雪。少助(一〇)先生槃。　春蔬、雨雪を得、少しく助く先生の槃。

龍不憚往來。而我獨宴安。　龍は往來を憚らず、而して、我、ひとり宴安。

(一一)閉閤默自責。(一二)神交清夜闌。　閤を閉ぢ、默して自ら責む、神交、清夜闌なり。

【字解】【一】明經　唐代科目の一。【二】宣城宰　前にも記して置いたが、張公、諱は路斯、仕へて宣城令となつた。【三】鄭公　名は鮮遠、その詳は下に見ゆ。【四】不量力　左傳の成語を翻用す、隱公十一年に「息侯、鄭を伐つ。鄭伯、ともに戰つて息破る。君子、息の將に亡びむとするを知るなり、德を度らず、力を量らず」とある。【五】元黃　元は玄、易に「龍、野に戰ふ、その血玄黃」とある。【六】雜兩戰　二度までも戰つて居る間に玄黃の血が入りまじつたといふ義。【七】絳青表雙蟠　東坡の自註に「事は龍公碑に見ゆ」とあつて、趙耕の碑文に「公曰く、吾は龍なり、蓼人鄭鮮遠も亦た龍なり、吾が池に據る。吾、屢ば戰つて勝たず。明日、決を取り、九子をして、弓を挾んで之を射せしむべし、鬣に繋ぐに青綃を以てするものは鄭なり、絳綃は吾なり、と。子、遂に射て青綃に中つ、鄭怒

り、東北に走り、合肥の西山に投じて以て死す。これより、公、九子と倶に復た龍となる」とある。【八】栫觸　手輕に濟ますこと。【九】事魅　魅は大牽。【一〇】先生槃　槃は盤、卽ち皿。【一一】閉閣默自責　漢書韓延壽傳に「左馮翊に守たり。民、昆弟相訟ふるものあり、延壽、大に之を傷んで曰く、幸に位に備はつて、郡の表率となるを得、敎化を宣明する能はず、民をして骨肉爭訟するに至らしむ、幷、馮翊に在り、と。因つて、入つて傳舍に臥し、閤を閉ぢて過を思ふ」とあり、後漢書吳祐傳に「酒泉の太守たり、民、爭つて訟訴するものあらば、輒ち閤を閉ぢて自ら責め、然る後、その訟を斷ず」とある。【一二】神交　前に次韻王鞏の詩中に注して置いた。元白二人、神交千里、符契を合するが如しと稱せられて居た。

【題義】張公龍潭は、前に見えた張龍公、卽ち唐の張路斯の化して龍と成つたのが住んで居る深潭で、穎州志には「張路斯蛻骨の處、龍池と名づく、穎上縣治の西南四十里淮潤郡に在り」と見ゆ。この詩は、陳履常が張公龍潭の詩を作つたから、それに次韻したので、陳の原作は、後山集に載せ、卽ち左の通りである。

清淵下無レ際。落日廻二風瀾一。凜然毛髮直。敢以二笑語一干。陂陀百尺臺。葱翠萬木蟠。鷙颺振二積葉一。淸霜作二朝寒一。水旱或有レ差。精觸神共難。魚龍同一波。信有二水府寬一。向來三日雨。賴二子一擄レ鞍。何以報二嘉惠一。寒瓜薦二金槃一。萬口待二一飽一。歸臥神亦安。猶須二雪三尺一。盛意莫レ得レ闌。

そして、東坡の和作は、折角ながら、原作に多く遜ると稱せられて居る。

【詩意】明經の出身を以て宣城の令となつた張路斯は、死後龍となつて、この百尺波瀾の底に住んで居る。ここに鄭祥遠といふ人も、亦た龍となつて、張公の潭に侵入したのは、おのが力を量らずして、非望を起し、そして、誠意を以て要求したのでもなく、力に任かせて之を取らうとしたのである。そこで、兩度までも、戰爭が起り、玄黃の色を爲せる血は、兩陣の間に入りみだれて注ぎ、絳青二色の綃は、雙方の表號になつて居た。しかし、張公英烈の氣は、遂に强敵を斃し、そして、仁心は民の飢寒を憐んで、風雨時を以て至る樣にして具れる。精誠を盡して禱ると、屹度、神靈が來格するが、かりそめな事で求めた處で、何の效果もない。今しも、四野蕭條として、小麥大麥は枯れかかり、冬の空は、浩蕩として、日月の運行も廣くゆるやかなるを覺ゆる折から、君は、敎授で、ひまである處から、十日も續けて、馬に乘つて、わが爲に、せッせと雨乞に出かけて具れたお蔭で、雨や雪が降つて、春の蔬菜も、生氣を回復し、少しく、わが食膳を賑はす樣になつた。龍は、もとより往來を憚らないのに、われのみ獨り宴安に耽つて居たのは、まことに相濟まぬ始末、顧みれば、空おそろしい。そこで、閤に立て籠り、默然として、自ら我が身を責めて居るが、君との神交は、愈よ深く、この淸夜の闌なるに際して、まことに相思の情に堪へられぬ。

小二飲西湖一懷二歐陽叔弼兄弟一贈二趙景貺陳履常一

西湖に小飲して、歐陽叔弼兄弟を懷ひ、趙景貺・陳履常に贈る

歲暮自急景。我閒方緩觴。
歲暮、自ら急景、我、閒にして方に觴を緩くす。

歡飮西湖晚。步轉北渚長。
歡飮す西湖の晚、步して轉すれば、北渚長し。

地坐略少長。意行無潤岡。　地に坐して略ぼ少長、意行いて潤岡なし。
久知薺麥青。稍喜楡柳黃。　久しく知る、薺麥の青きを、稍や喜ぶ、楡柳の黃なるを。
(三)盎盎春欲動。(四)瀲瀲夜未央。　盎盎として、春、動かむと欲す、瀲瀲として、夜、未だ央ならず。
水天鷗鷺靜。月露松檜香。　水天、鷗鷺靜に、月露、松檜香ばし。
撫景方(五)晼晚。懷人重淒涼。　景を撫して方に晼晚、人を懷うて重ねて淒涼。
豈無(六)一老兵。坐念兩歐陽。　豈に一老兵なからむや、坐に念ふ兩歐陽。
我意正麋鹿。君材亦(七)圭璋。　わが意、正に麋鹿、君が材、亦た圭璋。
此會不可再。此歡不可忘。　この會、再びすべからず、この歡、忘るべからず。

【字解】〔一〕急景　日の短いこと、杜甫の詩に「歲暮陰陽催急景」とある。〔二〕北渚　宋名臣言行錄に「晏元獻、潁州に守たり、室を北渚に築き、以て西湖に臨み、清漣閣と名づく」とある。〔三〕盎盎　氣の滿ちたる貌。〔四〕瀲瀲　波立つ貌。〔五〕晼晚　文選註に「日暮なり」とある。〔六〕一老兵　晉書謝奕傳に「桓溫、奕を辟して司馬たらしむ、かつて、溫に逼つて飮む、溫、走つて之を避く。奕、遂に溫の一兵帥を引いて、ともに飮んで曰く、一老兵を失ひ、一老兵を得たり、亦た何の怪むところぞ」とある。〔七〕圭璋　詩經に豈弟君子、如圭如璋とある。

【題義】集本には、竹間亭小酌に作つてあるといふことが、潼川の黃揆が刻した東坡の眞跡には、小飮西湖、懷歐陽叔弼兄弟、贈趙德麟・陳履常とあつて、これは、後日改めて書せしものなるべく、そして、この頃、趙景貺が字を德麟と改めたことが分かる。

【詩意】年の暮になると、日が短くて、物とはなしに忙しいが、われ獨り閒なる儘、ここで、緩緩と杯を傾けて居る。夕暮、西湖の上に於て歡飮し、歩を轉すれば、北渚は長く連つて居る。地に坐して、少長略ぼ咸な集まり、心の儘に散歩して、潤岡の區別もない。薺や麥の青いことは、久しい前から知つて居たが、楡や柳の芽の黃ばみかかりしは、殊に喜ぶべく、盎盎として、春氣、將に動かむとし、湖波瀲瀲として、夜はまだ遲くない。水天空濶にして、鷗鷺、いとも靜に、月露光を爭うて、松檜は、自然香ばしきを覺える。さきには、景色を眺めて、日の暮れかかるを惜んだが、人を懷ふと、愈よ淒涼の想に堪へぬ。もとより、酒の相手とする老兵は無いでもないが、わが兩歐陽を思ふを禁せず、われは、やがて、山野の麋鹿たらむことを欲すれども、二君の材は、圭璋の如く、豈悌の君子は大に用ひられることであらう。さはれ、今日の會は、再びすべからず、そして、今日の歡は忘るべからず、そこで、この詩を作つて、取り敢へず、趙陳二君に贈る次第である。

【餘論】乾隆御批には「寫景、駢語を以て情に入る、劉勰の謂はゆる儷采百字之偶なるもの、移して以て此を評すべし」とある。紀昀は「地坐の十字、寫し出して蕭散」といひ「楡、はじめ生じて黃ならず、或は是れ楊の字の訛」といひ「趙陳を入る、太だ草草、亦た太だ突兀」といつて居る。

蠟梅一首、贈趙景貺　　蠟梅一首、趙景貺に贈る

天工點(一)酥作梅花。　天工、酥を點じて梅花を作す、
此有蠟梅禪老家。　ここに蠟梅あり、禪老の家。
蜜蜂采花作黃蠟。　蜜蜂、花を采つて黃蠟と作す、
取蠟爲花亦其物。　蠟を取つて花と爲す、亦た其物。
天工變化誰得知。　天工變化、誰か知るを得む、
我亦兒戲作小詩。　我亦た、兒戲、小詩を作る。
君不見萬松(二)嶺上　君見ずや、萬松嶺上黃千葉、
黃千葉。
玉蕊檀(三)心兩奇絕。　玉蕊檀心、兩つながら奇絕。
醉中不覺度千山。　醉中覺えず千山を度る、
夜聞梅香失醉眠。　夜、梅香を聞いて、醉眠を失ふ。
歸來却夢尋花去。　歸り來り、却つて夢む花を尋ねて去り、
夢裏花仙覓奇句。　夢裏の花仙、奇句を覓むるを。

【字解】【一】點酥　酥は牛酪、即ちバタ。【二】萬松嶺　前に見ゆ、杭州圖經に「錢塘舊治の正南に在り、縣に至る一十里」と見ゆ。【三】檀心　花の心、即ち子房を云ふ。【四】適越　この時、東坡は會稽に移りたいと願ひ出でしが故に云ふ。【五】衣鉢　前に永=顧毛濟惠=雨の詩中に注して置いた。僧家で傳法の證驗とするもの。

此間風物屬詩人。　この間の風物、詩人に屬す、
我老不飮當付君。　われ老いて飮まず、當に君に付すべし。
君行適吳我適(四)越。　君が行、吳に適き、我は越に適く、
笑指西湖作衣(五)鉢。　笑うて、西湖を指して衣鉢となす。

【題義】說明に及ばぬ。方回の瀛奎律髓註に「これより先、未だ蠟梅の號あらず。元祐中、蘇黃、朝に在り、はじめて、名を定む。山谷に蠟梅の詩あり、自ら詩後に書して云ふ、京洛の間、一種の花あり、香氣、梅に似たり、亦た五出、女工撚蠟、成すところに類す、京洛の人、因つて蠟梅といふ、本身と葉と、乃ち蒴藋に類す」とあり、本草に「蠟梅花に三種あり、檀香梅を以て第一となす、花密にして香濃かに、色深黃、宋時、皆黃梅花と稱す」とある。

【詩意】造化の工は、純白なるバタを點じて梅花を造り出したが、ここに蠟梅といふ一種があつて、現に禪老の庵に在る。蜜蜂は、花から甘い液を采り、それで黃蠟が出來るが、その蠟を取つて花としたのが、即ち蠟梅である。造化の變化は、誰も窮め知ることが出來ず、われは、唯だ兒戲を爲し、小詩を作つて、これを詠ずるだけである。萬松嶺の上には、八重の蠟梅があつて、その蕊も、子房も、兩つながら奇絕で、まことに著名である。予は、醉中に千山を度るを覺えず、夜、その蠟梅の香を嗅ぎ、そして醉眠を醒ましたことがあつた。やがて歸つて來ると、又夢に花を尋ねて去り、夢中に逢つ

た花神は、予に向つて、奇句を求めた。この邊の風景は、もと詩人に屬すべく、予は、年を取つて酒も飮まぬから、これを擧げて、君に交付しよう。これより、君は吳に之き、予は越に之く樣な事に成るかも知れぬが、何といつても、西湖の邊なる萬松嶺の蠟梅こそ、その花の眞精神を保有して居るもので、長しへに忘れ兼ねる。

【餘論】紀昀は「疵累太だ多し」といひ「次句、語を成さず、三四迂遠不情、反つて稚句を成す」といつて、ひどく惡口を敲いて居る。

送王竦朝散赴闕

王竦朝散の闕に赴くを送る

(一)我家衡山公。清而畏人知。　我が家の衡山公、淸にして人の知るを畏る。
臧否不出口。默識如蓍龜。　臧否、口に出です、默識、蓍龜の如し。
擢子拱把中。(二)云有驥騄姿。(三)　子を擢んづ拱把の中、云ふ驥騄の姿ありと。
胡爲三十載。尙作窮苦詞。　胡すれぞ三十載、なほ窮苦の詞を作る。
(四)丈人不妄語。未效此何疑。　丈人、妄語せず、未だ效はざるも、此に何ぞ疑はむ。
(五)朅來淸潁上。淚溼中郎(六)詩。　朅來、淸潁の上、淚は溼ふ中郎の詩。
怪我一年長。而作十年衰。　怪む我が一年の長、しかも、十年の衰を作すを。
同時幾人在。豈敢怨白髭。　同時、幾人か在る、豈に敢て白髭を怨まむや。
願君指松柏。永與霜雪期。　願はくは、君、松柏を指して、永く霜雪と期せよ。

【字解】【一】我家衡山公　東坡の自註に「伯父、衡山たるの日、君と相知り、送行の詩あり」と記し、欒城集の伯父墓表に「公、名は渙、進士に擧げられ、眉州縣より移つて衡州耒陽に知たり」とある。東坡の祖父は名を序といひ、三子あつて、長を澹、次を渙、次を洵といひ、洵は卽ち東坡の父、その二兄の中、澹は仕へずして早く死んだから、東坡は、渙を伯父と呼んで居たと見える。【二】拱把　若い木、孟子の註に「兩手を拱といひ、一手を把といふ」とあつて、餘り太からぬを云ふ。【三】驥騄　ともに名馬の稱。【四】丈人　王竦を尊稱して云ふ。【五】朅來　もと楚辭に見えて、樣樣の解釋があるが、極めて輕い意義の時は、ここにといふ位のこと。【六】中郎　伯父を云ふ、晉書謝道韞傳に「一門の叔父は、阿大中郎あり」と見ゆ。

【題義】王竦の字、竝に閱歷等は不詳、職官分紀に「寄祿文散官に朝散大夫・朝散郎あり」といひ、梁谿漫志に「六曹郎中中行を朝散大夫となし、員外郎中行及び起居舍人を朝散郎となす」とあつて、禁中に奉仕する閑職と見える。この詩は、朝散郎の王竦の上京するを送つて作つたのである。

【詩意】衡山耒陽の知縣たりし我が伯父の蘇渙といふ人は、淸高にして、人に知られむことを畏れ、そして、善いとか惡いとかいふことは、決して口より出さざれども、事物の成り行きを默識して、豫想の誤らざることは、さながら蓍龜と同じであつた。わが伯父は、君を稠人中より拔擢し、天晴、名馬の相があるといつて引立てたが、いかなれば、三十年の久しきを經、碌碌出世もせず、相變らず、

窮苦の文詞を作られるのか。丈人は、決して妄語せず、この事に就いて、自分は、また眞似をしないが、いかにも尤も至極なことと思つて居る。ここに、淸穎の邊に居て、わが伯父が君を送る爲に作つた詩を見ると、萬感愴然として、覺えず淚が零れる。君は、予に比して、唯だ一年だけ長じて居られるが、その容貌を見ると、十歲も老けて見える。さはれ、同時の人は、幾許も殘つて居らないのに、君ひとり健在なるは、まことに喜ぶべく、決して、白鬚を怨むにも及ばない。願はくは、君よ、松柏を指して、これに類る樣にと念じ、長しへに霜雪と相抑して、その高節を變せぬ樣に致されよ。

【餘論】紀昀は撮子拱把中の二句を許して「忽ち木、忽ち馬、用事夾雜」といつたが、まさしく、その病に中つて居る。

次韻致政張朝奉仍招晚飲

致政張朝奉に次韻し、仍つて晚飲に招く

(一)掃白非黃精。輕身豈(二)胡麻。　白を掃ふは黃精に非ず、身を輕くするは豈に胡麻ならむや。
怪君(三)仁而壽。未覺生有涯。　怪む、君が仁にして壽、未だ覺えず、生に涯あるを。
曾經(四)丹化米。親授(五)棗如瓜。　かつて經て、丹、米に化す、親ら授けて、棗、瓜の如し。
雲蒸(六)作霧楷。火滅(七)喫雨巴。　雲は蒸す、霧を作すの楷、火は滅す、雨を喫くの巴。
自此養(八)鉛鼎。無窮走(九)河車。　これより、鉛鼎を養ひ、無窮、河車を走らす。
至今(一〇)許玉斧。猶事(一一)蕚綠華。　今に至つて、許玉斧、猶は事ふ蕚綠華。
我本(一二)三生人。疇昔(一三)一念差。　われ本と三生の人、疇昔、一念差ふ。
前生或(一四)草聖。(一五)習氣餘(一六)驚蛇。　前生、或は草聖、習氣、驚蛇を餘す。
儒臞謝(一七)赤松。(一八)佛縛慚(一九)丹霞。　儒は臞せて赤松に謝し、佛は縛せられて丹霞に慚づ。
時時一篇出。擾擾四座譁。　時時、一篇出づれば、擾擾として、四座譁し。
淸詩得可驚。信美辭多夸。　淸詩、得て驚くべし、信に美にして、辭、多くは夸る。
回車入官府。(二〇)治具隨貧家。　車を回して官府に入り、治具、貧家に隨ふ。
(二一)萍虀與豆粥。亦可成咄嗟。　萍虀と豆粥と、亦た咄嗟を成すべし。

【字解】〔一〕掃白非黃精　前に李杞見和の詩中に注して置いたが、杜甫の詩に掃除白髮黃精在、君看他時氷雪容とあつて、掃白は、白髮を根絕すること、黃精は寒精飯と同じだともいふが、ここでは山芋の類。博物志に「天老、黃帝に謂つて曰く、太陽の草、黃精と名づく、これを食へば以て長生すべし。太陰の草、鉤吻と名づく、これを食へば、口に入つて立どころに死す」とある。〔二〕胡麻　本草に「狀、狗蝨に似て璽方、久しく服すれば、身を輕くして老いず」とあり、仙家に於て胡麻飯を食することは、續齊諧記・原仙記等に見えて居る。〔三〕仁而壽　論語の成句。〔四〕丹化米　神仙傳に「麻姑、蔡經の家に至る、時に經の弟の婦、新に產す、少許の米を求め、これを擲つて地に擲し、米を以て其穢を袪るといふなり、その米を視れば、皆丹砂を爲す」とある。丹、米を化すと訓し、つまり米が化して丹となつたといふ意。〔五〕棗如瓜　前に送徐大正の詩中に注して置いた。〔六〕作霧楷　後漢書に「張楷、性、道

術を好み、能く五里霧を作す。時に關西の人裴優も亦た能く三里を爲す、自ら以爲へらく、楷に如かず」とある。【七】噀雨巴　後漢書欒巴傳の註に「尙書となる、正朝大會、巴、ひとり後れて到り、又酒を飲み、西南に之を噀く。有司、巴の不敬を奏す。詔して巴に問ふ。巴謝して曰く、臣の本縣成都、火を失す、故に酒に因つて雨となし、以て火を滅すと。詔して成都に問ふ、成都答へて曰く、正旦火を失す、雨あり、東北より來り、火、乃ち息ゆ、雨、皆酒臭」とある。【八】鉛鼎　王註に「道家の修煉、鉛汞の鼎あり」といひ、仙傳拾遺に「劉無名、眞人あつて、示すに陽煉陰鼎柔金煉化水玉の方、伏汞錬鉛凝體を成すの訣を以てす。鉛を以て君となし、汞を以て臣となし、八石を使となし、黃芽を田となす」とある。【九】河車　仙藥、前に王頤の詩註に見え、又陰符經の註に「河車は伏汞なり」とある。【一〇】許玉斧　王註に「許玉斧は許長史の子許掾なり、羣仙、その家に降る、事、眞誥に出づ」とある。【一一】萼綠華　王註に「女仙萼綠華あり、九疑山中の羅郁なり」とあり、眞誥に「萼綠華は南山の女子、顏色絕整、晉の昇平三年を以て、羊權の家に降る」とある。東坡の自註に「君、かつて永州の何仙姑に見え、棗を得て之を餌す、人、その此を以て壽なるを疑ふなり、故に丹化米、萼綠華の句あり、皆女仙の事」と記してある。【一二】三生　三度生まれ換はる。樹萱錄に「一省郎あり、華嶽寺に游び、夢に碧巖の下に至る。一老僧の前、爐中香煙、極めて微。僧云ふ、これは是れ檀越の結願、香煙存して、檀越すでに三生。第一生は玄宗の時、劍南安撫巡官となる。第二生は憲宗の時、西蜀書記となる。第三生は、卽ち今生なりと。省郎、方に悟る」とある。【一三】一念　前に芙蓉城の詩中に注して置いた。【一四】草聖　唐の張旭、前に授經臺の詩中に注して置いた。【一五】習氣　前に再和「潛師」の詩に注して置いた。【一六】驚蛇　墨藪に朱異の書を評して「一放縱を作す、驚蛇の草に入るが如し」といひ、法書苑に釋亞栖が自ら其草書に題する語を記して「飛鳥林を出で、驚蛇草に入る」とある。【一七】赤松　仙人の名、王註に「赤松子は黃初平なり、盧甕・張良、これに從つて游ばむことを願ひしもの、事は葛洪の神仙傳に見ゆ」とある。【一八】佛縛　維摩經に「禪味に貪著するは、これ菩薩縛」とある。【一九】丹霞　前に送「錢承制」の詩中に注して置いたが、傳燈錄に「丹霞天然禪師、慧林寺に於て、天の大に寒きに遇ふ。師、木佛を取つて之を焚く。人、或は之を譏る。師曰く、吾燒いて舍利を取る。人曰く、木頭に何かある。師曰く、若し爾らば、何ぞ我を責めむや」とある。【二〇】治具　食事の支度をする。漢書に「灌夫、田蚡に謂ふ、將軍、幸に魏其を過ぐるを許し、魏其夫妻、具を治め、今に至つて未だ敢て嘗て食はず」とある。【二一】菲虀　水草のひたし物。

【題義】致政は、官を辭して隱居したこと。朝奉は朝奉郎の略。張氏の名字閲歴等不詳。この詩は、新に官を罷めて歸里せし朝奉郎張某の詩に次韻し、仍つて、これを招いて晩に會飲したといふのである。

【詩意】白髮を根絕するは、黃精に非ず。身を輕くするには胡麻では不可ない。如何して君は仁を行うて壽長く、未だ此生に限りあるを覺らぬ樣であるか。君は仙術を好まれるとのことで、ある時は、米を化して仙丹とならしめ、手づから人に與へる棗は、その大さ瓜の如く、雲を蒸すは、かの五里霧を起す張楷の如く、火を消すは、酒の雨を遠くに噴いた欒巴の樣である。これより、鉛汞の丹鼎に養はれ、河車と名づくる藥を服して、その齡、限りなく、今に至るまで、古しへの許玉斧の如く、そして相變らす、萼綠華の如き仙女に奉仕して居られる。われは、前度一念の違ふに因つて、三度も生まれ變つた者で、前生は、草書の名人であつたと見え、その餘習として、字を書けば、驚蛇、草を出づるが如くである。儒者の身は瘦せて、赤松子に從つて仙を學ぶに堪へず、禪味を貪ることは、佛に縛された樣で、かの丹霞禪師の濶達なるに及ばざるを愧づる外はない。時時、一篇の詩を出して見せると、四座の人は、擾擾として之を褒め囃す、なる程、詩句の淸絕なるは、人を驚かすことが出來、信に美なれども、その文句には誇張が多い。今でも車を回して官府に出仕するが、御馳走するといへば、貧家にでも出かける。もとより、足らぬ勝であるが、水草の虀や豆の飯位ならば、咄嗟の間に辨ずることが出來るから、どうか、その內に來訪して貰ひたい。

【餘論】紀昀は、起首を評して「牽强、句法を成さず」といつて居る。

閻立本職貢圖

閻立本の職貢圖

貞觀之德來萬邦。　貞觀の德、萬邦を來らしめ、
浩如滄海吞河江。　浩として、滄海の河江を吞むが如し。
音容傖獰服奇厖。　音容傖獰、服奇厖、
橫絕嶺海逾濤瀧。　嶺海を橫絕して濤瀧を逾ゆ。
珍禽瑰產爭牽扛。　珍禽瑰產、爭つて牽扛、
名王解辮却蓋幢。　名王、辮を解いて、蓋幢を却く。
粉本遺墨開明窗。　粉本遺墨、明窗を開く、
我喟而作心未降。　我喟して作ち、心未だ降らず。
魏徵封倫恨不雙。　魏徵封倫、恨むらくは雙ならず。

【字解】【一】貞觀　唐の太宗の年號。【二】傖獰　野卑にして獰惡なること。【三】奇厖　杜預の左傳註に「厖は雜色」とある。【四】濤瀧　瀧は川の早瀨。【五】瑰產　瑰奇なる物產。【六】牽扛　二字ともに引く。【七】名王　蠻夷の君長。【八】解辮　辮は辮髮。【九】蓋幢　天蓋と車の幌。【一〇】粉本　下畫、韻語陽秋に「職貢圖は、乃ち閻立本の畫くところ」とあるが、朱景元の畫錄には「その弟立德の作るところ、立本畫くところの諸國王は粉本のみ」とあつて、東坡も矢張同じ意見であつたと見える。【一一】喟而作　喟然として起つ。【一二】心未降　心未だ平かならず。【一三】魏徵封倫　封德彝、名は倫。唐書魏徵傳に「帝、かつて歎じて曰く、今、大亂の後、其れ治め難きか。徵曰く、大亂の治め易きは、飢人の食し易きに譬ふるなり。封德彝曰く、然らず。秦は法律に任じ、漢は霸道を雜ふ。徵は書生、虛論を好み、徒に國家を亂す、聽くべからず。徵曰く、五帝三王、民を易へずして敎ふ、と。帝、これを納れて疑はず。ここに至つて、天下、大に治まり、蠻夷の君長、衣冠を襲ひ、刀を帶びて宿衞し、東は海に瀕り、南は嶺を踰え、戸關、閉ぢず、行旅、糧を齎さずして給を道に取る。帝曰く、仁義を行うて、すでに效あり、惜むらくは、封德彝をして之を見せしめず」とある。

【題義】唐名畫錄に「閻立本は、太宗の朝、位、宰相に居り、兄立德と名を齊しうす。一日、太宗、元武湖に幸して鸂鶒を見、立本を召して之を圖せしむ。左右誤つて畫師に宣すといふ。立本、大に之を恥ぢ、遂に筆を絕ち、子弟を戒めて畫を學ぶことなからしむ」とあり、容齋隨筆に「汲冢周書七十篇、載するところの車物、實に過ぐとなす。王會篇、皆大に諸侯及び四夷を會するの事、紀するところの四夷の國名、頗る古奧、獸畜亦た奇崛。唐の太宗の時、遠方の諸國、來つて朝貢するもの、甚だ衆く、服裝詭異、顏師古、圖して以て後に示さむことを請ふ」とあつて、それが卽ち職貢圖である。學齋佔筆には、譚賓錄及び唐書に職貢の名なく、職貢圖は梁の蕭繹の作、王會及び西域圖は、閻立本の作だ、といひ、この詩題は、誤つて居るといつて居るが、むかしから、毎毎さう云つて居るので、東坡は、蓋し其舊に依つたのであらう。

【詩意】貞觀年中、太宗の德化は、萬邦をして擧つて來朝せしめ、その夥しいことは、滄海が江河を吞むが如くであつた。その來朝せし四夷の人人、音容は野卑獰猛にして、衣服は樣式も珍らしく、樣樣の色彩を雜へて居たが、南は嶺海を橫絕し、大波逆まく早瀨を踰えて、態態北上したのである。それから、珍らしい鳥だの、瑰奇なる物產だのを、爭つて引き來り、その君長は、辮髮を解きほごし、天蓋車幌を取り除けて居た。その蠻夷來朝の有樣を畫き出した閻立本の遺墨たる粉本が殘つて居て、

今明窓の下に於て展觀すると、喟然として起ち、心なほ平かならざるを免れぬ。そは他の故あるに非す、魏徵・封德彝の如き名臣が、相竝んで、この世に生まれて明主を輔佐することは、滅多に無いからである。

【餘論】紀昀は「節短くして奇氣勃發、崚嶒千仞の勢あり」といつて居る。

次韻王滁州見寄

王滁州の寄せらるるに次韻す

斯人何似似春雨。　この人、何に似たる、春雨に似たり、
歌舞農夫怨(一)行路。　歌舞の農夫は行路を怨む。
君看永叔(二)與元之(三)。　君看よ、永叔と元之と、
坎軻(四)一生遭口語。　坎軻一生、口語に遭ふ。
兩翁當年鬢未絲。　兩翁、當年、鬢、未だ絲ならず、
玉堂揮翰手如飛。　玉堂、翰を揮つて、手、飛ぶが如し。
教得滁人解吟咏。　滁人に教へ得て吟咏を解す、
至今里巷嘲輕肥(五)。　今に至つて、里巷、輕肥を嘲る。
君家聯翩(六)盡卿相。　君の家、聯翩、盡く卿相、
獨來坐嘯溪山上。　獨り來つて坐嘯す溪山の上。
笑捐浮利一雞肋(七)。　笑うて浮利を捐つ一雞肋、
多取清名幾熊掌(八)。　多く清名を取る幾熊掌。
丈夫自重貴難售。　丈夫、自重、售れ難きを貴ぶ、
兩翁今與青山久。　兩翁、今、青山と久し。
後來太守更風流。　後來、太守、更に風流、
要伴前人作詩瘦。　前人を伴うて詩瘦を作すを要す。
我倦承明(九)苦求出。　われ承明に倦んで、苦に出づるを求め、
到處遺蹤尋六一(一〇)。　到る處、遺蹤、六一を尋ぬ。
憑君試與問瑯琊(一一)。　君に憑つて試に與に瑯琊を問ふ、
許我來游莫難色。　我が來游を許して、難色なし。

【字解】【一】怨行路　柯其譜の說に「唐の太宗、許敬宗に謂つて曰く、朕、諸卿中、惟だ卿最も賢なるを觀る、人の卿の過を言ふものあるは何ぞや。敬宗對へて曰く、春雨膏の如く、農夫は、その潤澤を喜び、行人は、その泥濘を惡む」とある。【二】永叔　歐陽修の字。【三】元之　王禹偁の字。二人ともに左遷せられて滁州に知となつた。宋史の本傳に「禹偁、鉅野の人、進士に第し、左司諫知制誥を以て、後に翰林學士となる。孝章皇后崩ず、禹偁言ふ、后、かつて天下に母儀たり、當に舊禮を用ふべし、と。訕謗を以て、貶められて滁州に知たり。後移つて黃州に守として卒す、年四十八」とある。【四】坎軻　前に桐中大雪、及び次韻王定國馬上の詩中に注して置いた。【五】輕肥　肥馬輕裘、論語に見ゆ、又杜甫の詩に同學少年多不賤、五陵衣馬自輕肥とある。【六】聯翩　前に數ば見ゆ、打續く貌。【七】雞肋　前に子由爲郡寮所招の詩中に注して置いた。【八】熊掌　孟子に見え「魚も我が欲するところ、熊掌も我が欲するところ」とある。【九】承明　宮中に奉仕すること、漢書に嚴助が會稽太守となりし時、これに賜はりし書を載せて「君、承明の廬を出で、侍從の事を勞し、故土を懷うて、出でて郡吏となる」とある。【一〇】六一　歐陽修の別號。醉翁亭記・豐樂亭記・菱溪石記及び曾南豐が醒心亭を記せしは、皆その遺蹟である。【一一】瑯琊　滁州の山名、歐陽修の醉翁亭記に「滁

を環つて皆山なり、その西南の諸峰、林壑最も美、これを望めば蔚然として深秀なるは瑯琊なり」とあり、太平寰宇記に「瑯琊山は、清流縣の西南十二里に在り」と見ゆ。

【題義】　王滁州は、滁州の太守王詔で、宋史に「詔、字は景獻、蔭を用つて官に補せらる。崇寧中、大理卿より司農に徙る。御史、滁に在るの日、蘇軾に請ひて醉翁亭記を書せしめしことを論じ、罷めて崇福宮に主とし、旋つて、汝州に知とし、直祕閣に除す。言者、復た滁州の事を執して、罷めて去る。後、延康殿學士を以て、提擧上清寶籙宮工部尚書となり、致仕して卒す、年七十九」とあり、その醉翁亭記を東坡に書かせたことに就いては、東坡の本集に載する跋二醉翁亭記後一に「醉翁亭記、初刻の字は褊淺、恐らくは遠きこと能はず。滁人、これを大にせむと欲す。元祐六年、軾、潁州となるや、滁守王君詔の請に因つて、遂に辭する能はず」とある。この詩は、滁州の王詔が詩を寄せたから、次韻して之に酬いたのである。

【詩意】　王君は何に似たかといへば、春雨の物を養するに似て、歌舞の農夫どもは、行路の泥濘に成ることを恐れて居る。つまり、平生、民の爲に色色心配して居るものの、中には、事理を解せぬものがあつて、兎角煙たがつて居る。御存知の如く、歐陽修・王禹偁の二人は、生涯、坎軻不遇で、讒口に遭ひ、やがて左遷されて滁州に知となつた。當年、兩翁ともに、鬢は未だ白髮とならず、玉堂の上に在りし時、筆を揮へば、手、飛ぶが如く、一朝、ここに來ると、滁人に敎へて、吟詠を解せしめ、今に至るまで、里巷の人人、輕裘肥馬にして無能なるものを嘲笑して居る。王君の家は、數代前から、引續いて將相を出し、即ち名家の出であるが、今や獨り滁州に來て、溪山の上に坐嘯し、區區たる浮利を雞肋視して之を棄て、清廉の名を見ること熊掌の如くして多く之を取り、その評判は、大したものである。元來、丈夫は、自重して、矢鱈に世間に賣り出さぬ方が貴く、歐王の兩翁も、かくの如くして、その聲譽は、青山と共に、永劫に傳はつて居るので、その後に太守と成つて著任した王君は、更に風流の聞こえ高く、前人を伴うて詩の爲に痩せることは、平氣である。予も、宮中の奉仕に飽きはて、しきりに懇請して外任を請ひ、到る處、歐陽公の遺跡を尋ねて歩いた。そこで、今、君に向つて、例の醉翁亭の設けられた瑯琊山の事を問うたが、君は、我が來游を許して、格別厭に思ふ氣色もない樣である。

【餘論】　紀昀は「起首に就いて、太だ平衍なるに苦む」といつて居る。

趙景貺以詩求東齋榜銘、昨日聞都下寄酒來、戲和其韻、求分一壺作潤筆也

趙景貺、詩を以て東齋の榜銘を求む。昨日、都下より酒を寄せて來るを聞き、戲に其韻に和す。一壺を分つて潤筆と作さむことを求むるなり

（一）王孫（二）天麒麟。晬子奧而澈。　王孫は天の麒麟、晬子、奧にして澈。

囊空學逾富。屋陋人更傑。　囊空しくして學逾よ富、屋陋にして人更に傑。

我老書益放。筆落座驚掣。　我老いて書益す放、筆落つれば座驚いて掣す。

欲求東齋銘。要飲西湖雪。　東齋の銘を求めむと欲すれば、西湖の雪に飲むを要す。

長瓶分未到。小硯乾欲裂。　長瓶、分つて未だ到らず、小硯、乾いて裂けむと欲す。

不似淳于髡。一石要燭滅。　似ず淳于髡、一石、燭滅するを要するに。

【字解】【一】王孫　宋室の宗族なるが故に尊稱して云ふ。【二】天麒麟　天上の麒麟。【三】座驚掣　晉書王獻之傳に「七八歲の時、書を學ぶ、羲之、密に後より其筆を掣すれども得ず、歎じて曰く、この兒、後、當に復た大名あるべし」と見ゆ。【四】淳于髡　前に聞李公擇飲傳國博家の詩中にも注したが、史記滑稽列傳に「臣、一斗を飲むも亦た醉ひ、一石も亦た醉ふ。酒を大王の前に賜ふ、執法旁に在り、御史後に在り、髡、恐懼俯伏して飲む、一斗に過ぎず、徑に醉ふ。日暮れ、酒闌に、尊を合し、坐を促し、男女同席、履舃交錯、杯盤狼藉、堂上燭を滅し、主人、髡を留めて客を送る、羅襦襟解け、微に薌澤を聞く、この時に當つて、髡の心、最も歡ぶ、能く一石を飲む」とある。

【題義】東齋榜銘とは、家の東側なる書齋の銘を板に書くのであらう。趙景貺は、それを書いて貰ひたいといつて、詩を以て東坡に乞うた。すると、東坡は、趙景貺の處に都から昨日酒を送つて來たことを聞き、潤筆の謝禮として、一壺を分けて與れれば、書いて遣らうといひ、その詩に次韻して、却つて之に寄せたのであらう。

【詩意】王孫たる君は、天上の玉麒麟の如く、眸子は奥深く引ッ込んで居て清澈である。囊中空しくして貧困する程、學殖は愈よ豐富となり、陋屋に住む程、人物は愈よ傑出して見える。予は、年を取つて書は益す奔放となり、筆を落せば、座上の客が驚いて之を取り上げやうとする位。東齋の銘が欲しければ、先づ西湖の雪に對して、一杯飲ませて與れねばならぬ。然るに、長瓶に酒を分けて、まだ屆けて來ぬし、用意してあつた小さな硯は、磨つた墨が乾いて、石が將に裂けむとして居る。予の酒は、かの淳于髡が、堂上、燭を滅し、一石を飲むといふに似もやらず、ほんの少しばかりあれば善いので、早早、惠投せられむことを希望する。

洞庭春色

安定郡王以黃甘釀酒。謂之洞庭春色。色香味三絕。以餉其猶子德麟。德麟以飲余。爲作此詩。醉後信筆。頗有沓拖風氣。

【訓讀】安定郡王、黃甘を以て酒を釀し、これを洞庭春色と謂ふ。色香味三絕、以て其猶子德麟に餉る。德麟、以て余に飲ましむ。爲に此詩を作り、醉後筆に信せて、頗る沓拖の風氣有り。

二年洞庭秋。香霧長噀手。　二年洞庭の秋、香霧、長しへに手を噀く。

今年洞庭春。玉色疑非酒。　今年洞庭の春、玉色酒に非ざるを疑ふ。

(三)賢王文字飲。醉筆(四)蛟蛇走。　賢王文字の飲、醉筆、蛟蛇走る。
既醉念君醒。遠餉爲我壽。　すでに醉うて、君の醒めたるを念ひ、遠く餉つて、我が壽を爲す。
缾開香浮座。盞凸光照牖。　缾開けば、香、座に浮び、盞凸にして、光、牖を照らす。
方傾(五)安仁醽。莫遺(六)公遠嗅。　方に安仁の醽を傾け、公遠をして嗅がしむる莫れ。
要當立名字。未用問升斗。　要するに、當に名字を立つべし、未だ升斗を問ふを用ひず。
應呼(七)釣詩鈎。亦號(八)掃愁帚。　應に呼ぶべし釣詩鈎、亦た號す掃愁帚。
君知(九)葡萄惡。正是(一〇)嫫母黝。　君知る、葡萄の惡しきを、正に是れ嫫母の黝。
須君(一一)灩海杯。澆我(一二)談天口。　須らく、君が灩海の杯、わが談天の口に澆ぐべし。

【字解】〔一〕洞庭秋　黃柑をいふ。この洞庭は普通云ふ洞庭ではなくて、太湖の別名。太湖の洞庭山は、美柑を產するを以て著名である。〔二〕噀手　皮を剝く手に吹きかかる。〔三〕賢王　安定郡王を云ふ。〔四〕蛟蛇走　李白の草書歌に「恍恍如聞神鬼驚、時時只見龍蛇走」とある。〔五〕安仁醽　安仁は潘岳の字、その作に係る笙賦に、「披黃苞以授柑、傾縹瓷以酌醽」とある。〔六〕公遠嗅　東坡の自註に「明皇、柑を食ふ、凡そ千餘枚、皆一瓣を闕く。進柑の使者に問へば、云ふ、中途に、かつて道士あつて之を嗅ぐ、と。蓋し羅公遠なり」とある。明皇は唐の玄宗、羅公遠は玄宗に昵近した仙人。〔七〕釣詩鈎　唐彥謙の索蝦の詩に「既名釣詩鈎」とある。〔八〕掃愁帚　王註に「李後主の中酒の詩、莫言滋味惡、一醉掃寒愁」とある。〔九〕葡萄惡　葡萄は卽ち葡萄酒。漢書に「大宛は、蒲萄を以て酒となし、富人、酒を藏する、萬餘石に至る」とあり、唐書に「高昌を破り、蒲萄の實を取り、苑中に于て之を種ゑ、併せて、その酒法を得たり、上、自ら損益し、酒を造つて成り、凡そ八色あり」と見ゆ。〔一〇〕嫫母黝　何承天の纂文に「嫫母は醜婦人なり、黃帝愛幸す」とあり、楚辭に「西施媞媞而不得見、嫫母勃屑而日侍」とあり、列女傳に「黃帝の妃嫫母、四妃の班に于て下に居る、貌甚だ醜にして最も賢」とある。黝は色の黑いこと。〔一一〕灩海杯　その中に海を漾はす樣な大きな杯。〔一二〕談天口　史記の孟荀列傳に「鄒衍の術、迂大にして宏辯、故に齊人、談天の衍といふ」とある。

【題義】安定郡王は、施註に「名は世準、字は君平、祇畏端恪、內恕にして外嚴、燕王より以來、子孫數百人、君平、これが長となり、敢て少しも繩檢を越ゆるなく、一時翕然として之を稱す。閒あれば、學官と經書を講釋す。時に保靜軍留後を以て安定郡王となる。元祐八年薨ず」とある。德麟、舊字は景貺、東坡は、爲に字說を著して、字を德麟と改めたので、德麟てふ字の詩に見ゆるは、この篇を始とする。沓拖風氣とは、跳り立つ樣な氣象といふ義。この題は――安定郡王趙世準は、黃柑を以て酒を釀し、洞庭春色と命名されたが、その酒は、色香味の三者が相竝んで非常に優れて居る。それを其姪の趙德麟の處に送つて寄越した。すると、德麟は、お裾分をして、予に飮ませたから、予は、爲に此詩を作つたのであつて、醉中、筆に信せて書き立てたが、その文字に跳り立つ樣な氣象があつて、我ながら、面白いと思つたのは、希代の名酒の特效であらうといふ意。前詩の題に「昨日、都下より酒を寄せて來る」とあるのは、てッきり、この洞庭春色の事で、東坡は、希望の通り、名酒の分讓に與かつたから、定めて、例の東齋榜銘をも書いて遣つたことであらう。

【詩意】二年の間、洞庭秋と名づくる黃柑を食ひ飽きたが、これを剝くと、さッと迸る香霧は、手に吹きかかるを覺えた。今年は、洞庭春と銘を打つた名酒を貰つたが、玉の如き其色は、酒ならぬを

疑ふばかり。安定郡王は、平生、文字の飲を事とし、この酒を飲んで、醉中に筆を執れば、その草書の見事なること、龍蛇の走るが如くである。郡王は、この名酒に醉ひ、そして、君が碌な酒を口にせずして、醒めて居ることを念うて、遠く贈つて寄越されたが、轉轉して、我が壽を爲す樣にと、君よりの御裾分に預つた。その瓶の封を切ると、只ならぬ香氣は座上に浮び、盞に堆く注ぐと、その光、窓を照らすばかり。さながら、潘安仁が縹瓷を傾くといつた其酒を飲む心地し、羅公遠に嗅ぎ付けられると、如何な惡戲をするかと、それが心配になる。かばかりの名酒は、然るべき銘あるを要し、洞庭春色といふのは、まことに結構であつて、これを頂戴する上は、區區として、升斗を問ふにも及ばぬ。酒としての效力殊に著るしき上は、例の如く、釣詩鈎と呼ぶべく、亦た愁を拂ふ玉帚と號すべきものである。君も知つて居るが、葡萄酒は、世間でこそ珍重するが、まことに俗惡なもので、その色は嫫母の如く厭に黑ずんで居て、丸で比較に成らぬ。願はくは、海をも湥はす樣な君の大杯を借りて、天を談ずる我が口に十分に注ぎ込んで貰ひたいものである。

【餘論】紀昀は「纖にして俚」といつて、一口にけなして居る。

送路都曹　　路都曹を送る

乖崖公在蜀、有錄曹參軍老病廢事、公責之曰、胡不歸、明日參軍求去、且以詩留別、其略曰。秋光都似宦情薄、山色不如歸意濃、公驚謝之曰、吾過矣、同僚有詩人而我不知、因留而慰薦之、予幼時聞父老言、恨不問其姓名、今都曹路公、以小疾求致仕、予誦此詩留之不可、乃釆前人意、作詩送之、幷邀趙德麟・陳履常同賦一篇。

【訓讀】乖崖公、蜀に在り。錄曹參軍あり、老病、事を廢す、公、これを責めて曰く、胡ぞ歸らざると。明日、參軍、去るを求め、且つ詩を以て留別す。その略に曰く、秋光都て宦情の薄きに似たり、山色歸意の濃かなるに如かず、と。公、驚いて之を謝して曰く、吾過てり、同僚に詩人あつて我知らず、と。因つて留めて之を慰薦す。予、幼時、父老の言を聞く、恨むらくは、その姓名を問はず。今、都曹路公、小疾を以て致仕を求む。予、この詩を誦して之を留む。可かず。乃ち前人の意を釆り、詩を作つて之を送り、幷せて、趙德麟・陳履常を邀へて、同じく一篇を賦す。

積雪困桃李。春心誰爲容。　積雪、桃李を困め、春心、誰が爲に容る。
淮光釀山色。先作歸意濃。　淮光、山色を釀し、先づ歸意の濃かなるを作す。
我亦倦游者。君恩繫疎慵。　我、亦た倦游の者、君恩、疎慵を繫ぐ。
欲留耿介士。伴我衰遲蹤。　耿介の士を留めて、我が衰遲の蹤に伴はむと欲す。

吏課升斗積。崎嶇等鉛舂。　吏は升斗の積を課し、崎嶇、鉛舂に等し。
那將露電身。坐待收千鍾。　那ぞ露電の身を將て、坐して千鍾を收むるを待たむ。
結髮空百戰。市人看先封。　結髮、空しく百戰、市人、先封を看る。
誰能搔白首。抱關望夕烽。　誰か能く白首を搔き、關を抱いて夕烽を望まむ。
子意諒已成。我言寧復從。　子の意、諒に已に成る、我が言、寧ろ復た從はむや。
恨非乖崖老。一洗芥蔕胸。　恨むらくは、乖崖の老、芥蔕の胸を一洗するに非ず。
我田荊溪上。伏臘亦蠡供。　我が田、荊溪の上、伏臘、亦た蠡供。
懷哉江南路。會作林下逢。　懷ふ哉、江南の路、會ず林下に逢ふを作さむ。

【字解】〔一〕淮光　淮水の波。〔二〕衰遲　老衰を以て隱居する。〔三〕課　責めはたる、催促する。〔四〕升斗積　僅少の滯納稅。〔五〕崎嶇　ひどい目に逢はす。〔六〕鉛舂　漢書に「江都の易王建、宮人過あるものは髡鉗し、鉛杵を以て舂き、程に中らざれば、輒ち掠す」とある。〔七〕露電身　前に六觀堂の詩中に注して置いた。〔八〕千鍾　澤山な俸祿。〔九〕先封　前例の封賞。〔一〇〕乖崖老　題義の項に見ゆ。〔一一〕荊溪　常州宜興縣。東坡は、かつて田を此に買うて、晩年引ッ込む積りで居た。〔一二〕伏臘　暑中と臘月。一年に二度田神を祀る。〔一三〕蠡供　供へ物の不十分なること。〔一四〕會作　會は必ずと訓ずべし、李白の清平調に若非群玉山頭見、會向瑤臺月下逢とある。

【題義】路都曹、名は紀、丹陽の人といふことは、陳後山の集に見えて居る。都曹は、即ち錄事參軍、軍州諸曹官の首席に居るもの。乖崖公は張詠、東齋記に「張詠、蜀より代り去るや、一卷實封の文字を留めて僧正希白に與へ、且つ云ふ、十年後に開けと。後十年、公、陳に薨す。訃至る。僧、留むるところの文字を發開すれば、乃ち公の畫像、自ら贊して云ふ、乖則違衆、崖不利物、乖崖之名、聊以表德と。因つて乖崖と號す」とある。この詩は、潁州都曹の路紀といふ人の官を罷めて歸るを送つたので、引の意味は下の如くである——むかし、張詠が蜀に在官した時、下僚に一人の錄曹參軍があつて、老病の爲め、碌碌仕事もしなかつた。そこで、張詠は之を責めて、その位ならば、なぜ官を辭して歸らぬかといふと、翌日、參軍は、辭職して去らむことを願ひ出で、その上、留別の詩を見せたが、その中に秋光都似官情薄、山色不如歸意濃の一聯があつた。張詠は之を見て驚歎して、その人に謝して、吾、過てり、同僚の中に、かばかりの詩人があつたのを予は知らなかつたといひ、慰めて之を推薦した。予は、幼時、父老から此話を聞いたが、惜むらくは、參軍の姓名を問ひ質さなかつた。今、都曹路紀は、小病の爲に致仕せむことを願ひ出でたから、予は、この詩を誦して、これを引き留めたが、承知しない。そこで、前人の意を采り、これを綜合して詩を送り、心ばかり、送別の微意を表し、且つ趙德麟・陳履常の二人を迎へて各一篇を作らしめたといふのである。但し、陳履常の詩は、今、後山集に載せてないから、定めて、散佚したものと思はれる。

【詩意】積雪は、桃李を困めるから、桃李は、春の心がありながらも、誰が爲に、容りすべき。淮水の波は、山色を釀し、第一に歸意をして濃かならしめる。君が兎角不遇で、今次歸休したいと云ふ

のも、成程尤もな事である。予も亦た宦游に倦んだもので、唯だ君恩の厚いことが、兎角疎懶に流れ易い老後の惡癖を繋ぎ止めて居るといふ工合。そこで、耿介の士を留めて、自分の衰老隱居の後に据ゑ置かうと考へて居る。しかし、役人は、わづかばかりの滯納税を責めはたつて、古しへ、鉛の杵で背中を舂いたといふ樣なひどい目に逢はせるから、なかなか、落ち付いて居ることも出來ず、どうして、如露如電の果敢なき此身を以て、千鍾の美祿に有り付くことを待つて居られやうか。君は、成人して結髮せし後、邊境に在つて、百戰を經、その功績、目ざましく、同市の人は、封賞の先例を按じて、きツと立身するであらうと待ち構へて居たが、今でも、白髮頭を搔きつつ、關門を守つて、夕の烽火を望んで居やうとは、もとより豫想しなかつた。今次、辭職を願ひ出られた其意は、まことに御察し申すので、予の言葉に從つて留任されぬのも、亦た止むを得ぬ次第。予は、古しへの乖崖老に非ず、從つて、芥蔕で塞がつて居る胸を一洗して、お互に意志の疏通する樣に出來ないのは、まことに殘念である。予も亦た、いつまでも在官する考はなく、荊溪の上に田地を買つて、他日の用意をして居るが、その地は田舍びて、伏臘の社祭にさへ、供物が不十分である位だが、そこに通ずる江南の路は、まことに懷かしいので、他日、必ず林下に於て逢ふ樣に致さうと、今から心に念じて居る。

【餘論】紀昀は「吏課の八句、乃ち路の語に代るなり。語相問答して、その人を標せず、法、宋子侯の董嬌嬈、及び陳琳の飲馬長城窟に本づくなり」といひ、結末を評して「仍は路を脫せず、密」といつて居る。乾隆御批には「一片才を愛し友を求むるの意、津津亹亹、序、張詠を援いて說を爲すと雖も、然れども、詠は特だ參軍の詩人たるを知らざるのみ、すでに知れば、能く留めて之を獻薦す。軾、都曹を知る、しかも、その致仕に於て、之を留むれども可かず、故も尤も怊悵情に切なり」とある。なほ容齋隨筆に「碑志の作る、本と孝子慈孫、以てその父祖の功德を稱揚し、これを當時に播いて、これを後世に垂れむと欲す。當に直にその名字を存して、避隱するところなかるべし。然れども、東漢の諸銘、その先代を載する、多くは只だ官を書し、唐より、及び本朝名人の文集、志するところ、往往只だ君諱は某、字は某と稱するのみ。記序の文に至るも、亦た然り。殆んど、文を求め名を揭ぐるの旨と相契せずとなす。東坡先生、路都曹を送るの詩、大略云ふ、結髮空百戰、市人看先封、誰能播白首、抱關望夕烽と。すなはち、路君の賢にして不遇なること、知るべし。然れども、亦た其名を書し、これをして少しく表見するを獲せしめず、又惜むべしと爲すなり」とある。路都曹の名を糺といつたことは、前述の如く陳後山集に見えて居るのであるが、東坡が特に之を表彰しなかつたのは、まことに遺憾至極で、洪容齋の斯言は、極めて切當である。

次韻陳履常雪中

陳履常の雪中に次韻す

可憐擾擾雪中人。　憐むべし、擾擾たる雪中の人、
飢飽終同寓一塵。(一)　飢飽、終に同じく一塵に寓す。

【字解】(一) 一塵　續仙傳に、「韋子威、丁約に師事す。一日辭し去らむとして、子威に謂つて曰く、

老檜作㆑花眞强項。〔二〕　老檜、花を作す、眞に强項、

凍鳶儲㆑肉巧謀㆑身。　凍鳶、肉を儲へて、巧に身を謀る。

忍㆑寒吟咏君堪㆑笑。　寒を忍んで吟咏、君、笑ふに堪へたり、

得㆑暖讙呼我未㆑貧。　暖を得て讙呼す、我、未だ貧ならず。

坐聽㆓屐聲㆒知㆑有㆑路。　坐して屐聲を聽いて、路あるを知る、

擁㆑裘來看玉梅春。　裘を擁して來り看る、玉梅の春。

郎君道を得る、倘は兩塵を隔つ。子威曰く、何をか兩塵といふ。對へて曰く、儒、これを世といひ、釋、これを劫といひ、道、これを塵といふ」とあつて、塵は卽ち人生。〔三〕强項。　後漢書董宣傳に「洛陽令となり、湖陽公主の蒼頭を殺す。主、帝に訴ふ。帝、宣をして主に謝せしむ。宣、從はず。强ひて之を頓せしむ。兩手地に據り、終に謝するを肯んぜず。帝、笑つて强項令に敕して出でしむ」とある。首の骨の丈夫にして屈せざること。この句は、檜樹が雪を帶びて花の如く見えるのは、人が强項で、老いたる爲に屈せぬ樣だといふ意。

【題意】　施註に「汝陰久雪、人飢う。東坡、簽書判官趙德麟令時を召して、これを賑恤する所以を議せしめ、乃ち義倉の穀を發して、以て貧乏を濟ひ、作院の炭、酒務の薪を出し、元價を用つて之を售り、又奏して積欠を放たしむ」とあつて、酷寒の爲に閉口して居る人民を救濟したのである。陳履常の詩に、

掠㆑地衝風敵㆓萬人㆒。蔽㆑天密雪幾微塵。漫㆑山塞㆑壑疑㆑無㆑地。投㆑隙穿㆑帷巧致㆑身。映㆑積讀㆑書今已老。閉㆑門高臥不㆑緣㆑貧。遙知更上湖邊寺。一笑潛回萬室春。

趙德麟の次韻に、

坎壈中年坐愛㆑人。老來貂鼎視㆓埃塵㆒。鐵霜帶㆑面惟憂㆑國。機穽當㆑前不㆑爲㆑身。發㆑廩已康諸縣命。齲㆑逌一洗幾年貧。歸來又捧寬民詔。不㆑媿毫端爾許春。

そして、東坡の此詩も、矢張、陳履常の原作に次韻したのである。

【詩意】　擾擾として雪中に騷ぎ立てる人は、まことに氣の毒で、饑うるも、飽くも、同じく、この世に假寓して居るに過ぎぬ。老檜が雪を帶びて花らしく見ゆる共强項の程は、賴母しく、凍鳶の肉を貯へるのは、巧に其身の爲に謀つたので、人も常に此の如くありたいものである。寒さを忍んで吟詠する君の物すきは、まことに笑ふに堪へたものであつて、やツと暖まつて讙呼する予は、まだ貧ではない。兎角する內、下駄の聲が聞こえるが、この雪中にも、乾いた路があると覺しく、そして、厚い重裘を著け、梅花の春を賞せむが爲に、態態、わが宅に來るものと思はれた。

二鮮于君以㆓詩文㆒見㆑寄作㆑詩爲㆑謝

二鮮于君、詩文を以て寄せらる。詩を作つて謝を爲す

我懷元祐初。圭璋滿㆓清班㆒。〔一〕〔二〕　われ懷ふ元祐の初、圭璋、清班に滿つ。

〔三〕維時南隆老。〔四〕奉㆑使獨未㆑還。　維れ時れ南隆の老、使を奉じて獨り未だ還らず。

〔五〕迂叟向㆑我言。〔六〕青齊歲方艱。　迂叟、われに向つて言ふ、青齊、歲方に艱。

斯人乃德星。（七）遣出虛危間。　この人、乃ち德星、遣出す虛危の間。
（八）召用既晚矣。天命（九）良復慳。　召用、すでに晚し、天命、良に復た慳。
一朝失老驥。寂寞空（一〇）帝閑。　一朝、老驥を失ひ、寂寞、帝閑空し。
至今清夜夢。枕衾有（一一）餘潸。　今に至つて、淸夜の夢、枕衾、餘潸あり。
喜聞（一二）二三子。結髮師（一三）閔顏。　喜び聞く、二三子、結髮、閔顏を師とす。
高論（一四）邈河漢。（一五）淸詩鳴珮環。　高論、河漢邈たり、淸詩、珮環を鳴る。
遙知三日雪。積玉埋（一六）嵩山。　遙に知る三日の雪、積玉、嵩山を埋む。
誰念此幽桂。坐蒙榛與菅。　誰か念はむ、この幽桂、坐して蒙る榛と菅と。
（一七）故人在（一八）潁尾。投詩（一九）淸泠灣。　故人、潁尾に在り、詩を投ず淸泠の灣。

【字解】【一】圭璋　前に小飲西湖の詩中にも注して置いたが、詩經に豈弟君子、如圭如璋とある。【二】淸班　淸要なる班列。【三】維時　時しこれと訓す。【四】南陰老　王註に「南陰は閬中、鮮于子駿は閬中の人」とある。方輿勝覽に「唐時、魯滕二王、皆閬州に謫し、衙宇卑陋なるを以て、終に之を修飾宏大して、宮苑に擬す、因つて、これを陰苑といふ」とある。【五】汪叟　司馬溫公、自ら號して云ふ。【六】靑齊　二州の名。【七】遣出虛危間　漢書地理志に「齊の地は虛危の分野」とある。虛危は、二十八宿中二星の名。靑齊は、古しへの齊の地。東坡の自註に「司馬溫公、軾に謂つて曰く、子駿は福星なり、京東、人、困む甚し、且つ彼をして往かしむ」とあり、東都事略鮮于侁傳に「京東轉運使となる、所代吳居厚、掊斂を以て下を虐ぐ、侁、これに繼ぎ、務めて寬大を行ふ」とある。【八】召用既晚矣　東都事略の本傳に「元祐中、召されて太常少卿となり、左諫議大夫に拜し、集賢修撰に除し、出でて陳州に知として卒す、年六十九」とあり、續通鑑長編に「元祐二年五月二十日、鮮于侁卒す」とある。【九】良復慳　慳は意地惡いこと。【一〇】帝閑　天子の御廐。【一一】餘潸　名殘の淚。【一二】二三子　鮮于子駿の子を指して言ふ。【一三】閔顏　閔損と顏回、有道者の義。【一四】邈河漢　莊子に「吾、その言の猶は河漢の極まりなきがごときに驚怖せり」とある。【一五】淸詩　歐陽修の詩に寄淇宜三捻鵲二詩淸叩三珮環一とある。【一六】嵩山　查註に「行狀に、子駿、潁昌府陽翟縣に葬る。按ずるに、嵩山は陽翟縣界に在り、その諸子、必ず此に家せしならむ」とある。【一七】故人　東坡自ら稱して云ふ。【一八】潁尾　潁水の下流。【一九】淸泠　前に歐玉亭の詩中に注して置いた。

【題義】二鮮于君とは、鮮于氏二人、卽ち諫議大夫子駿の子。淮海集、鮮于子駿行狀に一男五人、復は早く卒す、頡は偃師縣尉、翬は鳳州司法參軍、綽は承務郞、焯は未だ仕へず、皆學行あり、而して、頡、尤も自立し、士大夫、これを稱す」とある。すると、ここの二君は、頡・翬・綽・焯、四人の中、誰を指したか分からぬ。この詩は、鮮于侁の倅二人より、その自作の詩文を寄せられたから、謝として作つたのである。

【詩意】おもへば昔、元祐の初年に於て、圭璋に比すべき君子輩が、朝廷の淸班に列し、まことに濟濟たる多士といふ有樣。その時、閬中出身の鮮于老は、使を奉じて、まだ還つて來なかつたが、司馬溫公は、予に向つて、靑齊二州は、凶年が打續いて居る、鮮于侁は、德星であるから、この地方の知州には適任だといふので、やがて、虛危二星の分野たる其土に派遣された。しかし、折角の召用も、時すでに遲く、天命は、いつもながら、まことに、意地惡く、老いたる名馬が一朝斃れて、天子の御廐が

俄に寂しく成つたと同じく、鮮于侁、俄に逝いて、廟堂、その人なく、今日に至るも、淸夜の夢に其人を見ると、枕衾の間に、淚の名殘が留まつて、濕めり勝ちである。承はれば、令息達は、冠後、古しへの閔損・顏回の如き有道者を師として、學業を修め、その議論は、高尙にして、河漢の極まりなきが如く、淸新なる詩句は、珮環を鳴らすが如くであるといふこと。遙に察するに、雪は三日も降り續いて、積れる玉は君達の居る嵩山を埋めたのであらうし、幽桂生ひ茂れる處も、いつしか、榛菅の如き灌莽に侵害されたであらう。予は、潁水の下流に居るから、ここに詩を作つて、淸冷の淵に投じ、河伯の助けに依つて、どうか早く、君達の處に到著すれば善いがと念じて居る。

次韻趙德麟雪中惜梅且餉柑酒三首

趙德麟が雪中、梅を惜み、且つ柑酒を餉られしに次韻す　三首

千花未分出梅餘。　千花、未だ梅餘に出づるを分とせず、
遣雪摧殘計已疏。　雪をして摧殘せしむ、計、すでに疏なり。
臥聞點滴（一）如秋雨。　臥して聞く、點滴の秋雨の如きを、
知是東風爲掃除。　知る是れ東風、爲に掃除するを。

【字解】（一）點滴　前に淒井の詩中に注して置いた、あまだれ。

【題意】この詩は、趙德麟が雪中に梅を惜み、又柑酒を贈るといふ詩を見せたから、それに次韻したのである。ここに謂はゆる柑酒は、前に見えた洞庭春色であらうと思はれる。

【詩意】多くの花どもは、梅の後に出ることを本分とせず、もツと早く咲き出さう、それに就いては、あるのが邪魔だといふので、雪を降らして、梅を摧き盡さしめたが、その計略たるや、まことに疏漏で、見るからに慘澹の極、まことに、その當を得ざるものである。臥して聞けば、雪止みし後、雨だれの音は、秋雨の樣であるが、それは、梅花が散り敷いて、あまり甚しいといふので、東風が特に掃除を爲したものと思はれる。

閬苑（一）千葩映玉宸（二）。　閬苑の千葩、玉宸に映す、
人間只有此花（三）新。　人間、只だ此花の新なるあり。
飛霙（四）要欲先桃李。　飛霙、桃李を先てむと欲するを要す、
散作千林火迫（五）春。　散じて作る、千林、火迫の春。

【字解】（一）閬苑　仙界。（二）玉宸　天帝の居處。（三）此花　梅花を指して云ふ。（四）飛霙　霙はみぞれ。（五）火迫　急忙の謂ひ、火急に同じ。

【詩意】梅花は、人間に於て最も淸新なもので、千花咲き出づれば、さながら、閬苑に在つて玉宸の扉に映ずる樣である。しかるに、みぞれは、この花を打落し、桃李をせき立てて、火急に千林の春を現出せしむとするらしく、まことに、心なき仕ぐさである。

【餘論】篇中、千の字の複出が目につく。

蹀躞嬌黃不受鞿。　蹀躞、嬌黃、鞿を受けず、
東風暗與色香歸。　東風、暗に色香と歸る。
偶逢白墮爭春手。　偶ま逢ふ、白墮、春を爭ふの手、
遣入王孫玉斝飛。　王孫の玉斝に入つて飛ばしむ。

【字解】〔一〕蹀躞　馬の歩くさま。〔二〕嬌黃　柑の熟せしを云ふ。〔三〕不受鞿　鞿はくつばみ、馬を繋ぐ具。〔四〕白墮　王註に「張君房の脞說、海東の劉白墮、善く酒を釀す、日中に曝して旬を經るも、酒味動かず、これを飲めば、醉うて醒めず。永熙中、青州刺史毛鴻賓、酒を賚らして藩に之き、路に劫盜に遇ふ、これを飲んで即ち醉ひ、皆擒にせらる。これに因つて、禽俊酒と名づく。游俠、語つて曰く、弓を張り刀を拔くを畏れず、惟だ白墮春醪を畏る」とあり、施註に「曾子野の酒譜、江東の人劉白墮、善く酒を釀す、味香美、人をして久しく醉はしむ、朝士千里相餽る、鶴觴と號し、亦た騎驢酒と名づく」とある。〔五〕王孫　前に數ば見ゆ、門地貴き人。〔六〕玉斝　玉の杯。

【詩意】黃柑が木に著いて居るのは、馬が跳りはねてくつばみを受けぬのに似て居るが、やがて、東風の時節となつて、すツかり熟すると、色香も共に衰へて仕舞つた。然るに、偶然にも劉白墮といふ釀酒の名人に逢うて、春色を爭ふ名酒と化し、王孫の玉杯に注がれることに成つた。

【餘論】黃柑を馬に譬へたから、起句に不受鞿といひ、結句に飛といつたのであるが、どうも落付かず、まさしく、穩妥を缺いて居る樣である。

和陳傳道雪中觀燈　陳傳道が雪中に燈を觀るに和す

新年樂事嘆何曾。　新年の樂事、何曾を嘆す、
閉閤燒香一病僧。　閤を閉ぢ、香を燒く、一病僧。
未忍便傾澆別酒。　未だ忍びず、便ち別に澆ぐの酒を傾くるに、
且來同看照愁燈。　且つ來つて、同じく看る愁を照らすの燈。
潁魚躍處新亭近。　潁魚躍る處、新亭近く、
湖雪消時畫舫升。　湖雪消ゆる時、畫舫升る。
祇恐尊前無此客。　祇だ恐る、尊前、この客なきを、
淸時還有士龍能。　淸時、還た士龍の能くするあり。

【字解】〔一〕嘆何曾　何ぞ曾てせむや、即ち少しも其事に逢はぬことを嘆息する。〔二〕此客　陳傳道を指す。〔三〕士龍　陸機の弟、名は雲、字は士龍、これは陳履常が傳道の弟たるに比して云ふ。

【題義】施註に「陳傳道、名は師仲、履常の兄、彭城に家居す。履常、潁に在り、傳道來り訪ふ。未だ幾ならずして、東坡、移つて維楊に守たり。而して、傳道、亦た歸る。遂に趙德麟の韻に和して之を送る。傳道、この時、仕へて毙庫たり」とある。ここに云ふ燈は、上元、即ち陰曆の正月十五日に於て催されるのである。この詩は、陳傳道の雪中觀燈の作に次韻したのである。

【詩意】新年の樂事を少しも爲さざりしは、歎息すべく、小閤を閉ぢ、香を焚いて、つくねんとして居る處は、丸で一個の病僧である。折角、逢つたばかりであるから、直に別筵に澆ぐ酒を傾くるに忍

びず、しばらく、一緒に出かけて、愁を照らす燈火を見たいと思ふ。潁水、方に漲つて、魚躍れば、新亭も近く見え、西湖の雪が消えると、畫舫が高く浮び出て居る。この觀燈の夜、樽前に君が居らないのは、如何にも物足らず覺えるから、是非予と共にして貰ひたく、平時は、士龍に比すべき令弟が居るから、先づ差支ない樣なものである。

【餘論】紀昀は後聯を許して「意、水長じ船高しと謂ふのみ、然れども、妥ならず」といつて居る。

閱世堂詩、贈任仲微

閱世堂の詩、任仲微に贈る

(一)任公鎭西南。嘗贈(二)繞朝策。　任公、西南を鎭し、かつて贈る繞朝の策。

當時若盡用。(三)善陣無赫赫。　當時、もし盡く用ふれば、善陣、赫赫なからむ。

淒涼十八年。邪正久已白。　淒涼十八年、邪正、久しく已に白す。

却留(四)封德彝。天意眇難測。　却つて、封德彝を留む、天意、眇、測り難し。

(五)象賢眞驥種。號訴甘百謫。　賢を象る、眞に驥種、號訴、百謫を甘んず。

豈云報私仇。禍福指絡脈。　豈に私仇を報すと云はむや、禍福、絡脈を指す。

高才食(六)舊德。但恐(七)門里窄。　高才、舊德に食み、但だ門里の窄きを恐る。

傷心千騎歸。贈印黃壤隔。　傷心千騎歸る、印を贈れば黃壤隔つ。

惟有庭前檜。閱世不改色。　惟だ庭前の檜あり、世を閱して色を改めず。

千年與井在。記此(八)王粲宅。　千年、井と在り、この王粲の宅を記す。

【字解】〔一〕任公　名は伋、師中と號す。その詳は題義の項を見よ。〔二〕繞朝策　策は鞭。左傳文公十三年に「晉人、秦の士會を用ふるを患ふるや、これを歸さむことを謀る。士會、乃ち行く。繞朝、これに贈るに策を以てして曰く、子、秦に人なしと謂ふなかれ、吾が謀、適ま用ひられざるなり」とある。〔三〕善陣無赫赫　孫子に「善く兵を用ふるものは、赫赫の功なし」といひ「善く陣するものは戰はず、善く戰ふものは敗れず」とある。〔四〕封德彝　轉運判官たる程之才を指す。〔五〕象賢　賢に似る、漢書王嘉傳の註に「象賢とは、その先父の賢に象るのみ」とある。〔六〕食舊德　先人の舊德疾癈に因つて生活して居る。〔七〕里門窄　漢書于定國傳に「父于公曰く、少しく閭門を高大にし、駟馬高蓋車を容れしめよ。われ獄を治めて陰德多し、子孫、必ず興るものあらむ」とあつて、その註に「閭門は里門なり」とある。〔八〕王粲宅　前に萬山の詩中に注して置いた。

【題義】施註に「任仲微、名は大防、父伋、師中と號す、遂州に卒す、當途者、その旣に歿するを以て、使者の地となす。仲微、三たび闕に詣つて上書し、寃狀を陳ぶ、獄、敢て變せず、使者竟に免ず。その事、秦少游作るところの墓表に載す。國史を按ずるに、元豐五年十一月、梓州路轉運判官程之才、衝替す、前知廬州の任伋と交訟し、報上つて實ならざるに坐す。少游の謂はゆる使者は、卽ち之才なり。詩に却留封德彝と云ふは、之才を指す。之才、字は正輔、坡の內兄、又親姊の壻、夙怨あり、後、廣南提刑となる、坡の嶺南に謫せらるるや、正輔、待遇太だ厚く、多く與に倡酬す。師中、かつ

て蔡州新息令となり、鰥寡を惠給し、邑人これを愛す、遂に居る、堂前に檜あり、直幹蒼然、乃ち閲世を以て其堂に名づく。故に詩に惟有庭前檜、閲世不改色と云ふ」とある。この詩は、蔡州新息なる閲世堂に寄題し、併せて任仲に贈つて、その不遇を慰めたのである。

【詩意】任師中は、西南、遂州に鎮撫し、その出發する時、繞朝の樣な人が之に策を贈つて、懇に囑望した。そこで、當時、もし任師中の言を盡く用ひたならば、邊境毫も虞なく、師中も、陣を善くするものであるから、赫赫の勳名も立てすに仕舞つたであらう。師中歿後、すでに十年、今日、邪正、はじめて判明したが、却つて、封德彝の如き轉運判官が其地に留まつて、師中の功の沒却されたのは、まことに心外の事で、天意幽眇にして、測り難い心地がする。君は、親に似て頗る賢明、流石に、名驥の種と稱すべく、親の死後、ひどく冷遇されたことを號訴して、いくら罰せられても、かまはぬといふ覺悟、これは、元と公憤を抒べる爲にしたので、決して、私の仇を報ゆる爲ではなく、且つ禍福は糾へる繩の如く、脈絡が自然つゞいて居る。君の如き高才を以て、親の御蔭で些少の俸祿を得て居るといふのは、意外の事であるが、行く末は、子孫繁昌して、里門の狹きを恐れるのであらう。任師中の部下の千騎は、追追歸り來り、そして、師中の功を追賞して印を贈らうとしても、黃壤遠く隔つて、地下より呼び起すことも出來ぬ。しかし、君の居る亭舍の前には、一本の檜があつて、堂名を閲世といふに違はず、久しく歲月を經過しても、その翠色を改めず、千年の後に成つても、井と共に存し、ここが王粲の樣な名士の宅であつたといつて、後人は、長く記憶して居るであらう。

【餘論】紀昀は起首を評して「謹嚴法あり」といひ、且つ結末に就いては「覺住好し」といつて居る。

新渡寺送任仲微

新渡寺、任仲微を送る

春陰欲落雪。野氣方升雲。　　春陰、雪を落さむと欲し、野氣、方に雲を升す。

我游清潁尾。想見翠被君。　　われ清潁の尾に游び、翠被の君を想見す。

古來聚散地。與子復言分。　　古來聚散の地、子と復た分かるるをいふ。

倦游安稅駕。瘦田失歸耘。　　倦游、安くにか稅駕、瘦田、歸耘を失ふ。

獨宿古寺中。荒雞亂鳴羣。　　獨り宿す古寺の中、荒雞亂鳴の羣。

送子以曉角。幽幽醒時聞。　　子を送るに曉角を以てす、幽幽醒時に聞く。

【字解】〔一〕野氣　野から蒸し上げる濕氣。〔二〕翠被君　左傳、昭公十二年に「楚子、州來に狩し、潁尾に次し、蕩侯・潘子・司馬督・囂尹午陵・尹喜をして師を帥ゐて徐を圍み、以て吳を懼れしむ。楚子、乾谿に次し、以て之が援を爲す、雪雨る、王は皮冠、秦復陶は翠被豹舃、鞭を執つて以て出づ」とある。〔三〕稅駕　駕を留める、史記李斯列傳に「當今、人臣の位、臣の上に居るものなし。物極まれば衰ふ、吾、未だ稅駕するところを知らざるなり」とある。〔四〕荒雞　晉書祖逖傳に「劉琨と同じく寢ぬ。中夜、荒雞の鳴くを聞き、琨を蹴つて覺まして曰く、これ惡聲に非ざるなりと、因つて起つて舞ふ」とある。

【題義】この詩は、新渡寺に於て、任仲微の新息に歸るを送つたのである。

【詩意】春陰は雪を下さむとし、野から蒸し上る溼氣は、今しも、雲と成つて升つた。われは、淸潁の下流なる新渡寺に來り、天晴、陣に在つて翠被を著て居さうな君を想像して見た。ここは、古しへより聚散の地であつて、今日、ここに君と分かれる次第。われも、宦游に倦みしものから、何處に駕を停むべきかと尋ね煩ひ、わづかばかりの痩せた田地は、歸つて耘らずに、その儘、棄てツぽかしてある。ここに、夜ふけて、ひとり古寺の中に宿すれば、荒雞が羣をなして亂鳴し、古しへの壯士なれば、これ惡聲に非ずといつて、起つて舞ひさうな處。今、君を送るに曉角を以てせむとし、夢醒めはてし後、かすかながらに遠く聞こえる。

【餘論】紀昀は「結び得て盡きず」といひ、何焯は「結、孟郊の詩を用ふ」といつて居る。

送運判朱朝奉入蜀

運判朱朝奉の蜀に入るを送る

靄靄靑城雲（一）。娟娟峨眉月（二）。
靄靄たり靑城の雲、娟娟たり峨眉の月。

隨我西北來。照我光不滅。
われに隨つて西北に來り、われを照らして光滅せず。

我在塵土中。白雲呼我歸。
われ塵土の中に在り、白雲、われを呼んで歸る。

我游江湖上。明月溼我衣。
われ江湖の上に游べば、明月、わが衣を溼す。

岷峨（三）天一方（四）。雲月在我側。
岷峨、天の一方、雲月、わが側に在り。

謂是山中人。相望了不隔（五）。
謂ふ是れ山中の人、相望んで了に隔てず。

夢尋（六）西南路。默數長短亭。
夢に西南の路を尋ね、默して長短亭を數ふ。

似聞嘉陵江（七）。跳波吹枕屛。
聞くに似たり嘉陵江、跳波、枕屛を吹く。

送君無一物。淸江飮君馬。
君を送つて一物なく、淸江、君が馬を飮へ。

路穿慈竹林（八）。父老拜馬下。
路は穿つ慈竹林、父老、馬下に拜す。

不用驚走藏。使者我友生。
用ひず驚いて走り藏るるを、使者は我が友生。

聽訟如家人（九）。細說爲汝評。
訟を聽くこと家人の如く、細說、汝の爲に評せむ。

若逢山中友。問我歸何日。
もし山中の友に逢ひ、わが何の日に歸るを問はば、

爲話腰脚輕。猶堪踏泉石。
爲に話せよ、腰脚輕く、猶は泉石を踏むに堪へたりと。

【字解】〔一〕靑城　山の名、杜甫の詩に、自爲靑城客、不唾靑城地、爲愛丈人山、丹梯近幽意、丈人祠西佳氣濃、緣雲擬住最高峰とあり。靑城山記に「蜀の山、江源に近きもの、通じて、これを岷山といふ。連峰接岫、千里絕えず。靑城は、乃ち第一峰」とあり。輿地記に「山の高さ三千六百丈、周圍五十里」とある。〔二〕峨眉　山の名、蜀中第一の名山。前に根本禪院、積翠閣、寄黎眉州、送賈訥倅眉の諸詩中に注して置いた。〔三〕岷峨　岷山、卽ち靑城山と峨眉とを合稱して言ふ。〔四〕天一方　文選、蘇武の詩に良友遠離別、各在天一方とある。〔五〕了不隔　了はまことにと訓ずべし。文選謝希逸の月賦に隔千里兮共明月とある。〔六〕夢尋　韓非子に「六國の時、張敏、高惠と友たり。相思ふ毎に、敏、夢中に於て、往いて之を尋ぬ。中道に至つて、迷うて路を知らず、

遂に囘る」とある。【七】嘉陵江　前に次韻同游百步洪の詩中に注して置いた。【八】慈竹林　茅亭客話に「慈竹叢生、根、母を離れず、故に之を慈と名づくるなり」とあり、贊寧の筍譜に「慈竹は、筍、四時生ず、その竹、內實にして節疎。又鄰黃に一叢數竿を生じ、筍外迸せず」とある。【九】如家人　舊唐書に「陽城、道州刺史となる、家人の法を以て吏人を待ち、宜しく罰すべきものは之を罰し、宜しく賞すべきものは之を賞す」とある。

【題義】この題は、建安本に、送朱世昌使蜀と作れるに因り、査註には「朱朝奉、名は世昌、字は康叔、注、前に詳なり」とあるが、これより前に、さういふ名の人は見えず、査註は、朱壽昌郎中の事を誤記したのだらうと思はれる。そして、世昌の事蹟は不詳。この詩は、朝奉郎朱世昌が運判となつて、蜀に赴任するのを送つたのである。

【詩意】予の故國なる青城山の雲は、靄靄として、予に隨つて西北に來り、峨嵋山の月は、娟娟として、予を照らし、その光は、長しへに滅することはない。予が塵土の中に居ると、白雲は予を呼んで歸らしめむとし、予が江湖の上に居ると、明月は、溼ふばかりに、予の衣を照らして居る。青城峨嵋、ともに遠くして天の一方に在るが、その山の雲や月は、いつでも、わが側に在つて、決して、相離れない。予は、本と山中の人で、雲月と夙契あるに因り、これを相望んでも、決して隔絕することはない。予は、故鄕に歸りたく思ひ、夢中、西南の路を尋ね、默して長亭短驛を數へつつ、魂が遠く飛んで行くと、彷彿として、嘉陵江の水聲が聞こえ、跳れる波は、枕屏に注ぎかかる樣である。今、君の蜀に赴任せらるるを送るに際し、餞別として贈るべき物すら無いが、やがて、清江に君の馬を飮ふことと思はれる。慈竹の茂れる中を通ずる路をたどり行けば、父老どもが踵み迎へて、馬下に拜するであらう。予は、父老どもに告げて、汝等は、決して驚いて走り匿れるに及ばないので、今度著任した運判は、わが友人である、されば、訴訟を聽くに、家人の法を用ひ、賞罰、決して誤らず、詳しく事件の經過を說いて、合點の行くやう、汝の爲に評論して吳れるであらうと云ふ積りである。次に君が山中なる我が友に遇うて、東坡は何時歸ると問うたならば、年は取つても、足腰は倔强で、舊に依つて、泉石を踏むに堪へ、いづれ遠からず歸國すると傳へて吳れろ。

【餘論】紀昀は「通幅、自ら己の意を寫さむとして、朱生の情を借るのみ」といひ「朱を說く處、亦た仍ほ是れ蜀を說く」といひ「妙に本意を以て結となし、しかも、仍ほ朱の一邊を冷落せず」といひ、乾隆御批には「五言換韻、體製最も古く、しかも、後人、これに效ふもの少し、その氣斷え易く、しかも、情韻反つて減ずるを以てのみ。これは、纍纍然として貫珠の如く、清妙の音、これを讀むこと百回にして厭はず」といつて居る。

病中夜讀朱博士詩

病中、夜、朱博士の詩を讀む

病眼亂燈火。細書數塵沙。

病眼、燈火を亂し、細書、塵沙を數ふ。

君詩如秋露。淨我空中花。

君が詩は、秋露の如く、わが空中の花を淨くす。

古語多妙寄。可識不可誇。

古語、妙寄多く、識るべくして、誇るべからず。

巧笑在顰頻。哀音餘摻撾。
曾坑一掬春。紫餅供千家。
懸知貴公子。醉眼無眞茶。
崎嶇爛石上。得此一寸芽。
緘封勿浪出。湯老客未嘉。

巧笑、顰頻に在り、哀音、摻撾を餘す。曾坑一掬の春、紫餅、千家に供す。懸に知る貴公子、醉眼、眞茶なきを。崎嶇、爛石の上、この一寸の芽を得たり。緘封、浪りに出す勿れ、湯、老いて、客、未だ嘉せず。

【字解】【一】空中花　病眼のかすめるを云ふ、圓覺經に「かの病目の、空中の花、及び第二の月を見るに譬ふ」とある。【二】妙寄　巧妙なる寄託。【三】顰頻　詩經正義に「顰は、頻に近きなり」とあつて、頻の下、即ち額。【四】摻撾　二字ともに鼓を打つ時に用ふる棒。【五】曾坑　名茶の產地、宋子安の東谿試茶錄に「佛嶺の東南を曾坑といふ、今、北苑に屬す、茶甘少くして苦多し、色亦た重濁」とある。【六】紫餅　茶を固めて餅の如くせしものを云ふ。【七】爛石上　陸羽の茶經に「上なる者は爛石に生じ、中なる者は櫟壤に生じ、下なる者は黃土に生ず」とあり、茶論に「白茶は自ら一種たり、常茶と同じからず、その條敷闡、その葉瑩薄、崖石の間、偶然生出、生ずるところの處、一二株に過ぎざるのみ」とある。【八】湯老　茶經に「三沸以上、水老いて食ふべからず」とあり、孟蜀の人、毛文錫の茶譜に「波を騰せ、浪を鼓し、水氣盡く消ゆ、これを老湯といふ」とあり、太平清話に「蔡君謨、湯は嫩を取つて、老を取らず、蓋し、闘餅茶の爲に發するのみ」とある。

【題義】 朱博士は、即ち朱遜之、名を勃といひ、菊は黃が正色で、その餘は賞するに足らずといひ、東坡が之に贊成して作つた詩が、この卷中に載せてあつた。この詩は、病中、夜、朱勃の詩を讀むに因つて作つたのである。

【詩意】 病眼は、燈火の爲に亂され、詩稿は、字が細かで沙塵の如く、なかなか、讀みづらい。しかし、君の詩は、清冷、秋露の如く、目のかすみを一掃して仕舞つた。その詩は、用語皆純古にして、中に巧妙なる寄託を藏し、默識すべくして、吟誦誇衒することは出來ない。元來、巧笑は顰頻に起り、哀音は摻撾に出づるものであつて、文字聲律は、まさしく、詩の生命である。更に之を譬ふれば、曾坑に產する名茶の如く、唯だ一掬の少量を紫餅に造れば、千家の飲用に供することが出來る、しかし、紈袴の貴公子は、醉眼に眞茶を知らぬから仕方がない、かかる名茶は、崎嶇たる爛石の上に一寸の芽を生じたのを、やツと聚めて出來るので、なかなか得難くして貴いものである。そこで、固く封じて、矢鱈に出さぬが善いので、まして、水氣の消えた老湯などでは、本當の味が出ないから、到底、客をして滿足せしめることは出來ない。君の詩は、すでに名茶の如く、篇什少くとも、能く人をして飽かしむべく、全く他に類のないものであるが、常人は、その神味を知らないから仕方がないので、ただ解者と共に論ずべきものである。

【餘論】 紀昀は「忽ち比體を入れて收となし、常意化して新意となす」といつて、まことに確當である。然るに、王文誥は之を駁して「今、趙次公に據るに、謂ふ、顏色を以て其詩を譬ふれば、巧笑、顰頻に起り、音樂を以て其詩を譬ふれば、哀音、摻撾に出づ、と。乃ち比體收を作すの說、非なるを知るなり」といつて居るが、もし之を比でないとすれば、東坡が其人に茶を贈つたと見る外なく、前後の關係も、甚だ緊密を缺くものと成つて仕舞ふから、ここでは、矢張、舊解に從ふことにした。

趙德麟餞飲湖上舟中對月

趙德麟、湖上に餞飲し、舟中、月に對す

(一)老守惜春意。(二)主人留客情。　老守、春を惜むの意、主人、客を留むるの情。

官餘閒日月。湖上好清明。　官餘の閒日月、湖上の好清明。

(三)新火發(四)茶乳。(五)溫風散(六)粥餳。　新火、茶乳を發し、溫風、粥餳を散す。

酒闌紅杏闇。日落大隄平。　酒は闌にして紅杏闇く、日は落ちて大隄平かなり。

清夜除燈坐。孤舟擘岸撐。　清夜、燈を除いて坐し、孤舟、岸を擘いて撐かす。

逮君(七)幘未墮。對此月猶橫。　君の幘、未だ墮ちざるに逮び、此に對して、月、猶は橫ふ。

【字解】〔一〕老守　老太守、東坡自ら云ふ。〔二〕主人　趙德麟を指す。〔三〕新火　寒食の日、火を新にするが故に云ふ。〔四〕茶乳　茶を沸き立つるを云ふ。〔五〕溫風　暑氣を帶びた風。〔六〕粥餳　寒食の後、杏仁の潰したるを、米に交ぜて煮て粥とする。〔七〕幘未墮　幘は頭巾、晉書に「庾敳、字は子嵩、東海王越、衆坐中に於て敳に問ふ、敳、頽然として、すでに醉ひ、幘、几上に墮つ、頭を以て就いて穿ち取る」とある。

【題意】東坡は、元祐六年秋を以て潁州に著任したが、七年春、龍圖閣學士に赴き、淮南路兵馬鈐轄知揚州軍州事となつて、維揚に赴任することに成つた。そこで、趙德麟は、送別の意味を以て西湖に招飲し、夜に及んで、舟中月に對し、仍つて、東坡が、この詩を作つたのである。

【詩意】老太守たる予は、春の名殘を惜む心深く、主人たる趙德麟は、予との別を惜む念が甚だ慇懃である。官餘、この閒日月を得たるは、まことに喜ぶべく、湖上は、清明の時節で、相見る景色も、至つて長閑である。新火を以て茶を沸かし、暑氣を含める溫風は、杏の粥を吹く。酒闌なる頃、紅杏影暗く、日落つれば、大隄も平かに見える。そこで、清夜、燈を點せずして坐し、孤舟は岸を擘くばかりに勢よく、漕ぎ出した。君の醉、未だ足らず、頭巾さへ落さぬ時分、眺めやれば、纖月は未だ落ちずして、空中に橫はつて居る。

【餘論】査初白の評に「閒情別致、留戀の意、自ら言外に在り、日月の二字、重複を嫌はず」とある。

和趙德麟送陳傳道

趙德麟の陳傳道を送るに和す

(一)二陳既妙士。(二)兩歐惟德人。　二陳、すでに妙士、兩歐、惟れ德人。

(三)王孫乃(四)龍種。世有(五)霸雲麟。　王孫、乃ち龍種、世に雲を霸ふの麟あり。

五君從我游。傾寫出怪珍。　五君、われに從つて游ぶ、傾寫、怪珍を出す。

俗物敗人意。茲游實清醇。　俗物、人意を敗る、茲游、實に清醇。

那知有聚散。(六)佳夢失(七)欠伸。　那ぞ知らむ聚散あるを、佳夢、失うて欠伸。

我舟下清淮。沙水吹玉塵。　わが舟、清淮を下れば、沙水、玉塵を吹く。

君行踏曉月。疎木挂(八)寸銀。　君の行、曉月を踏めば、疎木、寸銀を挂く。

尙寄別後詩。翦刻淮南春。　尙ほ寄す別後の詩、翦刻せよ淮南の春。

【字解】〔一〕二陳　陳傳道・履常の兄弟を云ふ。〔二〕兩歐　歐陽叔弼・季默の兄弟をいふ。〔三〕王孫　趙德麟を指す、宋の宗室なるが故に云ふ。〔四〕龍種　帝室の血統を引いて居る、杜甫の詩に高帝子孫盡隆準、龍種自與常人殊とある。〔五〕躡雲麟　漢の天馬歌に志俶儻、精權奇、籋浮雲、晻上馳とある。麟は驎と通じて、卽ち名馬。〔六〕佳夢　盧生枕夢の事を暗用す、前に今年正月の詩中に注して置いた。〔七〕欠伸　あくび、前に轍子由の詩中に注して置いた。〔八〕寸銀　殘月を形容して云ふ。

【題義】この詩は、趙德麟の詩に次韻して、陳傳道を送つたのである。

【詩意】陳氏兄弟は、高節なる妙士であるし、歐陽の叔季は德人、趙德麟は宗室で人間の種ならぬが貴く、ともに、浮雲を踏んで馳する天馬に比すべきものである。この五君が予に從つて遊び、その胸奧から傾瀉したものは、自然、怪珍を出して居る。俗物は、兎角人の興を醒ますものであるが、さういふ人が居なかつたから、この遊は、まことに淸醇であつた。しかし、人生は聚散常ならず、佳夢、一たび覺むれば、唯だ欠伸ばかり、やがて、予も亦た淸い淮水の流を下つて、揚州に行くが、岸の沙に波だつ水は、玉塵を吹くであらう。そして、君は、とぼとぼと有明の月影を踏んで行かれるが、仰げば、葉の疎らなる木に、銀色で小さく圓いのが挂れるを見ることと思はれる。別後、詩が出來たらば、屹度寄せて貰ひたいので、淮南の春色を翦刻したらば、一しほの出來榮えであらう。

蘇東坡詩集 卷三十五

古今體詩 五十三首

一 上巳日、與二子迨・過游塗山・荊山、記所見

上巳の日、二子迨・過と塗山・荊山に遊び、見る所を記す

此生終安歸。還(一)軫天下半。　この生、終に安くにか歸せむ、軫を還して天下に半す。

揭(二)來乘(三)樏廟。復作(四)微禹歎。　揭來、乘樏の廟、復た禹を微かつせばの歎を作す。

從祀及彼(五)呱。像設偶(六)此粲。　從祀、彼の呱に及び、像設けられて、この粲に偶す。

秦(七)祖當徜坐。夏(八)郊亦薦祼。　秦祖、當に坐を徜むべし、夏郊、亦た薦祼。

可憐淮(九)海人。尙記弧(一〇)矢旦。　憐むべし、淮海の人、尙ほ記す弧矢の旦。

荊山碧相照。楚水淸可亂。　荊山、碧、相照らし、楚水、淸、亂すべし。

刖(一一)人有餘坑。美石肖溫(一二)瓚。　刖人、餘坑あり、美石、溫瓚に似たり。

龜(一三)泉木杪出。牛(一四)乳石池漫。　龜泉、木杪に出で、牛乳、石池漫たり。

小兒强好古。侍(一五)史笑流汗。　小兒、强ひて古しへを好み、侍史、流汗を笑ふ。

歸時蝙蝠飛。炬火記遠岸。 歸る時、蝙蝠飛び、炬火、遠岸を記す。

【字解】【一】還軫　還はめぐらす、軫は車の伏兎の上に加へたる橫木。國語の韋昭註に「還軫は、猶ほ車を回らすがごとし」とある。【二】塲來　前に數ば見ゆ、ここにといふ義。【三】乘樏刷　書經に「禹曰く、予四載に乘ず」とあつて、その註に「水には舟に乘じ、陸には車に乘じ、泥には楯に乘じ、山には樏に乘ずるを謂ふなり」とある。樏は、玉篇に「山行、乘ずるところなり」とあつて、即ち橇。樏に乘りし人の廟、即ち禹廟の義。【四】微禹款　左傳昭公元年に「劉子曰く、美なるかな、禹の功、明德遠し、禹を微かつせば、吾、其れ魚たらむか」とある。【五】彼呱　東坡の自註に「啓の廟あり」とある。書經に「禹曰く、予、創めて時に若ひ、塗山に娶る。辛壬癸甲、啓、呱呱として泣く」とあつて、彼の呱呱と泣いた人、即ち啓をも祀つてあるといふ義。【六】偶此桑　東坡の自註に「塗山氏の像を謂ふ」とある。桑は、貌の美なること。この美女と一對になつて居るといふので、禹と共に其妃の塗山氏の像があるといふ義。【七】秦祖嘗偕坐　東坡の自註に「柏翳を云ふ」とある。柏翳は即ち大費。史記秦本紀に「秦の先は、帝顓頊氏の苗裔、孫を女脩といふ。女脩、大業を生み、大業、大費を生み、禹と水土を平らぐ、これを柏翳となす、舜、姓嬴氏を賜ふ」とある。偕は詩經に「以妥以侑、以介景福」とあつて、貴人に相伴して食事をすること。【八】夏郊亦薦祿　東坡の註に「鯀の廟あり」と見ゆ。禮記の祭法に「夏后氏は、黃帝を禘して、鯀を郊にす」とある。郊は、天を祀る時に一所に祭ること。薦祿は祭の名、酒を尸に獻じ、祭り畢れば其酒を地に灌ぐこと。【九】淮海　書經に「淮海、惟れ揚州」とある。【一〇】弧矢且　東坡の自註に「淮南の人、相傳ふ、禹、六月六日を以て生まると。この日、數萬人、山上に會す、傳、記載せずと雖も、然れども、相傳ふる、かくの如し」とある。弧矢は禮記に「男子生まるれば、桑弧蓬矢を以て、六たび天地四方を射る」とあつて、誕生の朝といふ義。【一一】刖人有餘抗　東坡の自註に「荊山の下、卞氏の採玉坑あり、石色、玉の如く、鑱刖を受けず、取つて山下に出づれば、輒ち色を變じて、復た溫瑩ならず」とある。刖人は卞和。劉向新序に「荊人卞和、玉璞を得て之を荊の厲王に獻ず。王、以て謾となし、その左足を斷つ。武王即位、和、復た之を獻ず、その右足を斷つ。共王の即位するに及びて、和、乃ち玉璞を奉じて、荊山の中に哭す。王、人をして其璞を治せしめ、名づけて和氏の璧といふ」とある。なほ荊山に就いて、地理上の考證があるが、あまり長くなるから、すべて省略し、東坡は、唯だ傳說に從つて、假りに其地と認めたものとして置く。【一二】溫瓊　瓊は圭を以て柄とした玉勺といふのが、本義であるが、ここのは、唯だ玉の義。溫は、むくやかなる貌。【一三】龜泉　東坡の自註に「龜泉は、荊山の下に在り、色白くして甘し、眞に陸羽の謂はゆる石池漫流するもの。石記あり、云ふ、唐の貞元中、白龜に隨つて流れ出づ」とあり、名勝志に「龜泉は、荊山の東南に在り」と見ゆ。【一四】牛乳　上文に「色白くして甘し」とある。【一五】侍史　書き役、即ち秘書。

【題義】名勝志に「荊山は、懷遠縣の西南に在り、山の西北に采玉坑あり、一名抱璞巖」とあり、宋景濂の游記に「塗山の麓より復た北し、縣治を經て、折れて西すれば、約三里にして荊山に至る」とある。但し、王文誥の按に「懷遠縣は、鳳陽府鳳陽に在り、即ち宋の濠州なり、王註引くところ、臨沮の荊山は、誤つて、禹貢、嶓冢を導いて荊山に至るを以て、牽合して一となす」とある。この詩は、三月三日、即ち上巳の佳辰に、二子迨・過と共に、塗山・荊山に游んで、見るところを敍したのである。

【詩意】わが此生は、終に何處に落ちつくか、車を廻らして、すでに天下の半ば經めぐつた位。ここに樏に乘りし古しへの聖人の廟に詣で、又しても「禹を微かつせば吾其れ魚ならむか」といつて、歎息することを禁じ得なかつた。一處に祀られたのは、彼の呱呱として泣いたといふ其子の啓であるし、又美貌の塗山氏も、耦を爲し、その像が設けられて居る。秦祖の柏翳も、お相伴として祀られるであらうし、夏の時代には、その父の鯀をも郊に於て祭つた。揚州の人民は、しをらしくも、禹の誕辰を記して、非常に賑かな祭禮を行ふとの話。この塗山に向つて、荊山は碧相照らし、その下の揚子江は、水色清く、流を亂して徒渉することも出來る。かの足を切られた卞和の掘つた坑は、まだ殘つて居て、そこに產する美石は、むくやかなること玉の如くである。荊山の下で、龜泉は、木の梢のあ

たりより涌き出で、白く牛乳の色を爲せる水は、漫漫として石池に湛へて居る。わが倅どもは、務めて古しへを好み、骨を折つて色色の詮索をするので、隨行の侍史どもは、その勞多くして、汗を流すを笑ふ位。やがて、歸らうとすれば、天色ほの昏くして、蝙蝠が飛び出し、そして、遠い對岸には、炬火がありありと見えて居る。

【餘論】紀昀の評に「題、宜しく鋪張の語を作すべし、却つて、直起直收、最も古致となす」とあり、又、像設偶此桀の句に就いては「此桀、太だ佻」といつて居る。

淮上早發

澹月傾雲曉角哀。(一)
小風吹水碧鱗開。(二)
此生定向江湖老。
默數淮中十往來。(三)

淮上早發

澹月、雲を傾けて、曉角哀し、
小風、水を吹いて碧鱗開く。
この生、定めて江湖に向つて老いむ、
默して數ふれば淮中十たび往來。

【字解】【一】曉角　曉に吹きすさぶ角聲、角はラッパの如き形せるもの。【二】碧鱗　碧色の漣波、何遜の詩に「鯛鱗逆去水」とある。【三】十往來　王文誥の按に「元豐乙丑、起つて文登に知とし、すでに、吾生七往來の句あり。再後元祐、入つて復た出づ、その八。己巳、杭に守たり、その九、辛未、召し還され、ここに至つて復た出され、潁より揚に移る、故に云ふ」とある。

【題義】淮上は、淮水の岸上。洞天福地記に「淮瀆、源は南陽の桐柏山より出づ、唐州桐柏縣龍庭に在り」と見ゆ。この詩は、朝、早く發して、淮水の岸上を行くに就いて作つたのである。

【詩意】かすかなる殘月は、雲を傾けてほのめき出で、角聲曉を報じて、いとも悲しく、そよとの風は、水を吹いて、深碧の漣波が立つ。わが此生は、江湖に向つて老ゆる外あらざるべく、默して數ふれば、淮中を既に十たび往返して居る。

【餘論】紀昀は「語淺くして意深し」といつて居る。

次韻徐仲車

(一)惡衣惡食詩愈好。
恰是霜松囀春鳥。
蒼蠅莫亂遠雞聲。(二)
世上誰如公覺早。
八年看我走三州。(三)
月白當空水自流。
人間擾擾眞螻蟻。(四)

徐仲車に次韻す

惡衣惡食、詩、愈よ好く、
恰も是れ、霜松、春鳥を囀す。
蒼蠅、亂す莫れ遠雞の聲、
世上、誰か如かむ、公覺むるの早きに。
八年、看よ我が三州を走るを、
月白く空に當つて、水自ら流る。
人間擾擾、眞に螻蟻、

【字解】【一】惡衣惡食　論語に見ゆ。【二】遠雞聲　詩經に匪雞則鳴、蒼蠅之聲とあつて、その註に「蒼蠅の聲、遠雞の鳴くに似たるあり」と見ゆ。【三】走三州　東坡の自註に「元豐八年、予、登州に赴き、元祐四年、杭州に赴き、今、揚州に赴き、皆、仲車を見る」とある。【四】螻蟻　けらと蟻。

應笑人呼作鬪牛。　應に笑ふべし人の呼んで鬪牛と作すを。

【題義】徐中車、名は積、前に數ば見えて居た。この詩は、仲車に逢ひ、因つて、その詩に次韻したので、東坡の自註に「仲車耳聾」とある。

【詩意】君は、惡衣惡食に甘んじて、詩は愈よ上手になり、その工妙なることは、霜を帶びたる松の梢に、春を告ぐる鳥の囀る樣である。朝早く、蒼蠅は羣がり鬧いで、遠雞の鳴くに似て居るが、君は耳が聾であるから、少しも聞こえず、それよりも先に、早く目をさまして起き出でることは、世人誰も知るものがない。八年の間、予は三州を走り、そして、各處に於て君に逢つたが、今しも、月空に當つて輝き、水は自ら流れて、その景色の淸絕なるは、まことに喜ばしい。この浮世に於て、人人は擾擾として蠅蟻の如く忙しげであるが、君は例の通り、少しも聞き知らず、人が宛ら鬪牛の樣だといふ其譯さへ分からずして、唯だ笑つて居るであらう。

次韻林子中春日新隄書事見寄

林子中の春日新隄に事を書して寄せらるるに次韻す

東都寄食似浮雲。〔一〕　東都寄食、浮雲に似たり、

襆被眞成一宿賓。〔二〕　襆被、眞成一宿の賓。

收得玉堂揮翰手。〔三〕　收め得たり、玉堂、翰を揮ふの手、

却爲淮月弄舟人。　却つて、淮月、舟を弄するの人となる。

羨君湖上齋搖碧。〔四〕　羨む、君が湖上、齋、碧を搖かすを、

笑我花時甑有塵。〔五〕　笑ふ、我が花時、甑に塵あるを。

爲報年來殺風景。〔六〕　爲に報ず、年來の殺風景、

連江夢雨不知春。〔七〕　連江の夢雨、春を知らず。

【字解】【一】東都　汴京を云ふ。【二】襆被　頭巾と夜具。【三】玉堂　翰林。【四】齋　書齋。【五】甑　せいろ、食を蒸し炊ぐ具。【六】殺風景　邦語で云ふと同じ、はじめて李義山の雜纂に見ゆ。【七】不知春　東坡の自註に「來詩、芍藥春の句あり、揚州、近歳率ね此會をなし、花十萬餘枝を用ふ、吏、緣つて奸を爲す、民、極めて之を病む、故に此會を罷む」とある。

【題義】この詩は、林子仲が春日新隄見るところの事を敍した其作を寄せたから、次韻して之に酬いたのである。

【詩意】汴京に上つても、寄食久しからずして、直に外に出たから、さながら、浮雲の如く、襆被を用意して、ただ一晩厄介に成つたと同じである。そこで、翰林に在つて筆を揮つた手を收め、一轉して、淮上の月夜、舟を弄する人となつた始末。君が書齋を湖上に設けて、その影が碧波の中に搖蕩する樣は、まことに羨むべく、薄官の身は、常に貧にして、三月花の咲く頃、釜の中に塵のみあつて、食事も十分ならざるは、まことに、笑ふべきことである。この揚州の地に於て、芍藥會を廢止したのは、年來稀に見る殺風景の事であつて、雨絲冥濛、江水に連つて夢の如き折から、少しも、春らしき氣分のしないのは、今更致し方の無いことである。

【餘論】紀昀は「氣機疏暢、東坡七律の本色、乏しきところは、沈實の一致のみ」といひ、「齋搖碧」の三字、生」といつて居る。生は、卽ち生新の意であらう。

送陳伯修察院赴闕

陳伯修察院の闕に赴くを送る

裕陵(一)固天縱。筆有雲漢(二)姿。
裕陵、もとより天縱、筆に雲漢の姿あり。

嘗重連山(三)象。不數秋風(四)辭。
かつて連山の象を重んじ、秋風の辭を數へず。

龍騰與虎(五)變。貍豹(六)復何施。
龍騰と虎變と、貍豹、復た何をか施す。

我窮眞有數。文字乃見知。
わが窮、眞に數あり、文字は乃ち知らる。

聞君射(七)策日。妙語發噣咨(八)。
聞く、君が策を射るの日、妙語、噣咨を發す。

一日喧萬口。驚倒同舍(九)兒。
一日、萬口喧しく、驚倒す同舍の兒。

豈知二十年。道路猶遲遲。
豈に知らむや二十年、道路なほ遲遲たり。

苦言如藥石。瞑眩(一〇)終見思。
苦言、藥石の如く、瞑眩、終に思はる。

屈伸反覆手。獨於君可疑。
屈伸す反覆の手、ひとり君に於て疑ふべし。

四門(一一)方穆穆。行矣及此時。
四門、方に穆穆、行け、この時に及べ。

【字解】〔一〕裕陵　神宗を云ふ。〔二〕雲漢姿　詩經に「倬彼雲漢、爲章于天」とあつて、文彩爛然たる貌。〔三〕連山　夏の易、ここでは古い教學といふ義に用ふ。〔四〕秋風辭　文選に「漢の武帝、河東に幸して后土を祠り、羣臣と飮燕し、乃ち自ら秋風辭を作る」とあつて、その詞に秋風起兮白雲飛、草木黄落雁南歸とある。〔五〕龍騰與虎變　劉禹錫の賀監草書の詩に壁上筆蹤龍虎騰とあり、易に「大人虎變、其文炳たり」とある。〔六〕貍豹　揚子法言に「聖人は虎別、君子は豹別、辯人は貍別、貍變ずれば豹、豹變ずれば虎」とある。〔七〕射策　漢書顏師古註に「射策とは、難問疑義を爲り、これを策に書するを謂ふ。その大小を量り、署して甲乙の科となし、列して之を下し、彰顯せしめず、射むと欲するものあらば、その取るところに隨ひ、得て之を釋き、以て優劣を知る」とあつて、試問に應ずること。〔八〕噣咨　書經に「帝曰、噣咨若時登庸」とあつて、ここでは動語の義。〔九〕同舍兒　一つ家に止宿して居る人人。〔一〇〕瞑眩　藥力の强い爲に目が廻る。〔一一〕四門方穆穆　四門は皇居の四方の門、穆穆は深遠の貌。四方の門を開いて、天下の士を入れる。

【題義】施註に「陳伯修、字は師錫、建安の人。元祐の間、東坡は、三たび上章して、その學術淵源あり、行、すでに絜素、議論剛正、器識靖深、德行、古人に追蹤し、文章、當世に冠絕するを薦め、後に入つて校書郎となり、工部郎に遷り、徽宗、用ひて殿中侍御史となせしが、黨論に坐して官を削られ、郴州に徙つて卒す」とある。續通鑑長編に據ると、その校書郎となつたのは、元祐七年六月で、その時、監察御史であつたから、察院といつたのである。

【詩意】神宗皇帝は、天縱の英主、一たび筆を下せば、その文章は、雲漢の天に昭回するが如く、平生古しへの教學を研究せられて、漢の武帝の秋風辭の如き區區たる閒文字を弄せられることなく、龍虎騰躍して、その文、愈よ炳、辯人が貍より豹に變化した處で、もとより何の施すところもない位。わが運命の窮まれるは、まことに前定の事であるが、文字だけは、御目鏡に協つて、數ば褒賞を賜はつた。

君が初めて試驗に及第された時、神宗は、その文を賞して、有り難い御言を口づから發せられしにより、一日の間に、萬口喧しく之を傳へ、同宿の者どもを驚倒せしめた。然るに、二十年の久しきを經、遲遲として、道路の間に在つて、一向立身しないのは、まことに豫想外の事であつて、君の時弊を痛論した苦言は、藥石の如く、目が廻れば、はじめて、利き目が分かつて、有り難いと思はれる次第。天下の事は、手を反覆するが如く、屈すれば、やがて必ず伸びるものであるのに、君、ひとり、久しく屈した儘で伸びざるを見れば、まことに疑はしく思はれる。今、からりと四門を開いて、天下の士を迎へられること故、これから、上京して、折角の時に間に合ふ樣にするが善からう。

【餘論】紀昀の評に「これ又太だ板實」とある。

送張嘉父長官

張嘉父長官を送る

都城(一)昔傾蓋(二)。駿馬初服轅(三)。　都城、むかし傾蓋、駿馬、はじめて轅に服す。

再見江湖間。秋鷹已離鞲(四)。　再び見る江湖の間、秋鷹、すでに鞲を離る。

於今三會合。每進不少留。　今に三たび會合、每に進んで、少くも留まらず。

豫章(五)既可識。瑚璉(六)誰當收。　豫章、すでに識るべく、瑚璉、誰か當に收むべき。

微官有民社(七)。妙割(八)無雞牛。　微官、民社あり、妙割、雞牛なし。

歸來我益敬。器博用自周。　歸り來つて、我、益す敬す、器博くして、用、自ら周し。

百年子初筵。我已迫旅酬(九)。　百年、子、初めて筵す、われ已に旅酬に迫らる。

但當寄苦語。高節貫白頭。　但だ當に苦語を寄すべし、高節、白頭を貫く。

【字解】【一】都城　釋名に「都は人君の居るところ」とあつて、一國の首府、ここでは汴京を指す。【二】傾蓋　はじめて交を納ること。孔子家語に「孔子、郯に之き、程子に塗に遭ひ、蓋を傾けて語ること終日、甚だ親む。顧みて子路に謂つて曰く、束帛を取つて以て先生に送れ」とある。蓋は即ち車蓋。【三】服轅　轅は車轅、馬を車轅に繋ぎつける。【四】離鞲　鞲は、ゆがけ、ひぢあて、鷹匠の拳に嵌めるものを云ふ。【五】豫章　大木の名、樟。王註に「豫章は堅勁の木、最も長じ難し。その木生ずるの時、猶は草莽に在つて、未だ辨じ易からず。淮南子に曰く、豫章の生ずるや、七年にして後知るなり」とある。【六】瑚璉　論語に「子貢問うて曰く、賜や何如。子曰く、女は器なり。曰く、何の器ぞや。曰く、瑚璉なり」とある。【七】民社　論語に「哀公、社を宰我に問ふ、宰我對へて曰く、夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす、曰く、民をして戰栗せしむ」とある。【八】妙割　論語に「雞を割くに何ぞ牛刀を用ひむや」とあるに本づく。【九】旅酬　王註に「鍾、將に終らむとして、衆人に酒を勸む、これを旅酬といふ」とある。

【題義】張嘉父は、前に過泗上喜見張嘉父の題下に於て、その小傳を述べて置いた。この詩は、嘉父が何處かの知州となつて赴任するを送つたのである。

【詩意】むかし、汴京に於て、車蓋を傾けつつ、はじめて君と相知つた時、君は、駿馬が車轅に繫がれた如く、立身の緒口を開いた。次に江湖の間に於て、再び御目にかかつた時は秋鷹が弓がけを離れた樣で、まことに凄じい勢であつた。今は三度目の會合で、見る度ごとに、每每發展して、少しも

停止することがない。豫章の大木も、小さい時は分からぬが、かうなれば、直に識別すべく、瑚璉の器も、取り上げて用ふる人がある。たとひ、微官に居ても、聲望高ければ、民、これを仰ぐこと、社神の如く、料理庖丁を巧者に使へば、雞でも、牛でも、うまく割ける。そこで、會晤の後、われは益す敬慕の念を深くしたが、器博ければ、從つて用途も自然に周き譯である。君は、いつでも、燕射の際の正賓となつて、門より入つて席に就き、威儀儼然として打澄まして居られるに反し、われは、衆人と同じく、最後に振舞を頂戴するもので、とても、比較に成らぬ。唯だ終に臨んで、君に苦言を呈するのは、いくら年を取つても、あくまで高節を持し、決して屈せずに居よといふ其一事である。

【餘論】紀昀の評に「終に是れ應酬の作、說き來つて、理あれども情少く、意あれども致なく、局段、亦た太だ狹きを覺ゆ」とある。

軾在潁州與趙德麟同治西湖未成改揚州三月十六日湖成德麟有詩見懷次其韻

軾、潁州に在り、趙德麟と同じく西湖を治む。未だ成らざるに揚州に改めらる。三月十六日、湖成り、德麟詩有り、懷はる。其韻に次す

（一）太山秋毫（二）兩無窮。　太山秋毫、兩つながら窮まりなし、
（三）鉅細本出相形中。　鉅細、本と出づ相形の中。
（四）大千起滅（五）一塵裏。　大千起滅、一塵の裏、
未覺（六）杭潁誰雌雄。　未だ覺えず、杭潁、誰か雌雄。
我在錢塘拓（七）湖漾。　われ錢塘に在つて、湖漾を拓き、
（八）大隄士女爭（九）昌丰。　大隄の士女、昌丰を爭ふ。
（一〇）六橋橫絕（一一）天漢上。　六橋橫絕す天漢の上、
（一二）北山始與南屏通。　北山、はじめて南屏と通す。
忽驚（一三）二十五萬丈。　忽ち驚く二十五萬丈、
老葑席卷蒼雲空。　老葑、席卷して蒼雲空し。
揭來潁尾弄秋色。　竭來、潁尾、秋色を弄す、
一水縈帶（一四）昭靈宮。　一水、縈帶す昭靈宮。
坐思吳越不可到。　坐に思ふ、吳越到るべからず、
借君（一五）月斧修（一六）朦朧。　君に月斧を借して朦朧を修す。
（一七）二十四橋亦何有。　二十四橋、亦た何か有らむ、
（一八）換此十頃玻瓈風。　この十頃、玻瓈の風に換へむ。

【字解】【一】太山秋毫　前に送杜蔽陣の詩中に注して置いた。【二】兩無窮　莊子に「是も亦た一無窮、非も亦た一無窮」とある。【三】鉅細　老子に「物、之を形し、勢、之を成す」と。鉅に因つて鉅あり、細に因つて細あり、特に相形するのみなるを言ふ。【四】大千　前に端午徧遊の詩中に注して置いた。【五】一塵　前に次韻惠花栽の詩中に注して置いた。【六】杭潁誰雌雄　東坡の自註に「來詩、與杭爭雄」とあり。王直方詩話に「杭潁皆西湖あり、東坡、遞りに二州に守たり、潁人あり、座に在り、云ふ、內翰只だ西湖中に宿游すれば、便ち郡事を了すべし」とある。【七】湖漾　漾は清水。【八】大隄　樂府大隄曲に「朝發襄陽城、暮至大隄宿、大隄諸女兒、花豔驚郎目」とある。【九】昌丰　詩經に子之昌兮、子之丰兮とある、その貌の美なること。【一〇】六橋　王註に「先生、隄を作つて流を疏す、流を

破して橋を爲るもの凡そ六、並に今の蘇公隄上に在り」と記し、咸淳臨安志に「蘇隄南より來り、第一橋を映波といひ、第二橋を鎖瀾といひ、第三橋を望山といひ、第四橋を壓隄といひ、第五橋を東浦といひ、第六橋を跨虹といふ」とある。【一一】天漢　大空に同じ。【一二】北山始與南屏通　南屏は山名。東坡の墓誌に「杭州西湖、南北三十里、湖を環つて往來すれば、終日達せず。もし葑田を取りて、これを湖中に積んで長隄を築り、以て南北を通ずれば、葑田去つて、行くもの便ならむ」とある。【一三】二十五萬丈　東坡の奏劄に杭州西湖、秋に「國初より稍や廢して修めず、湖上の葑田を打量するに計二十五萬餘丈、度用二十餘萬工」とある。【一四】昭靈宮　東坡の昭靈侯廟碑に「景龍より以來、潁人、世〻これを焦氏臺に祠り、熙寧中、詔して公を昭靈侯に封ず」とある。【一五】月斧　酉陽雜俎に見えて、前に正月一日過ぎ淮揚客の詩中に注して置いた。【一六】朧臚　韓愈の衡嶽廟の詩に星月掩映雲朧臚とある。【一七】二十四橋　輿地紀勝に「隋、揚州に於て二十四橋を置き、並に城門坊市を以て名を著す。後、韓令坤省、州城を築き、市の阡陌を分ち、別に橋梁を立つ、謂はゆる二十四橋なるもの、或は存し、或は廢し、得て知るべからざるなり」とある。【一八】換此　施註に「歐陽公、揚より潁に移り、西湖の詩を作つて云ふ、都將二十四橋月、換得西湖十頃秋と。東坡、復た潁より揚に移る、この句、蓋し文忠の語を用ふるなり」とある。【一九】雷塘　王註に「揚州の東北十里に在り、煬帝葬るところの處。煬帝、平昔之に游び、多く宮人を從ふ、故に時に耕して寶釵を出す、驚龍は寶釵の飾なり」とある。【二〇】來弔古　東坡の自註に「德麟、揚に來つて寄居するを約せらる、亦た揚倅を求むるに意あり」とある。

（一九）雷塘水乾禾黍滿。　雷塘、水乾いて禾黍滿つ、

寶釵耕出餘驚龍。　寶釵、耕より出でて驚龍を餘す。

明年詩客來（二〇）弔古。　明年、詩客來つて古しへを弔ふ、

伴我霜夜號秋蟲。　わが霜夜、秋蟲を號ぶを伴へ。

【題義】東坡の潁州に在りし時、趙德麟と協議して、その地なる西湖の修治工事を起したが、未だ完成しない内に、揚州に轉任することに成つた。三月十六日、湖の工事は愈よ竣工したといふので、德麟が詩を作つて寄懷の意を示されたから、取り敢へず、これに次韻したといふのである。

【詩意】太山を大とし、秋毫を小とし、大小ともに各〻一無窮、巨細は本と相對的の者である。宇宙の大より見れば、この大千世界の起滅するのは、塵の如き微細なる處に於てするので、達觀すれば、杭潁二州、孰れが善いとか、惡いとか、そんな事の言へるものではない。われ、曩に杭州錢塘に在りし時、湖水を修治したので、大隄の上を步行する士女も、愈よ美しく見える樣に成り、六橋相連つて、天上を橫絕する如く、そして、長隄、すでに成れば、北山は、はじめて南屏山と通ずる樣になつた。湖中には、二十五萬餘丈といふ驚くべき葑田があつて、それをすッかり取り拂つた爲に、蒼雲の如く見えた眞菰の類は、跡方も無く成つて仕舞つた。ここに、潁水の下流に於て秋色を弄ぶと、湖水は、昭靈宮を縈帶して居るが、これも、大分埋もれかかつて居て、吳越なる杭州の西湖を思うて到るべからず、つまり、名は同じでも全く似ても居らぬ處から、月宮を修理する斧を借して、ほの暗きを直すと同じく、萬事、君に任かして、湖水を修治して貰ふことにした。聞けば、それが愈よ完成したとのことで、今居るこの揚州の二十四橋などは、全く物の數ならず、玻璃の如き水面を風吹き度る潁州の西湖に換へて、又ぞろ、其地に往つて見たいと思つて居る。揚州の一勝蹟たる雷塘は、水涸れ盡し、地を耕せば、往往、宮人の寶釵を拾ふことがあるが、驚龍の飾りは、まだ殘つて居る。明年、君が都合よく此に轉任して來て、古しへを弔ふならば、霜ふる夜、秋の蟲のすだくが如く、常に苦吟する予

を伴うて、縷縷遺蹟を尋ねるが善からう。

【餘論】紀昀は起首を許して「手に入つて奇偉」といひ、次に「經を用ひて揑合す」といひ、最後に「脱卸跡なし」といひ、乾隆御批には「六橋横絶の四句、すべて是れ實事、却つて、異樣の驚動を寫し來る。前は杭の西湖を以てし、潁の西湖を陪說し、後、歐陽の揚より潁に移るを以て、己の潁より揚に移るに比す。すべて、天然の證佐あり、會ま佳談を作し、絶唱を構成す」といつて居る。

次韻德麟西湖新成、見懷絶句

德麟の西湖新に成りて懷はるるの絶句に次韻す

(一)壺中春色(二)飲中僊。　壺中の春色、飲中の僊。
(三)騎鶴東來獨惘然。　鶴に騎して、東來、ひとり惘然、
猶有(四)趙陳同(五)李郭。　猶ほ趙陳の李郭に同じきあり、
不妨同泛過湖船。　妨げず同じく泛ぶ過湖の船。

【字解】【一】壺中春色　東坡の自註に「洞庭春色を謂ふなり」とある。【二】飲中僊　杜甫に飲中八仙歌がある。【三】騎鶴　施註に「世傳ふ、神仙あり、人を度せむと欲し、問うて曰く、汝、仙を欲するか、揚州たらむと欲するか、十萬錢を欲するか。答へて曰く、但だ腰纏十萬貫、鶴に騎して、揚州に上るを欲するのみ」とある。【四】趙陳　趙德麟と陳履常、前に數ば見ゆ。【五】李郭　後漢書に「郭林宗、洛陽に游びて、李膺を見る。膺、大に之を奇とし、遂に友とし善し。後、鄉里に歸る。衣冠の諸儒、送つて河上に至る。車數千輛、林宗惟だ膺と舟を同じうして濟る。衆賓、これを望み、以て神仙となす」とある。

【題義】この詩は、潁州西湖の工事竣りしに因り、趙德麟から寄懷の絶句を送つて來たから、乃ち次韻して、これに酬いたのである。

【詩意】予は、君から貰つた洞庭春色の美酒に醉うて、飲中の仙となり、そして鶴に乘じて、東、潁州より、この揚州に來たが、唯だ一人で、茫然自失するばかりである。君と陳履常とは、さながら、當年の李郭に同じきが故に、同じく一舟に乘じて湖水を過ぎ、工事完成後の景色を見ることは、もとより妨げざれども、唯だその便なきを嘆ずるのみである。

再次韻德麟新開西湖

再び德麟の新に西湖を開くに次韻す

使君不用(一)山鞠窮。　使君用ひず、山、鞠窮するを、
饑民自逃泥水中。　饑民、自ら逃る泥水の中。
欲將(二)百瀆起凶歲。　百瀆を將て、凶歲を起さむと欲す、
免使(三)甔石愁揚雄。　甔石をして揚雄を愁へしむるを免る。
西湖雖小亦(四)西子。　西湖、小と雖も、亦た西子、
縈流作態清而丰。　縈流、態を作し、清にして丰。
千夫(五)餘力起三閘。　千夫の餘力、三閘を起し、

【字解】【一】山鞠窮　山の窮に苛めつけられる。【二】百瀆　百川に同じ。【三】甔石　漢書揚雄傳に「清淨寡欲、家に甔石の儲なきも晏如たり」とある。【四】亦西子　東坡の杭州で作つた詩に、「欲把西湖比西子、淡粧濃抹也兩宜」とある。ここのは、潁州の西湖を指して云ふ。【五】餘力起三閘　閘は水門、東坡の自註に「去歲、潁州災傷、予、

焦（六）陂下與長淮通。　焦陂、下、長淮と通ず。
十年憔悴塵土窟。　十年憔悴、塵土の窟、
清瀾一洗啼痕空。　清瀾、一洗して啼痕空し。
王（七）孫本自有（八）仙骨。　王孫、本と自ら仙骨あり、
平生宿衞明（九）光宮。　平生、宿衞す明光宮、
一（一〇）行作吏人不識。　一行、吏と作つて、人識らず、
正似雲月初朦朧。　正に雲月の初は朦朧たるに似たり。
時臨此水照冰雪。　時に此水に臨んで、冰雪を照らし、
莫遣白髮生秋風。　白髮をして秋風に生ぜしむる莫れ。
定須却（一一）致兩黃鵠。　定めて須らく兩黃鵠を却致し、
新與上帝開濯龍。　新に上帝と濯龍を開くべし。
湖成君歸侍帝側。　湖成り、君、歸つて帝側に侍す、
燈花已綴釵頭（一二）蟲。　燈花、すでに綴る釵頭の蟲。

奏して、黃河の夫、萬人を發め、本州の溝を開かむことを乞ふ。これに從ふ。餘力を以て三閘を作り、焦陂の水を通じて、西湖を浚ふ」とある。【六】焦陂　潁州志に「州南四十里に在り、唐の永徽中、刺史柳寶積の開くところ、歐陽修の詩、焦陂八月新酒熟、秋水魚肥膾如玉、清和兩岸柳鳴蟬、直到焦陂不下船」とある。【七】王孫　前に數ば見ゆ、趙德麟を指して云ふ。【八】有仙骨　神仙傳に「神、墨子に告げて曰く、子に仙骨あり」といひ、杜甫の詩に自是君身有仙骨」といつてある。【九】明光宮　三輔記に「武帝、仙を求め、明光宮を起し、燕趙の美女三千を發して之に充し、掖庭の令、その籍を總ぶ」とある。【一〇】一行作吏一去して吏となる。嵆康の絶交書に「山澤に游んで、魚鳥を觀れば、心、甚だ之を樂む。一行吏と作り、この事、便ち廢す」とある。【一一】却致兩黃鵠　鴻卻陂を毀つといふことを文字上から、かく云つたのである。後漢書許揚傳に「成帝の時、翟方進、奏して、鴻卻陂を毀つ。建武中、太守鄧晨、その功を修復せむと欲し、揚が水脈を曉るを聞き、召して、ともに之を議す。揚曰く、むかし、成帝、方進の言を用ふ、尋いで自ら上天を夢む。天帝怒つて曰く、何が故に、我が濯龍淵を敗る、と。この後、民、その利を失ひ、多く饑困を致す。明公、今廢業を興立し、國を富まし、民を安んぜば、童謠の言、將に此に徵あらむとす」とある。【一二】釵頭蟲　韓愈の燈花の詩に「詩釐排金粟、釵頭綴玉蟲、更煩將喜事、來報主人翁」とある。

【題義】　この詩は、重ねて趙德麟の「新に西湖を開く」と題する詩に次韻したのである。

【詩意】　予は、潁州の長官として、山に苦められることはなかつたが、饑民は、自然、泥水中に逃れ、常に水の爲に弱つて居た。そこで、多くの溝洫を修治し、揚雄輩をして、家に儋石なきの嘆を免れる樣にさせたいと思つて居た。殊に、西湖は、形こそ小さいが、その風景の美なること、矢張、西施に比すべく、流れめぐる樣は、趣もあり、清幽にして且つ美しい。そこで、予は、建議の結果、餘力を以て三個の水門を造り、焦陂の水を直に淮河に通ずる樣にし、從つて、西湖をも浚渫した。かくて、十年の久しき憔悴して塵土の底に在りし西施湖も、清瀾が滿ち湛へて、啼痕を一洗して仕舞つた樣な工合。王孫たる君は、本來、自然に仙骨があつて、平生、明光宮に宿衞する身分であるが、一去して地方の小吏となりし後は、人も識別せず、たとへば、雲に隱るる月が、その初、ぼんやりして居る樣である。そこで、時時、この湖水に臨んで、氷雪の顏容を照らし見ること然るべく、秋風の吹くにつれて、白髮の生えぬ樣にありたい。この上は、名にしおふ鴻却陂を本の如くし、新に天帝の爲に濯龍淵を開けば善いので、湖水の工事がすツかり竣工すれば、歸つて、天子の御側に侍することと

なるべく、その時は、燈花、喜を報じて、釵頭に玉蟲を綴る樣な祥瑞を見ることと思ふ。

【餘論】西湖雖小亦西子の數句に就いて、紀昀は「應酬の語、却つて寫し得て濃至にして驚動」といつて居る。

到官病倦、未嘗會客、毛正仲惠茶、乃以端午小集石塔、戲作一詩爲謝

官に到りて病倦、未だ嘗て客を會せず。毛正仲、茶を惠まる。乃ち端午を以て石塔に小集し、戲に一詩を作つて謝を爲す

我生亦何須、一飽萬想滅。　わが生、亦た何ぞ須ひむ、一飽、萬想滅するを。
胡爲設方丈(一)、養此膚寸舌(二)。　胡すれぞ、方丈を設けて、この膚寸の舌を養ふ。
爾來又衰病、過午食輒噎(三)。　爾來、又衰病、午を過ぐれば、食、輒ち噎ぶ。
繆爲淮海帥(四)、每愧廚傳闕(五)。　繆つて、淮海の帥となり、每に愧づ廚傳の闕くるを。
爨無欲清人(六)、奉使免內熱(七)。　爨ぐに、淸めむと欲するの人なく、使を奉ずるも內熱を免れむ。
空煩赤泥印(八)、遠致紫玉玦(九)。　空しく赤泥の印を煩はし、遠く紫玉玦を致す。
爲君伐羔豚、歌舞菰黍節(一〇)。　君の爲に羔豚を伐ち、歌舞す、菰黍の節。
禪窗麗午景、蜀井(一一)出冰雪。　禪𥦗、午景麗かに、蜀井、氷雪を出す。
坐客皆可人(一二)、鼎器(一三)手自潔。　坐客皆可人、鼎器、手、自ら潔くす。
金釵(一四)候湯眼、魚蟹(一五)亦應訣。　金釵、湯眼を候し、魚蟹、亦た訣に應ず。
遂令色香味、一日備三絕。　遂に色香味をして、一日に三絕を備へしむ。
報君不虛受、知我非輕啜。　君に報ず、虛しく受けず、知る、我が輕啜に非ざるを。

【字解】【一】方丈　四方各一丈ばかりの小さな室、天竺の維摩の室が丁度さうであつた。【二】膚寸　手の指四本を膚とし、指一本を寸とす、それだけの厚み。【三】噎　咽ぶ。【四】淮海帥　揚州に轉任せしことを云ふ。【五】廚傳闕　廚は飲食、傳は傳舍、つまり宿舍並に賄の費用が不十分だと云ふこと。【六】爨無欲清人　莊子に「葉公子高、仲尼に問うて曰く、吾が食するや、粗を執つて、臧きをせず、爨ぐに、淸めむと欲するの人なし。今、吾朝に命を受けて、夕に氷を飮む、我其れ內熱するか」とある、炊ぐに多く薪を用ひざること。【七】內熱　心配の爲に心中に煩熱を覺ゆること。【八】赤泥印　封印、前に「送劉寺丞」の詩中に注して置いた。【九】紫玉玦　茶の名、前に「焦千之」の詩中に注して置いた。【一〇】菰黍節　端午、卽ち五月五日。周處の風土記に「仲夏端午、筒粽を進む、一名角黍、菰葉を以て黏米を裹み、以て陰陽に象つて相包む」とある。【一一】蜀井　王註に「揚州に蜀岡あり、岡上に井あり、水最も茶に宜し」とあり、施註に「揚州石塔寺の旁に蜀井あり、相傳へて云ふ、泉脈、蜀と相通ずと。故に、紙工、その水を汲んで、以て麻牋を造る」とある。【一二】可人　よき人、前に「劉孝老、柏石岡、題中公扇」等の詩中に注して置いた。【一三】鼎器　卽ち茶器。【一四】金釵　侍坐の女。【一五】魚蟹　ともに眼の名、前に「試院煎茶」の詩中に注して置いた。

【題義】毛正仲は王註に「正仲、名は漸、衢の江山の人」とあり、宋史に「毛漸、字は正仲、進士に

第し、哲宗の朝、江南兩浙轉運副使を經たり。浙部、水溢る、長安堰を起して鹽官に至り、淸水浦を徹して海に入る。祕閣校理に累遷し、龍圖閣學士に進む」とある。續通鑑長編に據れば、その兩浙運副に在官して居たことが、元祐七年六月に見えて居るから、茶は、矢張、浙中から送つたものと見える。石塔は寺名、前に將レ赴二文登一の詩中に注して置いた。なほ、雞肋集に晁无咎の次韻のあるを見れば、无咎は、矢張、小集に列席した一人であらう。この詩は、東坡が揚州著任の後、病氣で、萬事懶く、未だ嘗て客を會したこともなかつたが、毛正仲が浙中から新茶を送つて寄越したから、五月五日、卽ち端午の佳節に、石塔寺に於て小集を催し、戲に作つて其禮を申し述べたのである。

【詩意】 わが生は、常に足らぬ勝ちであるが、唯だの一度でも善いから十分に飽食して、萬想を滅することが出來たらばといふ了見もないのに、如何なれば、平生方丈の席を設けて、厚みもない舌を養つて居るのであるか。その後、予は、衰病に瀕し、眞晝を過ぎると、食事をしても、咽喉にむせて、どうしても納まらない。今や、誤つて揚州の帥官となり、折角著任したが、宿舍竝に賄の手當等、極めて手薄なことには、甚だ閉口して居る。そこで、炊ぐにも多くの薪を用ひず、この分では、重大な使命を帶びて出かけるにしても、心內煩熱することは、決して無からう。然るに、君の處から、態態、朱肉の封印を施して、遠く銘茶を贈られたのは、まことに、有り難い。そこで、君の爲に羊や豚を料理し、粽を造る端午の佳節に當つて、歌舞を試みた。それから、ここ石塔寺に小集を催すと、寺の窓には、眞晝の日光麗はしく、蜀井から汲んだ水は、氷雪よりも冷かである。坐客は、皆善い人であるし、茶器は、自ら淸潔に始末し、侍坐の女をして、湯のたぎるを候せしめ、魚眼に次ぐに蟹眼を以てし、丁度善い加減の處で茶にさすことも、祕傳に協つて居た。そこで、色香味の三者とも、一日の內に打揃つて、秀絕ならしむることを得た。ここに君に報じて、折角頂戴したのであるから、虛しく受納せず、從つて、予は、輕しく其茶を飮んだものでないことを御承知ありたしと申し上げる次第である。

雙石

雙石

至揚州、獲二石、其一綠色、岡巒迤邐、有穴達于背、其一正白、可鑑、漬以盆水、置几案間、忽憶在潁州日、夢人請住一官府、榜曰仇池、覺而誦杜子美詩曰、萬古仇池穴、潛通小有天、乃戲作小詩、爲僚友一笑。

【訓讀】 揚州に至つて、二石を獲たり。其一は綠色、岡巒迤邐、穴ありて背に達す。その一は、正白、鑑すべし。漬すに盆水を以てして、几案の間に置く。忽ち憶ふ、潁州に在るの日、夢に、人、一官府に住せむことを請ふ、榜して仇池といふ。覺めて、杜子美の詩を誦して曰く、萬古仇池の穴、潛に通ず小有天と。乃ち戲に小詩を作つて、僚友の一笑となす。

夢時良是覺時非。　夢むる時は良に是、覺むる時は非、――【字解】〔一〕汲水埋盆　韓愈の

(一)汲井埋盆故自癡。　井を汲み盆を埋めて、故らに自ら癡なり。

但見玉峰橫太白。(二)　但だ見る、玉峰の太白に橫はるを。

便從鳥道絕峨眉。(三)　便ち鳥道より峨眉を絕つ。

秋風與作煙雲意。　秋風、ともに煙雲の意を作し、

曉日令涵草木姿。　曉日、草木の姿を涵さしむ。

一點空明是何處。(四)　一點空明、是れ何の處、

老人眞欲住仇池。(五)　老人、眞に仇池に住まむと欲す。

詩に老翁貯桐童見似、汲水埋盆作下池とある。【二】太白　山名、唐書地理志に「鳳翔府郿縣に太白山あり」と見ゆ。【三】鳥道絕峨眉　鳥道は鳥のみ通ふ樣な險路。峨眉は山名、前にも見ゆ。李白の蜀道難に、西當太白有鳥道、可以橫絕峨眉巓とある。【四】空明　茅君內傳に「三十六洞、第二委羽の洞、名づけて大有空明の天といふ」とある。【五】仇池　王注に「仇池の亦、後漢書、氐人の居るところなり。方百頃、四面斗絕、その山、下石上土、形、覆壺に似たり、今、成州上祿縣に在り」と記し、施注に「三秦記、仇維山上、池あり、故に仇池といふ。山は、倉洛二谷の間に在り、形、覆壺の如し。仇池記に曰く、仇池百頃、周廻九千四十步、天形、四方壁立千仞、自然樓櫓、人功に踰ゆるあり。仇池、凡そ二十一道、攀援して上るべし、後漢西南夷傳の註に見ゆ」とある。

【題義】敍の意味は——揚州に著任してから、二個の石を得た。その一は綠色にして、岡巒之をめぐり、穴があつて、其背に達して居る。その一は、正白にして鑑すべきばかり。そこで、これを盆水中に漬して、几案の間に置いた。ふと思ひ出せしは、さきに潁州に在りし時、夢に人あり、一官府に留まらむことを乞うたが、扁額に仇池と書いてあつた。覺めて後、杜甫の詩、萬古仇池穴、潛通小有天といへるを朗吟した。これは、今石を獲ることの前表らしく考へられる處から、戲に小詩を作つて、僚友の一笑に供した。

【詩意】夢みる時は誠に是で、覺むれば非、しばらく前に夢を見、そして、今石を獲たから、井水を汲み、盆中に漬しなどして、馬鹿らしい程、懇に世話をして居る。その石は、玉峰が太白山の前に橫ふが如く、鳥道斜に通じて峨眉の巓に橫絕する樣な趣がある。秋風は、その石をして煙雲の態を作さしめ、朝日は、盆中に草木の姿を涵さしめる。そこで、空明の天と稱せらるる洞窟は、何處に在るか。予は、これより其地に往いて、仇池に住み、夢の告を虛しくしない樣にしたいと思つて居る。

和陶飮酒二十首　陶の飮酒二十首に和す

吾飮酒至少、常以把盞爲樂、往往頹然坐睡、人見其醉、而吾中了然、蓋莫能名其爲醉爲醒也、在揚州時、飮酒過午輒罷、客去、解衣盤礴、終日歡不足、而適有餘、因和淵明飮酒二十首、庶以髣髴其不可名者、示舍弟子由・晁无咎學士。

【訓讀】吾、酒を飮むこと至つて少く、常に盞を把るを以て樂となし、往往にして頹然坐睡す。人、その醉ふを見れども、しかも、吾は、中、了然たり。蓋し能く、その醉たり醒たるを名づくるなきなり。揚州に在る時、酒を飮み、午を過ぐれば輒ち罷み、客去れば、衣を解いて盤礴す。終日、歡、

足らずして、適は餘あり。因つて、淵明の飮酒二十首に和す。庶はくは、以てその名づくべからざるものを髣髴せしめむ、舍弟子由・晁无咎學士に示す。

我不レ如二陶生一。世事纏二綿之一。　われ、陶生に如かず、世事、これを纏綿す。

云何得二一適一。亦有レ如二生時一。　ここに何ぞ一適を得む、亦た生時の如きあり。

寸田無二荊棘一。佳處正在レ茲。　寸田、荊棘なく、佳處、正に茲に在り。

縱レ心與レ事往。所レ遇無二復疑一。　心を縱にして、事と往く、遇ふところ、復た疑ふなし。

偶得二酒中趣一。空杯亦常持。　偶ま酒中の趣を得、空杯、亦た常に持す。

【題義】 敍の意味は――予は、酒を飮むこと、極めて少量であつて、ただ盞を手に把ることを以て樂となし、動もすれば、居睡をして居る。そこで、人は之を見て、醉つて居るといつて居るが、予は心中了然として、醉つて居るか、醒めて居るか、自分でも能く之に名づくることが出來ない。揚州に在る時、酒を飮んで、亭午を過ぐれば罷め、相手の客が去れば、衣を脫いで、しどけなき樣をして居る。終日、格別喜ばしいこともないが、快適は餘あるを覺えた。今、陶淵明の飮酒二十首に和して、この詩を作つたので、希はくは、醉醒、いづれとも名づけ難きものを彷彿として、ここに顯すことが出來たであらう。仍つて、これを舍弟子由竝に晁无咎學士に見せることにした。

【詩意】 予は、淵明先生に及ばないので、世事が、いつまでも付き纏うて居る。そこで、如何にして一快適を得べきか、もし之を得たならば、さながら世に生まれ出る其時の樣であらう。今や、わが方寸の內、荊棘の之を塞ぐなく、佳處、正に此に在りといふべく、心の儘にして、事の往くに隨ひ、そして、法度を越ゆることなく、遇ふところは、いづれも、必然な事である。偶然にも酒中の趣を得たから、空杯でもかまはず、常に之を手に持つて、それで打澄まして居る。

【餘論】 紀昀の評に「この首、陶意に純、首句、義に於て、應に我生不レ如レ陶に作るべし。然れども、四句、乃ち生の字あれば、固より稱して陶となす、未だ生造を免れず」とある。

(一)二豪詆二醉客一。氣湧胸中山。　二豪、醉客を詆る、氣は湧く胸中の山。

澹然似二冰釋一。亦復在二一言一。　澹然として、冰の釋くるに似たり、亦た復た一言に在り。

(二)嗇氣實二其腹一。云當レ享二長年一。　嗇氣、その腹を實たす、云ふ、當に長年を享くべしと。

少飮得二徑醉一。此祕君勿レ傳。　少飮、徑に醉ふを得、この祕、君、傳ふる勿れ。

【字解】 〔一〕二豪　劉伶の酒德頌に「貴介公子、搢紳處士あり、吾が風聲を聞いて、その所以を議す。先生、方に甖を捧げ、槽を承け、杯を銜み、醪に漱ぎ、思ふなく、慮るなく、その樂陶陶、兀然として醉ひ、悅爾として醒む、二豪、側に侍して、蜾蠃の螟蛉との如し」とある。〔二〕嗇氣　老子に「その心を虛しくし、その腹を實たす」とあるに本づく。

【詩意】 貴介公子と搢紳先生と、この二豪が醉客を詆り、その氣槪の凄まじきは、胸中に山を湧き出

でしむるばかり。しかし、二豪をして、渙然その疑を氷釋せしめるは、唯だの一言で十分なので、何でも、人は心を虛しうして、腹を實たしさへすれば、長年の壽を享けることが出來る。就中、予の如く、少し飮んで直に醉ひ、それで、浮世の事を忘れて仕舞ふのは、まことに結構なことで、この祕傳は、なかなか、人に傳へることは出來ない。

【餘論】紀昀の評に「これ陶に似ず、亦た本色を見す、殊に取るべきなし」といつて居る。

道喪士失己。出語輒不情。　道、喪うて、士、己を失ふ、語を出す、輒ち情ならず。

（一）江左風流人。醉中亦求名。　江左風流の人、醉中亦た名を求む。

淵明獨淸眞。談笑得（二）此生。　淵明、ひとり淸眞、談笑、この生を得たり。

身如受風竹。（三）掩冉衆葉驚。　身は風を受くるの竹の如く、掩冉として衆葉驚く。

俯仰各有態。得酒詩自成。　俯仰、各態あり、酒を得て、詩、自ら成る。

【字解】〔一〕江左風流人　江左は東晉以後、建業に都せしが故に云ふ。この時分、なほ淸談の餘弊を存し、士大夫は、放逸な事として居た。南史王儉傳に「江左の風流宰相、唯だ謝安あり」とある。〔二〕得此生　陶淵明の飮酒の詩に嘯傲東軒下、聊復得此生」とある。〔三〕掩冉　さわさわと動く貌。

【詩意】大道が地に落ちて、行はれぬ樣になれば、士人も亦た己を失つて操守なく、話をしても、その言ふところは、人情に背いて居る。されば、江左風流の人人も、全然、浮世を思ひ切ることが出來ず、醉中に於ても、亦た虛名を求めて居た。しかし、陶淵明は、ひとり淸眞であつて、飮酒談笑の間に於て、この生を全うして居た。その身は、風を受くる竹の如く、ひとり挺然として居て、多くの草木の葉が掩冉として靡くのを見下して居る。そこで、俯仰の間、萬物各態を爲し、酒を得さへすれば、詩は、自然に出來るのである。

【餘論】紀昀は「これは、參するに本色を以てす、未だ嘗て佳ならずんばあらず」と云つて居る。

（一）蠢蠕食葉蟲。仰空慕高飛。　蠢蠕、葉を食ふの蟲、空を仰いで高飛を慕ふ。

一朝傳兩翅。乃得黏網悲。　一朝、兩翅を傅くれば、乃ち網に黏するの悲を得。

啁啾同巢雀。沮澤疑可依。　啁啾、同巢の雀、沮澤、依るべきを疑ふ。

（二）赴水生兩殼。遭閉何時歸。　水に赴いて兩殼を生じ、閉に遭うて何時か歸らむ。

二蟲竟誰是。一笑百念衰。　二蟲、竟に誰か是なる、一笑、百念衰ふ。

幸此未化間。有酒君莫違。　幸に此に未だ化せざるの間、酒あり、君、違ふなかれ。

【字解】〔一〕蠢蠕　蠢然として蠕動する蟲、卽ち蝶蛾の幼蟲、ここでは、主として、柑橘類に付く蟲を指す。陸龜蒙の蠹化に「橘の蠹、大さ、小指の如く、葉を齧して仰ぎ蓄み、飢蠶の速なるが如し。蛻して蝴蝶となつて、寒に變え、翅輕く、瞥然として去る。須臾に、蜘網を犯して、之に罹し、絲を引けば還つて纏はれ、牢として桎梏の若し」とある。〔三〕赴水生兩殼　禮記に「季秋の月、爵、大水に入つて蛤となる」とある、爵は卽ち雀。

【詩意】蠢然蠕動、葉を食つて居る蛆蟲は、天を仰いで高飛したいと思つて居るが、一朝、兩の翅を傅けて飛べる樣に成ると、蜘蛛の網に黏ばり付いて、捕はれるといふ悲がある。啁啾として終日囀つて居た同巢の雀は、沮洳沼澤が住み善いと思つて居たが、一旦、水に赴き、兩殼を生じて蛤となると、その殼が閉ぢたッ切りで、何時歸るといふ目的もない。この二蟲は、果して其當を得たものか、誰しも、哄然一笑して、樣樣の慾望は、すッかり消えて無くなるであらう。人も未だ他物に化し去らざる此間に於て、安心立命を求めて十分に樂むが善いので、酒あらば、君、これに違ふなく、勝手に召し上るが善からう。

【餘論】紀昀の評に「託興深妙にして、氣息、亦た復た古に近し」といひ「結二句、形神、ともに似たり」といつて居る。

小舟眞一葉。下有暗浪喧。
小舟、眞に一葉、下に暗浪の喧しきあり。

夜棹醉中發。不知枕几偏。
夜棹、醉中に發し、知らず枕几の偏するを。

天明問前路。已度千重山。
天明、前路を問へば、すでに千重の山を度る。

嗟我亦何爲。此道常往還。
嗟す、我、亦た何をか爲さむ。この道、常に往還。

未來寧早計。既往復何言。
未來は寧ろ早計ならむや、既往は、復た何をか言はむ。

【詩意】一葉に比すべき小舟があつて、舟底には暗浪の騷がしきが聞こえる。醉中、夜、棹を移して舟を漕ぎ出し、枕几の片寄つて居るをも知らなかつた。やがて、夜あけに成つて、前路を問ふと、最早、千重の山を後にして、大分遣つて來たとのことである。この時に當つて、我は如何にすべきか、毎毎往還する道ではあるが、どうも安心の出來ぬ氣がする。但し、未來の事を論ずるのは、決して早計ではなからうか。既往の事は、いくら何といつても仕方がない。

【餘論】紀昀の評に「時に委せ、運に任かすの意」とある。

百年六十化。念念竟非是。
百年、六十にして化す、念念、竟に是に非ず。

是身如虛空。誰受譽與毀。
この身、虛空の如く、誰か譽と毀とを受けむや。

得酒未舉杯。喪我固忘爾。
酒を得て未だ杯を擧げず、我を喪へば、もとより爾を忘る。

倒牀自甘寢。不擇菅與綺。
牀を倒にして、自ら寢ぬるに甘んず、擇ばず、菅と綺と。

【字解】【一】倒牀　寢臺を倒さにする。【二】菅與綺　菅はアンペラ、席の如きもの。綺は、奇麗な織物の夜具。

【詩意】百年と決まつて居る命が、六十で死ぬとして、一たび回顧すれば、從前の事は、遂に是に非ず、從つて、後悔すべきことのみである。この身は、虛空の如く、本來一物なく、毀譽を受くべき筈の物ではない。ここに、酒を得て、未だ杯を擧げず、飲まぬ先から醉つた樣な氣がして、すでに我

を喪へる上は、もとより、汝をも忘れて居る。そこで、寢臺を倒にして、寢ぬるを甘んじ、その上にかける夜具などは、如何な物でも、かまはない。

【餘論】 紀昀は「次句、佳ならず」といつて居る。

頃者大雪年。海派翻玉英。　頃ろ大雪の年、海派、玉英を翻す。
有士常痛飲。飢寒見眞情。　士あり、常に痛飲、飢寒、眞情を見る。
牀頭有敗榼。孤坐時一傾。　牀頭に敗榼あり、孤坐、時に一傾。
未能平體粟。且復澆腸鳴。　未だ體粟を平ぐる能はず、且つ復た腸に澆いで鳴る。
脫衣裹凍酒。每醉念此生。　衣を脫して凍酒を裹み、每に醉うて此生を念ふ。

【字解】 〔一〕 海派　海の分れ、海灣に同じ、一に海波に作る。〔二〕 翻玉英　雪が降る、これは嘉祐庚子の歲の事で、大雪與蔚氏飮の詩がある。

【詩意】 この頃、大雪の降ることがあつて、海灣の上に、六出紛紛として翻つた。その時、予は、常に痛飮し、飢寒に因つて、眞情を見るを得た。臥牀の邊には、古りたる酒壺があつて、孤坐しつつ、時たま、これを傾けた。それでも、肌に粟だつことを醫することが出來ず、腸に澆ぎかけると、聲を發して鳴るが如くであつた。そこで、衣を脫ぎ、凍れる酒を裹んで暖め、一醉する每に、つくづくと我が生を念ふ。

我坐華堂上。不改麋鹿姿。　われ、華堂の上に坐して、改めず麋鹿の姿。
時來蜀岡頭。喜見霜松枝。　時に蜀岡の頭に來り、喜んで見る霜松の枝。
心知百尺底。已結千歲奇。　心に知る百尺の底、すでに、千歲の奇を結ぶを。
煌煌凌霄花。纏繞復何爲。　煌煌たる凌霄花、纏繞、復た何をか爲す。
舉觴酹其根。無事莫相羈。　觴を舉げて其根に酹す、無事、相羈する莫れ。

【字解】 〔一〕 千歲奇　史記龜策傳に「伏靈は千歲の松根なり」とある。伏靈は卽ち茯苓。〔二〕 凌霄花　のうぜんかつら、白樂天の詩に「有木名凌霄、擢秀非孤標、偶依一株樹、遂抽百尺條、託根附樹身、開花寄樹梢」とあり、孔穎達の詩疏に「一名は陵時」とあり、本草に「紫葳は凌霄花なり、蔓生、大木に依り、久しうして延びて巓に至る、その花黃赤」とある。〔三〕 酹　酒を注ぎかける。

【詩意】 予は、華堂の上に坐して居ても、麋鹿の姿を改めず、時時、蜀岡の邊に來て、霜を帶びたる松の老木を見て居る。おもふに、百尺の巨幹の下には、屹度、千歲を經て出來るといふ伏苓がくツ付いて居るに相違ない。凌霄花は、煌煌として見事であるが、その卷き付くのが厄介である。そこで、杯を擧げて、松の根に酒を注ぎかけ、予も遠からず、官を罷める積りであるから、誰でも、事端を起さず、相猜まぬ樣にして貰ひたいといつた。

【餘論】 これは、松樹を以て自ら比し、その胸中に蘊蓄するところあるを云つたのである。凌霄花の

二句に就いて、紀昀は「吏事の煩に比するなり」といつたが、これは、小人輩の相猜むことを云つたので、現に、王文誥は、結二句に就いて「公、杭に倅たるの時、すでに、市人拍レ手笑、狀如二失レ林鸞一の句あり、この章の詩旨、久しからずして山に還り、意を決して復た更に入らず、羣小相猜むを須ふるなきなり」といつて居る。なほ、紀昀は、全首を評して「氣骨渾成、意思は森森たる芒角」といつたが、これは大に當つて居る。

芙蓉在秋水。時節自闓開。(一)　芙蓉は秋水に在り、時節、自ら闓開。
清風亦何意。入我芝蘭懷。(二)　清風、亦た何の意、わが芝蘭の懷に入る。
一隨采折去。永與江湖乖。　一たび、采折に隨つて去り、永く江湖と乖く。
斷絲不復續。斗水(三)何足棲。　斷絲、復た續かず、斗水、何ぞ棲むに足らむ。
不如玉井蓮(四)。結根天池泥。　如かず、玉井の蓮、根を結ぶ天池の泥。
感此每自慰。吾事幸不諧。　これに感じて、每に自ら慰む、わが事、幸に諧はず。
醉中有歸路。了了初不迷。　醉中に歸路あり、了了として初め迷はず。
乘流且復逝。抵曲吾當回。　流に乘じて且つ復た逝く、曲に抵らば吾當に回るべし。

【字解】〔一〕闓開　開落に同じ。〔二〕芝蘭懷　靈芝や蘭を摘んで入れて置く懷。〔三〕斗水　瓶中の水。〔四〕玉井蓮　山海經に「太華の山、削成して、四方高さ五千仞、廣さ十里」とあり、華山記に「山頂に池あり、千葉の蓮花を生ず」とある。

【詩意】蓮は、秋水の中に生ひ出で、時節に遇うて、自然に開花する。清風、亦た意あるが如く、その香を盜つて、芝蘭を摘んで入れた我が懷中に吹き込んだ。一たび蓮の花を折つて仕舞へば、長しへに江湖と緣が切れて、斷ぎれし絲は再び續かむ由もなく、瓶中の斗水では、とても活きて居られぬ。それよりも、華山の絕頂なる玉井に生ふる蓮は、根を天池の泥に託して、誰にも折られる樣はない。予は、此事に感じて、每每自ら慰めて居るので、もし幸にして、浮世で思ふ樣に成らぬ時は、醉中に歸路があるから、そこへ逃れ去れば善いので、了了として、決して迷ふことはない。そこで、流に乘じて立ち去るべく、曲り目に來て、路が分からなくなれば、引き回すだけのことである。

【餘論】紀昀の評に「刻意、古しへに效ひ、しかも、結處、仍ほ本色を露はす」とある。

籃輿兀醉守。路轉古城隅。　籃輿兀醉守、路は轉ず古城隅。
酒力如過雨。清風消半途。　酒力、過雨の如く、清風、半途に消ゆ。
前山正可數。後騎且勿驅。　前山、正に數ふべく、後騎、且つ驅る勿れ。
我緣在東南。往寄白髮餘。　わが緣、東南に在り、往いて寄す白髮の餘。
遙知萬松嶺(一)。下有三畝居。　遙に知る、萬松嶺、下に三畝の居あるを。

【字解】〔一〕萬松嶺　西湖附近に在つて、その地の韻椿は、前に數ば詩中に見えて居た。

【詩意】兀兀として醉ひたる太守は、籃輿に乘じ、やがて、古城の隅に來ると、路が曲る。酒の力は、驟雨の如く、決して長くは持たないもので、清風に吹かれ、半途で全く消えて仕舞つた。前山は、正に數ふべくして、佳景、世の常ならず、後から來る護騎は、しばらくの間、せき立てぬ樣にせよ。われは、東南に緣あるもので、白髮の餘生を其地に寄せやうと思つて居る位。中にも、萬松嶺の下には、ささやかながら三畝の隱宅があるから、いつかは、そこへ往かうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「これ頗る枯淺」といひ、王文誥は「これ小舟眞一葉の一首と同意」といつて居る。

民勞吏無德。歲美天有道。　民勞して吏に德なく、歲美にして天に道あり。

暑雨避麥秋。溫風送（一）蠶老。　暑雨、麥秋を避け、溫風、蠶の老を送る。

（二）三咽初有聞。一溉未濡槁。　三咽、初めて聞くあり、一溉、未だ槁を濡さず。

詔書寬（三）積欠。父老顏色好。　詔書、積欠を寬にし、父老、顏色好し。

再拜賀吾君。獲此不（四）貪寶。　再拜、吾が君を賀す、この貪らざるの寶を獲たり。

頽然笑（五）阮籍。醉几書謝表。　頽然として阮籍を笑ひ、醉几、謝表を書す。

【字解】〔一〕送蠶老　蠶が生熟して繭を作る。即ちあがる。〔二〕三咽　意義未詳、或は食が喉を下らないといふ樣なことかも知れない。〔三〕寬積欠　租稅滯納の督促を寬大にする。元祐七年五月・六月と打續いて、東坡は、その事を願ひ出で、やがて、勅許に成つた。〔四〕不貪寶　左傳に「宋人、或は玉を得、これを子罕に獻ず、受けずして曰く、われは貪らざるを以て寶となす」とある。〔五〕阮籍　前に哭二任遵聖一の詩中に注して置いた。

【詩意】民は疲れて、吏に德なきを知るべく、年の豐なるは、天に道あるが爲めである。夏の雨は、麥秋を避けて降るべく、暖い風は、早く蠶のあがる樣にする爲である。われ、揚州に來りし後、兎角、災害が打續いて、その實況は、聞くに堪へず、頃ろ雨が降つたといふが、ほんの少しばかりで、まだ枯槁せるものを濡すに及ばぬ。天子は、詔を下して、租稅滯納の督促を寬大にせよと仰せられ、父老は、初めて、顏色も直り、再拜して、予に賀意を表し、貴下は貪らざるを寶とする御方で、これを上に戴くことは、まことに有り難い仕合であるといつた。予は、やがて頽然として酒に醉ひ、故らに曠達を爲して禮法を蔑視した阮籍の狂愚を笑ひながら、取り敢へず、天子への謝表を起草した。

我夢入小學。自謂總（一）角時。　われ、夢に小學に入る、自ら謂ふ、總角の時。

不記有白髮。猶誦論語辭。　白髮あるを記せず、猶は誦す論語の辭。

人間本兒戲。顚倒略似茲。　人間、本と兒戲、顚倒、略ぼ茲に似たり。

惟有醉時眞。空（二）洞了無疑。　惟だ醉時の眞あり、空洞、了に疑なし。

（三）墜車終無傷。莊叟不吾欺。　車より墜つるも、終に傷つくなし、莊叟、吾を欺かず。

呼兒具紙筆。醉語輒錄之。　兒を呼んで紙筆を具し、醉語、輒ち之を錄す。

【字解】【一】總角　結髮、未だ冠せざる間を云ふ。【二】空洞　前に法惠寺の詩中に注して置いた。【三】墜車終無傷　莊子に「夫れ、醉ふ者の車より墜つる、疾しと雖も死せず、骨節人と同じ、しかも、犯害人と異なり、その神、全きなり。彼、全を酒に得、しかも猶ほ是の若し、況んや、全を天に得るをや」とある。

【詩意】予は、小學に入つた夢を見たが、自分では、あげまきの少年と思つて居て、頭上に白髮あるをも記せず、論語を聲高に讀み上げた。考へて見れば、人間の事は、本と兒戲で、終生下らぬことに骨を折つて居るのは、丁度、夢中小學に入つたと同じである。唯だ、人間は、醉つた時のみが實正であつて、空明虛靈、了然として疑ふべきことはない。車から落ちても、醉つて居れば、怪我をしないといふが、如何にも、その通りで、莊子は、決して吾を欺かない。そこで、兒を呼んで、紙筆を具へしめ、醉中の言語を其儘書きつけて見た。

【餘論】紀昀は「これ全く是れ本色」といつて居る。

醉中雖可樂。猶是生滅境。　醉中、樂むべしと雖も、猶ほ是れ生滅の境。

云何得此身。不醉亦不醒。　ここに何にか此身を得、醉はず、亦た醒めざらむ。

癡如景升牛。莫保尻與領。　癡は景升の牛の如きも、尻と領とを保つなし。

黠如東郭㕙。束縛作毛穎。　黠は東郭の㕙の如きも、束縛せられて毛穎となる。

乃知嵇叔夜。非坐虎文炳。　乃ち知る、嵇叔夜、虎文の炳に坐するに非ず。

【字解】【一】景升牛　晉書桓溫傳に「劉景升、千斤の大牛あり、芻豆を噉ふこと常牛に十倍し、重きを負うて遠きに致すは、かつて一羸牸に若かず。魏武、荊州に入り、以て軍士を享す」とある。【二】尻與領　領は首。【三】東郭㕙　㕙は兎、韓愈の毛穎傳に「東郭に居るものを㕙といふ、蒙將軍、その毫を拔き、穎を載せて歸り、その族を聚めて束縛を加ふ」とある。【四】毛穎　筆を云ふ。【五】嵇叔夜　晉書嵇康傳に「字は叔夜、詞氣は美にして風儀あり、しかも、形骸を土木にして、自ら藻飾せず」とある。

【詩意】醉中は樂むべきであるが、しかし、依然として生滅の境界である。どうすれば、この身をして、醉はず、又醒めず、卽ち生滅以上に超出せしめることが出來やうか。癡愚なること、劉景升の牛の如きも、しまひには、殺されて、尻と首とを全うすることが出來ず。狡黠なること、東郭の兎の如きも、はては、束ね縛られて、筆と成つて仕舞つた。癡愚狡黠、ともに、その身を保つ所以ではない。されば、嵇叔夜の如きは、形骸を土木にして自ら藻飾せず、炳然として文ある虎の皮の上にも坐らなかつたといふことである。

【餘論】紀昀は「參するに禪悅を以てし、全然本色、興の至るところ、忽ち合し、忽ち離れ、似るに意あるに非ず、亦た似ざるに意あるに非ず」といつて居る。

我家小馮君。天性頗醇至。　わが家の小馮君、天性、頗る醇至。

清坐不飮酒。而能容我醉。　清坐、酒を飮まず、しかも能く我が醉を容る。

歸休要相依。謝病當以次。　歸休、相依るを要す、病を謝す、當に次を以てすべし。

豈知山林士。骯髒乃爾貴。　豈に知らむや、山林の士、骯髒、乃ち爾かく貴し。

乞身當念早。過是恐少味。　身を乞ふ、當に早きを念ふべし、過ぐれば、是れ恐らくは味少からむ。

【字解】〔一〕小馮君　前に「春歩二西閣一」の詩中に注して、漢書馮奉世傳を引いて置いた。ここでは、弟子由を指す。〔二〕骯髒　不遇不平の貌。〔三〕過是恐少味　馬援の楊廣に與ふる書に「今に及びて計を成す、殊に尚ほ善きなり。過ぐれば、是れ味少からむと欲す」とあるを用ふ。

【詩意】わが弟の子由は、天性、頗る至醇、清坐して酒も飮まないが、それでも能く我が醉を容れて、格別、小言も言はない。早晩、官を休めて歸田し、相依つて、餘年を送らうと思つて居るが、病を謝して官を辭することは、次序を以てすべく、予が第一に、さう爲る筈である。元來、山林の士は、骯髒不平、世と相容れぬ處が貴いのである。身の暇を願ふことに就いては、成るべく早くする樣に心がけるのが肝腎で、時を過ぎて仕舞ふと、恐らくは、格別、面白くもなく、味少く成るであらう。

【餘論】紀昀は「陶意、本色より多し」といつて居る。

去鄕三十年。風雨荒舊宅。　鄕を去ること三十年、風雨、舊宅荒る。

惟存一束書。寄食無定跡。　惟だ一束の書を存し、寄食、定跡なし。

每用愧淵明。尙取禾三百。　每に用つて淵明に愧づ、尙ほ取る禾三百。

頎然六男子。粗可傳淸白。　頎然たる六男子、粗ぼ淸白を傳ふべし。

於吾豈不多。何事復歎息。　吾に於て、豈に多からざらむや、何事か復た歎息する。

【字解】〔一〕禾三百　前に「次二韻段縫一」の詩中にも注して置いたが、詩經に「不稼不穡、胡取二禾三百廛一」とあつて、ここでは俸祿を云ふ。〔二〕頎然　丈の高き貌、詩經に猗嗟昌兮、頎而長兮とある。〔三〕六男子　東坡の子、邁・迨・過、子由の子、遲・适・遠を併稱す。〔四〕淸白　後漢書楊震傳に「子孫、常に蔬食歩行す。或は、爲に產業を開かしむ。震、肯んぜずして曰く、後世をして、稱して淸白吏の子孫と爲さしむ、此を以て之に遺す、亦た厚からずや」とある。

【詩意】故鄕を出て、すでに三十年に成るから、舊宅は、風雨の爲に荒らされたであらう。ただ一束の書物を攜帶し、隨處に寄食して、一定の跡だになく、每每淵明に愧づるのは、碌な事もせずして、棄て扶持を頂戴して居ることである。二家の六男子は、身の長もすらりとして、いづれも、一廉の人物で、淸廉潔白の名を傳へることが出來る。われに取つては、これで十分で、格別、歎息するにも及ばない。

【餘論】紀昀は「亦た陶意多きに居る」といつて居る。

曉曉六男子。絃誦各一經。　曉曉たる六男子、絃誦、各〻一經。

復生五丈夫。戢戢丁欲成。　復た五丈夫を生まば、戢戢として、丁、成らむと欲す。

歸田了門戶。與國充踐更。　歸田、門戶を了し、國の與に踐更に充つ。

(六)普兒初學語。玉骨開(七)天庭。　普兒、はじめて語を學び、玉骨、天庭を開く。
淮老如鶴雛。破殼已長鳴。　淮老は鶴雛の如く、殼を破つて、すでに長鳴。
擧酒屬千里。一歡愧凡情。　酒を擧げて千里に屬し、一歡、凡情を愧づ。

【字解】【一】嘐嘐　語り合つて騒がしき貌。【二】五丈夫　五人の男子、史記仲尼弟子列傳に「商瞿、年長じて子なし、孔子、これを齊に使す。瞿の母、これを請ふ。孔子曰く、憂ふるなかれ、瞿、年四十の後、當に五丈夫の子あるべし」とある。【三】戢戢　聚まる貌。【四】丁　即ち壯丁、唐書食貨志に「凡そ民、はじめて生まるるを黃となし、四歳を小となし、十六歳を中となし、二十一を丁となし、六十を老となす」とある。【五】踐更　漢書吳王濞傳の註に「更卒たるに當るを以て、錢三百を出す、これを過更といひ、自ら行いて卒となる、これを踐更といふ」とある。即ち兵役に出ること。【六】普兒　下の淮老と共に東坡の孫の名で、多分、長子邁の子であらう。【七】天庭　前に侍立邇英の詩中に注して置いたが、人相の上で額を云ふ。

【詩意】弟子由の處と併せて、六人の男子が、嘐嘐と騒いで居るが、各〻學問をして、一經を究め、それが各〻五人の男子を生んだならば、やがて、戢戢として、みんな壯丁に成るであらう。そこで、歸田して各〻分家すると、國家の爲に、兵役に出ることと思ふ。それから、孫の普兒は、やッと物が言へる位であるが、額の角には玉骨森然として、天晴の人相であり、淮老は、鶴の雛が、やッと孵化して殼を破り、そして、長鳴するが如くである。酒杯を擧げて、千里を隔つる弟の方に差し付けたが、子孫の繁榮を喜ぶのは、愧かしながら、到底、凡情を免れぬものであらう。

【餘論】紀昀は「亦た陶に似たり」といつて居る。

(一)淮海雖故(二)楚。無復輕揚風。　淮海は、故楚と雖も、復た輕揚の風なし。
(三)齋廚(四)聖賢雜。無事時一中。　齋廚、聖賢雜はり、無事、時に一中。
誰言大道遠。正賴(五)三杯通。　誰か言ふ、大道遠しと、正に賴る三杯の通ずるに。
(六)使君不(七)夕坐。衙門散刀弓。　使君、夕に坐せず、衙門、弓刀を散す。

【字解】【一】淮海　即ち揚州。【二】故楚　史記貨殖傳に「淮より以北は、西楚なり、その俗剽輕」とあり、李濟翁の資暇錄に、「揚州は、その土俗、輕揚なるを以ての故に、其州に名づく、今、揚柳の楊に作るは謬なり」とある。【三】齋廚　官舍の臺所。【四】聖賢　淸酒と濁酒。【五】三杯通　李白の詩に「三杯通大道、一斗合自然」とある。【六】使君　東坡自ら云ふ。【七】夕坐　日暮なほ役所に居ること。

【詩意】揚州の地たるや、古しへの西楚に屬すと雖も、今日では、最早、輕揚の風もなく、施政も至つて平穩である。官舍の臺所には、淸酒・濁酒、兩つながら用意してあつて、ひまな時には、お好み次第、どれでも一つ、よよと參る。大道は、必ずしも遠からず、三杯飲まば、自然と其處に到達して、宇宙の玄理を悟ることが出來る。自分が晩方まで詰めて居らず、早く退出した時には、役所の門の警衞も罷めて仕舞つて、物物しいこともなく、その時こそ、大に飲むべしである。

【餘論】紀昀は「これ殊に佳ならず」といつて、大にけなして居る。

何人築東臺。一郡坐可得。　何人か、東臺を築く、一郡、坐して得べし。

亭亭古浮圖。獨立表衆惑。　亭亭たる古浮圖、獨立、衆惑を表す。

蕪城閲興廢。雷塘幾開塞。　蕪城、興廢を閲し、雷塘幾たびか開塞。

明年起華堂。置酒弔亡國。　明年、華堂を起さば、酒を置いて亡國を弔はむ。

無令竹西路。歌吹久寂默。　竹西の路をして、歌吹、久しく寂默たらしむる無かれ。

【字解】【一】亭亭　高き貌。【二】浮圖　卽ち塔、梵語塔婆。【三】蕪城　揚州一帶の地、鮑明遠の蕪城賦に登廣陵故城作とあつて、城は卽ち吳王濞の築くところである。【四】雷塘　前に顧國夜游圖、及び潁州西湖成の詩中に注して置いた。【五】竹西路　揚州の郭外、前に劉貢父の詩中に注して置いた。杜牧の詩に誰知竹西路、歌吹是揚州とある。

【詩意】誰が東臺を築いたか知らぬが、一郡の地は、坐して眺め下すことが出來る。高い佛塔は、かなり古く、挺然として獨り聳えて居て、衆人が佛敎に惑うた記念である。蕪城は、興亡を閲し、雷塘は、幾たびか開閉した。古跡を見て感慨を催すことは、ざツと、こんなものである。明年、華堂を起したならば、酒を置いて、亡國を弔はうと思ふ。何は兎まれ、風流の名ある竹西の路をして、歌吹聲なく、久しく寂默の中に在らしむるは、まことに、不本意の至である。

【餘論】紀昀は「亦た味少し」といつて居る。

晁子天麒麟。結交及未仕。　晁子は天麒麟、交を結んで未だ仕へざるに及ぶ。

高才固難及。雅志或類己。　高才、もとより及び難く、雅志、或は己に類す。

各懷伯業能。共有邱明恥。　各、伯業の能を懷き、ともに邱明の恥あり。

歌呼時就君。指我醉鄉里。　歌呼、時に君に就いて、わが醉鄉の里を指す。

吳公門下客。賈誼獨見紀。　吳公門下の客、賈誼、ひとり紀せらる。

請作鵩鳥賦。我亦得坎止。　請ふ鵩鳥の賦を作れ、我、亦た坎止を得む。

行樂當及時。綠髮不可恃。　行樂、當に時に及ぶべし、綠髮、恃むべからず。

【字解】【一】晁子　卽ち晁无咎。【二】伯業能　英雄記に「魏の太祖稱す、長大にして能く學を勤むるものは、惟だ吾と袁伯業とのみ」とある。【三】邱明恥　左邱明が孔子と其恥づるところを同じうせしこと、論語に見ゆ。【四】醉鄉　王績の醉鄉記に「醉鄉は、中國を去ること、その幾千里なるを知らざるなり、豈に古しへ華胥氏の國ならむか」とある。【五】吳公門下　漢書賈誼傳に「河南の守吳公、その秀才を聞き、召して、門下に置く。文帝、吳公を徵して廷尉となすや、乃ち賈誼を言ふ、召して、以て博士となす」とある。

【六】鵩鳥賦　上記賈誼傳の續きに「後、長沙王の太傅となる、鵩あり、飛んで誼の舍に入る、賦を爲りて以て自ら廣む」とある。

【七】坎止　鵩鳥賦に「乘流而逝、遇坎則止」とある。

【詩意】晁无咎は、天上の麒麟といふべく、予と交を結んだが、年が若くて、未だ出仕しない。无咎の高才は、もとより及び難く、風雅なる好尙は、或は予に類して居る。予と彼と、各、古しへの袁伯業の如き才能を懷き、そして、左邱明と同じく、孔子の恥づるところを矢張恥として居る。予は、醉中に歌呼しつつ、時に君に就いて、わが醉鄉を指し、ともに醉はむことを勸めるを例とした。むかし、賈誼は、吳公の門下より出でて、ひとり、推擧されたが、予も亦た、君の爲に、一肌ぬいで力を盡さ

うと思つて居る。しかし、今の世の有様では、仕方がないので、君に鵩鳥の賦を作つて貰ひたい位、さうすれば、予も亦た坎に遇うて止まり、何事も運命と諦めやう。げにや、行樂は時に及ぶべく、君の如き綠髮も、決して恃むことが出來ぬから、兎に角、ここで酒を飮むが善からう。

【餘論】紀昀は「陶意、多きに居る」といつて居る。

蓋公偶談道。(二)齊相獨識眞。　蓋公、偶ま道を談じ、齊相、ひとり眞を識る。
穨然不事事。客至先飮醇。　穨然として、事を事とせず、客至れば、先づ醇を飮む。
當時劉項罷。四海瘡痍新。　當時、劉項罷み、四海、瘡痍新なり。
三杯洗戰國。一斗消强秦。　三杯、戰國を洗ひ、一斗、强秦を消す。
寂寥千載後。(三)陽公嗣前塵。　寂寞たり千載の後、陽公、前塵を嗣ぐ。
醉臥客懷中。言笑徒多勤。　醉うて客の懷中に臥す、言笑、徒に多勤。
我時閱舊史。獨與(四)三人親。　われ時に舊史を閱し、ひとり、三人と親む。
未暇(五)餐脫粟。苦心學平津。　未だ脫粟を餐し、苦心、平津を學ぶに暇あらず。
草書亦何用。醉墨淋衣巾。　草書、亦た何の用、醉墨、衣巾に淋ぐ。
一揮三十幅。(六)持去聽坐人。　一揮三十幅、持し去つて坐人に聽す。

【字解】〔一〕蓋公　下を見よ。〔二〕齊相　漢書曹參傳に「齊の相國となる。膠西の蓋公、爲に言ふ、治道は淸靜を貴び、民、自ら治まると。故に齊に相たること九年、齊國安集す。宰相となるに及びて、日夜酒を飮む。賓客、參の事を事とせざるを見て、言ふあらむと欲す。至るものは、參、輒ち飮ましむるに醇酒を以てし、醉うて後に去り、終に開說を得るなし」とある。〔三〕陽公　唐書陽城傳に「諫議大夫となり、日夜劇飮す。客、諫止せむと欲するもの、城、その情を揣り知り、强ひて客に飮ましむ。客、辭すれば、卽ち自ら滿を引き、或は先づ醉うて客の懷中に臥す」とある。〔四〕三人　蓋公・曹參と陽城。〔五〕餐脫粟　漢書公孫弘傳に「丞相となつて、平津侯に封ぜらる。身、一肉、脫粟飯を食す」とある。脫粟とは、唯だ一度搗いて上の皮殼だけを去りし粟。〔六〕持去聽坐人　南史齊高帝諸子傳に「新浦侯子雲、草隸を善くす。百濟、人をして書を求めしめて曰く、侍中尺牘の美、遠く海外に流る。今日、求むるところは、惟だ名跡に在り、と。子雲、三十紙に書して、之を與ふ」とある。

【詩意】蓋公は、偶然、老莊の道を高談したが、曹參は、ひとり、その眞義を默識し、平居穨然として、事を事とせず、客至らば、先づ醇酒を飮ましめた。當時、漢楚の爭が、やツと畢つたばかりで、四海の人民、瘡痍なほ新にして未だ治せず、そして、曹參は、三杯飮んで戰國の風塵を洗ひ、一斗にして强秦を消し、やがて、別天地に逍遙する樣な心持。曹參歿後、殆んど千年、寂寞として然るべき人も無かつたのに、陽城が出て來て、前例を承け嗣ぎ、醉へば客の懷中に就いて睡ることさへあつて、言笑するのは御苦勞だといふので、何でも、醉ひ潰れるのを極致として居た。予は、時時、古史を閱し、この三人を最も慕はしいものとして、これに私淑し、かの公孫弘の如く、脫粟の飯を食つて、節儉、その身を持し、頻りに苦心する樣な眞似をする暇だになかつた。草書は何の用を爲すか、唯だ醉中の墨痕が衣巾に灑ぎかかつて、これを汚すだけである。しかし、欲しいといふ人があつたから、

一氣呵成に、三十幅を書きなぐり、座上の人に分けて、勝手に持ち返らしめた。

【餘論】紀昀は、「三杯洗戰國」の二句を評して「殊に大雅を傷る」といひ、言笑の句も「亦た自然ならず」といつた。なほ連作二十首の總評として「才を斂めて陶に就き、亦た時時本色を露はす、正に褚が蘭亭を摹して、頗る己の法を參し、しかも、正に是れ、その摹處に善きが如し、明七子の古を摹するは、雙鈎塡廓に過ぎざるのみ」といつて居る。なほ元遺山には、この詩の後に跋する短文があつて「東坡の和陶、氣象祇だ是れ東坡、三杯洗戰國、一斗消强秦の如き、淵明、決して辨する能はず、ひとり恨む、空杯亦嘗持の句、無絃琴を論するものと自ら相矛盾するを。別に一詩に云ふ、二子眞我客、不醉亦陶然、これを佳となす」と記して居る。

次韻晁无咎學士相迎　晁无咎學士の相迎ふるに次韻す

少年獨識晁新城。　少年、ひとり識る晁新城、
閉門却掃卷旆旌。　門を閉ぢて却掃、旆旌を卷く。
胸中自有談天口。　胸中自ら談天口あり、
坐却秦軍發墨守。　坐して秦軍を却けて、墨守を發す。
有子不爲謀置錐。　子あり、爲に置錐を謀らず、
虹霓吞吐忘寒飢。　虹霓、吞吐して寒飢を忘る。
端如太史牛馬走。　端として、太史牛馬走の如く、
嚴徐不敢連尻脽。　嚴徐、敢て尻脽を連ねず。
裴徊未用疑相待。　裴徊、未だ用ひられず、疑うて相待つ、
枉尺知君有家戒。　尺を枉ぐ、知る君が家戒あるを。
避人聊復去瀛洲。　人を避けて、聊か復た瀛洲に去り、
伴我眞能老淮海。　我を伴うて、眞に能く淮海に老ゆ。
夢中仇池千仞巖。　夢中の仇池、千仞の巖、
便欲攬我靑霞幨。　便ち我が靑霞幨を攬せむと欲す。
且須還家與婦計。　且つ須らく家に還つて婦と計るべし、
我本歸路連西南。　われ本と歸路、西南に連る。
老來飮酒無人佐。　老來、酒を飮んで人の佐くるなく、
獨看紅藥傾白墮。　獨り紅藥を看て白墮を傾く。
每到平山憶醉翁。　平山に到る每に醉翁を憶ふ、

【字解】【一】晁新城　晁端友、字は君誠、東坡が杭州に守たりし時、新城の令であつた、その子が即ち无咎である。【二】閉門却掃　前に與周李二游徑山の詩中に注して置いた。【三】卷旆旌　旆旌は大官の行列の先頭に立てる旗、それを卷くといへば、其處に暫時立ち寄ること。

【四】談天口　七略に「田駢の指、その口、天の如し、人、これが語を爲して曰く、田駢天口」とある。【五】却秦軍　前に維摩像の詩中に注して置いた。魯仲連が新垣衍に語るに、秦を帝とすべからざるの事を以てし、秦軍が之を聞いて三十里退却したといふこと。【六】墨守　墨翟が公輸般と爭うて、九たび拒いで城を守つたといふこと。【七】置錐　莊子に「堯舜、天下を有して、子孫、置錐の地なし」とある。子孫に、わづかでも財産として田地を殘し置くこと。【八】太史牛馬走　司馬遷の任安に答ふる書に、太史公牛馬走とある。太史公は遷の父、名は談、自ら太史公の牛馬の僕と稱したのである。【九】嚴徐　文選任彥昇の奏答敕示七夕詩啓に、比嚴徐而待詔とあつて、その註に嚴安徐樂とある。【一〇】連尻脽

懸知他日君思ㇾ我。　懸に知る、他日、君が我を思ふを。

路旁小兒笑相逢。　路旁の小兒、笑うて相逢ふ、

齊歌萬事轉頭空。　齊しく歌ふ、萬事轉頭空しきを。

賴有風流賢別駕（一九）。　賴に風流の賢別駕あり、

猶堪十（二〇）里卷春風。　なほ、十里、春風に卷くに堪へたり。

漢書東方朔傳に「武帝、朔に問うて曰く、方今、公孫丞相、兒大夫、董仲舒、太史司馬遷の倫、先生自ら視て何れと與に比せむや。朔曰く、臣、その吻脣を吐き、尻脽を連ぬるを觀るに、臣、不肖と雖も、なほ此數子を兼ぬ」とある、脽は尻の骨。【一一】瀛洲　唐書褚亮傳に「太宗、天策上將軍となり、文學館を作り、賢才を收聘し、杜如晦等を以て學士となし、凡そ三番に分つて閣下に遞宿せしめ、暇日ごとに、訪ふに故事を以てし、墳籍を討論し、閻立本に命じて圖象し、亮をして之が贊を爲らしめ、名字爵里を題し、十八學士と號し、これを書府に藏す。この時に方つて、選中に在るものは、天下の慕向するところにして、これを登瀛洲といふ」とある。【一二】老淮海　无咎が揚州の倅たるを云ふ。【一三】夢中仇池　前に雙石の題下に見ゆ。【一四】青霞幃　釋名に「牀前の帷を幃といふ」とある。【一五】連西南　杜甫の仇池の詩に近接二西南境一、長懷十九泉とある。【一六】紅藥　芍藥。【一七】白墮　酒の名、前に次二韻雩中惜一レ梅の詩中に注して置いた。【一八】平山　堂の名、揚州大明寺に在つて、もと歐陽公の建設に係る。【一九】賢別駕　无咎を指して云ふ。【二〇】十里卷春風　前に吉祥寺賞二牡丹一の詩中に注して置いた。

【題義】　續通鑑長編に「元祐五年十二月、校書郎晁補之、揚州に通判たり。七年十月、著作佐郎となる」とあつて、東坡が揚州に著任した時は、丁度、その地に在官して居たから「東坡先生、移つて廣陵に守たり、詩を以て先生を迎ふ」と題せる七古一篇を作つて捧呈した。そこで、東坡は、次韻して、その厚誼を謝したのである。

【詩意】　少年の時、君の御親父の新城令を面識して居たが、その人は、門を閉ぢて掃除をなし、時に大官輩が行列を留めて訪問することもあつた。そして、胸中に蘊蓄あつて、その雄辯は、かの談天口と稱せられた古しへの田駢に類し、又魯仲連の如く、坐ながらにして秦軍を退け、墨翟の堅く城守して居るのをも衝き崩さむばかり。そして、君の樣な立派な息子があつても、置錐の地程の遺產を殘さうともせず、君は意氣浩然、虹霓を吞吐して寒飢をも忘れ、端然として、太史公の牛馬の僕を以て自ら甘んじ、嚴安・徐樂の如きものは、その尻に續くことも出來ない。君は、折角仕官したが、愚圖愚圖して、未だ大に用ひられず、竊に其機會を待つて居るものと見えるが、たとひ、少しでも、おのが操守を枉げて、世に媚ぶるのは、家訓として嚴禁するところである。そこで、人を避けて登瀛洲に向はむとし、わが下役になつて、この揚州の地に老いむとして居る。予は、夢に仇池に游んで、千仞の巖に登つたこともあるが、君は予が青霞の帷を搴げて押し入り、一緒に其地に行きたい樣な安排。しかし、その事は、家に歸つて、篤と妻君に相談するが善いので、これより、予が行かうとする路は、西南に連つて、はてもなく、一たび去れば、何時歸るか分からない。それは扨て置き、老來、酒を飮むにも、相手がなく、仕方がないから、獨り芍藥の花を眺めて、白墮の美酒を傾けて居る。予は平山堂に到るごとに、歐陽公を追憶するが、他日、その如く、君も亦た予を思ふであらう。路傍の小兒は、予に逢へば、笑ひつつ、萬事は轉頭空しといふ樣の意味の歌を一齊に歌ひ囃して居る。ただ幸に、君の如き風流を解する下役があるから、十里の珠簾、春風に卷くといふ名だたる揚州の芍藥を飽くまで

賞覽しやうと思つて居る。

【餘論】紀昀は全首を許して「語多くは凡近、調亦た平衍」といひ「尻雕、强ひて押す」といつて居る。

次韻范淳父送秦少章

范淳父の秦少章を送るに次韻す

宿緣在江海。世網(一)如予何。
宿緣、江海に在り、世網、予を如何。

西來庾公塵(二)。已濯長淮波。
西來、庾公の塵、すでに濯ふ長淮の波。

十年淮海人。初見一麥禾(三)。
十年淮海の人、はじめて見る一麥の禾。

但欣爭訟少。未覺舟車多。
但だ爭訟の少きを欣ぶ、未だ覺えず舟車の多きを。

秦郞(四)忽過我。賦詩如卷阿(五)。
秦郞、忽ち我を過ぎ、詩を賦して卷阿の如し。

句法本黃子(六)。二豪(七)與揩磨(八)。
句法、黃子に本づき、二豪、ともに揩磨。

嗟我久離羣。逝將老西河(九)。
嗟す、我が久しく離羣、逝いて將に西河に老いむとす。

後生多名士。欲薦空悲歌。
後生、名士多く、薦めむと欲して空しく悲歌す。

小范(一〇)眞可人。獨肯勤收羅。
小范、眞に可人、ひとり肯て收羅を勤む。

瘦馬識騄耳(一一)。枯桐得雲和(一二)。
瘦馬、騄耳を識り、枯桐、雲和を得たり。

近聞館李生(一三)。病鶴借一柯。
近ごろ聞く、李生を館し、病鶴、一柯を借すと。

贈行苦說我。妙語慰蹉跎。
贈行、苦に我に說き、妙語、蹉跎を慰む。

西羌(一四)已解仇。烽火連朝那(一五)。
西羌、すでに仇を解き、烽火、朝那に連る。

坐籌(一六)付公等。吾將寄潛沱(一七)。
坐籌、公等に付す、吾、將に潛沱に寄せむとす。

【字解】〔一〕世網　世事網の如く、一たび之に嬰れば解き去る能はざるを云ふ。〔二〕庾公塵　前に次韻王廷老退居の詩中に注して置いた。王導が西風の來る每に、扇を擧げて之を障り、元規の塵、人を汚すといつたこと。元規は、庾亮の字。〔三〕一麥禾　春秋、莊公二十八年に「大に麥禾なし」とある。十年一麥禾を見るとは、久しく登豐せざるを言ふ。〔四〕秦郞　卽ち少章。〔五〕卷阿　詩經の篇名、康公が成王を戒めて、賢を求め、吉士を用ひよといふ意を述べた詩。〔六〕黃子　東坡の自註に「魯直を謂ふなり」とある、卽ち黃山谷。〔七〕二豪　東坡の自註に「その兄少游と張文潛」とある。〔八〕揩磨　拭ひ且つ磨く。〔九〕西河　史記仲尼弟子列傳に「卜商、字は子夏。孔子すでに歿し、子夏、西河に居て敎授し、魏の文侯の師となる」とある。〔一〇〕小范　范醇甫を指す。〔一一〕騄耳　馬の名、周の穆王八駿の一。〔一二〕雲和　周禮に「孤竹の管、雲和の琴瑟」とあつて、琴瑟の材は、雲和の山に生ずる桐を以て第一としてある。〔一三〕李生　東坡の自註に「李廌方叔」とある。〔一四〕西羌　卽ち夏、續通鑑長編に「元祐七年十月、西賊、攻めて環州を圍み、凡そ七日にして解き去る」とある。〔一五〕朝那　漢書地理志に「安定郡朝那縣は、故の戎の那邑なり」とある。〔一六〕坐籌　居ながら謀を回らすこと、漢書項籍傳に「坐して籌策を運らすは、公、我に如かず」とあり、高祖本紀に「籌を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは、吾、子房に如かず」とある。〔一七〕潛沱　王註に「潛沱は成都の水名、先生言ふ、吾、ここに歸休せむ」とある。

【題義】老學庵筆記に「范祖禹、字は淳の一字、交友、その呼び難きを以ての故に、父の字を增す」

とある。又續通鑑長編に「元祐七年六月、禮部侍郎范祖禹、翰林學士となる」とあつて、それは、丁度この時頃と思はれる。秦少章は少游の弟。この詩は、秦少章が來訪して、范祖禹の送行の詩を見せたから、乃ち之に次韻したのである。

【詩意】予の江海に於ける、切つても切れぬ夙緣があつて、世事網の如く、予を如何にしやうといふのか。西風と共に吹き來りし元規の塵は、長淮の水に濯はれて、やツと、さツぱりしたが、十年の久しき、凶年つゞきで、初めて麥の取り入れに遇つたといふのは、まことに歎息の至。ただ境內安靜にして、訴訟の少きは、尤も喜ぶべく、又舟車で來訪するものの多いことも、格別厭と思はぬ位である。ここに、秦少章が來訪して、詩を作つて見せられたが、さながら、卷阿の古詩の如く、しきりに、賢を薦めよといつて囑付せられた。君が詩を作るに當つて、句法は黃山谷に本づき、そして、秦少游・張文潛の二豪と平生研磨して居るさうで、その出來榮えの善いのも、もとより偶然ではない。しかし、予は久しく羣を離れて、孤獨の境涯に居り、やがて、子夏の西河に於けるが如く、隱居して講學を務めたいと思つて居る。後進の中には、名士が多いから、出來るだけ推薦しやうとは思つて居るが、何分、おもふ樣に成らずして、空しく悲歌するのみである。范君は、誠に結構な人で、ひとり、さういふ人人を收めて羅致せむことを務められ、ここに少章の爲に盡力されるのは、瘦馬の中より騄耳の如き名馬を識別し、枯れた桐の木の中から雲和の良材を得られた樣なものである。近ごろ承れば、李廌といふものを宅に置いたといふが、そは病める鶴に、とまるに善い樣な枝を借したと同じである。そして、少章發程の際に贈られた詩の中には、懇に予の事を說いて居られ、それを見ると、妙語は、予の不遇を慰めるに十分である。今しも、西邊の夏國は、わづかに圍を解いたといふが、烽火は、朝那の地方に連つて居る。そこで、坐ながら籌を帷幄の中に運らすことは、諸君に一任すべく、予は、遠からず官を辭して、跡を潛沱の水邊に寄せる積りである。

【餘論】紀昀は「典重の氣あり、平に似て平に非ず」といひ、小范眞可人の句に關しては「私意を點出す、古法」といつて居る。

聞林夫當徙靈隱寺寓居戲作靈隱前一首

林夫、當に靈隱寺の寓居に徙るべしと聞き、戲に靈隱前の一首を作る

靈隱前。天竺後。
兩澗春淙一靈鷲。
不知水從何處來。
跳波赴壑如奔雷。
無情有意兩莫測。
肯向冷泉亭下相

靈隱の前、天竺の後、
兩澗の春淙、一靈鷲。
知らず水は何處より來るかを、
跳波、壑に赴いて奔雷の如し。
無情有意、兩つながら測るなし、
肯て冷泉亭下に向つて相縈回。

【字解】【一】兩澗 圖經に「杭州靈山の陰、北澗の陽は、卽ち靈隱寺。靈山の南、南澗の陽は、卽ち天竺寺。二澗の流水は、錢源泉と號し、寺峰の南北を繞つて下り、峰前に至り、合して一澗となる、橋あり、合澗橋と號す」とある。【二】靈鷲 寺の名、釋氏稽古略に「西天竺の慧理法師、晉の成和中に於て杭州に至

縈回。

我在錢塘六百日。　われ、錢塘に在る六百日、
山中暫來不暖席。　山中、暫く來つて席を暖めず。
今君欲作靈隱居。　今、君、靈隱の居を作さむと欲す、
葛衣草屨隨僧蔬。　葛衣草屨、僧蔬に隨ふ。
能與冷泉作主一　能く冷泉と主と作る一百日、
百日。
不用二(四)十四考書　用ひず二十四考、中書と書するを。
中書。

【題義】林夫は唐埛の字。この人の事は、和唐彥猷詩送其子埛の詩中に注して置いた。この詩は、唐林夫が、近日中、靈隱寺の寓居に徙るべき由を聞き、戲に靈隱前と題して、はるかに之に寄せたのである。

【詩意】靈隱寺の前、天竺寺の後、兩派の春の谷川が流れて、そこに靈鷲寺がある。その谷川の水は、何處から來るか分からぬが、跳れる波は、壑中に赴き、その響は、奔雷の如く騷がしい。水、果して情なきか、心あるか、兩つながら、料り知ることは出來ないが、縈り回つて、冷泉亭下に向つて行くことを解して居る。われ杭州に在ること一年有餘、その山中には、一寸往つただけで、席を暖める暇だに無かつた。君は、今、靈隱の寓居に徙られるさうだが、葛の單衣を著け、草履を穿き、そして、精進物を食つて行ひ澄まされるであらう。かくて、豫定通り、三個月の久しい間、冷泉の爲に主人となつて居れば、復た遺憾なかるべく、何も郭子儀の如く、忙しげに立ち廻つて、二十四回も、中書令考を校する樣な身分に成らずとも善からうと思はれる。

【餘論】紀昀の評に「太白の皮毛を得たり、然れども、頗る野調に近し」とある。

り、山巖の秀麗を見て曰く、吾が國、中天竺靈鷲山の十小嶺、知らず、何の年か飛び來ると。洞あり、黄と白猿あり、これを呼べば、聲に應じて出づ。人、はじめて之を信ず。閩、その地に卽いて兩刹を建つ、先は靈鷲、後は靈隱」とある。【三】冷泉亭　圖經に「飛來峰下に在り。唐の右司郎中、杭州刺史元藇建つ」とある。【四】二十四考書中書　唐書に「郭子儀、身を以て天下の安危を爲すこと二十年、中書令考を校すること二十四」とある。

滕達道挽詞二首

滕達道の挽詞　二首

(一)先帝知公早。虛懷第一人。　先帝、公を知ること早し、虛懷第一の人。
至今詩禮將。獨數武宣(二)臣。　今に至つて、詩禮の將、獨り數ふ、武宣の臣。
(三)材大雖難用。時來亦(四)少信。　材大にして用ひ難しと雖も、時來つて、亦た少しく信ぶ。
(五)高平風烈在。威敏(六)典刑新。　高平、風烈あり、威敏、典刑新なり。
空試乘(七)邊策。寧留相(八)漢身。　空しく邊に乘ずるの策を試み、寧ろ漢に相たるの身を留めむや。
淒涼舊部(九)曲。淚溼塚(一〇)前麟。　淒涼舊部曲、淚は溼ふ塚前の麟。

【字解】【一】先帝　神宗皇帝を云ふ。【二】武宣匹　武帝と宣帝、兩漢極盛の世。【三】材大　前に和二木山引水一の詩中に注して置いた。【四】亦少信　信は伸に通ず。【五】高平　范文正公書伯夷頌に、高平范仲淹書と題してあつて、高平は、淳州の郡名。滕元發は、范文正公の外孫であつたから、自然その遺風を傳へたといふ意。【六】威敏　東坡の自註に「公、少にして知を范希文・孫元規に受く」とあつて、東都事略に「孫沔、字は元規、會稽の人、人と爲り明敏果決、致仕して、觀文殿學士に終り、威敏と諡す」とある。【七】乘邊　乘は守る。【八】相漢身　漢書王商傳に「河平四年、單于來朝す。丞相商、未央廷中に坐す。單于、商の貌を仰ぎ視て、大に之を畏る。天子聞いて、歎じて曰く、これ眞に漢相」とある。【九】部曲　部隊。【一〇】塚前麟　墓の前に据ゑ付けて置く石造の麒麟。杜甫の詩に、苑邊高冢臥二麒麟一とある。

【題義】滕達道、名は甫、字は元發、後避くるところあつて、字を以て名とし、達道を字とした。その事歷は、東坡の撰んだ墓誌に詳しい。續通鑑長編、元祐五年十月の條に「滕元發卒す、右銀青光祿大夫を贈り、章敏と諡し、錢三十萬を賜ふ。王巖叟が、元發、都城の外に卒し、家に餘貲なしと言ふを以てなり」とある。なほ、この人は、元祐五年に卒したのに、ここ七年の處に、その挽詞を編入したのは、一寸譯が分からないが、姑らく查氏の舊に沿うたのであらう。

【詩意】先帝は、公を知ること頗る早く、虛懷第一の人として敬重された。君は、詩書禮樂に精通し、天晴、昇平の世の能臣たるべきものであつた。材大にして、十分に用ひられることは、六つかしかつたが、時機が來て、少しく伸ぶることを得たのは、まだしもの幸である。君は、范文正公の遺風を存し、又孫威敏の典型を傳へ、まことに堂堂たる文武の全才であつた。しかし、邊境を守る策を上つても、未だ試用されるに及ばず、眞に漢の相なりといはれる樣な風采も、今は見ることが出來ない。そこで、當日の部下たりし兵士どもは、追慕して止まず、その涙は迸つて、墓前の石麟を溼すばかりである。

【餘論】紀昀は「挽詩、例、應酬多し、これ獨り之を言ふに物あり」といつて居るが、なる程、內容充實して、悽惋の中に典麗の致を具へて居る。

雲夢連江雨。樊山落木秋。　雲夢連江の雨、樊山落木の秋。
公方占買鵩。我正買襲牛。　公、方に買鵩を占し、われ正に襲牛を買ふ。
共有江湖樂。俱懷畎畝憂。　共に江湖の樂あり、俱に畎畝の憂を懷く。
荊溪欲歸老。浮玉偶同游。　荊溪、歸老せむと欲し、浮玉、偶ま同游。
骯髒儀刑在。驚呼歲月遒。　骯髒、儀刑あり、驚呼、歲月遒かなり。
回頭雜歌哭。挽語不成謳。　頭を回らして歌哭を雜ふ、挽語、謳を成さず。

【字解】【一】雲夢　王註には湖州常州の地とあるが、馮應榴は、黃州安州と訂正するが善からうと云つて居る。【二】樊山　鄂州武昌縣に在る、元發が落職して池州に知たりし時、東坡は黃州に謫せられ、しきりに尺牘で往復したことがある。【三】占買鵩　漢書賈誼傳に「長沙王の太傅となる、三年、鵩あり、飛んで誼の舍に入る、書を發して之を占す、その度を言うて曰く、野鳥室に入る、主人將に去らむとす」とある。【四】襲牛　襲勝、劍を賣つて牛を買ふ。前に山村五絕の詩中に注して置いた。【五】荊溪　常州圖經に「宜興縣に在り」と見え、前に常潤道中の詩中に注して置いた。東坡は元發と、後日、ここに歸隱することを約したと見える。【六】浮玉

即ち金山、前に游金山の詩中に注して置いた。【七】軒髻　不遇不平の意。

【詩意】雲夢の澤水が大江に連り、蕭蕭として雨そぼふる時、樊山に落葉の亂るる秋、兩地相思の情に堪へなかつたことがある。その時、君は賈誼の如く、鵩鳥の室に入るを卜して、自ら久しく其地に留まらざるを知り、予は、龔生の如く、刀を賣つて牛を買ひ、やがて、躬耕以て老を送る積り。ともに、江湖の樂はあつたが、畎畝に在つても、なほ君國の憂を懷いて居た。行く末は、一緒に、荆溪に歸老せむことを約し、そして、金山には、偶然、同游を試みた。君は、不遇不平であつたが、堂堂たる風采は、いつも變らず、今しも、歲月の打過ぎしを見て、予は、おもはず、驚呼せむばかり。頭を回らせば、歌笑相雜り、悲挽の語も、まとまり兼ねて、一篇の詩を成さぬは、われながら、愧ち入るばかりである。

【餘論】二首、ともに五言排律であるが、對偶に拘泥せずして、頗る流利自在、まことに、大家の手筆に負かぬものである。

次韻蘇伯固遊蜀岡送李孝博奉使嶺表

蘇伯固の蜀岡に遊んで、李孝博の使を嶺表に奉するを送るに次韻す

新苗未沒鶴（一）。老葉方翳蟬（三）。
新苗、未だ鶴を沒せず、老葉、方に蟬を翳す。

綠渠浸麻水。白板（二）燒松煙。
綠渠、麻を浸すの水、白板、松を燒くの煙。

笑窺有紅頰。醉臥皆華顚（四）。
笑うて窺ふ、紅頰あり、醉臥、皆華顚。

家家機杼鳴。樹樹梨棗懸。
家家、機杼鳴り、樹樹、梨棗懸る。

野無佩犢子。府有騎鶴仙（五）。
野には、犢を佩ぶるの子なく、府には、鶴に騎するの仙あり。

觀風（六）嶠南（七）使。出相山東賢（八）。
觀風、嶠南の使、出相、山東の賢。

渡江弔很石（九）。過嶺酌貪泉（一〇）。
江を渡つて很石を弔ひ、嶺を過ぎて貪泉を酌む。

與君步徙倚（一一）。望彼修連娟（一二）。
君と歩して徙倚たり、かの修く娟を連ぬるを望む。

願及南枝（一三）謝。早隨北雁翩。
願はくは、南枝の謝するに及び、早く北雁に隨つて翩たれ。

歸來春酒熟。共看山櫻（一四）然。
歸り來つて、春酒熟せば、共に山櫻の然ゆるを看む。

【字解】【一】沒鶴　韓愈の稻畦の詩に、魚肥知己秀、鶴沒覺秋深とある。【二】白板　白居易の詩に晝扉扃白板とある。【三】翳蟬　葉の裏に蟬の付くこと、庾信の小園賦に蟬有翳兮不驚とある。【四】華顚　白髮頭。【五】騎鶴仙　古語に「鶴に騎して揚州に下る」とあり、この時、東坡は揚州に居たから自ら稱したのである。【六】觀風　風俗を觀察する、禮記に「太師に命じ、詩を陳して、以て民風を觀る」とある。【七】嶠南　即ち嶺南。【八】出相山東賢　李孝博は山東の人にして、又相家の子なるが故に云ふ。【九】很石　孫權の鎚の石、前に甘露寺の詩中に注して置いた。【一〇】貪泉　晉書吳隱之傳に「廣州刺史となる、未だ州に至らざる三十里、地を石門と名づく、水あり、貪泉といふ、飲むもの、厭くなきの心を懷く。隱之、すでに至り、乃ち泉の所に至り、酌んで之を飲み、詩を賦して曰く、古人云此水、一歃懷千金、試使夷齊飲、終當不易心とある。【一一】徙倚　徘徊する。【一二】修連娟　長く遠山の娟を連ぬる。【一三】南枝　梅を云ふ。【一四】山櫻　沈約の詩に野棠開未落、山櫻發欲然とある。

【題義】蘇伯固、名は堅、前に元祐五年の題註に見ゆ。盛儀の維揚志に「蜀岡は、江都縣西に在り、儀眞の界に接す」とあり、又「禪智寺の側を崑邱臺と爲す、卽ち蜀岡なり」とある。李孝博、字は叔升、時に山陽の守より、治行高第を以て廣東提點刑獄に拜せられた。嶺表は、卽ち嶺南。この詩は、蘇伯固が揚州の蜀岡に游び、そして、李孝博が廣東提點刑獄となつて、嶺南に赴任するを送る爲に作つた詩に次韻したのである。

【詩意】頃しも夏の半、新苗は、まだ鶴を隱す程には伸びず、老葉は、裏に蟬を止まらせて居る。溝渠の綠水には、麻の莖を浸し、人家の白板扉からは、松を燒く煙が白く立ち昇つて居る。笑つて戸外を偸み窺ふは、頰の紅い田舍娘であるし、醉臥して居るのは、白髮頭の老爺である。どこの家でも、機を織る杼が鳴り響き、梨や棗の木には、丁度、實がなつて居る。野には、子牛を連れて行く童もあり、役所には、仙人の如く、鶴に騎して此地に下つたといつて得意がる長官が居る。君達の見た西岡の景色は、かくの如く、まさしく、暢氣至極である。李君は、風俗を視察する爲に、遠く嶺南に派遣せられ、もとを質せば、山東相家の子で、天晴な大賢である。これより、江を渡つて南京に至らば、かの孫權の怨の石を弔ふべく、五嶺を越えると、晉に聞く貪泉を酌んで飮むであらう。今、蘇君と歩みつつ跼躅し、かの遠山の長く續くを眺めると、その先の又先が卽ち李君の行かれる處である。願はくは、來年、梅花の散り落つる頃、北に向ふ雁と共に歸つて來るが善いので、その時しも、春酒が方に熟したならば、ともに、山櫻の燃ゆるが如く咲き出でたるを看賞しやうと思ふ。

【餘論】苕溪漁隱叢話に「西岡に游ぶの詩、造語、全く退之の城南聯句、新苗の八句に效ふ。退之の筆力と雖も、殆んど以て之に過ぐるなし」とあり。乾隆御批には「雕雕蔚蔚、雲霞澄鮮」とある。しかし、紀昀は「句皆琢鍊、但だ深味に乏し」といつて、例の如く聊か之をけなして居る。

太夫人以无咎生日置酒書壁一絶

太夫人、无咎の生日を以て酒を置く、壁に一絶を書す

〔一〕壽樽餘瀝至朋簪〔二〕。　壽樽の餘瀝、朋簪に至る、
要與郎君夜語深〔三〕。　郎君と夜語、深からむを要す。
敢問阿婆〔四〕開後閣〔五〕。　敢て問ふ、阿婆、後閣を開き、
〔六〕井中車轄任浮沈。　井中の車轄、浮沈に任すかを。

【字解】〔一〕壽樽　お祝ひの酒。〔二〕朋簪　杜甫の詩に、朋來盍簪とある。〔三〕夜語深　一に、語夜深とあつて、その方が分かり易い。〔四〕阿婆　南史鬱林王紀に「帝、豫章王の妃庾氏に謂つて曰く、阿婆、佛法に言ふ、福あつて帝王の家に生まる」とある。〔五〕後閣　奥座敷。〔六〕井中車轄　陳遵、酒を好み、客を留めむが爲に、車轄を井に投じて歸らしめなかつたといふこと。前に和柳子玉喜雪、及び蘇州太守の詩中に注して置いた。

【題義】この詩は、晁氏の太夫人楊氏が其子无咎の誕生日に御馳走をしたから、取り敢へず、賦して、その家の壁に題したのである。

【詩意】お祝の酒の殘れるを朋友輩に振舞はれ、令息と深夜まで語り續けよとの御志は、まことに

辱い。御老母は、態態、奥座敷を開いて、我等を導き入れ、井中に投じた車轄は、その浮沈に任かせて、いつまでも留め置かれるのであらうか。

石塔寺

世傳王播飯後鐘詩、蓋揚州石塔寺事也、相傳如此、戲作此詩、

【訓讀】世傳ふ、王播の飯後鐘の詩は、蓋し揚州石塔寺の事なりと。相傳ふる、かくの如し、戲に此詩を作る。

石塔寺

飢眼眩東西。詩腸忘早晏。　飢眼、東西に眩し、詩腸、早晏を忘る。

雖知燈是火。不悟鐘非飯。　燈は是れ火なるを知ると雖も、悟らず、鐘の飯に非ざるを。

山僧異漂母。但可供一莞。　山僧、漂母に異なれり、但だ一莞に供すべし。

何爲二十年。記憶作此訕。　何すれぞ二十年、記憶して、この訕を作す。

齋廚養若人。無益祇貽患。　齋廚、若人を養ふ、益なくして、祇だ患を貽す。

乃知飯後鐘。闍黎蓋具眼。　乃ち知る飯後の鐘、闍黎、蓋し具眼。

【字解】【一】雖知燈是火　王註に「說者謂ふ、往時、寺僧賢を禮する能はず、今に至つて、その徒、飯後の鐘を以て作となす。今、先生の詩意、言ふ、播、特に餓ゑて路に迷ひ、直に寺中に往くを知らず、貧にして詩を吟じて時を失ひ、時に趨つて、往いて飯するを知らず、誰に云ふ、早知燈是火、飯熟已多時」とある。【二】漂母　漢書に「韓信家貧、城下に至つて釣す。一漂母あり、これを哀んで信に飯し、漂を竟るまで數十日。信、漂母に謂つて曰く、吾、必ず重く母に報いむ。母怒つて曰く、大丈夫、自ら食ふ能はず、われ王孫を哀んで食を進む、豈に報を望まむや」とある。【三】此訕　訕は毀謗。【四】闍黎　傳燈錄に「鄧州丹霞禪師、僧あり、山下に於て師を見る。師、僧に問ふ、什麼の處に宿す。云ふ、山下に宿す。師曰く、什麼の處にか飯す。曰く、山下に飯を喫す。師曰く、飯を將て闍梨と喫する底の人は、還た具眼なり」とある。翻譯名義集に「梵に云ふ阿闍梨、ここに云ふ軌範師、又云ふ悅衆」とある。

【題義】摭言に「王播、少にして孤、かつて、揚州惠照寺の木蘭院に客たり、僧に隨つて粥食す。これに久しうして、僧、頗る厭ふ。一日、播、出でて度して、未だ回らざるに、先づ飯し訖り、乃ち鐘を鳴らす。播、江都に鎭し、因つて舊游を訪ふに、題するところの字、皆紗これを罩む。因つて、詩を留めて曰く、上堂才子各西東、慚愧闍梨飯後鐘、二十年來塵撲面、而今始得碧紗籠」とあり。唐書本傳に「播、字は明敭、その先は太原の人、父恕、揚州倉曹參軍となり、遂に家す。播、貞元中、弟炎起と皆名あり、竝に進士に擢んでられ、官、同中書門下平章事に至り、出でて淮南節度使となる」とある。引の意味は——世に傳ふるところの王播が慚愧闍梨飯後鐘といふ詩を作つたのは、蓋し揚州の石塔寺だといふことで、相傳ふること、かくの如くである、そこで、戲に此詩を作つたといふのである。

【詩意】王播の寺に寓居せし時、飢に苦むの極、目がくらんで、東西を分たず、徒に詩を吟じて、時の遲速をさへ忘れ、燈は是れ火なるを知るも、鐘は飯を報するに非ず、とツくの昔に飯の濟んだといふことを悟らなかつた。無論、山僧は、漂母と異にして、王孫を哀むを知らず、かうして追ひ拂つ

たことは、まことに、一笑に供すべきものである。然るに、王播は、二十年後、なほ其事を記憶し、厭味たツぷりな詩を作つて寺僧を譏つたのは、如何なる故か、あまり、執念深いではないか。實際、寺の臺所に於て、かういふ人を養つて置くと、些少の益だになくして、唯だ憂を貽すのみである。されば、早く飯を食つて、その後で鐘を鳴らしたといふのも、畢竟、阿闍梨たる執事僧が具眼者であつたからであらう。

【餘論】紀昀は「翻案、却つて至理あり」といつて居る。

送晁美叔發運右司年兄赴闕

晁美叔發運右司年兄の闕に赴くを送る

我年二十無朋儔。　われ年二十、朋儔なし、
當時四海一子由。　當時、四海一子由。
君來扣門如有求。　君來つて、門を扣いて求むるあるが如し。
(一)頎然鶴骨清而修。　頎然たる鶴骨、淸にして修。
(二)醉翁遣我從子游。　醉翁、われをして子に從つて游ばしむ、
翁如退之蹈(三)軻邱。　翁は退之の如く、軻邱を蹈む、
尙欲放(四)子出一頭。　尙ほ子を放つて、一頭を出さしめむと欲す。
酒醒夢斷四十秋。　酒醒め、夢は斷ゆ四十秋、
病鶴不病骨(五)愈虯。　病鶴病まず、骨、愈よ虯、
惟有我顏老可羞。　惟だ我が顏の老いて羞づべきあり。
醉翁賓客散九州。　醉翁の賓客、九州に散じ、
幾人白髮還相收。　幾人か白髮還た相收む。
我如懷(六)祖拙自謀。　われは懷祖の如く、拙、自ら謀る、
正作尙書已過優。　正に尙書と作つて、すでに過優。
君求會稽實良籌。　君、會稽を求むる、實に良籌、
往看萬(七)壑爭交流。　往いて看よ、萬壑爭うて交も流るるを。

【字解】【一】頎然　丈高き貌、詩經に碩人其頎とある。【二】醉翁　歐陽修自ら號して云ふ、前に屢ば見る。【三】蹈軻邱　軻は孟子の名、邱は孔子の名、孔孟の道を蹈む。【四】放子出一頭　東坡の自註に「嘉祐の初、軾、子由と興國浴室に寓す。美叔、忽ち訪はる。云ふ、吾、歐陽公に從つて游ぶこと久し、公、我をして、來つて子と交を定めしむ。謂ふ、子、必ず世に名あらむ、老夫、亦た須らく他を放つて一頭地を出さしむべし」とある。【五】骨愈虯　骨が節くれ立つて虯龍の如くである。【六】懷祖　王述の字、晉書に「王述、羲之と名を齊しうす。しかも、羲之、甚だ之を輕んず。これに由つて、情好協はず。羲之、かつて賓友に謂つて曰く、懷祖は、正に當に尙書たるべきのみ。投老、僕射を得べし、更に會稽を求む、便ち自ら邈然」とある。【七】萬壑爭交流　會稽の山水を賞して「千巖秀を競ひ、萬壑流を爭ふ」の語があつて、前に武昌西山、及び郭熙秋山平遠の詩中に注して置いた。東坡の自註に「美叔、方に越州を乞ふ」とある。

【題義】年兄は、同年に登第せし人。この詩は、發運右司にして年兄たる晁美叔の上京するのを送つたのである。美叔は、卽ち端友の名。

【詩意】われ年二十の頃、絕えて朋友なく、四海の廣き、唯だ弟の子由あるばかり。その時、君は、門を扣いて來訪せられ、何か求むるところあるが如く、その容貌は、鶴の如く、丈高くして、極めて

淸げであつた。君が云ふには、歐陽公は、吾を遣して、貴下に從游せよといはれた、公は韓退之の如く、孔孟の道を踏まれる人であるが、貴下の文章を賞し、これをして、一頭地を拔き出るやうに致さうと云はれた。その後、酒醒め、夢斷ゆること、すでに四十年、予は、病鶴の如く、特に病なきも、骨は益す節くれ立ち、老いさらぼひて、顏まで憎さ氣に成つた。歐陽公の賓客は、九州に散在して居るが、白髮頭の幾人をか此に相收むることを得べき。予は王述の如く、自ら生を謀ることは極めて拙、尙書に任せらるれば、全く豫想外の優待であるとのことであつた。そこで、われ東坡は、つくづく物を案ずるに、君にして會稽に赴任したい由、願ひ出でられたのは、まことに善い思付で、萬壑流を爭ふといふ好風景を往いて看ることが出來るから、極めて面白いと思はれる。

【餘論】紀昀の評に「語、特に峭拔、惟だ收處、微にその促を覺ゆ」とある。この詩は、毎句押韻した謂はゆる柏梁體で、醉翁遣我より以下、已過優に至るまでは、美叔の言葉を其儘寫したので、三句、三句、四句と成つて居るのは、稍や他と異なるところである。

王文玉挽詞

王文玉の挽詞

才名誰似廣文寒。　才名、誰か廣文の寒きに似たる、
月斧雲斤琢肺肝。　月斧雲斤、肺肝を琢く。
元晏一生多臥病。　元晏一生、多く病に臥す、
子雲三世不遷官。　子雲三世、官を遷さず。
幽蘭空覺香風在。　幽蘭、空しく覺ゆ香風の在るを、
宿草何曾淚葉乾。　宿草、何ぞ曾て淚葉乾かむ。
猶喜諸郞有曹植。　猶は喜ぶ、諸郞に曹植あるを、
文章還復富波瀾。　文章還た復た波瀾に富む。

【字解】〔一〕廣文　唐の鄭虔、廣文館學士となる、前に病中大雪、及び鄭戸曹の詩中に注して置いた。〔二〕琢肺肝　韓愈の詩に「不用彫琢愁肝腎」とある。〔三〕元晏　晉書に「皇甫謐、自ら玄晏先生と號す、終生疾を稱して位を辭す」とある。〔四〕子雲　揚雄の名、成哀平の三世、官を遷さず、前に「至秀州」の詩中に注して置いた。〔五〕曹植　諸注に「曹志、蓋し魏の陳思王曹植の孽子、亦た學を好んで才行あるものなり」とある處から、曹植を曹志と改めた本もある。しかし、曹植を絕代の才人といふ意味にすれば、この儘でも解釋の出來ぬこともない。

【題義】王文玉は王幼父の父、爵里未詳。王文誥の案に「公北歸、幼安に與ふる書に云ふ、比來、親族或は往來を斷つ、惟だ幼安昆仲、待遇厚きを加ふ、と。又云ふ、もし未だ卽ち溝壑に塡せざれば、伯仲を見るに及び、功成つて歸らむか、と。この詩、猶喜諸郞の句、合に特に不詳なるべきのみ」とある。

【詩意】君は、古しへの鄭虔の如く、平生寒素に甘んじて居たが、誰も才名相似たるものもなく、雲月を斫る斧斤を以て、絕えず、肺肝を磨琢して居た。君は、皇甫謐の如く、一生の大半は病に臥し、又揚雄と同じく、三朝に歷事して、一官潦倒、少しも榮遷の慶が無かつた。幽蘭、すでに摧けて、空しく香風の猶ほ在るを覺え、宿草十年、淚に濕ふ葉は、決して乾くことがない。君、すでに逝くと雖も、令息中には、曹植の樣な絕代の才人があつて、その文章、波瀾に富み、すでに一家を成さむとす

る上は、君、亦た以て瞑すべしである。

山光寺送客回次芝上人韻

山光寺、客の回るを送り、芝上人の韻に次す

闍裏清游借隙光。　闍裏の清游、隙光を借る、
醉時眞境發天藏。　醉時の眞境、天藏を發す。
夢回拾得吹來句。　夢回つて、拾ひ得たり吹き來るの句、
十里南風草木香。　十里の南風、草木香ばし。

【字解】〔一〕隙光　隙を過ぐる日の光、短い時間。〔二〕天藏　張良の陰符經註に「六癸を天藏となす、以て伏藏すべきなり」とある。〔三〕夢回　夢が醒める。

【題義】程沙隨の古易占に「隋の煬帝、江都に來り、易を筮して、離の賁に之くに遇ひ、乃ち離宮を以て寺となし、名づけて山火といふ、卦の象に取るなり。後、改めて山光といふ。揚州の北十五里に在り、地は灣頭と名づく」とあり、盛儀の維揚志に「山光寺、隋の大業中に建つ」とある。芝上人、名は曇秀。東坡の雜記に「予、廣陵に在り、晁无咎、曇秀道人と舟を同じうして、客を山光寺に送る。客、去つて、予、舟中に醉臥す。秀、詩を作つて云ふ、

扁舟乘興到山光。古寺臨流勝氣藏。慚愧南風知我意。吹將草木作天香。

予、これに和す」とある。

【詩意】忙しい間に、一寸ばかりの暇を偸んで清游を試み、この眞境に來りし上は、醉時に、その神祕を歌ひ出さうとした。時しも、南風十里、草木香ばしく、予は午睡の夢醒めし後、その風の吹き寄せ來りし句を拾ひ得ただけである。

送芝上人游廬山

芝上人の廬山に游ぶを送る

二年閱三州。我老不自惜。　二年、三州を閱す、われ老いて自ら惜ます。
團團如磨牛。步步踏陳跡。　團團として、磨牛の如く、步步、陳跡を踏む。
豈知世外人。長與魚鳥逸。　豈に知らむや、世外の人、長く魚鳥と逸するを。
老芝如雲月。炯炯時一出。　老芝は雲月の如く、炯炯として、時に一たび出づ。
比年三見之。常若有所適。　比年、三たび、之を見る、常に適するところあるが若し。
逝將走廬阜。計濶道逾密。　逝いて、將に廬阜に走らむとす、計濶くして道逾よ密。
吾生如寄耳。出處誰能必。　吾が生、寄の如きのみ、出處、誰か能く必せむ。
江南千萬峯。何處訪子室。　江南千萬峯、何の處にか子の室を訪はむ。

【字解】〔一〕二年閱三州　王註に「先生、元祐六年を以て杭を離れ、召されて翰林承旨となる。この年、又出でて潁州に守たり。七年、揚州に徙る。この詩は、乃ち七年の作なり、故に云ふ」とある。〔二〕磨牛　牛に挽かせる石臼。〔三〕如雲月　雲間の月。その

志操の光明磊落なるを云ふ。【四】三見之 はじめ齊安に在つて往來答問し、後、惠州、金陵に於て相遇ひしを云ふ。【五】廬阜 卽ち廬山。

【題義】この詩は、前首に見えた芝上人、卽ち僧曇秀の廬山に游ぶを送つたのである。

【詩意】二年の間に三州を歷めぐつたが、予が衰老に向ふことは自ら惜しいとも思はず、ぐるぐる廻ることは、石臼を挽く牛の如く、步步、ふるい足跡を踏んでばかり居て、世外の人が、いつでも、魚鳥と共に逸情を縱にすることを知らぬ果敢なさ。ここに、老いたる芝上人は、雲間の月の如く、炯炯として、時時一寸顏を出す位、予は近年打つづけて三度も逢つたが、常に意に適するところあるが如く、全く樂天的である。今度は、廬山に出かけるさうだが、計畫の濶大なる程、從つて、道に對して愈よ密接することと思ふ。わが生命は、まことに寄寓して居る樣なもので、出處進退は、誰が之を豫知しやう。他日、江南千萬峰の間に分け入つて、何處に上人の居所を尋ねやうか。

【餘論】紀昀は「計濶の句、未だ醒せず」といつて居るが、如何にも尤もである。

送程德林赴眞州

程德林の眞州に赴くを送る

君爲縣令元豐中。
君、縣令となる元豐の中、

吏貪功利以病農。
吏は功利を貪つて、以て農を病ましむ。

君欲言之路無從。
君、之を言はむと欲するも、路從るなく、

移書諫臣以自通。
書を諫臣に移して、以て自ら通ず、

元豐天子爲改容。
元豐の天子、爲に容を改む。

我時匹馬江西東。
われ時に匹馬、江の西東、

問之逆旅言頗同。
これを逆旅に問へば、言、頗る同じ。

老人愛君如劉寵。
老人、君を愛すること、劉寵の如く、

小兒敬君如魯恭。
小兒、君を敬すること、魯恭の如し。

爾來明目達四聽。
爾來、明目、四聽を達し、

收拾駔駿冀北空。
駔駿を收拾して、冀北空し。

君爲赤令有古風。
君は赤令となつて、古風あり、

政聲直入明光宮。
政聲、直に入る明光宮。

天廐如海養羣龍。
天廐、海の如く、羣龍を養ふ、

幷收其子豈不公。
幷せて、その子を收む、豈に公ならざらむや。

白沙何必煩此翁。
白沙、何ぞ必ずしも此翁を煩はさむ。

【字解】【一】諫臣 東坡の自註に「諫臣は婁受之なり」とある。【二】劉寵 前に擬徐州の詩中に注して置いた。【三】魯恭 後漢書の本傳に「中牟令に拜せらる。郡國、蝗、稼を傷けしが、中牟に入らず。河南尹袁安、仁恕掾肥親を遣し、往いて之を廉さしむ。恭、ともに桑下に坐す。雉あり、過ぎて其傍に止まる。傍に童兒あり。親曰く、兒、何ぞ之を捕へざると。兒言ふ、雉、方に雛を將ゆと。親瞿然として起つて曰く、蟲、境を犯さず、これ一異なり。化、鳥獸に及ぶ、これ二異なり。豎子、仁心ある、これ三異なり、と。府に還り、具さに狀を以て安に白す」とある。【四】明目達四聽 書經に明四目、達四聰とあつて、明目は、無論、四目を明かにするの義、四は四方を兼ねて云ふ。【五】駔駿 いづれも名馬。【六】冀北 冀州の北なる平野、名馬の產地として知られて居る。【七】赤令 特に指定したる四京近縣の長官、王註に「東京は惟だ開封・祥符、西京は惟だ河南・永安、南京は惟だ宋城、北京は惟だ元城、これを赤縣

せらる」とある。【八】牧其子　東坡の自註に「君の子郎、制策に擧げられ、文學行義、時に稱といひ、その餘は、乃ち之を幾顧と云ふなり」とある。【八】白沙　唐では眞州を永正縣白沙鎭と稱して居た。

【題義】この詩は、程德林の眞州に赴任するを送つたのである。査註に「程德林、名は筠、先生と同年、本集二十三卷中に見ゆ。九域志、淮南東路眞州軍事、乾德二年、揚州の永眞縣迎鑾鎭を以て建安軍となし、祥符六年、升せて州となし、揚子縣に治す」とある。

【詩意】元豐年中、君は、縣令となつたが、その頃は、新法を厲行するといふので、吏は功利を貪つて、農夫を苦ましめた。そこで、君は此事に就いて上言したいと思つたが、何分、由るべき路が無いので、書面を諫官に差し出して、自ら通せむとし、それが、幸にも乙夜の覽に入り、神宗皇帝は、爲に容を改めて感動された。その時、予は、四馬に跨つて、大江の東西を旅したが、隨處の宿屋で聞いて見ると、その言ふことは、大抵同じで、上述の事は、動かぬ處であつた。君は、非常に人望がある爲に、老人は君を愛して、劉寵の樣な循吏だといひ、小兒は君を敬して、魯恭の如き人だといつて居た。その後、天子は、愈よ四目を明かにし、四聰を達せられ、駿馬を拾ひ上げて、冀北の野も無一物に成る位。君は、四京近縣の長官となつて、古人の風ありと稱せられ、その政績の好評は、直接に明光宮に入つて、天子の御耳に達した。元來、天子の御廐は、廣きこと海の如く、駑馬を收容する位であるから、君の令息が登庸された處で、決して、依怙ひいきではない。そして、古しへの白沙鎭、卽ち今の眞州の如き遠地の州縣は、何も必ずしも、君を煩はさずとも善いので、もツと、氣の利いた官職に轉任されることが、まことに望ましい。

古別離、送蘇伯固

　　古別離、蘇伯固を送る

三度別君來。此別眞遲暮。　三度、君に別れて來る、この別、眞に遲暮。

白盡老髭須。明日淮南去。　老髭須を白盡し、明日、淮南に去る。

酒罷月隨人。淚溼花如霧。　酒、罷んで、月、人に隨ひ、淚、溼うて、花、霧の如し。

後夜逐君還。夢繞湖邊路。　後夜、君を逐うて還り、夢は繞る湖邊の路。

【題義】古別離は、別離に關係ある古詞で、卽ちそれに擬して蘇伯固を送つたのである。伯固は、前にも見えて居る。

【詩意】三たび、君に別れたが、今回の別は、わが老年の日に際し、殊に感慨が深い。君も年を取つて、すツかり髭鬚を白くし、明日は淮南に向つて出立されるとのこと。今しも、酒罷んで、月は人に隨ふが如く、淚に溼ひたる花は、霧の如く見える。後日、夜の夢は君を逐うて行き、そして、湖邊の路を繞り歩くことであらう。

【餘論】紀昀は「音節、生査に似たり、恐らくは誤收に係る」といひ、合註には「この詩、先生の詞類に見ゆ、調名生査子」とある。おもふに、實は塡詞であるが、その詩に近い處より、後人の詞を知

らぬものが此に編入したので、即ち誤收であらう。

谷林堂

深谷下窈窕。高林合扶疎。
美哉新堂成。及此秋風初。
我來適過雨。物至如娛予。
稚竹眞可人。霜節已專車。〔一〕
老槐苦無賴。〔二〕風花欲塡渠。
山鴉爭呼號。谿蟬獨清虛。
寄懷勞生〔三〕外。得句幽夢餘。
古今正自同。歲月何必書。

谷林堂

深谷、下に窈窕。高林、合して扶疎。
美なるかな、新堂成り、この秋風の初に及ぶ。
われ來つて適ま過雨、物至つて予を娛ましむるが如し。
稚竹、眞に人に可なり、霜節、すでに車を專にす。
老槐、苦だ無賴、風花、渠を塡めむと欲す。
山鴉、爭つて呼號、谿蟬、ひとり清虛。
懷を寄す勞生の外、句を得たり幽夢の餘。
古今、正に自ら同じ、歲月、何ぞ必すしも書せむ。

【字解】〔一〕專車　その極めて大なるを云ふ、家語に「孔子曰く、むかし、禹、羣臣を會稽の山に致す、防風氏、後れて至る、禹、殺して之を戮す、その骨節、車を專にす」とある。〔二〕無賴　勝手にはびこる。〔三〕勞生　李白の詩に、處世若大夢、胡爲勞其生とある。

【題義】名勝志に「大明寺は、蜀岡の側に在り、寺內谷林堂」とある。合註の說に、谷林とは、この詩の起首二句から取つたので、後から定めたものかも知れないとあるが、或は其反對かも知れぬ。

【詩意】深谷は、下つて行くと奧深く、高林は、合しても矢張り扶疎である。新堂は、美事に落成し、丁度、秋風の吹く初であつた。われ此に來ると、折から過雨に遇ひ、あらゆる物は、特に予を娛ましめる樣に見えた。中にも、若竹は、勢がよくて賴母しく、霜を淩ぐべき高節を矜りつつ、すでに車を專にする位大きくなつた。老槐は、勝手にのさばり、風に吹かるる落花は、溝を埋めむとして居る。山鴉は、爭つて叫ぶが、谷の蟬は、清清しく無心らしく聞こえる。わが思を浮世の外に寄せ、幽夢醒むる時に、偶然句を得た。大觀すれば、古今、正に相同じであるから、月並流に、落成の年月などを事事しく書き留めるにも及ばぬことと思はれる。

【餘論】紀昀は「深意なくして謹嚴厚重、自ら老筆」といつて居る。

雲師無著自金陵來見予廣陵。且遺予支遁鷹馬圖。將歸以詩送之。且還其畫

雲師無著、金陵より來つて予を廣陵に見る。且つ予に支遁の鷹馬圖を遺る。將に歸らむとす、詩を以て之を送り、且つ其畫を還す

道人自嫌三世將。〔一〕

道人自ら嫌ふ三世の將、

【字解】〔一〕三世將　史記王翦傳に「將たる三世の者は、必ず敗る、

棄家十年今始壯。　家を棄てて十年、今、はじめて壯。
玉骨猶寒富貴餘。　玉骨、猶ほ寒し富貴の餘、
漆瞳已照人天上。（二）　漆瞳、すでに照らす人天の上。
去年相見古長干。（三）　去年、相見る古長干、
衆中矯矯如翔鸞。（四）　衆中、矯矯として翔鸞の如し。
今年過我江西寺。　今年、わが江西の寺を過ぐ、
病瘦已作霜松寒。　病瘦、すでに霜松の寒を作す。
朱顏不辦供歲月。　朱顏、辦ぜず歲月に供するを、
風中蒿火湯中雪。（五）　風中の蒿火、湯中の雪。
好問君家黃面翁。（六）　好し問へ、君が家の黃面翁、
乞得摩尼照生滅。（七）　摩尼を乞ひ得て、生滅を照らさむ。
莫學王郞與支遁。（八）（九）　學ぶ莫れ王郞と支遁とを、
臂鷹走馬憐神駿。　鷹を臂にし、馬を走らして神駿を憐む。
還君畫圖君自收。　君の畫圖を還す、君、自ら收めよ、

その殺伐するところ多きを以てなり。その後、その不祥を受けむ。今王離、すでに三世の將なりと。居ること何もなくして、項羽、趙を救うて秦軍を擊ち、果して王離を虜にす」とある。【二】人天上　人間天上を合稱す。【三】古長干　一統志に「金陵の長干里は聚寶門外に在り、長干橋あり」と見ゆ。【四】矯矯　傑出の貌。【五】蒿火　よもぎの火、藁火の如く直に消ゆるもの。【六】黃面翁　釋迦を云ふ。【七】摩尼　明珠、寶積經に「明月珠・摩尼珠は、多く龍の胸中に在り」と見ゆ。【八】王郞　卽ち王愔。【九】支遁　世說に「支道林、常に數匹の馬を養ふ。或は言ふ、道人、馬を畜ふは韻ならずと。支曰く、貧道、その神駿を愛す」とある。【一〇】木人騎土牛　州泰が鐘繇と相戯れし語、前に梅擧命

不如木人騎土牛。（一〇）　如かず木人の土牛に騎するに。

【題義】　雲師無著は、坊さんであるが、如何なる人か分からぬ。この詩題は、雲師無著が金陵から揚州に來て東坡を訪ひ、そして、支遁鷹馬の圖を惠投された。やがて、その金陵に歸らむとするに際し、この詩を作つて其行を送り、且つ其畫を還したといふのである。

【詩意】　雲師は、自ら三世將門の子である處から、武人と成れば、きッと失敗するといふので、家を棄つること、すでに十歲、そして、やッと壯年になつた。さすがに富貴の家の出であるから、玉骨なほ寒く、漆を點じた樣な瞳は、人間天上を殘りなく照らす位。去年、金陵の長干で過つたが、衆中に傑出して、さながら、天がける鳳鸞の樣であつた。然るに、今年、われを揚州の寺に訪はれると、形貌一變、病瘦の後、霜を帶びたる松の如く見えた。朱顏を長く駐めるには、何を歲月に供したら善いか。とても、寄る年波には敵し得ぬもので、人生の果敢なさは、風中の蒿火、湯中の雪の如くである。されば、佛家の大本尊たる釋迦に問ひ、摩尼の明珠を胸中に收め、その智慧を以て、生滅の理を照破する外はない。予は古しへの王愔・支遁を學んで、鷹を臂にし、馬を走らし、その名馬の神駿を愛する樣な氣には成れぬ處から、折角ながら、頂戴した畫を返上するので、君は之を收納されることと然るべく、又これを見たならば、豁然大悟、到底、木人が土牛に騎して居るのに及ばぬと思はれることであらう。

—の詩中に注して置いた。

予少年頗知種松、手植數萬株、皆中梁柱矣、都梁山中、見杜輿秀才、求學其法、戲贈二首

予少年、頗く松を種うるを知る。手植數萬株、皆梁柱に中れり。都梁山中、杜輿秀才を見る、其法を學ばむことを求む。戲に贈る　二首

霧宿泥行草棘中。　露宿泥行、草棘の中、

十年春雨養蒼龍。　十年春雨、蒼龍を養ふ。

如今尺五城南杜。　今の如き、尺五城南の杜、

欲問東坡學種松。　東坡に問うて種松を學ばむと欲す。

【題義】東坡は、少年の頃より、松を養植することを餘程よく知つて居たので、現に手植の數萬株は、皆生長して、梁柱に用ひられた。この頃、都梁山中に於て、秀才杜輿に逢つた處が、その法を傳授して哭れろといつたから、戲に二絶句を賦して之に贈つた。査註に「杜輿、字は子師、盱眙の人。晁无咎の雞肋集、杜子師字序あり。本集に、種松の法を記す。十月以後、冬至以前、松實結熟して未だ落ちず、折り取り、蓼を併せて、それを竹器に收む。春初に至り、實を取つて荒茅地中に入る、春雨を得て自ら松を生ず、性至つて堅悍なるも、はじめ生ずるときは至つて脆弱、多く日と牛羊とを畏る、故に荒茅の地を須ひ、茅陰を以て日を障る、須らく護するに棘を以てすべし。五年の後、乃ち其下枝を洗ふべく、七年の後、乃ち其細密なる者を去るべし」とある。

【詩意】草やいばらの生ふる中を、露に宿し、泥に行いて、懇に世話をなし、十年の久しき、そばふる春雨に霑されて、松は段段生長する。君は、城南咫尺に住んで居る都人であるが、予に問うて、松を植ゑることを研究しやうといふのは、まさしく志あるものである。

【字解】【一】蒼龍　松を云ふ。【二】尺五城南杜　杜甫の詩に、同歸尺五天とあつて、皇城を去ること僅かばかりといふ義、城南杜の杜は秀才の姓。

君方掃雪收松子。　君、方に雪を掃うて松子を收め、

我已開榛得茯苓。　われ、已に榛を開いて茯苓を得たり。

爲問何如插楊柳。　爲に問ふ、楊柳を插むに何如ぞや、

明年飛絮作浮萍。　明年、飛絮、浮萍となる。

【詩意】君は、今しも、雪を掃つて松の實を拾ひ集められるが、予の植ゑた松は、すでに長じ、荊榛を披いて、その根から茯苓を掘り出した位。楊柳を插木にすると、すぐに根が付くが、明年、柳の花が咲き、それが飛ぶと浮萍となるだけで、何の效果もない。これに比較すると、松を植ゑるのは、はるかに、厚生利用の道に叶つたものである。

【字解】【一】浮萍　施註に「舊說、楊花、水に入つて浮萍となる、これを驗するに信に然り」とある。

行宿泗間見徐州張天驥次舊韻

行いて泗間に宿し、徐州の張天驥を見、舊韻に次す

二年三躡過淮舟。　二年、三たび躡む、淮を過ぐるの舟、
(一)款段還逢馬少游。(二)　款段、還た逢ふ馬少游。
無事不妨長好飲。　無事、妨げず長く飲を好むを、
著書自要見窮愁。(三)　著書、自ら窮愁を見るを要す。
孤松早偃(四)原非病。　孤松早く偃す、原と病に非ず、
倦鳥雖還豈是休。　倦鳥還ると雖も、豈に是れ休せむや。
更欲河邊幾來往。　更に河邊に幾たびか來往せむと欲す、
祇今霜雪已蒙頭。　祇今、霜雪、すでに頭に蒙る。

【字解】〔一〕款段　馬をいふ。〔二〕馬少游　前に山村五絶の詩中に注して置いた。〔三〕窮愁　史記虞卿傳に「意を得ず、乃ち書を著し、上は春秋を採り、下は近世を觀、曰く、節義・稱號・揣摩・政謀、凡そ八篇、世、これを傳へて虞氏春秋といふ」とある。〔四〕早偃　酉陽雜俎に「世傳ふ、松千歲、方に傾平偃蓋と。然れども、數年輒ち偃するあり、但し、根下に於て、石に遇へば偃するのみ」とある。松は上へ上へと伸びるもので、横に廣がるのは、何か異狀があるからだといふ俗說がある。

【題義】この詩は、行いて泗水の間に宿し、徐州の張天驥に逢つたから、舊韻に次して、これに示したのである。舊韻は、卽ち前に見えた「送張山人歸彭城」と題する詩の韻である。

【詩意】予は、この二年の間に、三度、淮水の渡舟に乗り、ここに、馬を驅つて、馬少游に比すべき君に邂逅した。苟くも、無事なる上は、長しへに、酒ずきを發揮した處で差支はないし、書を著すのは、自然窮愁を顯はす爲めで、君の刻下の境涯は、まさしく此の如くであらう。しかし、孤松が早く横に廣がつたとて、もとより病の爲ではないし、倦鳥は、飛び還つても、それッきりで休むといふのではなく、君とても、今後、更に活動することもあらう。そこで、今後幾たびも、河邊を往來して、君に逢はうと思つて居るが、只今、霜雪が頭上に蒙り、大分年が寄つて、おもふ樣に成らぬのは、まことに致方の無いことである。

【餘論】紀昀は「東坡の七律、駿快なるもの多し、かくの如きの沈著を得難し」といつて居る。

次韻劉景文贈傅義秀才

劉景文の傅義秀才に贈るに次韻す

(一)幼眇文章宜和寡。　幼眇の文章、宜なり、和寡し、
(二)峥嶸肝肺亦交難。　峥嶸の肝肺、亦た交はる難し。
未能飛(三)瓦彈清角。　未だ瓦を飛ばして、清角を彈ずる能はず、
肯便投(四)泥戲潑寒。　肯て便ち泥を投じて潑寒に戲れむや。
忽見秋風吹洛水。　忽ち見る、秋風の洛水を吹くを、
遙知霜葉滿長安。　遙に知る、霜葉の長安に滿つるを。

【字解】〔一〕幼眇　要眇と讀む、奥深く玄妙なる貌。〔二〕峥嶸　高くすぐれたる貌。〔三〕飛瓦彈清角　韓非子に「衞の靈公、晉に之く。平公、これを臺に觴す。公、乃ち師涓を召して師曠の傍に坐せしむ。琴を援つて之を撫して、未だ終らず。師曠曰く、清徵に如かずと。平公、試に之を聽かむことを請ふ。一たび奏す

詩成送與劉夫子。　詩成らば、送與せよ劉夫子、

莫遣孫郎帳下看。　孫郎をして、帳下に看せしむる莫れ。

れば、玄鶴二八ありて來り集まり、再び奏すれば列し、三たび奏すれば頸を延べて鳴き、晋、宮商の聲に中り、聲、天に聞こゆ。師曠曰く、淸角に如かずと。一たび之を奏すれば、雲あり、西北方より來り、再び之を奏すれば、大風至り、大雨これに隨ひ、帷幄を裂き、俎豆を破り、廊瓦を隳す」とある。【四】投泥戲潑寒　唐書張說傳に「玄宗、召して中書令となす。はじめ、武后の末年、潑寒胡戲を爲す。中宗、かつて樓に乘じて縱觀す。ここに至り、四夷の來朝に因つて、復た之を爲す。說、上疏して曰く、四夷和を請ふ、當に接するに禮樂を以てし、示すに兵威を以てすべし。乞寒潑胡、未だ典故を聞かず、裸體跣足、泥を沮し、水を揮ふ、盛德何ぞ見むと、これを納る」とある。【五】孫郎帳下看　前に次韻答邦直子由」の詩中に注して置いた。

【題義】この詩は、劉景文の傅羲秀才に贈る詩に次韻し、仍つて秀才に贈つたのである。

【詩意】奧深く玄妙なる文章は、和する人が少く、崢嶸たる高論を肺肝より吐き出すものに對しては、なかなか交際が六つかしい。劉景文の贈詩は、要するに、あまり、ひねり過ぎて居る。しかし、奇を求めた處で、かの師涓の如く、淸角を彈じて廊瓦を落すことは出來ぬことであるし、潑寒の胡戲を爲して、泥を投げつけるのは、無論宜しくない。秋風の洛水を吹くを見て、霜を帶びた落葉の長安に滿つるを知り、それを巧對となすは、卽ち君の長所である。そこで、君の詩が出來たならば、荊州に比すべき劉君の處に送つて遣るが善いので、かの孫策帳下の兒をして、讀ましめてはならぬ。

【餘論】紀昀は「中四句、虛字平頭、東坡、往往忌まず、然れども、是れ一病、能く詩をして薄くして剽ならしむ」といつて居るが、まさしく篤論である。

在彭城日、與定國爲九日黃樓之會、今復以是日、相遇於宋、凡十五年、憂樂出處、有不可勝言者、而定國學道有得、百念灰冷、而顏益壯、顧予衰病、心形俱悴、感之作詩

彭城に在るの日、定國と九日黃樓の會を爲し、今復た是日を以て、宋に相遇ふ、凡そ十五年、憂樂出處、言ふに勝ふ可からざる者あり。而して、定國、道を學びて得るあり、百念灰冷、しかも顏益〻壯。顧るに、予衰病、心形俱に悴む。これに感じて詩を作る

菊盞黃囊自古傳。　菊盞黃囊、古しへより傳ふ、

長房寧復是臞仙。　長房、むしろ復た是れ臞仙。

應從漢武橫汾日。　應に、漢武、汾に橫ふの日に從ふべし、

數到劉公戲馬年。　數へて到る、劉公、戲馬の年。

對玉山人今老矣。　玉山の人に對して今老いたり、

見恒河性故依然。　恒河の性を見て故と依然。

王郎九日詩千首。　王郎九日、詩千首、

【字解】【一】菊盞黃囊　續齊諧記に「汝南の桓景、費長房に隨つて游學累年。長房、謂つて曰く、九月九日、汝の家、當に災あるべし、宜しく急に去るべし。家人をして、各〻絳囊を作つて茱萸を盛り、以て臂に繫ぎ、山に登つて菊酒を飲ましむれば、この禍、消ゆべし、と。景、その言の如くし、家を舉げて山に登る。夕に還つて見れば、雞犬一時暴死す。長房、これを聞いて曰く、これ代る

べきなり、と。今世人九日登高、ここに始まる」とあり、又西京雜記に「漢の武帝の宮人賈佩蘭、九月九日、茱萸を佩び、蓬餌を食ひ、菊花の酒を飲む、云ふ、人をして長壽ならしむ」とある。【三】漢武横汾　文選に「漢の武帝、河東に行幸し、后土を祠り、秋風辭を作つて曰く、泛樓船兮濟汾河、横中流兮揚素波」とある。【四】劉公戲馬　南齊書に「宋武、姓は劉氏、諱は裕、宋公となつて、彭城に在り、九月九日、項羽の戲馬臺に登る」とある。【五】對玉山人　晉書裴楷傳に「風神高邁、容儀俊爽、時人稱す、裴叔則を見れば、玉山に近づくが如く、人に照映するなり」とある。【六】恒河性　楞嚴經に「佛、波斯匿王に問ふ、むかし、恒河の水を見る、今見るところと何ぞ異なる。王對ふるに、宛然異なきを以てす。佛、再び之に語る、汝の髮白く面皺あるを以てして、ここに精性を見れば、未だ曾て皺あらざるなり」とある。

今賦黄樓第二篇。今賦す、黄樓の第二篇。

【題義】さきに、彭城に居た時、王定國と共に黄樓に登つて、重陽の雅會を催したが、今又その日を以て、宋中に於て相遇ひ、數ふれば、すでに十五年になり、その間に於ける悲喜進退は、殆んど言ふに勝へざるものがある。しかし、定國は、道を學んで得るところあるものと見え、百念灰の如く冷かにして、顏色は、益す若若しい。それに較べると、予、東坡は、衰病の餘、心形ともに憔悴した。そこで、これに感じて、この詩を作つたといふのである。

【詩意】菊花の盃、茱萸の嚢は、古しへより傳ふるもので、これを桓景に敎へた費長房は、よもや、痩せた仙人ではあるまい。九月九日といへば、漢の武帝に從つて、樓船、汾河を横ぎつた日であるが、さし向、曾游の緣故があるので、劉裕が彭城に於て戲馬臺に登つたことを思ひ出す。玉山の如き人に對しては、今吾老いたりと云つて歎する外はなく、恒河の本性は、依然として、昔の通りである。

王君は、その九日に於て、千首の詩を賦せられたが、今日は、黄樓の第二篇を賦し出されることであらう。

【餘論】紀昀は「對玉山人、句法佳ならず」といつて居るが、頗る的確である。

九日次定國韻

九日、定國の韻に次す

(一)朝菌無晦朔。蟪蛄疑春秋。
朝菌は晦朔なく、蟪蛄は春秋を疑ふ。

(二)南柯已一世。我眠未轉頭。
南柯、すでに一世、わが眠、未だ轉頭せず。

仙人視吾曹。何異蜂蟻稠。
仙人、吾曹を視る、何ぞ蜂蟻の稠きに異ならむ。

不知(三)蠻觸氏。自有兩國憂。
知らず蠻觸氏、自ら兩國の憂あるを。

我觀去來今。未始一念留。
われ去來今を觀るに、未だ始めより一念留まらず。

奔馳竟何得。而起無窮羞。
奔馳、竟に何をか得たる、しかも、無窮の羞を起す。

(四)王郎誤涉世。屢獻久不讎。
王郎、誤つて世を涉り、屢ば獻じて久しく讎いられず。

黄金散行樂。清詩出窮愁。
黄金、行樂に散じ、清時、窮愁を出す。

俯仰四十年。始知此生浮。
俯仰、四十年、はじめて知る、この生の浮なるを。

軒裳陳道路。往往兒童收。
軒裳、道路に陳し、往往にして兒童收む。

封侯起大第。或是君家騶。(五)
封侯、大第を起す、或は是れ君家の騶。

似聞負販(六)人。中有第一流。
聞くに似たり、負販の人、中に第一流ありと。

炯然徑寸珠。藏此百結裘。(七)
炯然たる徑寸の珠、この百結の裘に藏す。

意行無車馬。倏忽略九州。
意行、車馬なく、倏忽略ぼ九州。

邂逅獨見之。天與非人謀。
邂逅、ひとり之を見る、天與、人謀に非ず。

笑我方醉夢。衣冠戲沐猴。(八)
笑ふ我が方に醉夢、衣冠、沐猴に戲るるを。

力盡病騏驥。伎窮老伶優。
力盡きて騏驥を病ましめ、伎窮まつて伶優を老ゆ。

北山有雲根。(九)寸田自可耰。(一〇)
北山に雲根あり、寸田、自ら耰すべし。

會當無何鄉。(一一)同作逍遙游。
かならず當に無何の鄕、同じく逍遙の游を作すべし。

歸來城郭是。(一二)空有纍纍邱。
歸り來らば、城郭是れなり、空しく纍纍の邱あるのみ。

【字解】【一】朝菌　莊子に「朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず、これ小年なり」とある。【二】南柯　異聞集に「淳于棼、かつて夢に一國に至る、大槐宮といふ。國に入る、王、女を以て之に妻はせ、拜して南柯太守と爲す。夢中倏忽として、一世を度るが若し。覺めて之を理するに及びて、乃ち宅南大槐樹下の蟻穴なり」とある。【三】蠻觸氏　莊子に見ゆ、前に眞公濟和復次韻の詩中に注して置いた。【四】王郎　王定國を云ふ。【五】君家騶　騶は馬飼ひ、唐人の詩に咸陽原上英雄卒、半是君家養馬來と云ふと同じ。【六】負販　貨物を脊負うて賣りに行く、卽ち行商。【七】百結裘　ぼろぼろに破れた著物。【八】沐猴　漢書伍被傳に「漢廷の公列侯、皆沐猴にして冠するが如きのみ」とある。【九】雲根　石を云ふ。【一〇】可耰　耰は耕す。【一一】無何鄉　詳しくは無何有鄉、莊子に「何ぞ之を無何有の鄕、廣莫の野に樹ゑ、彷徨乎として其側に無爲ならざる」とある。【一二】城郭是　搜神記に「遼東華表柱上に鶴あり、言うて曰く、有鳥有鳥丁令威、去家千歲今來歸、城郭猶是人民非、何不學仙冢纍纍」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】朝菌は、唯だ一日で死ぬから、月の晦朔を一緒に知つて居らず、夏蟬は、三伏の間だけ生きて居るから、春秋は如何なるものかと疑ふばかり。夢に南柯の太守となつたのも、一世を度つたもので、眠つた儘、まだ頭を轉じない間の出來事である。生死の外に超然たる仙人から見ると、吾輩人類がうぢやうぢやして居るのは、蜂や蟻の數多いと格別の相違もない。如何なれば、蠻觸二氏は、互に國家の憂を懷いて、蝸牛角上に於て鬪爭したのであるか。これを思ふと、死生輕んずべく、富貴忽にすべく、百念皆灰冷、區區として黨爭をなすのは、實に愚の極である。予は、過去現在未來に亙つて達觀し、はじめより、何處にも一念が留まつて居ない。いくら忙しく立ち廻つた處で、畢竟、何をか得べき、唯だ無窮の羞を起すだけである。ここに、王君は、誤つて世を渉り、度度朝廷に上言したが、お取り上げにならず、そこで、行樂の爲に黃金を散じ、窮愁の餘、淸麗なる詩を作つた。俯仰して、四十年間の事を見、はじめて、この人生は浮き浮きして、何も根柢の無いものだといふことを知つた。大官の用ふる車や禮服は、道路に陳列してあつて、ともすれば、兒童輩が之を收めるし、封

309
65

侯になつて大きな屋敷を建てるものがあつても、ひよッとすると、元と君の家の馬飼であつた。これは、詰まらぬ者が偶然立身したのであるが、どうかすると、行商人の中にも、第一流の大人物が居るし、炯然たる直徑一寸の名珠が、襤褸の中に包まれて居ることもある。そこで、君は、都をさまよひ出で、車馬なきに拘はらす、倏忽の間に九州を歷めぐつたが、偶然邂逅して、ここで御目にかかつたのは、もと天が與みしたからで、到底、人の謀ではない。今しも、予は、醉夢の中に在つて、衣冠物物しきも、さながら沐猴に戲るるが如く、力盡きては、名馬も役に立たす、技倆が窮まつては、名優も老い朽ちて仕舞つた。北山には、石が峨峨として居るが、わづかばかりの田は、耕すことが出來る。いづれ、君と重ねて無何有の鄕に遇うて、逍遙の游を爲さうと思ふ。その時、おのが鄕里に歸ると、城郭のみは依然たれども、冢纍纍として、親戚故舊は皆死んで仕舞ひ、まことに、感慨に堪へぬことであらう。

【餘論】 查評に「一語の九日に及ぶなし、只だ是れ自ら襟期を寫して檢點に暇なし」とあり、紀評に「滾滾として來り、却つて屈曲自如、一沓語なし」とある。

終

續國譯漢文大成

文學部 六十六の上

309
65

缺入

始

吉田幹郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第六十六册 (第十七帙の上ノ二)

蘇東坡詩集 五の二

309
65

古今體詩　六十五首

召還至都門先寄子由　召し還されて都門に至り、先づ子由に寄す

老身倦馬河隄永。　老身倦馬、河隄永く、
踏盡黃槐綠槐影。　踏み盡す黃槐綠槐の影。
荒雞號月未三更。　荒雞、月に號んで、未だ三更ならず、
客夢還家時一頃。　客夢、家に還る、時に一頃。
歸老江湖無歲月。　歸つて、江湖に老いて、歲月なし、
未塡(一)溝壑猶朝請。(二)　未だ溝壑に塡せず、猶ほ朝請。
黃(三)門殿中奏事罷。　黃門殿中、事を奏して罷み、
詔許來迎(四)先出省。　詔して、來迎を許し、先づ省を出づ。
已飛青蓋(五)在河梁。　すでに青蓋を飛ばして、河梁に在り、
定餉黃封(六)兼賜茗。　定めて黃封を餉り、兼ねて茗を賜ふ。

【字解】〔一〕未塡溝壑　孟子に「志士は溝壑に塡するを忘れず」とあつて、のたれ死をすること。杜甫の詩に但覺高歌有鬼神、焉知餓死塡溝壑とある。〔二〕朝請　參謁、漢書の註に「漢律、春には朝といひ、秋には請といふ、古しへの諸侯朝聘するが如きなり」とある。〔三〕黃門殿中　王註に「唐玄宗紀、開元元年、門下省を改めて黃門省となす、今以て言ふは、子由、時に門下侍郎たればなり」とある。〔四〕來迎　施註に「故事、執政離謁、無親あらば、仍ち先づ上聞し、旨を得て出づ」と

遠來無物可相贈。　遠來、物の相贈るべきなし。
一味豐年説淮潁。　一味の豐年、淮潁を説く。

ある。【五】青蓋　蓋は車上の天蓋、施註に「故事、宰相執政は、青蓋を襲るを許す」とある。【六】黄封　施註に「歐陽文忠公感事詩註に云ふ、仁宗の朝、學士と作る、上、天章閣に幸し、黄封酒一缾、鳳團茶一斤を賜ふ」とある。

【題意】元祐七年七月、東坡は揚州に在つて未だ歳を閲さざるに、俄に召し還され、兵部尚書を以て侍讀を兼ぬることに成つた。この詩は、汴京到著前、取り敢へず、弟の子由に寄せたので、子由は、その時、門下侍郎に在職して居た。

【詩意】老いたる此身を疲れた馬に乘せて行くと、黄河の隄も長く覺え、黄楡綠槐の影を踏み盡して、覺束なくも、とぼとぼと路をたどつて歩ませる。宿屋に泊まると、荒雞月に叫んで、夜は未だ三更ならず、束の間に、客夢は、早くも、都なる我が家に歸つた。身は、江湖に歸老して、いつといふ限りもないが、幸にも、のたれ死にを免れて、今回參謁する次第。君は、門下省に在つて、天子に奏上し、やがて、勅許を得て、態態予を出迎へることになり、先つて、役所を出られたであらう。されば、すでに青蓋を飛ばして、河の橋の處に待つて居られるであらうが、定めて、天子より賜はりし黄封酒や鳳團茶を持つて來たであらう。折角、君が遠くまで遣つて來たのに、相贈るべき物なきは、まことに遺憾であるが、予は、曩に淮潁を治め、出來るだけ民利を圖り、一味の豐年、人民が喜んで居るから、いつかは、その地に歸休するといふことを聞いて貰へば、それで善からうと思ふ。

【餘論】紀昀は、起四句を評して「超手警拔」といひ、次の四句に就いて「一轉、便ち輕捷」といひ、最後に「結、穎濱に投老するの意を寓す、泛作、時事を頌美するの詞に非ず」といつて居る。

次韻定國見寄

定國の寄せらるるに次韻す

還朝如夢中。雙闕眩金碧。　朝に還れば夢中の如し、雙闕、金碧眩たり。
復穿鴛鷺行。(一)强寄麋鹿跡。　復た鴛鷺の行を穿ち、强ひて麋鹿の跡を寄す。
勞生苦晝短。展轉不能夕。　生を勞して晝の短きに苦み、展轉して、夕なる能はず。
默坐數更鼓。(二)流水夜自逆。(三)　默坐して更鼓を數へ、流水、夜、自ら逆ふ。
故人爲我謀。此志何由畢。　故人、わが爲に謀る、この志、何に由つてか畢らむ。
越吟(四)知聽否。誰念病莊舃。(五)　越吟、知つて聽くや否や、誰か念はむ病莊舃。

【字解】【一】鴛鷺行　朝官が參朝する時の行列。【二】更鼓　夜の刻限を報ずる街鼓。【三】夜自逆　王註に「道家曰く、黄河の水逆流す、これ搬運の法なり」とある。【四】越吟　東坡の自註に「時方に越を請ふ」とある。【五】莊舃　史記陳軫傳に「軫、秦の惠王に對へて曰く、越人莊舃、楚に仕へて執珪たり。頃らくあつて病む、楚王曰く、舃は、もと越の鄙細人なり、今楚に仕へ、執珪として貴富、亦た越を思ふや不や。中謝對へて曰く、凡そ人の故を思ふ、その病に在り。彼、越を思はば越聲、越を思はざれば楚聲、と。人をして往いて之を聽かしむるに、猶ほ尙ほ越聲なり。今、臣、棄逐されて楚に之くと雖も、豈に能く秦聲なからむや」とある。

【題意】説明に及ばぬ。定國、姓は王、前に數ば見ゆ。

【詩意】朝廷に還ると、丸で夢中の如く、二つの城門は、金碧燦爛として、目にまばゆき程である。又ぞろ、朝臣の行列に割り込んで、强ひて、麋鹿に等しき野人の跡を寄せて居る。絶えず、生を勞して、晝の短きに苦み、展轉として、この身を持て餘す程で、なかなか、日が暮れない。黃河の水は、夜になると逆流し、それで運搬も出來るといふので、物事には、自ら必然の方法がある。そこで、知合の人人は、わが爲に、色色斡旋して吳れるが、この志は、いつ畢るであらうか。予は、今越に赴任せむことを求め、仍つて越吟を爲すが、果して、聞き知つて吳れるか如何か、そして、この病める莊舃を誰が哀れと思つて吳れるであらうか。

【餘論】紀昀は「起十字神來、閱歷の人に非ざれば道ふ能はず」といひ「夕の字、押し得て妥ならず」といつて居る。

次韻蔣穎叔錢穆父從駕景靈宮二首

蔣穎叔・錢穆父の駕に景靈宮に從ふに次韻す　二首

歸來病鶴記城闉(一)。　歸り來つて、病鶴、城闉を記す、
舊踏松枝雨露新。　舊と踏む、松枝、雨露の新なるを。
半白不羞垂領髮。　半白、領髮を垂るるを羞ぢず、
軟(二)紅猶戀屬車(三)塵。　軟紅、猶は戀ふ屬車の塵。
雨收九陌(四)豐登後。　雨は收まる、九陌豐登の後、
日麗三元(五)下降辰。　日は麗かに、三元下降の辰。
粗識君王爲民意。　粗ぼ識る、君王、民の爲にするの意、
不才何以助精禋(六)。　不才、何を以てか精禋を助けむ。

【字解】〔一〕城闉　闉は城內の二重門。〔二〕軟紅　東坡の自註に「前輩の戲語、西湖の風月は、東華の軟紅香土に若かず」とある。〔三〕屬車　お供の車。〔四〕九陌　都大路。〔五〕三元　ここのは三才に同じ、卽ち天地人。〔六〕精禋　禋は精意を以て祀ること。

【題義】蔣穎叔、名は之奇、この時、戶部侍郎。錢穆父、名は勰、この時、權戶部尙書。景靈宮は、困學紀聞に「景靈の宮の原廟たるは、元豐五年より始まる。これより前、帝后の神御、佛老の祠に寓す」とある。元祐七年十一月、景靈宮に於て、御祭があつたので、東坡は、鹵簿使となり、その時、蔣・錢の二人が供奉員として詩を作つて見せたから、取り敢へず、次韻したのである。

【詩意】予は、頃ろ、揚州より都に歸り來り、病鶴に似たる身は、むかし、松の枝に降り注ぐ雨露の極めて新なるを踏んだことを覺えて居る。頭は、半分白く成つたが、なほ襟髮を垂るるを羞とせず、軟紅香土の都に居て、矢張、供奉の車の塵を懷かしく思ふ。今しも、雨が晴れて、都大路は、豐年の氣分に滿ち、日は麗かにして、三才の神神は、宛然として來り格るといふ有樣。君王が人民の爲に盡される仁意だけは、略ぼ解知して居るが、不才の此身、折角の御祭の御世話をすることの出來ないのは、まことに腑甲斐なきことである。

【餘論】紀昀の評に「風格老重」とある。

與君竝値記初元（一）。　君と竝び値うて、初元を記す、
白首還同入禁門。　白首、還た同じく禁門に入る。
玉殿齊班容小語。　玉殿、班を齊しうして、小語を容れ、
霜廷（二）稽首泫微溫（三）。　霜廷、稽首して、微溫を泫す。
病貪賜茗浮銅葉（四）。　病んで、賜茗を貪つて、銅葉を浮べ、
老怯香泉灩寶樽。　老いて、香泉を怯れて、寶樽灩たり。
回首鵷行有人傑。　首を回らせば、鵷行、人傑あり、
坐知羌虜（五）是游魂。　坐に知る、羌虜は是れ游魂。

【字解】〔一〕初元　元祐の初年。その時、錢勰は、給事中に從つて、東坡と共に紫薇閣に當直した。〔二〕霜廷　霜の降つた境内。〔三〕微溫　東坡の自註に「適ま穆父と竝に、庭中を拜す、殆皆流涕、相與に小語す」とある。〔四〕銅葉　演繁露に「朔前、茶を賜ふ、皆、建盞を用ひずして、大湯甓を用ふ。その制、銅葉に像たる湯甓のみ。銅葉は、黃褐色なり」とある。〔五〕羌虜　西夏を云ふ。

【詩意】錢君とは、元祐の初年、ともに、紫薇閣に直したことがあつて、今次、又、白髮頭を振り立てて、同じく宮門に入つた次第。玉殿の下に於て、同列に居つつ、ひそひそ話を爲し、霜の鋪ける境内で拜をすると、微溫の爲に、霜が解けて流れて居る。病氣の所爲でもあらう。予は、賜はり物の茶を貪つて、頻りに銅葉の形せる湯甓に汲んで貰つたが、年を取つて居るので、香泉に比すべき名酒の寶樽に滿ち溢へたるを見ると、怯氣立つ次第。首を回らせば、朝臣の行列中には、蔣君の如き人傑があつて、やがて、邊境の將帥となつたらば、さしもの羌人も、幽靈の如く、逃げ場を失ふことであらう。

【餘論】紀昀は、中二聯を評して「四句、遂に湊泊を嫌ふ」といつて居るが、なる程、內容は區區たる瑣事で、あまり面白くはない。

憶江南寄純如五首　江南を憶うて、純如に寄す　五首

楚水（一）別來十載（二）。　楚水、別來十載、
蜀山望斷千重。　蜀山、望斷つ千重。
畢竟擬爲傖父。　畢竟、傖父たらむことを擬す、
憑君說與吳儂（三）。　君に憑る、吳儂に說與せよ。

【字解】〔一〕楚水　揚子江。〔二〕十載　王文誥の按に「公、元豐七年甲子を以て黃州を離る、この元祐七年壬子に至りて、凡そ九年を閱す、詩に十載と言ふは、成數を舉ぐるなり」とある。〔三〕吳儂　儂は吳人自ら呼ぶの稱。前に看潮五絕、及び書林逋詩後の詩中に注して置いた。

【題意】この詩は、江南の風土を憶うて純如に寄せたのである。但し、純如その人、姓名失考。

【詩意】楚水に別れてから、すでに十載を經たが、故國の蜀山千重、望も斷ゆるばかり、遠く隔つて、なかなか歸れない。とどのつまりは、傖父となる積りであるが、君に憑つて、その事を吳人に知らせ

て貰ひたい。

湖目也堪供眼。　湖目、也た眼に供するに堪へたり、

木奴自足爲生。　木奴、自ら生を爲すに足る。

若話三吳勝事。　もし、三吳の勝事を話すれば、

不惟千里蓴羹。　惟だ千里の蓴羹のみならず。

【詩意】江南の蓮の實は、目を喜ばすことが出來るし、柑橘類を栽培すれば、見事に、活計が立つ。もし三吳の勝事を話すれば、ひとり、張翰が千里の遠きより歸つたといふ蓴羹ばかりではない。

【字解】〔一〕湖目　蓮の實。〔二〕木奴　柑橘の類、前に東坡八首の詩中に注して置いた。〔三〕三吳　前に丟杭五年の詩中に注して置いた。〔四〕千里蓴羹　張翰の故事、前に金山寺の詩中に注して置いた。

人在畫屏中住。　人は、畫屏中に在つて住し、

客依明月邊游。　客は、明月の邊に依つて游ぶ。

未卜柴桑舊宅。　未だ卜せず、柴桑の舊宅、

須乘五湖扁舟。　須らく乘ずべし、五湖の扁舟。

【字解】〔一〕柴桑　宋書に「陶潛は潯陽柴桑の人、かつて五柳先生傳を著して曰く、宅邊に五柳樹あり、因つて、以て號となす」とある。〔二〕五湖扁舟　五湖は太湖。吳、すでに亡びし後、范蠡、越を去つて五湖に浮んだ。後漢書隗囂傳に「方望、書を以て囂に辭して曰く、范蠡、責を句踐に收め、扁舟に五湖に乘ず」とある。

【詩意】畫屏風の如き江南の佳景中に住み、人は遠く明月の邊から來る、まだ官を罷めて、柴桑の舊宅に卜居する運に立ち至らぬが、世を避けて、五湖の扁舟に乘り出す積りである。

生計曾無聚沫。　生計、かつて聚沫なし、

孤踪謾有清風。　孤踪、謾に清風あり。

治產猶嫌范蠡。　產を治めて、猶ほ范蠡を嫌ひ、

攜孥頗笑梁鴻。　孥を攜へて、頗る梁鴻を笑ふ。

【字解】〔一〕聚沫　列子に「魚、臣の餉餌を見る、猶ほ沈埃聚沫のごとく、これを吞んで疑はず」とある。〔二〕范蠡　史記貨殖傳に「范蠡、產を治めて積居し、時と逐うて人を責めず」とある。〔三〕攜孥　家族を攜帶する。〔四〕梁鴻　前に笑王子立の詩中に注して置いた。

【詩意】生計を爲すに際して、聚沫と見まがふ好餌もなく、伴もなき蹤跡は、漫に清風あるものとして、人に慕はれて居る。范蠡が財產を造り上げたといふは、もとより吾が嫌ふところであるし、梁鴻が御苦勞にも妻孥を攜へて、吳中まで飄零したのは、まことに笑ふべきことである。

弱累已償俗盡。　弱累、すでに償うて俗盡し、

老身將伴僧居。　老身、將に僧居に伴はむとす。

未計季鷹高潔。　未だ計らず、季鷹の高潔、

秋風直爲鱸魚。　秋風、直に鱸魚の爲なり。

【字解】〔一〕僧居　東坡は上京して、汝公の浴室に寄寓せしが故に云ふ。〔二〕季鷹　張翰の字、前に送劉攽の詩中に注して置いた。

【詩意】弱弱しい繫累は、それぞれ始末を付けて、全く俗化して仕舞ひ、老いたる此身は、坊さんの

處に寄寓して居る。むかし、張翰は、高潔に矜り、秋風を見るに因つて鱸魚を思ひ、直に官を辭して歸國したといふが、予は、まだ其眞似が出來ぬから仕方がない。

軾近以月石硯屏獻子功中書公、復以涵星硯獻純父侍講、子功有詩、純父未也、復以月石風林屏贈之、謹和子功詩、竝求純父數句。

軾、近ごろ月石硯屏を以て子功中書公に獻じ、復た涵星硯を以て純父侍講に獻す。子功は詩あるも、純父は未だし。復た月石風林屏を以て之に贈り、謹んで子功の詩に和し、竝に純父に數句を求む。

（一）紫潭出玄雲（二）。　紫潭は玄雲を出し、
翳我潭中星。　わが潭中の星を翳す。
獨有潭上月。　ひとり潭上の月あり、
倒掛紫翠屏。　倒に紫翠屏に掛る。
我老不看書。　われ老いて書を看ず、

默坐養此昏花（三）晴。　默坐して、この昏花の睛を養ふ。
時時一開眼。　時時一たび眼を開き、
見此雲月眼自明。　この雲月を見て、眼、自ら明かなり。
久知世界一泡影。　久しく知る、世界は一泡影、
大小眞僞何足評。　大小眞僞、何ぞ評するに足らむ。
笑彼三子歐梅蘇（四）。　笑ふ彼の三子、歐梅蘇、
無事自作雪羽爭（五）。　無事、自ら雪羽の爭を作す。
故將屏硯送兩范（六）。　故らに屏硯を將て兩范に送る、
要使珠璧棲窗櫺。　珠璧をして窗櫺に棲ましむるを要す。
（七）大范忽長謠。　大范は忽ち長謠、
（八）語出月脅令人驚。　語は月脅を出でて、人をして驚かしむ。
（九）小范當繼之。　小范、當に之に繼ぐべし、
（一〇）說破星心如雞鳴。　星心を說破して雞鳴の如し。
牀頭復一月。　牀頭、復た一月、

【字解】【一】紫潭　硯を云ふ。【二】玄雲　墨を云ふ。【三】昏花　暗く霞んだ瞳子。【四】歐梅蘇　歐陽修・梅聖兪・蘇舜欽。東坡の自註に「事は三人の詩集に見ゆ」とあり、王註に「歐陽永叔・蘇子美、皆月石硯屏の詩あり、梅聖兪の酬月石硯屏詩、予觀二人作詩論月石月在天上石在山下、安得石上有月跡、至矣歐陽公、知不可詰不覺、遂欲使來者默自釋、蘇子苦豪邁、何用強引犀角蚌蛤巧辯折」とある。【五】雪羽爭　白雪の白と白羽の白と、いづれが眞正の白かといふことで、孟子に見ゆ。【六】兩范　子功、純父の二人。【七】大范　子功を云ふ。【八】語出月脅　月の脅を破つて出る、皇甫湜の顧況集序に「偏に逸歌長句に於て、駿發踔厲、往往にして天心を穿ち、月脅を出づるが若し」とある。【九】小范　純父を云ふ。【一〇】說破星心　孟郊の鬪角に「似開孤月口、能說落星心」とある。【一一】少陵　即ち杜甫。【一二】山木　杜甫の戲題畫山水歌に、「舟人漁子入浦漵、山木盡亞洪濤風」とある。

下有㆓風林橫㆒。　下に風林の橫ふあり。
急送㆓小范家㆒。　急に小范の家に送つて、
護㆓此涵星泓㆒。　この涵星の泓を護せしむ。
願從㆓少(二)陵㆒博㆓一句㆒。　願はくは、少陵に從つて、一句を博し、
(三)山木盡與㆓洪濤㆒傾。　山木盡く洪濤と傾く。

【題義】 月石硯屛は、圓形の硯屛と見える。宋史に「范百祿、字は子功、鎭の兄楷の子、進士に第し、又才識兼茂科に擧げらる」とあり、東都事略に「范百祿、元祐中、開封府に知たり、復た召されて翰林に入り、中書侍郎に拜す。祖禹、一字は夢得、幼にして孤、叔祖鎭、撫育すること己の子の如し。哲宗立つて、右正言に擢んでられ、翰林學士に拜せらる。叔、百祿、中書に在るを以て、侍講學士に改められ、百祿去つて復た之となる。蘇軾、稱して講官第一となす」とある。涵星硯は、硯の池の中に星が十三あつたといふことで、張世南の游宦紀聞に見えて居る。范純父は、前に數ば見ゆ。月石風林屛は、均しく、圓形の石であつて、その面に風林と見ゆる模樣ある硯屛であらう。題の意味は——予は、近ごろ、月石硯屛を子功中書に、涵星硯を純父侍講に贈呈すると、子功は直に詩を作つて謝意を表されたが、純父は、未だである。そこで、重ねて月石風林硯屛を純父に贈り、謹んで子功の詩に次韻し、純父にも、是非何か作れといつて、催促したといふのである。

【詩意】 涵星硯で墨を措ると、十いくつかある潭中の星を掩翳して見えなくなる。月石硯屛は、硯潭の上の月が、倒に紫翠蓊然たる石屛に挂つて居る樣に見える。予は、年を取つて、書物を見ず、默然獨坐、これに依つて暗く霞みかかつた瞳子を養つて居る。時時、一たび目を開いて、この雲月を眺めると、目は、自然明かになる。元來、この世界は、一個の泡影に過ぎず、大小眞僞など、事事しく論ずる必要はない。むかし、歐梅蘇の三公は、矢張、月石硯屛の詩を作り、雪羽いづれが本當の白色であるかと云ふ樣なことに就いて、役にも立たぬ爭をしたことがある。今わざと硯屛と硯とを兩范に分贈し、珠玉に比すべき此珍品を窻櫺の間に留め置いて貰はうと思つた。すると、大范の子功は、忽ち長歌を作り、踔厲駿發、月の脅を蹴破つて出でたるが如く、人をして驚かしむるばかり。小范の純父も、これに繼いで、雞鳴の如く、落星の心を說破すべき筈である。ここ牀頭に又一個の月石硯屛があつて、下には、風に搖らぐ林の模樣がある。今急に之を小范に贈呈して、涵星硯の前に竪てさせることにした。そこで、一句でも善いから、杜甫の樣な詩を賜はりたく、山木が洪濤と共に、盡く傾くといふ樣にもぢるのも、なかなか面白からうと思ふ。

【餘論】 乾隆御批に「起八句、硯屛を連絡し、瑰偉絕特、中間、行るに迤邐を以てし、紓にして迫まらず、却つて、少陵の詩話一句を用ひて結住す。これを讀まば、更に千百言の腕下に在るあるが如きなり」とある。しかし、紀昀は「看て老橫に似たり、究に是れ滑調」といつて痛斥して居る。

次韻范純父涵星硯月石風林屏詩

范純父の涵星硯・月石風林屏の詩に次韻す

（一）月次於房歷三星（二）　月は房に次して三星を歷、
（三）斗牛不神箕獨靈　斗牛、神ならず、箕、獨り靈なり。
簸搖桑榆（四）盡西靡　桑榆を簸搖して、盡く西に靡く、
影落蘇子硯與屏　影は落つ蘇子の硯と屏と。
天工與我兩厭事　天工、われと兩つながら事を厭ふ、
孰居（五）無事爲此形　孰れか無事に居て、この形を爲す。
與君持（六）橐侍帷幄　君と橐を持して帷幄に侍し、
同列溫室（七）觀蓂莢（八）　同じく溫室に列して蓂莢を觀る。
自憐太史（九）牛馬走　自ら憐む、太史牛馬走、
伎等卜（一〇）祝均倡伶　伎は卜祝に等しく、倡伶に均し。
欲留衣冠挂（一一）神武　衣冠を留めて神武に挂けむと欲す、
便擊雲水歸南溟　便ち雲水を擊つて、南溟に歸る。
（一二）陶泓不稱管城（一三）沐　陶泓は、管城の沐に稱はず、
（一四）醉石可助平原醒　醉石は、平原の醒を助くべし。
故持二物與夫子　故に二物を持して夫子に與へ、
欲使妙質留天庭（一五）　妙質をして天庭に留まらしめむと欲す。
但令滋液到枯槁　但だ滋液を枯槁に到らしめよ、
勿遣光景生晦冥　光景をして晦冥を生ぜしむる勿れ。
上書掛名豈待我　上書名を掛く豈に我を待たむや、
獨立自可當（一六）雷霆　獨立、自ら雷霆に當るべし。
我時醉眠風林下　われ時に醉眠す風林の下、
夜與漁火同青熒　夜、漁火と同じく青熒。
撫物懷人應獨嘆　物を撫し、人を懷うて、應に獨り嘆ず「べし、」
作詩寄子誰當聽　詩を作つて子に寄す、誰か當に聽くべき。

【字解】【一】月次於房　漢書律歷志に「月、房の五度に在つて、後三日、辰に合す、斗前一度に在り」と見ゆ。【二】三星　二十八宿中の東方七宿に屬する心星の一名、詩經の唐風に「三星在天」と見ゆ。【三】斗牛不神　韓愈の三星行に、「三星各在天、什伍東西陳、嗟汝牛與斗、汝獨不能神」とあり、又、「箕獨有神靈、無時停簸揚」とある。【四】桑榆　前に送周朝議の詩中に注して置いた、日暮、夕ぐれの日影の義。【五】居無事　莊子に「天、其れ運るか、地、其れ處るか、日月、其れ所を爭ふか、孰れか無事に居て、推して是を行る」とある。【六】持橐　橐は囊。【七】溫室　漢宮闕記に「未央宮に宣明・長年・溫室・昆明の四殿あり」と見ゆ。【八】蓂莢　帝王世紀に「堯の時、草あり、階に當つて生じ、毎月朔、一莢を生じ、月半十五莢を生ず、十六に至つて一莢落ち、月晦に至つて盡く。月小なれば一莢を餘して落ちず、王者これを以て歷を占す、和に應じて生まる、以て堯瑞となし、これを蓂莢と名づく」とある。【九】太史牛馬走　前に見ゆ、太史牛馬の僕の義。【一〇】卜祝　司馬遷の報任安書に「僕の先人、剖符丹書の功あるに非ず、文史星歷、卜祝の間に近く、主上の戲弄するところ、倡優の畜ふところ、流俗の輕んずるところなり」とある。【一一】挂神武　南史陶弘景傳に「齊の高帝、相と作り、引いて諸王の侍讀となし、除せられて朝請を奉ず。永明十年、朝服を脫して神虎門に掛け、上表して祿を辭す、詔して之を聽るす」とある。【一二】陶泓　硯の異名、韓愈の毛穎傳に見

ゆ。【三】晉城　條の異名、同上。【四】醉石可助平原醒　唐餘錄に「李德裕、平泉の別墅に於て、天下の珍木怪石を采り、園池の玩を爲す。醒酒石あり、德裕の尤も寶惜するところ、醉へば之に踞す。德裕曰く、廬山記、陶淵明居るところの栗里に大石あり、淵明自放、酒を以てし、名づけて醉石といふ」とある。【五】天庭　朝廷。【六】雷霆　舊唐書に「歸登、右拾遺となる。時に、裴延齡、姦佞を以て恩あり、相たらむと欲す。陽城、上疏切直、德宗怒る。右補闕熊執易等、亦た危言を以て旨に忤ふ。はじめ、執易、疏を草して成り、登に示す。登愕然として曰く、願はくは、名を雷霆の下に寄せむ、安んぞ足下をして獨り當らしむるに忍びむや」とある。

【題義】東坡が前首を寄せて、頻りに責め立てたから、范純父も、遂に涵星硯・月石風林屛を贈られたことを謝する旨の詩を賦して、東坡に與へた。すると、東坡は、又ぞろ、それに次韻した。范純父の原作は、范太史集に見え、子瞻尙書惠㆓涵星硯月石風林屛㆒、賦㆓十二韻㆒以謝と題して、その全篇は、左の通りである。

端溪千仞涵㆓明星㆒。皺山太古藏㆓陰靈㆒。蘇公贈㆑我此二寶。使㆔我坐臥瞻㆓雲屛㆒。我觀㆓天地間㆒。有㆑物皆流形。或從㆓青空㆒入㆓幽谷㆒。中夜隕㆑石翻㆓階蓂㆒。奇怪志㆑怪不㆑能㆑狀。欲㆑說但恐同㆓優伶㆒。公游㆓浙江㆒探㆓禹穴㆒。長嘯㆓宇宙㆒臨㆓滄溟㆒。手攀㆓天河㆒弄㆓星月㆒。醉落㆓大筆㆒還徵醒。故分㆓星月㆒入㆓我室㆒。光照㆓牕戶㆒風生㆑庭。長林偃㆓絕壁㆒。晩色寒㆓青冥㆒。似㆑聞洪濤卷㆓萬木㆒。直幹不㆑折當㆓風霆㆒。玄雲欲㆑落㆑雪。夜久孤燈熒。愧無㆓青玉案㆒。苦吟徒使㆓神鬼聽㆒。

【詩意】月は房に宿つて、三星を歷て行く。その時、南斗も、牽牛も、神奇を失ひ、箕の星のみが、ひとり靈ある樣に見える。そこで、月と箕との光焰は、日影いざよふ桑楡の木を蘸ひ搖かして、西へ靡かしめ、やがて、その影が我が家に落ちて、例の涵星硯と月石風林屛と、この二物に化したのである。天工と予とは、二人とも、事を生ずるを嫌つて居るのに、二人の中、孰れが無事の境界に居て、かういふ形態の物を造り出したのであるか。近ごろ、君と共に朝臣に列し、今財嚢を攜へて參朝すると、帷幄に侍して謀議に與かり、又一緒に溫室殿に推參して、堯瑞と稱せられた蓂莢を見たことがある。しかし、予は、元と太史公牛馬の僕であつて、その伎能は、卜祝に等しく、又倡優俳人の類に過ぎぬといつて、あまり重要視されなかつた。そこで、古しへの陶弘景の如く、衣冠を神武門に挂け、斷然職を辭せし後、雲水を擊つて、舟で南海に歸り、つまり越地に赴任したいと思つて居る。この涵星硯は、池淺くして、筆を沐せしむるに足らず、月石の硯屛は醉石の類、李德裕の眞似をして、平泉園中で酒の醉を醒ます助にもならぬが、ことさらに、この二件の品を先生に捧呈し、その妙質を廟堂の上に留めさせたいと思つたのである。たとひ、硯石が其性を失つて、潤ひが乾涸するとも、月石とさへいふ其硯屛をして、光景晦冥ならしむることなく、これだけは、特に鄭重に保存して貰ひたい。君は、もとより骨鯁の臣で、上書して事を論ずるに當つては、もとより予を待たず、ただ一人で、天子雷霆の威に當る覺悟で居られるのは、まことに偉い。その時、予は、すでに都を出で、その硯屛の下に在る樣な風林の下に醉臥して居るが、夜、君の處では、その硯屛が漁火の如く靑く熒いて居るであらう。この二品の事を考へ、又君を懷うて、ひとり歎息し、やがて、次韻の詩を作つて、君に寄せるのであるが、こは君だけに分かるので、外に誰も聽く人は無かるべき筈である。

【餘論】乾隆御批には「起して勢を得、後乃ち舒緩、その氣、以て之に副ひ、繩削を煩はさずして

自ら合す」とあり、紀昀は「輾轉深く至り、純ら意を以て勝り、しかも筆能く曲折、以て之を達す」といつて居る。

次韻錢穆父會飮

錢穆父の會飮に次韻す

(一)彈冠恨不早。(二)掛冠常苦遲。
冠を彈ずる、恨むらくは早からず、冠を掛くる、常に遲きに苦む。

(三)盛服每假寐。(四)角闕時伏思。
盛服、每に假寐、角闕、時に伏して思ふ。

東門未祖道。(五)西山空拄頤。(六)
東門、未だ祖道せず、西山、空しく頤を拄ふ。

逝將江海去。安此麋鹿姿。
逝いて、將に江海に去り、この麋鹿の姿を安んせむとす。

要當謀三徑。何暇擇一枝。(七)
要するに、當に三徑を謀るべし、何の暇か一枝を擇ばむ。

與君幾合散。得酒忘醇醨。(八)
君と幾たびか合散、酒を得て、醇醨を忘る。

君談似落屑。(九)我飮如奕棊。(一〇)
君の談、落屑に似たり、わが飮、奕棊の如し。

居官不任事。造物眞見私。
官に居て事に任せず、造物、眞に私せらる。

主人獨勞賢。金穀方流馳。
主人、ひとり賢を勞し、金穀、方に流馳。

行人亦結束。杕杜(一一)乃歸期。
行人、亦た結束、杕杜、乃ち歸期。

公卿雖少安。河流正東釃。(一二)
公卿、少しく安しと雖も、河流、正に東に釃ぐ。

我得會稽(一三)去。方回良不癡。
われは會稽を得て去り、方に回つて、良に癡ならず。

【字解】【一】彈冠　前に送江公著知吉州の詩中に注して置いた。【二】掛冠　後漢書に「逢萌家貧、縣に給事として亭長となる。嘆じて曰く、大丈夫、安んぞ能く人の役とならむや、と。遂に去つて、長安に之き、學、春秋に通ず。時に、王莽、その子宇を殺す、萌、即ち冠を解いて東都城門に掛け、家屬を將ゐ、海に浮んで遼東に客たり」とある。【三】盛服每假寐　左傳宣公三年に「晉の靈公不君、趙宣子、驟ば諫む。公、これを患へ、鉏麑をして之を賊せしむ。晨に往けば、寢門闢く、盛服將に朝せむとす、倘ほ早し、坐して假寐す。鉏麑、退いて、嘆じて言うて曰く、恭敬を忘れざるは、民の主なり」とある。【四】角闕　帝闕の角。【五】祖道　送別の宴を開く、前に次韻寄譴水の詩中に注して置いた。【六】拄頤　前に再用前韻寄莘老の詩中に注して置いた。【七】擇一枝　左傳哀公十一年に「孔文子の將に大叔を攻めむとするや、仲尼に訪ふ。仲尼曰く、胡簋の事は、かつて之を學ぶ、用兵の事は、未だ之を聞かざるなりと。退いて、駕を命じて行いて曰く、鳥は木を擇ぶ、木、豈に能く鳥を擇ばむや」とある。【八】醇醨　味の善きと薄くて不味なると。【九】似落屑　前に王郎以詩見慶の詩中に注して置いた。【一〇】如奕棊　東坡の自註に「世に詩を作つて奕棊の如きあり、奕棊は飮酒の如し、飮酒は乃ち大戒の語。僕、棊酒の二事に於て、ともに能くせざるなり」とある。【一一】杕杜　詩經の篇名、その小序に「還役を勞するなり」とある。【一二】東釃　王註に「釃は分つなり。元祐の初、黃河多く決す、河當に北流すべし、今東に釃ぐといふは、正に河の患を爲すを言ふなり」とある。【一三】會稽　前に送錢穆父出守越州の詩中に注して置いた。郗愔が北府より會稽太守に轉ぜしこと。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】冠を彈じてごみを拂ひ、出仕の用意をする時は、その早からざるを恨み、冠を掛けて辭職する時は、每に遲きに苦むのが普通である。しかも、予は、每日出仕する時は、早く仕度をなし、

盛服して假寐をして居るし、帝闕の角に至ると、時時、地に伏して君國の事を思つて居る。されば未だ東門外に送別の宴を張らず、西山を見て、空しく頤を拄へて居る。行く末は、江海に去つて、この麋鹿の姿を安んせむとし、陶淵明の如く、園中に三徑を開くことを謀るべきも、住むに善い樣な枝を擇ぶ暇だにない。君とは、幾度も、離れたり合つたりしたので、ここに會飮すると、うれしさの餘り、酒の味の善惡などは、とんと忘れて仕舞ふ位。君の話は鋸屑の如く霏霏として盡きないが、予の酒を飮むことは、罔碁と同じく、甚だ不調法である。これまで、官に居ても、碌碌、仕事をせず、そして、俸祿を貰つて居たのは、造物主が異に私した樣な譯である。君は、ひとり賢にして勞し、專ら金穀を司つて、民間の經濟の立つて行く樣に心を用ひて居られた。やがて、行人は、結束して、君の歸期を待つて出迎をすることであらう。公卿輩は、何も知らずして、少しく心を安んじて居るが、黃河は東に分流して、洪水の患は、今に止ます、君の骨折も、まことに察せられる。予は、轉じて、越國に守たるを得ば、滿足の至であるから、その時は、直に赴任すべく、決して躊躇して居らぬ覺悟である。

【餘論】紀昀は「金穀の句、佳ならず」といつて居る。

次韻穆父尚書侍祠郊丘瞻望天光退而相慶引滿醉吟

穆父尚書の郊丘を祠るに侍し、天光を瞻望し、退いて相慶して滿を引き醉吟するに次韻す

千章杞(一)梓蔭雲天。　千章の杞梓、雲天に蔭す、
樗(二)散誰收老鄭虔(三)。　樗散、誰か收む老鄭虔。
喜氣到君浮(四)白裏。　喜氣、君に到る、白を浮ぶるの裏、
豐年及我挂冠前。　豐年、我に及ぶ、冠を挂くるの前。
令嚴鐘鼓三更月。　令は、鐘鼓を嚴にす三更の月、
野宿貔貅萬竈煙。　野は、貔貅を宿す萬竈の煙。
太息何人知帝(五)力。　太息、何人か帝力を知らむ、
歸來金帛看䞓(六)肩。　歸り來つて、金帛、䞓肩を看る。

【字解】【一】杞梓　杞は白楊の屬、梓はあづさ。【二】樗散　樗は莊子に見え、不用の材としてある、【三】鄭虔　前に送張安道の詩中に注して置いた、杜甫の贈つた詩に鄭公樗散鬢成絲とある。【四】浮白　浮白は大白、卽ち杯。【五】帝力　王充論衡に「堯の時、百姓閑暇、壤を擊つて、征途に歌うて曰く、日出而作、日入而息、耕田而食、鑿井而飮、堯何力於我」とある。【六】䞓肩　荷物を舁いで肩の肉を赤くする、前に巽中田舒歟の詩中に注して置いた。

【題義】この詩は、戶部尙書たりし錢穆父が南郊に天を祭る時、供奉の班に備はり、徹夜の御祭が濟んで、東の空が白みわたりし時、退出して相慶し、そして、滿を引いて醉吟したといふ題の詩を作つたから、それに次韻したのである。

【詩意】千株の白楊だの梓だのは、繁茂して、青雲の空もかぎらふばかり、ここ南郊に於て、天を祭るに當り、誰か樗櫟の散材を以て目せられた老鄭虔の樣な君を收用して、供奉の班に居らしめたか。

天恩限なく、まことに有り難い仕合である。徹夜の祭が濟んで、君が滿を引いて飲まれる其時には、目出たい氣が、杯に注いだ酒の中にも漲りしなるべく、この御祭の爲に、五風十雨、よく相調ひ、予が辭職する前に、豐年で物價の廉くなるのは、結構な事である。抑も、南郊の大禮は、まことに素張らしいもので、令して鐃鼓を嚴にして、三更の月に敲き、野には、護衞の兵士を宿して、萬竈の煙が立ち上る。しかし、刻下至治の世、何人も帝力の偉大なることを知らぬは、却つて、太息すべきことであるが、供奉の職員には、それぞれ、莫大の賜り物があつて、金帛を脊負うて肩を赤くするのを見ても、さすがに、昇平の餘澤である。

【餘論】 紀昀は「五六、詩話に稱するところ、然れども三四亦た佳」といつて、ひとしく兩聯を激稱して居る。

郊祀慶成詩

郊祀慶成の詩

帝出乘昌運。天心予太平。
帝、出でて、昌運に乘じ、天心、太平を予ふ。

文章三代(一)繼。制作(二)七年(三)成。
文章、三代繼ぎ、制作、七年成る。

大祀乾坤合(四)。剛辰(五)日月明。
大祀、乾坤合し、剛辰、日月明かなり。

泰壇(六)朝掃地。魄寶(七)夜垂精。
泰壇、朝に地を掃ひ、魄寶、夜、精を垂る。

仰御圓蒼蓋。環觀海岳城。
仰いで御す圓蒼の蓋、環つて觀る海岳の城。

北流呑朔易(八)。西極落欃槍(九)。
北流、朔易を呑み、西極、欃槍落つ。

(一〇)升燎靈光答。回鑾瑞霧迎。
燎を升せば靈光答へ、鑾を回せば瑞霧迎ふ。

(一一)需雲偏枯槁。解雨(一二)達勾萌(一三)。
需雲、枯槁に徧ねく、解雨、勾萌に達す。

(一四)可頌非天德。因箴亦下情。
頌すべきは、天德に非ず、箴に因る、亦た下情。

民言知有酌(一五)。帝謂(一六)本無聲。
民言へば、知る酌むあり、帝謂ふ、本と聲なし。

富國由崇儉。祈年在好生。
國を富ますは、儉を崇ぶに由り、年を祈るは、生を好むに在り。

無心斯格物。克己自銷兵。
無心、斯に物を格し、克己、自ら兵を銷す。

化國安新政。孤臣返舊耕。
化國、新政に安んじ、孤臣、舊耕に返る。

還將清廟(一七)什。留與野人賡。
還た清廟の什を將て、野人に留與して賡せしむ。

【字解】 【一】 三代　夏殷周。【二】 制作　禮を制し樂を作る。【三】 七年　時は哲宗卽位の七年なるが故に云ふ。【四】 乾坤合　天地を倂せて祭りしを云ふ。【五】 剛辰　剛日、禮記に「外事は剛を以てし、內事は柔を以てす」とあり、鄭玄註に「その出づるに順ふを陽となすなり、郊に出づるを外事となす」とある。【六】 泰壇　爾雅に「圜丘泰壇、天を祭るなり」とある。【七】 魄寶　晉書天文志に「鉤陳口中の一星を天皇大帝といひ、その神を耀魄寶といふ」とあつて、天子に應ずる星。【八】 朔易　施註に「毛詩、北流活活、黃河の順流を言ふ。尙書、朔易を平在す。孔安國云ふ、北は朔易と稱す、歲、北方に改易するを云ふ」とある。【九】 欃槍　王註に

「西夏の寧靜を言ふなり。欃槍は妖星の名、出づれば兵見はるゝが故なり」とある。【10】升燎　篝火を焚く。【11】需雲　易に「雲、天に上れば需、君子以て飲食宴樂」とある。【12】解雨　易に「天地解して雷雨作り、雷雨作つて百果草木皆甲拆す、解の時、義、大なるかな」とある。【13】勾萌　禮記に「季春の月、生氣方に盛に、陽氣發洩、勾者は畢く出で、萌者は盡く達す」とある。【14】可頌非天德　唐書李絳傳に「安國佛祠、絳をして之が頌を爲らしめむと欲す。絳言ふ「大人、天地と德を合す、謂ふ、文字の能く盡すところに非ず、もし述ぶべからしむれば、これ陛下、美、分限あるなり」とある。【15】有酌　禮記に「上、民言を酌めば、下天、上に施す」とある。【16】帝謂　詩經に帝謂₂文王₁、予懷₂明德₁、不₃大₂聲以₁色、長夏以革、上天之載、無₂聲無₁臭とある。【17】清廟什　詩經の篇名。

【題義】施註に「元祐七年、哲宗、天地を圜丘に合祭す。公、兵部尙書を以て南郊鹵簿使となる。これより先、朝に八室を饗す、神宗の室に至り、上、涕洟止ます。癸巳冬至、禮を行ひ、上、誠を致す、極めて恭し、夜月澄爽、雲物晏溫、樓に御して肆赦す、終日和燠、天意昭答。翌日、風寒、相屬して、時に雪ふること、期の如し、宰執侍從、詩を進めて賀す、蓋し、この詩なり」とある。郊祀は、天を祭ること、慶成は滯りなく濟んだこと。

【詩意】今上陛下は、隆昌なる運に乘じて四海を治められ、天心、これを眷して、太平を與へられた。文章の盛は、三代に繼ぐべく、禮樂の制作は、七年を經て完成し、今次の大祭は、天地を幷せて祭り、剛辰に當つて、日月ともに、その光を明かにして居る。朝に圜丘を掃き淸め、夜になると、天子に應ずる星が其精を垂れ、仰いで、圜蓋の如く蒼蒼たる天を御し、海岳相繆はつて形勝の固を爲せる大地を眺めまはされる。黃河北流、その勢、順にして、朔易といふに叶ひ、西天の末には、欃槍、地に落ちて、西夏の入寇も、頃ろは靜まつた。篝火を焚くと、靈光これに答へ、鑾輿を回らすと、瑞霽これを迎へ、さすがに、天地の感應は爭はれぬ。そこで、天に上る雲は、枯れかかつたものを遍ねく保護し、天地を解く雨は、曲れるものを伸ばし、萌せるものをして達せしめる。天子の德は、洪大にして、もとより頌すべき限りではなく、箴言に因つて、務めて下情を察せられ、民の言葉を必ず酌み取り、上天の事は、もとより聲なきものである。國を富ますは、儉を崇ぶに由るべく、年豐を祈るは、生を好む仁德に本づくものである。無心にして、ここに物を格し、己に克てば、用兵の必要もないから、兵器を解かして仕舞ふ。王化に靏へる國國は、日に新なる仁政に安んじ、予の如き孤臣は、故士に歸つて躬耕したいといふ希望である。かくて、周代淸廟の什に比すべき祭祀の詩を世に傳へ、勝手に野人をしてこれに賡和せしめるのは、まことに有り難い仕合である。

【餘論】乾隆御批に「元豐元年、詳に郊祀の禮文を定めてより、六年冬至に至り、親ら圜丘を祀り、太祖を以て配し、はじめて天地合祭の禮を罷む。元祐五年、廷臣集議して、復た南郊竝祀の儀を定む。七年、親ら郊して、はじめて合祭を行ふ。宋制、三年に一郊、軾、兵部尙書を以て南郊鹵簿使となる。疏して儀仗を嚴整にせむことを請ひ、一時盛と稱す、合祭の禮、紹聖元年に至り、議に仍つて罷む。而して、軾は、合祭の說を主とす。然れども、合祭、亦た是年に行はれしのみ。時に、宰執侍從、詩を進めて以て賀す。故にこの詩あり。詩共に十四韻、而して、可₂頌非₁天德₁より以下は、ともに箴規の語を作す、これ謂はゆる事に因つて規を納れ、揚厲鋪張を藉らす、以てその華藻を矜るものなり」

とあり、紀昀は「字字老重、唐人應制の詩に減せず、而して、氣脈生動は、之に過ぐ。これ東坡が才を斂めて法に就きしの作」といひ「結、大臣の體を得たり」といつて居る。この詩は、五言排律で、卽ち唐人應制の定式である。

次韻王仲至喜雪御筵

王仲至の雪を喜ぶ御筵に次韻す

三軍喜氣鑠飛花。　三軍の喜氣、飛花を鑠す、
睡起空驚月在沙。　睡起、空しく驚く月の沙に在るを。
未集驊騮金騕褭。　未だ集めず驊騮の金騕褭、
故殘鳷鵲玉橫斜。　故らに鳷鵲に殘つて玉橫斜。
偶還仗内身如寄。　偶ま仗内に還つて、身、寄の如く、
尙憶江南酒可賖。　尙ほ江南を憶うて、酒、賖るべし。
宣勸不多心自醉。　宣勸、多からず、心、自ら醉ふ、
强扶衰白拜君嘉。　强ひて衰白を扶け、君を拜して嘉す。

【字解】【一】鑠　とかす。【二】驊騮　名馬。【三】騕褭　前に贈王仲素、及び次韻畢推官の詩中に注して置いた。上林賦に見え、金喙赤色にして一日一萬八千里を行くといふ神馬。【四】鳷鵲　漢殿の名、杜甫の詩に雪殘鳷鵲亦多時とある。【五】偶還　東坡は頃ろ揚州より召し還されしが故に云ふ。【六】可賖　金を後から拂つて物を買ふこと。【七】心自醉　後漢書劉寬傳に「靈帝、かつて坐に於て酒を被り、醉うて伏す。帝問ふ、太尉醉ふか。寬、仰いで對へて曰く、臣敢て醉はず、但だ任重く、責大に、憂心醉ふが如し」とある。【八】衰白　年を取つて頭が白くなる。【九】君嘉　嘉は、慶賀する。左傳襄公四年に「穆叔、晉に如く、晉侯、これを享し、鹿鳴の三を歌ふ。三拜して曰く、鹿鳴は寡君を嘉する所以なり、敢て嘉を拜せざらむや」とある。

【題義】この詩は、王仲至が看雪の御筵に陪して作つた詩に次韻したのである。王仲至、名は欽若、宋史に「蔭を用つて入つて官す。文彥博、薦めて學士院に試み、進士及第を賜ふ。性、古しへを嗜み、藏書數萬卷、手自ら讎正し、世に善本と稱す」とあり、續通鑑長編に「元祐六年九月、王欽若、工部侍郎となる。十一月壬寅、給事中となる。戊申、孔武仲の言を以て、詔して前命を寢む。八年六月權吏部侍郎たり」とある。

【詩意】三軍の喜氣、自ら熱して、飛花と見まがふ雪を銷さしめ、睡さめし後、起つて見れば、滿地ほの白くして、月の平沙に在るが如きに驚かされる。まだ驊騮の神馬を呼び出して、雪見に御出かけに成るにも及ばざるに、故らに、鳷鵲觀邊に消え殘つて、白玉の橫斜たるに似て居る。予は、偶然、京に歸つて來て、儀仗の内に加はつたが、この身は、唯だ寄生するものの如く、しかも、江南の景色は、さぞ美しく、酒を沽つて看賞するに足ることと思ふ。天子より仰せられて、職務を勵めといはれたことは多からざるも、任重く、責大に、心自ら醉ふが如く、强ひて、衰白の老軀を扶けて、君に御喜びを申し上げる次第である。

【餘論】紀昀は「六句、人の意表に出づ」といつて居るが、これ位の事は、誰でも言ふので、稍や中らぬ樣に覺える。

次韻奉レ和二錢穆父・蔣穎叔・王仲至詩一四首

次韻、錢穆父・蔣穎叔・王仲至の詩に和し奉る、四首

見レ和二西湖月下聽一レ琴

西湖月下に琴を聽くに和せらる

謖謖松下風。靄靄隴上雲。
聊將竊比レ我。不レ堪二持寄一レ君。
半生寓二軒冕（一）一。一笑當二琴尊一。
良辰飮二文字一。晤語無レ由レ醺。
我有二鳳鳴枝（二）一。背作二蛇蚹紋（三）一。
月明委二靜照一。心淸得二奇聞一。
當レ呼二玉潤手（四）一。一洗羯鼓昏。
請歌二南風曲（五）一。猶作二虞書渾（六）一。

謖謖たり松下の風、靄靄たり隴上の雲。
聊か將て竊に我に比す、持して君に寄するに堪へず。
半生、軒冕に寓し、一笑、琴尊に當つ。
良辰、文字を飮し、晤語、醺するに由なし。
われに鳳鳴の枝あり、背は蛇蚹の紋を作す。
月明かにして靜照に委し、心淸くして奇聞を得たり。
當に呼ぶべし玉潤手、一洗す羯鼓の昏きを。
請ふ、南風の曲を歌はむ、猶は虞書の渾を作す。

【字解】【一】軒冕　大官の車と冠。【二】鳳鳴枝　鳳の鳴く木、卽ち梧桐、轉じて、桐で造つた琴。詩經に鳳皇鳴矣、于二彼高岡一、梧桐生矣、于二彼朝陽一とあり、その傳に「鳳凰は、梧桐に非ざれば棲まず」とある。【三】蛇蚹　蚹は蛇の下腹に在る橫鱗。【四】玉潤手　東坡の自註に「家に雷琴あり、甚だ奇古、玉潤道人崔閑、雅琴に妙、當に呼んで彈ぜしむべし」とあり、紀昀の說に「手の字、疑ふらくは子の字の訛とある。【五】南風曲　家語に「むかし、舜、五絃の琴を彈じて、南風の詩を造る。その詩に曰く、南風之薰兮、可三以解二吾民之慍一兮、南風之時兮、可三以阜二吾民之財一兮」とある。【六】虞書渾　虞書は書經の篇名、揚子に「虞夏の書は渾渾爾たり」とある。

【題義】以下四首は、錢穆父・蔣穎叔・王仲至の三人の詩に次韻したので、第一首は、前卷に見えた東坡の西湖月下聽琴の詩に和したのに次韻したのである。

【詩意】松下の風は謖謖として吹き起り、隴上の雲は靄靄として、立ちこめて居る。この風と雲とを以て、聊か我に比するけれども、これを持して、君に贈ることは出來ぬ。予は、半生仕官して、軒冕の間に寓し、毎に琴樽の興を縱にして居た。良辰には文字の飮を催して、樂んで居るが、諸君が話をして、われを醉はしむることの出來ないのは、大に遺憾である。われに古琴があつて、背面には蛇の鱗の樣な紋が付いて居る。明月をして、靜に照らさしむるに任かせ、心淸くして、妙音を聞くことが出來る。これは、例の如く、玉潤道人を呼んで來て彈せしめ、羯鼓の聲の昏きを一洗せしむべく、その上、南風の曲を歌へば、矢張、虞書の如く、その文句は渾渾として居るであらう。

【餘論】紀昀の評に「一起し得て脫洒、題に黏せず、しかも題意宛然たり」とある。

見レ和二仇池一

仇池に和せらる

上窮二非想（一）一亦非非。

上は非想を窮めて亦た非非、

【字解】【一】非想　楞嚴經に

下與風輪(二)共一癡(三)。　下は風輪と共に一癡。
翠(四)羽若知牛(五)有角。　翠羽、もし牛の角あるを知らば、
空(六)瓶何必井之眉。　空瓶何ぞ必ずしも井の眉ならむ。
還朝暫接鵷鷺翼。　朝に還つて、暫く接す、鵷鷺の翼、
謝病行收麋鹿姿。　病を謝して行く收む麋鹿の姿。
記取和詩三(七)益友。　記取す、和詩の三益友、
他年弭(八)節過仇池。　他年節を弭めて仇池を過ぎむ。

「存して存せざるが如く、盡きて盡きざるが若く、かくの如きの一類、非想非非想處と名づく」とあり、華嚴經に「四空處天、無邊處天、無所有處天、非想非非想處天」とある。【二】風輪　華嚴經に「金輪水際の外に風輪あり」といひ、俱舍論に「地の深さ二十億萬里、下に金粟金剛あり、亦た各二十億萬里、下に水際八十億萬里あり、これ六重と爲し、第四は是れ地輪、第五水輪、第六風輪」とある。【三】共一癡　王註に「上天下地、皆然るを言ふ、蓋し、佛氏これを界といふのは、一癡想の成るところなり」とある。【四】翠羽　孔雀を云ふ。【五】牛有角　杜甫の赤霄行に孔雀未知牛有角、渴飲寒泉逢觝觸」とある。【六】空瓶　漢書陳遵傳に「揚雄、酒箴を作る、その文、酒客の爲に法度の士を譏す、これを物に譬へて曰く、子は猶ほ瓶のごとし、瓶の居るを觀るに、井の眉に居り、高きに處り、深きに深み、動けば常に危きに近し」とある。【七】三益友　蔣錢王の三人を云ふ。【八】弭節　しばらく旌節を止める。

【題義】この詩は、本卷に見えた仇池石の詩に和したのに次韻したので、題の仇池は、下に石の字を脫したのであらう。

【詩意】上は、非想を窮めて非非の域に至り、下は、世界最奥層の風輪を併せて、すべて一癡想に因つて出來たものと思つて居る。翠羽の孔雀が牛に角あることを知つたならば、態態井の邊に來て、空瓶の樣に水を吸ひ上げることもなからう。牛に角ある上は、往往にして觝觸を免れぬ。つまり、この世界は、幻想の爲に出來て居て、實在の物ではなく、この中に在つて、技捂衝突を爲すのは、思はざるの甚しきものである。予は、朝廷に還つて、しばらく鵷鷺の行列に交つて居たが、病氣を言ひ立てて、この麋鹿の姿を收めやうと思ふ。ただ我が詩に和して吳れた蔣錢王の三益友の事は、篤と覺えて居るが、他年、遠く去つて、仇池を過ぎ、しばらく旌節を止めて、そこに居たいと思つて居る。

玉津園

玉津園

承平苑囿雜耕桑。　承平の苑囿、耕桑に雜はる、
六(一)聖勤民計慮長。　六聖、民を勤めて計慮長し。
碧(二)水東流還舊派。　碧水東流、舊派に還り、
紫(三)壇南峙表連岡。　紫壇南に峙つて、連岡を表す。
不逢遲(四)日鶯花亂。　遲日、鶯花の亂るるに逢はず、
空想疏林雪月光。　空しく想ふ、疏林雪月の光。
千畝何時躬(五)帝藉。　千畝、何の時か帝藉を躬らせむ、
斜陽寂歷鎖雲莊。　斜陽寂歷、雲莊を鎖す。

【字解】【一】六聖　太祖・太宗・眞宗・仁宗・英宗・神宗を謂ふ。【二】碧水東流　東坡の自註に「玉津、蔡河の上流を分つて復た下に合す」とある。【三】紫壇　天を祭る壇、卽ち天壇、漢書郊祀志に「匡衡言ふ、甘泉泰時紫壇、八觚宣通、八方に象り、五帝壇、その下を周環す」とある。【四】遲日　春の長き日。【五】躬帝藉　天子が親ら藉田を耕す。藉は借る、民から借りた田の義。

【題義】文獻通考に「宋の四園苑、東を宜春といひ、南を玉津といひ、西を瓊林といひ、北を瑞勝といふ」とあり、汴京遺跡志に「玉津園は南薫門外に在り」と見ゆ、この詩は、三人の玉津園の作に次韻したのである。

【詩意】承平の際、苑囿の中に耕作を爲し、桑を種ゑて民を勸めしめたので、六帝の御考へは、意味深長である。碧水は、蔡河を分ち、東流して又之に合し、天壇は、高く南に峙つて、連岡の目じるしと成つて居る。長き春の日、鶯花の賑はしきに逢はざれば、三冬の間、疏林雪月の光を想像すべく、その景色は、四時、ともに優れて居る。天子は何時親ら千畝の藉田を耕されるか、今は、夕日影さびしく、雲を帶びたる亭榭も、鎖した儘に成つて居る。

藉田

竊脂方紀瑞。布穀未催耕。
魚沫依蘋渚。蝸涎上綵楹。
江湖來夢寐。簑笠負平生。
琴裏思歸曲。因君一再行。

竊脂、方に瑞を紀し、布穀、未だ耕を催さず。魚沫、蘋渚に依り、蝸涎、綵楹に上る。江湖、夢寐に來り、簑笠、平生に負く。琴裏思歸の曲、君に因つて一再行。

【字解】【一】竊脂　鳥の名、桑扈、詩經に交交桑扈とある。【二】布穀　又鳥の名、杜甫の詩に田家望望情、雨乾布穀處處催春種」とある。【三】綵楹　彩色したる柱。【四】思歸曲　文選に石崇の思歸引が載せてある。【五】一再行　漢書顏師古註に「行は曲引を謂ふ」とある。一再行とは、續いて一兩度これを奏すること。

【題義】事實類苑に「元豐二年、詳定禮文所言ふ。漢より唐に迄るまで、皆帝藉神倉あり、今久しく廢して設けず。乞ふ、京城の東南に於て、地千畝を度して藉田を置かむと。仍つて、先農壇を其中に徙し、神倉を東南に立て、五穀の外、並に菜蔬を種ゑ、冬は氷を藏す、一歲祠祭の用、具を取る」とあつて、この詩は、三人の藉田の作に次韻したのである。

【詩意】桑扈の鳥は、方に瑞を紀したが、布穀は、未だ春耕を促すに至らず。魚の沫は、浮萍の渚にかたまり、蝸牛の涎は、彩りたる柱に其痕を印して居る。予は、夢寐の中に江湖を憶うて忘れず、しかも、平生簑笠の志に負いて、まだ歸田の運びに立ち至らぬは、まことに遺憾である。琴の譜中には、思歸引といふ曲があるから、君に賴んで、一兩度、彈じて貰ひたいものである。

頃年楊康功使高麗還、奏乞立海神廟於板橋、僕嫌其地湫隘、移書使遷之文登、因古廟而新之、楊竟不從、不知定國何從見此書、作詩稱道不已、僕不能記其云何也、次韻答之

頃年楊康功、高麗に使して還り、奏して海神の廟を板橋に立てむことを乞ふ。僕その地の湫隘なるを嫌ひ、書を移して之を文登に遷し、古廟に因つて之を新にせしめ

むとするも、楊、覺に從はず、定國何より此書を見しかを知らず。詩を作つて稱道して已まず、僕その何と云ひしかを記すること能はざるなり。次韻して之に答ふ

退之仙人也。游戲於斯文。　退之は仙人なり、斯文に游戲す。
談笑出奇偉。鼓舞南海神。　談笑、奇偉を出し、鼓舞す南海の神。
頃者三韓使。幾爲蛟鱷呑。　頃ろ三韓の使、幾んど蛟鱷に呑まる。
歸來築祠宇。要使百賈奔。　歸り來つて祠宇を築き、百賈をして奔らしむるを要す。
我欲遷其廟。下數浮空羣。　われ其廟を遷さむと欲す、下に數ふ浮空の羣。
移書竟不從。信非磊落人。　書を移すも、竟に從はず、信に磊落の人に非ず
公胡爲拳拳。繫此空中雲。　公、胡すれぞ拳拳、この空中の雲を繫ぐ。
作詩頌其美。何異刻劍痕。　詩を作つて、其美を頌す、何ぞ異ならむ劍の痕を刻するに。
我今已括囊。象在六四坤。　われ今すでに括囊、象は、六四の坤に在り。

【字解】〔一〕南海神　韓愈の南海神廟碑に「海は天地間に於て、物たる、最も鉅、而して、南海の神、次、最も貴し」とある。〔二〕三韓　はじめは馬韓・弁韓・辰韓、後には高句麗・百濟・新羅の三國を並稱す。〔三〕浮空羣　東坡の自註に「登州の海市を謂ふ」とある。〔四〕刻劍痕　劍で痕をつけて之を刻する。〔五〕六四坤　易の坤卦、六四に、括囊无咎无譽とある。

【題意】施註に「楊康功、名は景略、洛陽の人、元豐の間、起居郎を以て高麗に使し、國王の祭奠使となる。神宗、諭すに、この行、去らむと欲するもの多く、卿、選ぶところに在るなりといふを以てす。康功對へて、曰く、欲すると欲せざると、利の爲にするに非ず、即ち險を憚るのみ。臣、命を稟くるを知るのみ、と。歸つて、上の旨に稱ひ、就いて金紫を賜はり、中書舍人に擢んでられ、龍圖閣待制に終り、揚州に知たり」とある。查註に「齊乘、登州の北三里、海濱、田橫寨と相對す、本と海神廟基、宋の治平中、郡守朱處約、その地、太だ高峻なるを以て、廟を西に移し、平地に置き、此に蓬萊閣を建つ。又云ふ、膠西縣は、古しへの介葛盧國、隋、縣を置く、唐、省いて高密に入れ、その地を以て板橋鎭となす。文獻通考、膠西縣、本と板橋鎭。輿地廣記、宋の元祐三年、復た縣を置く。太平寰宇記、文登縣は、登州の東南二百八十里に在り。齊乘、文登縣は、本と漢の牟平不夜縣の地。齊の天統四年、牟平を分つて文登縣を置く、地に文山あり、始皇文人を召集して、之に登らしめしを以ての故に文登といふ」とある。この題の意味は、頃ろ楊康功が高麗に使して歸り、奏請して、海神の廟を板橋鎭に立てた。予は、その地の狹きを嫌ひ、手紙を遣つて、これを文登縣に移し、從來の廟を本にして之を改築するが善からうと云つたが、楊康功は從はなかつた。ここに王定國は、どこで予の手紙を見たか知らぬが、詩を作つて、これを稱贊して止まない。予は、その手紙に如何な事を書いたか、全く忘れて仕舞つたが、次韻して之に答へたといふのである。

【詩意】韓退之は仙人であつて、斯文に游戲し、談笑の間に奇偉の言をなして、南海の龍神をさへ鼓

舞せしめた。頃ろ、楊君は、三韓に使し、殆んど蛟鱷に呑まれさうであつたが、先づ無事に歸つて來たので、取り敢へず、海神の廟を板橋に築き、百賈をして、奔つて、そこに參詣させやうといふ考であつた。予は、蜃氣樓を下に見る彼の文登の地に共廟を遷した方が善いといつて、手紙を贈つたが、楊君は遂に從はないので、まことに磊落の人でない以上は、どうにも仕方がない。如何なれば、王君は、拳拳として、空中の雲に比すべき此廟宇を堅く繋ぎ留めて置きたいといふのか、しかし、すでに移つされて仕舞つた上は、詩を作つて、板橋の廟の美を頌した處で、劍の痕を刻する様なものである。予は、今易の坤卦の六四に見える様に、嚢の口をしつかり括ると同じく、口を閉ぢて、最も何にも言はぬ積りであるから、王君もその積りで居て貰ひたい。

【餘論】紀昀は、この詩の破題を評して「句法を成さず、亦た起法を成さず」といひ、結末に就いては、太だ眞、便ち詩品に非ずといひ、又「坤六四と云ふべし、六四坤といふべからず」と斷定し、總評として「これ亦た何ぞ大計に關せむ、而して、爭ふものは爭ひ、稱するものは稱す、一時の習氣、かくの如し、焉んぞ黨禍を成さざるを得むや」といつて居る。

沐浴啓聖僧舍、與趙德麟邂逅

沐浴啓聖僧舍に、趙德麟と邂逅す

(一)南山北闕兩非眞。　南山北闕、兩つながら眞に非ず、

(二)東潁西湖迹已陳。　東潁西湖、迹、すでに、陳なり。

(三)季子來歸初可喜。　季子來り歸す、初めて喜ぶべし、

(四)老聃新沐定非人。　老聃、新に沐す、定めて人に非ず。

酒清不醉休(五)休暖。　酒清くして醉はず、休休として暖かに、

睡穩如禪息息勻。　睡穩にして禪の如く、息息勻す。

自笑塵勞餘一念。　自ら笑ふ、塵勞一念を餘すと、

明年同泛越(六)溪春。　明年同じく泛ばむ越溪の春。

【字解】〔一〕南山北闕　孟浩然の詩に北闕休上書、南山歸敝廬とある。〔二〕東潁西湖　東、潁州に在る西湖、東坡は潁州に在つて趙德麟と共に西湖を修治した。〔三〕季子　吳の季札、春秋閔公元年八月、季子來歸となつて、穀梁傳に「その季子といふは、これを貴ぶなり。その來歸といふは、これを喜ぶなり」とある。〔四〕老聃　莊子に「孔子、老聃に見ゆ。聃、新に沐し、方に髮を被つて乾かさむとす、慹然として人に非ざるに似たり。孔子、便して之を待つ、しばらくして見えて曰く、さきに、先生、物を遺れ、人を離れて、獨に立つに似たるなり」とある。〔五〕休休　神仙傳に「焦先、雪下に臥す、氣息休休として、盛暑醉臥の狀の如し」とある。〔六〕越溪　東坡は越州を乞はむと欲せしが故に云ふ。

【題義】說明に及ばぬ。宋敏求の東京記に「啓聖院は、本と晉の護聖營、天福四年、宣祖、禁兵を典る、太宗、その地に誕聖す」とあり、春明退朝錄に「咸平の初、眞宗、供奉僧元靄をして、太宗の御容を啓聖院に寫さしむ」とあり、汴京遺跡志に「啓聖院は大梁門内街北に在り、太平興國六年建つ、雍熙二年、成つて名を賜ふ」とある。

【詩意】南山の敝廬に歸るといひ、北闕に上書を罷むといひ、兩つながら眞に非ず、東、潁州なる西

湖に於ても、唯だ名殘の跡を留むるのみである。季子に比すべき君の歸り來りしは、まことに喜ぶべく、予は、老聃の新に沐したるが如く、定めて人でない樣に見えるであらう。酒は清み切つて、醉を成さざれども、休休として暖に、睡は安穩にして、呼吸は決して亂れないといふのが、予が刻下の現狀である。笑ふべきは、風塵に苦勞した揚句に、なほ一念を存し、明年は必ず越州を乞ふ積りであるから、その時は、君と共に越溪の春に醉ふ積りだと思ひ定めて居る一事である。

余舊在錢塘、伯固開西湖、今方請越、戲謂伯固、可復來開鏡湖、伯固有詩、因次韻

余舊と錢塘に在り、伯固、西湖を開く。今方に越を請ふ。戲に伯固に謂ふ、復た來りて鏡湖を開くべしと。伯固、詩あり、因つて韻に次す

已分江湖送此生。
すでに分とす、江湖に此生を送るを、

會稽行復得岑成。(一)
會稽、行く〳〵復た岑成を得む。

鏡湖席捲八百里。(二)
鏡湖席捲八百里、

坐嘯因君又得名。
坐嘯、君に因つて又名を得む。

【字解】〔一〕岑成　人名、前に趙郎中見和の詩中に注して置いた。
〔二〕鏡湖　合註に元和郡縣志・太平寰宇記、並に云ふ、鏡湖周圍三百一十里と。惟だ王梅溪の會稽風俗賦に境絶利溥、莫如鏡湖、有八百里之周環、漑九千頃之膏腴とある。

【題義】伯固は、蘇堅の字。題の意味は――予は、舊と杭州錢塘に居たが、その時、伯固は、力を盡して西湖を修治した。今丁度、越州を乞うて居る折柄、戲に伯固に向ひ、やがて、その地に赴任したら、是非遣つて來て、今度は鏡湖を修治して吳れろといつた。すると、伯固は、詩を作つたから、乃ち之に次韻したといふのである。

【詩意】予は、江湖に於て、此生を送るを分として居るが、會稽に赴任すれば、又ぞろ、岑成に比すべき君を連れて行くことが出來る。鏡湖は、席捲すれば、すべて八百里の廣さで、絕勝いふまでもないが、君が往つて坐嘯すれば、愈よ有名に成るであらう。

僕所藏仇池石、希代之寶也、王晉卿以小詩借觀、意在於奪、僕不敢不借、然以此詩先之

僕の藏するところの仇池石は、希代の寶なり。王晉卿、小詩を以て借り觀むとす、意、奪はむとするに在り。僕敢て借さずんばあらず。然かも此詩を以て之に先んず

海石來珠宮。(一) 秀色如蛾綠。(二)
海石は珠宮より來り、秀色、蛾綠の如し。

坡陀尺寸間。(三) 宛轉陵巒足。
坡陀尺寸の間、宛轉、陵巒足れり。

連娟二華(四)頂。空洞三茅(五)腹。　連娟たり二華頂、空洞たり三茅腹。

初疑仇池化。又恐瀛州(六)蹙。　はじめは疑ふ、仇池の化するかと、又恐る、瀛州の蹙まるを。

殷勤嶠南(七)使。餽餉揚州(八)牧。　殷勤、嶠南の使、餽して揚州の牧に餉る。

得之喜無寐。與汝交不瀆(九)。　これを得て、喜んで寐ぬるなし、汝と交 瀆れず。

盛以高麗(一〇)盆。藉以文登(一一)玉。　盛るに高麗の盆を以てし、藉くに文登の玉を以てす。

幽光先五夜(一二)。冷氣歷三伏。　幽光、五夜に先んじ、冷氣、三伏を歷す。

老人生如寄。茅舍久未卜。　老人、生、寄の如く、茅舍、久しく未だトせず。

一夫幸可致。千里常相逐。　一夫、幸に致すべく、千里常に相逐ふ。

風流貴公子。竄謫武當(一三)谷。　風流の貴公子、竄して武當谷に謫せらる。

見山應已厭。何事奪所欲。　山を見て、應に已に厭くなるべし、何事ぞ欲する所を奪ふ。

欲留嗟趙弱。寧許負秦曲。　留めむと欲すれば趙の弱きを嗟す、寧ろ許して秦の曲を負はしめむ。

傳觀愼勿許。間道(一四)歸應速。　傳觀、愼んで許す勿れ、間道、歸る應に速なるべし。

【字解】【一】蛛宮　嶺南の地名。【二】蛾綠　南部新書に「青黛螺光明鮮翠、一螺毎に直千金、當時、これを名づけて蛾綠といふなり」とある。【三】披陀　前に大秦寺甘露寺の詩中に注して置いた。【四】二華　前に雁蕩山圖の詩中に注して置いた。【五】三茅腹　王註に「三茅、一名句曲山、その腹中虚、別に天地日月あり、載せて眞誥に在り、故に腹といふなり」とある。【六】瀛洲　海中の神山、蓬萊方丈と竝び稱せらる。【七】嶠南　嶺南に同じ。【八】揚州牧　東坡の自註に、「僕、揚州に在り、程德孺、嶺南より官を解いて還り、この石を以て遺らる」とある。【九】交不瀆　易に「君子は、上交諂はず、下交瀆れず」とある。【一〇】高麗盆　東坡の自註に「僕、高麗餉るところの大銅盤を以て之を貯へ、又登州の海石碎玉の如きものを以て、その足に附す」とある。【一一】文登　縣名、前に揚康功使高麗還の詩題中に見ゆ。【一二】五夜　初更より五更に至る。漢舊儀に「中黃門、五夜を持す、甲夜より戊夜に至るを謂ふ」とある。【一三】武當谷　王註に「武當谷は、均州なり。武當山、これを望めば秀絶、絲晴、これを見る。輕帶、上に蓋し、白雲、その前に帶び、且には必ず西行し、夕にして東に返り、率れ以て常となす、これを朝山といふ、衆山の朝するところといふなり」とあり、査註に「太平寰宇記、劉宋の時、武當縣を割いて始平郡に隸す。隋、はじめて均州と改む。太和山は、州南一百二十里に在り、七十二峰、三十六巖、二十四洞あり、はじめ、仙室山と名づけ、又た太嶽山と名づく」とある。【一四】間道歸應速　史記藺相如傳に「趙の惠文王、楚の和氏の璧を得たり、秦の昭王、願はくは十五城を以て璧に易へむことを請ふ。藺相如曰く、秦は彊くして趙は弱し、許さざるべからず。王曰く、わが璧を取つて、吾に城を予へざれば、奈何。相如曰く、趙許さず、曲、趙に在り。趙、璧を予へて、秦、城を予へざれば、曲、秦に在り。この二策を均しうするに、寧ろ許して以て秦の曲を負はしめむと。ここに於て、相如を遣し、璧を奉じて秦王に奏し、秦王の約に負くを度り、乃ち使者をして、褐を衣、璧を懐にして、徑道より亡げしめ、秦王に謂つて曰く、臣、王に欺かれて趙に負かむことを恐る、故に人をして璧を持して歸らしむ、すでに趙に至らむ」とある。

【題義】予の藏して居る仇池石は、希代の寶である。王晉卿は、小詩を寄せて、これを借覽したいといふが、それなり强奪しやうと思つて居るらしい。予は、借さない譯には行かないが、先觸れとして、この詩を贈つた。

【詩意】予の仇池石は、元と海石で、珠浦の產に係り、その見事な色は、青黛螺の如く、尺寸の間に

高くなつて坡陀を爲し、宛轉と打つづいて陵巒の勢を爲し、二華の絶頂は、連娟として相對し、三茅の洞口は、からりと打開いて居る。はじめは、仇池の化したものかと疑ひ、次に瀛州が縮まつたものではないかと思つた。これは、嶺南の官を解いて歸つて來た程德孺といふものが、懇に當時揚州の牧たりし予に贈つたので、はじめて貰つた時は、喜んで寐られぬ位。しかし、今日、君に對して交潰れず、折角の御頼みであるから、もとより御目にかけることに致さう。そこで、高麗の大銅盆を以て之を盛り、下には文登縣に產する綺麗な玉の樣な小石を以てした。その幽けき光は、五夜に光つて放射し、冷氣は、三伏の暑熱を壓する位。予は、年寄りで、この生、寄の如く、まだ茅舍も定めてない。幸ひ、この石は、一人の男でも搬べる位で、千里の長途を常に相逐うて、ここまで持つて來たのである。君は風流の貴公子、かつて、武當谷に謫居したこともあつて、山を見ては、すでに倦きた位であらうと思ふに、如何なれば、この石を欲しがつて、强奪しやうとするのか。これを留めて見せまいとしても、予は當年の趙の如く、甚だ力の弱いものであるから、むしろ、君の注文を許し、秦をして、曲を負はしめた方が善からうと思ふので、取り敢へず、御手元へ差し出すことにした。しかし、大勢の者に傳觀させることは、注意して、許さぬ樣にして貰ひたいので、そんなことをすると、この石は、間道から速に歸つて來るであらう。

【餘論】乾隆御批に「希代の寶、實に是れ寫し得て出す、末に、秦、趙璧を歸すを用ふ、恰も情事と比附す、意隨ひ、筆轉じ、彈丸を轉するが如し」とあり、紀昀は「委曲にして疏暢」といつて居る。

次天字韻答岑巖起　　天字の韻に次して岑巖起に答ふ

一聲清（一）蹕霧開天。　一聲の清蹕、霧開くの天、
百辟心莊豈貌虔。　百辟、心莊に、豈に貌虔ならむや。
回顧驚（二）君珠玉側。　回顧して驚く、君が珠玉の側、
同升愧（三）我秕糠前。　同じく升つて、愧づ我が秕糠の前。
徘徊月色留壇影。　徘徊月色、壇影を留め、
縹緲松（四）香泛蠟煙。　縹緲松香、蠟煙を泛ぶ。
莫歎郎（五）潜生白髮。　歎ずる莫れ、郎潜、白髮を生ずるを、
聖朝求舊鄙鳶（六）肩。　聖朝、舊を求めて鳶肩を鄙む。

【字解】【一】清蹕　王註に「漢書、出でては警と稱し、入つては蹕といふ。顔師古曰く、警は戒肅なり、蹕は行人を止むるなり」とある。【二】驚君珠玉側　晉書衞玠傳に「王濟歎じて曰く、珠玉、側に在り、わが形の穢なるを覺ゆ」とある。【三】愧我秕糠前　晉書孫綽傳に「性通率、談謔を好む。かつて、習鑿齒と共に行く。綽、前に在り、顧みて謂うて曰く、これを汰せよ、これを汰せよ、瓦石後に在り。鑿齒曰く、これを簸へよ、これを揚げよ、糠秕前に在り」とある。【四】松香　東坡の自註に「近制、椽に松明を燭するを以て瓢盆に易ふ」とある。【五】郎潜生白髮　漢武故事に見えたる顔駟の事、前に崔儒郎中の詩中に注して置いた。【六】鳶肩　跋扈の相、前に贈蒋相程傑の詩中に注して置いた。

【題義】施註に「岑巖起、名は象求、梓州の人。元祐四年、郎考功となり、蘇文定公の薦を用つて殿中侍御史に拜せらる。文定、政を執り、嫌を以て、金部郎中に徙る。徽宗に王邸に事へ、寶文閣

待制に終る」とある。この詩は、天の字の韻に次して、岑巖起に答へたのである。

【詩意】警蹕一聲、おごそかにして、夜來の霧は、名殘なく開き、天子は、殿上に出御される。百官は、心を落ち付けて、ひとり、風貌が敬虔なばかりではない。ふりかへつて見れば、珠玉の如き君の側に在るに驚き、同じく階を升ると、粃糠に比すべき予が前に在つたことを愧ぢる。いざよふ殘月は、壇上の影を留め、縹緲たる松の木の香は、蠟燭の中に泛んで居る。古しへの顏駟の如く、郎として奉仕し、不遇にして早く白髮の生えたことを歎息せずとも善いので、聖朝に於ては、むかしから緣故あるものを求め、鳶肩の物物しき人相を鄙んで御取り上げにならず、君も、やがて、大に用ひられるに相違ないから、先づ其積りで居るが善からう。

【餘論】紀昀は「次句、拙にして腐、末句、亦た牽强」といつて居る。

次韻蔣頴叔二首

扈從景靈宮

蔣頴叔に次韻す　二首

景靈宮に扈從す

道人幽夢曉初還。
已覺笙簫下月壇。
風伯前驅淸宿霧。
祝融驂乘破朝寒。
英姿連璧從多士。
妙句鏘金和八鑾。
已向詞臣得頗牧。
路人莫作老儒看。

道人幽夢、曉、はじめて還る、
すでに覺ゆ、笙簫の月壇を下るを。
風伯前驅して宿霧を淸め、
祝融驂乘して朝寒を破る。
英姿連璧、多士に從ひ、
妙句鏘金、八鑾に和す。
すでに詞臣に向つて、頗牧を得たり、
路人、老儒の看を作す莫れ。

【字解】【一】風伯　屈原の遠遊に「風伯爲余前驅兮、辟氛氣而淸涼」とある。【二】祝融　同じく遠遊に「祝融戒以蹕御」とある。祝融は火神、だから「破朝寒」と云つたのである。【三】八鑾　詩經に「四牡彭彭、八鑾鏘鏘」とある、鑾は馬に付ける鈴で、それが八つある。【四】頗牧　廉頗李牧、ともに古しへの名將。東坡の自註に「時に頴叔、新に熙河帥に除せらる」とある。

【題義】合註に「續通鑑長編、元祐七年十一月甲辰、景靈宮萬壽觀に詣つて恭謝す。乙巳、凝祥池に幸す。頴叔、先生と唱和、卽ち此事、南郊前の朝享景靈宮とは蓋し兩事なり。宋史本紀、載を缺く」とある。これは、蔣頴叔の「扈從景靈宮」と題する詩に次韻したのである。

【詩意】景靈宮に奉仕する道人輩の幽夢は、曉に初めて醒め、笙簫の響は、月壇の方から降り、つまり、神仙も天降つて聖駕を奉迎する樣である。やがて、天子が御出に成るに就いて、風の神は先驅して、夜來の霧を拂ひ淸め、祝融は、陪乘して、暖氣を添へた。扈從の人人、いづれも英姿目ざましく、珠玉を連ねたるが如く、君の作に係る妙句は、金を敲く樣な音がして、御馬の鈴の響に和する樣である。すでに、詞臣の中から、古しへの廉頗・李牧に比すべき名將を拔擢されたといふので、君は、熙河の帥に任せられたから、路ゆく人は、最早老儒として看てはならぬ。

凝祥池

似知金馬客。時夢碧雞坊。
冰雪消殘臘。煙波寫故鄕。
鳴鸞自容與。立馬久回翔。
乞與三韓使。新圖到樂浪。

凝祥池

金馬の客を知るに似たり、時に夢む碧雞坊。
冰雪、殘臘に消え、煙波、故鄕を寫す。
鸞を鳴らして自ら容與、馬を立てて久しく回翔。
三韓の使に乞與し、新圖、樂浪に到らしめむ。

【字解】〔一〕金馬　宮門の名、後漢書馬援傳に「武帝の時、善く馬を相するもの東門京、鑄て銅馬法を作りて、これを獻す。詔あり、馬を魯班門外に立て、名、魯班門を更めて、金馬門といふ」とあり、漢書東方朔傳に「金馬門に待詔す」とある。〔二〕碧雞坊　成都に在る、樂益記に「成都の坊、百有二十、第四坊を碧雞坊といふ」とある。〔三〕鳴鸞　馬の鈴を鳴らす。〔四〕容與　下の回翔と共に徘徊の意。〔五〕三韓使　東坡の自註に「時に、高麗の使、都下に在り、勝景に至る毎に、輙ち圖畫して以て歸る」とある。〔六〕樂浪　漢の元封三年、朝鮮の地を定めて四郡を立てた。樂浪は其一で、今の平壤附近、大同江の對岸が郡治の址と稱せられて居る。

【題義】汴京遺跡志、宋朝會要に「大中祥符八年五月、詔して、會靈池は凝祥を以て名となす」とある。前詩の題義に述べた如く、景靈宮に詣られし翌日、車駕、凝祥池に幸し、蔣穎叔が例の如く詩を作りし故に、東坡は、それに次韻したのである。

【詩意】池水靈あり、金馬門の客たる予が、遙に蜀中を思うて、碧雞坊を夢むることを知れるものの如く、冰雪は、春に先つて消え、煙波は、我が故鄕を寫し出して、その景色は、極めて善く肖て居る。そこで、或は鈴を鳴らして馳せ、或は馬を停めて立ち、隨處に徘徊して見惚れて居る。何にせよ、稀に見る絕勝であるから、三韓の使に命じ、新に畫にかかせて、古しへの樂浪の地にまでも傳へたいものである。

和叔盎畫馬

天驥德力備。馬外龍麟中。
皇天不遺言。兀與圖畫同。
駑駘飽官粟。未受一洗空。
十駕均一至。何事豁雲風。

叔盎の畫馬に和す

天驥、德力備はり、馬外、龍麟の中。
皇天、言はしめず、兀として圖畫と同じからむ。
駑駘、官粟に飽き、未だ一洗の空を受けず。
十駕、均しく一たび至る、何事ぞ雲風を豁む。

【字解】〔一〕龍麟　南奏錄に「呂光、西域を討つて平らぐ、上疏して曰く、惟れ龜茲、三十六國の中に據り、その國城に入れば、天驥・龍麟・駿裊・丹鶴・萬計、廐に盈つ」とある。〔二〕駑駘　やくざ馬。〔三〕未受一洗空　杜甫の丹青引に斯須九重眞龍出、一洗萬古凡馬空とある。〔四〕十駕　荀子に「夫れ、驥、一日にして千里、駑馬十駕すれば亦た之に及ぶ」とある。駕は車に馬をつけること。

【題義】畫繼に「趙叔盎、字は伯充、善く馬を畫く」とあつて、元と宗室の子。この詩は、趙叔盎の畫馬に題する詩に次韻したのである。

【詩意】天馬は德と力と、ともに備り、宜しく尋常の馬の外に在つて、龍麟等、名馬の中に列すべき

ものである。皇天は、これをして言はしめざるが故に、兀然獨立、ただ畫圖と同じに見える。やくざ馬は、官粟に飽きはて、未だ一洗して空しといふ樣に成らず、依然として得意らしく見える。しかし、こんなやくざ馬でも、十たび車につけ直せば、矢張、千里の途を行くことが出來るので、天馬が雲や風を踏むのも、さう威張る譯には行かぬ。

【餘論】紀昀が「全く語を成さず」といへるは、主として、馬外龍麟中の三句に就いて非難したのである。この詩の諷意に就いては、王註に「この詩言ふ、君子、軼羣の材あり、しかも、自ら言はず。鄙陋の者、自ら共祿を竊んで、不服の意あり。詩人、ここに於て物を齊しうし、すなはち曰く、彼、歲月を積累すれば、亦た追及すべし、謂はゆる駿馬、何事ぞ、羣を軼せむやと。これ、又嗟悔の辭なり」とある。

王晉卿示詩、欲奪海石、錢穆父・王仲至・蔣穎叔、皆次韻、穆至二公、以爲不可許、獨穎叔不然、今日穎叔見訪、親睹此石之妙、遂悔前語、僕以爲晉卿豈可終閉、不予者、若能以韓幹二散馬易之者、蓋可許也、復次前韻

王晉卿、詩を示して、海石を奪はむと欲す。錢穆父・王仲至・蔣穎叔、皆次韻す。穆・至二公は、以て許すべからずと爲す、獨り穎叔のみ然らず。今日穎叔訪はれ、親しく此石の妙を睹て、遂に前語を悔ゆ。僕以爲へらく晉卿、豈に終閉す可けむや。予へざるは、若し能く、韓幹の二散馬を以て之に易へば、蓋し許すべきなりと。復た前韻に次す

相如有家山。(一)縹緲在眉綠。(二)　相如、家山あり、縹緲として、眉綠に在り。

誰云千里遠。寄此一顰足。　誰か云ふ、千里遠しと、この一顰を寄すれば足れり。

平生錦繡腸。蚤歲藜莧腹。(三)　平生、錦繡の腸、蚤歲、藜莧の腹。

從敎四壁空。未遣兩峯蹙。　まま四壁を空しうせしめ、未だ兩峯をして蹙せしめず。

吾今況衰病。義不忘樵牧。　吾、今、況んや衰病、義、樵牧を忘れず。

逝將仇池石。歸泝岷山瀆。(四)　逝いて仇池の石を將て、歸つて岷山の瀆を泝らむ。

守子不(五)貪寶。完我無瑕玉。　子の貪らざるの寶を守り、わが瑕なきの玉を完うす。

故人詩相戒。妙語予所伏。　故人、詩、相戒む、妙語、予の伏するところ。

一篇獨異論。三占(六)從兩卜。　一篇、ひとり論を異にす、三占、兩卜に從ふ。

君家畫可數。天驥紛相逐。　君が家、畫、數ふべし、天驥、紛として相逐ふ。

（七）風駿掠原野。（八）電尾捎澗谷。　風駿、原野を掠め、電尾、澗谷を捎かす。

君如許相易。是亦我所欲。　君、もし相易ふるを許さば、これ亦た我が欲するところ。

今朝安（九）西守。來聽陽（一〇）關曲。　今朝、安西の守、來つて聽く陽關の曲。

勸我留此峯。他日來不速。　われに勸めて、この峯を留めしむ、他日來るも速ならず。

【字解】【一】相如　司馬相如。蜀人なるが故に、東坡自ら比して云ふ。【二】眉綠　西京雜記に「卓文君、姣好、眉色、遠山を望むが如し」とある、文君は相如の妻。【三】婪苋腹　韓愈の詩に三年國子師、腸肚習婪苋」とある、婪はあかざ、苋はひゆ、ともに菜の名。【四】岷山瀆　瀆は江と同義、揚子江の上流岷江を云ふ。【五】不食寶　左傳襄公十五年に「宋人、或は玉を得て、これを子罕に獻ず、子罕、受けず。玉を獻ずるもの曰く、玉は、人、以て寶となすなり、故に敢て之を獻ず。子罕曰く、われは貪らざるを以て寶となし、爾は玉を以て寶となす、若かず、人ごとに其寶を有せむには」とある。【六】三占從兩卜　書經に「三人占へば、二人の言に從ふ」とある。【七】風駿　風を帶びたる駿。【八】電尾　電光の如く靡く尾。【九】安西守　唐書地理志に「洮州臨洮郡、府あり、一名安西」とあり、全遼紀略に「臨洮郡、宋には鎭洮郡たり、熙寧中、熙州と改む、唐安西都護の地」とある。穎叔は出でて熙河に守たりしが故に云ふ。【一〇】陽關曲　前に和孔密州の五絕、及び陽關詞の詩中に注して置いた。

【題義】前に見えた通り、王晉卿は、東坡所藏の仇池石を借覽したが、詩を示して、是非、これを奪はうといひ、錢穆父・王仲至・蔣穎叔の三人が、皆之に次韻した。その中、穆父・仲至の二人は、晉卿の强奪は許すべからずといつたが、ひとり、穎叔のみは、さうでもなかつた。然るに、今日、穎叔來訪し、目のあたり、この石の妙趣を見ると、前言を悔いて、矢張、晉卿に遣らぬ方が善いといつた。

予自身の考では、晉卿は、なかなか、そんなことで思ひ切ることはない、予の與へざるは、もし、その所藏の韓幹の二牧馬の圖を以て交換すれば、許しても善いといふのである。そこで、再び前韻に次した。王晉卿の藏する韓幹の馬は、前に韓幹牧馬圖の詩中に注して置いた。

【詩意】司馬相如の故山は、縹緲として文君の綠なす眉の邊に在る樣に思はれ、千里遠く相隔つとは思はれず、ただその一たび顰するを見れば、十分であつたらうが、この仇池石は、予に取つて故山の想を爲すものである。平生、錦繡の腸を誇りながら、早年から、婪や苋で腹を充たして居る果敢なさ。四壁空しくして、無一物なのは、善い樣なものの、この兩峰の石をして、顏をしかめしめない樣にしたいと思ふ。まして、吾、今、衰病に苦み、義として、故國の樵牧を忘れず、ここに仇池石を攜へて、岷江の邊に歸臥したいと思つて居る。君が貪らざることを寶とすれば、予は、何等の心配もなく、瑕なき我が玉を完うすることが出來る。錢王蔣の三人は、詩を以て相戒め、その妙語は、予の敬服するところである。但し蔣君だけは、ひとり、議論を異にして居るが、三人占すれば、二人の言に從ふ外はない。君の家に藏する名畫は、歛ふべき程澤山で、中にも韓幹の天馬は、紛として相逐ふが如く、格別の上出來、風に靡く鬣は、原野を掠め、電光と見まがふ尾は、澗谷を拂ふばかり。君が交換を許すならば、それは、予の欲するところである。今日、安西の守に任ぜられし蔣穎叔が來訪し、別に際して、陽關の曲を歌ふを聞いて居たが、前說を翻し、予に勸めて、この石は、矢張、留めて置くが善いので、一度遣つて仕舞へば、他日來らしめむとするも、なかなか早くは來ないであらうと

いつた。

【餘論】乾隆御批には「丹經墨史、拈出して盡く妙諦に歸し、筆上花を生ず」とあるが、紀昀は、例の如く惡口を逞しうし「綠の字、添へ出して穩ならず」といひ「自ら兩峰を以て眉と稱す、妥ならず、家人を指すが如く、又突出して著なし」といひ「後半、敍次甚だ清醒ならず、韻少くして頭緒多きに牽かるるのみ」といつて居る。

軾欲以石易畫、晉卿難之、穆父欲兼取二物、穎叔欲焚畫碎石、乃復次前韻、幷解二詩之意

軾は、石を以て畫に易へむと欲し、晉卿は之を難んず。穆父は兼ねて二物を取らむと欲し、穎叔は畫を焚き石を碎かむと欲す。乃ち復た前韻に次し、幷せて二詩の意を解す。

春冰無眞堅。霜葉失故綠。
春冰、眞堅なく、霜葉、故綠を失ふ。

(一)鷃疑鵬萬里。(二)蚿笑夔一足。
鷃は疑ふ鵬の萬里、蚿は笑ふ夔の一足。

(三)二豪爭攘袂。先生一捧腹。
二豪爭つて袂を攘ひ、先生一たび捧腹。

(四)明鏡既無臺。(五)淨瓶何用蹙。
明鏡、すでに臺なく、淨瓶、何ぞ蹙するを用ひむ。

盆山不可隱。畫馬無由牧。
盆山、隱すべからず、畫馬、牧するに由なし。

聊將置庭宇。何必棄溝瀆。
聊か將に庭宇に置かむとす、何ぞ必ずしも溝瀆に棄てむ。

焚寶眞愛寶。碎玉未忘玉。
寶を焚くは、眞に寶を愛す、玉を碎くは、未だ玉を忘れず。

久知公子賢。出語耆年伏。
久しく知る公子の賢、語を出して耆年伏す。

欲觀(六)轉物妙。故以求馬卜。
轉物の妙を觀むと欲し、故らに、馬を求むるを以て卜す。

(七)維摩既復捨。天女還相逐。
維摩、すでに復た捨て、天女還た相逐ふ。

授之無盡燈。照此久幽谷。
これに無盡燈を授けて、この久幽の谷を照らす。

定心無一物。(八)法樂勝五欲。
定心、一物なく、法樂、五欲に勝れり。

(九)三峨吾鄉里。萬馬君部曲。
三峨は吾が鄉里、萬馬は君が部曲。

臥雲行歸休。(一〇)破賊見神速。
雲に臥して行く歸休、賊を破つて、神速を見る。

【字解】【一】鷃疑　莊子に「溟海は天池なり、魚あり、その名を鯤となす、化して鳥となる、その名を鵬となす、背は太山の若く、翼は垂天の雲の如く、扶搖に搏つて羊角して上るもの九萬里。斥鷃、これを笑うて曰く、彼、且さに奚くに適かむとするや、われ騰躍して上る、數仞に過ぎずして下り、蓬蒿の間に翺翔す、これ亦た飛ぶの至なり」とある。【二】蚿笑　同じく莊子に「夔、蚿に謂ふ、吾、一足を以て趻踔して行く、子に如くなし。今、子の萬足を使ふ、ひとり奈何。蚿曰く、予、わが天機を動かして、その然る所以を知らず」とある。【三】二豪　劉伶の酒德頌に「自ら稱して大人先生と爲し、惟だ酒を是れ務む。貴介公子、搢紳處士あり、わが風聲を

聞いて、その所以を議し、乃ち袂を齧ひ、襟を擷ひ、目を怒らし、齒を切す」とある。【五】明鏡　傳燈錄に「黄梅、衆に告げて、各〻一偈を述ぶ。上座の神秀、乃ち廊壁に書して曰く、身是菩提樹、心如〻明鏡臺〻と。慧能、碓坊に在り、これを聞いて曰く、美は則ち美なり、了は則ち未だ了せず、と。秀、偈の側に於て寫して曰く、菩提本無〻樹、明鏡亦非〻臺」とある。【六】淨瓶何用璧　東坡の註に「古しへ、璧を獻じて通ず」とある。同じく傳燈錄に「百丈、祐師を召して云ふ、潙山、汝、當に之に居て、わが宗を嗣續すべし。華林曰く、某甲、上首に居るを忝うす、祐師、何ぞ住持するを得む。百丈曰く、若し能く衆に對して一語を下し得ば、當に住持を與ふべし、と。卽ち淨瓶を指して問うて云ふ、淨瓶と喚び做すを得ず、華林曰く、木𣔻と喚び作すべからざるなりと。乃ち祐師に問ふ、師、淨瓶を踢倒す、百丈、笑うて云ふ、第一座は、山子に輸却するなり」とある。【七】維摩　維摩經に「魔波旬言ふ、居士、この女を捨つべし、一切所有、彼に施す者、これ菩薩たり。維摩詰云ふ、われ已に捨てたり、汝、便ち將つて去れ、と。ここに於て、諸女、維摩詰に問ふ、我等、いかに魔宮に止まる。維摩詰言ふ、諸姉に法門あり、無盡燈と名づく。無盡燈とは、譬へば、一燈百千燈を燃やすが如く、冥者皆明、明終に盡きず」とある。【八】轉物　楞嚴經に「衆生、皆物に轉ぜらる、もし能く物を轉すれば、卽ち如來に同じ」とある。【九】法樂　維摩經に「維摩詰、すでに天女を得、卽ち應ずるところに隨つて說法をなし、道意を發せしむ。復た言ふ、汝等、すでに道意を發す、法樂あり、以て自ら娛むべし、應に復た五欲の樂を樂むべからざるなり」とある。【一〇】三峨　峨眉は、大峨より四峨に至る。しかし、普通に三峨といふ。【一一】破賊　東坡の自註に「晉卿は將種、常に此志あり」と見ゆ。

【題義】予は、仇池石を以て韓幹牧馬圖に換へたいと思つて居るが、晉卿は、承知しない。すると、穆父は、石を與へずして畫を取り、つまり、二物を兼取するが善からうといひ、穎叔は、物議の種だから、畫を焚き、石を碎いて、今後、文句の起らぬ樣にするが善からうといつた。そこで、予は再び前韻に次し、幷せて、穆父・穎叔二詩の意を解いて、これを和めた。

【詩意】春の氷は、本當に堅くはなく、霜を帶びた紅葉は、本來の綠色を失つたものである。斥鷃は、大鵬の九萬里を飛ぶを疑ひ、蚿は、夔が一足で、跛を引いて居るのを笑つて居る。貴介公子、搢紳處士の二豪が、袂を攘つて威張り腐つて居ると、酒ずきの大人先生は、腹を抱へて笑つて居る。明鏡は、本と臺あるべきに非ず、淨瓶は、何も蹴飛ばすにも及ばない。これと等しく、盆中に山なす石は、本性を隱すことは出來ず、畫に見ゆる馬は、牧するに由なく、二物とも、似て非なるもので、全く役には立たない。わが仇池石は、庭上に置けば善いので、何も必ずしも、溝瀆に棄てるにも及ばない。寶を焚くのは、眞實、寶を愛するものであるし、玉を碎くは、畢竟、玉を忘れぬものである。されば、役にも立たぬ二物を兼取するのも、二物を破棄するのも、ともに宜しくない。維摩が、すでに一切の物を棄て去つたのを、天女は、又ぞろ、之を逐はうとしたから、維摩は、これに法門の無盡燈を授けて、この長しへに暗い谷を照らし、すべての物が明明となつたといふ話。一たび定まつて動搖せざる心には、一物もなく、法樂は、五慾の快樂にも勝つて居る。三峨は、吾が鄉里であるし、萬馬は、君の組下に居る。されば、この假山よりも、わが故鄉には眞山があるから、雲に臥せむが爲に、行く〳〵歸休すべく、君は、畫馬でなく、部曲の萬馬の中から名馬を探し出し、それに乘じて、神速に賊を破るが善からう。

【餘論】この詩の究極の意味に就いては、趙次公が「三峨は吾が鄉里とは、眞山を言ふ。萬馬は君の部曲とは、眞馬を言ふ。われに眞山あれば、將に雲に臥せむとし、王に眞馬あれば、用つて賊を破らん。かくの如くなれば、假山、必ずしも愛せず、畫馬、必ずしも取らざるなり」といつたのは、極めて簡

潔で、よく要領を得て居る。乾隆御批に「畫を焚き、石を碎かむと欲するものあるに因つて、乃ち別に淨瓶を踢り、木佛を燒くを以て、一重の公案を添へ出す、言下、白毫大光、念に應じて來り感ずるが如きあり、豈に止だ次韻の能、怪變百出するのみならむや」とあり、紀昀は「蹙の字、押し得て未だ穩ならず」といひ「耆年伏、韻を趁ふ」といひ「後半、韻脚に牽かれ、語、亦た爽雜」といつて居る。

生日蒙劉景文以古畫松鶴爲壽且貺佳篇次韻爲謝

生日、劉景文が古畫松鶴を以て壽を爲し、且つ佳篇を貺ふを蒙る。次韻して謝と爲す

問予一室間。寧有千里廓。　予に問ふ、一室の間、むしろ千里の廓たるあらむや。
塵心洗長松。遠意發孤鶴。　塵心、長松に洗ひ、遠意、孤鶴に發す。
生朝(一)得此壽。死籍(二)疑可落。　生朝、この壽を得、死籍、落すべきを疑ふ。
微言在參同(三)。妙契藏九籥(四)。　微言、參同に在り、妙契、九籥を藏す。
故人有奇趣。逸想寄幽壑。　故人、奇趣あり、逸想、幽壑に寄す。
霜枝謝寒暑。雲翮(五)無前却(六)。　霜枝、寒暑を謝し、雲翮、前却なし。
何須構明堂(七)。未羨巢阿閣(八)。　何ぞ須ひむ、明堂を構ふるを、未だ羨まず阿閣に巢ふを。
緬懷別時語。復作數日惡。　緬懷す、別時の語、復た數日の惡を作す。
詩腴固堪飡。字瘦還可愕。　詩腴、もとより飡するに堪へたり、字瘦せて、還た愕くべし。
高標忽在眼。清夢了如昨。　高標、忽ち眼に在り、清夢、了に昨の如し。
君今喻等伍(九)。志與湛輩各(一〇)。　君、今、喻等の伍、志は湛輩と各なり。
豈待相顧言。方爲不朽託。　豈に相顧みて言ふを待たむや、方に不朽の託を爲す。
子雲(一一)老執戟。長孺(一二)終主爵。　子雲は執戟に老い、長孺は主爵に終る。
吾當追松喬(一三)。子亦鄙衛霍(一四)。　吾、當に松喬を追ふべし、子、亦た衛霍を鄙む。

【字解】【一】生朝　誕辰。【二】死籍　抱朴子に「小餌丹法、これを服すること千日、司命、その死籍を削る」とあり、李白の詩に「北斗落死名、南斗上生籍」とある。【三】參同　神仙傳に「魏伯陽は、呉の會稽上虞の人なり、古文龍虎上經を得、盡く妙旨を獲たり、公、因つて、その象を約し、參同契三卷を著す」とある。【四】九籥　鮑照の升天行に「九籥隱丹經」とあつて、籥は書を藏する所以、即ち本箱。【五】雲翮　雲井を飛ぶ翼、即ち鶴をいふ。【六】前却　一進一退。【七】構明堂　白樂天の松の詩に、「殺身獲其所、爲君構明堂」とある。【八】巢阿閣　帝王世紀に「黄帝の時、天氣休通、五行期化、鳳皇阿閣に巢ふ」とある。【九】喻等伍　前に「和海州石室」及び「和劉景文見贈」の詩中に注して置いた。【一〇】湛輩各　各は個個に異なる意、前に「觀山」の詩中に注して置いた。【一一】子雲　揚雄の字、前に「廢庵民提調」の詩中に注して置いた。【一二】長孺　漢書汲黯傳に「字は長孺。武帝、召して主爵都尉となし、九卿に列す。人と爲り、性倨にして禮少く、面折して人の過を容るる能はず」とある。【一三】松喬　赤松子と王喬、前に十月以病在告

の詩中に注して置いた。【三】衛霍 衛青と霍去病。

【題義】予の誕生日に、劉景文は、古畫の松鶴圖を以て祝つて吳れ、且つ詩を贈られたから、次韻して謝と爲した。

【詩意】君は、予に向つて狹い一室の間に居ては、決して、千里の廓然と廣き趣はあるまい。塵心は、長松を以て洗ふべく、遠意は、孤鶴より發するからといつて、松鶴の圖を贈られた。誕生日に、緣起の善い結構なものを頂戴したから、われは、死籍を削り去られるかも知れない。道家の微妙なる言葉は、參同契に載せてあるし、仙藥の妙契は、多くの本箱に藏してある。わが友人は、生來、奇趣を解し、逸想を幽壑に寄せて居たので、霜に傲る松は、寒暑の別もなく、雲井を渡る鶴は、進退ともに隨意である。松は、伐られて明堂に建てられることを欲せず、鶴は、主屋つづきの高閣に巢ふことを望まない。ここに、曩に別れた時の言葉を追懷して、數日逢はぬ爲に、胸の惡い樣な心持がした。君の詩は、豐腴にして、もとより、餐するに堪へ、君の字は、瘦硬にして、一寸驚かされる。君の高尙なる風采は、忽ち眼前に在るし、淸夢は、洵に昨日の如く、その名殘は、まだ盡きない。君は、今、自ら屈して、彼の樊噲輩と伍をなすものから、その本志は、夏侯湛の輩と各〻異なつて居る。いかで相顧みて後、不朽ならしむる爲の助力を依賴すべきか、さういふ事は、お互に、早くも、それと察して居る。しかし、揚雄は、三朝の間、執戟の卑しきに居り、汲黯は、主爵都尉となつて、最後に九卿に列したといふことで、吾輩の不遇は、實に止むを得ざるところである。われは、これより世を謝して、王喬・赤松の跡を追ふべく、君は、將家の出であるが、衛霍の僥倖を賤んで、戰功などは求めぬが宜しからう。

【餘論】乾隆御批に「松鶴、壽を爲すは、俗情に近し、乃ち寫し得て古趣洋溢、もとより知る、才人の筆、可ならざるところなきを」とある。

程德孺惠海中柏石兼辱佳篇輙復和謝

程德孺、海中の柏石を惠せられ、兼ねて佳篇を辱うす。輙ち復た和して謝す

嵐薰瘴染却敷腴。(一)(二)
笑飮貪泉獨繼吳。(三)
未欲連車收薏苡。(四)
肯教沈網取珊瑚。
不知庾嶺三年別。(五)
收得曹溪一滴無。(六)
但指庭前雙柏石。(七)

嵐薰瘴染、却つて敷腴、
笑つて、貪泉を飮んで、ひとり吳に繼ぐ。
未だ欲せず、車を連ねて薏苡を收むるを、
肯て網を沈めて、珊瑚を取らしめむや。
知らず庾嶺三年の別、
曹溪の一滴を收め得るや無や。
但だ指す、庭前の雙柏石、

【字解】〔一〕嵐薰瘴染 嵐は山氣、瘴は毒熱の氣、風土氣候が感染する。〔二〕敷腴 色つやよく肥滿する。〔三〕貪泉 前に次韻答張都官及び次韻伯固游蜀岡の詩中に注して置いた。〔四〕收薏苡 前に次韻王鞏六首の詩中に注して置いた。〔五〕庾嶺 九域志に「大庾嶺、本と虔州大庾縣に屬す、淳化三年、縣を以て南安軍を置く」とあり、その興錄に「南埜縣に大庾山あり、その

要予臨老識方壺(八)。　予を要す、老に臨んで、方壺を識るを。

路險峻、螺轉して上り、九磴を險ゆ」とある。【六】曹溪　禪宗の一派、王文誥の案に「程德孺、嶺南提刑となり、罰を韶州に貶く、因つて、南華重辯と厚善、菴を其中に建つ、公、後、これを過ぎて、蘇程菴銘を作る」とある。【七】雙柏石　傳燈錄に「趙州從諗禪師、凡そ僧あつて室に入れば、但だ庭前の柏樹子」とある。【八】方壺　拾遺記に「海中に三山あり、その形、壺の如し、方丈を方壺といひ、蓬萊を蓬壺といひ、瀛洲を瀛壺といふ」とある。

【題義】　程德孺、名は之元、その人が嶺南より歸る時、海中の柏石を贈られ、兼ねて詩を寄せられたから、取り敢へず、次韻して謝と爲した。

【詩意】　嶺南の地は、氣候が惡いのに、君は、色つやよく肥え太り、笑つて貪泉を飲み、少しも、心が變はらぬといつて、古しへの吳隱之の後嗣の樣である。車を連ねて、薏苡を載せて物議を招く樣な事はせず、網を沈めて、海底の珊瑚を引き上げる樣なこともしない。庾嶺で別れて三年になるとは、一寸思はれぬが、君は、曹溪の一滴を收めて、見事、禪家の教義を悟られたか如何。柏石の名に因み、これを庭前に置いて、人ごとに指し示して居るが、君の本志は、予をして、衰老に近く、海中の仙山を認めしめるといふ積りであつたらう。

次秦少游韻贈姚安世

秦少游の韻に次して姚安世に贈る

帝城如海欲尋難。　帝城、海の如く、尋ねむと欲する難し、——
肯捨漁舟到杏壇(一)。　肯て漁舟を捨てて杏壇に到らむや。
剝啄扣君容膝戶。　剝啄、君が膝を容るるの戶を扣き、
巍峩笑我切雲冠。　巍峩、我が雲を切るの冠を笑はる。
問羊獨怪初平(二)在。　羊を問ふ、獨り怪む初平の在るを、
牧(三)豕應同德曜(四)看。　豕を牧す、應に德曜と同じく看るべし。
肯把參(五)同較同異。　肯て參同を把つて同異を較べむや、
小窗相對爲研丹。　小窗、相對して爲に丹を研す。

【字解】　【一】杏壇　莊子に「孔子、杏壇の上に休坐し、絃歌して琴を鼓す、曲を奏して未だ半ならず、漁父あり、船を下つて來る」とある。【二】初平　前に和子由踏梁左藏の詩中に注して置いた。【三】牧豕　後漢書隱逸傳に「梁鴻、家貧にして介節を尙ぶ。豕を上林苑中に牧す、かつて誤つて火を遺し、延いて他室に及び、悉く豕を以て之を償ふ」とある。【四】德曜　同傳の續きに「同縣孟氏の女、對を擇んで嫁せず、鴻、聞いて之を聘し、これに字して德曜といひ、孟光と名づく」とある。【五】參同　神仙傳に「魏伯陽、參同契三卷を作り、以て丹を作るの意を論ず」とある。

【題義】　說明に及ばぬ。

【詩意】　帝城の廣きことは、海の如く、君の居を尋ねることも六つかしく、漁父が舟を捨てて孔子の憩へる杏壇に到つたといふ樣に無造作な譯には行かぬ。剝啄の足音高く、膝を容るるばかりの君の家の戶を敲くと、巍峩として、雲を切るが如き我が冠の仰仰しきを笑はれるであらう。羊は如何にしたかと問へば、初平に比すべき牧童が、ちやんと側に居るのが不思議であるし、豕を飼つて、不慮

の災難に遇へば、德曜に比すべき妻と一緒に見るであらう。そこで、君を訪はば、參同契の異同を一一校定するまでもなく、小窗の下に對坐して、仙丹を仕上げやうと思つて居る。

次丹元姚先生韻二首　　丹元姚先生の韻に次す　二首

（一）浮生知幾何。（二）僅熟一釜羹。　浮生、知る幾何ぞ、わづかに熟す一釜の羹。
那於俯仰間。用此委曲情。　那ぞ俯仰の間に於て、この委曲の情を用ひむ。
自憐無他腸。偶亦得（三）此生。　自ら憐む、他腸なきを、偶ま亦た此生を得たり。
懸知當（四）去客。中有不亡存。　懸に知る、當に去るべきの客、中に亡びざるの存するあり。
但恐宿緣重。每爲習氣昏。　但だ恐らくは、宿緣重く、每に習氣に昏まさるるを爲す。
似聞梅（五）子眞。近在吳市門。　聞くに似たり、梅子眞、近ごろ吳の市門に在りと。
未能肩（六）拍洪。但欲目（七）擊溫。　未だ能はず、肩、洪を拍つを、但だ溫を目擊せむと欲す。
不敢叩門呼。恐作踰垣奔。　敢て門を叩いて呼ばず、恐らくは垣を踰えて奔ることを作さむ。
且令紹（八）介先。徐以方（九）便論。　且つ紹介をして先ならしめ、徐に方便を以て論せむ。

【字解】【一】浮生知幾何　左傳襄公三十年に「孝伯曰く、人生幾何ぞ、誰か能く偸むなからむ」とある。【二】僅熟一釜羹　盧生邯鄲の事を主として、倣れて、唐書回鶻傳、羊胛を煮て熟する事を用ふ。歐陽修の詩に歳月纔如熟羊胛とある。【三】得此生　陶淵明の詩に笑傲東軒下、聊復得此生とある。【四】當去客　陶淵明の詩に家爲逆旅舍、我如當去客とある。【五】梅子眞　前に次韻陸海州の詩中に注して置いた。【六】肩拍洪　郭璞の游仙詩に左挹浮邱袂、右拍洪崖肩とある、洪崖は仙人の名。【七】目擊溫　溫は溫伯雪子、莊子に見ゆ、前に至野人汪氏之居の詩中に注して置いた。【八】紹介　史記魯仲連傳に「平原君曰く、勝、請ふ、紹介を爲さむ」とある。【九】方便　王註に「方便の字は、佛書に出づ、大巧方便」とあり、法華經に「方便力を以て、其心を柔伏す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。姚丹元の事は、避暑錄に見え「姚、王鞏に因つて以て東坡に進む。本と京師の富人王氏の子、父に逐はれ、去つて建隆觀の一道士に事ふ。天資頗る慧、因つて、道藏を取つて徧ねく讀み、或は能く誦を成し、又多く其方術丹藥を得たり。詩を作つて、間ま放浪奇譎の語あり、故に能く其説を成す。淮南に浮沈し、屢ば姓名を易ふ、後、その姓名を復して王繹となし、又名を元誠と易ふ、力めて林靈素を詆り、それに毒死せらる」とある。

【詩意】人の此世に在るは、幾許時であるか、わづかに釜中の羹の煮える間である。されば、俯仰の間に於て、いかで、この委曲の情を用ひて、世事に關係すべきか。ただ幸にも、他腸なきに因つて、偶然、この生を全うすることが出來た。人は、當然立ち去るべき旅客の如きものであるが、この中に、不滅の者が存して居る。但し、夙緣重くして、世俗の習氣に昏まされる虞がある。聞けば、梅子眞に比すべき君は、近ごろ、吳の市門に住んで居るとのことであるが、これに逢つて、洪崖の肩を拍くが如く、親密に倚り添ふことは出來ず、唯だ溫伯雪子を目擊するが如く、一寸でも、お目にかかれば善い。しかし、正面から門を叩いて呼び音なはないのは、君が人に逢ふことが厭だといつて、眞

に垣を踰えて逃げ去りはしまいかといふ心配があるからで、しばらく、この詩を以て、紹介の先がけとなし、徐に方便を講じて、必ず君に逢ふ積りである。

【餘論】紀昀は「未能の二句、妥ならず」といつて居るが、これは、典故を疊用した爲に、詞意を晦澁ならしむることを云つたのであらう。

不學劉更生（一）。黃金鑄上方。　劉更生を學んで、黃金、上方を鑄らず。
不學房次律（二）。身事問穎陽。　房次律を學んで、身、穎陽に問ふを事とせず。
王烈（三）亦何人。叔夜（四）未可量。　王烈、亦た何人ぞ、叔夜、未だ量るべからず。
獨見神山開。遽餐石髓香。　ひとり見る、神山の開くを、遽に餐す石髓の香ばしきを。
至道尙聽瑩（五）。蠡才終蹶張（六）。　至道は聽瑩を尙び、蠡才、終に蹶張。
先生喜而笑。幅巾（七）登我堂。　先生、喜んで笑ひ、幅巾、わが堂に登る。
苦誓指黃壤。要言刻青琅（八）。　苦誓して黃壤を指し、要言、青琅に刻す。
蓬萊在何許。弱水（九）空相望。　蓬萊、何許にか在る、弱水、空しく相望む。
且當從嵆阮（一〇）。聊復數山王（一一）。　且つ當に嵆阮に從ふべく、聊か復た山王を數ふ。
達人友四海。曲士（一二）守一疆。　達人は四海を友とし、曲士は一疆を守る。
愼勿使形諜（一三）。兒童驚夜光（一四）。　愼んで形諜を使ふ勿れ、兒童、夜光に驚かむ。

【字解】【一】劉更生　更生は向の初名、漢書劉向傳に「枕中鴻寶苑の祕書を得て之を獻じ、言ふ、黃金成るべしと。上、尙方の鑄作の事を典らしむ、驗あらず、吏に下す」とある、尙方は、天子の器物を作るを主る官。【二】房次律　卽ち房琯、酉陽雜俎に「邢和璞、黃老の道を得、心算を善くし、穎陽書疏を作る。房琯、邢に終身の事を祈る。邢言ふ、降魄の處、館に非ず、寺に非ず、途に非ず、署に非ず、病、魚飡に起り、龜茲板に休せむ、と。後、房、閬州に至りて、紫極宮に舍す。適ま、工を雇うて木を治む、これを道士に問へば、龜茲板と稱す。房、はじめて邢の言を憶ふ。頃らくあつて、刺史、鱠を具へて房を邀ふ。房、具さに刺史に白し、且つ龜茲板を以て托をなす。その夕、鱠を病んで終る」とある。【三】王烈　仙人の名。【四】叔夜　嵆康の字。【五】聽瑩　聞いて明かにする、莊子に「長梧子曰く、これ黃帝の聽瑩するところなり、而して、丘や何ぞ以て之を知るに足らむ」とある。【六】蹶張　强弩を踏んで之を放つ。【七】幅巾　一幅を以て造つた巾。【八】青琅　卽ち青琅玕、寶玉の一種。【九】弱水　續仙傳に「謝自然曰く、毎に玉霄峰に登つて卽ち滄海を見る、蓬萊、亦た廳に遠からざるべしと。ここに於て、海に入つて、一道士に遇ふ。笑つて曰く、蓬萊は、弱水を隔つ。これを去ること三萬里、飛仙に非ざれば到るなし」とある。【一〇】嵆阮　嵆康と阮籍。【一一】數山王　文選五君詠の註に「顏延年、步兵を領し、酒を好んで疏誕、斟酌する能はず。劉湛、彭城王に言ひ、出して永嘉太守と爲す。延年怨憤、乃ち五君詠を作つて、竹林七賢を述べ、以て自ら山濤王戎が貴盛を以て遂に黜けて數められざるに喩ふ」とある。【一二】曲士　一事に片よりたる人、莊子に「曲士、道を語るべからざるものは、敎に束れらるればなり」とある。【一三】形諜　莊子に「內誠は形諜、光を成し、以て外、人心を鎭むるを解せず」とある。【一四】驚夜光　韓愈の詩に兒童畏雷霆、魚鼈驚夜光とある。

【詩意】劉更生が仙術に耽り、尙方を典つて黃金を鍊つた樣な眞似はせず、房琯が身の行末を、態態、穎陽書疏を書いた邢和璞に問うた樣な事は爲ない。王烈も亦た如何なる人か、嵆康も、神仙にか

ぶれて居て、その本心は一寸分からない。われは、獨り神山の開くを見たならば、速に香ばしき石髓を食つて、天晴、長生を得たいと思つて居るが、まだ、さういふ運びに立ち至らぬ。至道は、黃帝の如く、聞いて明らめることを貴び、蠢才の者は、强弩を踏んで放つやうなことを得意がつて居る。今、先生は喜んで笑ひつつ、幅巾を戴いて、わが堂に登られたが、黃土を指して懇に誓ひ、仙家の祕奧を傳へられた肝要なる言葉は、まことに尊くして、靑琅玕に刻すべき程である。蓬萊は何處に在るか、弱水遠く隔てて、空しく相望むだけである。予は、嵆康・阮籍に從ふ積りで、山濤・王戎とても、貴盛を以て疏外されず、矢張、仲間入りをすべき筈である。達人は、度量濶くして、四海を友とし、曲士は、一境を株守して、まことに融通が利かない。愼んで、外、形體だけで事物を窺ふやうなことはせぬが善いので、これが卽ち仙家に於ける修養の第一步である。さうすれば、兒童輩が夜光に驚く樣に、誰でも、驚異せぬものは無からう。

次韻秦少游・王仲至元日立春三首

秦少游・王仲至の元日立春に次韻す　三首

省事天公厭兩回。　事を省いて、天公、兩回を厭ふ、

新年春日併相催。　新年春日、併せて相催す。

殷勤更下山陰雪。　殷勤、更に下す山陰の雪、

要與梅花作伴來。　梅花の與に伴をなして來るを要す。

【字解】〔一〕山陰雪　晉の王徽之が山陰に居て、雪夜、戴逵が之を訪ふ爲に出かけたことを暗用したので、前に怪山道中の詩中に注して置いた。

【題義】元祐八年の元日が立春であつた、その事を秦少游・王仲至の二人が詩に作つたから、これに次韻したのである。

【詩意】天公は、事を簡略にせむが爲に、兩回に分つことを嫌ひ、新年と立春とを倂せて、同時に相催さしめた。その上、御丁寧にも、山陰の雪を下し、ひとり寂しげに居る梅花の爲に、伴侶たらしめむとした。

【餘論】紀昀は「起、拙にして突」といつて居る。

己卯嘉辰壽阿同。　己卯の嘉辰、阿同を壽す、

願渠無過亦無功。　願はくは、渠が過なく亦た功なからむことを。

明年春日江湖上。　明年春日、江湖の上、

回首觚稜一夢中。　首を回らす觚稜一夢の中。

【字解】〔一〕己卯嘉辰　天祐八年の元日。〔二〕阿同　東坡の自註に「子由、一字は同叔、元日己卯は渠の本命なり」とある、本命は卽ち有卦。〔三〕觚稜　宮闕の屋根を云ふ。

【詩意】元日は己卯に當り、丁度、子由の有卦入りであるから、聊か祝をして、彼が過なく、功な

く、兎に角、無事であらむことを祈つた。やがて、乞うて外に出で、明年の立春には、江湖の人となり、宮闕を夢に見て、すッかり世累を絶つ様にしたいものである。

詞鋒雖作楚騷寒。　詞鋒、楚騷の寒を作すと雖も、

德意還同漢詔寬。　德意、還た漢詔の寬に同じ。

好遣秦郎供帖子。　好し、秦郎をして帖子を供せしめ、

盡驅春色入毫端。　盡く春色を驅つて毫端に入れしめむ。

【字解】【一】楚騷　楚人の離騷で、騷も、賦も、その形式は全く同じであるが、漢代以後、主觀的感想を述べたものを騷、客觀的描寫を旨としたものを賦といつた。【二】秦郎　卽ち少游。【三】帖子　この集の卷にも載せてあるが、帖子は、宮中舞樂の歌曲、東坡の自註に「立春の日、翰林學士、詩帖子を供す」とあり、王文誥の案に「時に、首相呂大防、少游を薦むるの意あり、故に此語あり」といつて居る。

【詩意】諸君の作は、詞鋒甚だ鋭く、さながら、屈原の離騷の如く、淸寒の趣があるが、天子の德意を述ぶるに至りては、漢代の詔勅の如く、寬大の意を含んで居る。あはれ、秦少游が召し還されて翰林に入り、詩帖を製することを命せられ、盡く春色を驅つて毫端に入れ、見事なものを作らしめたらばと思ふ次第である。

【餘論】紀昀は「寒の字、强押」といつて居る。

上元侍飮樓上三首、呈同列　上元、樓上に侍飮す、三首、同列に呈す

澹月疏星繞建章。　澹月疏星、建章を繞る、

仙風吹下御爐香。　仙風吹き下す御爐の香。

侍臣鵠立通明殿。　侍臣鵠立す、通明殿、

一朶紅雲捧玉皇。　一朶の紅雲、玉皇を捧ぐ。

【字解】【一】建章　漢宮の名、漢書郊祀志に「武帝の時、柏梁災あり、ここに於て、建章宮を作り、度して、千門萬戸となす」とある。【二】鵠立　鵠の如く列を揃へて直立する。【三】玉皇　天上に居る玉帝、ここでは天子に比して云ふ。

【題義】續通鑑長編に「元祐八年正月壬辰、宣德門に御し、從臣を召して燈を觀せしむ」とあつて、この詩は、卽ち其時の作である。上元は、正月十五日。宋史禮志に「唐以後、正月望後、坊市の門を開いて、燈を燃やす。宋、これに因る。上元前後各一日、大内の正門、綵を結んで山樓となし、天子先づ寺觀に幸して行香し、遂に樓に御し、或は東華門及び東西角樓に御して飮し、從臣、四夷の蕃客、各本國の歌舞に依つて、樓下に侍飮す」とある。この詩は、上元の夜、天子に侍して樓上に飮みしに因り、賦して同列の諸友に呈したのである。

【詩意】初春の夜は、猶は寒けく、澹月疏星が、宮殿を繞り、天上の仙風は、御爐の香氣を傳へて、下界に吹き下す。侍臣輩は、通明殿に參趨し、鵠の如く、整然侍立して居ると、一朶の紅雲が、御座の邊を圍繞して、主上は、その中におはしまし、御顏さへ見えぬのは、まことに尊きことの極みである。

【餘論】紀昀は「この首、傳奇に寫熟せられ、遂に俗耐ふべからざるを覺ゆ。その實、亦た好なく惡なきの詩」といつて居る。

薄雪初消野未耕。　薄雪、初めて消えて、野、未だ耕さず、
賣薪買酒看昇平。　薪を賣り、酒を買うて、昇平を看る。
吾君勤儉倡(一)優拙。　吾が君、勤儉、倡優拙、
自是豐年有笑聲。　自ら是れ豐年、笑聲あり。

【字解】【一】倡優拙　史記范雎傳に「楚の鐵劍利にして倡優拙、夫れ鐵劍利なれば士勇、倡優拙なれば思慮遠し」とある。

【詩意】春の泡雪は消えたが、野は未だ耕さず、丁度、仕事が閒だといふので、農夫どもは、薪を賣り、その錢で酒を飮んで、太平の折から、殊に賑へる上元の夜の景色を眺めて居る。今の天子は、勤儉にして、思慮深くおはすが故に、自然に豐年が打續いて、どこでも、笑ひさざめく聲が聞こえる次第である。

【餘論】紀昀は「極めて意を用ひ、しかも、語、太だ拙」といつて居る。

老病行穿萬馬羣。　老病行く〱穿つ萬馬の羣、
九(一)衢人散月紛紛。　九衢人散じて月紛紛。
歸來一盞殘燈在。　歸り來れば一盞殘燈在り、
猶有傳(二)柑遺(三)細君。　猶ほ傳柑の細君に遺るあり。

【字解】【一】九衢　九街・九陌に同じ、都大路。【二】傳柑　東坡の自註に「樓上に侍飮すれば、貴戚、爭うて黃柑を以て近臣に遺る。これを傳柑といふ、攜へて以て歸るを許す、蓋し故事なり」といふ。【三】遺細君　漢書東方朔傳に「伏日、詔して從臣に肉を賜ふ。朔、ひとり、劍を拔いて肉を割く、大官、これを奏す。朔曰く、歸つて細君に遺る。又、何ぞ仁なるや」とある。細君は、朔の妻の小字。

【詩意】飮、すでに畢り、樓を下り、老病の身を以て、萬馬の羣る間を通り拔けて行くと、都大路に人散じ、月までも紛紛として見える。漸く家に歸ると、夜は更けたが、一盞の殘燈があつて、頂戴して來た黃柑を細君に贈つた。

戲答王都尉傳柑　戲に王都尉の傳柑に答ふ

侍(一)史傳柑玉座傍。　侍史、柑を傳ふ玉座の傍、
人間草木盡天漿。　人間の草木、盡く天漿。
寄與維(二)摩三十顆。　維摩に寄與す三十顆、
不知薝(三)蔔是餘香。　知らず、薝蔔は是れ餘香。

【字解】【一】侍史　ここでは侍臣、卽ち王都尉を云ふ。【二】維摩三十顆　東坡の自註に「輕きを擧げ、重きを明かにし、維摩猶ほ三十枚」とある。【三】薝蔔　梔子の類、王維の六祖の碑に「林は是れ栴檀、更に雜樹なく、花は惟だ薝蔔、餘香を嗅がず」とある。

【題義】王都尉は卽ち晉卿、この詩は、晉卿が黃柑を分けて與れたことを謝したのである。

【詩意】侍從の臣が、玉座の傍に於て、黃柑を分けて呉れたが、どんな草木でも、かくの如くすれば、有り難味が添はつて、天漿の如く覺える。そこで、偏頗なく分けて呉れたのは、かの維摩と同じく三十個で、その餘香は、梔子の如く、いつまでも殘つて居る。

送蔣穎叔帥熙河

蔣穎叔の熙河に帥たるを送る

穎叔出使臨洮、軾與穆父・仲至同餞之、各賦詩一篇、以今我來思爲韻、致遄歸之意、軾得我字。

【訓讀】穎叔、出でて臨洮に使す、軾、穆父・仲至と同じく之を餞し、各〻詩一篇を賦し、今我來思を以て韻となし、遄に歸るの意を致す、軾、我の字を得たり。

西方猶宿師(一)。論將不及我。　西方、なほ宿師、將を論じて、我に及ばず。
苟無深入計。緩帶我亦可。　苟くも深入の計なくんば、緩帶、我、亦た可なり。
(二)承明正須君。文字粲藻火(三)。　承明、正に君を須ふ、文字、藻火よりも粲たり。
自薦雖云數。留行終不果。　自ら薦むる、數ばすと云ふと雖も、留行、終に果さず。
正坐喜論兵。臨老付邊鎮(四)。　正坐、喜んで兵を論じ、老に臨んで邊鎮を付す。
新詩出談笑。僚友困掀簸(五)。　新詩、談笑に出で、僚友、掀簸に困む。
我欲歌杕杜(六)。楊柳(七)方婀娜。　われ杕杜を歌はむと欲す、楊柳、方に婀娜。
邊風事首虜(八)。所得蓋幺麼(九)。　邊風、首虜を事とし、得るところ蓋し幺麼。
願爲魯連書(一〇)。一射聊城笴(一一)。　願はくは、魯連の書を爲り、一たび射らむ、聊城の笴。
陰功在不殺。結草(一二)酬魏顆。　陰功、不殺に在り、草を結んで魏顆に酬ゆ。

【字解】〔一〕宿師　兵を出して久留する。〔二〕承明　殿の名。〔三〕藻火　書經に「藻火粉米黼黻絺繡、五彩を以て彰施し、五色に於て服を作す」とある。〔四〕付邊鎮　邊門の鎖鑰を預ける。〔五〕掀簸　氣焰に卷かれる。〔六〕杕杜　詩經の篇名、小序に「還役を勞するなり」とある。〔七〕楊柳方婀娜　詩經に昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏とあり、又婀娜其枝とある。〔八〕首虜　首を斬り人を虜にする。〔九〕幺麼　通俗文に「長からざるを幺といひ、小細を麼といふ」とある。〔一〇〕魯連書　史記魯仲連傳に「齊の田單、聊城を攻むること歲餘、士卒多く死して、聊城下らず。魯連、書を爲りて、これを矢に約し、以て城中に射て、燕將に遺る。燕將、書を見て泣くこと三日、乃ち自殺す、聊城亂る、田單、遂に聊城を屠る」とある。〔一一〕聊城笴　笴は箭幹、卽ち箭壺、ここでは矢の義に用ふ。〔一二〕結草　前に送蔡冠卿の詩中に注して置いた。

【題義】この詩は、蔣穎叔が愈よ熙河の帥となつて、臨洮に赴任するに就いて、錢穆父・王仲至と一緒に共行を送つて各〻詩一首を賦せむとし、詩經東山の句、今我來思の四字を分つて韻となし、目出たく早く歸ることを望むといふ意を致し、予は我の字を得たといふのである。施註に蔣之奇、戶部侍郎より熙州に知たり、夏人、疆を劃せむことを請うて、兵を山谷の間に伏す。之奇、亦た兵を以て

自ら衞り、而して、その屬をして定西城に至つて會議せしむ。往來二年、議、卒に合はず、朝廷、その詐を知つて之を罷め、益す務めて守備を修し、斥堠を謹み、常に寇至るが如し。之奇の去るを終るまで、敢て犯さず。紹聖の間、章子厚、政を秉り、召して中書舍人となし、開封に知とし、翰林學士に除せられ、出でて汝慶に守たり。徽宗、擢んでて知樞密院となし、觀文殿學士に除し、杭州に知たり。議に與つて、河湟を棄てしを以て、官職を奪はる。すでに卒し、かつて、紹述の言を陳べしを以て盡く之を復す」とある。

【詩意】西方の邊境では、軍隊が出征したまま、まだ引き上げず、その將帥を詮議されても、自分の處へお鉢が廻つて來ない。苟くも、深く敵地に入る計をせずとも善いのなら、輕裘緩帶、ちツと澄まして居れば濟むので、予でも差支はない。承明殿に於て、はじめて君を擢用せられ、その敍任の勅旨は、文字煌煌として、藻火よりも明かである。君は、自ら薦めたことが度度であつたが、矢張、汴京に留まつて、行くことを果さず、やツと、今回、その志望を遂した次第。君は、正坐して、喜んで兵を論じ、そして、老年になりかかつて、ここに西邊の鎖鑰を授けられた。君の帳中に在るや、餘裕綽綽として、談笑の間に新詩成り、同僚の者どもは、皆その氣焔に卷かれて仕舞ふ。予は、杕杜の詩を歌つて、君の歸るを迎へやうと思ふが、今しも、楊柳なまめかしく、はじめて出發されるのであつて、お歸りの程は分からない。邊地の習慣として、首を斬り賊を虜にすることを事として居るが、得るところは、いささかのもので、丸でお話にならぬ。どうか、魯仲連の如く、敵の守將に贈る書を草して、聊城の中に射こんで貰ひたい。かくれた大功は、不殺を旨とすべく、さうすれば、萬一の場合に於ても、草を結んで敵騎を遮り、そして、魏顆の舊恩を報ゆる樣な人も出て來るであらう。

【餘論】乾隆御批には「その憤激を積み、發するに詼諧を以てす、起四句、譎に似、莊に似、言語、天下に妙なり」とあり、査初白は「感慨の言、滑稽を以て之を出す、妙」といひ、紀昀は「起、卽ち結意を伏す、筆、極めて恣逸」といひ、「物あるの言、板實を嫌はず」といつて居る。

再送二首

再び送る　二首

使君九萬擊鵬鯤。(一)　使君、九萬、鵬鯤を擊つ、
肯爲陽關一斷魂。(二)　肯て陽關の爲に一斷魂。
不用寬心九千里。(三)　用ひず、寬心九千里、
安西都護國西門。(四)　安西の都護は國の西門。

【字解】〔一〕九萬擊鵬鯤　莊子に見え、前に催試官、風水洞等の諸詩中に注して置いた。〔二〕陽關　送別の曲、前に次韻孫莘老和孔密州の諸詩中に注して置いた。〔三〕九千里　白樂天の西涼伎に平時安西萬里疆とあつて、その自註に「平時、開遠門外に堠を立て、安西を去ること九千里といひ、以て戍人に示す」とある。〔四〕安西都護　唐會要に「貞觀十四年、侯君集、高昌を西州に平らげ、安西都護府を置いて、交河城に治す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】貴下は九萬里を馳せて、かの鯤鵬をさへ擊たうといふ覺悟で、決して、陽關の別曲を聞いて

斷魂する樣なことはない。まして、安西都護府は、わが國の西門、相去ること九千里に過ぎぬから、特に心を寬くするにも及ばぬ次第である。

餘刃西屠橫海鯤。(一)　餘刃、西に屠る橫海の鯤、
應余詩讖(二)是游魂。　余が詩讖に應ず、これ游魂。
歸來趁別陶宏景。(三)　歸り來つて、趁うて別る陶宏景、
看掛衣冠神武門。　看よ、衣冠を神武門に掛くるを。

【字解】【一】餘刃　莊子に「恢恢として、その刃を游ばすに於て餘地あり」と見ゆ。【二】詩讖　もと東坡の自註があつて「顯叔、未だ洮に帥たるの命あらず、風翔の詩を作る、某、和して游魂の句あり、遂に吟讖と成る」とある。【三】陶宏景　冠を神武門に挂けて辭し去る。前に送二劉道原一の詩中に注して置いた。宏景は、東坡自ら比して云ふ。

【詩意】君は、恢恢として餘地ある游刃を以て西に向ひ、海上に橫はる鯤を屠らうとするので、さきに、有游魂といつた予の詩が、偶ま讖を爲して、愈よ其事が實現された譯である。やがて、君が歸る時分に、予は、陶宏景を學び、冠を神武門に掛けて歸休するから、君は、跡を追つて來て、別を敍することであらう。

【餘論】紀昀は「一語にして、兩邊、倶に到る」といつて居る。

次韻穎叔觀燈　穎叔の燈を觀るに次韻す

安西老守是禪僧。　安西の老守は是れ禪僧、
到處應然無盡燈。(一)　到る處、應に然やすべし無盡燈。
永夜出游從萬騎。　永夜出游、萬騎を從へ、
諸羌(二)入看擁千層。(三)　諸羌入つて看て千層を擁す。
便因行樂令投甲。(四)　便ち行樂に因つて投甲を令し、
不用防秋(五)更打冰。　防秋を用ひず、更に打冰。
振旅(六)歸來還侍宴。　振旅、歸り來つて還た宴に侍す、
十分宣勸恐難勝。　十分宣勸、恐らくは勝へ難からむ。

【字解】【一】無盡燈　前に幾らも見えたが、近くは、石を以て燈に易へるといふ五古の中に注して置いた。【二】諸羌　羌は西夷種族の名、即ち夏人。【三】擁千層　その肩を駢べ足を疊むの多きを云ふ。【四】投甲　降參すること、韓愈の平淮西碑に「蔡の卒夫、甲を投じて呼舞す」とある。【五】防秋　秋冬の際、胡人南下して寇を爲す故、これを防ぐこと。唐書陸贄傳に「西北邊、歳ごとに湖南江淮の兵を調す、これを防秋といふ」とある。【六】振旅　勢ぞろひして凱旋する。

【題義】說明に及ばぬ、觀燈は、即ち上元の燈火を觀ることである。

【詩意】新に安西の守となりし老いたる君は、好個の禪僧で、到る處に、無盡燈を燃やすことであらう。長き夜に親ら出游する時は、萬騎を從へ、夏人どもは、場中に入つて、これを見物する時、もみ合ひ押し合うて、千層を爲して居る。そこで、行樂の序に、甲を投じて歸服せしめ、爾後、防秋の必要もなく、冰を切り出して入貢させる位のものである。やがて、振旅して都に歸りし後、宴に陪すれ

ば、天子より勸賞の御言葉を賜はり、有り難さ身に餘つて勝へられぬ位であらう。

次韻王晉卿奉詔押高麗宴射

王晉卿の詔を奉じて高麗の宴射を押するに次韻す

北苑傳呼陛楯郎。
東夷初識令君香。
天山自可三箭取。
海國何勞一葦杭。
宣勸不辭金盌側。
醉歸爭見玉鞭長。
錦囊詩草勤收拾。
莫遣雞林得夜光。

北苑傳呼す陛楯郎、
東夷、はじめて識る令君の香。
天山、自ら三箭に取るべし、
海國、何ぞ勞せむ一葦の杭するを。
宣勸辭せず、金盌の側つを、
醉歸、爭うて見る玉鞭の長きを。
錦囊の詩草、收拾を勤む、
雞林をして夜光を得せしむる莫れ。

【字解】【一】陸楯郎　秦制、楯な殿下に執るもの、前に餞子由の詩中に注して置いた。【二】令君香　世說に「荀令君、人家に至る、坐處三日香ばし」とある。【三】天山　唐書薛仁貴傳に「鐵勒道行軍總管となる、時に九姓の衆十餘萬、驍騎をして來つて戰を挑ましむ。仁貴、三矢を發し、輒ち三人を殺す。ここに於て、虜氣懾れて皆降る。軍中歌うて曰く、將軍三箭定天山、壯士長歌入漢關」とある。【四】一葦杭　前に游西山寺の詩中に注して置いた。【五】錦囊　唐書李賀傳に「毎旦、出でて小奚奴を從へ、古錦囊を背にし、得るところに遇へば、囊中に投じ、未だ嘗て先づ題を立てて然る後に詩を爲らず」とある。【六】雞林　朝鮮を云ふ、唐書白居易傳に「最も詩に工なり、當時士人、爭ひ傳へ、雞林の行賈、その國相に售る、率ね篇ごとに一金に易へ、僞なるもの、相、輒ち能く之を辨ず」とある。【七】夜光　前に次韻秦觀の詩中に注して置いた。

【題義】この詩は、王晉卿が詔を奉じて、高麗使者の宴射に接伴した時の作に次韻したのである。東京夢華錄に「高麗の使人は、大梁門外安州巷同文館に在り、元旦朝見訖り、後二日、南御苑に詣りて試射す、朝廷、旋つて能射の武臣を選んで伴射せしめ、射畢れば宴を賜ふ」とある。南御苑は玉津園、この詩に北苑とあるのは、一寸分からない。

【詩意】北苑に、射場を設けるに就いて、陛楯郎を呼び立てて手傳はしめ、そこに出て來た高麗使者の一行は、古しへの荀令君に比すべき君の餘香を識別した。わが武臣の能射は、三箭を以て天山を平定せし古しへの薛仁貴の如く、海國の高麗が、これを聞けば、定めて歸服するであらうから、態態、一葦を以て渡るにも及ばない。儀、すでに畢りし後、天子より慰勞の御言葉を賜はり、金杯に一ぱい注がれた酒を有り難く頂戴し、醉つて家に歸れば、途中に遇ふ人人は、馬上ゆゆしき其姿を眺めて居る。君は、詩が上手であるから、錦囊の名句は、勤めて收拾し、かの雞林の人をして、夜光の珠に比すべき其詩を無造作に得せしめぬ樣に注意するが善からう。

【餘論】紀昀は「點綴し得て好し」といつて居る。

次韻錢穆父王仲至同賞田曹梅花

錢穆父・王仲至の同じく田曹の梅花を賞するに次韻す

(一)寒廳不知春。獨立耿玉雪。　寒廳、春を知らず、獨立、玉雪耿たり。
閉門愁永夜。置酒及明發。(二)　門を閉ぢて永夜を愁へ、酒を置いて明發に及ぶ。
忽驚庭戶曉。未受煙雨沒。　忽ち驚く庭戶の曉、未だ受けず煙雨の沒するを。
浮光風宛轉。照影水方折。(三)　浮光、風宛轉、影を照らして、水、方折す。
鬢霜未易掃。眉斧眞自伐。(四)　鬢霜、未だ掃ひ易からず、眉斧、眞に自ら伐る。
惟當此花前。醉臥黃昏月。　惟だ當にこの花前、黃昏の月に醉臥すべし。

【字解】(一) 寒廳　廳は座敷。(二) 明發　明朝に同じ、詩經に明發不寐、有懷二人とある。(三) 水方折　淮南子に「水、圓折するものは珠あり、方折するものは玉あり」と見ゆ。(四) 眉斧　文選枚乘の七發に皓齒蛾眉、命曰伐性之斧とある。

【題義】田曹は、屯田の役所、宋史に「工部の所屬に屯田あり、天下の屯田及び文武の職田公廨田を掌る」とある。この詩は、錢穆父・王仲至の二人が屯田の役所に至りて、梅花を賞した作に次韻したのである。

【詩意】寒い座敷に於ては、春らしい氣分もせぬ折から、屯田曹の梅花は、早く咲き出でて、耿然、玉雪の如く見える。門を閉ぢて永夜を愁へ、酒を置いて夜が明けかかつた。忽ち庭戶の白み渡りしに驚き、梅は、幸に煙雨に沒せられず、光を浮べては、宛轉として風に靡き、影を照らしては、水中に曲折して、玉の樣に見える。鬢邊の霜は、掃ひ易からず、美人の眉は斧の樣だといつて、自然、人の性を伐るけれども、梅花は、決して、さうでない。ただ、この花前に醉うて、黃昏の月に臥せば、それで遺憾もない譯である。

【餘論】紀昀の評に「梅の字を著けずして、神意自ら梅」とある。

送襄陽從事李友諒歸錢塘

襄陽從事李友諒の錢塘に歸るを送る

居杭積五歲。(一)自意本杭人。　杭に居て五歲を積む、自ら意ふ、本と杭人。
故山歸無家。欲卜西湖鄰。　故山、歸つて家なく、西湖の鄰をトせむと欲す。
良田不難買。靜士誰當親。　良田、買ひ難からず、靜士、誰か當に親むべき。
(二)髯張既超然。老潛亦絕倫。(三)　髯張、すでに超然、老潛、亦た絕倫。
(四)李子冰玉姿。文行兩清醇。　李子、冰玉の姿、文行、兩つながら清醇。
歸從三人游。便足了此身。　歸つて三人に從つて游ばば、便ち此身を了するに足る。

公隄(五)不改昨。姥嶺(六)行開新。　公隄、昨を改めず、姥嶺、行く〳〵開新。

幽夢隨子去。幽花落衣巾。　幽夢、子に隨つて去り、幽花、衣巾に落つ。

【字解】〔一〕五歲　年譜に「熙寧四年、杭州に通判たり、凡そ三年。元祐四年、杭州に知たり、凡そ一年」とある。〔二〕參寥　舊暗、字は叅道、吳興六客の一。〔三〕老潛　卽ち道潛。〔四〕李子　卽ち友諒。〔五〕公隄　卽ち蘇公隄。〔六〕姥嶺　天姥山。

【題意】說明に及ばぬ。施註に「李友諒、字は叔益、錢塘の人、進士に擧げらる。紹聖の初、右正言張商英、元祐以來、刑賞の當を失ふを論じ、友諒の銜替に當るは、蘇軾と厚善なるに因り、三省、これが爲に掩匿すと謂ふと云ふ」とある。

【詩意】予、杭州に居ること、前後二度で、通算すると五年ばかり、自分では本と杭人の樣な積りである。故鄉に歸つた處で、家がないから、西湖に向つて、鄰をトせむと欲して居る。その地では、良田も買ひ難からず、靜士も、可なり多く、先づ誰と親んだら善からうか。髯長の張秉道は、すでに超然として衆俗に拔いて居るし、年を取つた道潛も、亦た他に其類が無い。それから、李友諒は氷玉の姿、文行、ともに淸醇である。そこで、其地に往つて、この三人に從つて游べば、わが身を畢るに足ることと思ふ。蘇公隄は、むかしの儘であるし、天姥山も、新道を開鑿すると、大分、好都合になる。今、君の杭州に歸るを送るにつけて、わが夢は、君に隨つて去り、しづ心なき落花は、片片として、衣巾にふりかかる。

【餘論】紀昀は李子冰玉姿の句を評して「入り得て緊湊」といひ、又總評として「切實、詩、須らく標緲を以て之を結ぶべく、方に生動を見る」といつて居る。

次韻吳傳正枯木歌　吳傳正の枯木歌に次韻す

天公水墨自奇絕。　天公の水墨、自ら奇絕、

瘦竹枯松寫殘月。　瘦竹枯松、殘月を寫す。

夢回疏影在東窗。　夢、回つて、疏影、東窗に在り、

驚怪霜枝連夜發。　驚き怪む、霜枝の連夜發するを。

生成變(一)壞一彈指。　生成、變壞、一彈指、

乃知造物初無物。　乃ち知る、造物の初めより物なきを。

古來畫師非俗士。　古來、畫師、俗士に非ず、

妙想實與詩同出。　妙想、實に詩と、同じく出づ。

龍(二)眠居士本詩人。　龍眠居士、本と詩人、

能使龍(三)池飛霹靂。　能く龍池をして霹靂を飛ばしむ。

【字解】〔一〕變壞　楞嚴經に、「われ世間を觀るに、六塵變壞、惟だ空寂を以て修し、身心を滅し盡すに於て、乃ち能く百千劫を度す、猶ほ彈指の如し」とある。〔二〕龍眠居士　卽ち李伯時、龍眠は、もと山名を取つて號としたので、同安志に「龍眠山は、桐城縣の西北二十里に在り、東西二龍井あり、雨を祈れば、能く應ず」とある。〔三〕龍池飛霹靂　杜甫の曹將軍畫馬圖の詩に會騎先帝照夜白、龍池十日飛霹靂とある。〔四〕千騏　千匹の馬。〔五〕不獨畫肉　杜甫の丹靑引に、弟子韓幹早入室、亦能畫馬窮殊相、幹惟畫

君雖不作丹青手。　君、丹青の手と作らずと雖も、
詩眼亦自工識拔。　詩眼、亦た自ら識拔に工なり。
龍眠胸中有千駟。（四）　龍眠胸中、千駟あり、
（五）不獨畫肉兼畫骨。　ひとり、肉を畫くのみならず、兼ねて骨を畫く。
但當與作少陵詩。　但だ當に與に少陵の詩を作り、
或自與君拈禿筆。　或は自ら君と禿筆を拈すべし。
東南山水相招呼。　東南の山水相招呼、
萬象入我摩尼珠。（六）　萬象、わが摩尼珠に入る。
盡將書畫散朋友。　盡く書畫を將て朋友に散じ、
獨與長鋏（七）歸來乎。　ひとり、長鋏と歸來せむか。

肉不畫骨、忍使驊騮氣凋喪とある。【六】摩尼珠　圓覺經に「たとへば、清淨摩尼寶珠の五色に映じ、方に隨つて各〻見はるるが如し」とある。【七】長鋏　史記孟嘗君傳に見えたる馮驩の歌に長鋏歸來乎とあり、前に次韻周開祖の詩中に注して置いた。なほ李白の詩に、長鋏歸來乎、秋風思客歸とある。

【題義】説明に及ばぬ。施註に「吳傳正、名は安詩。父充、神宗に相たり。傳正、元祐中、右司諫となり、劉器之と同じく、蔡確を攻めて、荒服に竄せられ、左史に遷り、西掖を攝し、蘇黃門、汝州に知たるの詞を草して、詞の溢美なるに坐し、罷められて去り、後、子に累せられて、湘中に編管す」とある。但し、この頃は、祕書少監に在官して居た。

【詩意】天公の畫き出す畫繪は、自然奇絶で、瘦竹枯松の間に、殘月を寫し出すことがある。夢が醒めると、松竹の疏影が東窓に印して居るが、霜を帶びた枯木の枝が、連夜つづいて、窓に畫き出されるには、一寸驚かされる。その影の生成するのも、變壞するのも、ただ一彈指の間に在るので、造物には、初めより自己に物なく、唯だ他物を借りて、幻象をなすに過ぎぬことは、言ふまでもない、古來、畫師は、決して俗士に非ず、その妙想は、實に詩と同じく出て來るのである。現に近世の畫家の随一と稱せらるる龍眠居士は、本と詩人であつたればこそ、馬を畫けば、龍池より霹靂を飛ばさしめたのである。今、君は、繪こそ畫かないが、詩眼高くして、自然鑒識に巧である。龍眠の胸中には、千頭の馬があつて、馬を畫くにしても、ひとり、肉を畫くのみならず、兼ねて骨をも畫いた。されば、龍眠の爲に、杜甫の様な豪快な詩を作つて遣るべきであつて、或は、君と共に禿筆を拈して、苦吟するが善からうと思ふ。東南なる越地の山川は、はるかに、予を招くが如く、宇宙間の森羅萬象は、すべて曇りなき我が摩尼の珠に映つて居る。自然の風景は、もとより、他に比較するものもない位。されば、有らむ限りの書畫を盡く散じて朋友に分配し、そして、予、ひとり、長脇差を腰にさして、遠く彼地に出かけて見やうと思つて居る。

【餘論】乾隆御批に「吳詩に因つて李畫に及び、枯木を歌ふに因つて畫馬に及ぶ、軒然として來り、翩然として往く、意に隨つて到るところ、すべて元微に入る」とあり、紀昀は「吳詩、傳はらず、原

唱の意を知らず、亦た遂に之に和するの意を解せず、文に就いて文を論ず、筆力故に超拔と爲す」とあつて、極めて妥當なる見解である。

送黃師是赴兩浙憲

黃師是の兩浙の憲に赴くを送る

世久無此士(一)。我晚得王孫。
寧非叔度(二)家。豈出次公(三)門。
白首沈下吏。綠衣(四)有公言。
哀哉吳越人。久爲江湖呑。
官自倒帑廩(五)。飽不及黎元。
近聞海上港(六)。漸出水底村。
願君五袴(七)手。招此半菽(八)魂。
一見刺史天(九)。稍忘獄吏尊(一〇)。
會稽入吾手(一一)。鏡湖小於盆。
比我東來時。無復瘡痍存。

世、久しく此士なし、われ晚に王孫を得たり。
寧ろ叔度の家に非ざらむや、豈に次公の門に出でむや。
白首、下吏に沈み、綠衣、公言あり。
哀しいかな、吳越の人、久しく、江湖に呑まる。
官、自ら帑廩を倒にし、飽は黎元に及ばず。
近ごろ聞く、海上の港、漸く水底の村に出づと。
願はくは、君、五袴の手、この半菽の魂を招け。
一たび、刺史の天を見れば、稍く獄吏の尊を忘れむ。
會稽、吾が手に入る、鏡湖、盆よりも小なり。
わが東來の時に比して、復た瘡痍の存するなし。

【字解】【一】此士　才德の士。【二】叔度　後漢の徵君黃憲、字は叔度。【三】次公　漢の循吏黃霸、字は次公。【四】綠衣　王註に「當時、人、この句を解せず、これを先生に問ふ。先生曰く、わが家の朝雲、師是を見るごとに、その官職、遷らざるを怪むのみと。然る後に、綠衣は朝雲を指すを知る」とある。朝雲は東坡の妾。【五】帑廩　官庫の金穀。【六】海上港　唐韻に「港は水の分流するなり」とあつて、邦語のみなととは違ふ。【七】五袴手　施注「范廉の事を引く、前に和荊林馬上」の詩中に注して置いた。【八】半菽魂　饑饉の爲め、大半は豆の葉を食つて、遂に餓死した者の靈魂。漢書項羽傳に「歲飢ゑ、民貧しく、卒、半菽を食ふ」とある。【九】刺史天　後漢書に「蘇章、字は孺文、冀州刺史となる。故人、淸河の太守たり、章、部を行つて、その姦贓を按ぜむとす。乃ち太守に請うて、爲に酒肴を設く、平生の好みを陳して甚だ歡ぶ。太守喜んで曰く、人皆一天あり、われ獨り二天あり。章曰く、今夕、蘇孺文、故人の酒を飲むは私恩なり、明日冀州刺史、事を按ずるは公法なり、と。遂に擧げて其罪を正す」とある。【一〇】獄吏尊　漢書に「周勃、廷尉に下さる、吏、稍く之を侵辱す。すでに出でて曰く、吾、嘗て百萬の軍に將たり、安んぞ獄吏の貴きを知らむや」とある。【一一】入吾手　白居易の詩に「濟源山水好、老尹知之久、常日聽人言、今秋入吾手」とある。

【題義】黃師是の事は、前に泗州除夜題の詩中に注して置いた。施註に「黃寔は、神宗の時の進士、これを章子厚の甥となす。子由、陳に官す、これに由つて、二女、子由の婦となる。哲宗、召して用ひむと欲す、而して、林希、是を用つて之を沮み、寶文閣待制知定州に終り、龍圖閣直學士を贈る」とある。この詩は、黃師是が兩浙刑獄となつて赴任するのを送つたのである。

【詩意】世間には、久しく、この種才德の士が無かつたが、われは、晚年に成つて、初めて君を見た。これは、黃憲の家で無からうか、君は、よもや、黃霸の門から出たのではあるまい。さはれ、白髮頭に成つても、下僚に沈淪して居るので、わが家なる綠衣の婢妾までが、その久しく官を遷さざることを痛惜して居るので、なる程、これは公論であらう。哀しいかな、吳越地方は、年年の大洪水で、そ

の地の人は、江湖に呑まれむばかり、政府では、官庫の金穀を倒に振つてまでも、之を救濟して居るが、未だ一般人民をして食に飽かしめることが出來ない。近ごろ聞けば、海邊で水の分流する處は、やツと、水底の村が出たとのことで、洪水も、漸く引きかかつたものと見える。願はくは、君、その地に至らば、古しへの范廉の如く、精精、人民を勞はつて、豆の葉ばかり食つて餓死した貧民どもの靈魂を招いて、供養でもして遣るが善からう。一たび、天と仰ぐべき樣な刺史を見れば、人民は之に懷いて、一方には刑獄の事を掌つて居て、大した威光のあることを忘れるであらう。予は、外を乞うて、越地に往かうと思つて居るが、もし願の如く、會稽が吾が手に入つた時、さしもの洪水が收まつて、名だたる鏡湖も、再び氾濫せずして、盆の樣に小さくなり、予が曩に東に來りし時に比して、復た民に瘡痍の存するなからむことを希望する次第である。

送范中濟經略侍郎分韻賦詩軾得先字且贈以魚枕杯四馬箠一以元戎十乘以先啓行爲韻

范中濟經略侍郎を送り、韻を分ちて詩を賦す。軾、先の字を得たり。且つ贈るに魚枕杯四、馬箠一を以てし、元戎十乘以先啓行を以て韻と爲す

梁李久樂禍。自焚豈非天。　梁李、久しく禍を樂む、自ら焚く、豈に天に非ざらむや。

兩鼠鬬穴中。一勝亦偶然。　兩鼠、穴中に鬬ふ、一勝亦た偶然。

謀初要百慮。善後乃萬全。　初を謀るに、百慮を要す、後を善くすれば、乃ち萬全。

廟堂選世將。范氏眞多賢。　廟堂、世將を選び、范氏、眞に賢多し。

仁風被宿麥。綠浪搖晴川。　仁風、宿麥に被り、綠浪、晴川を搖がす。

號令聳毛羽。先聲落虛弦。　號令、毛羽を聳えしめ、先聲、虛弦に落つ。

我家天一方。去路城西偏。　わが家、天の一方、去路、城の西偏。

投竿困障日。賣劍行歸田。　竿を投じて困んで日を障り、劍を賣つて行く〱田に歸る。

贈君荊魚杯。副以蜀馬鞭。　君に荊の魚杯を贈り、副ふるに蜀の馬鞭を以てす。

一醉可以起。毋令祖生先。　一醉、以て起つべし、祖生をして先んぜしむる毋れ。

【字解】〔一〕梁李　王註に「西夏の三種族を言ふなり。西夏、唐に在つて姓李を賜ふ、すなはち李繼遷、これ已に前に在り。宋朝、姓を賜ふ、趙元昊、これのみ。その承襲するものは、すでに趙を姓として、その餘族は、猶ほ李を姓とす。梁は、猶ほ其妻の黨のごときなり。梁氏、權を擅にし、遂に秋立に至る、故に梁李、兵を用つて相鬪ふの禍あり」と見ゆ。〔二〕自焚　左傳、隱公四年に「兵は猶ほ火のごときなり、戢めざれば、將に自ら焚かむとするなり」とある。〔三〕世將　代代將軍となるの家。〔四〕聳毛羽　禽鳥を驚起せしむ。〔五〕荊魚杯　王註に「荊州、魚枕を出す、杯と爲すべし」とあり、歐陽修の詩に「酌君以荊州魚枕之蕉、贈君以宣城鼠須之管」とある。魚枕は貝の名。〔六〕祖生先　祖生は祖逖、前に虔州八境の詩中に注して置いた。

【題意】施註に「中濟、名は子奇、蔭を以て簽書幷州判官となり、唐介の薦を以て、對提擧を賜はり、在京三司使を修し、戸部判官を授かり、湖南に轉運たり。山蠻、險を恃んで邊患を爲す、宜しく之を郡縣にすべきを建言す。その後、章子厚、五溪を開くの議、これより起る。歸つて、將作監に判たり。契丹に使す、虜、これを撓めむと欲す、爲に屈せず。四路漕左司司農卿を經、河陽守より召されて權戸部侍郎たり、元祐八年二月、集賢殿修撰となり、慶州に知たり」とある。その以後の事は、必要が無いから、ここに省略する。査註に「宋史、經略安撫使、一路兵民の事を掌る、卽ち機速邊防及び士卒罪に抵れるは、聽すに便宜裁斷を以てす。帥臣、河東陝西嶺南路に任ずれば、職、戎夷を綏御するに在り、すなはち、經略安撫使兼郡總管たり」とある。この詩は、范中濟經略侍郎の慶州に赴任するに際し、韻を分けて作つたので、東坡は、先の字を得た。そして、魚枕杯四個、馬の鞭一つを餞として贈つた。分韻は、元戎十乘以先啓行の八字を韻として分つたのである。

【詩意】西夏梁李の一族は、久しく禍を樂み、この頃、大に弱つて居るのは、つまり、自ら焚いた樣なもので、もとより天であらう。二つの鼠が穴の中に鬪ふ時、一つの方が勝つといふのも、亦た偶然である。すべて、初を謀るには百慮を要し、あとの始末を善くすれば萬全である。朝廷に於ては、歷世の將家から選ばれたが、范氏が眞に賢多く、そして、君が其選に入つたのである。君の治を爲すや、仁風は、去年から種ゑてある麥の上に度り、綠浪は、晴れた平郊を搖り動かす位。一たび號令を下せば禽鳥震駭し、先ぶれたる弓の素引の聲を聞くと、愈よ驚いて地上に落ちて來る。わが故郷は、天の一方なる蜀地で、そこへの路は、城の西偏から通ずる。予は、今、竿を投じて日の障られて居るのに困む樣な始末で、やがて、劍を賣つて、歸田しやうと思つて居る。今、お別れに際し、君に荊州から出る貝の杯を贈り、副ふるに蜀地に產する馬鞭を以てした。君よ、この別筵に於て一醉したならば、直に起つて赴任し、天晴の大功を仕出かすべく、決して、祖生をして、先鞭を著けさせてはならぬ。

【餘論】乾隆御批に「謀初善後、無限經濟の在るあり、中濟、能く此詩に負かず、又以て其言必ず中るあるを見るなり」とあり、紀昀は「物に就いて情を生じ、收め得て致あり、然らざれば、この詩、太だ板直」といつて居る。

書晁說之考牧圖後

晁說之の考牧圖の後に書す

我昔在田間。
我、むかし田間に在つて、

但知羊與牛。
但だ羊と牛とを知る。

川平牛背穩。
川平かにして牛背穩に、

如駕百斛舟。
百斛の舟に駕するが如し。

舟行無人岸自移。
舟行いて人なく、岸自ら移る、

【字解】〔一〕百尾羊　百頭の羊。〔二〕草長病牛羊　王註に「先生、かつて言ふ、人あり、牧童の羊を瘠地に驅つて之を牧するを見る。人曰く、かの澤地、草美なり、何ぞ牧かざる。牧童曰く、美草は見に食ふ、羊、何に自つてか肥えむ、瘠地の草は、羊、

我臥讀書牛不知。　われ臥して書を讀んで牛知らず。

前有百尾羊。　前に百尾の羊あつて、

聽我鞭聲如鼓鼙。　わが鞭聲、鼓鼙の如きを聽く。

我鞭不妄發。　わが鞭、妄りに發せず、

視其後者而鞭之。　その後るる者を視て之を鞭つ。

澤中草木長。　澤中、草木長じ、

[二]草長病牛羊。　草長ずれば牛羊を病ましむ。

尋山跨坑谷。　山を尋ねて坑谷に跨がり、

[三]騰趠筋骨强。　騰趠、筋骨强し。

煙蓑雨笠長林下。　煙蓑雨笠、長林の下、

老去而今空見畫。　老い去つて今空しく畫を見る。

世間[四]馬耳射東風。　世間の馬耳、東風に射らる、

悔不長作多牛翁。　悔ゆらくは、長く多牛の翁と作らず。

【題義】晁說之は宋史に「字は以道、少にして司馬溫公の人と爲りを慕ひ、自ら景迂と號す。年未だ三十ならず、蘇軾、著述科を以て之を薦む。靖康の初、召されて著作郎となり、東宮詹事を兼ね、待制侍讀を以て終る」とあり、晁氏世譜に「以道、一字は伯以、元豐五年の進士たり、著すところ、嵩山集あり」とある。考牧は、詩經の無羊の小序に「宣王考牧の什なり」とあつて、鄭註に「厲王の時、牧人の職廢す。宣王、はじめて興つて之を復す。ここに至つて成る。先王牛羊の數を復するを謂ふ」とあつて、牧場を完成するといふ意。この詩は、晁說之の畫いた考牧の圖に題したのである。

【詩意】我、むかし田舍に居た時は、唯だ牛と羊とを知つて居るだけであつた。平野を行くには、牛背が誠に穩であつて、丁度、百斛を容れる大舟に乘つて居る樣である。舟が進む時には、人なくして、岸が自然と移り行くが、われは、牛背に臥して、書物を讀んで居ても、牛は丸で知らぬかの如くである。前に百頭の羊が居て、時たま予が鞭を振ひつつ叱咤する聲の鼓鼙に似たるを聞いて居る。わが鞭とても、妄りに發するのではなく、その後れたるものに注目して之を鞭つだけである。澤中に草木長ずる時、草の長じたのは、牛羊が碌に咀嚼せぬから、甚だ爲めにならぬ。そこで、山を尋ねて深い谷に跨がり、飛び上つたり、跳りはねたりして、予の筋骨は丈夫であつた。煙を帶びた蓑に、雨に濡れた笠を被つて、長林の下に逍遙するのは、當日の予の姿であつたが、老い去りし後の今は、唯だ此畫中に於て之を見て、ひとり昔をしのぶのみである。世間の事は、馬耳東風に聞き流して、ただ、予が、うッかり田舍を立ち去つて、多く牛を飼つて居る翁とならざりしは、悔いても猶は餘りあることである。

飼に其味を咀む、乃ち肥ゆるを得るなり、と。今詩意、これを使ふ」とある。【三】騰趠　飛び上る貌。【四】馬耳射東風　前に和何長官六言の詩中に注して置いた。

【餘論】乾隆御批に「小雅無羊の詩は、宣王牧を考するなり。牛羊寢訛の狀、牧人蓑笠の容、俄焉として麾き、忽然として夢み、維れ魚、維れ旟、變幻測るなく、詩格の奇、これに踰ゆるなし。その詞を襲はずして、能く其意を得、逍遙千古、この作の外、誰か其れ音を嗣がむ」といひ、紀昀は「自在流行、曲折意の如くならざるなく、長短節に中らざるなく、殆んど復た筆墨の痕なし」といひ、「而今の句一點、世間の二句、仍ほ宕開して、前文を收繳す。通篇只だ一句、本位に著き、筆力橫絕」といつて居る。

呂與叔學士挽詞　　呂與叔學士の挽詞

言中謀猷行中經。　言は謀猷に中り、行は經に中る、
關西人物數清英。　關西の人物、清英を數ふ。
欲過(一)叔度留終日。　叔度を過ぎむと欲して、留まる終日、
未識(二)魯山空此生。　未だ魯山を識らず、空しく此生。
議論凋零(三)三益友。　議論凋零す、三益友、
功名分付(四)二難兄。　功名分付す、二難の兄。
老來尙有憂時歎。　老來、尙ほ憂時の歎あり、
此涕無從何處傾。　この涕、何處より傾くるなし。

【字解】【一】叔度　後漢書黃憲傳に「字は叔度、荀淑、愼陽に至つて、憲に逆旅に遇ひ、ともに語り、日を移して去る能はず。郭林宗、少にして汝南に游びて、憲に從ひ、日を累ねて方に還る」とある。【二】魯山　唐書元德秀傳に「かつて、魯山の令となる。天下、その行を高しとして、これを元魯山といふ」とある。【三】三益友　論語に「孔子曰く、益者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とす、益なり」とあり。王文誥の案に「橫渠・伯淳・伊川を指す」とある。【四】二難兄　世說に「陳元方の子長文、季方の子孝先と、各〻その父の功德を論じ、これを爭うて決せず、太邱に諮る。曰く、元方は兄たり難し、季方は弟たり難し」とあつて、その註に「陳羣、字は長文、忠、字は孝先」とある。又晉書に「王琨、少にして才藝あり、名、珣の右に出づ。時人語つて曰く、法護は佳ならざるに非ず、僧彌は兄たり難し、と。僧彌は、琨の小字なり」とある。これは、大臨の兄大忠・大防を指して云ふ。

【題義】施註に「呂與叔、名は大臨、京兆藍田の人、博學、通せざるところなく、尤も春秋二禮に深し。每に三代の遺文舊制を掇拾せむと欲し、今に行はるべからしめば、空言と爲さず、以て世に拂り俗を駭かす。鳳翔司竹監を監し、元祐の間、從官、その行義修飭、文詞爾雅を薦め、太學博士に除せられ、祕書省正字に遷る。范內翰淳甫、乞うて以て勸講に備へむとす、未だ用ふるに及ばずして卒す。兄大忠、字は進伯、寶文閣直學士に終る。大防、字は微中、左僕射となる。兄弟、平居相切磋し、道を考へ、禮を考へ、制度冠婚喪祭、一に古しへに本づく、關中、禮樂を言ふもの、呂氏を推す」とある。この詩は、卽ち呂與叔を悼んで作つたのである。

【詩意】言葉は謀猷に中り、行は正經に中り、言行ともに失態なく、天晴、關西の人物中に於て、淸節英儁の聞こえが高かつた。黃叔度に似たる君を訪うて、終日留まつて居たいと思つたが、まだ元魯山を面識せず、この生を空しうして、ここに、君の訃音を聞いた樣な始末。君には、橫渠・伯淳・

伊川といふ三個の益友が居たが、ここに至りて、議論凋零、復た聞くべからず、終生の功名を以て、大忠・大防といふ略ぼ相若ける二人の兄に讓り渡して仕舞つた。予は、老來、時を憂へて歎息することを禁じ得ないので、この涙は、何處から傾け來るともなく、全く君を哭するに因つて、自然出て來たのである。

【餘論】紀昀は「起句、靡甚し」といひ、王文誥は「睪小、名を伊川に嫁して隙を報じ、黨禍日に盛なり、公、蓋し與叔に望むあり、而して、與叔且つ死し、復た紛亂を解く者あるなし。これに緣つて一痛、しからざれば、憂時の歎、應に此詩を結ぶべからず」といつて居る。

丹元子示詩飄飄然有謫仙風氣吳傳正繼作復次其韻

丹元子、詩を示さる。飄飄然として謫仙の風氣あり。吳傳正、繼いで作り、復た其韻に次す

(一)飛仙亦偶然。脫命瞬息中。　飛仙、亦た偶然、命を脫す瞬息の中。

惟詩不可擬。如寫天日容。　惟だ詩は擬すべからず、天日の容を寫すが如し。

夢中哦七言。玉丹已入懷。　夢中、七言を哦し、玉丹、すでに懷に入る。

一語遭(二)綽虐。失身墮蓬萊。　一語、綽虐に遭ひ、身を失うて蓬萊に墮つ。

蓬萊至今空。護短不養才。　蓬萊、今に至つて空しく、短を護して才を養はず。

(三)上界足官府。謫仙應退休。　上界、官府に足る、謫仙、應に退休すべし。

可憐吳與蘇。(四)骯髒雪滿頭。　憐むべし、吳と蘇と、骯髒、雪、頭に滿つ。

雪滿頭。　雪、頭に滿つ。

終當却與丹元子。　終に當に却つて丹元子と、

笑指東海乘桴浮。　笑うて東海を指し、桴に乘じて浮ぶべし。

【字解】〔一〕飛仙　天下を飛行する仙人、前赤壁賦にも挾飛仙以敖游とある。〔二〕綽虐　いぢめらる、叱責せらる。〔三〕上界足官府　天上にも官府があるといふ義、韓愈の詩に見え、前に盧敖洞及び題思邈眞の詩中に注して置いた。〔四〕骯髒　世に不遇なること。

【題義】王註に黃魯直の言を引いて「王希明の纂せる天文圖に、丹元子步天歌一卷あり、世に傳ふ、蓋し星歷の學なり」とあるが、合註に「丹元子步天歌、唐藝文志に見ゆ、王註、引いて以て丹元子の三字を注す、非なり、姚丹元を知らざるなり」とある。すると、丹元子は、前に詩題に見えた丹元姚先生である。その丹元子が自作の詩を見せた處が、飄飄として、謫仙、卽ち李白の樣な氣分があつて面白く、吳傳正も繼いで作つたから、それに次韻した。

【詩意】修行して、飛行の出來る仙人となることは、もと偶然であつて、この命を瞬息の中より脫し、

全く人間の氣分を離れなければならず、丹元子の樣な眞似は、決して出來ぬ。その丹元子の詩も、從つて、飄飄として塵表に出で、到底、擬すべからざるもので、たとへば、天日に比すべき天子の聖容を畫いた樣なものである。君が夢中に七言の詩を作ると、醒めての後、懷に名玉丹藥が這入つて居て、自然、天助があつたものと見えるが、詩中の一語、俗人の苛責に遭ひしに因り、身を失うて、蓬萊に落ちた。蓬萊といふ處は、今に至るまで、無人の境で、短を護して才を嫉ふことはない。天上の仙界には、官府の設けがあつて、規律が嚴重であるから、謫仙は、容易に其處に往く譯には行かず、しばらく、蓬萊に退休して居なければならぬ。ここに、氣の毒なのは、吳傳正・蘇軾の二人で、從前不遇にして、白髮頭に成つて仕舞つた。そこで、結局、丹元子と一緒になり、笑つて東海を指し、桴に乘つて、蓬萊に游びに行く外はあるまいと思ふ。

【餘論】紀昀の評に「後幅拉雜」とある。

次韻王定國書丹元子寧極齋

王定國が丹元子の寧極齋に書するに次韻す

仙人與吾輩。寓跡同一塵。　仙人と吾輩と、跡を寓す同一塵。

何曾五(一)漿饋。但有爭(二)席人。　何ぞ曾て五漿を饋らむ、但だ席を爭ふの人あり。

(三)寧極無常居。此齋自隨身。　寧極、常居なく、この齋、自ら身に隨ふ。

人那識(四)郗鑒。天不留封(五)倫。　人、那ぞ、郗鑒を識らむ、天は封倫を留めず。

誤落世網中。俗物愁我神。　誤つて落つ、世網の中、俗物、わが神を愁へしむ。

先生忽叩戶。夜呼祁(六)孔賓。　先生、忽ち戶を叩き、夜呼ぶ祁孔の賓。

便欲隨子去。著書未(七)絕麟。　便ち子に隨つて去らむと欲するも、書を著して未だ麟に〔絕たず。〕

願掛神(八)虎冠。往卜飲(九)馬鄰。　願はくは、神虎の冠を掛け、往いて飲馬の鄰を卜せむ。

(一〇)王郎濯紈綺。意與陋巷親。　王郎、紈綺を濯ひ、意、陋巷と親む。

南游苦不蚤。儻及蓴(一一)鱸新。　南游、苦だ蚤からず、もしくは、蓴鱸の新なるに及ばむ。

【字解】〔一〕五漿饋　列子に「列子、齊に之き、中道にして返り、伯昏瞀人に遇ふ。伯昏瞀人曰く、奚の方にして反る。曰く、吾驚けり、吾、十漿を食はむとして、五漿、先づ饋れり」とある。その人に敬意を表して、五漿を獻じたといふ意。〔二〕爭席人　列子に「楊朱、沛に之かむとして梁に至り、老子に遇ふ。楊朱、蹙然容を變じて曰く、敬んで命を聞くと。その往くや、舍者迎將し、家公席を執り、妻は巾櫛を執り、舍するものは席を避け、煬するものは竈を避く。その反るや、舍するもの、これと席を爭ふ」とある。和光同塵の德を得て、その貌、常人と異ならざる故に、同宿の者は之と席を爭つたといふ意。〔三〕寧極　王註に「齋を寧極と名づくるは、莊子繕性篇、時命に當らずして、大に天下に窮すれば、根を深くし、極に寧んじて待つ、これ存身の道なりといふに取る」とある。〔四〕識郗鑒　施註に「唐紀聞、譚武威・段寰、天寶五載、魏郡の逆旅を過ぐ。客、藥を市るあり。寰、これ道者なるを知り、卽ち藥を市うて之に薦む。自ら言ふ、吾が姓は孟、名は期思、居は恆山に在り、と。寰、山中に入るを祈め、遂に約して山に入り、居ること五

日。孟先生曰く、今日、盍ぞ老先生に謁せざる、と。ここに於て、西室を啓く。老先生、牀に據る、爨、謁して拜す。爨、山中に在ること四年、老先生の戸を出づるを見ること、五六度に過ぎず、但だ端坐正心、禪觀して食はず、禪を出づる時ごとに、即ち少桑汁を飲むのみ、爨、孟叟に問ふ、老先生何の姓名か。叟、晉書郗鑒傳を取つて之を讀ましめて曰く、老先生を識らむと欲せば、即ち郗太尉なり」とある。【三】封倫　唐人の詩に可レ憐正觀太平後、天且不レ留封德彝とある。【六】郗孔賓　前に石芝の詩中に注して置いた。【七】未絕麟　左傳哀公十四年春、西狩獲麟の杜預註に「仲尼、周道の興らざるを傷み、嘉瑞の應なきを感じ、故に魯の春秋に因つて中興の敎を修し、筆を獲麟の一句に絕つ」とある。【八】神虎冠　施註に「神虎門、唐の諱を避けて神武と改む」とある、冠を神武門に掛けるは陶弘景の故事、前に數ば見えて居た。【九】飲馬　王註に「蘇州に飲馬橋あり、丹元子は蓋し蘇州の人なり」とあり、圖經に「飲馬橋は、吳縣に在り」と見ゆ。【一〇】王郎　即ち王定國。【一一】蓴鱸　張翰の故事、前に《鐵の網》の詩中に注して置いた。

【題義】この詩は、王定國が丹元子の寧極齋に寄題した詩に次韻したのである。

【詩意】仙人は、矢張、吾輩と同じく、この世に居て、等しく跡を一の塵埃中に寄せて居るが、和光同塵の德に滿ち、容貌愚なるが如く見える處から、かつて五漿を獻ずるものもなく、宿屋に往けば、泊まり合せた人が無遠慮にも席を爭ふといふ始末。丹元子は、その齋を寧極と號すれども、もとより、一定の居所とてはなく、その身の往つた處が即ち齋である。君が古しへの郗鑒の樣な老先生となることは、誰も知らず、天は又封德彝の樣な人を留めて置かないから、これを識別することが出來ない。予は、誤つて、塵網の中に落ち、鄙俗の事物が我が心神を愁へしめ、常に閉口して居ると、先生は、忽ち戶を扣き、予を招いて、郗孔二人の如く、上賓となし、色色敎へて下された。そこで、先生に隨つて去らうと思ふが、書を著して、未だ畢らないから、しばらく、待つて貰ふ外はなく、やがて、冠を神武門に掛け、蘇州の飲馬橋に往つて、先生の鄰に住まはうとさへ思つて居る。王定國は、名家の子でありながら、一切驕貴を洗ひ去つて、陋巷に住む吾輩と親密である。王君も、宜しく南遊すべく、今や決して早い譯でもないが、とてもの事に、蓴鱸の味新なる秋にしたらば、善からうと思はれる。

王仲至侍郎見惠稗栝種之禮曹北垣下今百餘日矣蔚然有生意喜而作詩

王仲至侍郎、稗栝を惠せらる。之を禮曹北垣の下に種う、今百餘日、蔚然として生意あり、喜んで詩を作る

(一)翠栝東南美。近生(二)神嶽陰。
惜哉不可致。霜根絡雲岑。
仙風振高標。香實隕平林。
偶隨樗櫟生。不爲樵牧侵。
忽驚黃茅嶺。稍出青玉鍼。
好事雖力取。王城少知音。

翠栝、東南の美、近く神嶽の陰に生ず。
惜いかな、致すべからず、霜根、雲岑に絡ふ。
仙風、高標を振ひ、香實、平林に隕つ。
偶ま樗櫟に隨つて生じ、樵牧の爲に侵されず。
忽ち驚く黃茅嶺、稍く出づ青玉鍼。
好事、力取すと雖も、王城、知音少し。

豈無換鵞手。但知覓來禽。
高懷獨夫子。一見捐槖金。
得之喜不寐。贈我意殊深。
公堂開後閣。凡木愧華簪。
栽培一寸根。寄子百年心。
常恐樊籠中。摧我鸞鶴襟。
誰知積雨後。寒芒曉森森。
恨我迫歸老。不見汝十尋。
蒼皮護玉骨。旦暮視古今。
何人風雨夜。臥聽飢龍吟。

豈に換鵞の手なからむや、但だ來禽を覓むるを知る。
高懷、ひとり夫子、一見、槖金を捐つ。
これを得て、喜んで寐ねず、われに贈る、意、殊に深し。
公堂、後閣を開き、凡木、華簪を愧づ。
栽培す一寸の根、子が百年の心を寄す。
常に恐る、樊籠の中、わが鸞鶴の襟を摧くを。
誰か知らむ、積雨の後、寒芒、曉森森。
恨むらくは、我、歸老に迫られ、汝の十尋なるを見ず。
蒼皮、玉骨を護し、旦暮、古今を視る。
何人か風雨の夜、臥して飢龍の吟を聽かむ。

【字解】【一】檿栝　栝は樹名、びやくしん、或は檜ともいふ。【二】神嶽　衡山。【三】換鵞手　王羲之が黄庭經を寫して道士の鵞に換へたこと、前に「聞錢道士」の詩中に注して置いた。【四】來禽　林檎の別名、前に「次韻題所藏墨」の詩中に注して置いた。【五】槖金　槖は財布。【六】樊籠　この世の中、陶淵明の詩に、「久在樊籠裏」とある。【七】鸞鶴襟　王註に「舒元輿の錄桃源畫記に有鸞青於、有鶴玉羽」とある。

【題義】この詩は、王仲至侍郎が栝樹の小さいのを惠んで呉れたから、禮部の役所の北垣の下に植ゑた處が、すでに百日となり、どうやら根付いた樣で、蔚然として生意あるを見て作つたといふのである。

【詩意】翠色鬱然たる栝樹は、東南の美材であつて、近ごろ衡山の陰に生じて居るが、惜いかな、遠くして致すに由なく、霜を帶びた其根は、雲に聳ゆる高峰に絡み著いて居る。仙界より吹く風は、その高い頂を搖すり、香ばしい實は、平林に落ちて、少しも人に顧られず、偶然、樗櫟の樣な散木と一緒に生じて、樵牧に侵されずに居るのが、まことに勿怪の幸である。驚くべきは、この木が黄茅嶺に生えて、針の樣な青い葉を抽き出したことで、好事者は、金力で之を取り寄せることが出來るにしても、王城の中には、之を愛づるものがない。經を寫して、鵞と交換したといふ王羲之の樣な手かきは無い譯でもないが、唯だ實のなる林檎の木ならば欲しいといふのが普通である。王侍郎は、高懷の士であるから、これを一見すると、財布の底をはたいて、愈よ取り寄せることにし、これを得ると、喜んで寐られず、やがて、予にも、若いのを一株贈られたが、まことに辱いことである。そこで、公堂の後閣を開いて之を植ゑると、その氣高いことは、華簪を著けた公卿輩の如く、凡庸の木木は、これに對して愧ぢ入るばかり。ここに、一寸の根を培植して、君が百年の心を寄せやうといふので、決して、等閒にはせぬ積り。常に恐るるは、この身、樊籠に比すべき浮世に居て、鸞鶴の如き出塵の襟懷を摧破することである。誰か知らむ、長雨の後、植ゑた栝樹は勢を得て、その葉は寒芒の如く、

晩來森森として見えることを。恨むらくは、予、すでに歸老に迫られ、汝が此に在つて、十尋の丈にまで生長するを見ないことであるが、蒼皮は、懇に玉骨を護し、古今を旦暮視して健かに生長することを望む次第。やがて、風雨の夜に當り、飢ゑた龍の長吟するが如き其樹聲を、何人が聞くであらうか。

【餘論】査初白は、常恐樊籠中の數句を評して「この意を少くべからず。余謂ふ、東坡の詩中、この意、太だ多し、これを合觀すれば、亦た是れ一病、謂はゆる好曲は三遍唱ふるを禁ぜず」とあり、紀昀は「起し得て鄭重」といひ「一結淵遠」といつて居る。

次韻錢穆父馬上寄蔣穎叔二首

錢穆父の馬上、蔣穎叔に寄するに次韻す　二首。

玉關不用一丸泥。　玉關用ひず一丸泥。
自有長城鳥鼠西。　自ら長城あり鳥鼠の西。
剩與故人尋土物。　剩へ、故人の與に土物を尋ね、
臘糟紅麴寄駝蹄。　臘糟紅麴、駝蹄を寄す。

【字解】【一】一丸泥　後漢書に「隗囂の將王元、囂に說いて曰く、臣請ふ、一丸の泥を以て、大王の爲に、東、函谷關を封ぜむ」とある。【二】鳥鼠　山名、隴西郡の西に在る。【三】土物　その地の特產。【四】臘糟紅麴　臘月に造つた來ざらしの酒の糟、麴はかうじ。本草に「麴を造るの法は近世に出づ、亦た奇術なり、酒及び鮓醯中に入るれば、鮮紅愛すべし」とある。すると、これは、麴に酒糟を交へ、その中に駝蹄を漬け込んだので、その色が赤くなつて居るのであらう。【五】駝蹄　駱駝の蹄。

【題義】錢穆父が赴任の途中から、馬上の作を蔣穎叔に寄せたから、取り敢へず次韻したので、穆父の原作は、左の通りである。

春雪京城一尺泥。泣鞍還憶蔣征西。碧幢紅旆出關去。一路東風送馬蹄。

【詩意】錢君は、雄才大略、一世を蓋うて居るから、君が赴任して西邊を鎭撫すれば、一丸の泥を以て玉門關を封鎖する必要もなく、鳥鼠山の西に當つて、自然、長城があるといふ樣なものである。その上、知人の爲に、特に土產を探して送られるが、そは、臘糟紅麴に漬け込んだ駱駝の蹄などが宜しかるべく、まことに稀に見る珍味である。

【餘論】紀昀の評に「後二句、贊し得て脫洒」とある。

多買黃封作洗泥。　多く黃封を買うて洗泥と作す、
使君來自隴山西。　使君は隴山の西より來る。
高才得兎人人羨。　高才、兎を得て、人人羨む。
爭欲尋蹤覓舊蹄。　爭うて、蹤を尋ねて舊蹄を覓めむと欲す。

【字解】【一】黃封　黃色の紙で瓶に封をした酒、前に岐亭五首の詩中に注して置いた。【二】洗泥　洗塵に同じ、旅の疲を慰める。【三】覓舊蹄　蹄は𦊓、莊子に「筌は魚に在る所以、魚を得て筌を忘る。蹄は

兎に在る所以、兎を得て蹄を忘る」とある。

【詩意】君が隴山の西より往いて任地に著した時は、多く酒を買ひ、無事著任の賀宴を催して、旅の疲れを忘れるであらう。世人は、君が高才を以て此官を得たことを思はずに、君の出世を羨み、唯だ君の眞似をして、兎を捕へる古い蹄ばかり探して居るのは、まことに愚の極である。

【餘論】紀昀は「これ却つて必せず」といつて居る。

表弟程德孺生日

表弟程德孺の生日

(一)仗下千官散(二)柴庭。　仗、下つて、千官、柴庭に散す、

微聞偶語說(三)蘇程。　微に聞く、偶語、蘇程を說くを。

(四)長身自昔傳甥舅。　長身、むかしより甥舅を傳へ、

(五)壽骨遙知是弟兄。　壽骨、遙に知る是れ弟兄。

曾活(六)萬人寧望報。　曾て萬人を活かして寧ろ報を望まむや、

祇求(七)五畝却歸耕。　祇だ五畝を求めて、却つて歸耕。

(八)四朝遺老凋零盡。　四朝の遺老、凋零し盡し、

鶴髮他年幾個迎。　鶴髮、他年幾個か迎ふ。

【字解】【一】仗下　殿階内外の儀仗が退出する。【二】柴庭　殿前の廣場。【三】蘇程　蘇軾と程德孺。【四】長身　丈高いこと。【五】壽骨　東坡の自註に「予と君と、皆壽骨耳を貫く、班列中、多く予二人を指し、問はずして、その中表たるを知るなり」とある。【六】活萬人　東坡の自註に「君、楚州に在り、予、杭州に在り、皆饑に遇ひ、歳ごとに數萬人を活かす」とある。【七】五畝　少しばかりの田地。【八】四朝　仁宗・英宗・神宗・哲宗の四世。

【題義】表弟は、從弟に同じ。施註に「程德孺、名は之元、元祐七年六月、嶺外より節を持して歸り、右朝奉郎を以て主客郎中となり、金部に進む、時に先生と同朝」とある。この詩は、從弟程德孺の誕生日に作つて與へたのである。

【詩意】宮門内外の儀仗は退出し、千官は廣場に散ずる時、われ等二人の事を話し合つて居るのが、それとなく聞こえる。むかしから、叔父甥は、身丈の高いことまで、相傳するといふが、均しく、壽骨が耳を貫いて居る故に、遠方から見ても、從兄弟といふことが分かる。君は、かつて楚州に居た時、凶年に際して、多くの人を救つたが、決して、その報を望むことなく、唯だ五畝の田を求めて歸耕せむことを願つて居る。今や四朝の元老は、盡く凋零して仕舞つたから、他年、白髮頭で相迎ふるものは幾人あらうか。それにつけても、お互に努力して餐飯を加ふることが肝要である。

【餘論】紀昀は「これ瑕詞と雖も、却つて、甚しく窠臼に落ちず」といつて居る。

七年九月、自廣陵召還、復館於浴室東堂、八年六月、乞會稽、將去、汶公乞詩、乃復用前韻三首

七年九月、廣陵より召し還され、復た浴室の東堂に館す。八年六月、會稽を乞うて將に去らむとす。汶公、詩を乞ふ、乃ち復た前韻を用ふ　三首

乞郡〔一〕三章字半斜。　郡を乞ふ三章、字、半ば斜なり、
廟堂傳笑眼昏花。　廟堂傳へ笑ふ、眼、花に昏きを。
上人問我遲留意。　上人、わが遲留の意を問ふ、
待賜頭綱〔二〕八餅茶。　頭綱八餅茶を賜はらむことを待つ。

【字解】〔一〕三章　東坡の本集に、兵部より召し還され、乞外郡劄子、辭兩職并乞郡劄子あり、又乞越州劄子がある。〔二〕頭綱八餅茶　東坡の自註に「侍書學士には、頭綱龍茶一斤を賜ふを得、今年、綱、到る最も遲し」とあり、査註に「熊蕃の北苑茶錄、毎歲、十餘綱を分つ、惟だ白茶は、驚蟄前より役を興し、浹日乃ち成る、飛騎疾く馳せ、仲春を出でずして、すでに京師に至る、號して頭綱となす。苕溪漁隱叢話、北苑の細色茶五綱、凡そ四十三品共に七千餘餅、粗色茶七綱、凡そ五品、共に四萬餘餅、東坡、汶公の詩卷に題し、待賜頭綱八餅茶といふは、卽ち今の粗色紅綾袋餅の八者是れなり」とある。

【題義】浴室は、興國寺中に在るので、東京夢華錄に「浴室院は、開封城內第三條甜水巷に在り」と見ゆ。東坡は、元祐七年九月、揚州から召し還され、上京して、復た浴室院の東堂に寄寓して居たが、八年六月、會稽を乞ひ、近近出發せむとするに就いて、院主の汶公が詩を乞ひしに因り、再び前韻を用ひて、これを作つたのである。

【詩意】われは、外郡を乞ふ劄子を、三度打續けて差し出したが、字が半ば曲つて居たから、廟堂の人人は、これを傳觀して、東坡は、目が霞んで居るといつて笑つたであらう。上人は、何故、ここに愚圖愚圖して居るかといつて問はれるが、そは、頭綱八餅茶の頂戴を待つて居るからである。

夢繞吳山卻月廊〔一〕。　夢は繞る吳山の卻月廊、
白梅盧橘覺猶香。　白梅盧橘、猶ほ香ばしきを覺ゆ。
會稽且作須臾意。　會稽、且つ須臾の意を作す、
從此歸田策最良。　これより、歸田、策、最も良し。

【字解】〔一〕卻月廊　東坡の自註に「杭州梵天寺に月廊數百間あり、寺中に白楊・梅・盧橘多し」とある。

【詩意】夢は、杭州吳山なる梵天寺の卻月廊を繞り、さめての後も、白梅盧橘の匂が殘つて居る樣な氣がする。會稽とても、ほんの暫く居る積りなので、これより、歸田するのが、最上策に相違ない。

東南此去幾時歸。　東南、ここを去つて幾時か歸る、
倦鳥孤飛豈有期。　倦鳥孤飛、豈に期あらむや。
斷送一生消底物。　一生を斷送するに、底物を消ふ、

三年光景六篇詩。三年の光景、六篇の詩。

【詩意】ここを去つて、東南の越地には、何時到著するか、身は、倦鳥の孤飛するが如く、格別、定まつた期限もない。この一生を送るには、何物を用ふるかといふと、三年の光景を詠じて、唯だ六篇の詩があるばかりで、まことにお愧かしい始末である。

【餘論】乾隆御批に「首作、言を賜を待つに託す、戀闕情深し、三作、只だ是れ詩を把つて歲月を消すの意を道破す、便ち深省を發すべし」とあり。紀昀は「三首、皆清脫、喜ぶべし」といつて居る。

吳子野將出家、贈以扇山枕屛

吳子野、將に出家せむとす、贈るに扇山枕屛を以てす

峩峩扇中山。絕壁信天剖。峩峩たり扇中の山、絕壁、眞に天剖。

誰知大圓鏡。衡霍入戶牖。誰か知らむ大圓鏡、衡霍、戶牖に入るを。

得之老月師。畫者一醉叟。これを老月師に得たり、畫者は一醉叟。

常疑若人胸。自有雲夢藪。常に疑ふ、若人の胸、自ら雲夢の藪あるを。

千巖在掌握。用舍彈指久。千巖、掌握に在り、用舍、彈指久し。

低昂不自知。恨寄兒女手。低昂、自ら知らず、恨むらくは、兒女の手に寄す。

短屛雖曲折。高枕謝奔走。短屛、曲折すと雖も、高枕、奔走を謝す。

出家非今日。法水洗無垢。出家、今日に非ず、法水、洗うて垢なし。

浮游雲釋嶠。宴坐柳生肘。浮游、雲、嶠を釋き、宴坐、柳、肘に生ず。

忘懷紫翠間。相與到白首。懷を忘る紫翠の間、相與に白首に到らむ。

【字解】〔一〕大圓鏡　楞嚴經に「又自心に於て大圓鏡を現じ、内より十種の微妙寶光を放つ」とある。〔二〕衡霍　衡山は四嶽の一で、南嶽ともいふ。爾雅疏に「衡山、一名霍山、漢の武帝、嶽神を天柱に移して、又名づく。天柱にも亦た霍あり、故に漢以來、衡霍別る」とあるから、衡山と天柱山を并稱したのである。〔三〕雲夢藪　胸中に雲夢八九を呑む、前に司竹監の詩中に注して置いた。〔四〕彈指　指を彈くといふ極めて短い時間、一瞬間。前に文長老卒・孤山辨才・次韻吳傳正等の諸詩中に注して置いた。〔五〕兒女手　後漢書馬援傳に「何ぞ能く牀上に臥して、兒女子の手中に在らむや」とある。〔六〕雲釋嶠　韓愈の詩に「懸池幕鴨回、釋嶠孤雲縱」とある。〔七〕柳生肘　柳は瘤、はれ物、莊子に見え、前に記所見・吳道子畫の諸詩中に注して置いた。

【題義】査註に「吳子野、名は復古、麻田山人と號し、居るところ、遠游菴と名づく、先生南遷、爲に遠游菴銘を作る」とある。扇山枕屛は、扇地に山を畫いたのを貼り付けた枕屛風であらう。この詩は、吳子野の出家するを聞いて、扇山枕屛を贈り、それに添へて贈つたのである。

【詩意】扇地に畫いた山は、峩峩として、その絕壁は、まことに、天工を以て剖かれたものである。しかし、大圓鏡に比すべき吾が心を以て之を觀ると、衡霍二山が戶牖の間に這入つて來た樣な氣がす

る。予は、これを老月師から得たが、畫いた人は、一の醉叟であるとの話。常に疑ふらくは、この畫師の胸中には、雲夢を幾つも呑み込んで居たのではあるまいか。その上、千巖は掌握の中に在つて、彈指の間に之を用捨し、以て久しく年を經たのであらう。その山の低昂は、自ら知らずして、勝手に畫いた傑作であつて、兒女の手に寄することを殘念に思つて居る。この屛風は、折り疊む樣に成つて居るが、枕を高くして、これを其前に立てて置くと、容易に塵途の奔走と絕緣することが出來る。君の出家は、何も今日に始まつたのではなく、ずツと前から、法水で心を洗つて、一點の垢をも留めない位。その浮游する時は、雲が山を離れたるが如く、宴坐する時は、はれ物が肘に出來ても、何とも思はぬ位、悟り澄まして居る。そこで、この屛風の山を眺めて、懷を紫翠の間に忘れ、相與に年を取つて、白髮頭に至らむことを希望する次第である。

【餘論】紀昀は「正意に隱映して、痕跡を著けず」といつて居る。

聞潮陽吳子野出家　　潮陽吳子野の出家するを聞く

子昔少年日、氣蓋里閭俠。　子、むかし少年の日、氣は蓋ふ里閭の俠。

自言似劇孟〔一〕、叩門知緩急。　自ら言ふ劇孟に似、門を叩いて緩急を知ると。

千金已散盡、白首空四壁。　千金、すでに散じ盡し、白首、空しく四壁。

烈士〔二〕歎暮年、老驥悲伏櫪。　烈士、暮年を歎じ、老驥、伏櫪を悲む。

妻孥眞敝屣、脫棄何足惜。　妻孥、眞に敝屣、脫棄、何ぞ惜むに足らむ。

四大〔三〕猶幻座、衣冠矧外物。　四大、猶は幻座、衣冠、矧んや外物。

一朝發無上〔四〕、願老靈山〔五〕宅。　一朝、無上を發し、願はくは、靈山の宅に老いむ。

世事子如何、禪心久空寂。　世事、子如何、禪心、久しく空寂。

世間出世間、此道無兩得。　世間出世間、この道、兩得なし。

故應入枯槁、習氣要除拂。　故らに應に枯槁に入るべく、習氣、除拂を要す。

丈夫生豈易、趣舍〔六〕志匪〔七〕石。　丈夫、生、豈に易からむや、趣舍、志、石に匪す。

當爲獅子吼〔八〕、佛法無南北〔九〕。　當に獅子吼を爲すべし、佛法に南北なし。

【字解】〔一〕劇孟　漢書游俠傳に「洛陽の人なり、周人は商賈を以て資となし、劇孟は俠を以て顯はれ、大に朱家に類し、しかも、博を好んで少年の戲多し」とある。〔二〕烈士　この二句は、曹操の老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已に本づいたので、前に和記聞中草木及び和晁同年の諸詩中に註して置いた。〔三〕四大　地水火風、圓覺經に「四大、假りに合して、幻軀を成す」とある。〔四〕無上　法華經に「無上兩足尊」とあり、楞嚴經に「反聞聞自性、性成無上道」とある。〔五〕靈山　卽ち靈鷲山。〔六〕趣舍　漢書司馬遷傳に「趣捨路を異にす」とある。これに向ふと棄てて顧みざると。〔七〕匪石　詩經に我心匪石とある。〔八〕獅子吼　佛の音を發することを喩へて云ふ。〔九〕南北　山公註に「傳燈錄、梁武の通天元年、達磨、西土より來る、初祖となす。嗣可な二顯

となし、僧璨を三祖となし、道信を四祖となし、宏忍を五祖となし、慧能を六祖となす。中華五祖の下より、曹溪六祖を南宗となし、神秀大師を北宗となす。又六祖曰く、人に南北あり、佛性豈に然らむや」とあつて、支那に於ける禪宗の二大分派を云ふ。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】君は、むかし少年の日に於て、豪氣は、里閭の俠者を蓋ふべく、自ら古しへの劇孟に似たりと稱し、急變があれば、乾度、門を扣いて呼び出しに來る位。千金の財產も、すでに散じ盡し、白髮頭になると、四壁空しく、家に一物もない。さはれ、烈士は暮年を嘆じ、老驥は槽櫪の間に居ることを悲むといふが、君も又何か仕出來さうといふので、妻子を見ること、敝屣の如く、容捨なく之を打ち棄て、今度は愈よ出家された。元來、四大相結んで幻形を成し、まして、衣冠の如きは、外物に過ぎぬ。そこで、一朝、無上の願を發して、靈鷲山に老いむことを希望して居る。世事は、君に對して如何であるか、禪心は久しく空寂にして、全く之と相關せざるが如くである。世間と出世間と、いづれにしても、佛道は容易に得られぬから、故らに、枯槁に入つて、從來、世俗の習氣は、すべて拂ひ除けなければならぬ。大丈夫の生を爲すこと、決して易からず、その取舍に就いては、石に非ずとも志の確固たるを要する。されば、君は獅子吼をなして、衆俗を警醒すべく、禪家に於ける南北の區別などは、瑣瑣たることで、もとより、拘泥するには及ばない。

【餘論】紀昀は「詩自ら老健、しかも甚しく出色の處なし」といつて居る。

贈二王觀一

王觀に贈る

何人生得寧馨子(一)。　何人か生み得たる寧馨の子、

今夜初逢掣筆郎(二)。　今夜、初めて逢ふ掣筆の郎。

莫レ怪圍碁忘二瓜葛一(三)。　怪む莫れ、圍碁、瓜葛を忘るるを、

已能作レ賦繼二靈光一(四)。　すでに能く賦を作つて靈光を繼ぐ。

【字解】【一】寧馨　何物の老嫗か、この寧馨兒を生むといつて、王衍の故事。前に平山堂の詩中に注して置いた。寧馨は「この」といふ義。【二】掣筆郎　王獻之が書法を得て居た故、その字を書く時、父の羲之が筆を引き拔かうとしたが、どうしても取れなかつたといふことで、前に趙景貺求二榜銘一の詩中に注して置いた。【三】忘瓜葛　親族關係を忘れる。世說に「王長豫、幼にして便ち和令、丞相、愛恣甚だ篤し。共に碁を圍むごとに、丞相擧行せむと欲す、長豫、指を按じて聽かず。丞相笑つて曰く、詎ぞ、爾、相與に瓜葛あるに似たるを得むや」とある。【四】靈光　文選の註に「王延壽、字は文考、雋才あり、魯に游んで靈光殿賦を作る。後、蔡邕、亦た此を造らむとし、作つて未だ成らず、延壽の爲るところを見るに及びて、甚だ之を奇とし、遂に翰を輟めて止む」とある。

【題義】一本には、贈二王志仲幼子觀一としてあるが、志仲・觀の二人、ともに如何なる人か分からぬ。

【詩意】誰が此の如き英才の子を生んだのであるか、今夜、初めて逢つた處が、その書法に達したことは、かの王獻之にも比すべきものである。王長豫が碁を打つに際し、瓜葛の親をも忘れて、遠慮なく敵手の丞相を攻め立てたのも、不思議はないので、君は、王延壽の靈光殿賦に繼ぐ樣な傑作を遠慮なく出すことが出來るに違ひない。

【餘論】この詩は、相手が王觀だから、四句ともに、王氏の故事を用ひたので、流石に腹笥の宏富を

見るべきも、實は應酬の文字で、格別の者でもない。

蘇東坡詩集 卷三十七

古今體詩 五十一首

東府雨中別子由

東府雨中、子由に別る

庭下梧桐樹。三年三見汝。
庭下梧桐の樹、三年、三たび汝を見る。

前年適汝陰〔一〕。見汝鳴秋雨。
前年、汝陰に適き、汝の秋雨に鳴るを見る。

去年秋雨時。我自廣陵〔二〕歸。
去年、秋雨の時、われ廣陵より歸る。

今年中山〔三〕去。白首歸無期。
今年、中山に去り、白首歸る期なし。

客去莫歎息。主人亦是客。
客去るも歎息する莫れ、主人亦た是れ客。

對牀定悠悠。夜雨空蕭瑟。
對牀、定めて悠悠、夜雨、空しく蕭瑟。

起折梧桐枝。贈汝千里行。
起つて梧桐の枝を折つて、汝に贈つて、千里に行く。

歸來知健否。莫忘此時情。
歸り來つて、知る健なりや否や、忘るる莫れ此時の情。

【字解】〔一〕汝陰　潁州を云ふ。〔二〕廣陵　揚州を云ふ。〔三〕中山　定州を云ふ。

【題意】東府は樞密院、卽ち西府に對して三省を云ふので、ここでは禮部を指したのである。この詩は、元祐八年九月、東坡が定州軍州事の任に知とし、同月、赴任するに就いて、禮部に於て雨中 弟の子由に別れむとして作つたのである。

【詩意】三省の庭前には、桐の樹があつて、三年の間、三たび汝を見た。前年は、潁州に行く時、汝が秋雨の中に在つて葉の鳴るのを見たし、去年は揚州から歸つたが、矢張、秋雨のそば降る日であつたし、ここに定州に赴任せむとして、白髮頭の予は、何時歸るとも分からない。桐よ、客が去つたとて、歎息するにも及ばないので、主人たる汝も、やがて、知らぬ人人と居れば、矢張、客の樣であらう。弟の子由とは、對牀の約があつたが、その期、悠悠として知るべからず、夜雨のみは、いつもながら、空しく蕭瑟として響いて居る。そこで、やをら身を起して、桐の枝を折り、それを汝子由に贈りし後、予は、千里の旅路に上る積りである。歸つて來て、予は、果して健なりや否や、もとより豫知すべからざれども、願はくは、此時の情を忘れないで居て貰ひたい。

【餘論】乾隆御批には「空清、話の如く、しかも、情味窮まりなし。これ前の初秋寄二子由一の一章に較ぶれば、尤も神品に入る」とあり、紀昀は「愈よ瑣屑、愈よ眞至、愈よ曲折、愈よ爽朗、これを興到るの作となす」といつたが、王文誥は「但し、此篇大に慨慷あり、故に語亦た激昂の甚しき、興到るの謂に非ざるなり。朝辭赴二定州一狀を讀まずして、この詩を論せむと欲するは難し」といつて居る。

謝運使仲適座上送二王敏仲北使一

謝運使仲適の座上、王敏仲の北に使するを送る

衡風振二河朔一。飛霧失二太行一。
衡風、河朔を振ひ、飛霧、太行を失ふ。

相逢不二相識一。下レ馬須眉黃。
相逢うて相識らず、馬を下れば須眉黃なり。

洗レ眼忽驚笑。見二此玉節郞一。
眼を洗うて、忽ち驚笑、この玉節郞を見る。

喜有二賢主人一。共惜二殘燭光一。
喜ぶ賢主人あつて、共に殘燭の光を惜むを。

聚散一夢中。人北雁南翔。
聚散一夢の中、人は北して雁は南に翔る。

吾生如レ寄耳。送レ老天一方。
吾が生、寄の如きのみ、老を送る天の一方。

幸子遇二明主一。陳レ經入二西廂一。
幸に、子は明主に遇ひ、經を陳して西廂に入る。

歸期不レ可レ緩。倚相宜レ在レ旁。
歸期、緩くすべからず、倚相、宜しく旁に在るべし。

【字解】〔一〕太行　山名、唐地理志に「懷州河內縣に太行山あり」と見ゆ。〔二〕玉節郞　王註に「沈括云ふ、古しへの節は今の虎符の如し」とあり、周禮に「邦國に守たるものは玉節を用ふ」とあるから、玉節は、地方牧守の證信であらう。〔三〕陳經　經筵に侍すること。〔四〕西廂　漢書顏師古註に「西清は西廂淸淨の處」とあるから、殿西に在つて物靜かなる處と見える。〔五〕倚相　左傳昭公十二年に見え、楚の左史で、能く三墳五典九邱八索を讀んだ。

【題意】前人の註に「謝仲適は爵里失考」とあるが、查註には、續通鑑長編、元祐八年二月に「淮南

等路發運副使謝卿材、相州に知たり」とあるから、大方、その人で「先生、大梁より定州に赴く、必す相州を經、詩中敍するところは、途次相値ふの語、疑ふらくは、卿材、卽ち仲適」とあつて、馮應榴は、王昶の金石粹編を見ると「益す確然として信ずべし」といつて居る。王敏仲は、施註に「名は古、文正公旦の曾孫、進士に第し、熙寧中、司農主簿となり、諸路に歷仕し、入つて郞となり、太常少卿に進み、使を契丹に奉じ、戶部郞中に遷り、尋いで、集賢修撰を以て、江淮發運使となり、寶文閣待制に進み、廣州に知となり、崇寧黨籍、朝散郞に復し、以て歿す。先生の惠州に謫せらるる、敏仲、適ま廣恩に帥たり、意、倍す厚く、餽問虛月なし、往還の書帖、集中に載す」とある。この詩は、東坡が定州に赴く途中、謝仲適の歡迎宴上に於て、王敏仲に遇ひ、その契丹に使するを送つて作つたのである。

【詩意】衝くが如き勢ある烈風は、河朔の地を振ひ、霧は飛び迷うて、太行の山も見えぬ位。相逢うても、一寸分からず、馬を下れば、沙塵を浴びて、鬚眉ともに黃色に成つて居る。そこで、眼を洗つて、やツと、それと分かり、玉節を以て北に使する王君と知つては、一たびは驚き、一たびは笑つた。幸ひ、ここに賢主人があつた爲に、同じく宴に列し、殘燭の光消ゆるを惜むまで飮み續けた。人生の聚散は、一夢の中であつて、人は北に赴き、雁は南に翔ける。加ふるに、吾が生は、寄寓せるものの如く、今度、定州に赴任し、そこで、老年を送ることに成つた。幸にも、君は、明主に遇ひ、西廂に入つて經筵に侍する身分であるから、歸期緩くすべからず、早く立ち戻るが善いので、古しへの左史倚相に比すべき君は、常に天子の御側に居なければならぬ。

【餘論】紀昀は「起し得て精神」といひ「北方風沙中を經行するに非ざれば、四句、黃字の妙を知らず」といつて居る。

書丹元子所示李太白眞

丹元子の示すところの李太白の眞に書す

天人幾何同一漚(一)。
謫仙(二)非謫乃其游。
麾(三)斥八極隘(四)九州。
化爲兩(五)鳥鳴相酬。
一鳴一止三(六)千秋。
開元有道爲少留。
縻之不可矧肯求。
西望太(七)白橫峨(八)岷。
眼高四海空無人。

天人、幾何か同一の漚、
謫仙、謫に非ず、乃ち其游。
八極を麾斥して九州を隘しとし、
化して、兩鳥となつて、鳴いて相酬ゆ。
一鳴一止、三千秋、
開元、道あり、爲に少しく留まる。
これを縻する不可、矧んや肯て求めむや。
西に望む、太白の峨岷に橫ふを、
眼高くして四海空しく人なし。

【字解】〔一〕一漚　前に九日黃樓、及び龜山辨才の諸詩中に注して置いた。〔二〕謫仙　前に讀杜詩の詩中に注して置いた。〔三〕麾斥八極　八極は八方、莊子に「夫れ至人は、上、青天を闚ひ、下、黃泉に潛み、八極を揮斥し、神氣變ぜず」とある。〔四〕隘九州　曹植の七啓に「六合を狹しとして、九州を隘しとするが若きに似たり」とある。〔五〕兩鳥　李白の大鵬賦に大鵬が希有鳥に遇ふことを記し、大鵬を以て自ら比し、此二禽、已登於寥廓、而斥鷃之輩、

大兒[九]汾陽中令君。　大兒は汾陽中令君、
小兒[一〇]天台坐忘身。　小兒は天台坐忘の身。
平生不識[一一]高將軍。　平生、識らず高將軍、
[一二]手汚吾足乃敢瞋。　手、吾が足を汚すも乃ち敢て瞋らむや。
作詩一笑君應聞。　詩を作つて一笑、君、應に聞くべし。

空見笑於濫藤」とある。【六】三千秋　韓愈の詩に「雙鳥海外來、飛飛到中州、一鳥落城市、一鳥集巖樹、不得相伴鳴、爾來三千秋、還當三千秋、更起鳴相酬」とある。【七】太白　鳳翔の南に在る山。【八】峨岷　峨眉山と岷山。【九】汾陽中令君　唐書李白傳に「はじめ、幷州に游び、郭子儀を見て之を奇とす。子儀、かつて法を犯す、白、爲に救免す。白が氷王璘の敗に坐して誅に當するに及び、子儀、請うて官を解き、以て贖ふ」とある。子儀は、中書令となり、汾陽王に封ぜられた。中書令は、往往略して中令と稱する。【一〇】天台坐忘身　大鵬賦の序に「予、むかし、江陵に於て天台の司馬子微を見る、謂ふ、余に仙風道骨あり、ともに八極の表に神游すべし」とある。【一一】高將軍　唐書高力士傳に「開元の初、右監門衞將軍を加へ、天寶七載、驃騎大將軍を加へらる」とある。【一二】手汚吾足　唐書李白傳に「かつて、帝に侍して醉ひ、高力士をして、靴を脫せしむ。力士、素より貴く、これを恥ぢ、その詩を摘んで、以て楊妃を激す。帝、白を官せしめむと欲す。妃、輒ち沮んで止む」とある。

【題義】この詩は、丹元子の示した李太白の像に題したのである。丹元子は、前に見えて居た。

【詩意】世の常ならぬ天人は、決して、同一浮漚の果敢ないものではない。謫仙と稱せらるる李白は、この世に降謫したのではなく、即ち一寸遊びに來たのである。そこで、八極を麾き、九州を隘しとし、司馬子微と共に、化して大鵬・希有鳥の二鳥となり、鳴いて相酬いて居たが、一たび鳴くも、一たび止むも、ともに三千年を要する。ここに、唐の開元年中は、有道の世であつたから、しばらく留まつて居たが、これを繫ぎ留めることさへ出來ぬ位だから、まして、之を探し出すことは、愈よ六つかしい。西に望めば、太白山は、峨岷二山の前に橫はり、峨眉は、故郷の山だけに、一番高い。これと同じく、李白は、眼高くして、四海に人もない位。その知己として、大兒は汾陽王中書令の郭子儀、小兒は天台に於て坐忘の法を行ひ澄まして居る司馬子微と、唯だ二人があるばかり。平生、高將軍などは、顏も知らぬから、靴を脫がすとて、その手で吾が足を汚したが、怒つて叱りつける價値もない。予は、今この詩を作つて、一笑するが、もし李白にして靈あらば、定めて、聞いて居るであらう。

【餘論】この詩は、七句換韻で、一寸珍らしい。乾隆御批には「筆歌墨舞、實に手、白日を弄し、頂、青穹を摩するの氣あり、概ね白の寫照となすに足る」とあり、又「後人、詩を刊し、この詩を將て、分つて兩首となすものあり、特に平韻承接の故を以てす。然れども、分てば、氣象昌ならず、豈に惟だ詩法を諳んぜざるのみならむ、且つ其佳處を併せて之を失ふ。集內、儋州夜夢の一詩を觀るに、なほ此體を用ふ、以て證となすべし」とあり、紀昀も、略ぼ同じ事を言つて居るが、くだくだしいから、ここには、引抄を見合はせる。

次韻曾仲錫承議食蜜漬生茘支

曾仲錫承議の蜜漬生茘支を食ふに次韻す

代北寒虀擣韭萍。　代北の寒虀、韭萍を擣く、
奇葩零落似晨星。　奇葩零落、晨星に似たり。
逢鹽久已成枯腊。　鹽に逢うて、久しく已に枯腊を成す、
得蜜猶疑是薄刑。　蜜を得て、猶は疑ふ是れ薄刑。
欲就左慈求拄杖。　左慈に就いて拄杖を求めむと欲す、
便隨李白跨滄溟。　便ち李白に隨つて滄溟に跨る。
攀條與立新名字。　攀條、與に立つ新名字、
兒女稱呼恐不經。　兒女の稱呼、恐らくは不經。

【字解】【一】寒虀　虀はあへもの。【二】韭萍　萍は水草。【三】奇葩　茘支の實を云ふ。【四】逢鹽　蔡君謨の茘支譜に「紅鹽は、鹽梅を以て、佛桑花を浸して紅漿となし、茘枝を投じて之を漬し、曝乾すれば、色紅にして甘酸」とある。【五】枯腊　腊は乾からびたるもの、ひもの。【六】得蜜　茘支譜の續きに「蜜にて煎るものは、生茘支を剝ぎ、その漿を笮去し、然る後、蜜もて之を煎煮す」とある。【七】薄刑　禮記月令に「薄刑を斷つ」とある。【八】左慈　神仙傳に「孫討逆、左慈を見て之を殺さむと欲し、馬前に行かしめ、後より之を刺さむと欲す。慈、木屐を著け、一竹杖を拄へ、徐徐として行く。討逆、鞭を著け、馬を策つて之を逐ふ、終に及ぶ能はず」とある。【九】李白　その作に係る臨江節士歌に「安得倚天劍、跨海斬長鯨」とある。【一〇】攀條　茘支の樹を攀ぢる。【一一】新名字　東坡の自註に「俗に十八娘茘支あり」と記し、茘支譜に「十八娘は、色深紅にして細長、時人、少女を以て之に比す。俚傳、閩王氏の女あり、第十八、好んで、この品を啖ふ、因つて名づく。その冢は、城東報國禪院に在り、冢傍、なほ此樹を種うといふ」とある。

【題義】施註に「曾仲錫は溫陵の人、時に定武の倅なり」とあり、査註に「費袞の梁溪漫志、左右正言太學國子博士、皆承議郎たり、文散官、第七品」とある。この詩は、承議郎曾仲錫が蜜漬の生茘支を食つた詩を作つたから、それに次韻したのである。

【詩意】代の北邊で出來るあへものは、韭や萍を擣き込んで、茘支を漬け、その實は、ほんの少しばかりで、晨星に似て居る。茘支は、鹽漬にすると、久しうして、干からびて仕舞ひ、蜜に漬けると、皮を剝ぐから、薄刑に逢つた樣なものである。これを食へば、仙術を得て、左慈から、その突いて居る杖を貰はうといふ氣になり、又李白に隨ひ、大海原に跨つて長鯨を斬らうと思ふ。枝を攀ぢて眺め廻した結果、十八娘といふ新名字を考へ出したが、女らしい稱呼は、恐らくは、荒唐不經といはれるかも知れない。

【餘論】査初白は「難題を以て險韻を押す、未だ牽强、跡を著くるを免れず」とある。

大行太皇太后高氏挽詞二首

大行太皇太后高氏の挽詞　二首

至矣吾三后。功高漢已還。　至れり吾が三后、功は高し漢已還。
復推元祐冠。蓋得永昭全。　復た元祐の冠を推す、蓋し永昭の全を得たり。
有作猶非聖。無私乃是天。　作あり、猶は聖に非ず、私なき、乃ち是れ天。

侍臣談道要。家法信家傳。　侍臣、道要を談す、家法、信に家傳。

【字解】〔一〕三后　章憲明肅皇后の仁宗を保佑する、慈聖光憲皇后の英宗を保佑する、及び今の大行宣仁聖烈皇后の元祐天子哲宗を保佑するを合稱す。〔二〕永昭全　永昭は仁宗の陵名。東坡の自註に「臣、かつて經筵に於て、仁宗皇帝の謚を論奏して、明孝といふ、もし明にして仁ならざれば、民、畏れて愛せず。仁にして明かならざれば、民、愛して畏れず、と。今、大行太皇太后、亦たこの二德を兼ぬ、故に天下思慕、仁宗に庶幾きなり」とある。〔三〕有作　莊子に「大聖は作らず、天地を觀るの謂なり」とある。〔四〕無私　禮記に「天、私覆なし」とある。〔五〕家法　東坡の自註に「宰相以下、かつて經筵に於て、祖宗以來の家法十餘事を論奏して、記註に書す」とある。

【題義】宋史に「元祐八年九月、太皇太后高氏崩す。九年、尊號を上つて宣仁聖烈太皇太后といひ、永祐陵に葬る、后は亳州の人、英宗の后なり」とある。大行は、新に崩御に成つて未だ葬らざる間を云ふ。

【詩意】仁英哲三代の皇后は、いづれも、至れるもので、その功高きことは、漢以後、他に類がない。ここに、大行太皇太后は、元祐年中の冠と稱すべく、蓋し、仁宗の全德を繼承されたもので、大聖は作らず、その私覆なきことは、さながら天に同じである。侍臣は、平生、先王の要道を講進したが、わが趙家の家法を早くも其家に於て傳へられたものであつた。

却狄安諸夏。先王社稷臣。　狄を却けて諸夏を安んず、先王は、社稷の臣。

固應祠百世。何止活千人。　固より應に百世に祠るべく、何ぞ止だ千人を活かすのみならむや。

定策天知我。忘家帝念親。　策を定めて天我を知る、家を忘れて帝親を念ふ。

萬方何以報。得疾爲勤民。　萬方、何を以てか報いむ、疾を得るは民に勤むるが爲なり。

【字解】〔一〕却狄　狄は北方の蠻族。〔二〕諸夏　中華の國國。〔三〕先王　太后の父高瓊を云ふ。〔四〕活千人　後漢書后紀紀に「鄧后は太傅禹の孫、父訓。后、かつて夢に天を捫す。后の叔父陔言ふ、かつて聞く、千人を活かすものは、子孫封ありと。兄訓、謁者使たり、石臼河を修し、歲ごとに千人を活かす。天道信ずべし、家、必ず福を蒙らむ」とある。〔五〕定策　王註に「宋の神宗、太后と議を定め、元祐天子哲宗を立つるなり」とある。〔六〕忘家　漢書賈誼傳に「人臣たるものは、主のみ身を忘る、國のみ家を忘る、公のみ私を忘る」とある。〔七〕萬方　帝國の版圖內を云ふ。

【詩意】太后の父高瓊は、北狄を却けて、中國を安んじ、仍つて社稷の臣と稱せられた位、もとより、百世に祠るべきもので、何も河を修治して、年ごとに千人を活かしたといふ位な事ではない。太后が策を定めて、今の天子を立てられたのは、天が深く相知つて居たからであるし、又國家の爲に、自分の家をも忘れられたから、天子が、特に親を念うて、恩惠を布かれたのも、尤も千萬の事である。天下の蒼生は、何を以てか太后に報ゆべき。その疾を得られたのも、全く民事に勤められたからだと聞くに至りては、まことに、かしこさの限りである。

再次韻曾仲錫荔枝

再び曾仲錫の荔枝に次韻す

柳(一)花著水萬浮萍。　柳花、水に著く、萬浮萍。
荔實周(二)天兩歲星。　荔實、周天兩歲星。
本自玉肌非(三)鵠浴。　本と自ら玉肌、鵠の浴するに非ず、
至今丹殼似(四)猩刑。　今に至つて、丹殼、猩の刑らるるに似たり。
(五)侍郎賦詠窮三峽。　侍郎の賦詠は三峽を窮め、
(六)妃子煙塵動四溟。　妃子の煙塵は、四溟を動かす。
莫遣詩人說功過。　詩人をして功過を說かしむる莫れ、
且隨香草附(七)騷經。　且つ香草に隨つて騷經に附せよ。

【字解】【一】柳花著水　東坡の自註に「柳は至つて成り易く、飛絮と成つて水中に落つれば、經宿、卽ち浮萍となる、荔枝は、至つて長じ難く、二十四五年、乃ち實る」とある。【二】周天兩歲星　杜預の左傳註に「歲星は、十二年にして一たび天を周る」とある。【四】鵠浴　莊子に「鵠は日ごとに浴せずして白く、烏は日ごとに黔せずして黑し」とある。【四】猩刑　猩猩が殺される、華陽國志に「永昌郡に猩猩あり、その血、朱罽を染むべし」とある。【五】侍郎　白居易を云ふ、その忠州に在る時、題＝郡中荔支＝の諸詩を作つた。【六】妃子　唐書に「楊貴妃、荔支を嗜む、必ず之を生致せむと欲し、乃ち騎を置いて傳送數千里、味、未だ變ぜずして、すでに京師に至る」とあり、杜牧の過＝華淸宮＝の詩に一騎紅塵妃子笑、無＝人知＝是荔支來＝とある。【七】騷經　離騷、その序に「離騷の文、詩に依り、興を取り、類を引いて譬喩す、故に善鳥香草、以て忠貞に配し、惡禽臭物、以て讒佞に比す」とある。

【題意】この詩は、前に見えた曾仲錫の荔支の七律に重ねて次韻したのである。

【詩意】柳の花が水に著けば、一夜にして、多くの浮萍となるが、荔枝は、歲星が兩たび天を周り、つまり二十四年たたねば、實を結ばない。その實は、玉の肌をなして、鵠が水に浴したのではなく、その殼は赤くして、猩猩が殺される時に血が流れる樣である。白居易の賦詠は、三峽の產を窮め盡し、楊貴妃は、使者を遣し、驛路に煙塵を起して、之を取り寄せた爲に、やがて、天下の喪亂を惹き起した。されば、詩人をして荔支の功罪を說かしむるに及ばず、差し向き、香草の後に隨つて、屈原の離騷に書き込んで善からうと思はれる。

【餘論】紀昀は「亦た牽强」といつて、例の如くけなして居る。

次韻滕大夫三首

滕大夫に次韻す　三首

雪浪石

雪浪石

太行西來萬馬屯。　太行、西より來つて萬馬屯す、
勢與(一)岱岳爭雄尊。　勢は岱岳と雄尊を爭ふ。
(二)飛狐上黨天下脊。　飛狐上黨は天下の脊、
半掩落日先黃昏。　半ば落日を掩へば先づ黃昏。
削成山(三)東二百郡。　削り成す山東の二百郡、

【字解】【一】岱岳　卽ち泰山、一名を岱宗といふ。【二】飛狐上黨　飛狐は地名、漢書に「白馬の津を杜ぎ、飛狐の口を塞ぐ」とあつて、一に飛狐道といふ。九域志に「河東路龍德府潞州上黨郡昭德軍節度使」とあり、釋名に「黨は所なり、山上に在つて、

氣壓代(四)北三家村。　氣は壓す代北三家の村。
千峰右卷矗牙(五)帳。　千峰、右に卷いて牙帳矗たり、
崩崖鑿斷開土(六)門。　崩崖、鑿斷して土門を開く。
揭來城下作飛石。　揭來、城下に飛石となり、
一礮驚落天驕魂。　一礮、驚き落す天驕の魂。
承平百年烽燧冷。　承平百年、烽燧冷かに、
此物僵臥枯榆根。　この物、僵れて臥す枯榆の根。
畫師爭摹雪浪勢。　畫師、爭ひ摹す雪浪の勢、
天工不見雷(七)斧痕。　天工、見ず雷斧の痕。
離(八)堆四面繞江水。　離堆四面、江水を繞らし、
坐無蜀士誰與論。　坐に蜀士なく、誰と與に論せむ。
老翁兒戲作飛雨。　老翁兒戲、飛雨を作し、
把酒坐看珠跳盆。　酒を把つて坐して看る珠の盆に跳るを。
此身自幻孰非夢。　この身、自ら幻、孰れか夢に非ざらむ、
故國山水聊心存。　故國の山水、聊か心存す。

その所、最も高し、故に上黨といふ」とある。【三】山東二百郡　王註に「古しへの謂はゆる山東は、乃ち今の河北、晉地、是れなり。今謂はゆる山東は、乃ち古しへの齊地、青齊、是れなり。杜牧云ふ、山東、王、王たらざるを得ず、覇、覇たらざるを得ずと。今の河北を指すなり。これを山東といふは、蓋し太行山の東なり。山東二百郡は、正に太行以東、冀州の域を謂ふ。杜子美の詩、漢家山東二百州、千村萬落生荊杞」とある。【四】代北三家村　王詩に、「代北は、即ち燕趙以往の地なり。傳燈錄、僧、竟脫和尚に問ふ、如何か佛法商。曰く、三家村裏」とある。【五】牙帳　大將の居る軍帳。【六】土門　太平寰宇記に「井陘口、今土門口と名づく、即ち太行八陘の第五陘なり」とあり、困學紀聞に「土門口は、饒州鄱陽縣に在り、即ち井陘關なり」とある。【七】雷斧　陳藏器の本草に「霹靂鍼、雷處を伺候し、地を掘ること三尺、これを得、その形、一に非ず、亦た斧刃に似たるものあり」といひ、國史補に「雷州に雷多し、秋冬、地中に伏す、人、雷斧・雷墨を取り得れば、以て藥用と爲すべし」とある。【八】離堆　漢書溝洫志に「蜀守李氷、離堆を鑿つて沫水の害を避く」とある。

【題義】續通鑑長編に「元祐四年十二月、濟州通判滕希靖、管勾して徐州呂梁、百步兩洪、月河石隄を開修す」とある。雪浪石は、本集の雪浪齋銘の引に「予、中山の後圃に於て、黑石白脈を得たり。蜀の孫位・孫知微、畫くところの如し。石間の奔流、水の變を盡す。又白石曲陽を得、大盆を爲り、以て之を盛り、水を其上に激し、その室を名づけて、雪浪齋といふ」とある。ここに載する三首の詩は、ともに滕希靖に次韻したので、その中、前二首は、東坡が自ら藏する雪浪石に係るのである。

【詩意】太行の山脈は、西より來つて、萬馬の屯するが如く、その勢は、泰山と雄尊を爭ふ位。飛狐上黨は、天下の脊梁であつて、山が夕日を半ば掩へば、第一に黃昏がれて仕舞ふ。山勢は、晉地の二百郡を削り成し、その氣は、代北に散點する小さい村どもを壓迫する。そして、千峰は、右に卷いて定州の牙營の前に矗立し、崩れたる懸崖は、眞中から鑿斷して、土門口を開いて居る。ここに、城下に來つては飛石となり、石弩から射放たれて、天の驕子と稱する胡虜の魂を驚かして落さしめたことがある。今や、太平が百年も打續いて、烽火冷かにして、絕えて警を報せず。この石どもは、枯れた榆の木の根に倒れて轉がつて居る。畫かきどもは、これを水盆に入れて置くと、雪浪の如く見える其

有樣を爭つて摹寫して居るが、天工を以て目すべき雷斧などは、痕跡だに認められない。たとへば、離堆といふ石が岷江に在つて、四面、江水で圍繞せられたるに似て居るが、座上に、蜀人が居ないから、詳しく之を論することが出來ない。ここに、老翁たる予は、子供の眞似をして、水を飛雨の如く仕かけて其石に注ぎかけ、酒を把つて、珠の盆中に跳るを看惚れて居る。この身は、自然幻中に在つて、いづれか夢に非ざるべき、ただ夢の中に在つては、故國たる蜀中の山水に聊か心を留めて、決して忘れることが出來ない。

【餘論】乾隆御批には「勁氣斷つべからず、來れば山岑競ひ舉がり、止まれば壁岸階なし」とあり、査初白は「定州の形勢より說き起し、突兀空を撐ふ」といひ「看他す、脫卸出落、便捷、轉丸の如きを」といひ、紀昀は「語語挺拔」といひ「一晚に深山中を行けば、乃ち第四句の工を知る」といひ「勢、須らく宕開して、結を作すべし」と云つて居る。

我頃三章乞越州。　われ頃ろ、三章、越州を乞ふ、
欲尋萬壑看交流。　萬壑を尋ねて交流を看むと欲す。
且憑造物開山骨。　且つ造物に憑つて山骨を開き、
已見天吳〔一〕出浪頭。　すでに見る天吳の浪頭を出づるを。
履道〔二〕鑿池雖可致。　履道、池を鑿つて、致すべしと雖も、
玉川〔三〕卷地若爲收。　玉川、地を卷いて、若爲か收めむ。
洛陽泉石今誰主。　洛陽の泉石、今誰か主、
莫學癡人李與牛〔四〕。　學ぶ莫れ、癡人の李と牛とを。

【字解】〔一〕天吳　東坡の自註に「石中、海獸の形狀に似たるあり」といひ、山海經に「朝陽の谷、神を天吳といふ、これを水伯となす、その獸たるや、八首人面、八手八尾」とある。〔二〕履道　唐書白居易傳に「東都居るところの履道里、沼を疏し、樹を種ゑ、石樓を香山に構へて、八節灘を鑿つ」とある。〔三〕玉川　盧仝自ら玉川子と號す、作客謝井詩に云ふ、我鑿有神力、争敢誇公歸、揚州惡百姓、疑我卷地皮」とある。〔四〕李與牛　王註に「牛僧孺、太湖石を嗜み、小大あり、その數四等、甲乙丙丁を以て之を品し、每品上中下あり、各石陰に刻して牛氏石といふ。又、李德裕の平泉莊、洛陽の南に在り、周四十里、奇花異石多し。人、詩を題して曰く、隴右諸侯供瑞石、日南太守送名花」とある。

【題義】これも前首と同題である。

【詩意】われは、頃ろ三たび上書して、越州に移されむことを乞うたが、それは會稽に萬壑を尋ねて、その交流するを見むが爲である。山骨を開くことは、造物に憑るの外ないが、怪獸の形せる天吳の浪頭に出るのは、すでに此石に於てさへ見ることが出來る。今、ここ定州に於ては、白居易が履道里の邸中に池を掘つた位のことは出來るが、盧仝が地皮を卷くと疑つたことは、如何にして其功を收むべき。そこで、この石を得たのは、勿怪の幸で、少しく自ら慰めることが出來る。首を回らせば、洛陽の泉石は、今誰の所有に歸したか知らぬが、當日、癡人と云はれさうな李德裕・牛僧孺の如く、極力石を聚めて見たところで、何の效果も無からうと思はれる。

【餘論】紀昀の評に「前の古詩、すでに是れ絶唱、この首、便ち蛇足たり」とあつて、至極尤もである。

沈香石

壁立孤峰倚硯長。
共疑沈水(一)得頑蒼。
欲隨楚客紉(二)蘭佩。
誰信吳兒(三)是木腸。
山下曾逢化松石(四)。
玉中還有辟邪香(五)。
早知百和(六)俱灰燼。
未信人言弱勝剛(七)。

沈香石

壁立孤峰、硯に倚つて長し、
ともに疑ふ、沈水の頑蒼を得たるを。
楚客に隨つて、蘭佩を紉せむと欲す、
誰か信せむ、吳兒は是れ木腸なるを。
山下、かつて逢ふ化松石、
玉中、還た辟邪香あり。
早く知る、百和ともに灰燼、
未だ信せず、人は言ふ、弱、剛に勝れりと。

【字解】【一】沈水　施註に「唐本草註、沈水香は、天竺・單子の二國に出で、樹葉は橘に似て、多を經るも凋まず、皮色青く、木は欅柳に似て重實、沈水とは是れ」とある。【二】紉蘭佩　前に和二鄒同年一の詩中に注して置いた。【三】吳兒是木腸　前に送二張職方一、及び復次二放魚韻一の詩中に注して置いた。【四】化松石　陸龜蒙の二遺詩の序に「東陽に名山多く、就中、金華を最となす。その間、古松饒く、往往化して石となる、杜林應、皆其石なり」とあり、舊唐書に「俱骨の東境、その地、東西一千里、廉子河あり、松木、水に入り、一千年、乃ち化して石となる。その色青、これを廉子石といふ、上に松文あり」と見ゆ。【五】辟邪香　王註に「唐の肅宗、李輔國に香玉辟邪二を賜ふ、各ゝ高さ一尺五寸、奇巧殆んど人工に非ず、その玉の香、數百歩に聞こゆ」とある。【六】百和　香の名、種種の香料を調合して造るものと見える。古詩に博山鑪中百和香とあり、杜甫の詩に花氣渾如二百和香一とある。【七】弱勝剛　老子に「弱の僵に勝つ、柔の剛に勝つ」とある。

【題義】沈香石は、諸家の註を缺いて居るが、香木の化石であらう。

【詩意】この石は、孤峰壁立、硯の前に倚りかかり、餘勢長く延いて居る。どうして、水に沈む香木が、頑蒼を得て、かういふ石に化したのか。香なほ殘れるが故に、屈原が蘭を紉した樣に之を佩としやうと思つたこともあるし、吳兒、人情を解せず、その腸は木石であるといふことは、決して信せられない。山中で、松の化石を得たこともあるし、辟邪香と名づくる美玉があることも、かねて聞き及んで居る。しかし、百和の香に撞き交せられし後、焚かれて灰燼となることは、言ふまでもなく、老子が柔、剛に勝るといつたのも、あまり、あてには成らぬ樣である。

【餘論】紀昀は「五六、事を用ふること細切」といつて居る。

石芝

予嘗夢食石芝、作詩記之、今乃眞得石芝於海上、子由和前詩見寄、予頃在京師、有鑿井得如小兒手以獻者、臂指皆具、膚理若生、予聞之隱者、此肉芝也、與子由烹而食之、追記其事、復次前韻。

石芝

【訓讀】予、かつて夢に石芝を食ひ、詩を作つて之を記す。今乃ち眞に石芝を海上に得たり。子由、前詩に和して寄せらる。予、頃ろ京師に在り、井を鑿つて、小兒の手の如きを得て以て獻するものあり、臂指皆具はり、膚理生くるが若し。予、これを隱者に聞く、これ肉芝なりと。子由と烹て之を食ふ。その事を追記して、復た前韻に次す。

土中一掌嬰兒新。　土中の一掌、嬰兒新なり、
爪指良是肌骨勻。　爪指良に是れ肌骨勻す。
見之怖走誰敢食。　これを見て怖走、誰か敢て食はむ、
天賜〔一〕我爾不及賓。　天、我爾に賜うて、賓に及ばず。
〔二〕旌揚遠遊同一許。　旌揚遠遊、同一の許、
〔三〕長史玉斧皆門戶。　長史玉斧、皆門戶。
我家韋布〔四〕三百年。　わが家、韋布三百年、
祇有陰功不知數。　祇だ陰功あつて數を知らず。
跪陳八〔五〕蓋加六瑚。　跪いて、八簋を陳して、六瑚を加ふ、
〔六〕化人視之眞塊〔七〕蘇。　化人、これを視れば、眞に塊蘇。

【字解】〔一〕我爾　爾我に同じ、おのれと子由とを併稱す。〔二〕旌揚遠遊　許遜と許邁、王註に「許眞君、名は遜、汝南の人、世、道を慕うて、旌揚縣尹となる。又、許邁、道を蓋竹山に得て、地行の仙となる、邁、字は遠遊」とある。〔三〕長史玉斧　許穆と許翽、王註に「許穆、晉の護軍長史となり、華陽洞に入つて道を得、左卿仙侯となる。穆の第三子翽、小名は玉斧、帝の侍晨となるなり」とある。〔四〕韋布　布衣韋帶の略。〔五〕八簋加六瑚　禮記に「有虞氏の兩敦、夏后氏の四璉、殷の六瑚、周の八簋」とあり、詩經に陳饋八簋とあつて、數多く供へ物をすること。〔六〕化人　列子に見ゆ、仙人に同じ。〔七〕塊蘇　土塊と粗朶。〔八〕離胡　茨の實。〔九〕大藥　仙藥。

肉芝烹熟石芝老。　肉芝は烹熟して、石芝は老いたり、
笑唾熊掌嚬離〔八〕胡。　笑うて熊掌に唾して、離胡に嚬す。
老蠶作繭何時脫。　老蠶、繭を作つて、何の時か脫せむ、
夢想至人空激烈。　夢に至人を想うて、空しく激烈。
古來大〔九〕藥不可求。　古來、大藥、求むべからず、
眞契當如磁石鐵。　眞契、當に磁石の鐵の如くなるべし。

【題義】引の意味は——予は、かつて夢に石芝を食つたことがあつて、詩を作つて之を記した。今、石芝を海上に得ると、子由は、前詩に次韻して寄せられた。予は、先頃、汴京に居た時、井を掘るとて、小兒の手の樣なものを得たと云つて獻じたものがあつて、これを見ると、臂や指は、皆肌理が細かくて、丸で生きて居る樣である。予は、隱者より、此は肉芝だといふことを聞いたから、子由と共に、烹て食つて仕舞つた。そこで、その事を併せて追記し、仍つて、再び其韻に次したといふのである。肉芝は菌類、石芝は或種の鑛物であらう。抱朴子に「石芝は、海隅名山に生じ、赤きものは珊瑚の如く、白きものは截肪の如く、黑きものは澤漆の如く、靑きものは翠羽の如く、黃なるものは紫金の如く、皆光明洞澈、堅氷の如し」とある。

【詩意】土中から掘り出したのは、嬰兒の掌の如く、まだ生生しく、爪や指は、肌骨がはツきりして

居る。これを見るものは、怖れ走つて、誰も食ふものはないが、天が我と爾とに限つて賜はつたもので、賓客にまで分つことは出來ない。許遜・許邁、ともに同一許家の出であるし、許穆・許翽は一門の續き合で、矢張、かういふ肉芝などを食つて仙を得たものであらう。わが家は、布衣韋帶、出でて仕へざること三百年、しかし、陰德を施したことは、數を知らず、祭の時は、あらむ限の供へ物をするが、化人より視れば、土くれや粗朶も同樣、何の效果もないものである。然るに、われ等は、何の幸か、肉芝は烹て既に熟し、とはの昔に食つて仕舞つたが、石芝は、大分年を經た上品であつて、これを食へば、無上の美味と稱する熊掌をも唾すべく、菰の實などは、顔をしかめて、見向きもせぬ位。蠶は繭を作つて、何時、その中から脫け出るか。自分達も、早くこの體軀から蟬蛻したいものであつて、夢に至人を想うて、その情空しく激烈なるを覺ゆるばかり。むかしから、至上の仙藥は容易に求めることが出來ないので、その眞契は、磁石の鐵を吸ふが如く、全く自然の廻り合せである。

【餘論】紀昀の評に「灑落、次韻の跡なし」とある。

鶴歎

鶴歎

園中有鶴馴可呼。
園中に鶴あり、馴れて呼ぶべし、

我欲呼之立坐隅。
われ之を呼ばむと欲して、坐隅に立つ。

鶴有難色側睨予。
鶴に難色あり、側より予を睨す、

豈欲臆對如鵩乎。
豈に臆對、鵩の如きを欲するか。

我生如寄良畸孤。
わが生、寄の如く、まことに畸孤、

三尺長脛閣瘦軀。
三尺の長脛、瘦軀を閣く。

俛啄少許便有餘。
俛啄少許、便ち餘あり、

何至以身爲子娛。
何ぞ身を以て子の娛をなすに至らむ。

驅之上堂立斯須。
これを驅つて堂に上る、立つこと斯須、

投以餠餌視若無。
投するに餠餌を以てするも、視て無きが若し。

戛然長鳴乃下趨。
戛然長鳴、乃ち下り趨る、

難進易退我不如。
進み難く退き易きは、われ如かず。

【字解】〔一〕臆對如鵩　賈誼の鵩鳥賦に、鵩乃嘆息、擧首奮翼、口不能言、請對以臆とある。〔二〕畸孤　運命に惠まれずして孤立する。〔三〕斯須　須臾に同じ。〔四〕難進易退　禮記の表記に「君に事ふ、進み難くして退き易し」とあり、儒行に「其れ進み難くして退き易きなり、粥粥として能なきが若きなり」とある。

【題義】これは、病鶴に代つて、その苦悶の情を寫し出したのである。

【詩意】園中に鶴が飼つてあるが、よく人に馴れて、呼べば、すぐに來るので、予は之を呼ばうとして、坐隅に立つて居た。すると、鶴は、不承知の樣な氣色をなし、ながし目に予を睨んで居るが、自分で物が言へぬから、予をして、かの賈生の鵩鳥の如く、臆度して貰つて、答を爲さうとする樣に見

えた。われ鶴の生命は、寄寓するが如く、まことに運命にも惠まれず、且つ孤立して居る。今や病に罹つて、三尺の長い脛の足で痩せた體を支へて居るし、俛して啄んだ處で、ほんの少しばかりで、大部分は其儘殘して置く位。どうして、この身を以て、君の娛樂に供することが出來やうかと、かう言ふ積りらしく見える。そこで、これを追ひ立てて、堂に上らせると、暫時立つて居て、餌を投げて遣つても、丸で無きが如く、決して見向きもせず、やがて、戞然長鳴して、堂より走り下りた。その進むことを六つかしく思ひ、退くことを易しとし、仍つて、身を全うするに至りては、到底、予の及ぶところではない。

【餘論】乾隆御批に「われ此鶴に如かず、兟の作る所以なり。却つて、只だ結處一句に於て收住す。中に云ふ、豈欲臆對如鵩乎、乃ち疑うて鶴に問ふの詞。我生如寄の四句は、便ち直に鶴に代つて臆對の語を作す。章法奇絕、これを善く賈賦を學ぶ者となす」とあり、紀昀は「純ら是れ自ら末に託するに一語を以てす、點睛の筆墨、特に奇恣となす」といひ「覓仕妙、再び贅衍すれば、便ち香山の門徑に入らむ」といつて居る。これは、元とは病鶴の詩であつて、その病鶴たることは、三尺長脛閣瘦軀の一句に盡きて居る。唐子西語錄に「東坡、病鶴の詩を作り、かつて、三尺長脛瘦軀と寫し、その一字を闕き、任德翁輩をして之を下さしむ。數十字。東坡、徐に其稿を出す、蓋し閣の字なり、この字、すでに出でて、儼然、病鶴を見るが如し」とある。なほ、子西が題に病の字が見えぬのは、脫落では無からうかと云つて居るが、これは、必ずしも拘泥するに及ばぬことと思ふ。

送曾仲錫通判如京師

曾仲錫通判の京師に如くを送る

邊城歲暮多風雪。　邊城、歲暮れて風雪多し、
强[一]壓春醪與君別。　强ひて、春醪を壓して君と別る。
玉[二]帳夜談霜月苦。　玉帳、夜談じて霜月苦、
鐵騎曉出冰河裂。　鐵騎、曉に出でて冰河裂く。
斷蓬飛葉捲黃沙。　斷蓬飛葉、黃沙を捲き、
祇有千林鬖[三]鬆花。　祇だ千林鬖鬆の花あり。
應爲王孫朝上國。　應に王孫の爲に上國に朝すべし、
珠幢玉節與排[四]衙。　珠幢玉節、與に衙を排す。
左[五]援公孝右孟博。　左には公孝を援き、右には孟博、
我居其間嘯且諾。　われ其間に居て嘯き且つ諾す。
僕夫爲我催歸來。　僕夫、わが爲に歸るを催して來る、
要與北海春水爭先回。　北海の春水と先を爭うて回るを要す。

【字解】〔一〕壓春醪　壓は搾る。〔二〕玉帳　將軍の帳。〔三〕鬖鬆花　一に霧淞といひ、ひばなといひ、氷花といふ。日本では、高山では數ば見えるが、又諏訪湖附近では、毎毎この現象がある。王註に「曾子固云ふ、齊地寒甚し。夜氣、霧の如く、木上に凝る。旦に起つて之を視れば、雪の如し。日出づれば、飄つて庭階に滿つ、尤も愛すべしとなす」とある。〔四〕排衙　前に葉教授和潛字韻の詩中に注して置いた。〔五〕左援公孝　後漢書黨錮傳に「汝南太守宗資、功曹范滂に任じ、南陽太守成瑨、亦た功曹岑晊に任ず。二郡謠を爲つて曰く、汝南太守范孟博、南陽宗資主畫諾、南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】邊地は歲晩になると、まことに酷寒にして、風雪が多い。この時、春酒を搾り、いささか別筵を催して、君の京師に往くを送つた。玉帳の中、兵を談ずれば、霜夜の月冴えわたり、鐵騎が曉に出づれば、馬蹄に氷河を踏み裂くばかり。ちぎれた蓬や落葉は、黃沙を捲き起し、千林には、氷花が附著して、まことに見事である。君は、今回太守の爲に都に入朝するといふので、珠幢玉節を押し立て、役所に一ぱいになる位、やがて、しづしづと練り出して行く。左には岑晊あり、右には范滂あり、かういふ立派な下役が居れば、長官は、何も爲ないでも善いので、予は其間に在つて坐嘯し、且つ畫諾を爲すばかり、そこで、君が居ないと、萬事に差支へて困るから、僕夫は、わが爲に催促すべく、北海に注ぐ春水と同じく、先を爭つて、早く歸る樣にして貰ひたい。

和錢穆父送別、幷求頓遞酒

錢穆父の別を送るに和し、幷に頓遞酒を求む

(一)聯鑣接武兩長身。　聯鑣、武を接す兩長身、
(二)鵷鷺行中笑語親。　鵷鷺行中、笑語親む。
(三)九子羨君門戶壯。　九子、羨む君が門戶の壯なるを、
(四)八州憐我往來頻。　八州、憐む我が往來頻なるを。
佇聞(五)東府開賓閣。　佇み聞く、東府の賓閣を開くを、
便乞(六)西湖洗塞塵。　便ち西湖を乞うて塞塵を洗ふ。
更向(七)青齊覓消息。　更に青齊に向つて消息を覓む、
要知(八)從事是何人。　知るを要す、從事は是れ何人。

【字解】(一)聯鑣　くつわを並べる。(二)鵷鷺行　入朝する大官の行列。(三)九子　錢穆父は、この時九人の子があつた。(四)八州　王註に「先生、杭倅より徙つて密州に知とし、又徐に徙り、又湖に徙り、哲宗位に卽くに及びて、登州に知とし、元祐四年、杭に知とし、六年、潁に知とし、七年揚に徙り、ここに至つて、又定州に知とし、前後凡そ八州なり」とある。(五)東府　公孫弘が東閣を開いて、天下の士を延きしこと、前に次「韻王鞏」の詩中に注して置いた。(六)西湖　東坡は元と越州を乞うたのだから、鑑湖とあるべき處だが、對句の都合上、西湖といつたのである。(七)青齊　州名、山東地方。(八)從事　青州從事の略、卽ち酒を云ふ。

【題義】頓遞酒に就いて、査註には未詳とあるが、馮應榴の按には「續通鑑長編、眞宗景德三年九月、上、輔臣に謂つて曰く、明德皇后の園陵、所司を頓遞して、頗る人を擾す、詔して、宮掖及び諸王院一行の人數を取つて御廚に付し、徐に却掃を度らしむ。編官の制行はれし後、凡そ大禮は猶ほ唐の故事に準じ、五使を置き、橫道頓遞使は、京尹、これを爲す。惟だ頓遞司、例、酒を造つて、近臣に分餉す。京師、頓遞司の酒を稱して最も美なりと爲す」とある。すると、頓遞酒は、大膳寮で釀造する酒。この詩は、錢穆父の送別の詩に次韻し、且つ頓遞酒を求めたのである。

【詩意】君とは、くつわを連ね、歩武を接し、丈の高いもの同士、二人相竝んで、朝臣の行列中で、親しげに談笑して居た。君は、九人も子供があつて、門戶の壯なること羨むべく、予は、八州に歷

官して、往來が頻繁である。ほのかに聞けば、宰相は、東閣を開いて、天下の賢士を招くさうで、予は、この機に乘じ、西湖を乞うて轉任し、塞上の煙塵を洗ひ去りたいと思つて居る。もう一つ、青州從事、卽ち酒が欲しいので、山東地方に產するは、どういふ酒であるか、その消息を承はりたいものので、出來るならば、ここへも一つ屆けて貰ひたいと思つて居る。

劉醜厮詩

劉醜厮の詩

劉生望(一)都民。病羸寄空(二)窖。
劉生は望都の民、病羸、空窖に寄す。

有子曰醜厮。十二行操(三)瓢。
子あり、醜厮といふ、十二、行く〻瓢を操る。

墦(四)間得餘粒。雪中拾墮(五)樵。
墦間に餘粒を得、雪中に墮樵を拾ふ。

飢飽共生死。水火同焚漂。
飢飽、生死を共にし、水火、焚漂を同じうす。

病翁持一褐。度此積雪宵。
病翁、一褐を持して、この積雪の宵を度る。

哀哉二暴客。掣去如飢鴞。
哀しいかな、二暴客、掣し去つて飢鴞の如し。

翁既死於寒。客亦易(六)此韶。
翁、すでに寒に死す、客、亦た此韶を易る。

崎(七)嶇走亭長。不憚雪徑遙。
崎嶇として、亭長に走り、憚らず雪徑の遙なるを。

我仇祝(八)與苑。物色同遮邀。
わが仇、祝と苑と、物色同じく遮邀。

行路爲出涕。二客竟就梟(九)。
行路、爲に涕を出し、二客、竟に梟に就く。

譊譊訴我庭。慷慨驚吾僚。
譊譊として、わが庭に訴へ、慷慨、わが僚を驚かす。

曰此可名(一〇)寄。追配郴(一一)之蕘。
曰く、これ寄と名づけ、郴の蕘に追配すべし。

恨我非柳(一二)子。擊節爲爾謠。
恨むらくは、われ柳子に非ず、節を擊つて爾の爲に謠ふ。

官賜二萬錢。無(一三)家可歸嬌。
官、二萬錢を賜ふ、家なきは、嬌に歸すべし。

爲嫦他日婦。婉然初垂髫(一四)。
他日の婦に嫦ふが爲に、婉然として、初めて垂髫。

洗沐作小史。褰(一五)頭束其腰。
洗沐して小史となり、頭を褰みて、その腰を束ぬ。

筆硯耕學苑。弓矢戰天驕。
筆硯、學苑に耕し、弓矢、天驕と戰ふ。

壯大隨爾好。忠孝福可徼(一六)。
壯大、爾の好に隨ひ、忠孝、福、徼むべし。

相國有折(一七)脇。封侯或吹(一八)簫。
相國に折脇あり、封侯、或は簫を吹く。

人事豈易料。勿輕此僬(一九)僥。
人事、豈に料り易からむや、この僬僥を輕んずる勿れ。

【字解】〔一〕望都　施註に「唐地理志、定州望都縣」とあり、太平寰宇記に「都山、一名豆山。堯母、これを望む。故に、望都の號あり」と見ゆ。〔二〕空窖　窖は瓦を燒く竈。〔三〕操瓢　乞食をする。〔四〕墦間　墓地。〔五〕墮樵　ちらばつて居る枯枝。〔六〕易此韶　この幼年の者を侮る。〔七〕崎嶇　路を行くに困難なる貌。〔八〕祝與苑　王註に「祝と苑とは、兩賊の名なり。物色とは、

その人を恐するの謂、韓退之桃源行、物色相猜更問語の如きなり」とある。【九】就戮　獄門に曝される。【一〇】名寄　新に名を定めて寄とする、なほ下項を見よ。【一一】郴之甥　郴州の草かり童。【一二】郴子　柳宗元、童區寄傳といふ一文があつて、之と略ぼ相似たる事實を記してある。【一三】無家可歸婦　婦は婦女、即ち新妻。家の無いのは、妻が無いからだといふ義。【一四】垂髫　幼年なる故、髪を束ねる。はじめて人らしく成る。【一五】裹頭束其腰　頭巾を戴き、腰帶を締める。【一六】可徵　求むべし。【一七】折脇　肋骨を折る。史記范雎傳に「雎、須賈に事ふ。賈、齊に使す、雎、從ふ。齊王、雎に金及び牛酒を賜ふ。雎、敢て受けず。賈以へらく、雎、魏國の陰事を以て齊に告げ、故に此饋を得たり、と。歸つて魏の相魏齊に告ぐ。魏齊、大に怒り、舍人をして雎を笞撃せしめ、脅を折り、齒を摺す。雎、佯り死して出づるを得、後亡げて秦に入り、拜せられて相となる」とある。【一八】吹簫　漢書周勃傳に「常に吹簫を以て喪事を給し、後、高祖に從つて、絳侯に封ぜらる」とある。【一九】僬僥　小倅、國語に「僬僥氏、長三尺、短の至なり」とあり、列子に「中州より以東四十萬里、僬僥國を得たり、人の長一尺五寸」とある。

【題義】　この詩は、東坡の見聞した事實を詠じたので、篇中の主人公の名を取つて、直に題にしたのである。

【詩意】　劉生は望都縣の民であるが、老病に罹つたから、不用に成つた瓦竈の中に住んで居た。子の名を醜廝といひ、年十二、乞食をして其親を養ひ、墓地に入つて、殘つて居る供へ物の飯を得たり、雪中に枯枝を拾ひなどして、わづかに生を保ち、父子二人、饑飽、生死を共にし、水火、焚溺を同じうする覺悟で居た。親爺は、病氣であるが、唯だ一枚の單衣を持つて居て、それで、雪の積れる冬の夜を凌ぐ積り。すると、暴客二人、不意に遣つて來て、さながら饑ゑた梟の如く、その單衣を奪ひ去つたから、親爺は凍えて死し、二客は、なほも、この幼年の者を侮つて、さまざまの惡戯をした。そこで、醜廝は、雪中の路の遠きを憚らず、とぼとぼと、辛くも亭長の處に驅け付け、祝苑二人は、わが父の仇であるといひ、因つて、詮議の結果、これを遮り迎へて召し取つた。行路の人人は、これを聞いて涙を流したが、二客は、遂に獄門に梟せられた。譊譊として、その事を、わが役所に訴へ來りしに因り、同僚は、驚いて慷慨した。われ思ふに、この醜廝といふ子供は、宜しく、寄と名づけ、そして、むかしの郴州の蕘牧兒に追配すべきものである。われは、當年の柳宗元に非ざるが故に、節を擊つて爾の爲に高歌することが出來ないのが、まことに殘念である。やがて、官より二萬錢を賜はつたが、まだ幼年で、妻もないことだから、家を構へることも出來ない。そこで、他日、いづれ女房を貰つて遣ることにして、初めて髫を垂れ、人なみの形となし、體も、髮も洗つて、府の小史に任用され、頭巾を戴き、腰帶を締め、追追、讀み書きを覺えて、學事に攜はり、又弓を射ることや、矛を揮り回すことを稽古して、胡人と戰ふべく、その孰れにすべきかは、もツと大きくなつた後に、隨意に選擇すれば善いので、もとより、忠孝を盡さば、自然幸福が求められる。むかし范雎は、肋骨を折られたが、後には、秦の宰相となり、周勃は、簫を吹いて、喪禮の御伴をして居たが、しまひには、絳侯に封ぜられた。人間の事は、もとより豫め測るべからず、こんな小わつぱだといつて、決して、馬鹿にしたものではない。

【餘論】　紀昀の評に「純ら是れ香山」とあつて、即ち白居易の筆意を學んだものである。

題毛女眞　　毛女の眞に題す

霧鬢風鬟木葉衣。　霧鬢風鬟、木葉の衣、
山川良是昔人非。　山川良に是にして昔人非なり。
祇應閒過商顏老。　祇だ應に閒に商顏の老を過ぎ、
獨自吹簫月下歸。　獨り自ら簫を吹いて月下に歸るべし。

【字解】【一】山川良是　丁令威が鶴に化して、遼東華表の柱頭に止まつて歌つた詩に、城郭如故人民非とあるが、別に神仙傳に「蘇仙公、白鶴に化して桂陽郡に來り、爪を以て樓板を攫む、漆書に似たり、云ふ、城郭是、人民非、三百甲子一來歸」とある。【二】商顏老　商顏は即ち商山、これは四皓を指す。漢書張良傳に「顧るに、上の致す能はざるところの者四人あり、年老いたり、皆上が士を嫚侮するを以ての故に、山中に逃匿す」とあつて、註に「商山四皓を云ふなり」とある。

【題義】列仙傳に「毛女、字は玉姜、華陰山中に在り、山客獵師、世世これを見る、形體毛を生ず。自ら言ふ、始皇の宮人、秦亡びて山に入り、松葉を食ひ、遂に飢寒せず」とある。この詩は、即ち毛女の肖像に題したのである。

【詩意】霧と見まがふ鬢、風に吹かるる鬟、すでに人間の物ならず、そして、木葉を綴つて衣として居る。顧みれば、山川は、本の儘であるが、昔人は、すべて死んで仕舞つた。そこで、唯だ同時の商山四皓を訪問するが爲に、ひとり簫を吹いて、月下に此世に降つて來る位の者であらう。

寄餾合刷餅與子由　　餾合刷餅を寄せて子由に與ふ

老人心事日摧頹。　老人の心事は、日に摧頹、
宿火通紅手自焙。　宿火、紅を通じて、手、自ら焙る。
小甑短餅良具足。　小甑短餅、良に具足、
稚兒嬌女共燔煨。　稚兒嬌女、共に燔煨。
寄君東閣閒烝栗。　君に寄す、東閣、閒に栗を烝せ、
知我空堂坐畫灰。　知る、我が空堂、坐して灰に畫くを。
約束家童好收拾。　家童に約束して好く收拾せよ、
故山梨棗待歸來。　故山の梨棗、歸り來るを待つ。

【字解】【一】燔煨　二字ともに灼く。

【題義】餾合は飯甑の類、物を蒸すに用ふる。刷餅は不詳。この詩は、以上二物を子由に贈るに添へて作つたのである。

【詩意】老人の心事は、日日に摧頹に赴き、今では、赤くおこつた火を火桶に生けて置いて、手を焙るといふ始末。ここに、餾合と刷餅とを取り揃へて送るから、稚兒嬌女は、これで、どんな物にでも火を通すことが出來る。これを君に寄せると、東閣の下に於て、靜に栗をゆでるであらうが、これま

で、自分の處では、空堂に置きツ放しで、つれづれの時は、坐して、灰に字を書いて居たのである。そこで、家僕に言ひつけて、よく始末して置くが善いので、故山の梨棗は、われ等の歸り來るを待つて居るから、歸里の後は、役に立つこと、もとより論なく、壞さぬ樣に大切にして置かねばならぬ。

次韻子由淸汶老龍珠丹　子由の淸汶老龍珠丹に次韻す

天公不解防癡龍。　天公は癡龍を防ぐを解せず、
玉函寶方出龍宮。　玉函寶方、龍宮に出づ。
雷霆下索無處避。　雷霆、下に索め、處として避くるなし、
逃入先生衣袂中。　逃れて入る先生衣袂の中。
先生不作金椎袖。　先生、金椎の袖を作さず、
玩世徜徉隱屠酒。　世を玩んで、徜徉、屠酒に隱る。
夜光明月空自投。　夜光の明月、空しく自ら投ず、
一鍛何勞緯蕭手。　一鍛、何ぞ勞せむ緯蕭の手。
黃門寡好心易足。　黃門、好寡く、心足り易し、
荊棘不生梨棗熟。　荊棘生ぜず、梨棗熟す。
元珠白璧兩無求。　元珠白璧、兩つながら求むるなし、
無脛金丹來入腹。　脛なくして、金丹、來つて腹に入る。
區區分別笑樂天。　區區分別、樂天を笑ふ、
那知空門不是仙。　那ぞ知らむ、空門、是れ仙ならざるを。

【字解】〔一〕癡龍　劉慶忌の幽明錄に「洛下の一洞穴、深さ測るべからず、人あり、穴中に墮ちて一都に入る。郛郭崇樹、悉く金銀を以て飾となす。人、皆長三丈、因つて飢餓を告ぐ。長人、中庭柏樹の下の一羊を指し、跪いて羊鬚を捋せしめ、初に一珠を得たり、長人、これを取る、次に一珠を捋して亦た之を取る、後に一珠を得、取つて之を啖はしむ。甚だ飢を療するを得たり。還つて張華に問ふ、華曰く、これ崑崙の下、地仙九館の羊、名を癡龍となす。初の一珠、これを食へば天地と壽を等しうす。第二珠、これを食へば、以て年を延ぶべし。第三珠は、飢に充つるのみ」とある。〔二〕玉函寶方　玉の箱に入れてある貴重なる藥方、隋書經籍志に「玉函寶方五卷、葛洪撰」とあり、續仙傳に「孫思邈、龍宮藥方三十首を取つて歷試するに、神效あり、千金方三十卷を著す、散龍宮方、その內に在り」と見ゆ。〔三〕金椎袖　袖中に鐵椎を入れる、漢書淮南厲王傳に「辟陽侯、出でて之を見る、卽ち自ら金椎を袖にして之を椎す」とある。〔四〕緯蕭手　席を織る人、莊子に「河上に家貧にして緯蕭を恃んで食するものあり。その子、淵に沒して千金の珠を得たり」とある。〔五〕黃門　唐書百官志に「門下侍郞、龍朔二年、黃門侍郞と改む」とある。この時、子由は門下侍郞であつた。〔六〕元珠　元は玄、黑色の珠。〔七〕笑樂天　白樂天の詩に我學空門非學仙、恐君此說是虛傳。海山不是吾歸處、歸則須歸兜率天とある。

【題義】淸汶老は、如何なる人か分からぬ。この詩は、子由が淸汶老家傳の龍珠丹を詠じたから、取り敢へず、次韻したのである。

【詩意】天公とても、癡龍を防ぐことが出來ず、そこで、龍宮の祕密が漏れて、玉函の藥方などが、追追人間に傳はつた。それで、天は後悔して、雷霆をして下に之を索めしめると、癡龍は、避ける處が無かつたので、取り敢へず、子由の袂の中に隱れた。子由は、何も、鐵椎を袖中に入れて置くでも

なく、逍遙、世を玩んで、狗屠酒人の間に隱れて居るものであつた。しかし、明月に比すべき夜光の珠が、不意に投げ込まれたので、龍珠丹を錬り上げると、彼の河上に住んで席を織るものを煩はすにも及ばず、容易に出來上つた。元來、黃門に官する子由は、嗜好少く、從つて、心足り易く、荊棘、庭に生せず、梨棗が秋熟すれば、それで衣食に差支がないと思つて居る位。玄珠も、白璧も、兩つながら欲しいとも思はなかつたのに、脛なき金丹が飛んで來て、自然と腹に入つた樣な次第で、いはば、全く天幸である。そこで、何も白樂天の如く、區區として差別を設けるにも及ばず、空門と仙とは、畢竟同じものであるから、子由は、この丹を錬ることに因つて、仙となり、又空門に入ることも出來る譯である。

【餘論】紀昀の評に「起し得て飄忽、以下平平」とある。

次韻子由書淸汶老所傳秦湘二女圖

子由の書せる淸汶老の傳ふるところの秦湘二女の圖に次韻す

春風消冰失瑤玉。　春風冰を消して瑤玉を失ふ、

我本無身安〔一〕有觸。　われ本と身なく、安んぞ觸るるあらむ。

〔二〕羊生得婦如得風。　羊生、婦を得て風を得たるが如し、

握手一笑未爲辱。　手を握つて一笑、未だ辱と爲さず。

先生室中無天遊。　先生、室中、天遊なし、

珮環何處鳴〔三〕風甌。　珮環、何の處か、風甌を鳴る。

〔四〕隨魔未必皆魔女。　魔に隨ふ、未だ必ずしも皆魔女ならず、

但與分燈遣歸去。　但だ與に燈を分つて歸り去らしむ。

胡爲寫眞傳世人。　胡すれぞ、眞を寫して世人に傳ふ、

更要維摩一〔五〕轉語。　更に要す、維摩の一轉語。

〔六〕丹元茅茨祗三間。　丹元、茅茨、祗だ三間、

〔七〕太極老人時往還。　太極老人、時に往還。

檢點凡心早除拂。　凡心を檢點して、早く除拂せよ、

〔八〕方平神鞭常使〔九〕物。　方平の神鞭、常に物を使ふ。

【字解】【一】安有觸　楞嚴經に卽觸非身、卽身非觸、身觸二相、原無處所とある。【二】羊生　王註に「羊生は胥の羊權なり。眞誥、女仙萼綠華の詩に云ふ、羊生標美秀と。又眞誥、九華眞妃、纒に降つて云ふ、手を雙臺に攜へ、娛んで良會を敍す、妾、豈に以て浮華少時の滑に恒累して、當眞の定質を虧奪せむや」とある。【三】鳴風甌　飛燕外傳に「帝、太液池に於て千人の舟を作る、后、歸風送遠の曲を歌ふ。帝、文犀の簪を以て玉甌を擊つて、后の歌に倚る」とある。【四】隨魔　維摩經に「天女、言を聞き已りて、維摩詰の足に禮し、魔に隨つて宮に還る」とある。【五】一轉語　傳燈錄に「洞山云ふ、遮裏、合に一轉語を下すべし、且く道へ、什麼の語を下し得んと、一上座あり、語を下す、九十六轉、師の意に愜はず」とある。【六】丹元　前に見えた丹元子。【七】太極老人　甕研傳奇に「元和中、元徹柳實、舟を合浦の岸に纜し、漂うて大海に入り、飢に孤島に至り、玉虛尊師に見え、南溟夫人と會約し、人世に返らむことを求む。尊師曰く、子、道あり、歸ること難からず。子の宿分、自ら師ありと。夫人、侍女に命じ、二子を送り、百花橋に馭して歸る。二子、使者に問ふ、吾が師は是れ誰ぞ。云ふ、是れ南嶽太極先生と。二子ともに雲水を尋ぬるに、かつて、影響なし。一日、雲中に因つて、老叟の檻を負ふを見る、

擔上に太極の字を對するあり、遂に禮して師となし、隨つて觀險に詣りて復た出でず」とある。【八】方平　神仙傳に「麻姑鳥爪、蔡經、これを見て心に念ふ、背癢き時、この爪を得て爬かむと。王方平、經を牽いて之を鞭つ。但だ見る、鞭、經の背に著き、亦た人の鞭を持するを見ず。方平曰く、吾が鞭、亦た妄りに得べからざるなり」とある。【九】使物　物は鬼物。

【題義】　王註に「韓退之の詩、秦地吹レ簫女、湘波鼓レ瑟妃、謂はゆる二女、豈に此を畫くものか」とある。すると、二女は、弄玉と湘妃とである。この詩は、清汝老の傳へたと稱する秦湘二女の圖に子由が題詩を書したから、それに次韻したのである。

【詩意】　春風が氷を解かすと、今まで瑤玉の樣に見えたのが、すツかり無くなると同じく、われも、亦た本來形體なきが故に、感觸の有らう筈がない。羊權は、上仙せし後、婦を得たが、風を得た樣なものであつて、手を握つて一笑しても、決して、辱とはならない。子由の室中は、もとより狹くして、天上の游を恣にすることは出來ないが、何處とも知らず、環佩の聲が聞こえて、さながら、風が玉甌を鳴らす樣である。元來、魔に隨ふもの、すべて、魔女といふ譯でもなく、唯だ燈火を分つて歸り去らしめるが善い。如何なれば、ここに、其像を畫いて、世人に傳へたのであるか、まことに、維摩をして、一轉語を下さしめる必要がある。丹元子の小菴は、唯だ三間に過ぎぬが、太極老人は、時時、往還して道を傳へて吳れる。そこで、凡心を檢點して、早く之を除拂するが第一で、王方平の神鞭は、常に鬼物を使役して、極めて靈妙なものであるから、ひよツとすると、その鞭で笞たれることもあらう。

【餘論】　紀昀は「起四句、力を吃するの痕あり、初白先生、以て清脫となす、これ未だ喩らざるところ」といひ、「如レ得レ風の三字、未だ佳ならず」といつて居る。

紫團參寄二王定國一

(一)谽谺土(二)門口。突兀太(三)行頂。
豈惟團二紫雲一。實自俯二倒景一。
剛(四)風被二草木一。眞氣入二苕(五)穎一。
舊聞人(六)銜芝。生二此羊(七)腸嶺一。
纖攕虎豹鬣。蹙縮龍(八)蛇癭。
(九)蠶頭試小嚼。龜(一〇)息變方騁。
矧予明(一一)眞子。已造二浮(一二)玉境一。
清宵月掛レ戶。半夜珠(一三)落レ井。
灰心寧復然。汗(一四)喘久已靜。
東坡猶故目。北藥致二遺(一五)秉一。

紫團參、王定國に寄す

谽谺たり土門の口、突兀たり太行の頂。
豈に惟だ紫雲を團にするのみならむや、實に自ら倒景を俯す。
剛風、草木に被り、眞氣、苕穎に入る。
舊と聞く人銜の芝、この羊腸の嶺に生ずと。
纖攕たり虎豹の鬣、蹙縮す龍蛇の癭。
蠶頭、試に小嚼、龜息、變方に騁す。
矧んや、予、明眞子、すでに浮玉の境に造る。
清宵、月、戶に掛り、半夜、珠、井に落つ。
灰心、むしろ復た然らむや、汗喘、久しく已に靜なり。
東坡、なほ故目、北藥、遺秉を致す。

欲持三椏根（一六）、往侑九轉鼎（一七）。　三椏の根を持して、往いて九轉の鼎を侑めむと欲す。
爲予置齒頰、豈不賢酒茗。　予の爲に、齒頰に置け、豈に酒茗に賢らざらむや。

【字解】〔一〕 谽谺　谷の深い貌。〔二〕 土門口　即ち井陘關。〔三〕 太行頂　本草註に「人參は潞州太行山上に生ず、これを紫團參といふ」とある。〔四〕 剛風　天に近きの風。〔五〕 君顴　前に「送程建用」の詩中に注して置いた。〔六〕 人銜芝　本草に「人參、一名人銜」とある。〔七〕 羊腸嶺　漢書地理志に「上黨壺關縣に羊腸阪あり」とあり、太平寰宇記に「河東道羊腸山は、交城縣の東南萬根谷に在り、山は即ち羊腸阪なり、石磴縈委、羊腸の若し」とある。〔八〕 龍蛇瘦　瘦は瘠。〔九〕 蠶頭　王註に「俗に稱す、人參は蠶頭の如きもの、最も良し」とある。〔一〇〕 龜息　定命錄に「李嶠、袁天剛に詣つて、同じく寢ぬ。嶠の息、耳中に在り。起つて曰く、これ龜息なり、貴壽にして、富まざるのみ」とある。〔一一〕 明眞子　拾遺記に「燕の昭王、甘需に羽衣一襲を賜ひ、その墟を表して明眞里となす」とある。〔一二〕 浮玉　金山の別名、前に「潤州甘露寺彈箏」の詩中に見ゆ。〔一三〕 珠落井　咽に納めて嚥下せしを云ふ。〔一四〕 汗喘　圖經本草に「人參は、大に喘を治す。相傳ふ、人參を試みむと欲するもの、二人をして同じく走らしめ、一は人參を與へて之を含ましめ、一は與へず。走ること三五里ばかりなるを度るに、その人參を含まざるものは、必ず大に喘ぐ、含むものは氣息自如たり」とある。〔一五〕 遺粟　詩網に遺秉滯穗とあるを用ふ。〔一六〕 三椏　本草註に「高麗人、人參の贊を作つて曰く、三椏五葉、背陽向陰、欲來求我、椵樹相尋」とある。〔一七〕 九轉鼎　神仙傳に「仙方に九品あり、その七を九轉霜雪の丹と名づく」とある。

【題義】 査註に「瑞應錄、唐の明皇、潞邸に潛み、重九、壺關山に登る、東北に紫雲あり、光彩の日を照らすを見る、因つて紫雲山と名づく。即ち紫團なり。太平寰宇記、河東道上黨郡に、紫團山あり。地理志に云ふ人參草を出す」とある。この詩は、紫團山產の人參を賦して王定國に寄せたのである。

【詩意】 井陘の谷は下に深く、太行の頂は突兀として聳えて居る。ここ上黨の地は、ただ紫雲が團を爲して居るばかりではなく、日月の倒景を俯さしめ、天つ風は草木を吹き靡かし、天地の眞氣は、人參の高い莖に吹き入り、これをして愈よ靈妙ならしめる。むかし聞いたことがあるが、人參は、この羊腸阪に生じ、その根の鬚の房房して居るのは、虎豹の鬣の如く、根の縮まつて居るのは、龍蛇の瘦の樣である。そこで、蠶頭の形せる其先端を少しばかり嚙むると、效果は覿面で、人をして龜息を爲さしめるとのことであつた。況んや、予は、古しへの甘需その人の如く、すでに金山の仙界に至りしものであるから、淸夜、月の戶に掛る頃、眞夜中に、珠の井に落つるが如く、紫團參を服して見ると、すでに死灰の如く落ち付いた心は再び燃えず、汗も出ず、喘ぐことも止んで仕舞つた。東坡は依然として昔日の目で、よく見分けることは出來ないが、北地に產する靈藥を御裾分けする。そこで、三椏と稱する人參の根は、仙家の鼎で錬る九轉丹位の功能はあるから、もし予の爲に之を齒頰の間に置いたならば、酒や茶よりも、はるかに有效であらう。

【餘論】 紀昀は「剛風の十字警」といひ「矧の字、妥ならず」といつて居る。

次韻劉燾撫勾蜜漬荔支

劉燾撫勾の蜜漬荔支に次韻す

時新（一）滿座聞名字。　時新、滿座、名字を聞く、
別久何人記色香。　別久しく、何人か色香を記す。

【字解】〔一〕 時新　時の物、薛能の詩に「歲杪監州曾見樹、時新入座久聞名」とあるを用ふ。〔二〕 下

葉似楊梅蒸霧雨。　葉は楊梅に似て霧雨を蒸し、
花如盧橘傲風霜。　花は盧橘の如く風霜に傲る。
毎憐蓴菜下(二)鹽豉。　毎に憐む、蓴菜の鹽豉を下すを、
肯與葡萄壓酒漿。　肯て葡萄と酒漿を壓せむや。
回首驚塵卷飛雪。　首を回らせば、驚塵、飛雪を卷く、
詩情眞合與君嘗。　詩情、眞に合に君と嘗むべし。

【題義】施註に「劉燾、字は無言、長興の人、諸父宜翁・行父、皆先生に從つて游ぶ。無言、太學に在つて俊聲あり、筆札を善くす、黄魯直、これを稱して謂ふ、他日、江南復た羊欣・薄紹之あらむと。時に中山に在り、祕閣修撰に終る」とある。撫勾は、安撫使に屬する管勾官。この詩は、劉無言の蜜漬荔枝の作に次韻したのである。

【詩意】時の物として、屢ば荔支を食つた時は、滿座の人人、その名字を聞いて覺えて居たが、南地に別るること久しく、誰も生の荔支の色香を記憶して居るものはない。その葉は、楊梅の如くして、霧や雨に蒸され、花は盧橘の樣であつて、風霜に傲つて居る。その味の美なることは、蓴菜に鹽味噌を付けたのに匹敵すべく、葡萄の如く壓し潰して、酒とすることは出來ない。首を回らせば、これを取り寄せる時、路上の驚塵は、飛雪を捲いた樣であつたらうが、今これに對すれば、詩情鬱勃として生じ、君と共に之を食はうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「楊梅等四物、竝に中二聯の腹に用ふ、法に於て疏たり。句法一樣、尤も合はずと爲す」といつて居る。

（二）鹽豉　前に金門寺の詩中に註して置いた。

立春日小集、戲李端叔　　立春の日、小集、李端叔に戲る

白髮已十載。青春無一堪。　白髮、すでに十載、青春、一も堪ふるなし。
不驚新歲換。聊與故人談。　新歲の換はるに驚かず、聊か故人と談す。
牛健民聲喜。鴉嬌雪意酣。　牛、健にして民聲喜び、鴉、嬌にして雪意酣なり。
霏微不到地。和暖要宜蠶。　霏微、地に到らず、和暖、蠶に宜しきを要す。
歲月斜川似。(一)風流曲水慚。(二)　歲月、斜川に似たり、風流、曲水慚づ。
行吟老燕代。坐睡夢江潭。　行吟、燕代に老い、坐睡、江潭を夢む。
(三)丞掾頗哀援。(四)歌呼誰怕參。(五)　丞掾、頗る援を哀み、歌呼、誰か參を怕る。
衰懷久灰槁。習氣尚饞貪。　衰懷、久しく灰槁、習氣、尚は饞貪。

白(六)啖本河朔。紅(七)消眞劍南。　白啖、本と河朔、紅消、眞に劍南。
辛(八)盤得青韭。臘酒是黃(九)甘。　辛盤、青韭を得、臘酒は是れ黃甘。
歸臥燈殘帳。醒聞葉打庵。　歸臥、燈、帳に殘し、醒めて聞く、葉の庵を打つを。
須煩李(一〇)居士。重說後(一一)三三。　須らく、李居士を煩はし、重ねて後三三を說かしむべし。

【字解】【一】斜川　陶淵明集に斜川の詩があつて、その自序に「辛丑の歲、正月五日、天氣澄和、風物閑美、二三の鄰曲と同じく斜川に遊ぶ」とある。【二】曲水　水經註に「宋の元嘉十一年、蕃樂游苑の地を以て曲水となし、武帝、流を引き、觴を傳へ、會するもの詩を賦す」とある。【三】丞掾　ともに地方長官の下役。【四】哀援　後漢書馬援傳に「諸曹、時に外事を白す、援、輒ち曰く、これ丞掾の任、何ぞ相煩はすに足らむ、頗る老子を哀んで放遊するを得せしめよ」とある。【五】譙伯參　前に卷七、再和の詩中に注して置いた。【六】白啖　王註に「或は云ふ、荔支の名、未詳」とあるが、邵註には「荔支は、應に河朔と言ふべからず」とあり、王文誥は「愚ふらくは、不托の類、麥もて爲るところのもの、是に近し」といつて居る。【七】紅消　梨の名、前に高樹紅消梨の句もあつた。【八】辛盤　五辛盤といつて元日の者であるが、ここでは、立春の日に用ひたのである。【九】黃甘　卽ち黃柑、卽ち洞庭春色。【一〇】李居士　卽ち端叔。【一一】後三三　宗門統要に「無著和尙、五臺に遊び、山下に到りて一老僧に遇ふ。問うて曰く、この間、佛法如何。住持僧曰く、凡聖同居、龍蛇混雜。無著曰く、多少の衆。老僧曰く、前三三、後三三、と。無著和尙、測るなし」とある。施註に「蓋し、端叔、定武の幕中に在りて、特に營妓董九といふものを悅ぶ。故に、九の數を用ひて、以て戲と爲すのみ。その說を强行父に聞くといふ」とある。

【題義】說明に及ばぬ。施註に「李端叔、名は之儀、その先は景城の人、後、當塗に居り、進士に擧げらる。力學善く文を屬して、東坡に知られ、元祐八年九月、坡、出でて中山に帥たるや、辟して機宜の文字を掌らしむ」とある。

【詩意】予は白髮頭に成つて、すでに十年、青春は殆んど堪へられない。新年の換るには驚かす、ここに、故人と談じて居るのは、聊か愉快である。牛は健にして、民聲喜ぶが如く、鴉は品を作つて、どうやら、雪模樣である。まだ霏微たる雪片は、地に舞ひ落ちて來ぬが、時候和暖にして、蠶に都合よい樣にありたいと思ふ。今の氣候は、陶淵明の斜川に似て居るが、わが風流は、曲水に及ばぬを愧づる。身は行吟して、燕代の地に老いむとし、坐臥、ともに故鄕の江潭を夢に見る。丞掾等の下役は、予が年を取つて、馬援に似たるを氣の毒に思ひ、外事を申し出です、そこで、勝手に歌呼して、古しへの曾參をさへ怕れぬ位。衰へたる懷抱は、すでに枯木寒灰の如くなつたが、ただ惡癖が殘つて居て、食ふ物にかけては、なかなか貪つて居る。白啖は、元と河朔で出來るものであるし、紅消の梨は劍閣以南蜀地の產である。辛盤には、青い韭を用意し、臘酒は、卽ち黃柑を醸したものである。宴畢つて歸臥すれば、帳中の燈火、將に消えむとし、酒が醒めると、落葉の菴を打つのが聞こえる。かうなると、寂しくて堪まらぬから、ここに、李端叔を煩はし、後三三といふ謎語に似通へる、董九とかいふ營妓の惚氣話でもして貰ひたいものである。

【餘論】紀昀は牛健民聲喜を評して「五句拙にして俚」といひ、白啖以下の二十字を評して「四句四色、格を礙ぐ」といつて居る。

次韻曾仲錫元日見寄

曾仲錫の元日寄せらるるに次韻す

蕭索東風兩鬢華。
年年幡勝剪宮花。
愁聞塞曲吹蘆管。
喜見春盤得蓼芽。
吾國舊供雲澤米。
君家新致雪坑茶。
燕南異事眞堪紀。
三寸黃甘劈永嘉。

蕭索たる東風、兩鬢華、
年年、幡勝、宮花を剪る。
愁へて聞く、塞曲の蘆管を吹くを、
喜び見る、春盤、蓼芽を得たるを。
吾が國、舊と供す雲澤の米、
君の家、新に致す雪坑の茶。
燕南の異事、眞に紀するに堪へたり、
三寸の黃甘、永嘉を劈く。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】むかしは、毎年、年賀の爲に參内する時に、宮花の剪つたのを頭に簪して居たが、今は、定州に在つて、寂しき東風の中に兩鬢の白髮を見るのみである。邊塞の曲たる胡笳は、聞くも愁はしいが、ここに、元日に遇うて、春盤に蓼の芽を載せたのを見るのは、まことに嬉しい。この定州に於て、官舍に供給する酒は、蘇州米を以て釀造するとのことであるし、君の家では、新に曾坑の茶を手に入れたといふから、ともに、賞玩することが出來る。燕地の南なる此處に於て、一異事として特記すべきは、はるか南に隔てたる永嘉の黃柑の三寸ばかりなるを劈いて食へるといふことである。

【字解】【一】幡勝　參朝する時、頭上に簪す花かざり。【二】蘆管　後漢書に「蔡琰云ふ、胡人、蘆葉を捲き、これを吹いて以て樂となす、故に之を胡笳といふ」とある。【三】雲澤米　雲澤は雲夢澤の略、東坡の自註に「定武の齋酒、蘇州米を用ふ」とある。【四】雪坑茶　東坡の自註に「近ごろ、曾坑茶を得たり」とある。雪坑は即ち曾坑であらう。【五】永嘉　施註に「溫州永嘉郡、歲に黃甘を貢す」とある。

子由生日以檀香觀音像及新合印香銀篆盤爲壽一首

子由の生日、檀香の觀音像及び新合印香・銀篆盤を以て壽を爲す　一首

旃檀婆律海外芬。
西山老臍柏所薰。
香螺脫黶來相羣。
能結縹緲風中雲。
一燈如螢起微焚。
何時度盡繆篆紋。
繚繞無窮合復分。
綿綿浮空散氤氳。

旃檀婆律は、海外の芬、
西山の老臍は柏の薰するところ。
香螺脫黶、來つて相羣す、
能く結ぶ縹緲風中の雲。
一燈螢の如く、起つて微に焚く、
何の時か、度り盡さむ繆篆の紋。
繚繞無窮、合して復た分かる、
綿綿、空に浮んで氤氳を散す。

【字解】【一】旃檀　香木の名、【二】婆律　王註に「程縯曰く、婆律は、波斯國に出づ、膏香は木心中に在り」と見ゆ。【三】老臍　麝香の臍、唐本草に「麝は、中臺川谷に生ず。陶隱居云ふ、形、麞に似たり、常に柏葉を食ふ。故に嵇康の養生論に云ふ、麝は柏を食うて香ばしきなり」とある。【四】香螺脫黶　唐本草に「香螺黶頭、雲南に生ずるものは、人の掌の如く青黃色。按ずるに、蝸

東坡持是壽卯君。[六]
君少與我師皇墳。[七]
旁資老聃釋迦文。
共厄中年點蠅蚊。[八]
晚遇斯須何足云。[九][一〇]
君方論道承華勛。[一一]
我亦旂鼓嚴中軍。[一二]
國恩未報敢不勤。
但願不爲世所醺。
爾來白髮不可耘。
問君何時返鄉枌。[一三]
收拾散亡理放紛。
此心實與香俱焄。
聞思大士應已聞。[一四]

東坡、これを持して卯君を壽す、
君、少にして我と皇墳を師とす。
旁ら資す老聃釋迦の文、
ともに厄せられて、中年、蠅蚊を點す。
晚に斯須に遇ふ、何ぞ云ふに足らむ、
君、方に道を論じて華勛を承く。
われ亦た旂鼓、中軍嚴たり、
國恩、未だ報せず、敢て勤めざらむや。
但だ願はくは、世に醺せられず、
爾來、白髮、耘すべからず。
君に問ふ、何の時か鄉枌に返り、
散亡を收拾して放紛を理せむ。
この心、實に香と倶に焄す、
聞思大士、應に已に聞くなるべし。

書、蠡、亦た蠡に作る。韓鄂の四時纂要、甲香を修するあらば、方に大甲酒を收め、蜜を煮、熬して諸香を入ると、云ふところの甲は、卽ち螺甕なり」とある。【五】繆篆　漢書藝文志に「漢興り、太史、學童を試むるに、六體を以てす。古文・奇字・篆書・隸書・繆篆・蟲書」とあり。音義に「繆篆とは、その文、屈曲纏繞するを謂ふ、印章を摹する所以なり」とある。【六】卯君　子由を云ふ。【七】皇墳　三墳は三皇の事を記せしものなるが故に云ふ、最古の書といふ義、韓愈の詩に高陽擅皇墳とある。【八】點蠅蚊　點は汚される。韓愈の詩に朝蠅不須驅、暮蚊不須拍、蠅蚊滿八區、可盡與相格とある。【九】晚遇　晩年になつて始めて遇合する。【一〇】斯須　須臾に同じ。【一一】華勛　韓

愈の詩に方今向太平、元凱承華勛」とある。華は重華、卽ち舜。勛は放勛、卽ち堯。堯舜の意を奉承する。【一二】旂鼓　東坡、自ら定州に帥たるを云ふ。【一三】鄉枌　西京雜記に「漢の高祖、少時常に枌楡の社を祭る、新豐に移るに及びて、亦た立つ、故に後人枌楡の字を用ひて鄉曲となすなり」とある。【一四】聞思大士　前に和魯直長香の詩中に注して置いた。

【題義】子由の誕生日は二月二十日、紹聖元年の其日に、東坡は、旃檀の香木を刻んだ佛像と、新しい合印香と銀篆盤と、以上三品を祝の印として贈り、それに添へて、この詩を作つたのである。

【詩意】旃檀・婆律は、ともに海外に產する香木であるし、西山の麝香は、柏葉を食つて香氣を得たものである。香螺の甲を擣り潰したのに、種種の香料を調合した其香を焚くと、風中でも、縹緲たる雲を結ぶのである。一燈螢の如く、身を起して、かすかに之を焚やして見ると、銀盤の中に刻してある繆篆の紋は、なかなか、數へ盡されず、その篆文は、繚繞窮まりなく、合しては復た分れ、綿綿絕えず、空に浮べば、佳氣氤氳たるが如く見える。予は、これ等の物を持ち出して、弟の子由を祝つて贈つたのである。君は、少にして、我と共に古書を研究し、傍ら佛老の諸經に資し、久しい間、修養を積み、やがて仕官したのであるが、ともに、災厄を被り、中年の頃は、蠅の如く蚊の如き小人どもに點汚せられ、晚年に至つて、始めて遇合したのも、ほんの暫時の事で、丸で御話に成らない。君は、今門下侍郎として臺閣に居り、道を論じては、堯舜の如き聖主の御意を奉承し、予も亦た定州に帥として、旂鼓の間に居り、いかめしく中軍に坐つて居る。顧みれば、國恩、未だ報いざるが故に、頻りに勤勉する必要があつて、もとより世俗にかぶれることを願はない。爾來、白髮は兩鬢に遍ねく、と

ても之を拔き去ることが出來ぬ位、大分年を取つて仕舞つた。君は、何時、鄉里に歸つて、散亡を收拾し、放紛を整理して、心のどかに老後の計を爲すか。この心は、實に香と共に薰つて居るから、聞思大士の名にしおふ佛樣は、すでに聞いて居られたことであらう。

【餘論】乾隆御批に「香は以て形容し難きも、偏に形容を爲して曲盡す。平時、好んで禪語を以て詩に入る。この詩、偏に只だ結句大士已に聞くの一點、眞に天花變現、測識すべからざるものあり。詩道中に在つて、殆んど從聞思修を以てして、三摩地に入る」とあり、紀昀は、起首を評して「時文中の搭題、他を斷いて片段を連成するが如し、復た捏合を以て嫌となさす」といひ、結尾を評して「一掉尾收轉、方に是れ游騎歸なきならず、尤も妙なるは、自然合拍するに在り」といつて居る。

次韻李端叔送保倅翟安常赴闕兼寄子由

李端叔が保倅翟安常の闕に赴くを送るに次韻し、兼ねて子由に寄す

中山保塞(一)兩窮邊。　中山保塞、兩窮邊、
臥治(二)雍容已百年。　臥治雍容、すでに百年。
顧我迂愚分竹使(三)。　顧るに、我、迂愚にして竹使を分ち、
與君談笑用蒲鞭(四)。　君と談笑して、蒲鞭を用ふ。
松荒三徑思元亮(五)。　松は三徑に荒れて、元亮を思ひ、
草合平池憶惠連(六)。　草は平池に合して、惠連を憶ふ。
白髮歸心憑說與。　白髮歸心、憑つて說與、
古來誰似兩疏(七)賢。　古來誰か似む、兩疏の賢。

【字解】【一】保塞　査註に「文獻通考、保州は本と唐の莫州清渕縣、宋初、保塞軍を置く。太平興國中、升せて州となす」とある。【二】臥治　前に次韻錢越州の詩中に注して置いた。【三】分竹使　前に金門寺の詩中に注して置いた。【四】蒲鞭　前に送宋構の詩中に注して置いた。【五】元亮　陶潛の字、一に字を淵明とも云ふ。【六】惠連　南史の本傳に「族兄靈運云ふ、篇章ある毎に、惠連に對すれば、便ち佳語を得。かつて、永嘉の草堂に於て詩を思ひ、竟日就らず、忽ち夢に惠連を見、即ち池塘生春草を得、大に以て工となす」とある。【七】兩疏　疏廣と疏受、前に次韻寄諫水の詩中に注して置いた。

【題義】李端叔が保塞中の給事たる翟安常の上京を送つた詩を作つたから、それに次韻し、兼ねて子由に寄せたのである。

【詩意】ここ中山と、そちらの保塞とは、相竝んで、邊境の要地であるが、今しも、太平の世に際し、臥して居ても、よく治まつて、雍容の化は、百年の久しきに及んだ。顧みるに、われは迂愚なれども、竹使符を分つて、この地に帥となり、君と共に談笑し、なるべく、刑を輕くする爲に、蒲鞭を用ひて居る。故國に於ける三徑の松は、荒に就いて、陶元亮の昔をしのび、平池は、草の合するに任せ、惠連の樣な子由が居ないから、折角ながら、佳句も出來ない。この白髮頭に成つて、早く歸りたいと思ふ心は、翟君に依賴して、唯だ子由にのみ說與すべく、それに就いても、疏廣・疏受の賢は、むかしから、他に比類なきものである。

【餘論】紀昀は「遐設與の三字に賴つて綰結す、然れども、端叔に和するの一層、竟に題起せず、これを總ぶるに、頭緒太だ多く、未だ免れず、五十六字中、照管し來らざるを」といつて居る。

中山松醪寄雄州守王引進

中山の松醪、雄州の守王引進に寄す

鬱鬱蒼髯千歳姿。　鬱鬱たり蒼髯千歳の姿、
肯來杯酒作兒嬉。　肯て來つて、杯酒、兒嬉を作さむ。
(一)流芳不待龜巢葉。　流芳、待たず龜の葉に巢ふを、
(二)掃白聊煩鶴踏枝。　掃白、聊か煩はす鶴の枝を踏むを。
醉裏便成攲雪舞。　醉裏、便ち成す攲雪の舞、
醒時與作嘯風辭。　醒時、與に作す嘯風の辭。
(三)馬軍走送非無意。　馬軍走送、意なきに非ず、
玉帳人閒合有詩。　玉帳人閒に、合に詩あるべし。

【字解】【一】流芳　東坡の自註に「唐人、荷葉を以て酒杯と爲し、これを碧筩酒といふ」とあるが、何も唐人に始まつた譯でもない。【二】掃白　白髮を拔くこと。【三】馬軍　護衛の騎兵。

【題義】引進、詳しくは引進使、宋史職官志に「臣僚蕃國進奉禮物の事を掌る」とある。王引進は、王崇拯、字は拯之といふ人、この詩は、中山に產する松花の酒を雄州に居る王崇拯に贈るに就いて、それに添へる爲に作つたのである。

【詩意】中山の松は、蒼髯鬱鬱として、その姿は、すでに千歳を閱し、杯酒に釀して、子供臭い游嬉に供せられるを屑しとしない。碧筩の飲は、龜の巢ふを待たずして、早く蓮の葉を切る必要があるが、白髮を拔く位、老人になつた上は、自分で攀ぢ登ることも如何はしいから、鶴を煩はして其松の枝を踏ましめる。この酒を飲んで醉つた時は、雪に攲つ松の舞をなし、醒めた時は、風に嘯く松の言葉を眞似る。護衛の騎兵の走つて之を取り次ぐことは、流石に親切であつて、時しも、君は玉帳の中に坐し、閒なるままに、詩でも作つて居られるであらう。

次韻李端叔謝送牛戩鴛鴦竹石圖

李端叔が牛戩の鴛鴦竹石圖を送るを謝するに次韻す

聞君談西戎。廢食忘早晩。　聞く君が西戎を談じ、食を廢して早晩を忘るるを。
王師本不陳。賊壘何足剗。　王師、本と陳せず、賊壘、何ぞ剗ふに足らむ。
守邊在得士。此語要而簡。　邊を守るは、士を得るに在り、この語、要にして簡。
知君論將日。似予識畫眼。　知る君が將を論ずるの日、予が畫を識るの眼に似たるを。
笑指塵壁間。此是老牛戩。　笑つて指す塵壁の間、これは是れ老牛戩。

平生師衞玠。非意嘗理遣。　平生、衞玠を師とす、意に非ず、かつて理遣せむや。

愬君定何人。未用市朝顯。　君に愬ふ、定めて何人、未だ市朝に顯はるるを用ひず。

置之勿復道。世俗固多舛。　これを置いて復た道ふ勿れ、世俗、もとより舛多し。

歸去亦何須。單車度殽澠。　歸り去つて、亦た何をか須ひむ、單車、殽澠を度る。

如蟲得羽化。已脫安用繭。　蟲の羽化を得たるが如し、すでに脫せば、安んぞ繭を用ひむ。

家書空萬軸。涼暴困舒卷。　家書、空しく萬軸、涼暴、舒卷に困む。

念當掃長物。閉息默自煖。　念ふに、當に長物を掃ふべし、閉息、默して自ら煖む。

此畫聊付君。幽處得小展。　この畫、聊か君に付す、幽處に小展を得む。

新詩勿縱筆。羣吠驚邑犬。　新詩、縱筆する勿れ、羣吠、邑犬を驚かさむ。

時來未可知。妙斲待輪扁。　時來る、未だ知るべからず、妙斲、輪扁を待つ。

【字解】〔一〕不陣　穀梁傳、莊公八年に「善く師するものは陣せず、善く陣するものは戰はず」とある、陣は陣に同じ。〔二〕衞玠　前に梁後白牡丹の詩中に注して置いた。〔三〕殽澠　劉向新序に「洛陽は西に殽澠あり」といひ、陸機の弔魏武文に詠歸塗以反旆、登殽澠而揚來とある。〔四〕涼暴　蟲ぼしをする。〔五〕輪扁　莊子に「輪扁曰く、輪を斲るに、徐なれば甘にして固からず、疾ければ苦にして入らず、疾ならず、徐ならず、これを手に得て、これを心に應ず、口言ふ能はず、數あつて其間に存す、臣、臣の子に喩す能はず、臣の子、これを臣に受くる能はず」とある。

【題義】圖畫見聞志に「道士牛戩、河內の人、翎毛を畫くに工に、多く斑鳩野鵲を寫す、但だ荊棘は甚だ淸高ならず」とあり、劉道醇の宋名畫評に「道士牛戩、字は受禧、河內の人、善く花竹翎毛を畫き、尤も破毛の禽及び寒雉野鵲に長ず。毎に、酒肆の間に飮み、或は一斗を飮み、然る後、片紙に畫いて以て之を質とし、醒むるに至れば、必ず之を購ひ、遂に畫を毀つて去る」とある。この詩は、東坡から李端叔に牛戩の畫いた鴛鴦竹石の圖を贈ると、逸早く、その禮として詩を寄越したから、それに又次韻したのである。

【詩意】君は西戎征服の話をすると、食を廢して、時刻を忘れる位。堂堂たる王師は、本と陣せず、自然に敵を威服すべく、賊の城壘などは、剔り破るに足らない。邊境を守るには、士を得るが第一だといふが、この語は、要を得て、頗る簡切である。君が將帥を論ずる口の、忌憚なく、且つ卓越したることは、丁度、予の畫を識別する眼に似て居る。そこで、笑つて塵にまみれたる壁間を指すと、そこに掛つて居るのが、近ごろ差し上げた牛戩の筆である。牛戩は、平生、古しへの衞玠の人と爲りを師とし、苟くも、意に協はざれば、理窟で攻めても駄目で、要するに、放縱以て性を爲せる世外の人であつた。君に訴へて、これは如何なる人かといつた處が、市朝に突き出すことも出來ず、その儘、棄置して、何とも言はぬが善いので、世俗は、もとより、舛誤多く、かういふ人は、兎角、誤解され易いものである。そこで、歸り去るにしても、何の用意も入らず、ただ一つの車で殽澠の險を登つて

行くだけである。たとへば、蟲の羽化せしが如く、すでに、脱け出した上は、繭は全く必要がない。わが家の藏書は、萬軸もあつて、蟲ばしの時は、廣げたり、卷いたり、極めて面倒臭い。そこで、無用の長物を掃ひ除けて仕舞ひ、物を少くし、家に閉ぢ籠つて、默然、自ら意に適する樣にしたいといふので、この畫は、取り敢へず、君に贈つたから、物靜かなる處に於て、一寸展べて觀て貰ひたい。しかし、これに就いて、詩を作られるにしても、あまり縱に筆を走らさぬが善いので、動もすれば、邑犬が驚いて羣がり吠える樣な事が無いとも限らぬ。元來、得意の時は、何時來るとも知れず、車の輪を器用に斲ることは、輪扁を待つ外ない。そこで、精精腕を磨いて、ちッと氣長く待つて居るが善からう。

【餘論】紀昀は「題を借りて事を論ず、亦た殊に娓娓」といひ、新詩勿二縱筆一に就いては「一挽少くべからず」といひ、又「羣吠の句、太だ露」といつて居る。

次二韻聽上人見一レ寄

聽上人の寄せらるるに次韻す

前身本同社。宿業獨臨レ邊。　前身、本と同社、宿業、ひとり邊に臨む。
一悟鏡空老。始知圓澤賢。　一悟、鏡空老い、はじめて知る圓澤の賢。
歸心忘二犢佩一。生術寄二羊鞭一。　歸心、犢佩を忘れ、生術、羊鞭に寄す。
不レ似歐陽子。空留六一泉。　似ず歐陽子、空しく留む六一の泉。

【字解】〔一〕鏡空　高僧傳に「洛陽香山寺の鏡空、錢塘に游び、孤山寺西に至る、餒うること甚し、因つて、流に臨んで涕を出す。俄に梵僧あり、空を顧み、笑つて曰く、爾る法華を同德寺に誦ぜしを憶ふか、と。空、その由を測るなし。僧曰く、子は飢火に燒かる、と。乃ち囊を探つて一棗を出す、大さ拳ばかりの如し、曰く、吾が國産するところ、これを食へば、過去未來の事を知る、と。空、因つて棗を喫ひ、泉を掬して之を飲み、石に枕して寢ぬ、しばらくして、乃ち悟り、經を同德寺に誦ぜしことを憶ふ、昨日の如きなり」とある。〔二〕圓澤　前に文長老卒の詩中に注して置いた。〔三〕犢佩　龔遂の故事、前に山村五絕の詩中に注して置いた。〔四〕羊鞭　前に考牧圖の詩中に注して置いた。〔五〕六一泉　王註に「歐陽永叔、杭州に至らずと雖も、惠勤師、これを思ひ、居るところ甘泉あつて湧出するに因り、遂に之を名づけて六一泉といふ」とある。

【題義】聽上人は、本集に思聰名說といふ一文があつて、その中に「法惠圓師の小童彭九、年十一、琴を善くし、應對明了、成人の如し。自ら言ふ、未だ法名あらず、而して、師と同じく皆思の字を聯ぬと。遂に名を與へて思聰といふ。庶幾はくは、他日聲に因つて、以て法を得むことを」とある。この詩は、聽上人から、寄懷の什を送つて來たから、取り敢へず、次韻して之に酬いたのである。

【詩意】前の世は、本と同社の人であつたが、夙世の業因に依つて、予は、今ひとり邊地に居る。上人は、鏡空が忽ち一悟せしが如く、しかも、年漸く老い、そして、因緣の淺からざることは、かの圓澤の如く、しかも、もとより賢明である。予は、歸心方に股である爲に、劍を賣つて犢を佩ばしめる樣に、人民を敎化することをも忘れむとし、しかも、生を全うする術は、羊を御する時、後れたものを促き立てる爲に、鞭を振ふといふ其主義を旨として居る。しかし、歐陽公が未だ杭州に至らざるに、

惠勤師が其地に六一泉を設けた樣に、人から長く慕はれる樣には、殘念ながら、なかなか成れない。

次韻王雄州還朝留別　王雄州の還朝留別に次韻す

（一）老李威名八十年。　老李の威名、八十年、
壁間精悍見遺顏。　壁間、精悍、遺顏を見る。
自聞出守風流似。　出守、風流の似たるを聞きしより、
稍覺昇平氣象還。　稍く覺ゆ、昇平、氣象の還るを。
但遣詩人歌秋杜（二）。　但だ、詩人をして秋杜を歌はしむれば、
不妨侍女唱陽關。　妨げず、侍女の陽關を唱ふるを。
（三）內朝接步知何日。　內朝、歩を接す、知る何の日、
白髮羞歸供奉班。　白髮、羞づらくは歸る供奉の班。

【字解】〔一〕老李　李允則を云ふ、東都事略に「字は垂範、太原の人、太平興國七年、初めて靜戎軍の榷場を置き、允則を以て之を領せしむ。これより、屢ば使を諸路に奉じ、雄は嘗て再び莅む。周の世宗、はじめて瓦橋關を以て州を置き、民居、惟だ茅を結ぶ、允則、易へて瓦屋となし、又外書甕城と大城とを合せて一となし、はじめて關城を創し、濠を濬ひ、月隄を起し、浮圖を北原の上に徙し、望むところ三十里に除え、契丹の動靜、皆これを知る、當時の邊臣、及ぶものなし」とある。〔二〕秋杜　前に數ば見えて居た。詩經の篇名で、遠征から歸るを勞する詩。〔三〕內朝　即ち燕朝、奥御殿で宴など賜ふこと。

【題義】説明に及ばぬ。王雄州は、前に中山の松醪を贈つた詩があつて、その條に注して置いた通り、知雄州王崇拯である。

【詩意】君の祖父の李允則は、矢張、この雄州に鎭し、八十年後の今日、威名なほ存し、精悍なる其風貌を畫いた像は、依然として祠堂の壁間に殘つて居る。君は、出でて此地に守となり、その風流は、祖父と酷だ似て居るとの評判であるが、今は昇平の世で、氣象の古しへに還つたことだけが違つて居る。そこで、詩人は、秋杜の詩を歌つて、君の歸京を待つなるべく、ここに、別に際して、侍女が陽關三疊の曲を唱へても、差支はない。宮中に於て宴を賜はる時、君と歩武を接して、一緒に參列するのは、何時であらう。その時、予は、白髮を以て供奉の班列中に加はるのを羞づかしく思ふであらう。

【餘論】紀昀は「語に泛設なし」といひ「五六渾厚、收亦た滿足」といつて居る。

三月二十日、多葉杏盛開　三月二十日、多葉杏盛に開く

零露泫月蕊。溫風散晴葩。　零露、月蕊を泫し、溫風、晴葩を散す。
春工了不睡。連夜開此花。　春工、了に睡らす、連夜、この花を開かしむ。
芳心誰剪刻。天質自清華。　芳心、誰か剪刻、天質、自ら清華。
惱客香有無。弄粧影橫斜。　客を惱ます香有無、粧を弄して影橫斜。
（一）中山古戰國。殺氣浮高牙（二）。　中山、古しへの戰國、殺氣、高牙に浮ぶ。

叢臺餘袨服。易水雄悲笳。
自從此花開。玉肌洗塵沙。
坐令游俠窟。化作溫柔家。
我老念江海。不飲空杏嗟。
劉郎(三)歸何日。紅桃爍殘霞。
明年花開時。擧酒望(四)三巴。

叢臺、袨服を餘し、易水、悲笳雄なり。
この花の開いてより、玉肌、塵沙を洗ふ。
坐に游俠の窟をして、化して溫柔の家と作さしむ。
われ老いて江海を念ひ、飲まずして空しく杏嗟す。
劉郎、歸る何の日、紅桃、殘霞を爍す。
明年、花開くの時、酒を擧げて三巴を望まむ。

【字解】【一】中山　王註に「本と皆地、叢臺・易水、皆是れ其地」とあり、太平寰宇記に「定州は、戰國の時、中山國たり、後、趙に併せられ、亦た皆に屬し、卒に趙に併せられ、俄にして復た立つ、趙の武靈王、襲うて之を滅す」とある。【二】高牙　高い牙旗、即ち本陣に立てる大旗。【三】劉郎　劉禹錫、前に盜劉敞の詩中に注して置いた。【四】望三巴　東坡の自註に「蓋し梓州を請うて歸らむと欲するなり」とあり、華陽國志に「武王、商に克ち、その子宗姬を巴に封ず、漢に至つて、益州牧劉璋、墊口以上を以て巴郡となし、閬陵を以て巴東となし、永寧を巴西となし、これを三巴となす」とある。

【題義】多葉杏は、葉が多く出てから花の咲く一種の杏と見える。

【詩意】天より落つる露は、月下の蕊を濕し、暖き風は、晴天の日、花びらを散らさうとして居て、杏は、今しも滿開である。おもへば、春てふ工人は、遂に睡らず、幾夜かかつて、この花を咲き出さしめたのであらう。芳心は、誰が剪刻したか、天質は、自然に淸秀華美である。香の有りや無しやは知らねど、よく客を惱まし、妝を弄すれば、其影は横斜をなして居る。わが居る定州は、舊の中山で戰亂の國であつた處から、今でも、殺氣は高い牙旗に浮んで見え、叢臺には、綺麗な衣服を著た女どもが居るが、易水には、胡笳の聲が悲しく聞こえる。一たび、この花の開いてより、玉貌は塵沙を洗ひ落し、いつとなく、游俠の窟を化して溫柔の家となさしめた。予は、年老いて江海を思ひ、酒も飲まずして、空しく杏嗟して居る。劉郎は、いつ歸るべきか、赤い桃の花は、殘霞を燒きつける樣に見える。そこで、明年三月、杏花の咲く時分には、愈よ梓州に旅立ち、酒を擧げて遠く三巴の地を望む樣にでもなれば善いがと思つて居る。

【餘論】紀昀は「この排宕あり、氣脈乃ち濶し」といつて居る。

三月二十日、開園三首　　三月二十日、開園　三首

雪髯霜鬢語偷獰(一)。
淡蕩園林取次(二)行。
要識將(三)軍不凡意。
從來祗嗳小人(四)羹。

雪髯霜鬢、語偷獰、
淡蕩園林、取次に行く。
識るを要す、將軍不凡の意、
從來、祗だ嗳ふ小人の羹。

【字解】【一】偷獰　[illegible]舍びて武武しい。【二】取次　從容の意。【三】將軍　東坡自ら稱す、合註に「定州安撫使、馬步軍都總管を兼ぬ。故に詩中將軍と稱するを得たり」とある。【四】小人羹　東坡の自註に「この日、父老に酒食を設す」とある。但し、字面は、左傳潁考叔の條に本づいたので、前に潁大夫廟の詩中に注して置いた。

【題義】開園は、前に春歩西園の詩中に注して置いた。この詩は、三月二十日、園中で見たところを寫したのである。

【詩意】來り會せる父老輩は、髯も、鬢も、ともに白く、その言葉は田舍びて武武しいが、春景色方に酣なる園林の中を心のどかに歩き廻つて居る。彼等は、從來、御馳走になることを喜んで居るから、この日も、特に酒食を給したのであるが、それにつけても、予の並並ならぬ微意を了解して貰ひたい。

【餘論】紀昀の評に「末句、晦」とあるが、いかにも尤もである。

西園牡(一)籥夜沈沈。　西園の牡籥、夜沈沈、

尙有游人臥柳陰。　なほ游人の柳陰に臥するあり。

鶴睡覺時風露下。　鶴睡、覺むる時、風露下り、

落花飛絮滿衣襟。　落花飛絮、衣襟に滿つ。

【字解】〔一〕牡籥　差し込む様に成つて居る錠前。

【詩意】西園の門は鎖され、夜沈沈として更け行く頃、醉ひつぶれて、柳の陰に寐て居る游人がある。やがて、睡つて居た鶴が驚いて目をさますと、風露、天より下り、落花飛絮が、その游人どもの衣襟にふりかかつた。

【餘論】紀昀は「二首、少しく致あり」といつて居る。

鬱鬱蒼(一)髯眞道友。　鬱鬱たる蒼髯、眞に道友、

絲絲紅萼是鄕人。　絲絲たる紅萼、是れ鄕人。

何時翠竹江村路。　何の時か、翠竹江村の路、

送我柴門月色新。　われを送つて、柴門、月色新ならむ。

【字解】〔一〕蒼髯　東坡の自註に「蒼髯は松なり、紅萼は海棠なり」とある。

【詩意】鬱鬱たる長松は、まことに我が道友であるし、絲絲として垂れて居る海棠は、わが同鄕の人である。あはれ、故里に於て、翠竹の生ふる江村の路をたどり行く時、月色新にして、われを柴門に送り込むのは、何時であらうか。

【餘論】紀昀の評に「これは太だ滑」とある。

次韻王雄州送侍其涇州　　王雄州の侍其涇州を送るに次韻す

威聲又數中興年。　威聲、又數ふ中興の年、

二(一)虜行當一矢聯。　二虜行く〳〵當に一矢聯ぬべし。

【字解】〔一〕二虜　王文誥の案に「二虜は遼夏を指す、蓋し、雄涇を兼ねて言ふなり。合註に、夏國主

乾順及び其國母梁氏を指すと云ふ、全く詩旨に非ず、卽ち二虜の稱亦た妥ならず」とある。【二】三衞 神宗の時の官制に、左右金吾衞・左右衞・諸衞があつて、これを三衞と稱し、前二者には上將軍あり、諸衞には大將軍・上將軍・右將軍あり、これを衞官と稱した。【三】十連 禮記に「十國を連となし、連に帥あり」と見ゆ。【四】號呶 詩經に、賓之初筵、溫溫其恭、賓旣醉止、載號載呶とあつて、騷ぎ立てることを。

聞道名城得眞將。　聞くならく、名城の眞將を得たるを、
故應驚羽落空弦。　故に應に、驚羽、空弦に落つなるべし。
追鋒歸去雄三衞。　鋒を追うて歸り去つて、三衞に雄に、
授鉞重來定十連。　鉞を授け、重ねて來つて、十連を定む。
別酒回頭便陳跡。　別酒、頭を回らせば、便ち陳跡、
號呶端合發初筵。　號呶、端、合に初筵に發すべし。

【題義】侍其は複姓、その名は分からぬ。この詩は、知雄州王崇拯が侍其某の涇州に赴任するを送つた作に次韻したのである。

【詩意】この中興の盛時に當つて、君の威聲は、他に類なく、やがて、遼夏二虜を唯だ一箭に聯ねて射倒すであらう。涇州の名城が眞の將軍を得たるは、まことに相應しく、驚いた鳥どもは、弓弦を素引してさへ落ちて來るであらう。そこで、賊の先鋒を追ひかけて後、歸り來れば、三衞に雄として、その名、愈よ高く、天子より斧鉞を授かり、重ねて來ると、定めて連帥の重職に就かれることであらう。その時、首を回らせば、別の酒を酌んだ此地も、やがて陳跡となり、初めて筵を開いた時から、衆賓は、機嫌よく騷ぎ立てたことを記憶して居られるであらう。

初貶英州過杞贈馬夢得

初めて英州に貶せられ、杞を過ぎて馬夢得に贈る

萬古仇池穴。歸心負雪堂。　萬古、仇池の穴、歸心、雪堂に負く。
殷勤竹裏夢。猶自數山王。　殷勤、竹裏の夢、猶ほ自ら山王を數ふ。

【字解】【一】仇池穴 前に「留題石經院」の詩中に註して置いた。【二】雪堂 前に「聞大冶長老」、及び「次韻韻發父久早」の詩中に註して置いた。【三】山王 山濤と王衍、前に「次韻王鞏」の詩中に註して置いた。

【題義】紹聖元年四月、東坡は、前に制命を掌りし時、語、譏訕に渉るに坐して、知英州に落職したから、その地に赴かむとして、杞を過ぎ、仍つて、この詩を馬夢得に贈つたのである。夢得は、前に東坡八首の中にも見え、もと杞の人であつた樣に思はれる。

【詩意】むかしから、仙界に通ずるといふ仇池の穴を尋ぬることも出來ず、せめて雪堂に歸らうと思ふ心にさへ孤負することになつて、今度は、英州に往くのである。ここに、舊友の馬夢得の事を思ふと、まことに、なつかしく、竹林に似たる舊日の清游も、最早、夢となつたが、山濤・王衍に比すべき予を共仲間に入れて呉れた親切は、流石に忘れ兼ねる。

【餘論】紀昀の評に「語、兩意を含む、詩人の筆」とあるのは、後半二句を指したのである。

臨城道中作　臨城道中の作

予初赴中山、連日風埃、未嘗了了見太行也、今將適嶺表、頗以是爲恨、過臨城内邱、天氣忽清徹、西望太行、草木可數、岡巒北走、崖谷秀傑、忽悟嘆曰、吾南遷、其速返乎、退之衡山之祥也、書以付邁、使志之。

【訓讀】予、はじめ中山に赴く、連日風埃、未だ嘗て了了太行を見ざるなり。今、將に嶺表に適かむとす、頗る是を以て恨となす。臨城内邱を過ぐ、天氣忽ち清徹、西、太行を望めば、草木數ふべく、岡巒北走、崖谷秀傑、忽ち悟り、嘆じて曰く、吾、南遷するも、其れ速に返らむか、退之衡山の祥なり、と。書して以て邁に付して、これを志さしむ。

逐客何人著眼看。　逐客、何人か眼を著けて看る、
太行[一]千里送征鞍。　太行千里、征鞍を送る。
未應愚谷[二]能留柳。　未だ應に、愚谷、能く柳を留むべからず、
何獨衡山[三]解識韓。　何ぞ獨り、衡山、韓を識るを解するのみならむや。

【字解】【一】太行　述征記に、「太行山の首は河内に始まり、北、幽州に至る、凡そ百嶺、十三州に亘り、八陘あり」とある。【二】愚谷　柳宗元の愚溪詩の序に「余、愚を以て罪に觸れ、瀟水の上に謫せられ、この溪を愛して家す。古しへ、愚公谷あり、故に之を更めて愚溪となす」とある。【三】衡山　前に海市の詩中に注して置いた。

【題意】臨城は、太平寰宇記に「趙州に屬す。定州の西南一百里に在り、漢、ここに房子縣を置く。天寶元年、臨城と改む」とあり、内邱は、同書に「漢の中邱縣、隋、内邱と改む、趙州に屬す。大業二年、改めて邢州に屬す。州北五十八里に在り」と記してある。この引は——予の初めて中山に赴くときは、連日風ほこりで、遂にはツきりと太行山を見ることが出來なかつた。今、嶺南に赴任せむとするに際し、この事を餘程殘念に思つて居た。然るに、臨城の内邱を通る時に、天氣澄みわたり、西、太行山を望むと、草木までも數へられる位、岡巒北に走り、崖谷の勢極めて秀傑である。そこで、忽ち心に悟り、覺えず歎息して「吾は、南方に左遷されるが、速に返ることに成るであらう。これは、韓退之が衡山の下を通る時、俄に霽れて山が見えたと同じ瑞祥である」といひ、仍つて、この詩を書して、長子邁に與へ、よく覺えて居よといつたといふのである。

【詩意】逐客となつた上は、誰が特に注意して見やうか、大方さういふ人もあるまいが、太行の山色、極めて明かに、千里を隔てて、わが征鞍を送り、さながら心ありげである。予は、愚谷が柳宗元を留めたるが如く、僻境に長く居ることは無かるべく、太行山の能く見えて緣起の善いことは、ひとり、衡山が韓愈を見知つて、特に霽れたといふ、それ位な事では無い。

過湯陰市、得豌豆大麥粥、示三兒子

湯陰市を過ぎ、豌豆・大麥の粥を得て三兒子に示す

朔野方赤地(一)。河壖(二)但黃塵。
　朔野、方に赤地、河壖、但だ黃塵。

秋霖暗豆莢。夏旱臛麥人(三)。
　秋霖、豆莢暗く、夏旱、麥人を臛す。

逆旅唱晨粥。行庖(四)得時珍。
　逆旅、晨粥を唱へ、行庖、時珍を得たり。

青斑照匕箸。脆響鳴牙齦。
　青斑、匕箸を照らし、脆響、牙齦に鳴る。

玉食(五)謝故吏。風餐(六)便逐臣。
　玉食、故吏に謝し、風餐、逐臣に便す。

漂零竟何適。浩蕩寄此身。
　漂零、竟に何くにか適く、浩蕩、この身を寄す。

爭勸加餐食。實無負吏民。
　爭うて餐食を加へむことを勸む、實に吏民に負くなし。

何當萬里客。歸及三年新(七)。
　何ぞ當に萬里の客、歸つて三年の新に及ぶべき。

【字解】(一)赤地　作物の出來ざることを云ふ。(二)河壖　黃河の岸。(三)麥人　人は心、麥の穗。(四)行庖　旅館の臺所。(五)玉食　結構な食物。(六)風餐　旅中の食。(七)三年新　新は新に出來た穀菜。

【題義】湯陰は、元和郡縣志に「相州湯陰縣、蕩水あり、因つて以て名となす」とある。三兒子は、邁・迨・過の三人。この詩は、湯陰の市を過ぐる時、豌豆と大麥とを交せて炊いた粥を得て食つた處が、大に美味であつた處から、これを作つて、三人の子息に示したのである。

【詩意】北方朔邊の地は、今年は物なりが惡いので、畑は丸で無一物、おまけに、黃河の岸邊には、黃塵が吹き滿ちて居る。秋、長雨が續いた爲に、豆の莢も實が入らず、夏は旱であつた爲に、麥の穗も伸びない。然るに、今朝、旅館に於て粥を注文した處が、臺所の者が氣を利かして、時の物を以て拵へて吳れた。豌豆の靑くして斑なるは、匕や箸に映じ、これを食ふと、ぎいぎいといふ音が、齒や齒莖に鳴つて居る。今日の境涯では、たとひ、故吏が玉食を贈つて吳れても、謝絶すべく、宿屋の不味い飯が、放逐されたものには丁度相應はしい。これより、予は飄零して、結局、何處に往くべきか知らねど、浩蕩たる江海に此身を寄せる外はない。人人は、爭つて養生せよと勸め、予とても、吏民に孤負せず、出來る丈は治を圖る積りである、成らう事ならば、萬里の遠きに往つても、三年の內には歸つて來て、新しい穀菜を食ひたいものである。

【餘論】紀昀は、極めて簡單に「和平」の二字を以て、全篇を評して居る。

被命南遷、途中寄定武同僚

命を被りて南遷し、途中、定武の同僚に寄す

人事千頭(一)及萬頭。
　人事千頭及び萬頭、

【字解】(一)千頭　千件といふ

得時何喜失時憂。　時を得て何ぞ喜び、時を失つて憂ふ。
只知紫綬三公貴。　只だ知る、紫綬三公の貴きを、
不覺黃粱一夢游。　覺めず、黃粱一夢の游。
適見恩綸臨定武。　適ま見る、恩綸、定武に臨むを、
忽遭分職赴英州。　忽ち分職に遭うて、英州に赴く。
南行若到江干側。　南行、もし江干の側に到るも、
休宿潯陽舊酒樓。　宿するを休めよ、潯陽の舊酒樓。

【二】紫綬　漢書に「太尉は金印紫綬」とあり、後漢書輿服志に「公侯將軍は紫綬、二采紫白」とある。【三】三公　時代に因つて違ふので、周では太師・太傅・太保、前漢では丞相・大尉・御史大夫、後漢では大尉・司徒・司空で、以後、これに從つて改めない。【四】黃粱一夢　盧生の故事、前に今年正月の詩中に注して置いた。【五】定武　軍の名、即ち定州定武軍。【六】分職　落職に同じ。【七】潯陽舊酒樓　唐の白居易、九江郡司馬に左遷せられ、夜、客を湓浦口に送つて、琵琶行を作つた。その破題に、潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟とある。

【題義】この詩は、命を被つて南に左遷せられ、英州に赴任する途中、定武軍の同僚に寄せたのである。

【詩意】浮世の事は、千件又萬件、變化錯雜、極まりなく、時を得ても、喜ぶに足らず、時を失つても、憂ふるに足らぬものである。なる程、紫綬を垂れた三公の位は、貴いに相違ないが、富貴榮華は、邯鄲の客舍、黃粱一炊の間の夢の、まだ覺めぬと同じである。さきに、詔勅を賜はつて、定武軍に臨んだが、忽ち落職されて、今度は英州に赴任することに成つた。南方に向つて揚子江邊に至るにしても、潯陽の舊酒樓に泊まらぬが善いので、例の琵琶の聲は、定めて、愁に堪へられぬであらう。

【餘論】紀昀は「必ず東坡の作に非ず」といひ、馮應榴も亦た「この詩、先生の自作に非ざるに似たり、題、必ず誤あらむ、再考を俟つ」といつて居るが、なる程、その內容も淺近で、措辭も亦た縱橫の趣に乏しい樣である。

子由新修汝州龍興寺吳畫壁

子由、新に汝州龍興寺の吳畫壁を修む

丹青久衰工不藝。　丹青久しく衰へて、工、藝ならず、
人物尤難到今世。　人物尤も難く、今世に到る。
每摹市井作公卿。　每に市井を摹して公卿と作す、
畫手懸知是徒隸。　畫手、はるかに知る是れ徒隸。
吳生已與不傳死。　吳生、すでに與に死を傳へず、
那復典刑留近歲。　那ぞ復た典刑、近歲に留めむ。
人間幾處變西方。　人間幾處か、西方に變じ、
盡作波濤翻海勢。　盡く波濤海を翻すの勢を作す。

【字解】【一】典刑　前に子由初到陳州の詩中に注して置いた。【二】汝海　汝州に陸海軍を置かれたが故に云ふ。

細觀手面分轉側。　細に手面を觀れば、轉側を分ち、
妙算毫釐得天契。　妙算毫釐、天契を得たり。
始知眞放本精微。　はじめて知る、眞放、本と精微、
不比狂花生客慧。　比せず、狂花の客慧を生ずるを。
似聞遺墨留汝海。　聞くに似たり、遺墨の汝海に留まるを、
古壁蝸涎可垂涕。　古壁の蝸涎、涕を垂るべし。
力捐金帛扶棟宇。　力めて金帛を捐てて、棟宇を扶け、
錯落浮雲卷新霽。　錯落、浮雲、新霽に卷く。
使君坐嘯清夢餘。　使君坐嘯す清夢の餘、
幾疊衣紋數衿袂。　幾たびか、衣紋を疊んで衿袂を數ふ。
他年弔古知有人。　他年、古しへを弔ふ、知る、人あり、
姓名聊記東坡弟。　姓名、聊か記す東坡の弟。

【題義】　譌語陽秋に「汝州の龍興寺、吳道子、兩壁に畫く。一壁には、維摩疾を示し、文殊來り問ひ、天女花を散ずるを作り、一壁には、太子、四門に游び、釋迦魔を降すを作る。筆法奇絶、子由、かつて百緣を施す」とある。この詩は、子由が自ら金帛を喜捨して、汝州龍興寺なる吳道子の壁畫を修治したことを聞いて、作つたのである。

【詩意】　丹青の技も、久しく衰へて、今の工人は、藝の精妙を得て居ない。中にも、人物を畫くことは、すぐれて六つかしく、仍つて、刻下の有樣となつたのである。今では、毎毎市井に見るところを摹寫して、公卿と稱して居るから、畫の品格が極めて卑く、畫手と名乘るものも、實は徒隷に外ならぬ。ここに、吳道子は、その畫とともに不朽の生命を持つて居るので、ひとり、典型を近歲にまで留めて居るに止まらぬ。吳道子の畫いた西方變相の圖は、處處に有るが、さながら、この世を一變したるが如く、いづれも波濤海を翻すの勢を作して居る。そこで、精細に、その手面を觀ると、轉側を分つて、位置自ら判明し、微細なる處に於て、妙技を恣にしたるは、全く天契を得たものである。眞正の放逸は、精徹に本づいたもので、決して、小春の狂ひ咲の花に對して、一寸した慧才を生じたものの比でないといふことが分かつた。吳道子の遺墨は、汝州にも殘つて居ることを聞いた樣だが、古壁に、蝸牛の涎の跡が縱橫になつて居るのは、心ある人をして、涙を垂れしめる。子由は、出來る丈の力を盡し、金帛を喜捨して、棟宇を修繕し、錯落せる浮雲が新霽に卷かれた樣に、臺殿高下、はツきり見える。やがて、君は、清夢覺めし後、その前に坐嘯すると、自然、佛法の有り難味が身にしみ、幾たびか、衣紋を疊み、襟や袂を揃へて、肅然起敬することと思ふ。やがて、他年然るべき人が來て、古しへを弔はば、東坡の弟で、しかじかの姓名の者が、一度は修繕をしたといふことを心に記憶して居る

であらう。

【餘論】紀昀は、始知眞放本精微の二句に就いて「至言、ここに佩すべし、知る、詩家、喜んで迷離、惝怳、及び豪橫の語を作す、皆狂花客慧のみ」といひ「前に王維の竹を詠じて曰く、交柯亂葉動無數、一一皆可尋其源、と。語、相參すべし」といつた。

過高郵寄孫君孚

高郵を過ぎて孫君孚に寄す

過淮風氣清。一洗塵埃容。　淮を過ぎて風氣清く、一洗す塵埃の容。

水木漸幽茂。菰蒲雜游龍。　水木、漸く幽茂、菰蒲、游龍に雜ふ。

可憐夜合花。青枝散紅茸。　憐むべし、夜合の花、青枝、紅茸を散す。

美人游不歸。一笑誰當供。　美人、游んで歸らず、一笑、誰か當に供すべき。

故園在何處。已偃手種松。　故園、何の處にか在る、すでに偃す手種の松。

我行忽失路。歸夢山千重。　わが行、忽ち路を失ふ、歸夢、山千重。

聞君有負郭。二頃收橫縱。　聞く、君が負郭あるを、二頃、橫縱を收む。

卷野畢秋穫。殷牀聞夜舂。　野を卷いて秋穫を畢り、牀に殷いて、夜舂を聞く。

樂哉何所憂。社酒粥面醲。　樂しいかな、何の憂ふるところ、社酒、面に粥して醲なり。

宦游豈不好。毋令到千鍾。　宦游、豈に好からざらむや、千鍾に到らしむる毋れ。

【字解】〔一〕風氣　風韋に同じ。〔二〕游龍　王註に「詩註に云ふ、游龍は紅草なり、その枝葉を放縱にするを以ての故に、これを游龍といふ」とある。〔三〕夜合花　本草に「合歡は、夜合なり、葉は皂莢及び槐に似たり、人家多く庭除の間に種う、極めて細にして繁密」とある。〔四〕紅茸　合歡の花の色微紅、毿毿として毛に似たるを云ふ。〔五〕失路　王註に「自ら其行止躊躇、路を失ふが如きを傷むなり」とある。〔六〕橫縱　田の畝の縱橫に區劃されたるを云ふ。〔七〕殷牀　殷は響く。〔八〕社酒　社は秋社、秋、土地の神を祭ること。〔九〕粥面　顏をゆでる。

【題義】太平寰宇記に「淮南道、高郵、本と揚州縣、開寶四年、建てて軍となし、仍は縣を以て隸す」とあり、施註に「孫君孚、名は升、高郵の人、哲宗立つて監察御史となる。朝廷、法度を更め、姦邪を逐ふや、君孚、建明するところ多し、中書舍人直學士院に擢んでられ、集賢院學士を以て、應天府に知たり。紹聖の初、職を削つて、房歸二州に守たり、汀州に貶せられて卒す」とある。この詩は、東坡が南遷の途中、高郵を過ぎ、その地出身の孫升が歸州に謫せられたことを思ひ出で、仍つて、これに寄せたのである。

【詩意】淮水を渡ると、吹く風も心地よげに、塵に塗れた我が顏を一洗する。やがて、高郵に近づくと、水木次第に茂り合ひ、菰蒲は、紅草に交り、しをらしき合歡の花は、青い枝の上から赤い毛を散らして居る。わが友は、游んで歸らず、誰も、我に供給して吳れる人のないのは、憫笑すべきことで

ある。わが故郷は何處に在るか、その地に於ては、手植の松も、地に這ひ伸びて居るであらう。予は、兎角、失敗ばかり、歸夢は遠く千重の山を隔てて、なかなか歸休する運びに立ち至らぬ。聞けば、君は、この地の城外に二頃の田を持つて居られるさうで、うねが縱横に付いて居る。今しも、野を卷いて、收穫初めて畢り、夜、米を舂く音が、臥牀に響いて聞こえる。ここにさへ居れば、何の心配もなく、秋社の酒を飲むと、忽ち醉うて、顏までも赤くなる。宦游は好くない譯ではないが、とても千鍾を飲む樣な逸興は求められない。そこで、予は、君が遠からず、この地に歸臥せむことを希望する次第である。

【餘論】乾隆御批に「極めて景物の淸幽にして、留連去る能はざるを言ふ。而して、その人の思ふに足ること、自ら見はる、舊に感じて人を懷ふ、風格最も古し」といひ、又「この詩、南遷の時に出で、孫升、亦た貶謫に遭ふ。篇中、絕えて牢騷抑鬱の意を露はさず、津津として、其れ遺味あり」といつて居る。紀昀も亦た同じ樣に「その怨尤を露はさざるを喜ぶ」といひ、そして、例の如く「二頃の句、妥ならず」とて、一寸惡口を言つて居る。

僕所至未嘗出游過長蘆聞復禪師病甚不可不一問既見則有間矣明日阻風復留見之作三絕句呈聞復並請轉呈參寥子各賦數首

僕至るところ、未だ嘗て出游せず、長蘆を過ぐるに、聞復禪師の病甚し、一たび問はずんばあるべからず。既に見れば間あり。明日、風に阻まれ、復た留まりて之を見る。三絕句を作りて聞復に呈し、並に請うて、轉じて參寥子に呈し、各〻數首を賦す

亦知壺子不死。
敢問老聃所游。
瑟瑟寒松露骨。
耽耽老虎垂頭。

亦た知る、壺子の死せざるを、
敢て問ふ、老聃の游ぶところ。
瑟瑟寒松、骨を露はし、
耽耽老虎、頭を垂る。

【字解】【一】壺子　莊子に「鄭に神巫あり、季咸といふ。列子、これと壺子を見る。出でて列子に謂つて曰く、嘻、子の先生は死なむ、活きず、と。列子、入つて、泣涕襟を沾し、以て壺子に告ぐ。壺子曰く、さきに、吾、これに示すに地文を以てす、これ殆んど吾が德機を杜ぐを見たるなり、と。明日、又これと壺子を見る。出でて列子に謂つて曰く、幸なり、子の先生の我に遇ふや、瘳ゆるあり、全然生あらむ。壺子曰く、さきに、吾、これに示すに天壤を以てす、これ殆んど吾が善者の機を見たるなり」とある。【二】老聃　莊子に「孔子、老聃を見る、老聃、新に沐して曰く、これ心を物の初に游ばす」とある。

【題義】施註に「聞復、名は思聰、先生、かつて敍あり。その孤山に歸るを送つて曰く、錢塘の僧思聰、七歲善く琴を彈す、十二、琴を捨てて書を學ぶ、書、すでに工なり、十五、書を捨てて詩を學ぶ、詩に奇語あり、老師宿儒、皆これを敬愛す、と。秦少游、楞嚴文殊の語を取り、これを字して聞復と

いふ」とある。題の意味は——予は、何處に往つても、格別出游することはない。長蘆を過ぐる時、聞復禪師が病甚しといふので、是非、一度尋ねなければならなかつたから、往つて遭つて見ると、病氣は、少しく善い樣であつた。その翌日、風の爲に阻まれて舟が出ないから、復た滯留して、之を尋ね、三絶句を作つて聞復に呈し、竝に請うて、轉じて參寥に呈し、各〻數首を賦せしめたといふので、絶句とはいふものの、六言絶句である。

【詩意】君の病氣は、少しく快方で、さながら、壺子の死せざるが如く、そして、老聃の樣に新に沐して物の初に游ぶか如何。君の病める樣は、瑟瑟の聲をなす寒松が骨を露はすが如く、又耽耽たる病虎が頭を垂れて居る樣である。

莫言西蜀萬里。　言ふ莫れ、西蜀萬里と、
且到南華一游。　且つ南華に到つて一游せむ。
扶病江邊送客。　病を扶けて、江邊、客を送り、
杖挐浦口回頭。　挐に杖ついて、浦口、頭を回らす。

【字解】（一）南華　韶州に在る寺の名、始興志に「南華山は、縣南六十里に在り、峰轡環抱、狀、蓮花の如し。その東南、曹溪の水出づ。梁時、天竺の僧智藥、溪口に至り、水香を聞き、掬して之を飮んで、曰く、この水の上流に勝池あり、と。遂に土人曹叔良に謂す、叔良は魏武の裔孫なり、因つて、宅を捨てて寺と爲す。唐の儀鳳間、盧惠能、黃梅の衣鉢を傳へて之に居り、これを六祖となす」とある。（二）杖挐　挐は橈、かいに杖つく。

【詩意】君の故郷は、西蜀であつて、萬里を隔つて居るが、しばらく、その遠きを言はず、南華寺に往つて、病後、一修行やつたら善からう。そこで、病中ながら、江邊に去客を送りし後は橈に杖ついて、浦口に頭を回らし、やがて、その地に往かれることであらう。

老去此生一訣。　老去、この生一訣、
興來明日重游。　興來つて、明日重游。
臥聞三老白事。　臥して聞く、三老の事を白するを、
半夜南風打頭。　半夜、南風、頭を打つ。

【字解】（一）三老　王註には「引船の人」とあり、施註には「古詩話、川峽、船公篙手を呼んで三老となす」とある。（二）打頭　逆風の舷頭に吹き當るをいふ。

【詩意】予は老い去つて、これが今生の別れであるかも知れぬが、興來れば、明日も重ねて游びに來やうと思つて居たが、臥して船頭が事を申し述ぶるを聞きつつ、夜中には、南風が逆に吹いて舟が出ず、又ぞろ、逗留することに成つた。

六月七日、泊金陵阻風、得鍾山泉公書寄詩爲謝

六月七日、金陵に泊して風に阻まれ、鍾山の泉公の書を得、詩を寄せて謝と爲す

今日江頭天色惡。　今日、江頭天色惡しく、

【字解】（一）礮車雲　國史補に

礮車雲起風欲作。　礮車の雲は起つて、風、作らむと欲す。

獨望鍾山喚寶公。　獨り蔣山を望んで寶公を喚ぶ、

林間白塔如孤鶴。　林間の白塔、孤鶴の如し。

寶公骨冷喚不聞。　寶公、骨冷かにして、喚べども聞こえず、

却有老泉來喚人。　却つて、老泉の來つて人を喚ぶあり。

電眸虎齒霹靂舌。　電眸虎齒、霹靂の舌、

爲余吹散千峯雲。　余の爲に、吹き散す千峯の雲。

南行萬里亦何事。　南行萬里、亦た何事、

一酌曹溪知水味。　一たび曹溪を酌んで、水味を知る。

他年若畫蔣山圖。　他年、もし蔣山の圖を畫かば、

爲作泉公喚居士。　爲に泉公を作して、居士と喚ばしめむ。

「暴風の候、礮車雲あり」と記し、王直方詩話に「舟人、雲を占し、礮車の若くなれば、急に之を避く」とある。【二】寶公　南史隱逸傳に「釋寶誌、宋の太始中に於て、鍾山に出入し、都邑に往來し、未兆を預言し、他の心智を識り、一日中、分身して所を易ふ、遠近驚赴す」とあり、僧史に「寶公大士、諱は寶誌、手足鷹爪。初め建康朱氏の婦、兒の鷹巢中に啼くを聞き、樹に梯して之を得、養うて以て子となす。七歲、鍾山の僧儉に依つて出家す。梁の天監の初、錫を鍾山に卓つ。十三年入滅、定林寺前の獨龍岡に葬り、塔五層を建て、塔前に開善寺を建つ、王筠に敕して碑文を撰せしむ」とある。【四】曹溪　禪宗の一派。【三】霹靂舌　韓愈の遣瘧鬼の詩に、訕師毒口牙、舌作霹靂聲とある。霹靂は、雷霆の如く音を發して舌が動く。【五】蔣山　卽ち鍾山、南京の郭外に在る。輿門略に「建康の北十餘里、鍾山あり、舊名金山、漢末、秣陵尉蔣子文、賊を討つて戰亡し、靈、山に發す、因つて蔣侯祠を建つ、故に世號して蔣山と曰ふ」とある。

【題義】傳燈錄に「蔣山の佛慧禪師、名は法泉、隨州時氏に生まる。出家して博く羣書を極め、過目、誦を成す、雅泉萬卷と號す。建康中、鍾山に住む」とある。この詩は、六月七日、金陵、卽ち今の南京に舟を泊した處が、風に阻まれて、逗留して居ると、鍾山に住む法泉といふ坊さんからの手紙を受取つたから、その挨拶として、これを寄せたといふのである。

【詩意】今日、大江の邊に於ては、天色模樣が頗る惡く、礮車の形せる雲が出て、やがて、風の起らんする景色。ひとり、鍾山を望んで、古しへの寶誌上人を呼び起さうとすれば、林間の白塔が、孤鶴の如く見える。寶誌上人は、遠き昔に死んで、その骨、すでに冷かに、呼んだ處で、聞こえもせず、却つて、老いたる法泉上人の處から手紙が來た。上人は、電光の如き目を剝き出し、虎の樣な齒を食ひしばり、霹靂を鳴らす舌で、呪文を唱へて、予の爲に千峰の雲を吹き散せしめたので、その厚意は、まことに辱い。予は、これから、萬里の南方に往くが、それは、格別の事でもなく、それよりも、一たび曹溪の流を汲んで、水味を知り、つまり、禪の妙趣に到達したいと願ふばかり。そこで、他年、鍾山の圖を畫いたならば、見事に、この法泉上人を感服せしめ、予を居士と呼んで貰はうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「起勢離奇」といひ、又、却有老泉來喚人の數句を評して「電過飇廻、筆力橫絕」といつて居る。

贈清涼寺和長老

清涼寺の和長老に贈る

（一）代北初辭沒馬塵。　代北、初めて辭す馬を沒するの塵、
江南來見臥雲人。　江南、來り見る雲に臥するの人。
問禪不契前三語。（二）　禪を問うて契せず、前三の語、
施佛空留丈六身。（三）　佛に施して空しく留む、丈六の身。
老去山林徒夢想。　老去、山林、徒に夢想、
雨餘鐘鼓更清新。　雨餘の鐘鼓、更に清新。
會須一洗黄茆瘴。（四）　會ず須らく黄茆瘴を一洗すべし、
未用深藏白氎巾。　未だ用ひず深く白氎巾を藏するを。

【字解】【一】代北　即ち河北、定州を云ふ。【二】前三語　延一の廣清涼傳に「大歷中、釋無著、五臺山に至り、一寺を見、僧に問ふ、この處、衆、幾何あるか。答へて曰く、前三三、後三三、と。無著、對ふるなし。僧曰く、すでに解せざれば、速に須らく引き去るべしと。首を回らせば、寺、即ち隱る。無著、愴然として偈あり、云ふ、言下不知開佛印、回頭只見舊山巖」とある。【三】丈六身　袁宏の後漢紀に「西域天竺國に佛道あり、長丈六尺、黄金色、頂中日月の光を佩びて、變化方なく、所として入らざるなくして、大に羣生を濟ふ」とあり、査註に「本集、阿彌陀佛贊の叙に云ふ、蘇軾の妻王氏、京師に卒す、遺言して、受用するところを捨て、その子、邁・迨・過をして爲に阿彌陀佛像を畫かしめ、紹聖元年六月九日、像成つて、金陵清涼寺に奉安す」とある。【四】黄茆瘴　房千里の投荒記に「南方六七月、芒茆黄に枯るる時、瘴、大に發す、土人呼んで黄茆瘴と爲す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。金陵梵刹志に「石頭山清涼寺は、府城の西、清涼門内古清涼山に在り、吳の順義中、徐溫建てて興教寺となす。南唐、改めて石頭清涼道場となす。宋の太平興國五年、清涼廣惠禪寺と改む、後、重修、陸游、記あり」と見ゆ、和長老は失考。

【詩意】予は、代北定州の馬を沒するばかりなる邊境の黄塵を遁れ、ここに江南に來り、平生雲に臥する老師に參謁した。禪を問うた處で、前三三といふ樣な語は分からぬが、亡妻の爲に、佛に施して、丈六の阿彌陀畫像を此寺に留めて置くことにした。老後、山林は、徒に夢想に歸し、そこに隱棲するのは、何時とも分からず、雨あがりの日には、鐘鼓の響さへ、殊に清新に聞こえる。ここに來た上は、しばし落ち付いて、黄茆瘴を一洗すべく、さうすれば、白氎巾で深く此身を包み隱すにも及ばぬであらう。

予前後守倅餘杭凡五年秋夏之間蒸熱不可過獨中和堂東南頰下瞰海門洞視萬里三伏常蕭然也紹聖元年六月舟行赴嶺外熱甚忽憶此處而作是詩

予、前後餘杭に守倅たること凡そ五年、秋夏の間、蒸熱過ごすべからず。獨り中和堂の東南頰は、海門を下瞰し、萬里を洞視し、三伏常に蕭然たり。紹聖元年六月、舟行して嶺外に赴き、熱甚しく、忽ち此處を憶うて、この詩を作る

（一）忠孝王家千柱宮。　忠孝の王家、千柱の宮、

東坡作吏五年中。　東坡、吏と作る五年の中。

（二）中和堂上東南頰。　中和堂上東南の頰、

獨有人間萬里風。　獨り人間萬里の風あり。

【字解】【一】忠孝王家　錢氏なり。王註に「吳越王錢俶、太平興國三年を以て、擧族歸朝、卒して忠懿と諡す」とある。【二】中和堂　題義の項に注してある。【三】東南頰　王註に「頰の字、內地の常語、宮室の旁な頰といふ。猶ほ人の頤頰のごときなり」とある。

【題義】西湖游覽志に「中和堂は、鳳凰山下に在り、暑月最も快」とある。題の意味は——予は、餘杭、卽ち杭州に守倅となりしこと、前後合せて五年、夏秋の間は、蒸し暑くて、過ごすことが出來ぬが、唯だ中和堂の東南房のみは、海門を俯瞰し、萬里を洞視し、三伏の間でも、常に蕭然として居る。ここに紹聖元年六月、舟で嶺外に赴かむとし、暑氣甚しきに因つて、ひよッと中和堂を思ひ出して、この詩を作つたといふのである。

【詩意】中和堂は、忠孝を以て知られた錢氏が建てたので、千柱の駢立する大建築。予は、杭州に吏たること五年、度度そこに游びに往つた。その中和堂の東南の房のみは、他所と違つて、萬里の風が自由に吹き込んで、まことに涼しかつたから、今に忘れ兼ねて居る。

【餘論】紀昀の評に「太だ率」とある。

慈湖夾阻風五首　慈湖夾、風に阻まる　五首

（一）捍索桅竿立嘯空。　捍索桅竿、立つて空に嘯く、

篙師酣寢浪花中。　篙師、酣寢す浪花の中。

故應（二）菅蒯知心腹。　故らに應に、菅蒯、心腹を知るべく、

弱纜能爭萬里風。　弱纜、能く爭ふ萬里の風。

【字解】【一】捍索　桅竿の兩邊の索、卽ち帆柱を引ッ張つてある繩。【二】菅蒯　前に「將至渦口」の詩中に見ゆ、水草の名で、これで綱を綯ふのであらう。

【題義】元和郡縣志に「慈湖は、當塗の北六十五里に在り」と見え、陳克の東南防守利便に「慈湖夾は、太平州界に在り、建康に至る七十五里、石季龍、歷陽に寇せしとき、趙嗣、慈湖に屯す」とある。夾は、入江、もしくは港の義。又、東坡の任德翁に與へた書に「某、磁湖夾に在つて、風に阻まるるすでに累日、今日、風亦た甚だ順ならず、且つ寸進前み去る」とあつて、この詩と互證することが出來る。

【詩意】繩で堅く引ッ張られた帆柱は、立つたまま、風に嘯いて居るが、船頭は、平氣で浪立ち騷ぐ中に、ぐうぐうと寢つて居る。菅蒯は、船客の心腹を知り拔いて居ると見え、弱い纜ながら、萬里の風と爭ひ、しッかり舟を繫ぎ止めて、覆沒の患の無い樣にして居る。

此生歸路轉茫然。　この生、歸路、轉た茫然、

【字解】【一】墟落　村里、施註

無數青山水拍天。　無數の青山、水、天を拍つ。
猶有小船來賣餅。　猶ほ小船の來つて餅を賣るあり、
喜聞墟落在山前。　喜び聞く、墟落の山前に在るを。

【詩意】わが生の歸路は、何處に在りや、茫然として知るべからず、無數の青山は、遠くに見え、大江の水は、逆卷いて、波は天を拍つばかり。しかし、小舟で餅を賣りに來るものがあつて、その者の話で、山の前に村里があるといふことを聞いて、稍や心強く覺えた。

【餘論】紀昀は「當前の寥落、知るべし」といつたが、王文誥は「然れども、この二句は、乃ち風に遇うて船を泊し、初めより、頭路人語を辨せず、惟だ江湖に老いたるもの、これを知る、眼前の寥落を道ふに非ざるなり」といつて居る。

に「說文、虛は大邱なり、古しへは九夫を井となし、四井を邑となし、四邑を邱となし、邱、これを虛といふ」とある。

我行都是退之詩。　わが行、すべて是れ退之の詩、
眞有人家水半扉。　眞に人家、水、半扉なるあり。
千頃桑麻在船底。　千頃の桑麻、船底に在り、
空餘石髮掛魚衣。　空しく石髮を餘して、魚衣を掛く。

【字解】〔一〕退之詩　韓愈の宿曾江口の詩に雲昏水奔流、天水漭相關、三江滅無口、其誰識涯圻、暮宿投民村、高處水半扉とある。〔二〕石髮　爾雅釋草に「藫、石衣」註に「水苔なり、一名石髮、江東、これを食ふ」とあり、査註に「酉陽雜俎、南中水底に草あり、石髮の如し。毎月三四日、はじめて生じ、八九以後に至らば、采つて食ふべし、月盡くるに及んで、悉く彌れ、月に隨つて盛衰するものに似たり」とある。すると、水中の苔といふものの、藻の一種であらう。〔三〕魚衣　ただ魚といふに同じ。

【詩意】わが今次の旅行中に見るところは、すべて、韓退之の詩の通りで、洪水は、人家の扉の半ばに及んで居る。されば、桑麻を植ゑた千頃の畑は、すべて船底に在る樣な次第、岸邊には、藻が殘つて居て、それに魚が引ッかかつて居る。

【餘論】紀昀は「亦た致あり」といつて居る。

日輪亭午汗珠融。　日輪亭午、汗珠融なり、
誰識南訛長養功。　誰か識らむ、南訛長養の功。
暴雨過雲聊一快。　暴雨過雲、聊か一快。
未妨明月却當空。　未だ妨げず、明月の却つて空に當るを。

【字解】〔一〕亭午　亭は停まる。太陽が其地の子午線に停まる、卽ち丁度その地に來ること。〔二〕南訛　書經に「申ねて羲叔に命じ、南郊に宅して、南訛を平秩す」とあつて、その註に「訛は化なり、掌夏の官、南方化育の事を平秩す」とある。ここでは南方の義。

【詩意】日輪が丁度、その地に來ると、眞晝の著さは、汗の珠を流れしめるが、南方を氣長く敎養する功績は、誰か識別すべき。暴雨と過雲とは、一寸爽快を覺え、加之、すでに晴れるから、夜、明月の空に當ることを妨げない。

309
65

【餘論】 紀昀の評に「次句、腐」とあり「末二句、寓意」とある。

臥看落月横千丈。 臥して看る、落月の千丈に横ふを、

起喚清風得半帆。 起つて清風を喚んで半帆を得たり。

且並水村攲側過。 且つ水村に並んで、攲側して過ぐ、

人間何處不巉巖。 人間、何の處か巉巖ならざらむ。

【詩意】 臥して見れば、落月は、千丈の高い處に横はり、起つて清風を呼べば、やッと帆に半ばなる位。そして、舟は水村と平行して、傾きながら走り過ぎ、いかにも、危險らしく見えるが、人間、何處か巉巖ならざるべき、さう思へば、格別おそろしくもない。

【餘論】 紀昀は「末句、太だ露」とある。乾隆御批に「荒灣旅泊、却つて卽事を寓し得て、皆喜ぶべし。この數詩を讀まば、以て塵襟を開豁するに足る」とあるは、卽ち總評である。

終

續國譯漢文大成

文學部・六十七の上

309
65

漢 入

始

吉田待郎氏寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第六十七册（第十七帙の上ノ三）

蘇東坡詩集 五の三

309
65

蘇東坡詩集卷三十八

古今體詩 四十四首

過廬山下

廬山の下を過ぐ

予過廬山下、雲物騰涌、默有禱焉、未午衆峯凜然、故作是詩。

【訓讀】予、廬山の下を過ぐ、雲物騰涌、默して禱るあり、未だ午ならざるに、衆峯凜然、故にこの詩を作る。

亂雲欲(一)霾山。勢與飄風南。　亂雲、山に霾せむと欲し、勢、飄風と南す。

羣(二)隮相應和。勇往爭(三)驂驔。　羣隮、相應じて和し、勇往、驂驔を爭ふ。

可憐薈(四)蔚中。時出紫翠嵐。　憐むべし、薈蔚の中、時に紫翠の嵐を出すを。

雁沒失東嶺。龍騰見西龕。　雁は沒して東嶺を失ひ、龍は騰つて西龕に見はる。

一時供坐笑。百態變立談。　一時坐笑に供し、百態、立談に變す。

暴雨破(五)坱圠。清飈掃渾(六)酣。　暴雨、坱圠を破り、清飈、渾酣を掃ふ。

廓然歸何處。陋矣安足(七)戡。　廓然として何處にか歸る、陋なり、安んぞ戡むるに足らむ。

(八)亭亭紫霄峯。(九)窈窕白石菴。　亭亭たる紫霄峯、窈窕たる白石菴。

五老數松雪。(一〇)雙溪落天潭。　五老、松雪を數へ、雙溪、天潭に落つ。

雖云默禱應。顧有(一一)移文慙。　默禱應ありと云ふと雖も、顧みて、移文に慙づるあり。

【字解】【一】靄山　靄は土ふるといふ字だが、ここでは山を晴ます。【二】躋陟　躋は登る、立ちのぼる氣。【三】絡繹　ともに馬の種類。【四】蒼蔚　樹木の茂れること。【五】挾孔　賈誼の鵩賦に大鈞播物、挾孔無垠とあつて、その註に「挾は廛なり、孔は山曲なり」とある。【六】濛雨　暗く閉ぢこめたるを云ふ。【七】足戡　戡は殺す、刺す。【八】亭亭　高く聳ゆる貌。【九】窈窕　奥深き貌。【一〇】雙溪　廬山記に「太虛觀寂觀は、宋の陸先生の隱居なり。その間、一峰秀卓するものを紫霄峰といふ。白氏草堂を過ぐ、半山に二泉あり、石間に出づ、名づけて雙玉淵といふ。萬壽院の南三里、下白石に至り、又三里、上白石に至る、詠鶴洞天・五老峰、正に其後に在り」と見ゆ。【一一】移文　孔稚圭の北山移文、前に喬將行及び次韻王鞏留別の諸詩中に注して置いた。

【題義】引の意味は——予が廬山の麓を通過すると、雲煙湧き上つて、何も見えない。默して禱ると、未だ亭午にもならざるに、衆峰凜然として、盡く露はれた。そこで、この詩を作つたといふのである。

【詩意】亂雲は、もくもくと湧き出でて、山を閉ぢこめ、その勢は、飄風と共に南するが如く、立ち升る樣樣の氣は、應じて相和し、その勇んで進む樣は、馬が先を爭ふ樣である。樹木の茂れる中からは、時時、紫翠の色せる山氣を吹き出す。そこで、雁は影を沒して、東嶺の彼方に見えなくなり、龍は上つて、西龕の近くに現はれた。この景色は、一時、坐笑に供すべく、そして、百態は、立談の間に變化する。やがて、暴雨は、塵多き山曲を衝き崩し、涼しき廻風は、暗黑を吹き掃つた。廓然として、何處から晴れるか、萬象は、自然に澄み行くので、力を用ひて之を戡定するのは、愚の至である。亭亭として高き紫霄峰も、窈窕として奥深き白石菴も、次第に見え、五老峰上、雪を帶びたる松は、明かに數ふべく、雙溪の流は、天潭に注いで居る。これは、默禱した應驗であるが、顧みれば、この身、なほ風塵中に奔走して居るから、かの北山移文に對して、愧ぢ入ることを免れない。

【餘論】乾隆御批に「雲鬟新に霽れ、氣象萬千、列秀青青、すでに廬山の眞面目を見る」とあり、紀昀は「蒼蔚の章より化出し、語意顯と雖も、しかも、露はれず、比を用ふるが故なり」といひ「結處、應に再び數語あるべし、文意、文氣、方に足る、說破せざるを欲せざるを以て、著筆に難し、故に草草覚住、然れども、須らく著筆し難き處に於て著筆すべく、方に本領を見る、故に此詩完美と爲さず」といつて居る。

壺中九華詩

壺中九華の詩

湖口人李正臣、蓄異石、九峯玲瓏宛轉、若窗櫺然、予欲以百金買之、與仇池石爲偶、方南遷未暇也、名之曰壺中九華、且以詩紀之。

【訓讀】湖口の人李正臣、異石を蓄ふ、九峯玲瓏宛轉、窗櫺の若く然り。予、百金を以て之を買ひ、

仇池石と偶を爲さむと欲す。方に南遷して、未だ暇あらざるなり。これを名づけて壺中九華といひ、且つ詩を以て之を紀す。

清溪電轉失雲峯。　清溪電轉、雲峯を失ふ、
夢裏猶驚翠掃空。　夢裏、猶ほ驚く、翠、空を掃ふを。
（一）五嶺莫愁千嶂外。　五嶺、愁ふる莫れ千嶂の外、
（二）九華今在一（三）壺中。　九華、今、一壺の中に在り。
（四）天池水落層層見。　天池、水落ちて層層として見はれ、
（五）玉女窗虛處處通。　玉女、窗虛しく處處に通ず。
念我仇池太孤絕。　念ふ我が仇池、太だ孤絕、
百金歸買碧玲瓏。　百金、歸つて買はむ碧玲瓏。

【字解】 〔一〕 五嶺　裴氏廣州記に「大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽、これを五嶺といふ」とあり、查註に、「文獻通考、五嶺の說、皆山名を指す。今、これを考ふるに、乃ち入嶺の路、五なるのみ、必ずしも山に非ざるなり。福建より廣東の循梅に入る、一なり。江西の南安より南雄に入る、二なり。湖廣の郴より連に入る、三なり。道州より廣西の賀縣に入る、四なり。全より靜江に入る、五なり」とある。〔二〕 九華　王註に「劉禹錫の九華山歌に引く、九華山は池州青陽縣の西南に在り、九峰秀を競ひ、神采秀異」とある。〔三〕 一壺　神仙壺公の持つて居た壺の如く、その中、別に天地山川ありといふ意味であらう。〔四〕 天池　王註に「青城山記、天池は中峰頂上に在り、旱を積めども竭きず、久雨加へず、人これを穢せば立どころに涸れ、香を爇いて告謝すれば、尋いで舊に復す」とある。〔五〕 玉女窗　王文考の魯靈光殿賦に神仙岳岳於棟間、玉女闚ㇾ窗而下視とある。

【題義】 九華山錄に「青陽縣の坤隅一舍、山あり、奇秀、その數、九あり、古しへ九子山と號す。李白、その號を更めて九華山といふ」とあり、顧野王の輿地志に「山上に九峰あり、千仞壁立、周圍二百里、高さ一千丈」とある。壺山九華とは、九華山の形をして、壺中に收め得る樣な石といふ義。引の意味は——湖口の人李正臣は、一寸攫つた石を持つて居るが、九つの峰が玲瓏宛轉として、窓の欞の如くなつて居る。予は、百金で之を買ひ取つて、兼兼珍藏する仇池石と一對にしやうと思つたが、今しも、南遷の途中、申し込む暇もないから中止し、これを名づけて、壺中九華といひ、且つ詩を作つて之を紀したといふのである。東坡の末子過の斜川集に、七言古詩一首があつて、その題には「湖口の人李正臣、異石を蓄ふ、廣袤尺餘にして九峰玲瓏、老人、これを名づけて湖中九華といひ、詩を以て之を紀し、且つ過に命じて繼いで作らしむ」とある。すると、初めは、湖中九華と名づけたのであるが、その後、湖中を壺中と改めたので、勿論、その方が夐かに面白い。又晁无咎の題跋には「石、高さ五尺」とあるが、それでは、廣袤も之に稱うて、なかなか大きく、とても、席間の愛玩とは成るまじく、矢張、斜川集の方が正しいと思はれる。

【詩意】 清谿に沿へる路は、電光の如く曲折し、雲に聳ゆる九華の奇峰も見えなく成つたが、翠色空を掃ふ景色は、夢に入つて、屢ば驚かされる。今や、五嶺の險路は、千嶂の彼方に在つて、まだ見えぬから、格別愁ふるに及ばず、そして、九華の雛形ともいふべき此石は、一壺の中に在つて、別に天地山川を開いて居る樣である。絕頂の天池から落ちる水は、層層として瀑を爲し、玉女が下に視る爲

の窓は、からりと開いて、處處に通じ、流石に天工を鏟めて、造化の奇を盡して居る。わが仇池石は、唯だ獨りで伴がない處から、予は、百金を投じて、碧色玲瓏たる此石を買ひ取らうと思つた。

【餘論】 查初白は「三句、南遷の意を帶びて覺えず」といつて居る。

南康望湖亭

南康の望湖亭

八月渡₂長湖₁。蕭條萬象疏。　八月、長湖を渡る、蕭條、萬象疏なり。

秋風片帆急。暮靄一山孤。　秋風、片帆急ぎ、暮靄、一山孤なり。

許₂國心猶在。康₁時術已虛。　國に許して、心、猶ほ在り、時を康くす、術、すでに虛し。

岷峨家萬里。投老得₁歸無。　岷峨家萬里、投老、歸るを得るや無や。

【字解】〔一〕岷峨　岷山と峨眉、蜀中の名山。東坡は之を以て故鄕を指して云ふ。成都府志に「岷山は茂州に在り、卽ち瀆山の南首、直上六十里、成都を望むべし。岷江の源、この山より出で、茂威二州を經て、新津の界に至る」とあり、峨眉山記に「眉州城南に在り、岷山より來り、連岡疊嶂、延袤三百餘里、ここに至つて三峰を對峙し、宛として蛾眉の如し」とある。

【題義】 查註に「江西志、南昌吳城驛、吳城山あり、山に望湖亭あり。周煇の淸波雜志、紹興辛酉、煇、侍して隨つて鄱陽に之かむとし、南康に至る。揚瀾左蠡、舟を失ひ、老幼、わづかに身を以て免れ、沙際に小泊し、舟を易ふるを候し、步に信かせて山椒に至る。一寺軒、重湖と名づく、梁間の一木牌、乃ち蘇內翰の留題、榻に登つて之を觀る、卽ち八月、重湖を渡る」とあり、王文誥の案に「吳城山、今南昌に屬す、查註引くところの志と合ふ、すなはち、この題、これを南康望湖亭と謂ふべからず、今、考ふるに、別の本、南康の二字なし、仍つて刪る」とあつて、現に王文誥の本には、唯だ望湖亭とのみ題してある。

【詩意】 八月、秋の半ばに、長湖を渡ると、蕭條として、萬象やや疏に、秋風を受けては片帆頻りに急ぎ、暮靄を帶びては一つの山が離れて見える。國に許せる此心は、依然として猶は存すれども、時を康くするに就いては、格別の術もない。わが故鄕は、岷峨二山に近く、相距つること萬里、老年の身を投じて歸ることが出來るか如何、まことに、覺束ないことである。

【餘論】 紀昀は「但だ唐人の聲貌を存して、味の咀ふべきなし。この種、最も事を害す。しかも、轉じて相神聖とし、自ら命じて高しといひ、或は讐警すれば、輒ち哂つて曰く、俗、と。蓋し盛唐の說行はれて、盛唐の眞、愈よ失ふ」といひ「この格、峭拔を得易し」といひ、要するに、盛唐を學んで、實は似て非なるものだといふのである。

江西一首

江西　一首

江西山水眞吾邦。　江西の山水、眞に吾が邦、

【字解】〔一〕石底江　一枚の石

白沙翠竹石(一)底江。　白沙翠竹、石、江に底す。
舟行十里磨九灘(二)。　舟行十里、九灘を磨し、
篙聲犖确(三)相舂撞。　篙聲犖确、相舂撞。
醉臥欲醒聞淙淙。　醉臥、醒めて淙淙を聞かむと欲す、
直欲一口吸老龐(四)。　直に、一口、老龐を吸はむと欲す。
何人得雋(五)窺魚缸(六)。　何人か雋を得て、魚缸を窺ふ、
擧叉(七)絕叫尺鯉雙。　叉を擧げて絕叫、尺鯉の雙なるを。

が江の底を爲して居る。【二】九灘　王註に「南方、奔水を謂うて灘となす、蓋し卽ち瀨なり」とある。すると、灘の字の本義は、瀑布ではなくて、早瀨である。【三】犖确　石の角角しきをいふ。【四】吸老龐　傳燈錄に「龐居士蘊、馬祖に參して云ふ、萬法と侶たらざるもの、是れ什麼の人。祖云ふ、汝が一口西江の水を吸ひ盡すを待つて、卽ち汝に向つて道はむ」とある。【五】得雋　雋は特に傑出せるもの、ここでは漁人の獲物を云ふ。【六】魚缸　缸は石の水中に竝んで橋を爲すをいふ。【七】擧叉　叉は魚を刺す具。

【題義】名勝志に「晉の元康中、荊揚十郡を分つて江州を立て、豫章郡に治す、唐初、江南道に隷し、開元、江南西道を分つ、江西の名、ここに始まる」とある。この詩は、江西を通過して、その見たところを直敍したのである。

【詩意】江西の山水は、眞に吾が邦となすべく、白沙翠竹、相映じ、江底は一枚の石で出來て居る。舟で下ると、十里の間に、九個處の早瀨がある爲に、篙は、角角しき石に當つて、互に撞き合ふ位。身は醉臥して居たが、早く醒めて、淙淙たる水聲を聞かむと欲し、又老龐をして、一口に、この西江の水を呑み盡さしめたいと思つて居る。誰か知らぬが、漁獲の爲に、石橋の下を窺つて居たが、やがて、叉を擧げて、ここに一尺に餘る鯉が二尾居るといつて、大聲に叫んで居る。

【餘論】紀昀は「直に句ごとに韻を趁はむと欲す」といつて居るが、險韻の穩押を矜る爲に、自然、ここに及んだのであらう。

秧馬歌　　秧馬の歌

過廬陵、見宣德郞致仕曾君安止、出所作禾譜、文既溫雅、事亦詳實、惜其有所缺、不譜農器也、予昔游武昌、見農夫皆騎秧馬、以楡棗爲腹、欲其滑、以楸桐爲背、欲其輕、腹如小舟、昂其首尾、背如覆瓦、以便兩髀雀躍於泥中、繫束藁其首、以縛秧、日行千畦、較之傴僂而作者、勞逸相絕、史記禹乘四載、泥行乘橇、解者曰、橇形如箕、擿行泥上、豈秧馬之類乎、作秧馬歌一首、附於禾譜之末云。

【訓讀】廬陵を過ぎ、宣德郞致仕曾君安止を見る、作るところの禾譜を出す、文、すでに溫雅、事、亦た詳實、惜むらくは、其れ缺くるところあつて、農器を譜せざるなり。予、むかし武昌に遊び、農夫を見るに、皆秧馬に騎す。楡棗を以て腹となして、その滑するを欲す。楸桐を以て背となして、そ

の輕きを欲す。腹は小舟の如くして、その首尾を昂げ、背は覆瓦の如くして、以て兩髀の泥中に雀躍するに便し、束藁を其首に繫ぎ、以て秧を縛し、日に千畦を行く。これを傴僂にして作すものに較ぶれば、勞逸相絶ゆ。史記に、禹、四載に乘じ、泥行、橇に乘るといふ。解するもの曰く、橇は、形、箕の如く、泥上を擿行す、と。豈に秧馬の類か。秧馬の歌一首を作り、禾譜の末に附すといふ。

春雲濛濛雨凄凄。
(一)春秧欲老(二)翠剡齊。
嗟我婦子行水泥。
朝分一隴暮千畦。
腰如箜篌首啄雞。
筋煩(三)骨殆聲酸嘶。
我有桐馬手自提。
頭尻軒昂腹脇低。
背如(四)覆瓦去角圭。

春雲濛濛として、雨凄凄、
春秧老いむと欲して、翠剡齊し。
嗟す、我が婦子、水泥を行くを、
朝には一隴を分ち、暮には千畦。
腰は箜篌の如く、首は啄雞、
筋は煩に、骨は殆く、聲酸嘶。
われに桐馬あり、手、自ら提ぐ、
頭尻軒昂、腹脇低し、
背は覆瓦の如くして、角圭を去る。

【字解】〔一〕春秧　稻の苗。〔二〕翠剡　剡は立ちあがる、勢よく伸びること。〔三〕骨殆　殆は危い、骨が痛む。〔四〕覆瓦　瓦を重ねる。〔五〕滑汰　汰は過ぎる、すべる樣にして過ぎ去る。〔六〕鳧鷖　鴨とあひる。〔七〕繁纓　馬の腹帶。〔八〕月題　馬の額に當てる飾り。〔九〕的盧　前に次韻同韻百步洪の詩中に注して置いた。〔一〇〕芻秣　まぐさ。〔一一〕老黧　年を取つて顏が黑くなる。〔一二〕蹶軼　つまづく。〔一三〕顚隮　ころぶ。〔一四〕錦韉　韉は下鞍。〔一五〕金閨　卽ち金馬門。〔一六〕牛犁　牛に曳かせる鋤。〔一七〕木駃騠　駃騠は駿馬。

以我兩足爲四蹄。
聳踊(五)滑汰如(六)鳧鷖。
纖纖束藁亦可齎。
何用(七)繁纓與(八)月題。
揭從畦東走畦西。
山城欲閉聞鼓鼙。
忽作(九)的盧躍檀溪。
歸來挂壁從高棲。
了無(一〇)芻秣飢不啼。
少壯騎汝逮(一一)老黧。
何曾(一二)蹶軼防(一三)顚隮。
(一四)錦韉公子朝(一五)金閨。
笑我一生蹋(一六)牛犁。
不知自有(一七)木駃騠。

わが兩足を以て四蹄となし、
聳踊滑汰、鳧鷖の如し。
纖纖たる束藁、亦た齎すべし、
何ぞ用ひむ、繁纓と月題とを。
揭つて、畦東より畦西に走り、
山城、閉ぢむと欲して鼓鼙を聞く、
忽ち的盧と作つて、檀溪に躍る。
歸來、壁に挂けて高棲に從かす、
了に芻秣なく、飢うれども啼かず。
少壯、汝に騎して老黧に逮ぶ、
何ぞ曾て蹶軼、顚隮を防がむ。
錦韉の公子、金閨に朝し、
笑ふ我が一生、牛犁を蹋むを、
知らず、自ら木駃騠あるを。

【題意】秧馬は、挿秧の時に用ふる農具で、馬の形を爲し、その詳は、引に見えて居る。その引の意味は――予、廬陵を過ぎて、宣德郎で致仕して居る曾安止（字は移忠）に遇ふと、その作つた禾譜を出して見せた。文章も溫雅、事柄も詳實であるが、惜むらくは、缺けて居るところがあつて、農器に就いては、一切、ここに書いてない。予、むかし、武昌に游んで、農夫が皆秧馬に騎して居るのを見たことがある。秧馬の制、楡棗を以て腹を造つて、成るべく滑かならしめ、楸桐を以て背を造つて、成るべく輕からしめ、腹は小舟の如く、首尾兩端、ともに上方に向つて昂がり、背は、瓦を重ねた樣にし、兩の股をして、泥中に雀躍するに都合よくしてあるし、束ねた藁を其首に掛けて、苗を縛つて持つて行く樣にしてある。この秧馬を用ふれば、一日に千畦を行るのは、造作もないことで、これを彼の身を屈めて仕事する者に比較すると、勞逸、はるかに懸絕して居る。史記に、禹は乘り物四種を用意し、泥行には橇に乘つたとあつて、これを解釋するものは、橇は、その形、箕の如く、泥の上を擿つ樣に行くといつて居るが、それは、秧馬の類であらう。そこで、予は、秧馬歌一首を作つて、曾氏禾譜の終に附載することにしたといふのである。

【詩意】春雲濛濛として暗く、雨淒淒たる時しも、禾の苗は生長し切つて、勢よき翠莖は、出揃つて居る。婦人小子どもが水泥の中を歩いて、朝に一隴、暮に千畦を分けて、田植をするけれども、なかなか、骨が折れて、氣の毒なことである。彼等の屈めた腰は螢簇の如く、首は餌を啄む雞の如く、筋骨いたく煩はされて、その聲は、悲しげに嘶く樣である。幸に、桐馬があるから、手に提げて、野らに出て之を借し與へることにした。その桐馬は、頭と尻と、兩端が高く、腹や肋の處は、低くなつて居る。背は、瓦を重ねた樣であるから、圭角を去つて滑かにしてある。これに跨つて、わが兩足を馬の四蹄に代へ、高く踊り、滑る樣にして過ぎ行くと、丸で鴨やあひるが水面をすうツと行く樣で、何の障害もない。それで、細い藁束を掛けて、持つて行くから、苗を縛る便がある。もとより、腹帶だの、額飾りだのは、すべて、不必要である。畦の東から西に走り、日も暮れかかり、山城の門も閉ぢむとし、時を報ずる鼓の聲が聞こえると、的盧の名馬が檀溪を飛び越えた樣に、勢よく走つて歸つて來る。そして、宿では、壁上に挂けて、高い處に置けば、格別邪魔にも成らず、秣がなくも、差支ないので、もとより生物でないから、饑ゑたとて、嘶くことはない。若い時から、老年に至るまで、これに乘り慣れると、決して、躓くことがないから、轉ぶ用心をするにも及ばない。錦の下鞍を置く貴公子輩は、意氣揚揚として、日日、金馬門に入朝し、吾吾が、生涯、牛の曳く鋤を踏むことを笑つて居るが、世に、かういふ便利な木造の馬のあることを知らないのは、まことに愚の至である。

【餘論】碧溪詩話に「東坡、武昌に游び、かつて、秧馬歌を作る、唐子西、羅浮に至つて、はじめて、この器を識り、詩を作つて云ふ、

擬㆘向㆓明時㆒受㆗一廛㆖。著㆑稂嘗恐老農先。行藏已問吾能識。從㆑此馳㆑名四十年。

亦た事を用ふるに工なり」とあり、乾隆御批には「直に馬を以て馬に非ざるを喩す、瑰瑋連犿、その

說、能く人の頤を解く」とあり、紀昀は「奇器、奇語を以て之に寫し、筆筆活きむと欲す」といつて居る。

八月七日、初入贛、過惶恐灘

八月七日、初めて贛に入り、惶恐灘を過ぐ

七千里外二毛人。　七千里外、二毛の人、
十八灘頭一葉身。　十八灘頭、一葉の身。
山憶喜歡勞遠夢。　山は喜歡を憶うて、遠夢を勞し、
地名惶恐泣孤臣。　地は惶恐と名づけて、孤臣を泣かしむ。
長風送客添帆腹。　長風、客を送つて帆腹を添へ、
積雨浮舟減石鱗。　積雨、舟を浮べて石鱗を減す。
便合與官充水手。　便ち合に、官と水手に充つべく、
此生何止略知津。　この生、何ぞ止だ略ぼ津を知るのみならむや。

【字解】〔一〕二毛　白髮の交ること、前に梅聖兪、及び送宋構の諸詩中に注して置いた。〔二〕十八灘　題義の下に詳說してある。〔三〕喜歡　東坡の自註に「蜀道に錯喜歡鋪あり、大散關の上に在り」と見ゆ。〔四〕惶恐　灘名、もと黃公といつたのを東坡が改めたのである。〔五〕石鱗　王註に「帆は、その風を受くるを以ての故に腹といひ、水、石上に在つて流れ、その波、魚鱗の如し、故に石鱗といふ」とある。〔六〕與官　官の爲に。〔七〕水手　舟人。

【題義】陳書高祖紀に「南康贛石、舊と二十四灘あり、高祖の發するや、水暴起數丈、三百里の灘、巨石、皆沒す」とあり、萬安縣志に「贛州、二百里、岑縣に至り、又一百里、萬安に至る、その間、灘十八あり、舊と皆虔州に屬す、宋の熙寧中、地を割いて縣を立て、贛城より下二十里、曰く儲、曰く鼈、曰く橫弦、曰く天柱、曰く小湖、曰く銅盆、曰く陰、曰く陽、曰く會神、以上九灘、贛に屬す。青州より下、梁口に至る、乃ち萬安縣の地、その灘、曰く金、曰く崑崙、曰く曉、曰く武朔、曰く小蓼、曰く大蓼、曰く綿、曰く漂神、曰く黃公、灘水湍急、惟だ黃公甚しと爲す。趙淸獻、虔州に守たり、かつて、十八灘を疏鑿し、以て水勢を殺ぐ、蓋し十八灘、尤も險となすなり」とある。この詩は、八月七日、初めて贛州に入り、十八灘の隨一たる惶恐灘を過ぎて作つたのである。

【詩意】身は、京を去る七千里外に在つて、頭に二毛を戴き、十八灘を渡らうとして、一葉の舟に此身を托した。蜀中には、喜歡と名づくる山があることを思ひ出で、遠夢、其地に馳せ至れども、ここの灘は、惶恐とさへ名づくる位で、覺えず孤臣を泣かしめる。やがて、長風、客を送つて、帆の腹も稍や膨らみ、連日の雨に、水も深くなつたから、舟を浮べても魚鱗の樣に騷ぐ波は見えない。わが此生、略ぼ津を知るに止まらず、隨分各處の險難を歷たから、これからは、官の爲に、此地の舟人に充てられても善いと思ふ位である。

【餘論】乾隆御批に「起二句、もとより是れ調を柳州に同じうす。書して發端となす、乃ち更に警策。按するに、十八灘、下よりして上る、第一灘は、萬安縣前に在つて、黃公灘と名づく。東坡、改めて惶恐となし、以て喜歡に對す。その後、文文山、更に惶恐を以て零丁に對し、遂に典故と成る。結處、充水手と云ふは、應に是れ、暗に何易于笏を腰にして舟を引くの事を用ふるならむ」と

ある。ここに、調を柳州に同じうすといつたのは、柳宗元の南遷往還の作に、十一年前南渡客、四千里外北歸人といひ、一身去國六千里、萬死投荒十二年といひ、その句法が類似して居るからである。なほ、何易于は、唐代の循吏、その笏を腰にして舟を引いたのは、もと民を憐むの意に出でたのである。紀昀は「眞にして俚ならず、怨んで怒らず」といつて居る。

鬱孤臺

（一）八境見圖畫。鬱孤如舊游。
山爲翠浪湧。水作玉虹流。
日麗（二）崆峒曉。風酣（三）章貢秋。
丹青未變葉。鱗甲欲生洲。
嵐氣昏城樹。灘聲入市樓。
煙雲侵嶺路。草木半（四）炎州。
故國千峰外。高臺十日留。
他年三宿處。準擬繫歸舟。

鬱孤臺

八境、圖畫を見る、鬱孤、舊游の如し。
山は翠浪となつて湧き、水は玉虹と作つて流る。
日は麗かなり崆峒の曉、風は酣なり章貢の秋。
丹青、未だ葉を變せず、鱗甲、洲に生せむと欲す。
嵐氣、城樹昏く、灘聲、市樓に入る。
煙雲、嶺路を侵し、草木、半ば炎州。
故國千峰の外、高臺、十日留まる。
他年三宿の處、準擬して歸舟を繫ぐ。

【字解】【一】八境　虔州の八勝、鬱孤臺は卽ち其一。東坡は、かつて其圖を觀て詩を賦したことがある。【二】崆峒　山の名、虔州の西の極處に在る。十道志に「虔州城南六十里に在り、一名空山、南康より宛延として來る、章貢二水、夾んで以て北臨す、一郡の望なり」とある。【三】章貢　二水の名、水經註に「鄧澄之曰く、贛縣の東南に章水あり、西に貢水あり、縣治は二水の間、因つて以て縣に名づく」とある。【四】炎州　王註に「南方、これを炎州といふ、南方、火に屬するを以ての故なり」とある。今でいへば熱帶地方。

【題義】東坡の自註に「以下四首、皆虔州」とあつて、この詩は、鬱孤臺に上つて作つたのである。

【詩意】虔州の八勝は、往年、その圖を見たことがあつて、この鬱孤臺も、舊游の地の樣な感じがする。山は、翠浪の如く湧き出で、水は、玉虹となつて流れて居る。曉早く、崆峒に上る日影麗はしく、秋至れば、章貢二水の邊に、西風が吹きすさんで居る。しかし、葉の色は、元の儘で、靑が赤に變することもなく、川の中の洲には、魚だの、龜だのが、卵を生み付けやうとして居る。山氣立ちこめて、城上の樹色、ほの暗く、早瀨の響は、市樓に入つて、鳴りも止まず、煙雲は、嶺上の路を侵し、草木も、半ば熱帶の種類である。わが故國は、千峰の外に遠く、ここ高臺に十日も留まつた。前年三宿した處でも、物とはなしに、なつかしく、用意して歸舟を繫ぎ、やがて、その地に立ち歸らうと思ふ位、とても、この地に長くは居られない。

【餘論】紀昀は「古格を失はすして時に新語を出す、故に佳」といつて居る。

廉泉

水性故自清。不清或撓(一)之。
水性、故と自ら淸く、淸からざるは、或は之を撓す。

君看此廉泉。五色爛摩尼(二)。
君看よ、この廉泉、五色、摩尼よりも爛なり。

廉者爲我廉。何以此名爲。
廉は、我が廉たり、何ぞ此名を以て爲さむ。

有廉則有貪。有慧則有癡。
廉あれば貪あり、慧あれば癡あり。

誰爲柳宗元(三)。孰是吳隱之(四)。
誰か柳宗元たる、孰れか是れ吳隱之。

漁父(五)足豈潔。許由(六)耳何淄。
漁父、足、豈に潔からむや、許由、耳、何ぞ淄なる。

紛然立名字。此水了不知。
紛然として、名字を立つ、この水、了に知らず。

毀譽有時盡。不知無盡時。
毀譽、時あつてか盡く、知らず、盡くる時なきを。

揭來廉泉上。捋鬚看鬢眉。
揭來、廉泉の上、鬚を捋して鬢眉を看る。

好在(七)水中人。到處相娛嬉。
好在、水中の人、到る處、相娛嬉。

【字解】〔一〕撓之　撓は攪き亂す。〔二〕摩尼　寶珠の名、圓覺經に見え、前に次韻吳傳正の詩中に注して置いた。〔三〕柳宗元　愚谿の事。〔四〕吳隱之　貪泉の事、ともに前に答荊門張都官の詩中に注して置いた。〔五〕漁父　楚辭に引ける漁父歌に滄浪之水淸兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足」とあつて、又孟子にも見ゆ。〔六〕許由耳何淄　淄は汚れる、前に壬寅二月及び石淙莊の諸詩中に注して置いた。〔七〕好在　さきくあれといふ意、前に子由初到陳州、及び宿法寶寺の諸詩中に注して置いた。

【題義】方輿勝覽に「廉泉は、虔州治の東南報恩寺に在り、本と張氏の居、宋の元嘉中、一夕霹靂、忽ち池に涌いて泉となる。時に郡守廉を以て名あり、故に廉泉と名づく」とあり、名勝志に「贛縣の廉泉は、治の東南隅の、光孝寺に在り」と見ゆ。すると、報恩寺が後に光孝寺に更つたのであらう。

【詩意】水の本性は、もと自然に淸いもので、淸くないのは、これを攪き亂したからである、君よ、この廉泉を見よ、五色は、摩尼の珠よりも爛然として居る。抑も、廉は、われ自身の廉であるから、何も之を以て泉に名づける必要はない。しかし、物には必ず共對があるから、廉あれば必ず貪あり、慧あれば必ず癡がある。柳宗元は、溪に名づくるに愚を以てし、吳隱之は、故らに貪泉を飮んだといふが、今誰が其眞似をするであらうか。漁父は、滄浪の水濁らば以て吾が足を濯ふべしといつたが、元と漁父であるから、足は奇麗であつた譯でもなく、許由は、堯が天下を讓るといふことを聞いて、耳を洗つたが、その耳は何も汚れて居たのではない。今の天下は、事につけ、折に遇ひ、紛然として名字を立てて、互に爭つて居るが、この水は、もとより、そんな事とは知らず、毀譽は時あつて盡きるけれども、この水は、常に流れて、決して盡きる時はない。予、今、廉泉の邊に來り、鬚を撚くりながら、鬢や眉を照らして見た。そこで、わが影に向ひ、水中の人よ、幸くあれ、到る處、われと汝とは、相共に娛んで、游嬉しやうではないかといつた。

【餘論】乾隆御批に「盡くるあるは人に在り、盡くるなきは我に在り。維摩經に言ふ、法門あり、無

盡燈と名づくと。この詩の本づくところ」とあり、紀昀は「轉轉靈妙、測せざるに妙」といひ「誰爲の四句删るべし」といひ「結び得て兀傲」といつて居る。

塵外亭

楚水澹（一）無㆑姿。贛水清（二）可㆑厲。　楚水、澹として姿なく、贛水、清くして厲すべし。
（三）散策塵外游。揮㆑手謝㆓此世㆒。　散策、塵外に游び、手を揮つて、この世を謝す。
山高惜㆓人力㆒。十步輒一憩。　山高くして人力を惜み、十歩、輒ち一憩。
却立㆓浮雲端㆒。俯視㆓萬井麗㆒。　却つて、浮雲の端に立ち、俯して、萬井の麗なるを視る。
幽人宴坐處。龍虎爲斬薙。　幽人、宴坐の處、龍虎、爲に斬薙。
（四）馬駒獨何疑。豈墮山鬼計。　馬駒、ひとり何ぞ疑はむ、豈に墮ちむや山鬼の計。
（五）夜垣非㆑助㆑我。謬敬欲㆓其逝㆒。　夜垣、われを助くるに非ず、謬敬、その逝くを欲す。
戲留㆓一轉語㆒（六）。千載起攘（七）㆑袂。　戲に一轉語を留め、千載、起つて袂を攘ふ。

【字解】【一】澹無姿　この三字の解釋が一寸六つかしいといつて、姿は幽の誤だらうといふ說もあるが、姿は、この世の俗姿といふ義であらう。【二】清可厲　王註に「爾雅、衣を以て水を渉るを厲となす。詩に曰く、深則厲。註に云ふ、帶より以上なり」とある。【三】散策　杖を曳いて散歩する。【四】馬駒　傳燈錄に「六祖、南岳に謂つて曰く、只だ此の汚染せざるは、諸佛の護念するところ。般若多羅讖、汝の足下より、一馬駒を出して、天下の人を踏み殺すと。その後、江西並に法を傳へて、天下に弘布し、時に馬祖と號す」とある。【五】夜垣　王註に「馬祖、はじめて此山に居る。山鬼爲に垣を築く、自ら謂ふ、修行至らず、鬼に識らる、と。乃ち舍てて去る、今、先生の詩語、馬祖より高きこと一著なり」とある。【六】一轉語　傳燈錄に「洞山云ふ、眞道本來無一物、猶ほ未だ他の衣鉢を消ひ得ず、這裏、合に一轉語を下し得べし」とある。【七】攘袂　腕を卷くる。

【題義】塵外亭は、前に虔州八境詩の中に見え、そこで、注して置いたから、ここには省略する。

【詩意】楚水の流は、澹として世の常の俗姿に非ず、贛水は、清くして、衣を捲つた儘で渉つて行かれる。予は、杖を曳いて散歩しつつ、亭の名にしおふ塵外の游を爲すにつけ、手を麾いて、この塵の世を立ち去らうと思つて居る。山は高くして、人力を惜ましめ、十歩ごとに一たび休息し、やがて、浮雲の端に立てば、下に萬戸が井に攢集して居るのが見られる。幽人が宴坐する處は、龍虎など、既に斬り除けられて、何等の患害もない。むかし馬祖は、六祖から、馬駒の事を言はれて、豁然大悟、復た疑ふことなく、山鬼が爲に垣を築いたが、その計中に墮つることなく、決して鬼に識られる筈は無い、この垣はわれを助くるものに非ず、山鬼は、われを敬する樣な眞似をして、實はわが惡道に向ふことを欲し、つまり、わが修行の邪魔をするものだといふことを看破した。そこで、予は、戲に一轉語を下し、千載の後、腕まくりをして起ち、吾、いかで彼馬祖に劣るべきやといひたい樣に思つた。

【餘論】乾隆御批に「韓詩に云ふ、崎嶇上軒昂、始得㆓觀覽富㆒と。未だこの圓妙に及ばざるなり、正諦、すでに得たり、故に、後幅、但だ馬祖の事に就いて之を言ひ、更に山水の爲に饒舌せず」とあり、紀昀は一著語すべきなきの題、只だ筆端に簸弄すべし、もし山光樹色を泛寫すれば、一首の詩、天

下の名勝に題し遍ねかるべし。盛に王孟の高渾を談ずるもの、往往馬首の絡を成す、偶ま之を見れば、喜ぶべきに似たるも、數ば之を見れば、便ち多少人意に滿たざる處あり」といつて、流石に理の精該を極めて居る。

天竺寺

天竺寺

予年十二、先君自虔州歸、爲予言、近城山中天竺寺、有樂天親書詩、云、一山門作兩山門、兩寺原從一寺分、東澗水流西澗水、南山雲起北山雲、前臺花發後臺見、上界鐘聲下界聞、遙想吾師行道處、天香桂子落紛紛、筆勢奇逸、墨跡如新、今四十七年矣、予來訪之、則詩已亡、有石刻存耳、感涕不已、而作是詩。

【訓讀】予、年十二、先君、虔州より歸り、予の爲に言ふ、近城山中天竺寺に樂天親書の詩あり、云ふ、一山の門は兩山の門と作り、兩寺、原と一寺より分かる。東澗の水は流る西澗の水、南山の雲は起す北山の雲。前臺の花は發して後臺より見、上界の鐘聲、下界に聞こゆ。遙に想ふ、吾が師行道の處、天香桂子、落ちて紛紛と。筆勢奇逸、墨跡新なるが如し。今四十七年、予、來つて之を訪へば、詩、すでに亡びて、石刻の存するあるのみ、感涕已まずして、この詩を作る。

香山居士(一)留遺跡。
香山居士、遺跡を留め、

天竺禪師(二)有故家。
天竺禪師、故家あり。

空詠連珠(三)吟疊壁(四)。
空しく連珠を詠じて、疊壁を吟じ、

已亡飛鳥失驚蛇。
すでに飛鳥を亡うて、驚蛇を失ふ。

林深野桂寒無子。
林深くして、野桂、寒、子なく、

雨浥山薑(五)病有花。
雨は浥して、山薑、病んで花あり。

四十七年眞一夢。
四十七年、眞に一夢、

天涯流落涙横斜。
天涯流落、涙横斜。

【字解】【一】香山居士　王註に「白居易、刑部侍郎を以て致仕し、香山の僧如滿と香火社を結び、自ら香山居士と號す」とある。【二】天竺禪師　查註に「方輿勝覽、虔州に天竺寺あり、水東三里に在り。名勝志、天竺山は贛州に在り、城を出づる四里、貢水の東に舊と修吉寺あり、唐の元和の間、僧韜光、錢塘の天竺より錫を此に挂く」とある。【三】連珠　引中に見えた白居易の詩は、わざと字を重用したから連珠體と稱する。【四】疊壁　詞章の美を形容して云ふ。【五】山薑　嶺表錄異に「山薑花、莖葉は卽ち薑なり、根は食ふに堪へず、而して葉間に於て花を吐き、穗は香粒の如し」とあり、王註に「山薑は朮なり、按ずるに、本草、朮、一名は山薑なり」とある。

【題義】引の意味は――予、年十二の時、亡父の老泉が、虔州から歸つて來て、予の爲に話して聞かせたのは、州城に近い山中の天竺寺に、白樂天の自筆の詩があつて、一山門作兩山門云云といふので、筆勢奇逸、その墨跡は、新なる如くであるとのことであつた。算ふれば、今で四十七年、予、來つて、天竺寺を訪へば、詩は、すでに無くなつて、石刻だけが殘つて居る。そこで、感慨の極、涙止

まらず、仍つて、この詩を作つたといふのである。

【詩意】香山居士として知らるる白居易が遺跡を留め、天竺禪師として名高き韜光の舊菴は、卽ち此處である。白居易の自筆は、すでに見えず、仍つて、空しく蓮珠體の其詩を諷詠せむとして、その名句を歌ひ出せば、飛鳥、すでに跡なく、驚蛇も亦た見えなく成つて仕舞つた。林深くして、野生の桂は、秋晩に實を結ばず、雨に霑されると、山薑は、枯れかかつた儘、花を咲き出して居る。算ふれば四十七年の久しきも、まことに一夢に外ならず、身は天涯に流落し、往事を思へば、淚の橫斜を禁することが出來ない。

【餘論】乾隆御批に「點染の處、その古秀を極め、揭朗標華、香山蓮珠體の詩に較ぶれば、更に一格を進む」とある。

過大庾嶺

一念失垢汚。身心洞清淨。
浩然天地間。惟我獨也正。
今日嶺上行。身世永相忘。
仙人拊我頂。結髮受長生。

大庾嶺を過ぐ

一念、垢汚を失へば、身心、洞として清淨。
浩然たる天地の間、惟だ我ひとり正。
今日嶺上に行けば、身世、永く相忘る。
仙人、わが頂を拊づ、結髮、長生を受けむ。

【字解】〔一〕獨也正　莊子に受命於天、惟松柏獨也、在冬夏青青、受命於天、惟舜獨也正とあるを用ふ。〔二〕身世　白居易の詩に可憐身與世、從此兩相忘とある。

【題義】査註に「南康記、大庾嶺は、漢臺嶺と名づく、嶺に石あり、平かなること、臺の如く、形、廩庾の如し。又曰く、漢に庾勝といふものあり、梅鋗の將番君に隸す、兵を分つて臺嶺を守らしむ、城を嶺上に築く、因つて、庾嶺と名づく。張无垢の橫浦集に云ふ、初め、嶺東廢路、人、峻極に苦む。開元四載冬、使臣左拾遺內供奉張九齡をして、磴道に緣り、灌莽を披き、その山谷の宜しきを相し、その阪險の故を革めしむ。故に、宋の嘉祐の間、蔡挺、江西に提刑し、その弟抗、廣東に漕し、乃ち工を商度し、陶土を用ひて甓となし、各、その境を甃にす、北路は廣さ八尺、長さ一百九丈、南路は廣さ一丈二尺、長さ三百十五丈、復た路を夾んで松を種ゑ、以て行旅を休ましめ、遂に車馬の途を成す」とある。

【詩意】この一念にして、浮世の垢汚を無くして仕舞へば、身心、ともに洞然として、淸淨なるべく、浩然たる天地の間に、われのみ獨り正しい。今日、大庾嶺の上を行くと、その身と浮世と、兩つながら、長しへに相忘れて仕舞つた。すると、彷彿として、仙人が我が頭を撫でて與れた樣な氣がしたから、老年の予も、若がへつて、新に髮を結び、そして、長生の訣を受けたいと思つて居る。

【餘論】査註に「趙汸の東山集、この詩の墨跡に跋して云ふ、公、晚節、嶺海に播遷し、遂に陰に長生を學んで、超然遐擧せむと欲す。蓋し、すでに死生禍福の人の爲すところに非ざるを信す、垂老の

年を以て、轉徙流離の際に當り、しかも、浩然として毫髮の顧慮なし、この事數中に定まるに非ざれば、殆んど、未だ能くし易からざるなり」とある。

宿建封寺、曉登盡善亭、望韶石三首

建封寺に宿し、曉、盡善亭に登つて韶石を望む　三首

雙闕(一)浮光照短亭。　雙闕の浮光、短亭を照らす、
至今猿鳥嘯青熒(二)。　今に至つて、猿鳥、青熒に嘯く、
君王(三)自此西巡狩。　君王、これより西に巡狩し、
再使魚龍舞洞庭。　再び魚龍をして洞庭に舞はしむ。

【字解】〔一〕雙闕　韶石山を云ふ。水經に「對峙して雙闕に似たり、又鳳闕毬門の名あり」と見ゆ。〔二〕青熒　晴れた空。〔三〕君王　舜を云ふ。

【題義】建封寺は不詳。盡善亭は、一統志に「韶州府城の東一百里に在り」と見ゆ。韶石は山名、一統志に「府城の東北に在り、山の石怪奇」とあり、郡國志に「韶州に韶石といふものあり、舜、ここに登つて韶樂を奏す」とある。この詩は、建封寺に宿し、翌日朝早く盡善亭に登り、韶石山を望んで作つたのである。

【詩意】韶石山は、巨巖對峙して雙闕の狀を爲し、朝日は之を射つて浮ぶが如く、その餘光は、盡善亭をも照らして居る。ここは、舜の故蹟で、滿山の猿鳥は、今でも青天に向つて嘯いて居る。その折、舜は、ここから西の方へ巡狩し、洞庭に至つて、例の韶樂を奏し、又しても魚龍を飛舞せしめたのである。

蜀人文賦(一)楚人辭(二)。　蜀人の文賦、楚人の辭、
堯在崇山(三)舜九疑(四)。　堯は崇山に在り、舜は九疑、
聖主若非眞得道。　聖主、若し眞に道を得るに非ざれば、
南來萬里亦何爲。　南來萬里、亦た何をか爲す。

【字解】〔一〕蜀人文賦　蜀人は司馬相如、その作に係れる大人賦に「歷唐堯於崇山兮、過虞舜於九疑」とある。〔二〕楚人辭　屈原の九歌に九嶷繽兮並迎とある。〔三〕崇山　卽ち狄山、山海經に「狄山は、帝堯、その陽に葬る」とある。〔四〕九疑　山の名、零陵營道縣に在つて舜が葬りし處。

【詩意】司馬相如の大人賦にも、屈原の九歌にも云つてある通り、堯は崇山に、舜は九嶷に葬つたのである。堯舜二君、ともに聖主であるから、もし眞に道を得たるに非ざれば、ここに南して萬里の遠きに來た處で、何にも成らない。おもふに、二聖は本と死せず、その道を得て居た處から、遠く來つて昇天したのであらう。

嶺海(一)東南月窟(二)西。　嶺海の東南、月窟の西、
功成天已錫元圭(三)。　功成つて、天、すでに元圭を錫ふ。

【字解】〔一〕嶺海　嶺は五嶺。〔二〕月窟　揚雄の長楊賦に西厭月窟、東震日域とあつて、その註に

此方定是神仙宅。　此方、定めて是れ神仙の宅、

禹亦東來隱會稽。　禹も亦た東來、會稽に隱る。

「朏、昔は窟、月の生ずるところなり」とある。【三】元圭　書經に「禹、元圭を錫うて、その成功を告ぐ」とある。元は玄、黑色。【四】會稽　即ち越州、帝王世紀に「禹、會稽に崩じて、會稽山陰縣の南に葬る、今山上に禹の塚あり」と見ゆ。

【詩意】嶺海の東南より月窟の西に至るまで、禹は周行して、洪水を治め、やがて、その功成るや、天は之に玄圭を賜はつた。元來、南方は、神仙の窟宅であるから、ひとり、堯舜のみならず、禹も亦た東に來つて、この會稽に隱れ、やがて、仙となつたから、今に塚と稱するものが殘つて居るのであらう。

【餘論】紀昀は、終の二首に就いて「二首、皆無聊寄傲の詞」といつて居る。

月華寺

天公胡爲不自憐。　天公、胡すれぞ自ら憐まざる、

結土融石爲銅山。　土を結び、石を融して銅山と爲す。

萬人探斵富媼泣。　萬人探斵して、富媼泣き、

祇有金帛資豪姦。　祇だ金帛の豪姦に資するあり。

脫身獻佛意可料。　身を脫し、佛に獻ず、意、料るべし、

一瓦坐待千金還。　一瓦坐して待つ千金の還るを。

月華三火豈天意。　月華三火、豈に天意、

至今茇舍依榛菅。　今に至つて、茇舍、榛菅に依る。

僧言此地本龍象。　僧は言ふ、この地、本と龍象、

興廢反掌曾何艱。　興廢反掌、かつて何ぞ艱なる。

高巖夜吐金碧氣。　高巖、夜吐く金碧の氣、

曉得異石青斕斑。　曉に得たり、異石の青斕斑たるを。

坑流窟發錢湧地。　坑流、窟より發して、錢、地に湧き、

莫施百鎰朝千鍰。　莫に百鎰を施し、朝に千鍰。

此山出寶以自賊。　この山、寶を出し、以て自ら賊ふ、

地脈已斷天應慳。　地脈すでに斷えて、天、應に慳むべし。

我願銅山化南畝。　われ願ふ、銅山、南畝に化し、

爛漫黍麥蘇惸鰥。　爛漫、黍麥、惸鰥を蘇するを。

道人修道要底物。　道人、道を修する、底物をか要す、

【字解】【一】月華三火　東坡の題下自註に「寺は岑水場に鄰る、施すものは皆坑戶なり、百年間、蓋し三たび焚く」とある。【二】茇舍　草ぶきの小屋。【三】龍象　佛書で、力あつて以て負荷すべきものを云ふ。月華寺は、本と智藥三藏の眞身を藏めてあつたから云つたのであらう。【四】百鎰　孟子の註に「古しへは、一鎰を以て一金となし、二十兩を一鎰とす」とある。【五】千鍰　周書經の呂刑に、其罰千鍰とある、周制、黃金方寸にして重さ一斤なるを云ふ。

破鐺煮飯茅三間。

破鐺、飯を煮る茅三間。

【題義】 翁方綱の註に「月華寺は、曹溪を去ること三十里、韶郡の南百里に在り、正に岑水場の地」とあり、査註に「張端義の貴耳錄、韶州の岑水場は、湔水を以て銅を浸すの地、百萬斤の鐵を會して、二十萬銅を浸錬す。兩廣三十八部、皆輸するところあり、或は鉛錫を供し、或は銀錢を供し、歲計四五萬緡。名勝志、翁源縣に岑水あり、一名銅水、鐵を浸して銅となすべし。その水、極めて腥惡、石色皆赭、魚鼈禾稼の屬を生せず。卽ち曲江の膽礬水、同源異流なり」とある。この詩は、月華寺と題して居るが、實は專ら岑水場を詠じたのである。

【詩意】 天公は、如何なれば、自ら憐ます、土を結んで山となし、石を解かして川となし、そして、この銅山を開いたのであるか。多くの人は之を鑿開して、どしどし銅を產出するから、富媼が泣き出すといふ始末。唯だ金帛は、豪姦の人に資し、身を浮世より脫し、佛に獻じて、未來の幸福を得やうとする其意は、もとより料り知ることが出來る。彼等は、一瓦を喜捨し、やがて千金となつて還つて來るのを待つて居るので、餘り慾ばつた話。そして、月華寺が三度も燒けたのは、決して、天意ではなく、全く不慮の過失に本づいたのである。今や、寺は草葺の小屋で、榛菅に倚り添うて居るが、坊主の言ふには、ここは本と龍象に比ぶべき名僧の居た處で、決して、忽にしてはならぬとのことである。寺の興廢は、手の裏をかへす間に起つて、何の造作もないが、高巖の中からは、夜ごとに金碧の氣を吐き出し、曉には、青色斕斑たる異石が切り出される。坑中の水流は、窟底より發し、鐵を銅は化して、さながら錢が地から湧き出す位。そこで、寺も、その餘惠を被り、暮には百鎰、朝に千鍰を施すものがあるので、先づ豐かに遣つて居るのである。顧みれば、この山は、寶を出すに因つて、やがて、自ら賊ふことになるのであるが、地脈の旣に斷えたのは、天も、流石に、意地わるく、物惜みをするからである。われ願はくは、この銅山を化して南畝となさしめ、黍や麥が爛漫として實のり、そして、孤兒や妻の無いものを蘇生せしめる樣に致したい。道人が道を修行するのに、何物を要するかといへば、破れた鍋で飯を煮ることが出來、そして、三間の茅屋があれば、澤山なので、それ以上の事は、望むにも及ばないのである。

【餘論】 乾隆御批に「亦た是れ、左傳、象、齒身を焚く、莊子、山木自ら寇するの意、說き來つて警動、倍す氣象の峥嶸を覺ゆ」とあり、紀昀は「莊語腐ならず、これ筆意の同じからざるに由る」といつて居る。

南華寺

南華寺

云何見祖師。要識本來面。

ここに何ぞ祖師を見る、本來の面を識るを要す。

亭亭塔中人。問我何所見。

亭亭たる塔中の人、われに問ふ何の見るところ。

可憐明上座。萬法了一電。　憐むべし明上座、萬法了に一電。
飲水既自知。指月無復眩。　水を飲んで、すでに自ら知る、月を指すも、復た眩するなし。
我本修行人。三世積精錬。　われ本と修行の人、三世、精錬を積む。
中間一念失。受此百年譴。　中間一念失ひ、この百年の譴を受く。
(三)摳衣禮(四)眞相。感動淚雨霰。　衣を摳して眞相に禮し、感動、淚は雨霰。
借師(五)錫端泉。洗我綺語硯。　師の錫端の泉を借りて、わが綺語の硯を洗はむ。

【字解】〔一〕祖師　五祖を云ふ。〔二〕塔中人　六祖の塔を指す。〔三〕摳衣　衣をまくり上げる。〔四〕眞相　六祖の遺骸を斂したる塔をいふ、傳法正宗記に「六祖は、睿宗の先天二年に於て示寂す、眞身を曹溪に塔す。柳宗元の碑に記す、憲宗の元和十六年、六祖に諡を賜うて大鑑といひ、塔を靈照といふ」とある。〔五〕錫端泉　傳燈錄に「六祖、はじめ、曹溪に住す、錫を卓して泉涌く、清涼甘滑、大衆を贍足す」とあり、曹溪志に「卓錫泉、一名明通泉、凡そ泉脈枯るれば、僧、祖衣を持し、往いて叩けば、卽ち涌流す」とある。

【題義】 曹溪通志に「南華山南華寺、六祖慧能の道場たり」とあり、傳法正宗記に「六祖慧能、俗姓は盧、新興の人、少にして孤、長ずるに及び、薪を采りて母に供ふ。一日、客の經を讀むを聞き、應無所住而生其心に至り、問うて曰く、この法、何人に得たる。客曰く、これは金剛經と名づく、黃梅の忍大師に得たり、と。師、遽に其母に告げ、卽ち五祖に趨り、韶州に至り、寶林寺の舊基に處り、すでに法を得たる後、曹溪に歸る。唐の景龍元年、詔して、寶林を改めて中興寺となし、又額を賜うて法泉といふ、今の南華寺、是れなり」とあり、高僧傳に「六祖、新を捨て、舊を興し、宅を國恩寺となす、神龍三年、額法泉を賜ひ、宋の太平興國三年、重ねて塔を建て、名を南華寺と改む」とある。

【詩意】 ここに來りて何故に五祖を見むと欲するかといふと、五祖は、本來の面目を知るを要すると答へたので、六祖は、卽座に豁然大悟したといふ話。その六祖も、今は亭亭たる高塔の中に殘骸を存して居るだけで、格別何も見るところは無い。その初、明上座と稱せられし六祖だけあつて、萬法は遂に一電となり、水を飲めば、唯だ自ら知るばかり、月を指しても、最早目が眩むことが無い樣になつたので、法器の卓絶せることは、まことに羨ましい位。われも、本と修行の人であつて、過去現在未來の三世に亙つて、精錬を積む積りの處、中間に於て、一念忽ち誤り、仍つて、この最後の咎めを受けて、南方に左遷されることに成つた。今、衣を卷くりあげて、六祖の眞相に拜禮すれば、感歎の極、淚は雨霰と落ちる。願はくは、六祖が錫杖の先で掘つたといふ其靈泉を借りて、平生、綺語のみ草して居た我が硯を洗ひ淸めたいものである。

【餘論】 紀昀は「境に觸れて寄慨、泛作の禪語に同じからず」といひ「これ方に是れ東坡南華寺に游ぶの詩、他人に移撥すべからず。これ此時東坡南華寺に游ぶの詩、他時に移撥すべからず、これを詩中人ありとなす」といつて居る。

碧落洞

槎牙亂峰合。晃蕩絕壁橫。
遙知紫翠間。古來仙釋幷。
陽崖[一]射朝日。高處連玉京[二]。
陰谷叩白月[三]。夢中游化城[四]。
果然石門開。中有銀河傾。
幽龕入窈窕。別戸[五]穿虛明。
泉流下珠琲。乳滴交纓纓。
我行畏人知。恐爲仙者迎。
小語輒響答。空山白雲驚。
策杖歸去來。治具[六]煩方平[七]。

碧落洞

槎牙として亂峰合し、晃蕩として絕壁橫ふ。
遙に知る、紫翠の間、古來仙釋幷す。
陽崖、朝日を射り、高處、玉京に連る。
陰谷、白月を叩き、夢中、化城に游ぶ。
果然、石門開き、中に銀河の傾くあり。
幽龕、窈窕に入り、別戸、虛明を穿つ。
泉流れて珠琲を下し、乳滴うて、纓纓を交ふ。
わが行、人の知るを畏る、恐らくは、仙者に迎へられむ。
小語、輒ち響答、空山、白雲驚く。
杖に策いて歸り去らむ來、治具、方平を煩はす。

【字解】【一】陽崖　東向の懸崖。【二】玉京　天上の仙都、靈樞金景內經に「下離塵境、上界玉京」とあつて、その註に「玉京は無爲の天なり、蓋し三十二帝の都、玉京の下は乃ち崑崙、北都羅酆、北帝三十六洞居るところの處」とある。【三】白月　前に「留別蓼査士」の詩中に注して置いた。【四】化城　佛界の都、法華經に「一導師あり、方便力を以て、化して一城を作す。ここに於て、衆人、倦んで化城に入り、已度想を生じ、安隱想を生ず」とある。【五】別戸　一統志に「洞に懸石多く、霓旌羽蓋の狀の如し。傍に小洞あり、雲華と號す、深さ測るべからず。按ずるに、詩に云ふところの幽龕別戸は、卽ち其處を指すなり」とある。【六】治具　食事用の器具を調へる。【七】方平　神仙傳に「王方平、蔡經の家に降る、兩時間にして麻姑至り、入つて拜す。方平、召して行廚を進む、皆金盤玉杯、餚膳多くは是れ諸花果、香氣、內外に達す。脯を擘いて之を行らす、云ふ是れ麟脯」とある。

【題義】碧落洞は、東坡の自註に「英州の下十五里に在り」と記し、王文誥の案に「下十五里は、江口を謂ふなり。これより、小溪に沿うて、盤繞二十里、碧落洞に至る、その源、山後より來り、滙して一洞となり、折れて後、洞に入つて前に達し、下に注いで溪となる、碧落の義、卽ち此に因つて名づくるに似たるなり。公、當日、或は小舟に棹して洞に至る、今通ずべからず、嘉慶辛未冬中、誥、大府の檄を奉じて北江を巡緝し、かつて、滃鎭より山を捜つて此に至る」とある。

【詩意】亂峰は槎牙として重なり合ひ、絕壁は晃蕩として橫はつて居る。遙に望む蔚然たる紫翠の間には、むかしから、釋道の人人が靈跡を留めて居るとのことである。東に面する懸崖は、朝日に射られ、その崖の高い處は、上、玉京に連つて居る。陰森たる谷は、光なき月を叩くべく、ここに來れば、夢に化城に遊ぶ樣な氣がする。果然として、石門開き、その中には、銀河が傾いて居る。洞中には、支洞が幾つもあつて、幽龕は窈窕に入り、別戸は虛明を穿つて、互に相通じて居る。泉は流れて珠玉を下し、乳の色せる石灰液は石面を洗うて、紐を交へた樣である。われ此に來つて、人の知るを畏れ、就中、仙者に迎へられて、歸ることが出來ないと甚だ困まると思つて居る。小さな聲で囁いて

も、直に反響し、空山の中、白雲が驚いて飛び迷ふ樣な景色。然らば、杖をついて歸らうと思ふので、食事の事は、すべて王方平を煩はして、萬事遣つて貰ふことにしてある。

【餘論】紀昀は「隱に、名盛なれば尤を招くの慨を寓す、その詞、却つて渾にして露はさず」といつて居る。

何公橋詩　　何公橋の詩

天壤之間。水居其多。　　天壤の間、水、その多きに居る。
人之往來。如鵜在河。　　人の往來、鵜の河に在るが如し。
順水而行。雲馳鳥疾。　　水に順つて行けば、雲馳鳥疾。
維水之利。千里咫尺。　　維れ水の利、千里咫尺。
亂流而涉。過膝則止。　　流を亂して涉り、膝を過ぐれば止まる。
維水之害。咫尺千里。　　維れ水の害、咫尺千里。
(一)沔彼(二)濫觴。蛙跳(三)鯈游。　　沔たる彼の濫觴、蛙跳り、鯈游ぶ。
溢而(四)懷山。神禹所憂。　　溢れて山を懷ぬ、神禹の憂ふるところ。
豈無一木。支此大壞。　　豈に一本の、この大壞を支ふるなからむや。
舞於(五)盤渦。冰折雷解。　　盤渦に舞うて、冰折雷解。
坐使此邦。畫爲兩州。　　坐して、この邦をして、畫して兩州たらしむ。
雞犬相聞。(六)胡越莫救。　　雞犬相聞こゆるも、胡越、救ふなし。
(七)允毅何公。甚勇於仁。　　允に毅なり何公、甚だ仁に勇。
始作石梁。其艱其勤。　　はじめて石梁を作り、その艱、その勤。
(八)將作復止。更此百難。　　將作復た止み、更にこの百難。
公心如鐵。非石則堅。　　公の心、鐵の如く、石に非ざるも、すなはち堅し。
公以身先。民以悅使。　　公、身を以て先んじ、民、悅を以て使はる。
老壯負石。如負其子。　　老壯、石を負うて、その子を負ふが如し。
(九)疏爲玉虹。(一〇)隱爲金隄。　　疏して玉虹となし、隱れて金隄となす。
(一一)直欄橫檻。百賈所栖。　　直欄橫檻、百賈の栖むところ。
我來與公。同載而出。　　われ來つて、公と、同じく載せて出づ。
讙呼塡道。抱其馬足。　　讙呼、道を塡めて、その馬足を抱く。

我歎而言。視此滔滔。　われ歎じて言ふ、この滔滔を視よ。
未見剛者。孰爲此橋。　未だ剛者を見ず、孰れか此橋を爲らむ。
願公千歲。與橋壽考。　願はくは、公、千歲、橋と壽考。
持節復來。以慰父老。　節を持して、復た來り、以て父老を慰めよ。
如朱仲卿。食於桐鄉。　朱仲卿の、桐鄉に食するが如くなれ。
我作銘詩。子孫不忘。　われ銘詩を作る、子孫、忘れざれ。

【字解】〔一〕河伯　河は水の流るる貌。〔三〕孤鮑　水源、前に游金山寺の詩中に注して置いた。〔五〕儵游　儵ははえ、香魚に似た河魚。〔四〕懷山　書經に見ゆ、山を包む。〔六〕盤渦　うづ卷。〔七〕胡越莫救　胡は北方の蠻族、越は南隅の地。遠く懸け離れて居て救ふことが出來ない。〔七〕允毅　まことに剛毅なる。〔八〕將作　起工する。〔九〕蝀爲玉虹　水を疏して橋を造る。玉虹は、橋の形容。〔一〇〕隱爲金隄　見えぬ處に隄防を作る、金は丈夫といふ意を帶びて云ふ。〔一一〕直欄橫檻　橋上に在る縱橫の手すり。〔一二〕持節　天子より賜はつた節信を持つといふ義。〔一三〕朱仲卿　前に送任伋及び過徐州の諸詩中に注して置いた。

【題義】容齋隨筆に「英州は小市、江水、その中を貫く、舊と木を架して橋となす、數年に過ぎざる每に、輒ち湍湍に壞さる。郡守建安の何智甫、はじめて、石を疊んで之を爲る。方に成つて、東坡、海外より還る。何、文以て記せむことを求む。坡、四言の詩、凡そ五十六句を作る」とある。智甫、或は智茂に作れども、前者が正しい。一統志に「通遠橋、舊名何公橋、永樂八年重修、今の名に更む」とある。

【詩意】天地の間に於て、水は、その大部分を占めて居るから、人の往來するのは、丁度、鵜が河の中に居る樣なものである。水に順つて行けば、雲の如く馳せ、鳥の如く速かであつて、これ卽ち水の利といふべく、千里の遠きも、咫尺同樣である。これに反して、流を亂して徒涉しても、膝を過ぐれば、止まらねばならず、これ卽ち水の害といふべく、咫尺の近きも、千里同樣である。その川の發源地に於ては、蛙が跳つたり、はえが泳いだりして居て、至つて平穩であるが、一朝漲溢すると、山を包む位で、神力ある禹さへも憂ふるところである。一木を以て隄の壞れるのを支へる樣な場合が、萬が一、有るとしても、渦に卷き込まれると、氷の如く折れ、雷聲をなして、崩解して仕舞ふ。そこで坐ながらに、この邦を分畫して、明かに二州となし、雞犬の聲が相聞こえて居ても、胡越の如く懸け離れて、互に救ふことが出來ない。ここに、何公は、まことに剛毅な人で、仁を爲すことに就いては、甚だ勇ましく、はじめて石橋を作つて、非常に惱み、又勤苦された。そこで著手しては又止め、この百難を經たが、公の心は、鐵の如く、石に非ざれども堅い。公は、おのが身を以て先ち、民は悅びを以て使はれ、老壯は、石を負うて、さながら其子を負ふが如く、川を疏して玉虹と見まがふ橋を造り、見えぬ處に金隄を築き、縱橫に組み合はせたる橋の手すりに傍うて、百賈が店を開いて居る。予、偶ま此地に來り、公と同じ車に乘つて外出すると、讙呼の聲、道を塡めて、その馬の足を抱くばかりである。予は、この狀を目睹して云ふには、この河の滔滔として流るるを見よ、とても何公

の如き剛の者は、外にない、もし何公に非ざれば、誰か此橋を造るべき。願はくは、何公よ、千歲の齡を保つて、橋と共に壽考なれ。やがて、節を持して、再び此地に來り、父老輩を慰めて遣つて吳れろ、そこで朱仲卿が其治績を以て桐鄉に祀られて血食するが如くありたい。予は、ここに銘詩を作つたから、英州の民の子孫たるもの、長しへに何公の盛德大功を忘れずに居て貰ひたい。

【餘論】紀昀は「自ら本色を用ふ、何ぞ嘗て佳ならざらむ。然れども、何ぞ銘といひ頌といはずして詩といへる」といひ「これ古韻を用ふ、故に平仄の分なし、律韻を以て之を求むるは誤れり」といつて居る。

峽山寺

天開清遠峽。地轉凝碧灣。
我行無遲速。攝衣步孱顏。
山僧本幽獨。乞食況未還。
雲碓水自春。松門風爲關。
石泉解娛客。琴筑鳴空山。
佳人劍翁孫。游戲暫人間。
忽憶嘯雲侶。賦詩留玉環。
林深不可見。霧雨霾髻鬟。

峽山寺

天は開く清遠峽、地は轉ず凝碧灣。
わが行、遲速なく、衣を攝して孱顏を步す。
山僧、本と幽獨、食を乞うて、況んや未だ還らず。
雲碓、水自ら春き、松門、風を關となす。
石泉、客を娛ましむるを解し、琴筑、空山に鳴る。
佳人は劍翁の孫、游戲、しばらく人間。
忽ち憶ふ嘯雲の侶、詩を賦して玉環を留む。
林深くして見るべからず、霧雨、髻鬟に霾す。

【字解】【一】清遠峽　元和郡縣志に「觀亭山、一に觀峽といふ、一名中宿峽」とあり、南海古跡記に「中宿峽、一に峽山といふ、清遠縣の東に在り、山、江中に對峙す」とあり。地志に「清遠峽、一名中宿峽、羣山峻立、江流を中貫す、寺、一に飛來寺と名づく」とある。【二】凝碧灣　名勝志に「清遠峽前に凝碧灣あり、その水紺碧」とある。【三】攝衣　衣を攝折る。【四】孱顏　山を云ふ。【五】雲碓　白居易の雲碓無人水自春の自註に「廬山に雲母多し、故に水碓を以て擣練す、俗、呼んで雲碓と爲す」とあつて、水の力で自然に春く樣に裝置が出來て居る。【六】松門　王羲之の遊四郡記に「永寧縣、海に界す、中に松門四岸及び嶼あり、上皆松を生ず、故に松門と名づく」とある。【七】劍翁　吳越春秋に「越王、劍術を處女に問ふ、處女、將に王に見えむとし、道に袁公に逢ふ。女に問ふ、聞く、子、劍を善くす、と。女曰く、惟だ公の試むるところ、と。公、即ち竹林を抱き、その本を操つて處女を刺す、處女、杖を舉げて袁公を擊つ。公、即ち飛んで樹に上り、化して白猿となる」とある。【八】賦詩留玉環　王註に「傳奇、廣德中、孫恪といふものあり、洛中の一大第に游ぶ。袁氏の女あり、遂に納れて室となす。後十餘年、挈へて峽山寺に至る。袁氏欣然として服を改め、髻を理め、老僧に詣り、乃ち一碧玉環を持して、僧に獻じて曰く、これは是れ、院中の舊物、と。僧、はじめ曉らず、齋罷むに及びて、野猿數十悲嘯し、蘿を捫して躍る、袁氏惻然たり。俄に筆を命じ、詩を題して云ふ、剛被恩情役此心、無端變化幾湮沈、不如逐伴歸山去、長嘯一聲煙霧深、と。乃ち筆を地に擲ち、遂に衣を裂き、化して老猿となり、嘯くものを追ひ、樹に躍つて去る。老僧、方に悟つて曰く、乃ち貧道沙彌たる時、養ふところのもの。碧玉環は、本と故人施すところ、當時亦た猿頸に掛つて往く」とある。

【題義】廣東舊志に峽山寺記を載せて「二禺穹窿、對峙して、太華を劈くが如く、江流を東隘す。茅君傳に稱して第十九福地となす。梁の普通元年、峽に二神あり、化して居士となり、夜、舒州延祥寺眞俊禪師の寢室を叩いて曰く、峽は清遠の上流に據る、吾、一道場を建てむと欲す、師、之に居る

か、と。眞唯諾す。中夜、風雨大に作る、遲明、戶を啓けば、寺、すでに移つて峽山に置く。郡邑、その事を上り、額を賜うて至德といふ、宋時、飛來寺と改む」とある。なほ東坡の自註に「傳奇、記するところ、孫恪袁氏の事、卽ち此寺、今に至つて、人、白猿を見るものあり」とあつて、その事は、字解、賦詩留玉環」の項に註して置いた。傳奇は、無論、唐の裴硎の作である。

【詩意】天は淸遠峽を開き、地は凝碧灣より轉じて、路が通じて居る。わが行、遲速なく、丁度よき頃に、衣を卷くりあげて、山を步み、やがて寺に達した。山僧は、もとより幽獨に甘んじ、食を乞ひに出かけて、未だ還らず、雲碓は、水の力で、自然に舂き、松門には、風のみが關を守つて居る。石間より迸る泉は、客を娛ましめむとして、空山の中に琴筑が鳴つて居る。むかし、袁氏の女は、劍翁袁公の子孫であるが、游戲して、しばらく人間に居り、孫恪と結婚したが、忽然として雲に嘯く昔の仲間を思ひ出でて、詩を賦し、且つ玉環を留めて、立ち去つて仕舞つた。今や林深くして、その跡、見るべからず、霧の如き雨は、山山の髻鬟を暗まして、降り注いで居る。

【餘論】乾隆御批に「空山人なく、水流れ花開く、良に妙造自然に由る、思索に關するに匪ずして致す」とあり、紀昀は「忽ち羈絆の感を寓す」といつて居る。

散郎亭

法花(一)下有散郎亭(二)。
老樹荒崖如有情。
歡(三)戚已隨時事去。
壁間只有古人名。

散郎亭

法花の下に散郎亭あり、
老樹荒崖、情あるが如し。
歡戚、すでに時事に隨つて去る、
壁間、只だ古人の名あるのみ。

【字解】〔一〕法花　寺の名だらうといふこと。〔二〕散郎亭　王註に「唐書元稹傳、穆宗、崔潭峻に問ふ、稹安くにか在る。曰く、南宮散郎たり、と。先生の詩、當に別に指すところあるべきなり」とある。〔三〕歡戚　悲喜に同じ。

【題義】散郎亭は所在不明。

【詩意】法花の下に散郎亭があつて、亭の周圍には、老樹荒崖相連り、まことに情思あるが如く見える。心中の悲喜は、時事に隨つて去り、遂に其跡を留めず、今は壁間に於て、古人の題名を認めるのみである。

柏家渡

柏家渡西日欲落。
靑山上下猿鳥樂。
欲因新月望吳(一)雲。

柏家渡

柏家渡西、日、落ちむと欲し、
靑山上下、猿鳥樂む。
新月に因つて、吳雲を望まむと欲す、

【字解】〔一〕吳雲　吳天の雲。〔二〕南岳　寰宇記に「衡山は、卽ち南嶽なり、周八百里、上に七十二峰あり、その高峻なるもの、五にして、祝融を最となす」とあり、九域志に

遙看北斗挂南岳。
一夢愔愔四十秋。
古人不死終不休。
草舍蕭條誰與語。
香風吹過白蘋洲。

遙に看る、北斗の南岳に挂るを。
一夢愔愔四十秋、
古人死せずんば終に未だ休まず。
草舍蕭條、誰と與にか語らむ、
香風吹き過ぐ白蘋洲。

【題義】柏家渡は所在不明。

【詩意】柏家渡の西に於て、夕陽、將に落ちむとし、青山の上には鳥、下には猿、各〻羣をなして、相樂んで居る。新月の出る方向に因つて、吳雲を望まうとして居ると、北斗の南岳に挂つて居るのが遙に見えた。一夢安らかに四十年を經過したが、古人は、一意、家國に盡し、死なぬ限りは決して止まない。今宵の宿は、草小屋が物さびしく、話する樣な人も居ず、唯だ香ばしき風が岸邊に近き白蘋の茂れる沙洲を吹き過ぐるのみである。

【餘論】紀昀は「輕淺自ら好し、然れども高作に非ず」といつて居る。

「南岳衡山、上は翼軫を承け、萬物を鈐總す、故に衡山と名づく。度、斗衡に應じ、位、離宮に直る、故に南岳といふ」とある。【三】愔愔　唐韻に「愔は靖なり」とある。

清遠舟中寄耘老

清遠舟中、耘老に寄す

小寒初度梅花嶺。
萬壑千巖背人境。
清遠聊爲泛宅行。
一夢分明墮鄉井。
覺來滿眼是湖山。
鴨綠波搖鳳凰影。
海陵居士無雲梯。
歲晚結廬潁水湄。
山腰自懸蒼玉佩。
野馬不受黃金羈。
門前車馬獵獵走。
笑倚清流數鬢絲。
汀洲相見春風起。

小寒初めて度る梅花嶺、
萬壑千巖、人境に背く。
清遠、聊か泛宅の行を爲す、
一夢分明、鄉井に墮つ。
覺め來れば、滿眼是れ湖山、
鴨綠、波は搖かす鳳凰の影。
海陵居士、雲梯なく、
歲晚、廬を結ぶ潁水の湄。
山腰、自ら懸く蒼玉の佩、
野馬、受けず黃金の羈。
門前の車馬、獵獵として走る、
笑うて、清流に倚つて鬢絲を數ふ。
汀洲相見て、春風起る、

【字解】〔一〕梅花嶺　南安志に「大庾嶺、その上、多く梅を植う、又梅嶺と名づく」とある。〔二〕清遠　地名、一統志に「清遠は漢の中宿の地、梁、ここに清遠郡を置く、隋、郡を罷めて縣を置き、廣州に屬す」とある。〔三〕泛宅　舟を家として處處に浮游すること、張志和の語、前に「乘舟過賈收」の詩中に注して置いた。〔四〕鳳凰影　鳳凰は山名であらう。〔五〕海陵居士　賈耘老を指したに相違ないが、査註に「賈耘老は、吳興の人、初めより廬を苕水に結ぶの事なし。苕溪漁隱叢話に謂ふ、耘老、苕溪の上に水閣あり、と。吳興掌故集に、賈收の居るところ、浮暉閣と名づく、人、因つて稱して浮暉老人となす、亦た未だ嘗て海陵居士の稱あらず」といつて居る。

白蘋吹花散煙水。
萬里飄蓬未得歸。
目斷滄浪淚如洗。
北雁南來遺素書。
苦言大浸沒我廬。
清齋十日不然鼎。
曲突往往巢龜魚。
今年玉粒賤如水。
青銅欲買囊已虛。
人生百年如寄耳。
七十朱顏能有幾。
有子休論賢與愚。
倪生枉欲帶經鋤。
天南看取東坡叟。

白蘋、花を吹いて煙水に散ず。
萬里飄蓬、未だ歸るを得ず、
目は滄浪に斷えて、淚、洗ふが如し。
北雁南來、素書を遺る、
苦言す、大浸の我が廬を沒するを。
清齋十日、鼎を然やさず、
曲突往往、龜魚を巢ふ。
今年玉粒、賤しきこと水の如く、
青銅買はむと欲すれば、囊すでに虛し。
人生百年、寄の如きのみ、
七十朱顏、能く幾ばくかある。
子あり、論ずるを休めよ、賢と愚と、
倪生、枉げて經を帶びて鋤かむと欲す。
天南、看取せよ東坡叟、

【六】素書　手紙。【七】大浸　大洪水。【八】清齋　齋は齋戒。【九】曲突　曲れる煙突。【一〇】玉粒　米を云ふ。【一一】倪生　漢書兒寬傳に「業を孔安國に受く、貧にして資用なし。かつて、弟子の爲に都養し、時に行いて賃作し、經を帶びて鋤く」とある。

可是平生廢讀書。

これ、平生、讀書を廢すべけむや。

【題義】この詩は、清遠縣の舟中に於て作り、買收、字を耘老といふ吳中の友人に寄せたのである。

【詩意】小寒の頃、初めて梅花に知らるる大庾嶺を越えると、萬壑千巖のただずまひは、全く人境を隔離して居る。それから、清遠縣に至り、一家殘らず舟に乘つて下つたが、夢は明かに故鄉に落ち、どうやら似た樣な景色。やがて、眠さむれば、見わたす限りの湖山、鴨の頭の綠なす春波は、鳳凰山の影を漂はして居る。海陵居士は、雲に登る梯なく、立身出世の事は、ふッつり思ひ切つて、歲晚に、廬を潁水の邊に結び、山の腰は、自然に蒼玉の佩環を懸けたるが如く、野馬は、黃金の鏁で羈束されることはない。門前には、大車高蓋が獵獵として走つても、そんなものには目も吳れず、笑つて、清流に臨んで、我が影を照らしつつ、白髮を數へて居る。もし君と汀洲の上に相見たならば、春風忽ち起り、白蘋の花を吹き落して、煙水の間に散らすであらう。しかし、この身は、飄へる蓬の穗の如く、萬里の外に在つて歸ることも出來ず、滄浪の彼方は、望眼屆き兼ねて、淚は洗ふが如く流れる。すると、北地の雁が南に飛び來り、君の手紙を傳へて吳れたが、大洪水が草廬を浸し、十日の間は、さながら齋戒して居ると同じく、鍋釜で物を煮ることもなく、曲れる煙突の中には、龜魚の類が住んで居る。今年は、米の廉いことは、水と同樣、丸で無價であるが、青銅を投じて買はうとしても、囊中無一物で、まことに、弱り切つて居ると、泣き言の樣なことを言つて來た。顧みれば、人生百年、

まるで寄寓して居る樣なもので、七十になると、朱顏を留めて居るものは、殆んど無い位。子供の賢愚などは、論ずるにも及ばないので、無理にも、かの兒寬の如く、經を攜へながら畑を耕す樣に有つて欲しいとは思つて居る。ここに、天の南方に向つて、東坡叟を見よ、叟は、平生、讀書を廢したであらうか、いや決してさうではなく、つまり、讀書、累をなして、兎角、世と齟齬し、時に不測の禍に罹るが、悟り切つた身は、平氣で打澄まして居るので、君も、すこしは、その眞似をしたら善からうではないか。

【餘論】紀昀は、前半を評して「駘宕多姿」といひ、結末に就いて「太だ激なるを免れず、然れども、收め得て滿足」といつて居る。

舟行至清遠縣見顧秀才極談惠州風物之美

舟行、清遠縣に至り、顧秀才を見、極めて惠州風物の美を談ず

到處聚觀香案吏。(一)　到る處、聚まり觀る香案の吏、

此邦宜著玉堂仙。(二)　この邦、宜しく著くべし玉堂の仙。

江雲漠漠桂花溼。　江雲漠漠として桂花溼ひ、

梅雨翛翛荔子然。　梅雨翛翛として荔子然ゆ。

聞道黃柑常抵鵲。(三)　聞くならく、黃柑、常に鵲に抵ると、

不容朱橘更論錢。　容さず朱橘の更に錢を論ずるを。

恰從神武來宏景。(四)　恰も神武より宏景を來らしめ、

便向羅浮覓稚川。(五)　便ち羅浮に向つて稚川を覓む。

【字解】〔一〕香案吏　唐書百官志に「著し、仗、紫宸內閣に在らば、起居舍人、香案を夾んで殿下に分立す」とある。〔二〕玉堂仙　李肇の翰林志に「時に翰林苑に居る、皆玉帶を陵ぎ、紫背に珮ろとなす、豈に瀛洲に登るに止まらむや、亦た玉署玉堂に登るといふ」とある。〔三〕抵鵲　前に歐陽叔弼見訪の詩中に注して置いた。〔四〕神武　冠を神武門に挂く、陶弘景の事、前に送劉道原の詩中に注して置いた。〔五〕稚川　晉書に「葛洪、字は稚川、句容の人、年老いたるを以て、丹を煉り、以て遐壽を祈らむと欲し、交趾に丹を出すを聞き、求めて勾漏令となり、子姪を將ゐて俱に行き、廣州に至る。刺史鄧嶽、留むれども聽かずして去り、乃ち羅浮に止まつて丹を煉り、山に在つて年を積み、後、嶽に疏を與へて云ふ、當に遠行して師を尋ぬべし、と。期を剋して便ち發す。嶽、疏を得て往いて別る、而して、洪、坐して日中に至り、兀然睡るが若くして卒す、時に年八十一。世以て尸解して仙を得たりとなす」とある。

【題意】說明に及ばぬ、但し、顧秀才の名は不詳。

【詩意】予は、さきに香案の吏として、殿陛の下に立つて居た身分であつて、今次の旅行中、到る處、よつてたかつて來り觀やうとして居る。この邦は、山水勝絕の地で、翰林に奉職せし予が居るには、まことに、相應はしい。江雲は漠漠として、桂花爲に溼ひ、梅雨は翛翛として、荔子の花は燃ゆるが如くである。黃柑は、澤山出來る處から、鵲に打ちつける程だと聞いて居るが、朱橘とても、價を論ずるに及ばぬ位。予は、さながら陶弘景が冠を神武門に挂けて都を立ち去りしと同じく、そこで、羅浮山に向つて、葛稚川を尋ね、煉丹を學ばうと思つて居る。

【餘論】乾隆御批に「八句屬對、律詩の正格、筆力、健を積んで雄となし、杜老に頡頏す」とある。

廣州蒲澗寺

廣州の蒲澗寺

不用山僧導我前。　用ひず、山僧の我を導いて前むを、
自尋雲外出山泉。　自ら尋ぬ、雲外に山泉を出すを。
千章古木臨（一）無地。　千章の古木、無地に臨み、
百尺飛濤瀉漏（二）天。　百尺の飛濤、漏天に瀉ぐ。
昔日菖（三）蒲方士宅。　昔日、菖蒲、方士の宅、
後來薝（四）蔔祖師禪。　後來、薝蔔、祖師の禪。
而今只有花（五）含笑。　而今只だ花の笑を含むあり、
笑道秦皇欲學仙。　笑ひ道ふ、秦皇、仙を學ばむと欲すと。

【字解】【一】臨無地　王簡棲の頭陀寺碑に飛閣逶邐、下臨無地」とある。無地は絕壑。【二】漏天　寰宇記に「戎州南溪縣に大黎・小黎の二山あり、四時霧霖、俗、これを大漏天・小漏天といふ」とあり、杜甫の詩に、地道漏天終歲雨とあり、唐詩に、鼓角漏天東とある。【三】昔日菖蒲　東坡の題下自註に「地に菖蒲を產す、十二節、相傳ふ、安期生の故居、始皇、これを此に訪ふと」とある。又南方草木狀に「番禺の東に澗あり、澗中、菖蒲を生ず、皆一寸九節。安期生、采服して仙し去り、但だ玉舄を留む」とあり、南越志に「宋の咸平中、姚成甫、蒲澗の側に於て一丈夫に遇ふ、曰く、この菖蒲は、安期生の餌するところ、以て老を忘るべし、と。今の俗、七月二十五日を以て安期生上昇といひ、相率ゐて、蒲澗の游をなし、覆蓋斟酌す」とある。【四】薝蔔　香譜に「梔子香は、大食國に出づ、即ち佛書に謂はゆる薝蔔なり」とある。【五】花含笑　東坡の自註に「山中、含笑花多し」とあり、叢書聞覽に「南方の花木、北地無きところのものは、大含笑・小含笑。その花、常に菌苔の未だ敷かざるものの如し、故に含笑の名あり」と見ゆ。

【題義】廣州舊志に「番禺縣に玉虹洞あり、南を聚龍岡といふ、蒲澗寺あり、白雲山麓に在り、淳化元年建つ」とある。

【詩意】山僧が案內するまでもなく、ひとり尋ね入ると、雲外から、山淸水が湧いて出て居る。千株の古木は、俗境ならぬ谿谷に臨んで林立し、四時の雨は、飛濤百尺の勢、すさまじく、漏天から注いで下つて居る。むかしは、菖蒲の生えて居る澗に、方士が宅を構へて居たが、後來、祖師は、ここに來て、梔子の花に對して禪を試みた。今は、含笑花が咲き出でて居るだけで、秦の始皇が此處で仙を學ばうとしたのは、實に愚の至であると、花までが笑つて居る樣である。

【餘論】紀昀の評に「結語、太だ佻」とある。

贈蒲澗信長老

蒲澗の信長老に贈る

優（一）鉢曇花豈有花。　優鉢曇花、豈に花あらむや、
問師此（二）曲唱誰家。　師に問ふ、この曲唱ふるは誰が家。
已從子美得桃（三）竹。　すでに子美より桃竹を得、

【字解】【一】優鉢曇花　王註に「佛言ふ、優曇鉢、五百年にして花を開く、その花、極めて香ばしく、且つ花あつて實なし」とある。【二】此曲唱誰家　傳燈錄に「風穴延昭禪

不向安期覓棗瓜。　安期に向つて棗瓜を覓めず。
燕坐林間時有虎。　燕坐、林間、時に虎あり、
高眠粥後不聞鴉。　高眠、粥後、鴉を聞かず。
勝游自古兼支許。　勝游、古しへより支許を兼ぬ、
爲采松肪寄一車。　爲に松肪を采つて一車に寄せむ。

師、盧陵長老あり、問うて曰く、師、誰が家の曲を唱ふ、宗風、嗣ぐは阿誰。延昭禪師曰く、超然迥に出づ威音の外、翹足して徒に贊底沙を勞す」とある。【三】桃竹　東坡の自註に「この山に桃竹あり、杖と作すべし、しかも、土人識らず、予、はじめて子美の詩を錄して之に遺る」とあり、志林に「桃竹は、葉、棕の如く、身、竹の如く、密節にして實中、蓋し天成の拄杖なり。嶺南の人多く、これを種ゑて、その桃竹たるを知らず」とある。【四】棗瓜　瓜ほど大きな棗、前に答徐大正の詩中に注して置いた。【五】支許　晉書に「會稽に佳山水あり、名士多く之に居る、孫綽・李充・許詢・支遁等、皆文義を以て世に冠たり、並に室を東土に築き、羲之と同好、會稽山陰の蘭亭に宴集す」とある。【六】松肪　卽ち松脂、本草に「松脂は、久しく服すれば、身を輕くして老いず」とある。

【題義】蒲澗は前首に見えた通り、寺の名。信長老は不詳。

【詩意】優曇華は、五百年に一たび咲くといふが、あてにはならぬ。信長老に問ふが、師の唱へて居られるのは、誰が家の曲であるか、とても、宗風を嗣ぐものは、見付かりさうにもない。ここには、杜甫の云云せし桃竹を生ずるが、安期生が始皇に贈つたといふ、瓜ほど大きい棗は、探がしても分からぬ。林間に燕坐すれば、時時、虎が來るし、食後、高眠して居ると、鴉の聲も聞こえない。この地の勝游は、古しへより、許詢・支遁等、道俗を兼ね、名流は、決して閒却しなかつたので、そこで、松脂を采つて、車に滿たして歸りたいと思つて居る。

發廣州　　廣州を發す

朝市日已遠。此身良自知。　朝市、日、すでに遠く、この身、良に自ら知る。
三杯軟飽後。一枕黑甜餘。　三杯軟飽の後、一枕黑甜の餘。
蒲澗疏鐘外。黃灣落木初。　蒲澗、疏鐘の外、黃灣、落木の初。
天涯未覺遠。處處各樵漁。　天涯、未だ遠きを覺えず、處處、各〻樵漁。

【字解】【一】朝市　朝廷と都市、ここでは汴京を指して云ふ。【二】軟飽　東坡の自註に「浙人、飲酒を謂うて軟飽となす」とある。【三】黑甜　同じく自註に「俗、睡を謂うて黑甜となす」とある。【四】蒲澗　前に見ゆ。【五】黃灣　韓愈の南海神廟碑に「廣州治の東南、海濱八十里に在り、扶胥の餘、黃木の灣」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】汴京は、日に日に遠く、いつしか、蠻荒の地に近づいたが、まことに平氣である。三杯、酒を飲んだ後、一枕睡醒めし時、愈よここ廣州を出發する。蒲澗は、疏鐘の外に隱見し、名にしおふ黃木灣では、そろそろ落葉する頃となつた。身は天涯に在れども、未だ遠きを覺えざるは、處處に樵漁の者どもが住んで居て、さばかり民俗が異なつて居らぬからである。

【餘論】紀昀は「三四佳ならず、詩話、これを稱す、是に非ず」といひ「結語、自ら好し」といつて居る。

浴日亭

劍氣峥嶸夜插レ天。
瑞光明滅到二黃灣一。
坐看暘谷浮二金暈一。
遙想錢塘涌二雪山一。
已覺蒼涼蘇二病骨一。
更煩二沆瀣一洗二衰顏一。
忽驚鳥動行人起。
飛上千峯紫翠間。

浴日亭

劍氣峥嶸、夜、天に插む。
瑞光明滅、黃灣に到る。
坐に看る、暘谷の金暈を浮ぶるを、
遙に想ふ、錢塘に雪山を涌かしむるを。
すでに覺ゆ、蒼涼の病骨を蘇するを、
更に沆瀣を煩はして衰顏を洗ふ。
忽ち驚く、鳥動いて行人起つを、
飛んで上る、千峯紫翠の間。

【字解】【一】劍氣峥嶸　王文誥の案に「日、出でむと欲する時、空に當つて、先づ紅氣一道あり、浮んで動かざるもの、良や久し。その色見えず、すなはち、東方漸く白し。これ日未だ出でざる時、その光、海上に漏出するに由る、又海より天に激射するなり。この句、正に其狀を形容す、王註は、乃ち其字面を道ふのみ」とある。王註は、字面に拘泥して、豐城劍氣の事を引いたのである。【二】暘谷　日の出づる處、淮南子に見え、前に題二妙香閣一の詩中に註して置いた。【三】蒼涼　朝日の涼しげなるを云ふ。列子に「孔子東游、兩小兒の辯鬭するを見る、その一に曰く、日初めて出づ、蒼蒼涼涼、その日、中に及んでは湯を探るが如し」とある。【四】沆瀣　列仙傳に「於陵子言ふ、春は朝霞を食ひ、夏は沆瀣を食ふ、沆瀣とは夜中の氣なり」とある。

【題義】廣州志に「浴日亭は、扶胥鎭海神廟の右に在り、小山屹立、亭、その上に冠し、前に大海を瞰、夜半、日、漸く東海より出づ、故に名づく。後、名を拱日と改む、廣州を去る、東南八十里」とある。

【詩意】劍氣と見まがふ紅氣は、眞夜中の頃、高く天に插み、瑞光は黃灣の海口に明滅して居る。その內に、東、暘谷に當つて黃金色の暈を浮べ、錢塘では、潮が推し寄せて、雪山を湧かして居るであらう。その淸淸しさは病骨を蘇へらすべく、更に夜中の氣を以て衰顏を洗はうと思つて居る。忽ちにして、宿れる鳥は動き出し、旅人も出發せむとする頃になると、日輪は、いつしか、千峰紫翠の間に飛び上つて仕舞つた。

【餘論】乾隆御批に「前六句、猶ほ是れ滄滄涼涼の勢、忽驚鳥動、一轉陡然として上る、筆勢奇絕」とある。

游二羅浮山一一首、示二兒子過一

人間有二此白玉京一。
羅浮見レ日雞一鳴。
南樓未二必齊二日觀一。

羅浮山に游ぶ、一首。兒子過に示す

人間、この白玉京あり、
羅浮、日を見て雞一鳴。
南樓、未だ必ずしも日觀に齊しからず、

【字解】【一】白玉京　李白の詩に天上白玉京、十二樓五城とある。【二】羅浮見日　東坡の自註に「劉夢得、詩あり、羅浮、夜半日を見る事

(五)鬱儀自欲朝朱明。
東坡之師抱朴老。(六)
眞契久已交前生。
玉堂金馬久流落。
寸田尺宅今誰耕。
(七)道華亦嘗啖一棗。
(八)契虛正欲仇三彭。
(九)鐵橋石柱連空橫。
杖藜欲趁飛猱輕。(一〇)
雲溪夜逢瘖虎伏。(一一)
(一二)斗壇晝出銅龍獰。
(一三)小兒少年有奇志。
中宵起坐存黃庭。(一四)
近者戲作凌雲賦。

鬱儀、自ら朱明に朝せむと欲す。
東坡の師、抱朴老、
眞契、久しく已に前生に交る。
玉堂金馬、久しく流落、
寸田尺宅、今誰か耕さむ。
道華、亦た嘗て一棗を啖ふ、
契虛、正に三彭に仇せむと欲す。
鐵橋石柱、空に連つて横はり、
杖藜、飛猱の輕きを趁はむと欲す。
雲溪、夜逢ふ瘖虎の伏するに、
斗壇、晝出づ銅龍獰たる。
小兒、少年、奇志あり、
中宵、起坐して黃庭を存す。
近ごろ戲に作る凌雲の賦、

を記す。山に二石樓あり、今延祥寺は南樓の下に在り。朱明洞は、沖虛觀後に在り。云ふ、是れ蓬萊第七洞天」とある。【三】日觀　泰山の日觀峰。【四】南樓　上に見ゆ。【五】鬱儀　黃庭內景經に高奔日月吾上道、鬱儀結鄰善相保とあつて、その註に「鬱儀は、奔日の仙なり」とある。【六】抱朴老　卽ち抱朴子、葛洪の道號。【七】道華　東坡の自註に「唐の永樂の道士、侯道華、鄧天師の藥を竊み食うて、仙し去る。永樂に無核の棗あり、人、得べからず、道華、ひとり之を得たり。予、岐下に在り、亦た嘗て一枚を食ふを得たり」とある。なほ道華竊藥の事は、續仙傳にも見えて居る。【八】契虛　東坡の自註に「唐僧契虛、人に遇へば、導いて稚川に游ぶ。仙府の眞人、問うて曰く、汝、三彭の仇を絕

筆勢彷彿離騷經。
負書從我盍歸去。
羣仙正草新宮銘。(一五)
汝應奴隸蔡少霞。
我亦季孟山元卿。(一六)
還須略報老同叔。(一七)
贏糧萬里尋初平。(一八)

筆勢、彷彿たり離騷經。
書を負ひ、我に從つて盍ぞ歸り去らざる、
羣仙、正に草す新宮の銘。
汝、應に蔡少霞を奴隸にすべし、
我、亦た山元卿を季孟にせむ。
還た須らく、略ぼ老同叔に報すべし、
糧を贏して、萬里、初平を尋ねむ。

つかと、契虛答ふる能はず」とある。三彭仇は、前に賦席上果の詩中に注して置いた。【九】鐵橋石柱　東坡の自註に「山に鐵橋石柱あり、人、至るもの罕なり」とある。【一〇】飛猱　猱は猿の類。【一一】瘖虎伏　東坡の自註に「山に啞虎あつて、山を守る」とあり、查註に「山志、啞虎洞は、朱明洞側に在り、黃野人といふものあり、葛洪の遺丹を得、これを服して仙と成る、啞虎、これが爲に門を守る」とある。【一二】斗壇　東坡の自註に「沖虛觀後に朱眞人の朝斗壇あり、近ごろ、壇上に於て、銅龍六、銅魚一を得たり」とある。【一三】小兒　東坡の末子過を云ふ。【一四】存黃庭　黃庭內景經に「歸神常に在つて、魂停を守る、晝夜これを存すれば、長生すべし」とあつて、註に「魂停は、卽ち黃庭なり」とある。【一五】新宮銘　東坡の自註に「唐に、夢に新宮の銘を書するものあり、紫陽眞人山元卿と云ふ。又、蔡少霞といふものあり、夢に、人、碑を書せしむ、その末題して云ふ、五雲書閣吏蔡少霞書」とある。なほ新宮銘の全文は、集異記・容齋隨筆等に載せてある。【一六】季孟　魯の公族季孫孟孫の二氏、伯仲といふに同じ。【一七】老同叔　東坡の自註に「子由、一字は同叔」とある。【一八】初平　卽ち仙人の黃初平、前に和子由盜諸將官の詩中に注して置いた。

【題義】羅浮指掌圖に「山の高さ三千六百丈、袤直五百里、峰巒四百三十二、嶺十五、石室七十二、瀑布九百八十、大小石樓あり、相去ること五里、皆高く雲表に出で、重薔四柱、樓の如く、これに登

らば、滄海を望むべく、夜半、日の初めて出づるを見る。茅君內傳、大天の內、地中の洞天三十六所あり、羅浮山の洞、周廻五百里、名づけて朱明耀眞の天といふ。謝靈運の羅浮山賦に、朱明之陽宮、耀眞之陰室」とあり、太平寰宇記に「羅浮山は、博羅縣に在り。南越志に云ふ、增城縣の東に羅浮山あり、浮水出づ、これを浮山となす。羅山と竝體、故に羅浮といふ。嶮尖の峰四百三十有二、上には三峰爭竦、各〻五六千仞、北は勾曲の山に通す、卽ち茅君內傳に云ふ、第七洞、朱明耀眞の天と名づく、瑤房瑤室七十有二、泉源の府九百八十有三」とある。この詩は、羅浮山に遊び、賦して、同行せる末子の過に示したのである。

【詩意】天上に限られた白玉京が、この人間にも有つて、それが卽ち羅浮山、ここに登れば、雞が夜半に一鳴する時、日の東海から上るのが見える。南の方なる石樓は、必ずしも、泰山の日觀峰に齊しい譯ではないが、日に奔る鬱儀といふ仙人は、ここに居て、朱明洞に朝謁せむとして居る。予の師たる抱朴子は、矢張、ここに住んで居て、予との眞契は、すでに久しく、前生に於て交を結んだのである。予は、翰林に入り、金馬門に伺候したこともあるが、流落、すでに久しく、寸田尺宅も、今耕すものがなくて、荒蕪に任かせてある。むかし、侯道華は、天師の棗を喫つたといふし、契盧といふ坊さんは、人さへ來れば、ここの稚川に案內して、人類の仇たる三尸蟲を退治しやうとしたが、予も、亦たここに居て、その眞似をしたいと思つて居る。さはれ、羅浮山中、到る處、鐵橋石柱が空に連つて橫はつて居るから、藜の杖を曳いて、飛猱の如く身輕に立ち廻らねばならず、雲に閉ぢたる溪を行けば、夜、晅の虎の待ち伏せをして居るのに遇ふべく、朝、斗壇の上では、銅龍の獰惡なるが、晝は、まさまさと見えて、隨分恐ろしいことである。ここに、わが末子の過といふものは、少年にして奇志を存し、夜中に起坐して魂停を長養し、一寸、仙人臭い處がある樣に見える。近ごろ、戲れに、淩雲の賦の樣なものを作つたが、その筆勢は屈原の離騷と彷彿として居て、行く行くは、物に成る望がある。されば、書を脊負ひ、われに從つて、一所に往つた方が善いので、羣仙は、今將に新宮の銘を草せむとして、頻りに苦心して居る時であるが、汝は、上手に字を書いて、蔡少霞を奴隸視すべく、我も亦た山元卿と伯仲の間に在る樣な立派な銘詞を作らうと心がけて居る。それから、この事を、大略、子由に知らせるが善いので、さうすると、糧を裹んで、萬里の遠路を經、かの仙人の黃初平を尋ねて、この道に志ざす樣に成るに相違ない。

【餘論】乾隆御批に「森蔚瑞偉、御風淩雲の氣を以て之を行る、これ亦た新宮の銘に謂はゆる天籟虛徐、風篇冷徹するものか」といひ、紀昀は起首に就いて「筆筆警拔、大題目、自ら敢て草草たらず」といひ、小兒少年有奇志、以下を評して「情文相生じて興會飈擧」といつて居る。

十月二日、初到惠州　　十月二日、初めて惠州に到る

彷彿曾游豈夢中。　彷彿曾游、豈に夢中ならむや、　——【字解】【一】識新壁　西京雜記

欣然雞犬識(一)新豐。　欣然として、雞犬、新豐を識る。
吏民驚怪坐何事。　吏民驚怪す、何事に坐すと、
父老相攜迎此翁。　父老相攜へて此翁を迎ふ。
(二)蘇武豈知還漢北。　蘇武、豈に漢北に還るを知らむや、
(三)管寧自欲老遼東。　管寧、自ら遼東に老いむと欲す。
(四)嶺南萬戸皆春色。　嶺南萬戸、皆春色、
會有幽人客寓(五)公。　會ず、幽人の寓公を客とするあらむ。

に「高祖、すでに新豐を作り、并せて舊社を移し、衢巷棟宇、物色惟だ舊、士女老幼、相攜へて、路首に各その室を知り、犬羊雞鴨を通衢に放てば、亦た競うて其家を識る」とある。【二】蘇武 前に、玉盤盂の詩註に見ゆ。【三】管寧 三國志に「管寧は北海朱虚の人、天下大に亂る、公孫度の令、海外に行はるゝを聞き、遂に邴原・王烈等と遼東に至る。すでに往いて、度を見るや、乃ち山谷に廬して、悪志なきを示す」とある。【四】嶺南萬戸 東坡の自註に「嶺南萬戸は酒」とある。【五】寓公 禮記に「諸侯は、寓公を臣とせず」とあつて、元は公爵にして寄寓するものを指したが、後には、爵の有無に關せずして言ふらしい。

【題義】説明に及ばぬ。元和郡縣志に「秦の南海郡、隋、分つて循州を立つ」とあり、輿地廣記に「五代の時、南漢、改めて禎州といひ、而して、別に循州を北境に立つ」とあり、太平寰宇記に「禎州、本と循州の舊理、僞漢の劉龔、循州を雷郷縣に移し、歸善縣に於て禎州を置く。按ずるに、天禧中、仁宗の諱を避けて惠州と改む、西、廣州に至る四百餘里」とある。

【詩意】今惠州に來て見れば、彷彿として、曾遊の地の如く、決して、夢中に一たび至つた位なことではなく、雞犬までが、欣然として、新豐の家を識別すると同じである。吏民どもは、予が何事に坐して、こんな邊地に來たかといつて、驚き怪んで居るが、父老どもは、相攜へて、予を迎へに來て呉れた。蘇武は、この上、どうして、漢北に往くことを知るべき、但し、管寧は、亂を避けて、自ら遼東の地に老ゆる覺悟である。嶺南萬戸と名づくる酒は、春色人を醉はしむべく、又予の如き寓公を賓遇する幽人もあらうから、先づ、ここに落ち付く積りである。

【餘論】乾隆御批に「貶謫の地、舊游を見るが如く、終焉の志あり、賢者、もとより寓に隨つて安し」とあり、紀昀は後聯を評して「二事、ともに切ならず」といつて居る。

寓居合江樓

合江樓に寓居す

海山(一)蔥曨氣佳哉。　海山蔥曨として、氣佳なるかな、
(二)二江合處朱樓開。　二江合する處、朱樓開く。
(三)蓬萊方丈應不遠。　蓬萊方丈、應に遠からざるべし。
肯爲蘇子浮江來。　肯て蘇子の爲に江に浮んで來る。
江風初涼睡正美。　江風、初めて涼しく、睡、正に美なり、
樓上啼鴉呼我起。　樓上の啼鴉、われを呼んで起たしむ。

【字解】【一】蔥曨 こんもりして居る貌。【二】二江合處 題義の項を見よ。【三】蓬萊方丈 これに瀛洲を合せて三神山といふ。【四】羅浮春 東坡の自註に「予が家釀の酒、羅浮春と名づく」とある。

我今身世兩相違。　われ今、身世、兩つながら相違ふ、
西流白日東流水。　西流の白日、東流の水。
樓中老人日清新。　樓中の老人、日に清新、
天上豈有癡仙人。　天上、豈に癡仙人あらむや。
三山咫尺不歸去。　三山咫尺、歸り去らず、
一杯付與羅浮春。　一杯、付與す羅浮春。

【題義】名勝志に「東江は、源、江西贛州よりし、龍川縣を經、來つて白鶴峰の陰を遶り、惠州城東に至る。亦た之を龍川口といふ。西江は、九龍山より西流一百二十里、亦た城東に至り、龍江と合流、石灣に至り、西南虎頭門を經て海に入る。その滙流の處に合江樓あり、卽ち府城の東門樓なり」とあり、危太樸の東坡書院記に「公、はじめ惠州に至り、合江樓に寓居し、數日にして嘉祐寺に遷る」とあり、王文誥の案に「當日、合江樓、三司行衙中に在り、城樓は乃ち後世の事」とある。

【詩意】海山は、こんもりとして、まことに氣象絕佳、東西二江の交會點に當つて、朱樓が開いて居る。察する處、蓬萊方丈も、此からは、さう遠くはあるまじく、予が爲に、その影が、江水に浮んで居る。江風初めて涼しき時、眠り心地もよく、やがて、樓上の烏啼き出で、予を呼んで起たしめる。

予は、今、この身と浮世と互に相違うて、禍に逢ひ、白日は西に、江水は東に流るると同じく、丸で反對の方向に走つて居る。しかし、樓上に坐臥して居ると、日に日に、淸新なる心持がするし、天上には、愚癡ッぽい仙人は居ない筈で、豁然として、大悟せねばならぬ。三神山は、咫尺に在れども、そこに往くことが出來ぬ處から、手づくりの羅浮春と稱する酒を一杯引ッかけて、胸の有耶無耶を拂ひ除ける外はない。

【餘論】紀昀は「起勢超忽、以下皆音節諧雅、深意なしと雖も、しかも自ら佳」とある。

惠州靈惠院壁間畫一仰面向天醉僧云是蜀僧隱巒所作題詩於其下

惠州靈惠院の壁間に、一の面を仰いで天に向ふの醉僧を畫く。云ふ是れ蜀僧隱巒の作るところ、と。詩を其下に題す

直視無前氣吐虹。　直視、前なく、氣、虹を吐く、
五湖三島在胸中。　五湖三島、胸中に在り。
相逢莫怪不相揖。　相逢ふ、怪む莫れ相揖せざるを、
只見山僧不見公。　只だ山僧を見て公を見ず。

【字解】〔一〕直視　見つめる。〔二〕五湖　太湖に同じ。前に數ば見ゆ。〔三〕三島　卽ち三神山。

【題意】惠州の靈惠院の壁に、面を仰いで天に向つて居る一人の醉僧を畫いてあつて、蜀僧隱巒の作といふこと、そこで、予は詩を共下に題した。

【詩意】畫中の醉僧は、天を見つめて、前に物なきが如く、氣は虹を吐く樣な有樣、定めて、胸中には、五湖三島を蓄へて居るであらう。予が此に來て、合釋を爲なかつたのを怪む勿れ、そは山僧を見てばかり居て、貴公を見なかつたからである。

【餘論】紀昀は「語、粗豪を帶ぶ、殊に詩品に乖く」といつて居る。

白水山佛跡巖

何人守(一)蓬萊。夜半失(二)左股。
浮山若鵬蹲。忽展垂天羽。
根株互連絡。崖嶠爭吐吞。
神工自爐(三)韛。融(四)液相綴補。
至今餘隙罅。流出千斛乳。
方其欲合時。天匠麾月(五)斧。

白水山佛跡巖

何人か、蓬萊を守り、夜半、左股を失ふ。
浮山、鵬の蹲するが若く、忽ち垂天の羽を展ぶ。
根株、互に連絡、崖嶠、爭うて吐吞。
神工、自ら爐韛、融液相綴補。
今に至つて、隙罅を餘し、流れ出づ千斛の乳。
その合せむと欲する時に方つて、天匠、月斧を麾く。

帝觴分餘瀝。山骨醉后土。
峯巒尚開闔。澗谷猶呼舞。
海風吹未凝。古佛來(七)布武。
當時汪(六)罔氏。投足不(八)蓋拇。
青蓮雖不見。千古落花雨。
雙溪滙(九)九折。萬馬騰一鼓。
奔雷濺玉雪。潭洞開(一〇)水府。
潛鱗有飢蛟。掉尾取渴虎。
我來方醉後。濯足聊戲侮。
回風捲飛雹。掠面過强弩。
山靈莫惡劇。微命安足賭。
此山吾欲老。愼勿厭求取。
谿流變春酒。與我相賓主。
當連蒼(一一)竹竿。下灌黃(一二)精圃。

帝觴、餘瀝を分ち、山骨、后土に醉ふ。
峯巒、なほ開闔、澗谷、猶ほ呼舞。
海風、吹いて未だ凝らず、古佛、來つて武を布く。
當時、汪罔氏、足を投じて拇を蓋はず。
青蓮、見えずと雖も、千古、落花の雨。
雙溪、九折を滙して、萬馬、一鼓に騰る。
奔雷、玉雪を濺ぎ、潭洞、水府を開く。
潛鱗、飢蛟あり、尾を掉つて、渇虎を取る。
われ來つて醉後に方り、足を濯うて聊か戲侮。
回風、飛雹を捲き、面を掠めて强弩に過ぐ。
山靈、惡むこと劇しくする莫れ、微命、安んぞ賭するに足らむ。
この山、吾、老いむと欲す、愼んで求取を厭ふ勿れ。
谿流、春酒に變せば、われと相賓主。
當に青竹竿を連ね、下、黃精圃に灑ぐべし。

【字解】【一】蓬萊　太平寰宇記に「浮山、本と蓬萊山と名づく、一峰、海中に在つて羅山と合す」とある。【二】失左股　王註に「惠州浮山、地理志に據るに、云ふ、會稽より來る、と。今に山上、なほ東方の草木あり、と。又云ふ、本と一羅浮山あり、蓬萊の峰より浮び來つて合す」とあり、易の明夷に「左股に夷せらる」とある。【三】爐鞴　爐火とふいご。【四】融液　溶解する。【五】月斧　月中で桂樹を斫る斧、前に正月一日雪中の詩中に註して置いた。【六】來布武　來りて足跡を留めた。【七】汪罔氏　家語に「孔子曰く、汪芒氏の君、封嵎の山を守るものを漆姓となす。虞夏商に在つては汪芒氏たり、周に於ては長翟氏たり」とあつて、汪罔氏は卽ち防風氏である。【八】不蓋拇　拇は親指。【九】瀰　水が回折して瀦まる。【一〇】水府　水底の宮闕、卽ち龍宮。【一一】青竹竿　竹の割つたのを連續して筧とすること、寰宇記に「羅浮山第三十一嶺、半は是れ巨竹、皆七尺の圍、節の長さ二丈、これを龍鐘竹といふ」とあり、名勝志に「羅陽渓の傍に蔥竹を産す、一名龍公徑、七尺の圍、節の長さ一丈二尺」とある。【一二】黃精　抱朴子に「黃精は兎竹と名づく、一名垂珠、その華を服するは、その實に勝り、その實を服するは、その根に勝れり」とある。

【題義】東坡の自註に「羅浮の東麓なり、惠州の東北二十里に在り」といひ、顧微の廣州記に「南海增城縣白水山、瀑布あつて懸る」とあつて、その註に「百許丈、西に佛跡巖あり、その東、湯泉出づ」とあり、廣東舊志に「石鼓嶺は、博羅縣北に在り、又二十里、象山となす、その相連るものを白水山となし、傍に巨人の跡あり、これを佛跡巖といふ。その西は佛跡院」とあり、唐子西の記に「巨人の跡、長さ三肘、濶さを量るに之に稱ふ、巖石の上に散印し、深きものは二寸許」とある。

【詩意】何人が蓬萊の稱ある浮山を守つて居たか知らぬが、夜半自然と、左の股が動き出し、いつしか離れて羅山の方に押し移つて來た。元來、浮山は、鵬が蹲まる樣な形をして居たが、忽ち垂天の翼を展ばして飛び出し、羅山と合して、根株互に連絡し、崖嶠と呑吐を爭ふ樣になつた。造化の工は、爐火やふいごに匹敵すべく、やがて、溶解して、互に綴り補つて仕舞つた。しかし、今日に至るまで、兩山の密著した處に、隙間があつて、そこから、千斛の乳に比すべき白水が流れ出て瀑布を爲して居る。その隙間をぴツたり合はせて仕舞はうといふので、天上の工匠は、月中の斧を用意して來て、頻りに工事を急いだ。しかし、その水は、天帝から御餘りの酒の雫を分ち賜はると同じく、山骨は后土の上に於て醉ひ潰れて仕舞ひ、どうも、工事が十分に行かぬ處から、峰巒は尙ほ開闔し、澗谷は矢張呼舞して、むかしの俤を殘して居る。海風吹き來つて、山谷がまだ凝化せざる時に、古佛が此に來て、その足跡を留めたが、頗る大きなもので、丁度、古しへの汪罔氏かと疑ふばかり、足を投ずる間に、親指の跡が、はツきり殘つて居る。すでに佛足の跡があるから、天上より、常に花を雨らし、青蓮だけは見えないが、その他、さまざまの色が間雜紛揉して居る。その瀑の水は、はじめ、雙溪となり、一たび屈折して稍や深くなり、そして、九折して流れ去り、その勢は、萬馬が一鼓の響に躍り上るが如く、奔雷の聲と共に、飛沫は、玉雪を濺ぐが如く、しまひに深い淵となつて、その中に、水府龍宮を開いて居る。その淵の中には、蛟が住んで居て、饑ゑた揭句には、水を飮みに來た虎を打ち取つて食つたことがあつて、まことに恐ろしい處である。予は、醉後ここに來り、足を溫泉に濯ひなどして、聊か戲侮したが、回風颯として雹を捲いて飛び、その雹の顏に打ち付ける勢は、強弩にも勝つて居る位。そこで、予は、山靈よ、さう甚しく予を惡んで呉れるな、この命は、もとより賭するに足らず、予は、この山に隱棲しやうと思ふ位で、篤と注意して、予が求め取ることを厭は

ぬ樣にして貰ひたい。願はくは、谿流を化して春酒とならしめ、汝山靈と予と、互に賓主となつたらば善からう。予は又青竹を割り、それを連ねて筧となし、遠くから、谿水を引いて來て、黃精を種ゑた畑に灌ぎかける樣にする積りであるといつた。

【餘論】乾隆御批に「山記に謂ふ、浮山は卽ち蓬萊の別島、洪水浮び至り、羅に依つて止まり、二山合體、これを羅浮といふと。本と是れ不根の說。前八韻は、これに據り、翻騰して入り、佛跡二字の爲に勢を取り、以て古佛來布武の一句に跌落するに非ざるはなきのみ。後に湯池に浴するを記し、飢蛟、湯虎、飛雹、强弩、數句の中より、參するに醉後、濯足の二語を以てす、忽然として、勸魄驚心、忽然として、臂を掉うて徐步し、羅浮は、風雨を以て合離となす、その神筆に匪ざれば、その妙を傳ふるなし」とあり、査初白は「字字刻畫、句句變化、雲煙離合、端倪すべからず」といひ、紀昀は「奇氣坌涌、一語として警拔ならざるなく、しかも、一毫粗獷の氣なし」といひ「上半、かくの如く奇恣、下半、如何にして收束せむ、この兀傲の氣に非ざれば、撑拄し起さず」といつて居る。

詠湯泉

湯泉を詠ず

積水焚(一)大槐。蓄(二)油災武庫。　積水、大槐を焚き、油を蓄へて武庫に災す。

驚然(三)丞相井。疑浣(四)將軍布。　驚いて然ゆ丞相井、將軍の布を浣ふかと疑ふ。

自憐耳目隘。未測陰陽故。　自ら憐む耳目の隘き、未だ陰陽の故を測らず。

(五)鬱攸火山烈。(六)觱沸湯泉注。　鬱攸として、火山烈しく、觱沸として、湯泉注ぐ。

豈惟渴獸駭。坐使癡兒怖。　豈に惟だ渴獸の駭くのみならむや、坐に癡兒をして怖れしむ。

安能長魚鼈。僅可(七)燖狐兎。　安んぞ能く魚鼈を長せむ、わづかに狐兎を燖すべし。

山中惟(八)木客。戶外時(九)芒屨。　山中、惟だ木客、戶外、時に芒屨。

雖無(一〇)傾城浴。幸免(一一)亡國汚。　傾城の浴なしと雖も、幸に亡國に汚さるるを免る。

【字解】【一】焚大槐　莊子に「水中火あり、乃ち大槐を焚く」とある。【二】蓄油　博物志に「油を積んで萬石に滿つれば、自然火を生ず、武帝の泰始中、武庫火あり、積油の致すところ」とある。【三】丞相井　異苑に「臨邛縣に火井あり、漢室の隆なるとき、炎赫彌よ熾に、桓靈の際は、火勢漸く微、諸葛亮一瞰して、更に盛なり。景耀元年に至り、人、燭を以て之に投ずれば、卽ち滅す、その年、蜀、魏に倂せらる」とある。【四】將軍布　三國魏志の注に傅子を引いて「漢の桓帝の時、大將軍梁冀、火浣布を以て單衣を爲り、かつて、大に賓客を會す。冀、陽つて酒を爭ひ、杯を失して之を汚す、僞り怒り、衣を解いて曰く、これを燒かむ、と。布、火を得て赫然として燒くが如く、凡そ布垢盡く火滅し、粲然潔白」とある。【五】鬱攸　火勢の盛なる貌。【六】觱沸　水の湧き出る貌。【七】可燖　燖は煮る。【八】木客　すだま。【九】芒屨　草で編んだ履。【一〇】傾城浴　城中の人を傾けてここに浴す。【一一】亡國　玄宗屢ば驪山の溫泉宮に幸し、奢侈の極、遂に國を亡ぼせしをいふ。

【題義】東坡の自註に「白水山に在り」と記し、唐子西の湯泉記に「佛跡院中、二泉を湧出す、その東は湯泉、その西は雪如泉、二泉相去ること步武、しかも、東泉は熱甚しくして、指を觸るるに堪

へす、西泉を以て之を解かば、わづかに沐浴に適す、これ物理の解すべからざるもの」とある。なほ王文誥の案に「湯泉は砂礫に淤せられ、今わづかに數寸の水あり、寛さ約數抱、その雪如泉は、久しく塞がつて考ふべからず」とある。

【詩意】積水の中には火があつて、大槐を焚くといひ、油を積むと、はては武庫に禍すると稱し、丞相井は、勢を得て燃え出したことがあるし、梁冀の火浣布は、火の爲に洗つた樣に奇麗に成つた。予は、見聞太だ狹くして、まだ陰陽の原理を測り知ることが出來ない。鬱攸として、火山の勢は常に烈しく、從つて、觱沸として、溫泉も湧き出る。その溫泉は、覚に渴獸を駭かすのみならず、螭兕をも怖れしめ、ここに、魚鼈は生長せぬが、狐兎の肉ぐらゐは烹られる。山中に居るは木客のみであるが、時たま、戶外に芒屩を脫ぐ人もある。要するに、城中の人を傾けて之に浴するといふ樣な繁華は見られぬが、奢侈を以て國を亡ぼした樣な事に汚されないのは、却つて幸である。

自笑、一首

子石(一)如琢玉。遠煙眞削黳(二)。
子石は琢玉の如く、遠煙、眞に黳を削る。

入我病風手(三)。元雲涳萋萋。
わが病風の手に入つて、元雲、涳として萋萋。

是中有何好。而我喜欲迷。
この中、何の好きかある、しかも、われ喜んで迷はむと欲す。

既似蠟屐阮(四)。又如鍛柳嵇(五)。
すでに、蠟屐の阮に似、又鍛柳の嵇の如し。

醉筆得天全。宛宛(六)天投蜺(七)。
醉筆、天全を得、宛宛たる天投蜺。

多謝中書君(八)。伴我此幽棲。
多謝す中書君、われに伴ふ、この幽棲。

【字解】【一】子石　歐陽修の硯譜に「端石は、子石を以て上となす、子石は、大石中に在つて生ず、蓋し精石なり」とある。【二】削黳　黳は黑色。【三】病風手　中風やみの手、ふるへて力なきを云ふ、東坡の自註に「古語に云ふ、墨を磨するは、病風の手の如し」とある。【四】蠟屐阮　前に次韻答舒教授の詩中に注して置いた。【五】鍛柳嵇　晉書に「嵇康、性、絕巧にして鍛を好む、宅中一柳樹あり、甚だ茂る、乃ち水を激して之に圍し、夏月ごとに、その下に居て、以て鍛す」とある。【六】宛宛　のたくる貌。【七】天投蜺　後漢五行志に「靈帝光和元年六月、黑氣あり、北宮溫明殿東庭の中に墮つ、黑きこと車蓋の如し、騰起奮迅、長さ十餘丈、形貌、龍に似たり。上、蔡邕に問ふ、對へて曰く、謂はゆる天投蜺なるものなり」とある。【八】中書君　筆の異名、前に和先生過湖州の詩中に注して置いた。

【題義】一本に試筆と題してあるが、詩意に據れば、その方が宜しい樣である。

【詩意】端溪の最上品と稱せらるる子石は、玉を琢いた樣であるし、遠地から取り寄せた煙墨は、松柏の煤を堅めて削成し、自然、黑色をして居る。予は、中風やみの樣な手つきをして、緩緩と此墨を磨ると、玄雲が萋萋として湧き出る。この中、どんな好い處があつて、予は喜んで迷はむとするのであるか。すでに、屐を集めて蠟で磨いて居る阮孚に類似して居るし、又柳の下に鍛冶の眞似をして居る嵇康の樣でもある。そこで、醉筆を揮ふと、天然に全きを得、宛宛として、のたくつて居る樣は、

天投蜺の樣である。中書君の異名ある筆が、この幽棲の中に在つて、予と相伴うて居るのは、まことに有り難いことである。

【餘論】 紀昀は「結、却つて傖氣」といつて居る。

無題

無題

(一)六秩行當啓。(二)區中緣更疏。　六秩、行く〻當に啓くべし、區中、緣更に疏なり。

(三)不貪爲我寶。(四)安步當君車。　貪らざるを我が寶となし、步に安んじて、君の車に當る。

故國多喬木。先人有敝廬。　故國、喬木多く、先人、敝廬あり。

誓將閒散好。不著一行書。　誓つて、閒散と好し、一行の書を著さず。

【字解】 〔一〕 六秩　秩は十年、一秩は一歲より十歲まで、從つて、六秩は五十一から六十まで。そこで、六秩を六十とするのは、後人の誤用であるが、この時、東坡は五十九であつて、矢張、世俗の意味で用ひて居る。〔二〕 區中　この世の中。〔三〕 不貪　前に和陶飮酒の詩中に注して置いた。〔四〕 安步　戰國策に「晩食、以て肉に當て、安步、以て車に當て、無罪、以て貴に當つ」とあつて、當は、充當、或は代用の義。

【題義】 格別、題を設ける必要もないから、無題といつたのであらう。

【詩意】 六十は、行く〻將に開かむとして居て、この浮世に於ける因緣は、愈よ疏濶になるであらう。予は、貪らざるを以て寶となし、安步を以て車に代用して居る。故國には、喬木多く、そして、亡父の敝廬もあるから、いつか其處に還りたいと思つて居る。刻下は、誓つて閒散の境涯に居たい處から、一行の書さへも著さない。

【餘論】 紀昀は「太だ平鈍」といつて居る。

朝雲詩

朝雲の詩

世謂、樂天有粥駱馬、放楊柳枝詞、嘉其主老病不忍去也、然夢得有詩云、春盡絮飛留不住、隨風好去落誰家、樂天亦云、病與樂天相伴住、春隨樊子一時歸、則是樊素竟去也、予家有數妾、四五年、相繼辭去、獨朝雲隨予南遷、因讀樂天集、戲作此詩、朝雲姓王氏、錢唐人、嘗有子曰幹兒、未期而夭云。

【訓讀】 世、謂ふ、樂天、駱馬を粥ぎ、楊柳枝を放つの詞あり。その主、老病、去るに忍びざるを嘉するなり。然れども、夢得、詩あり、云ふ、春盡き絮飛んで留むれども住まらず、風に隨つて好し去つて誰が家にか落つ、と。樂天亦た云ふ、病は、樂天と相伴うて住し、春は樊子に隨つて一時に歸ると。すなはち是れ、樊素、竟に去るなり。予が家に數妾あり、四五年、相繼いで辭して去る。ひと

り朝雲、予に隨つて南遷す、樂天の集を讀むに因つて、戲に此詩を作る。朝雲、姓は王氏、錢唐の人、かつて子あり、幹兒といふ、未だ期ならずして夭すと云ふ。

不似楊(一)枝別樂天。　似ず楊枝の樂天に別るるに、
恰如通(二)德伴伶元。　恰も通德が伶元に伴ふが如し。
(三)阿奴絡秀不同老。　阿奴絡秀、同じく老いず、
(四)天女維摩總解禪。　天女維摩、すべて禪を解す。
經卷藥爐新活計。　經卷藥爐、新活計、
舞衫歌扇舊因緣。　舞衫歌扇、舊因緣。
丹成逐我三山去。　丹成らば、われを逐うて三山に去り、
不作巫(五)陽雲雨仙。　巫陽、雲雨の仙とならず。

【字解】【一】楊枝　詳しくは楊柳枝、即ち樊素の綽名、前に和蘇景繁の詩中に注して置いた。【二】通德伴伶元　前に九日舟中、及び次韻王鞏六首の詩中に注して置いた。【三】阿奴絡秀　前に子由初到陳州の詩中に注して置いた。【四】天女維摩　維摩經に「天女、維摩の室に居り、舍利佛と禪理を發明す。維摩曰く、これ、天女すでに能く菩薩の神通に游戯するなり」とある。【五】巫陽雲雨仙　巫山の神女が朝雲暮雨となることを云ふ。

【題義】引の意味は——世間で謂ふには、白樂天は、駱馬を賣り、楊柳枝の綽名ある樊素を放たむとし、仍つて、不能忘情吟といふ詩を作つたが、そは、駱と楊柳と、その主の老病に際して、去るに忍びないといふ其心を嘉したからである。しかし、劉夢得の詩に、春盡絮飛留不住、隨風好去落誰家といひ、白樂天も亦た病與樂天相伴住、春隨樊子一時歸といつて居る上は、一時中止したものの、樊素は、遂に去つて仕舞つたのである。予の家には、數人の妾があつたが、四五年の間に、相繼いで皆暇を貰つて、往つて仕舞つた。ひとり、朝雲だけは、予に隨つて、南、惠州まで遣つて來た。そこで、樂天の詩集を讀むにつけて、この詩を作つた。朝雲、姓は王氏、錢唐の人、かつて幹兒といふ子があつたが、一年にもならぬ内に、夭死して仕舞つたといふのである。

【詩意】朝雲の予に隨へるは、かの樊素が白樂天に別れたとは異にして、恰も通德が伶玄に伴うて居る樣なものである。阿奴と絡秀と、同じく老いざるが如く、朝雲は、先ごろ子供を死なしたが、天女と維摩との如く、自然、予にかぶれて、同じく禪味を解する樣になつた。予は、今病に臥して、經卷藥爐、ここに新活計をなし、朝雲は本と其技を以て進んだもので、舞衫歌扇、なほ舊因緣を忍ばしめる。やがて、淸修の後、丹成るを得ば、予の後を逐うて三山に去るべく、朝雲暮雨を以て知らるる巫山の神女の如き、浮いた處の、少しも無いのは、まことに感心な女である。

寄虎兒

虎兒に寄す

獨倚桄(一)榔樹。閑挑蓽(二)撥根。　ひとり桄榔の樹に倚り、閑に挑ぐ蓽撥の根。
謀生看拙否。送老此蠻村。　生を謀る、看て拙なりや否や、老を送る、この蠻村。

【字解】[一] 桄榔 廣志に「樹の大さ、四五圍、長さ五六丈、突直にして傍に條幹なし。枝は、杖となすべし。その顚、葉を生ずる數十に過ぎず」とある。檳榔の屬。[二] 蓽撥 木草圖經に「波斯國に生ず、今嶺南に之あり、多く竹林內に生じ、正月苗を發して叢を作る、高さ三四尺」とあり、南方草木狀には「蒟醬は蓽撥なり」とある、こんにやくの類と見える。

【題義】王文誥の案に「虎兒は、乃ち黃師是壻、時に其婦に從つて筠州に謫せらる」とある。

【詩意】予は、獨り桄榔の樹に倚り、閒に蓽撥の根を掘り取つて居る。予が生を謀るは、拙なりや否や、何は兎もあれ、この蠻村に在つて、老を送らうと思つて居る。

十一月二十六日松風亭下梅花盛開

十一月二十六日、松風亭下の梅花、盛に開く

春風嶺上淮南村。　春風嶺上、淮南の村、

昔年梅花曾斷魂。　昔年、梅花、かつて斷魂。

豈知流落復相見。　豈に知らむや、流落、復た相見る、

蠻風蜑雨愁黃昏。　蠻風蜑雨、黃昏を愁ふ。

長條半落荔支浦。　長條、半ば落つ荔支の浦、

臥樹獨秀桄榔園。　臥樹、ひとり秀づ桄榔の園。

豈惟幽光留夜色。　豈に惟だ、幽光、夜色を留むるのみならむや、

直恐冷豔排冬溫。　直に恐る、冷豔の冬溫を排するを。

松風亭下荊棘裏。　松風亭下、荊棘の裏、

兩株玉蕊明朝暾。　兩株の玉蕊、朝暾よりも明かなり。

海南仙雲嬌墮砌。　海南の仙雲、嬌、砌に墮ち、

月下縞衣來叩門。　月下の縞衣、來つて門を叩く。

酒醒夢覺起繞樹。　酒醒め、夢覺めて、起つて樹を繞る、

妙意有在終無言。　妙意、在るあるも、終に言なし。

先生獨飮勿歎息。　先生、ひとり飮んで歎息する勿れ、

幸有落月窺清尊。　幸に落月の清尊を窺ふあり。

【字解】[一] 春風嶺 方興勝覽に「麻城縣治の東に在り、嶺上梅多し、故に名づく」とある。[二] 昔年 東坡の自註に「予、むかし黃州に赴く、春風嶺上、梅花を見て兩絕句あり。明年正月、岐亭に赴くの途上、詩を賦して云ふ、去年今日關山路、細雨梅花正斷魂」とある。[三] 蜑雨 王註に「惠州に蜑子あり、撩の類なり」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】春風嶺上、淮を渡つて光州に差しかかる其途上の村に於て、前年、梅花を見て、斷魂の思に堪へなかつたが、南方に流落して、蠻風蜑雨、黃昏の景色、愁を帶びて見ゆる間に、又ぞろ、梅花を見たのは、まことに豫想だにせざりしことである。その梅の木の長い枝は、半ば荔支の生ふる浦口

に落ち、倒れ臥したる幹は、桃榔の茂れる園中に於て、ひとり他に異つて見える。ひとり、幽光が夜色を留むるばかりでなく、冷艷は、冬の溫かさを排して、寒さを催しはせぬかと危ぶまれる。ここに、松風亭下、荊棘の深い處に、二本の梅は、恰も花を綻ばして、朝日よりも明かに、人目に映じ、たとへば、海南の仙雲、たをやかに庭砌に墮ちた如く、月下、白衣を著けた女が、來つて、門を扣く樣な風情がある。酒醒め夢覺めし時、起つて園中を繞ると、妙意は、顯然として有りながら、終に物を言はない。しかし、予は、獨り酒を飲んでも、その伴なきを嘆息するには及ばないので、落ちかかつた殘月が淸樽を窺つて、わが相手となつて居るのは、まことに勿怪の幸である。

【餘論】 乾隆御批に「秀色孤姿、涉筆、融風彩露の如し。集中、梅花の詩、淸空を以て妙に入るものあり、和二秦觀梅花一詩に、竹外一枝斜更好と云ふが如き、是れなり。事を使ふを以て神を傳ふるものあり、この詩の海南仙雲嬌墮レ砌、月下縞衣來扣レ門、是れなり。軾、かつて、秦觀の詩を稱して云ふあり、西湖處士骨應レ槁、只有二此詩一君壓倒、觀の詩、豈に能く之に過ぎむや、亦た自ら其得るところを道ふなからむや。この題、なほ和韻兩篇あり、第二篇、紛紛初疑月挂レ樹、耿耿獨與レ參橫レ昏の二句、最も洪邁に稱せらる。胡仔亦た云ふ、三首、皆陳言を擺落し、古今の人、未だ嘗て道ふを經ざるもの、第二首、尤も奇、と。然れども、細に前篇を玩ばば、究に是れ原唱に逮ばざるなり」とあり、紀昀は「朱晦菴、極めて東坡を惡む、ひとり、この詩、屢ば和して已まず、豈に晉人の謂ゆる、我見て猶ほ憐むか」といひ、海南仙雲の二句に就いては「天女の委澤、この筆に非ざれば、この花に稱はず」といつて居る。

再用二前韻一

羅浮山下梅（一）花村。玉雪爲レ骨冰爲レ魂。紛紛初疑月挂レ樹。耿耿獨與レ參（二）橫レ昏。先生索（三）居江海上。悄如二病鶴棲一荒園一。天香國豔肯相顧。知我酒熟詩淸溫。蓬萊宮中花（四）鳥使。綠（五）衣倒挂扶桑暾。抱レ叢窺二我方醉臥一。

再び前韻を用ふ

羅浮山下、梅花の村、
玉雪を骨となし、冰を魂となす。
紛紛として、初めは疑ふ月の樹に挂るを、
耿耿として、獨り參と昏に橫ふ。
先生、索居す江海の上、
悄として、病鶴の荒園に棲むが如し。
天香國豔、肯て相顧みむや、
知る、我が酒熟して詩淸溫なるを。
蓬萊宮中、花鳥の使、
綠衣、倒に挂く扶桑の暾。
叢を抱いて、我が方に醉臥するを窺ひ、

【字解】〔一〕梅花村　名勝志に「飛來峰は、羅浮山の東南に在り、梅花村あり。隋の趙師雄、ここを過ぎ、美人の淡妝素服せるを見、遂に與に共に飮んで醉ふ、醒むるに及びて、乃ち梅花樹下に在り」と見ゆ。〔二〕參橫昏　參といふ星と共に黃昏に橫ふといふ意。〔三〕索居　さびしく居る。〔四〕花鳥使　王註に「唐の明皇、天寶の末、使を遣し、民間の美女を探つて、これを宮中に納る、花鳥使と號す」とある。〔五〕綠衣　東坡の自註に「嶺南の珍禽、倒挂子あり、綠毛紅喙、鸚鵡の如くして小、東海より來る、塵埃中の物に非ざるなり」とある。〔六〕蟆木　鳥の名、木つつき、異物志に「蟆木は

故遣(六)啄木先敲門。　故らに、啄木をして、先づ門を敲かしむ。
(七)麻姑過君急掃灑。　麻姑、君を過ぐ、急に掃灑、
鳥能歌舞花能言。　鳥は能く歌舞し、花は能く言ふ。
酒醒人散山寂寂。　酒醒め、人散じて、山寂寂、
惟有落蕊黏空尊。　惟だ落蕊の空尊に黏するあり。

【題義】説明に及ばぬ。
【詩意】羅浮山下には、名だたる梅花村があつて、その地の梅は、玉雪を以て骨となし、寒氷を以て魂となして居る。紛紛として白く見える時は、月の樹梢に挂れるを疑ひ、耿耿として輝く時は、ひとり、參の星が黃昏に横はつて居る。予は、寂しく江海の上に居り、悄然として、病める鵩が荒園の中に住むが如く、いかに、梅花が、天然の妙香國中に冠たる絶豔であつた處で、顧みやうともせず、唯だ酒が熟すれば、詩思が自ら清く、又溫かくなるを知つて居るだけである。ここに、蓬萊宮中、花鳥の使とも稱すべき綠毛の倒挂子といふ鳥は、遠くから飛んで來て、扶桑の朝日に向つて、その名の通り、倒に木に挂り、花叢を抱きながら、予が折しも酔臥する様を見ると、わざと啄木鳥を遣して、門を敲かしめ、さて云ふには、麻姑の如き女仙が、君の處に遣つて來るから、急に掃除して待つて居よと

大さ鵲の如く、青黑色、人呼んで山啄木となす、木を穿つて蠹を食ふ」とある。【七】麻姑　仙女の名。

のことで、怪むべし、鳥は能く歌舞し、花は能く物を言ふ。やがて、酒醒め人散ずれば、すべて醉中の幻景に過ぎす、山は寂寂として、唯だ梅の花びらが空樽にへばり付いて居るのみであつた。
【餘論】紀昀は「語、亦た奇麗、二詩、極意鍛錬の作」といひ、結末、蓬萊宮中花鳥使の一段に就いては「忽ち幻語を作す、擺脫に善し」といつて居る。

新釀桂酒

新釀桂酒　新に桂酒を釀す

(一)擣香篩辣入瓶盆。　香を擣き、辣を篩うて、瓶盆に入る、
盎盎春溪帶雨渾。　盎盎春溪、雨を帶びて渾る。
收拾(二)小山藏(三)社甕。　小山を收拾して社甕に藏し、
招呼(四)明月到芳樽。　明月を招呼して芳樽に到る。
(五)酒材已遣門生致。　酒材、すでに門生をして致さしむ、
(六)菜把仍叨地主恩。　菜把、仍ほ叨りにす地主の恩。
爛煮葵羹斟桂醑。　葵羹を爛煮して、桂醑を斟む、
風流可惜在蠻村。　風流、惜むべし蠻村に在るを。

【字解】【一】擣香篩辣　肉桂を擣き潰して篩ふ、辣は辛味。【二】小山　王註に「淮南王の門下八公、又大山・小山の徒あり、當時招隱十二篇を作つて云ふ、桂樹叢生兮山之幽、又云ふ、攀桂枝兮聊淹留」とある。【三】社甕　社日の爲に準備した酒甕。【四】明月　天竺月中桂子の事を借用す。【五】酒材　酒を釀す材料。【六】菜把　野菜を束にしたもの。

【題義】桂酒は肉桂を加味した酒、東坡に桂酒頌があつて、その敍に「楚辭に曰く、奠二桂酒兮椒漿一と、これ、桂、以て酒と爲すべきなり。隱居するものあり、桂酒の方を以て吾に敎へて醸成す、しかも、玉色香味、超然として世間の物に非ざるなり」とある。

【詩意】香ばしく辛味ある肉桂を搗き潰し、一度よく篩つた後、酒瓶の中に入れると、さながら盎盎たる春の谷川が、雨を帶びて、濁つた樣である。かくて、淮南小山の謂はゆる桂樹を收拾して、社日の酒の甕中に藏し、又桂に緣ある明月を招き呼んで、芳樽を照らさしめた。その酒の材料は、すでに門生に命じて持ち來らしめ、そして、野菜の束は、地主の厚意で、いつもの如く贈られた。そこで、葵の葉の羹を煮上げて桂酒を酌んだが、好個の風流の蠻村に限られて居るのは、まことに、惜むべきことである。

【餘論】査初白は「四句の桂字生發あり、出句に勝る」といつて居る。出句は、韻を押さぬ句で、卽ち第三句を指す。

惠守詹君見和復次韻

惠守詹君和せらる、復た次韻す

已破誰能惜甑盆。　すでに破れて、誰か能く甑盆を惜まむ、

頽然醉裏得全渾。　頽然として醉裏に全渾を得たり。

欲求公瑾一囷米。　求めむと欲す、公瑾、一囷の米、

試滿莊生五石樽。　試に滿たす、莊生、五石の樽。

三杯卯困忘家事。　三杯、卯に困んで家事を忘れ、

萬戸春濃感國恩。　萬戸、春、濃かにして、國恩を感ず。

刺史不須要半道。　刺史、須ひず半道に要するを、

籃輿未暇走山村。　籃輿、未だ山村に走るに暇あらず。

【字解】【一】甑盆　酒を入れて置く瓦盆。【二】全渾　二字ともにすべて、全きもの。【三】公瑾一囷米　公瑾は周瑜の字、三國吳志魯肅傳に「周瑜、故らに肅を過候し、并せて資糧を求む。肅の家に兩囷米あり、各〻三千斛。肅、乃ち一囷を指して周瑜に與ふ」とある。【四】莊生五石樽　五石を入れる瓠、莊子に見え、前に蒜山松林の詩中に注して置いた。【五】卯困　卯は卯の時、朝の六時頃、朝酒に醉つてだるくなる。【六】萬戸春　酒の名、前に初到二惠州一の詩中に注して置いた。【七】刺史　惠守詹君を指して云ふ。

【題義】說明に及ばぬ。惠州志に「詹範、字は器之、建安の人、紹聖の間、惠州に知たり、時に兵荒の後、野に暴骨多し、範、取つて之を掩うて叢冢となす」とある。

【詩意】すでに破損して仕舞へば、惜んだとて、何にもならぬが、頽然として、醉裏に、その全きものを得た時の嬉しさは、何ともいへぬ。丁度、その樣に、わが家に一旦酒は無くなつたが、ここに又全きものを得て、十分に醉ふことが出來た。幸ひ、知人があるから、これに就いて一囷の米を求め、試に莊子の謂ふ五石の樽に滿つる位の酒を醸造したいと思つて居る。三杯の朝酒に醉ひつぶれて家事を忘れ、萬戸春の名にしおふ酒は、濃かにして、國恩の有り難きを感ずる。刺史たる君は、半道ま

で出かけて迎ふるを要せず、予は、どこにでも出かけるが、まだ著任したばかり、兎角多用で、籃輿に乘つて山村を走る暇が無いので、いづれ、その內、緩緩お尋ねしやうと思つて居る。

花落復次前韻　　花落つ、復た前韻に次す

玉妃謫墮煙雨村。　玉妃、謫墮す煙雨の村、
先生作詩與招魂。　先生、詩を作つて與に魂を招く。
人間草木非我對。　人間の草木、我が對に非ず、
奔月偶桂成幽昏。　月に奔り、桂に偶して幽昏を成す。
闇香入戶尋短夢。　闇香、戶に入つて短夢を尋ね、
青子綴枝留小園。　青子、枝を綴つて小園に留む。
披衣連夜喚客飲。　衣を披いて、連夜、客を喚んで飲む、
雪膚滿地聊相溫。　雪膚、地に滿ちて聊か相溫む。
松明照坐愁不睡。　松明、坐を照らして愁へて睡らず、
井華入腹清而暾。　井華、腹に入つて、清にして暾。

【字解】〔一〕玉妃　梅花を云ふ。〔二〕偶桂　桂花と相配す。〔三〕幽昏　昏は婚。〔四〕清而暾　暾は光明の貌。

先生來年六十化。　先生、來年六十化す、
道眼已入不二門。　道眼、すでに入る不二の門。
多情好事餘習氣。　多情好事、習氣を餘す、
惜花未忍都無言。　花を惜んで、未だ忍びず、すべて言なし。
留連一物吾過矣。　留連一物、吾、過てり、
笑領百罰空罍尊。　笑うて百罰を領して、罍尊を空しうす。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】玉妃に比すべき梅花は、煙雨そぼふる山村に墮謫せられて、追追散つて仕舞ふ哀れさに、予は、詩を作つて、爲にその魂を招かうとした。しかし、梅花は、人間の草木など、とても我が相手に足るものは無いからといふので、月中に奔つて、桂花と婚して、夫婦に成つて仕舞つた。梅花の暗香は、戶に吹き入つて、短き夢の名殘を尋ねしめ、青い小さな實は、枝を綴つて、小園に殘つて居る。衣を披いて、連夜、客を呼んで酒を酌み、散らばつた花びらは、雪膚の地に鋪くが如く、聊か相溫めて居る。松明をとぼして、座を照らさしめ、この景色を見ては、愁へて睡られず、やがて、醉を醒ます爲に、井水を飲むと、それが腹に入つて、清澈にして、ありありと照らされるやうな心持がする。

予は、明年六十になるので、道眼は、早く既に不二の法門に悟入して居るが、唯だ多情にして好事なるまま、依然、むかしの習氣を餘し、花を惜んで堪へられず、仍つて、言葉もなき次第。しかし、考へれば、區區として、一物にのみ留連するは、吾過てりといふべく、梅花が散れば、直に諦めて仕舞へば善いので、そこで、罰杯を百も受け取つて、樽が空になるまでも痛飮した。

【餘論】紀昀は「起し得て警拔」といひ、「亦た自ら擺脫して蹊徑に落ちず」といひ、最後に「清而瞰、妥ならず」といつて居る。

江郊

惠州歸善縣治之北數百步、抵江少西有盤石小潭、可以垂釣、作江郊詩云。

江郊

【訓讀】惠州歸善縣治の北數百步、江に抵つて、少しく西すれば、盤石小潭あり、以て釣を垂るべし、江郊の詩を作るといふ。

江郊蔥曨。(一)雲水蒨絢。(二)　江郊、蔥曨として、雲水、蒨絢たり。

碕岸斗入。(三)(四)洄潭輪轉。(五)(六)　碕岸、斗入して、洄潭輪轉。

先生悅之。布席閒燕。　先生、これを悅び、席を布いて閒燕す。

初日下照。潛鱗俯見。　初日、下に照らし、潛鱗、俯して見はる。

意釣忘魚。樂此竿綫。(七)　釣を意うて魚を忘れ、この竿綫を樂む。

優哉悠哉。玩物之變。(八)　優なるかな、悠なるかな、物の變を玩ぶ。

【字解】〔一〕蔥曨　樹木の茂つて暗きこと。〔二〕蒨絢　色彩の鮮明なる貌。〔三〕碕岸　曲岸。〔四〕斗入　北斗の如く折れまがる。〔五〕洄潭　洄は𢌞流。〔六〕輪轉　渦まく。〔七〕竿綫　綫は線、卽ち絲。〔八〕物之變　易の繫辭に「居則觀其象而玩其辭、動則觀其變而玩其占」とある。

【題義】引の意味は――惠州歸善縣の役所の北數百步、江岸に至り、少しく西すると、盤石小潭があつて、釣を垂れることが出來る、仍つて、江郊の詩を作つたといふのである。

【詩意】江邊の野には樹木茂り、雲と水とは相映じて色彩鮮明。岸は曲つて、北斗の如く折れ入り、深い淵は、渦を卷いて居る。予、これを喜び、席を設けて宴游すると、朝日は下に照し、潛める魚が俯して見られる。釣を心にかけて居るが、魚の事は全く忘れ、ただこの竿の絲さへ垂れて、世機を忘るれば、これが樂しいので、優なるかな、悠なるかな、これは卽ち物の變を玩ぶものである。

【餘論】乾隆御批に「琢句、全く水經注を摹す。碕岸の一句は、乃ち斗聳曲池、及び洄湍電轉、環濤轂轉等の句より化出し、潛鱗俯見、亦た新安江潭不掩鱗の一句より得來る」とある。

詹守攜酒見過用前韻作詩聊復和之

詹守、酒を攜へて過ぎらる。前韻を用ひ、詩を作つて、聊か復た之に和す

(一)箕踞狂歌老(二)瓦盆。　箕踞狂歌す老瓦盆、
燎毛燔肉似(三)羌渾。　毛を燎き、肉を燔いて、羌渾に似たり。
傳呼(四)草市來攜客。　草市に傳呼して、來つて客を攜へ、
灑掃(五)漁磯共置樽。　漁磯を灑掃して、共に樽を置く。
山下黃童爭看舞。　山下の黃童、爭つて舞を看、
江干(六)白骨已銜恩。　江干の白骨、已に恩を銜む。
孤雲落日西南望。　孤雲落日西南に望む、
長羨歸鴉自識村。　長く羨む、歸鴉の自ら村を識るを。

【字解】【一】箕踞　胡坐して足を箕の如くするを云ふ。【二】瓦盆　莊子に「莊子の妻死す、惠子、これを弔ふ。莊子、方に箕踞し、盆を鼓して歌ふ」とある。【三】羌渾　羌は西戎の一種、渾は吐谷渾。【四】草市　八百屋の市。【五】漁磯　磯は絶壁といふのが本義だが、ここでは釣り場所。【六】白骨　東坡の自註に「時に、詹、方に暴骨を葬ることを議す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。詹守は、卽ち前に在つた惠守詹君。

【詩意】胡坐して狂歌しつつ、古い瓦盆を敲き、毛を燎き、肉を炙るは、さながら、夷どもの樣である。八百屋市場を呼び廻つて、客を連れ出し、やがて、釣り場所を掃除して、酒樽を置いた。山下の黃童は、我等の醉つて舞ふを眺め、江邊の白骨は、詹君の御蔭で、やツと始末されたとのこと。孤雲落日の折から、西南の方を望めども、家路は何處とも分からず、歸る烏が、自然、村を識別して居るのを羨ましく思つた。

【餘論】紀昀は「江干の句、突出、理なきに似たり、細に玩べば、乃ち收骨瘴江の感を寓す、故に歸鴉を以て結となすのみ」とある。

蘇東坡詩集　卷三十九

古今體詩七十四首

寄鄧道士　鄧道士に寄す

羅浮山有野人、相傳葛稚川之隷也、鄧道士守安、山中有道者也、嘗於菴前見其足跡、長二尺許、紹聖二年正月二日、予偶讀韋蘇州寄全椒山中道士詩、云、今朝郡齋冷。忽念山中客。澗底束荊薪。歸來煮白石。遙持一樽酒。遠慰風雨夕。落葉滿空山。何處尋行跡。乃以酒一壺、依蘇州韻、作詩寄之。

【訓讀】羅浮山に野人あり、相傳ふ、葛稚川の隷なり、と。鄧道士守安は、山中の有道者なり。かつて、菴前に於て、その足跡を見る、長さ二尺ばかり、紹聖二年正月二日、予、偶ま韋蘇州の全椒山中道士に寄する詩を讀む、云ふ、今朝郡齋冷かに、忽ち山中の客を念ふ。澗底、荊薪を束ね、歸り來つて白石を煮る、遙に一樽の酒を持して、遠く慰む、風雨の夕、落葉空山に滿つ、何の處にか行跡を尋ねむ、と。乃ち酒一壺を以て、蘇州の韻に依り、詩を作つて之に寄す。

一杯羅浮春。遠餉采薇客。
遙知獨酌罷。醉臥松下石。
幽人不可見。清嘯聞月夕。
聊戲菴中人。空飛本無跡。

一杯の羅浮春、遠く采薇の客に餉る。
遙に知る獨酌罷み、醉うて松下の石に臥するを。
幽人見るべからず、清嘯、月夕に聞こゆ。
聊か菴中の人に戲る、空飛、本と跡なし。

【字解】〔一〕羅浮春　東坡の家で釀造した酒の名。〔二〕遠餉　餉は贈る。〔三〕空飛　空中を飛ぶ。

【題義】引の意味は——羅浮山に野人が居て、傳ふるところに據れば、むかしの葛稚川の家僕であるとのこと。ここに、道士の鄧守安といふものは、山中の有道者である、ある時、菴前に於て、例の野人の足跡を見た處が、長さ二尺ばかりあつたとの話。紹聖二年正月二日、予は、偶然全椒山中の道士に寄せた韋蘇州の詩を讀むと、今朝郡齋冷云云とあつた。そこで、酒一壺を贈ることにし、蘇州の原韻に次して詩を作り、併せて、これに寄せたといふのである。

【詩意】些少ながら家釀の羅浮春を山中に住んで薇を采つて居る野人に贈呈するが、察する處、獨酌が濟むと、醉うて松下の石に臥して居るであらう。幽人は、もとより見るべからず、ただ涼しげに嘯く聲が、月の夜に聞こえるだけである。野人は、聊か菴中の人に戲れむとし、天上に飛び廻つて、跡をだに殘して置かない。

【餘論】紀昀は一絕唱の詩、必ずしも、昔人に和せざること、すでに嘗て之を論ず。この詩、もし蘇州の詩に和すと言はざるも、もとより未だ嘗て可ならずんばあらず」といつて居る。

上元夜

前年侍玉輦。(一)端門萬枝燈。(二)
璧月挂罘罳。(三)珠星綴觚稜。(四)(五)
去年中山府。(六)老病亦宵興。(七)
牙旂穿夜市。(八)鐵馬響春冰。
今年江海上。(九)雲房寄山僧。(一〇)
亦復舉膏火。松間見層層。
散策桄榔林。林疏月鬅鬙。(一一)
使君置酒罷。簫鼓轉松陵。(一二)
狂生來索酒。(一三)一舉輒數升。
浩歌出門去。我亦歸瞢騰。(一四)

上元の夜

前年、玉輦に侍し、端門、萬枝の燈。
璧月、罘罳に挂かり、珠星、觚稜を綴る。
去年、中山府、老病、亦た宵に興く。
牙旂、夜市を穿ち、鐵馬、春冰に響く。
今年、江海の上、雲房、山僧に寄す。
亦た復た膏火を擧げ、松間、層層を見る。
散策す桄榔の林、林疏にして月鬅鬙。
使君、置酒して罷み、簫鼓、松陵に轉ず。
狂生、來つて酒を索め、一擧輒ち數升。
浩歌、門を出でて去る、われ亦た瞢騰に歸す。

【字解】〔一〕前年　癸酉の年、即ち元祐八年。〔二〕端門　宣德門、上元の夕には、天子が此門に御して、羣臣を宴することが例に成つて居る。〔三〕璧月　大きな珠の如き月。〔四〕罘罳　宮垣を云ふ。〔五〕觚稜　宮殿の屋角を云ふ。〔六〕去年　甲戌の年、

卽ち紹聖元年。【七】中山府　卽ち定州。【八】牙旆　軍前の大旗。【九】今年　乙亥の年、卽ち紹聖二年。【一〇】雲房　山中の僧房。【一一】月鬅鬙　月に映じて桄榔が鬅鬙と下を覆ふ樣に見える。【一二】松陵　地名であらうが、諸家の註を缺いて居る。【一三】狂生　東坡の自註に買道人とあるが、その人不詳。【一四】瞢騰　醉つてぼんやりする貌。

【題義】上元は一月十五日、その夜、燈を點することになつて居る。この詩は、自註に「惠州の作」とある通り、南方遷謫中、最近二三年の事を追想して作つたのである。

【詩意】一昨年の今夕は、都に居て車駕に侍し、端門の上に宴を賜はつて、萬枝の燈火を見、加ふるに、璧の樣な月は、宮垣に挂かり、珠なす星は、殿角に連綴して見えた。去年の今夕は、定州に居て、老病の身も、その宵は、やをら起き上り、軍前の大旗を押し立てて、夜の市中を練り行き、鐵馬の蹄の音は、春の河水に響く位。今年の今夕は、江海に流謫せられ、山僧の雲房に寄寓し、それでも、心ばかり、篝火を燃やさしめ、松の木の間に層層として、照り耀くを見た。やがて、桄榔の林を散歩すると、林は疏にして、月に映ずる其木の影は、鬅鬙として、髮を振り亂した樣である。太守は、酒を置いて、御馳走をして呉れたが、席を撤すれば、簫鼓の一隊は、松陵の方に練つて往つて、その跡は、極めて寂しい。やがて、買道人といふ狂生が來て、酒をねだり、一擧して數升を傾け、浩歌して門から出て往つたが、取り殘された予も、よよと參つて、ふらふらする樣な心持に成つた。

【餘論】起首は、最近三年間の元夕を列擧したので、紀昀は「兩兩相形し、一語を著けざるも、寄慨自ら深し」といひ、散策桄榔林、以下に就いては「委順の意、言外に之を見る」といつて居る。

正月二十四日、與兒子過、賴仙芝、王原秀才、僧曇穎、行全、道士何宗一、同游羅浮道院及棲禪精舍、過作詩、和其韻、寄邁・迨、一首

正月二十四日、兒子過・賴仙芝・王原秀才・僧曇穎・行全・道士何宗一と同じく羅浮道院及び棲禪精舍に游ぶ。過、詩を作る。其韻に和して邁・迨に寄す一首

斷橋尋（一）勝踐。脫屨欣（二）小揭。　斷橋、勝踐を尋ね、屨を脫して小揭を欣ぶ。
瘴花已繁紅。官柳猶疏細。　瘴花、すでに繁紅、官柳、なほ疏細。
斜川二三子。悼嘆（三）吾年逝。　斜川の二三子、悼嘆す吾が年の逝くを。
淒涼羅浮館。風壁頹雨砌。　淒涼たり羅浮館、風壁、雨砌に頹る。
（四）黃冠常苦飢。迎客羞破袂。　黃冠、常に飢に苦み、客を迎へて、破袂を羞づ。
仙山在何許。歸鶴時墮（五）毳。　仙山、何許にか在る、歸鶴、時に毳を墮す。
崎嶇拾（六）松黃。欲救齒髮弊。　崎嶇として松黃を拾ひ、齒髮の弊を救はむと欲す。
坐令禪客笑。一夢等千歲。　坐に禪客をして笑はしむ、一夢、千歲に等し。
棲禪晚置酒。蠻果粲（七）蕉荔。　棲禪、晩に置酒、蠻果、蕉荔粲たり。
齋廚釜無羹。野餉籃有蕙。　齋廚、釜に羹なく、野餉、籃に蕙あり。

嬉游趁時節。俯仰了此世。　嬉游、時節を趁ひ、俯仰、この世を了す。

猶當洗業障。更作臨水(八)禊。　猶は當に業障を洗ひ、更に臨水の禊を作すべし。

寄書陽(九)羨兒。竝語長(一〇)頭弟。　書を寄す、陽羨の兒、竝に長頭の弟に語れ。

門戸各努力。先期畢租稅。　門戸、各努力、期に先つて租稅を畢れ。

【字解】【一】嬉游　勝游に同じ。【二】小揭　揭は衣を搴して水を渉ること。【三】吾年逝　陶淵明の游斜川詩の序に「日月の逝に往くを悲み、わが年の留まらざるを悼む」とある。【四】黃冠　道士を云ふ。【五】褸毳　毳は細毛。【六】松黃　本草圖經に「松花上の黃粉は、松黃と名づく。山人、時に及んで拂ひ取り、湯を作つて之に點ず」とある。【七】蕉荔　芭蕉の實、卽ちバナナと荔支。【八】臨水禊　禊はみそぎ。三月上巳、河邊に祓除するを云ふ。【九】陽羨兒　東坡の長子邁をいふ。【一〇】長頭弟　次男の迨、この人の長頭なることは、前に詩中に見えて居た。

【題意】賴仙芝は虔州の布衣、この頃、東坡に從つて遊んだ。王原、字は子直、亦た虔州の人、鶴田山人と號して居た。曇穎は羅浮寶積寺の僧。行全は坊主らしいが不詳、何宗一は廣州何德順の弟、棲禪は寺の名、惠州鶴湖の上に在る。題の意味は、正月二十四日、倅過、賴仙芝、王原秀才、曇穎、行全の二僧、道士何宗一等と共に、羅浮道院と棲禪寺とに游んだ。すると、過が詩を作つたら、取り敢へず、これに次韻して、常州に居る邁・迨の二人に寄せたといふのである。

【詩意】斷橋の彼方に勝游を試みやうとし、仕方が無いから、履を脫いだが、案外淺くて、あまり衣を捲き上げずに濟んだのは、まことに喜ばしい。蠻地の花は、紅、すでに繁けれども、並木の柳は、まだ芽が出揃はぬ。同行の人人は、さながら陶淵明と一處に斜川に游んだ連中の樣であるが、予が老いて年の留まらぬは悼はしく嘆すべきことである。羅浮の道院は、頗る荒敗して、凄涼たる景色、風に揉まれた壁は、石に打たれた庭階の方に頹れかかつて居る。されば、ここに居る黃冠の道士輩も、衣食に差し支へ、平生饑に苦みつつ、客を迎へては、その破れた袂を羞かしがつて居る。仙山は、何處とも知らぬが、そこより歸る鶴は、時たま毛を此に落して居る。崎嶇の路をたどつて、松の花を拾ひあつめ、これを湯に落して、齒が拔け髮の白くなつたのを救はうと思つて居るが、千載を一夢とする禪客には、笑はれるに相違ない。それから、棲禪寺に往つて、日暮、酒を置いて、皆皆一飲したが、肴としては、南方特有のバナナと荔支とがあるだけで、その色は、粲然として居る。この寺も、矢張貧乏で、廚を覗くと、釜には羹なく、野菜を摘んで來た籃には、山蘭が交つて居て、風流ではあるが、もとより食はれない。予輩は、時節に應じて嬉游をなし、俯仰の間に此世を終る積りで、この上は、業障を洗ふ爲に、やがて水に臨んで、修禊を行はうと思つて居る。そこで、手紙を陽羨に殘つて居る長兒に寄せ、幷せて頭の長い弟にも傳語せしめ、予は此地に在つて、至極暢氣で居るから、心配するに及ばず、汝等は、唯だ力を專にして、家門を支へ、租稅なども滯納せぬ樣にせよと申し遣した。

【餘論】乾隆御批に「荒寂の處より情を生じ、韻、崖谷を動かす」とあり、紀昀は、初めの敍景を評して「平敍、しかも庸沓ならず」といひ、結末に就いて「後四句、乍ち讀めば、貫かざるに似たり。細に語意を玩べば、乃ち言ふ、此に在つて甚だ適す、必ずしも、更に以て念と爲さず、惟だ應に力を

專にして、門戶を支へ、租稅を辨ずべきのみ」とあつて、至極尤もな解釋であるから、今これに據ることにした。

正月二十六日、偶與數客野步、嘉祐僧舍東南野人家、雜花盛開、扣門求觀、主人林氏媼出應、白髮青裙、少寡、獨居三十年矣、感嘆之餘、作詩記之

正月二十六日、偶ま數客と野步す。嘉祐僧舍東南の野人の家に、雜花盛に開く。門を扣いて觀むことを求むれば、主人林氏媼、出でて應ず、白髮青裙なり。少くして寡、獨居すること三十年と。感嘆の餘、詩を作つて之を記す

縹(一)蔕緗(二)枝出絳(三)房。
縹蔕緗枝、絳房を出す、

綠陰青(四)子送春忙。
綠陰青子、春を送つて忙はし。

涓涓泣露紫含(五)笑。
涓涓、露に泣く紫含笑、

焰焰燒空紅佛(六)桑。
焰焰、空を燒く紅佛桑。

落日孤煙知客恨。
落日孤煙、客恨を知り、

短籬破屋爲誰香。
短籬破屋、誰が爲に香ばし。

主人白髮青裙袂。
主人白髮青裙袂、

(七)子美詩中黃四娘。
子美詩中の黃四娘。

【字解】〔一〕縹蔕　青白色の萼。〔二〕緗枝　淺黃色の枝。〔三〕絳房　赤い花。〔四〕青子　青い實。〔五〕含笑　花の名、前に廣州蒲澗の詩中に註して置いた。〔六〕佛桑　花の名、晉安の海物異名記に「佛桑は、その花丹、重く柔澤を敷き、葉は桑の如し。花五六出でて、大さ蜀葵の如し。蘂一條あり、長きこと花の如し。葉上金屑を綴り、日光の爍するところ、凝つて焰となる、朝生暮落」とあり、余皇日の疏に「佛桑は、嶺南に出づ。枝葉は江南の稚樹に類し、花は中州の芍藥に類して、輕柔、これに過ぐ。深紅・深紫・淺紅の數種あり、剪つて、土に揷めば、卽ち活く」とある。〔七〕子美詩中黃四娘　杜甫の詩に黃四娘家花滿蹊とある。なほ前に種德亭及び次韻楊公濟梅花の諸詩の中に註して置いた。

【題義】正月二十六日、ふと數人と共に郭外を散步すると、嘉祐寺の東南なる野人の家に、樣樣の花が盛に咲いて居たから、門を叩いて、中に這入つて見物したいと申し込んだ。主人は、林姓の老女で、白髮青裙、わかい時に、後家となり、獨居すること三十年に及ぶとのことで、感嘆の餘、詩を作つて之を記した。

【詩意】園中には、雜花咲き亂れ、青白色の萼と淺黃色の枝との間から、眞紅の花が出て居るが、やがて、忙がしげに春を送つて、綠陰青子と成るであらう。涓涓たる露に泣いて居るのは、紫の含笑花であるし、焰焰として空を燒かむとするは、紅の佛桑花である。落日孤煙は、客恨を知るが如く、景色、いつしかたそがれ、短籬破屋、折角の春も、賞する人が無いのは、物足らぬ心地がする。ここの主人は、白髮青裙の一老女で、さながら、杜甫の詩中に見えた黃四娘の樣である。

【餘論】紀昀は「三四、太だ質、太だ易、以爲へらく、老境には之を失す」とある。

龍尾石研寄猶子遠　　龍尾石研、猶子遠に寄す

皎皎穿雲月。青青出水荷。　皎皎たり雲を穿つの月、青青たり水を出づるの荷。
文章工點黵。(一)忠義老研磨。　文章、工に點黵、忠義、老いて研磨。
偉節(二)何須怒。寬饒(三)要少和。　偉節、何ぞ怒るを須ひむ、寬饒、少和を要す。
吾衰(四)安用此。寄與小東坡。(五)　吾が衰ふる、安んぞ此を用ひむ、寄與す小東坡。

【字解】【一】點黵　晉書衞恒の四體書勢に「或は黜黈點黵、狀、連珠に似て、絕えて離れず」とある。草書で文字が相連ること。【二】偉節　後漢賈彪の字、前に「上韓持國」の詩中に注して置いた。【三】寬饒　漢書に「蓋寬饒、自ら行能淸高にして凡庸に越えらるを以て、愈よ失意不快、數ば上疏して諫爭す。太子庶子王生、寬饒の節を高しとし、その此の如きを非とし、書を寬饒に與へしが納れず、竟に寄せらる」とある。【四】吾衰　論語に「甚しいかな、吾が衰へたる」とある。【五】小東坡　東坡の自註に「遠の人と爲り、予に類す」とある。

【題義】猶子遠は、前卷に見えた虎兒、東坡の姪である。その人に龍尾石の硯を贈るにつけて、この詩を添へて遣したのである。

【詩意】この硯の石質は、皎皎として雲を破つて出たる月の如く、青青として水上に浮ぶ蓮の葉の樣である。汝の文章は、點黵に工に、聯屬して絕えないから、墨の容易に乾かぬ此硯が、まことに相應しい。忠義の心は、矢張、この硯と同じく、老に至るまで、研磨するが善い。むかし、賈偉節は、最も怒ると稱せられたが、何も怒る必要はなく、蓋寬饒も、今少し和氣が有つたらば善かつたので、この二人の事は、汝の手本として見るべきものである。予は、年老いて、折角の此硯も全く不用故、小東坡とも云ひたげなる汝に之を贈るから、末長く、愛用して貰ひたい。

【餘論】紀昀は「二比を疊用して、その複を嫌はず、首二は形を比し、五六は德を比するなり」といひ、竟に研字を出でず、古人の詠物、多く此の如し」といつて居る。

贈王子直秀才　　王子直秀才に贈る

萬里雲山一破裘。　萬里の雲山、一破裘、
杖端(一)閒挂百錢游。　杖端、閒に百錢を挂けて游ぶ。
五車書(二)已留兒讀。　五車の書は、已に兒を留めて讀ましめ、
二頃田(三)應爲鶴謀。(四)　二頃の田は、應に鶴の爲に謀るべし。
水底笙歌蛙兩部。(五)　水底の笙歌、蛙の兩部、
山中奴婢橘千頭。　山中の奴婢、橘千頭。

【字解】【一】杖端　前に「立春日過安國」の詩中に注して置いた。【二】五車書　前に「送喬施州」の詩中に注して置いた。【三】二頃田　史記蘇秦列傳「われをして洛陽負郭二頃の田を有せしむれば」とある。【四】爲鶴謀　東坡の自註に「子直は鶴田山に住す」とある。【五】蛙兩部　前に「次韻述古夜飮」の詩中に注

(六)幅巾我欲相隨去。　幅巾、われ、相隨つて去らむと欲す、

海上何人識故侯。(七)　海上、何人か故侯を識る。

【題意】査註に「王子直は、卽ち王原なり。同時に又王向あり、亦た字は子直、侯官の人。覽者、これを辨せよ」とある。

【詩意】身は、破裘を著けた儘、萬里の雲山を越えて、この惠州に來り、杖頭に百錢を挂けて、閒暇な時には、游行を旨として居る。五車の藏書は、陽羨の地に置きッ放しで、兒輩をして讀ましめ、鶴田山といふ名の通り、二頃の田を君の居る其地に開いて、鶴の飼料でも作り出さうと思つて居る。水底の笙歌たる蛙の聲は、古人の云へる通り、兩部の鼓吹に當つべく、山中の奴婢に代用すべきは、柑橘の實が千個あるだけである。やがて、予は、幅の廣い隱者の頭巾を被り、君に隨つて山中に往かうと思ふので、海邊の地たる、この惠州に於ては、むかし、相當の官職に居た予を見知つて吳れるものもない。

【餘論】乾隆御批に「用詞、多く數目の字を以てす、大小相形して濟艶兩絕」とあり、紀昀は「宛然として劍南の先聲。王粲の七哀、すでに少陵の派を開き、鮑照の行路難、すでに太白の前を導く、文章、世と變更して、機括、往往先づ露はる。かくの如きの類、指、屈するに勝へず、作者、亦たその然る所以を知るなきなり」といつて居る。なほ後聯の蛙兩部に就いては、後人の議論もあるが、引抄が長くなるから、しばらく見合せることにする。

して置いた。【六】幅巾　前に送錢道原の詩中に注して置いた。【七】故侯　召平の故事、前に蔡州道上遇雪の詩中に注して置いた。

惠州近城數小山類蜀道春與進士許毅野步會意處飮之且醉作詩以記適參寥專使欲歸使持此以示西湖之上諸友庶使知予未嘗一日忘湖山也

惠州近城の數小山、蜀道に類す。春、進士許毅と野步して、會意の處、これに飮ましめて且つ醉ひ、詩を作つて以て記す。適〻參寥の專使、歸らむと欲す。此を持して、以て西湖の上の諸友に示さしむ。庶はくは、予の未だ嘗て一日も湖山を忘れざるを知らしめむことを。

夕陽飛絮亂平蕪。　夕陽飛絮、平蕪に亂る、

萬里春前一酒壺。　萬里春前の一酒壺。

(一)鐵化雙魚沈遠素。(二)　鐵は、雙魚に化せしめ、遠素を沈め、

(三)劍分二嶺隔中區。　劍は、二嶺を分つて、中區を隔つ。

【字解】【一】鐵化雙魚　南史林邑國傳に「范文本は、日南西卷縣の夷帥、范稚の家奴、かつて牛を山澗に牧し、鱧魚二を得たり、化して鐵となる」とある。【二】遠素　素は尺書、卽ち手紙。【三】劍分二嶺

花曾識面香仍好。　花、かつて面を識る、香、仍ほ好く、

鳥不知名聲自呼。(三)　鳥は名を知らず、聲、自ら呼ぶ。

夢想平生消未盡。　夢想平生、消えて未だ盡きず、

滿林煙月到西湖。　滿林の煙月、西湖に到る。

劍嶺を云ふ、前に同遊ニ百歩洪一の詩中に注して置いた。【三】聲自呼　山海經の北山經に「蔓聯の山、鳥あり、名を交鳥といひ、その名、自ら呼ぶ」とある。

【題義】惠州城に近く、小山が五六あるが、その有樣は、蜀道に類似して居る。春、進士の許毅と散歩し、氣に入つた處で、酒を飲んで醉ひ、仍つて、詩を作つて之を記した。折しも、參寥の特に遣した使が歸らうとして居るから、この詩を持たせて、西湖の近傍に住む諸友に示し、予が一日も西湖の湖山を忘れぬといふことを知らせる積りである。

【詩意】柳の花は、夕日に飛んで、平蕪の上に亂れ、萬里に亙る春景色を眺めて、一壺の酒を傾けた。雙魚は、鐵に化したものと見えて、遠方の手紙は、久しく屆かず、劍嶺は、二山が重ね合つて、はるかに中州を隔てて居る。花は、かつて其面を見知つて居るので、香氣益す宜しく、鳥は名を知らぬが、自ら名乘つて呼んで居る。平生夢裏の想は、未だ消え盡さず、朧の月の林に滿つる頃、矢張、西湖にまでも飛んで行つた。

【餘論】乾隆御批に「渥采流烹、物に觸れて圓覺、夢想の切、詞端に洋溢す」といひ、紀昀は「これ又太だ做作一といつて、無理に細工して詩にしたことを嘲つて居るのである。

眞一酒　　眞一酒

米麥水三一而已、此東坡先生眞一酒也。

【訓讀】米麥水、三一のみ、これ東坡先生の眞一酒なり。

撥雪披雲得乳泓。(一)　雪を撥し、雲を披いて、乳泓を得たり、

蜜蜂又欲醉先生。(二)　蜜蜂、又先生を醉はしめむと欲す。

稻垂麥仰陰陽足。(三)　稻は垂れ、麥は仰いで、陰陽足れり、

器潔泉新表裏清。　器は潔く、泉新にして、表裏清し。

曉日著顏紅有暈。　曉日、顏に著いて、紅、暈あり、

春風入髓散無聲。　春風、髓に入つて、散じて聲なし。

人間眞一東坡老、　人間、眞一東坡の老、

與作青州從事名。(四)　與に作す青州從事の名。

【字解】【一】乳泓　麴をまぜて酒の醱酵しかかつたのを云つたのであらう。【二】蜜蜂　東坡の自注に「眞一は、色味、頗る予が黄州に在る日、醸するところの蜜酒に類するなり」とある。【三】陰陽　唐の竇苹の酒譜に「酒を爲るには、陰に據つて乃ち動く。麥は陰なり、黍は陽なり。先づ麴を漬して、後に黍を投す、これ、陽、陰を得、沸いて乃ち成る」とある。ここでは、黍に代へるに米を以てすれば善いのである。

【四】青州從事　酒の別名、前に次ニ韻王鞏一の詩中に注して置いた。

【題義】米麥水の三者を同じ分量にして作つたのが、卽ち東坡得意の眞一酒で、この詩は、卽ち之を

詠じたのである。

【詩意】 その醱酵しかかつた時は、雪を撥し、雲を披くが如く、その味は、蜜酒に類して、又ぞろ、予を醉はさうとしてゐる。穗を出す時、稻は垂れ、麥は仰ぎ、自然と陰陽を分つて居るし、器は清潔で、用水は新らしく、表裏、ともに清く、少しも、汚いことはない。これを飮むと、朝日が當つた樣に、ぼうツと顏が赤くなるし、春風が骨の髓に入る心地すれども、散じて聲もしない。この眞一は、此世に於ける東坡獨得の者であつて、これを愛づる餘に、酒の名を付けたのである。

【餘論】 紀昀は「六句好し」といつて居る。

游博羅香積寺　博羅の香積寺に游ぶ

寺去縣七里、三山犬牙、夾道皆美田、麥禾甚茂、寺下溪水、可作碓磨、若築塘百步、閘而落之、可轉兩輪舉四杵也、以屬縣令林抃、使督成之。

【訓讀】 寺は縣を去ること七里、三山犬牙、道を夾んで皆美田、麥禾甚だ茂る。寺下の溪水、碓磨と作すべし。もし塘を築くこと百步、閘して之を落さば、兩輪を轉じて、四杵を擧ぐべきなり。以て縣令林抃に屬し、督して之を成さしむ。

二年流落鼀魚鄉。　二年流落、鼀魚の鄉、
朝來喜見麥吐芒。　朝來、喜び見る麥の芒を吐くを。
東風搖波舞淨綠。　東風、波を搖かして淨綠を舞はしめ、
初日泫露酣嬌黃。　初日、露に泫して嬌黃酣なり。
汪汪春泥已沒膝。　汪汪春泥、すでに膝を沒し、
剡剡秋穀初分秧。　剡剡秋穀、初めて秧を分つ。
誰言萬里出無友。　誰か言ふ、萬里、出でて友なしと、
見此二美喜欲狂。　この二美を見て、喜んで狂せむと欲す。
三山屏擁僧舍小。　三山、屏擁して僧舍小、
一谿雷轉松陰涼。　一谿、雷轉して松陰涼し。
要令水力供臼磨。　水力をして臼磨に供せしむるを要す、
與相地脈增隄防。　與に地脈を相して隄防を增す。
霏霏落雪看收麩。　霏霏、雪を落して收麩を看、
隱隱疊鼓聞舂糠。　隱隱、鼓を疊んで舂糠を聞く。
散流一啜雲子白。　散流一啜、雲子白く、

【字解】 〔一〕 鼀魚鄉　鼀は蛙、蛙や魚の居る水鄉。〔二〕 麥吐芒　麥が葉の尖端を抽き出す。〔三〕 嬌黃　麥の葉の嫩にして黃味を帶びたるを云ふ。〔四〕 剡剡　前に秧馬歌の詩中に注して置いた。〔五〕 收麩　麩は麥粉。〔六〕 雲子　純白なる米粒。〔七〕 炊裂　よく餅を蒸して表面が龜裂する。晉書に「何曾性奢豪、燕見する每に、大官の設くるところを食はず。帝、輙ち命じて、その食せる蒸餅を取つて上らしむ、上、拆して十字を作さざれば食はざるなり」とある。〔八〕 瓊肌　蒸餅の表面の奇麗なるを云ふ。〔九〕 牢九　東坡の自註に「東晳の餅賦に、饅頭薄持起搜、牢九」とあつて、牢九は、古來、意味が分からぬといつて居る。今の通說では、九は丸の誤、牢丸は卽ち蒸した米の團子といふことに成つて居る。〔一〇〕 膏肓　前に水調子由

病と酒の詩中に註して置いた。

(七)炊裂十字(八)瓊肌香。　炊裂十字、瓊肌香ばし。
豈惟牢(九)九薦古味。　豈に惟だ牢九古味を薦むるのみならむや
要使眞一流天漿。　眞一をして天漿を流れしむるを要す。
詩成捧腹便絕倒。　詩成つて、捧腹、便ち絕倒。
書生說食眞膏肓(一〇)。　書生、食を說く、眞に膏肓。

【題義】博羅は縣名、九域志に「廣南東路惠州、領縣四、博羅縣は州北四十五里に在り」と見え、香積寺は、その縣西の山下に在る、引の意味は——寺は、博羅縣を去ること、わづかに七里、三山は犬の牙の如く叅錯して居る。その途中、道の兩側は皆美田で、麥や稻が、非常に茂つて居る。寺下の溪水は、これを利用して、臼を舂かせることが出來るので、もし廣さ百步の溜池を作り、水門を設けて、水を落せば、兩輪を運轉し、四杵を擧げることが出來る。そこで、縣令の林抃といふ人に依賴し、工事を監督して、これを成就せしめることにしたといふのである。

【詩意】二年の久しき、蛙や魚の羣る水鄉に流落して居たが、今朝、早く博羅縣外に出かけ、麥の葉を抽き出して居る田園の景色を見て、非常に嬉しく思つた。今しも、東風は、波を搖かして、麥の葉の綠なるを舞はしめ、朝日は、露にぬれて、黃味を帶びた若い葉が奇麗に見える。汪汪たる田中の春泥は、膝を沒するばかり、剡剡たる稻は、やがて田植をする程に成つた。萬里の外に在つて、出でても友がないと誰が言ふか、麥や稻が此の如く生氣を得たるを見ると、喜んで狂せむばかりである。三山は、屛風の如く周圍を擁し、寺は極めて小さく、一谿は、雷の樣な音を發して、並木の松かげは極めて涼しい。折角の溪水であるから、これを利用して、臼を舂く樣にするが善いので、その爲に、地脈を視察して、隄防を增築し、ここに瀦水池を造らせることにした。この水力で舂いたならば、麥粉は、霏霏として雪を落すが如く、隱隱として、續いて鼓を打つ樣な聲がして、糠が舂き分けられる。ここで舂いた米を粥に煮ると、雲子の上米を易易と啜ることが出來るし、蒸して餅とすれば、上は十字に裂けて、肌が匂やかである、それから、米の團子の古味を知るばかりでなく、わが家獨得の釀法を以て、天漿と見まがふ眞一酒を造ることも出來る。詩が出來ると、自分でも、をかしさの餘り、腹をかかへ、大笑して倒れむとする位。書生が食物の話をするのは、その病、膏肓に入つて、到底、救ふことの出來ぬものである。

【餘論】乾隆御批に「もとより是れ、硬語排奡、須らく、その字字鎔鑄して成るを見るべく、萬牛を回すの力あり、丸珠を轉するの功あり」といひ、紀昀は「水磨は是れ利民の正事、縣令督成、頗る鄭重たり。游戲を以て之を了するを得ず。後半、語、工と雖も、意は未だ協はず」といつて居る。

二月十九日、攜白酒鱸魚過詹使君食槐葉冷淘

二月十九日、白酒・鱸魚を攜へて、詹使君を過ぎ、槐葉の冷淘を食ふ

枇杷已熟粲金珠。　枇杷、すでに熟して金珠粲たり、
桑落初嘗灩玉蛆。　桑落、初めて嘗めて玉蛆灩たり。
暫借垂蓮十分盞。　暫く垂蓮十分の盞を借りて、
一澆空腹五車書。　一たび澆ぐ空腹五車の書。
青浮卵椀槐芽餅。　青は卵椀に浮ぶ槐芽餅、
紅點冰盤藿葉魚。　紅は冰盤に點す藿葉魚。
醉飽高眠眞事業。　醉飽高眠、眞の事業、
此生有味在三餘。　この生味あり、三餘に在り。

【字解】【一】桑落　古酒、もしくは美酒の義、水經註に「民、姓は劉、名は墮といふものあり、宿擅工釀、河流を采挹して、芳酎を醸成す、懸食枯枝の年に同じく、桑落の辰に排す、故に酒其名を得たり」とあり、又霏雪錄に「河東の桑落坊に井あり、桑落の時に至るごとに、水を取つて酒を醸す、甚だ美」とある。【二】玉蛆　即ち浮蛆、酒の熟する時、中に湧く蛆。【三】垂蓮　査註に、白居易の一鉤發畫檠蓮子の句を引いてあるが、どうも分からぬ。或は、垂れかかつて居る蓮の大葉といふ様なことでは無からうか。【四】五車書　前に送喬施州の詩中に注して置いた。【五】槐芽餅　即ち麺中に見えたる槐葉冷淘。槐葉を煮て、その汁を取り、麥粉にまぜて餅にしたので、その色は鮮碧である。【六】藿葉魚　藿は豆の葉、その様に細く切つた鱠。【七】三餘　三國志の註に「或は三餘の意を問ふ、董遇言ふ、冬は歳の餘、夜は日の餘、陰雨は晴の餘なり」とある。

【題義】二月十九日、白酒と鱸魚を攜へて、太守の詹君を訪ふと、槐葉の冷淘を食はしたから、この詩を作つたといふので、槐葉の冷淘は、字解の中、槐芽餅の項に注して置いた。

【詩意】枇杷の實は、既に熟して、黄色の珠の如く、春の半ば、時候の殊に好い時分、桑落の古酒を初めて嘗めると、中には玉蛆が輝いて見えた。しばらく、蓮の葉と見まがふ様な大盃を借りて、空腹に詰め込んだ五車の書に、酒を澆ぎかけやうとした。卵色の椀の上に青く浮んで居るのは、槐芽の餅であるし、氷盤の上に赤く點じたるは、藿葉の如く刻んだ魚の膾である。予は、刻下、何も爲すことがなく、醉飽高眠だけが事業であつて、わが生は、三餘に於て、初めて味あるを覺える。

【餘論】紀昀は「末句、腐」といつて居る。

贈陳守道

陳守道に贈る

一氣混淪生復生。　一氣混淪、生復た生、
有形有心卽有情。　形あり、心あり、卽ち情あり。
共見利欲飮食事。　共に見る、利欲飮食の事、
各有爪牙頭角爭。　各々爪牙頭角の爭ふあり。
爭時怒發霹靂火。　爭ふ時、怒つて發す霹靂の火、

【字解】【一】混淪　列子に「萬物混淪して、未だ相離れざるなり」とあつて、張湛註に「渾然一氣、尙ほ未だ離散せず」とある。【二】天眞　前に劉莘老・寶山晝睡等の詩中に注して置いた。【三】少微處士　少微は處士の星、その星に應ずる高隱の

險處直在嵌巖坑。　險處、直に嵌巖坑に在り。

人僞相加有餘怨。　人僞相加はつて、餘怨あり、

（二）天眞喪盡無純誠。　天眞、喪ひ盡して純誠なし。

徒自取先用極力。　徒に自ら先を取つて、極力を用ふ、

誰知所得皆空名。　誰か知らむ、得るところ皆空名。

（三）少微處士松柏寒。　少微の處士、松柏寒く、

蓬萊眞人冰玉淸。　蓬萊の眞人、冰玉淸し。

山是心兮海爲腹。　山は是れ心、海を腹となし、

陽爲神兮陰爲精。　陽を神となし、陰を精となす。

渴飮靈泉水。　渴しては靈泉の水を飮み、

飢食玉樹枝。　飢ゑては玉樹の枝を食ふ。

（四）白虎化坎青龍離。　白虎は坎に化し、青龍は離、

鎖禁（五）姹女關嬰兒。　姹女を鎖禁して嬰兒を關す。

（六）樓臺十二紅玻璃。　樓臺十二、紅玻璃、

（七）木公金母相東西。　木公金母、相東西。

純鉛眞汞星光輝。　純鉛眞汞、星光輝く、

烏升兎降無年期。　烏升兎降、年期なし。

停顏卻老只如此。　顏を停め、老を卻く、只だ此の如し、

哀哉世人迷不迷。　哀しいかな、世人、迷ふか迷はざるか。

人。【四】 白虎化坎青龍離　本集に見えた蕃子由龍虎坎離說に「龍は汞なり、精なり、血なり、腎に出でて、肝、これを藏す、坎の物なり。虎は鉛なり、氣なり、力なり、心に出でて、肺、これを生ず、離の物なり」とある。【五】 姹女　下の嬰兒、ともに仙丹を煉ることを形容したので「洪爐烈火、烘燄翕赫、姹女氣索し、嬰兒聲寂、紫色內に達し、赤芒外に射る、骨、金植に變じ、頷、丹澤を駐む」とある。【六】 樓臺十二　人の喉嚨管に十二節あるを云ふ。【七】 木公金母　太平廣記に「木公は碧海の上に生じ、以て陽和の氣を主り、亦た東王公と號す。又西華至妙の氣を以て、化して金母を生ず」とある。

【題義】 陳守道は如何なる人か分からぬ。そして、この詩は、專ら道家煉丹の說を述べたので、詩としては、あまり面白いものではない。

【詩意】 宇宙間に在る渾然たる一氣は、決して離散せず、生生發展し、やがて、形を成し、心を成し、仍つて情といふものがある。そこで利欲飮食の事を見ると、てんでに爪牙を磨き、頭角を振り立てて爭鬪をなし、その揭句には、霹靂の如き火を發し、險處を求めて、巖を嵌め込んだ樣な洞坑の內に立て籠つて居る。その上に、人僞が加はつて、餘怨を生じ、人は天眞を喪ひ盡して、純一の誠が無くなつて仕舞ふ。かくて、無益にも、先を取らうとして、あらむ限りの力を用ふるが、氣の毒ながら、その得たものは、空名に過ぎぬ。ここに、少微處士は、その骨が松柏の如く寒く、蓬萊眞人は、その姿が冰玉の如く淸い。そこで、山を心となし、海を腹となし、陽を神となし、陰を精となし、渴すれば靈泉の水を飮み、飢ゑては玉樹の枝を食ひ、白虎は坎、青龍は離、これを調合して、仙丹を煉り上げ、そ

の火加減の盛な時は、姹女を禁鎖し、嬰兒を出させぬ樣にし、十二の樓臺は、赤い玻璃の如くなり、木公金母が各、東西に分れ、日は升り、月は降り、心腎の氣が融會すると、年壽限りなく、卽ち長生が出來る。顏色を變せしめずして、老を卻くるは、只だ此の如くであるが、哀しいかな、世人は迷悟の中間に彷徨して、誰も、まじ目に仙道を修行するものがない。

【餘論】紀昀は「一覺に是れ道經、復た詩格なし」といつて居るが、いかにも共通り、まして東坡の如き大人物にして、煉丹を信ずるに至りては、まことに愚の骨頂である。そこで、解釋も極めて手輕に濟ませて仕舞つたので、これを一一詳說しても、徒に長くなるばかり、少しも、面白くないからである。

辨道歌

北方正（一）氣名祛（二）邪。
東郊西應歸中華。
（三）離南爲室坎爲家。
先凝（四）白雪生（五）黃芽。

辨道歌

北方の正氣、祛邪と名づく、
東郊西應、中華に歸す。
離南を室となし、坎を家となし、
先づ白雪を凝らして、黃芽を生ず。

【字解】【一】正氣　參同契に、「衆邪辟除、正氣常に存す」とある。【二】祛邪　邪を拂ひのけるといふ意。【三】離南　南は離の正位。【四】白雪　玉津。【五】黃芽　金液。【六】河車　前に王頤及び子由「赴南都」の諸詩中に注して置いた。水なして下より升つて、寶を載せて上らしむることと河車の運ぶが如きが故に云ふ。【七】紅蓮花　心藏の賓、蓮花に象る。【八】靈泉霆　霆は窪、卽ち清水。【九】華池　元奧集に「汞鉛を投ずるを華池といふ」とある。【一〇】子馳午前　參同契の註に「子右に當つて轉ずれば、午、乃ち東に旋る」とある。【一一】三田　元奧集に「腦を上田となし、心を中田となし、氣海を下田となす」とある。【一二】谽谺　前に「和孫同年」の詩中に注して置いた。【一三】內外砂　太淸煉靈丹訣に「道家、金色の藥石を服に用ひ、水火を以て之を鍊つて丹を成すを、外丹となす。口に濁氣を吐くを吐故といひ、鼻に淸氣を納るるを納新といひ、內丹となす」とある。【一四】餘粗　粗は防ぐといふ義、障

黃河流駕紫（六）河車。
水精池產紅（七）蓮花。
赤龍騰霄驚盤蛇。
姹女含笑嬰（八）兒呀。
十二樓瞰靈泉霆。
（九）華池玉液陰交加。
（一〇）子馳午前無定差。
（一一）三田聚寶眞生涯。
龜精鳳髓塡（一二）谽谺。
天地駭有鬼神嗟。
一丹休別內（一三）外砂。
長修久餌須升遐。
腸中澄結無餘（一四）粗。
俗骨變換顏如葩。

黃河の流は駕す紫河車、
水精池は產す紅蓮花。
赤龍、霄に騰つて盤蛇を驚かし、
姹女、笑を含んで嬰兒呀す。
十二樓は瞰る靈泉の霆、
華池玉液、陰、交も加ふ。
子は馳せ、午は前んで定差なく、
三田聚寶、眞生涯。
龜精鳳髓、谽谺を塡め、
天地、鬼神の嗟あるに駭く。
一丹、別つを休めよ內外の砂、
長修久餌、須らく升遐すべし。
腸中澄結、餘粗なく、
俗骨變換、顏、葩の如し。

哀哉世人爭齒牙。　哀しいかな、世人、齒牙を爭ひ、
指僞爲眞正爲哇。(一五)　僞を指して眞と爲し、正を哇となす。
輕肥甘美形驕奢。　輕肥甘美、形驕奢。
譎詭詐妄言矜誇。　譎詭詐妄、言矜誇。
游魚在網兎在罝。(一六)　游魚は網に在り、兎は罝に在り、
一氣頓盡猶嘔啞。(一七)　一氣、頓に盡きて、猶ほ嘔啞。
餘生所託誠棲槎。(一八)　餘生、託するところ、誠に棲槎、
九原枯髀如亂麻。(一九)　九原枯髀、亂麻の如し。
胡不割衆如鏌鎁。　胡ぞ衆を割いて、鏌鎁の如くならざる、
(二〇)胡不讓霜如文騧。　胡ぞ霜に讓つて文騧の如くならざる、
空與利名交撐拏。　空しく利名と交も撐拏。
可惜貪愛相漫洿。　惜むべし、貪愛相漫洿。
眞心道意非不嘉。　眞心道意、嘉からざるに非ず、
餐金聞活非虛譁。　金を餐し活を聞く、虛譁に非ず。

害となるもの。【一五】爲哇　哇は淫哇。【一六】在罝　罝は兎網。【一七】嘔啞　呻る聲。【一八】棲槎　槎は舟。【一九】枯髀　枯骨に同じ。【二〇】胡不讓霜　この一句は意義が分からないとしてある。强ひて解すれば、奇麗な白馬でも、霜の如く白いといふ譯には行かぬといふことにでもして置く外はない。【二一】籠筊　二字ともに鳥籠。【二二】獵猳　猳は牡豕。

何須横議相疵瑕。　何ぞ須ひむ、横議相疵瑕するを、
衆口竝發鳴羣鴉。　衆口竝び發して、羣鴉を鳴かしむ。
安知聚散同魚蝦。　安んぞ知らむ、聚散魚蝦に同じきを、
自纏如繭居如蝸。　自ら纏ふ繭の如く、居は蝸の如し。
日懷嗔喜甘籠筊。(二一)　日に嗔喜を懷いて、籠筊に甘んず、
其去死地猶獵猳。(二二)　その死地を去ること猶は猳を獵するがごとし。
吾恨爾見有所遮。　吾恨む、爾の見遮るところあり、
海波或至驚井蛙。　海波、或は至つて井蛙を驚かす。
烏輪卽晩蟾影斜。　烏輪、卽ち晩にして蟾影斜なり、
吾時倶睹超雲霞。　吾、時に倶に睹る雲霞を超ゆるを。

【題義】　この詩も、前首と同じく、專ら煉丹の事を述べたのである。

【詩意】　北方の正氣は、祛邪と名づけ、衆邪を辟除して、ひとり正氣を存せしめ、東郊は西に應じ、東西の方向が定まつて、中華といふものが出來る。離の正位たる南に向つて室を造り、坎の正位たる北に向つて家を爲り、つまり、南北の向に家室を定め、水火の歸するところを判然たらしめる。初め

は、津液を凝らし、その中から黃金の液を生じ、紫河車は、水をして、寶を載せた儘、下より升らしめ、丁度、黃河の流に駕するが如く、紅蓮花に比すべき心藏は、清淨にして、些の汚穢なく、水精の池より產出する。そこで、愈よ丹を錬る爲に、火を燃やすと、赤龍の空に騰るが如くにして、盤蛇を蟠かしめ、姹女は笑を含み、嬰兒は呆れて、物をも言はず、十二の樓臺は、靈泉の湧き出づるを俯瞰する。やがて、華池といひ、玉液といひ、神水は、陰に於て、交も相交り、子午ともに時を得て、定まれる差異だにない。腦心氣海、卽ち三田に寶を聚めるのが、眞正の生涯であつて、龜精鳳髓に比すべき仙藥は、谽谺の深い處に充塞し、その極、鬼神も嘆嗟する位。それを見ると、天地も、自らその靈妙に驚く位。丹に內外の別があるといひ、區區として爭つて居るのは、まことに愚の極といふべく、苟くも、長修して、その丹を食へば、羽化して登仙することも出來、腸中の物は、皆澄み切つて、少しも障害となるものなく、俗骨も、いつしか變換して、長しへに、紅顏を留めて花の如くならう。氣の毒にも、世人は、齒牙の別を爭つて、物の大用を悟らず、その極、僞を指して眞となし、正を哇となし、すべての事物を顚倒して居る。そこで、輕裘肥馬、甘美を食するを以て形體上の驕奢となし、譎詭詐妄を以て言語上の矜誇となし、はては、自繩自縛、たとへば、游魚の網に罹り、狡兎の罝に在ると一般、はては、肝腎な氣が全く無くなつて、唯だ呻つて居るし、餘生の託するところも見つからず、止むなく、舟に住まうといふ始末で、地下の枯骨は、亂麻の如く、これ皆道を修めずして、その生を喪つた者である。何ぞ衆邪を劊くこと、莫邪の名劍の如くせず、空しく、利名と共に交も攫み合つて居るのか。又何ぞ純白を緇に讓ること、文驕の如くならず、妄りに、おのが身を貪愛して、互に汚し合ふのか。眞心道意は、善くない筈はなく、金液を餐して長生を爲すことも、決して、虛誕の言葉ではなく、何も橫議して、互に缺點を攻め立てる必要はない。その衆口並び發する時は、たとへば、羣がる鳥の騷ぐが如く、その聚散することは、魚蝦と一般。自ら其身を纏ふことは繭の如く、その居るところの窮屈なるは、蝸牛の殼を負ふが如く、日ごとに、喜怒の邪念を抱いて、籠の中に閉ぢこもり、その死地を去つて、わづかに生き殘つて居るのは、丁度、牡豕を獵する時の樣である。殘念ながら、汝等の見解は、公明正大でなく、各〻遮らるるところあるからで、井中の蛙の樣な了見であるから、自分ばかり偉いと思つて居ても、やがて波が押し寄せて來ると、はじめて、江海の廣きに驚くであらう。吾のみは、獨り然らず、仙丹を煉つただけに、太陽が日暮に暗くなつた時でも、月の影が西に成つた時でも、道を修めたものは、打ち連れて雲霞の上を度り、渺茫たる青天に登つて行くことが出來る次第である。

【餘論】 査初白は「東坡、晚年、心を養生の術に留め、龍虎鉛汞の說に於て、但だ能く言ふのみならず、しかも且つ能く行ふ。二詩、道家內外丹を闡抉して、殆んど餘蘊なし。特に爲に衆說を參合して、詳に註釋を加へ、覽者をして瞭然たらしむ」とあるが、その註だけでは、上に解釋したより以上には、よく分からない。それより、紀昀が「題、鄙甚し。この種、原と詩を以て論ずべからず、宜しく集に入るべからず」といつた方が、稍や果斷に失して居るが、頗る事理の當を得て居る。

江漲、用過韻

江漲る、過の韻を用ふ

草木生故墟。牛羊滿空瀆(一)。　草木、故墟に生じ、牛羊、空瀆に滿つ。
春江圍草市(二)。夜浪浮竹屋(三)。　春江、草市を圍み、夜浪、竹屋を浮ぶ。
已連漲海(四)白。尚帶霍山(五)綠。　すでに漲海に連つて白く、なほ霍山の綠を帶ぶ。
坎離(六)更休王(七)。魚鼈橫陵陸。　坎離、更る休王、魚鼈、陵陸に橫ふ。
得非崑崙囚(八)。欲報陸渾衂(九)。　崑崙の囚、陸渾の衂に報いむと欲するに非ざるを得むや。
行看北風競。來救南國蹙。　行く〳〵看る北風競ひ、來つて南國の蹙を救ふ。
長驅連山燒。一掃含沙(一〇)毒。　長驅して連山燒け、一掃す含沙の毒。
孤吟愍造化。何時停倚伏(一一)。　孤吟、造化を愍む、何の時か、倚伏を停めむ。
當憐水旱(一二)甿。不作舟車(一三)蓄。　當に憐むべし、水旱の甿、舟車の蓄を作さず。
江流儻席卷。社酒期茅縮(一四)。　江流、もし席卷すれば、社酒、茅縮を期せむ。

【字解】【一】空瀆　から堀。【二】草市　田舍の八百屋市場。【三】竹屋　竹で造つた家。【四】漲海　南海をいふ。【五】霍山　登註に「廣東賓志、霍山は龍川縣北一百里に在り、舊經に云ふ、高さ七千餘丈、周廻三百六十里、峰、三百六十あり、居るべきもの七十二。游名山記に云ふ、秦時、霍龍といふものあり、龍川の人、亂を避けて此に隱れ、眞人に遇ふ、授くるに金液還生丹を以てし、功成つて仙し去る、後人因つて霍を以て山に名づく」とある。【六】坎離　易に坎を水、離を火としてある、水火といふに同じ。【七】休王　漢書音義に「五行に王相死囚休廢あり、即ち五行相勝つの意」とあつて、互に攻め合ふ。【八】崑崙囚　韓愈の陸渾山火詩に、火が餘り盛なので、水官が之を天帝に訴へると、天帝は、やがて火官の邑を潮らしめ、且つ火官を崑崙に囚へたとある。【九】陸渾衂　陸渾は縣の名、衂は敗北。【一〇】含沙毒　山海經の註に「蜮は短狐なり、沙を含んで人を射る、これに中れば病死す」とある。【一一】倚伏　老子に「禍は福の倚るところ、福は禍の伏するところ」とある。【一二】水旱甿　甿は人民。【一三】舟車蓄　史記に「旱には車に資し、水には舟に資す、物の理なり」とある。【一四】茅縮　王註に「古しへは、茅を以て酒を縮む、左傳僖公四年、楚貢包茅入らず、以て酒を縮むるなし」とある。酒を縮むとは、酒に味をつけることであらう。

【題義】惠州に大洪水があつて、末子の過が詩を作つたから、乃ち次韻したのである。

【詩意】草木は舊い墟址に生ひ茂り、牛羊は、空濠の中に匿れて居る。そは、春江の水漲つて草市を圍み、濁浪が、夜に乘じて、竹造の家屋を浮び上らしめたからである。その洪水は、一白渺茫たる南海に連り、ただ霍山の綠なるが、遙に見えるだけである。水火は、互に攻め合ひ、魚鼈は其處を失つて、陸上に橫はつて、死にかかつて居る。崑崙の囚となつて居た火官が、陸渾の敗北に報いむと欲したからかも知れぬが、やがて、北風競ひ起つて、南國の旗色惡しきを救はむとし、長驅して連山を燒き拂ひ、はては、水中に居る含沙の毒蟲までも一掃して仕舞つた。予は、孤吟して造化を愍むので、禍福の循環は、何時止むであらうか。それよりも第一に、水旱の兩者に困められた窮民を救濟しなければならぬが、彼等は、舟車に載せた貯蓄だに無いといふ始末。もし、この江流を席卷して、洪水を治めることが出來たならば、社日には、茅縮の酒を酌んで、大に樂むことが出來るであらう。

【餘論】紀昀は「純ら人事の感を寫す」といつて居る。

連雨江漲二首　　連雨江漲る　二首

（一）
越井岡頭雲出山。　　越井岡頭、雲、山を出で、
牂牁江上水如天。　　牂牁江上、水、天の如し。
牀牀避漏幽人屋。　　牀牀、漏を避く幽人の屋、
浦浦移家蜑子船。　　浦浦、家を移す蜑子の船。
龍卷魚鰕并雨落。　　龍は魚鰕を卷いて、雨に幷せて落し、
人隨雞犬上墻眠。　　人は雞犬に隨ひ、墻に上つて眠る。
只應樓下平階水。　　只だ應に樓下平階の水、
長記先生過嶺年。　　長く先生過嶺の年を記すなるべし。

【題義】この詩は、前首と同じく、雨が續いて、江水が漲つたことを詠じたのである。

【詩意】越王井の在る岡の上に、晦雲蔽ひかかつて、雨降りやます、やがて、牂牁江は漲つて水の濶きこと、天の如くである。幽人の家では、どの臥牀にも雨が漏つて、とても住んで居られず、浦浦では、水上に棲む蜑人が其船を移さうとして居る。忽然として、龍卷が起つて、魚鰕は雨と共に降り來り、人は雞犬に隨ひ、墻壁の上に登つて寢て居るといふ始末。心なき洪水は、致方もないが、普通、樓下に在つて、階と平かなる江水は、予が嶺を過ぎて、この地に來りし年を覺えて居て、決して、禍殃を下さぬ筈で、これは、全く雨の所爲である。

【字解】［一］越井岡　南越志に「天井岡下、越王井あり、深さ百餘尺、云ふ是れ趙佗鑿つところ」とある。［二］牂牁江　名勝志に「西江は廣州城の西北五十里に在り、源は牂牁より鬱江を合せ、肇慶を過ぎて、亦た桂水といふ。墳水と滙して海に入る、亦た三江の一」とある。［三］蜑子　前にも一寸見えた通り、蜑は南方蠻種の一、北史蠻獠傳に「南方を蠻といふ、その流、曰く蜑、曰く獽、曰く獠、曰く俍」とある。

【餘論】紀昀は「景、眞にして、語、劣」といつて居る。

（二）
急雨蕭蕭作晩涼。　　急雨、蕭蕭として、晩涼を作す、
臥聞榕葉響長廊。　　臥して聞く、榕葉の長廊に響くを。
微明燈火耿殘夢。　　微明の燈火、殘夢耿たり、
半溼簾櫳浥舊香。　　半溼の簾櫳、舊香浥ふ。
高浪隱牀吹甕盎。　　高浪、牀に隱として甕盎を吹き、
暗風驚樹擺琳琅。　　暗風、樹を驚かして琳琅を擺ふ。
先生不出晴無用。　　先生出です、晴、用なし、
留與空階滴夜長。　　空階に留與して、夜の長きに滴る。

【詩意】急雨蕭蕭として、晩天極めて涼しく、臥して榕葉の長廊に響くを聞くのも、一寸趣がある。

【字解】［一］榕葉　南方草木狀に「榕樹は、南海桂林、多く之れ植う。葉は木麻の如く、實は冬青の如し、枝條散も繁く、その蔭十畝」とある。［二］簾櫳　櫳は格子窓。二字で物靜かな奥の部屋を云ふ。［三］隱牀　殷牀に同じく、臥牀に響くといふ義。［四］琳琅　珠玉を云ふ。

かすかに明るき燈火は、殘夢を照らし、耿耿として點つて居るし、半ば溼ひたる籠櫳には、前に焚いた香の匂ひが浥うて殘つて居る。高浪は、臥牀に響いて、甕や鉢を吹き動かす如き音をなし、暗風は木を搖すつて、玉を擺ふ樣である。予は、あまり外出せぬから、晴天は必要ないので、長き夜もすがら、雨の空階に滴るをも、格別、何とも思はない。

【餘論】 紀昀は「伉髒の語、愁歎に勝れり」といつて居る。

贈曇秀

曇秀に贈る

白雲出山初無心。　白雲、山を出でて初め心なし、
棲鳥何必戀舊林。　棲鳥、何ぞ必ずしも舊林を戀はむ。
道人偶愛山水故。　道人、偶ま愛す山水の故、
縱步不知湖嶺深。　縱步知らず、湖嶺の深きを。
空巖已禮百千相(一)。　空巖、すでに禮す百千相、
(二)曹溪更欲瞻遺像。　曹溪、更に遺像を瞻むと欲す。
要知水味孰冷煖。　知るを要す、水味、孰れか冷煖、
始信夢時非幻妄。　はじめて信ず、夢時、幻妄に非ざるを。
袖中忽出貝(三)葉書。　袖中、忽ち出す貝葉の書、
中有璧月綴星珠。　中に璧月の星珠を綴るあり。
人間勝絕略已徧。　人間勝絕、略ぼ已に徧ねく、
匡廬南嶺并西湖。　匡廬南嶺、西湖を并す。
西湖北望三千里。　西湖、北望三千里、
大隄冉冉(四)橫秋水。　大隄、冉冉として秋水に橫ふ。
誦師佳句說南屏。　師の佳句を誦して、南屏を說く、
瘴雲應逐秋風靡。　瘴雲、應に秋風を逐うて靡くべし。
胡爲只作十日歡。　胡すれぞ、只だ十日の歡を作す、
杖策復尋歸路難。　策に杖いて、復た尋ぬ歸路の難きを。
留師筍蕨不足道。　師を留む、筍蕨、道ふに足らず、
悵望荔子何時丹。　悵望す、荔子、何の時か丹なる。

【題義】 曇秀は卽ち芝上人、東坡が揚州に居た時、唱和したことがあるが、今次、態態、惠州に來て

【字解】 【一】百千相　前に刁景純席上の詩中に注して置いた。
【二】曹溪　前に見ゆ、韶州府城の東南に在つて、禪家の大本山。
【三】貝葉書　貝多樹の葉、印度では、これに佛經を書寫する、故に佛書といふに同じ。
【四】冉冉　長く續く貌。

尋ねたから、この詩を贈つたのである。

【詩意】 白雲の山を出づるや、初めより心なく、棲鳥は、必ずしも舊林を戀ひ慕ふ譯ではない。曇秀師の行蹤は、雲の如く、鳥の如く、行止自在、ただ意の欲するままに出游するのである。師は、偶然にも、山水の故きを愛し、歩に任かせて、湖嶺の幽深なるをも恐れず、すでに、窓巖の間に於て、佛の百千相に拜禮したが、これより、曹溪に入つて、六祖の遺像を拜まうと思ひ、それで、態態、ここまで遣つて來たのである。水味の冷煖は、必ず知るを要し、夢中見るところ、却つて、幻妄に非ざるを信じ、旅する間に於て、聊か悟入するところがあつた。そこで、袖の中から、有り難い御經を取り出して見せたが、その文句は、璧の如き月に、珠の如き星を綴り合はせた如く、光彩發越せむばかり、これも、旅の間に手に入れたのであらう。この世間の勝景は、大抵眺め盡し、匡廬より南嶺、それから西湖にも及んで居る。西湖といへば、ここより、北望、三千里を隔てて居るが、大隄は、冉冉として長く續いて、秋の水の漲れる湖を横斷して居る。その西湖の景色を思ひ出し、その湖岸なる南屏を詠じたる師の名句を高誦すると、さしも、暑さうな雲も、秋風を逐うて吹き靡かされた樣で、物とはなしに、涼しさを覺える。折角、來たのに、唯だ十日の歡をなしたばかりで、何故、筇に杖いて、又そろ困難なる路を尋ねて歸り去るのであるか。しかし、師を引き留めた處で、筍や蕨は格別の珍味でもなく、荔子は何時熟して赤くなるか、せめて、それでも、勸めたいと思つて悵望するのみである。

【餘論】 紀昀は「起句觀るべし、以下、語、多くは凡近」といつて居る。

和郭功甫韻送芝道人游隱靜

郭功甫の韻に和し、芝道人の隱靜に游ぶを送る

観音妙智力。應感隨緣度。　観音の妙智力、感に應じ緣に隨つて度す。

芝師訪東坡。寧辭萬里步。　芝師、東坡を訪ふ、むしろ辭せむや萬里の步。

道義妙相契。十年同去住。　道義、妙相契し、十年去住を同じうす。

行窮半世間。又欲浮杯渡。　行き窮めて世間に半し、又杯を浮べて渡らむと欲す。

我願焚囊鉢。不作陳俗具。　われ願はくは、囊鉢を焚き、俗具を陳するを作さず。

會取却歸時。只是而今路。　會取す却歸の時、只だ是れ而今の路。

【字解】 【一】観音妙智力　法華經普門品に「観音妙智力、能く世間の苦を救ふ」とある。【二】浮杯渡　前に游中峰杯泉の詩中に注して置いた。【三】囊鉢　傳燈錄に「守清禪師、僧あり、問ふ、如何か是れ和尚の家風、曰く、一瓶兼一鉢、到處是生涯」とある。

【題義】 說明に及ばぬ。芝道人は、卽ち前首に見えた僧曇秀。隱靜は寺の名と思はれるが、一寸分からない。

【詩意】 師は、観音の妙智力を以て、世間の苦を救はれ、緣に隨つて濟度されるのは、まことに感心すべきことである。師は、態態、東坡を訪問せられ、萬里の長途を步することを厭はれず、道義深く

相契合し、十年の久しき、去住を同じうした。師は、處處を窮めて、足跡、すでに世間に半ばし、これから、又杯を浮べて、水を渡つて行かうとして居られる。われ願はくは、師の嚢鉢を焚き棄てやうと思ふので、師の高徳ある上は、こんな俗具を竝べ立てて置く必要はない。やがて、愈よ歸る時に遇うたならば、只だ今までの路を行きさへすれば、それで宜しいのである。

次韻定慧欽長老見寄八首

定慧の欽長老の寄せらるるに次韻す　八首

蘇州定慧長老守欽、使其徒卓契順來惠州、問予安否、且寄擬寒山十頌、語有璨忍之通、而詩無島可之寒、吾甚嘉之、爲和八首。

【訓讀】 蘇州定慧の長老守欽、その徒卓契順をして、惠州に來つて、予の安否を問はしめ、且つ擬寒山の十頌を寄す。語に璨忍の通あつて、詩に島可の寒なし。吾、甚だ之を嘉し、爲に八首に和す。

(一)左角看破楚。(二)南柯聞長滕。鉤簾歸乳燕。穴紙出癡蠅。爲鼠常留飯。憐蛾不點燈。(四)崎嶇眞可笑。我是小乘僧。

左角、楚を破るを看、南柯、滕を長とするを聞く。簾を鉤して乳燕を歸し、紙に穴して癡蠅を出す。鼠の爲に常に飯を留め、蛾を憐んで燈を點せず。崎嶇、眞に笑ふべし。われは是れ、小乘の僧。

【字解】 【一】左角　前に公濟和擬文の詩中に注して置いた、莊子に「蝸の左角に國するものあり、觸といふ」とある。【二】南柯　淳于棼の故事、夢を云ふ。【三】長滕　左傳隱公十年に「滕侯・薛侯、來朝して長を爭ふ、卒に滕侯を長とす」とある。【四】崎嶇　こせこせする貌。

【題義】 蘇州定慧禪院の長老守欽といふもの、その弟子の卓契順を態態惠州に遣して、予の安否を問はしめ、且つ寒山子に擬した詩を十首寄せて來た。その詩は、語に僧璨・宏忍等、諸高僧の通達あつて、賈島・可明の如き寒瘦がない。予は、甚だ之を嘉し、その中の八首に和した。

【詩意】 漢の高祖が楚の項羽を破つたのは、蝸牛の左角に國する觸氏が、一寸ばかり勢を得たるに同じく、魯國に於て班列を爭ひし時、滕侯を長としたのは、南柯夢中の瑣事に過ぎぬ。予は、平生、簾を釣り上げて、中にまぐれ込んだ親燕を歸してやり、障子の紙に穴を明けて、まごついて居る馬鹿な蠅を出してやり、鼠の爲に、常に飯を殘して置き、蛾の死ぬるを憐んで、燈を點さない。しかし、こせこせするのは、洵に笑ふべきことで、予は、猶ほ小乘の僧たるを免れぬものである。

【餘論】 紀昀は「これ等、すべて詩を以て論せず」といつて、けなして居るが、一かどの道理はある。

(一)鐵橋本無柱。石樓豈有門。舞空五色羽。(二)吠雲千歲根。(三)松花釀仙酒。(四)木客餽山飧。

鐵橋、本と柱なく、石樓、豈に門あらむや。空に舞ふ五色の羽、雲に吠ゆ千歲の根。松花、仙酒を釀し、木客、山飧を餽る。

我醉君且去。(五)陶云吾亦云。　われ醉ふ、君、しばらく去れ、陶は云ひ、吾亦た云ふ。

【字解】【一】鐵橋　王註に「この兩句は、羅浮山の事、しかも、醉語を以て之を言ふ。山に鐵橋石樓あり、故に云ふ、本と柱なきなりと。又二石樓あり、而して、延祥寺は南樓の下に在り。相傳ふ、石樓に門あり、往くべし、と。故に豈に門あらむやと云ふなり」とある。【二】五色羽　一統志に「五色雀は羅浮山に在り、貴人至るあれば、先づ翔集す」とある。【三】千歲根　王註に「枸杞を言ふなり。枸杞千歲、その根、犬の狀の如し。白樂天の詩に云ふ、不レ知靈藥根成レ狗、怪得時聞吠レ夜聲」とある。【四】木客　王註に「廣南に之あり、多く木中に居る、野人の類なり」とある。【五】陶云　前に和二蔡準一の詩中に注して置いた。

【詩意】鐵橋には本と柱なく、石樓には門の有る筈がない。それから、五色の雀、空に舞ひ、千歲を經た枸杞の化した狗は、雲に吠えて居る。松花は、仙酒を釀すべく、木客は、山の御馳走を贈つて來た。われ醉うて睡らうと思ふから、君、しばらく去れ、陶淵明も言つたが、吾も亦た、さう言ふのである。

羅浮高萬仞。下看(一)扶桑卑。　羅浮、高さ萬仞、下に看る、扶桑の卑きを。

默坐(二)朱明洞。(三)玉池自生レ肥。　默坐す朱明の洞、玉池、自ら肥を生ず。

從來性坦率。醉語漏二天機一。　從來、性坦率、醉語、天機を漏らす。

相逢莫二相問一。我不レ記二吾誰一。　相逢うて、相問ふなかれ、われ、吾の誰なるかを記せず。

【字解】【一】扶桑　日の出るところ。【二】朱明洞　前に游二羅浮山一の詩中に注して置いた。【三】玉池　前に次二韻沈長官一の詩中に注して置いた。

【詩意】羅浮の山は、高さ一萬仞、夜半に日出を眺め、扶桑の樹は、下の方に低く見える。ここに、朱明の洞に坐して、行ひ澄まして居ると、口中の唾液が濡うて、自然肥えて來る。予は、從來、性坦率にして、動もすれば、醉語、天機を漏らすことがある。そこで、相逢うても、決して問うて呉れるな、吾は誰であるか、自分でも、忘れて仕舞つたと申す外はない。

幽人白(一)骨觀。大士(二)甘(三)露滅。　幽人の白骨觀、大士、甘露滅す。

(四)根塵各清淨。心境兩奇絕。　根塵、各清淨、心境、兩つながら奇絕。

眞源未二純熟一。習氣餘二陋劣一。　眞源、未だ純熟せず、習氣、陋劣を餘す。

譬如二已放鷹一。中夜時掣紲。　たとへば、已放の鷹の如く、中夜、時に掣紲。

【字解】【一】白骨觀　楞嚴經に「優婆尼沙陀、白骨微塵、空虛に歸するを悟る、これを白骨觀といふなり」とある。【二】大士　佛道を得たる人。【三】甘露滅　維摩經の註に「梵、本と寂滅、甘露は卽ち實相なり、肇公曰く、大覺の道、寂滅無相なり、至味和神、たとへば甘露の如し」とある。【四】根塵　根は六根、塵は現象界。

【詩意】幽人は白骨觀を試み、あらゆる現象を以て空虛に歸すとなし、大士は、寂滅無相、甘露の如しといつて居る。ここまで悟ると、根塵、各清淨に、心境、兩つながら奇絕である。しかし、普通

の人は、眞源を窮むべき心が、未だ純熟せず、從來の慣習が頗る陋劣であるから、たとへば、すでに放つた鷹の如く、夜半には、ちやんと縛つて、繫いで置かねばならぬ。

誰言窮巷士。乃竊造化權。 誰か言ふ、窮巷の士、乃ち造化の權を竊む。

所見皆我有。安居受其全。 見るところ、皆我が有、安居して其全を受く。

戲作一篇書。千古發爭端。 戲に一篇の書を作り、千古、爭端を發す。

儒墨起相殺。予初本無言。 儒墨、起つて相殺す、予、初めより本と言なし。

【詩意】 行き詰まつた路次に住んで居る樣な窮士が、造化の權を竊むは、眞に不思議であると誰か言ふか。萬物は、我が前に在つて、皆見るを得べく、又我に備はつて居るから、われは、安坐して全く之を享受することが出來る。しかし、戲に一篇の書を作ると、千古爭論の端緒を開くべく、現に儒墨の如きは、起つて互に改めて合つて居るから、予の如きは、初めより何も言はぬ決心である。

閒居蓄百毒。救彼跛與盲。 閒居、百毒を蓄へ、かの跛と盲とを救ふ。

依山作陶穴。掩此暴骨橫。 山に依つて陶穴を作り、この暴骨の橫はるを掩ふ。

區區效一溉。豈能濟含生。 區區として一溉を效すも、豈に能く含生を濟はむや。

力惡不已出。時哉非汝爭。 力惡、已まずして出づ、時なる哉、汝の爭に非ず。

【字解】 〔一〕 百毒 百藥に同じ。 〔二〕 陶穴 瓦を以て疊み上げた穴。

【詩意】 閒居して百藥を貯へ、かの跛と盲とを救ひ、又山に依り傍うて、煉瓦疊の穴を作り、野に曝された骨を始末する。しかし、區區として、一たび水を灌ぐ樣な事をした位では、とても生を含める萬物を皆ねく濟度することは出來ない。多くの人は、惡事を爲すことに力め、斷え間なく出かけて來るので、今は、決して汝の爭ふべき時ではなく、世の仁人輩は、默つて引ッ込むより外に仕方がない。

少壯欲及物。老閒餘此心。 少壯、物に及ばむと欲し、老閒、この心を餘す。

微生山海間。坐受瘴霧侵。 微生、山海の間、坐して瘴霧の侵を受く。

可憐鄧道士。攝衣問呻吟。 憐むべし鄧道士、衣を攝して呻吟を問ふ。

覆舟却私渡。斷橋費千金。 覆舟、却つて私渡、斷橋、千金を費す。

【字解】 〔一〕 微生 微賤なる此命。 〔二〕 鄧道士 名は守安、かつて橋を造りしこと、後の兩橋詩の敍に見ゆ。

【詩意】 少壯の時、仁惠を物に及ばさむと欲し、老いて閒なるまま、なほ此心を剩して居るが、予は微賤の身を以て、山海の間に謫せられ、居ながら、瘴霧の侵害を受けて居る位だから、何とも仕方がない。ここに、鄧道士は衣を搴げて民の呻吟せるを問ひ、色色苦心したが、かの舟を覆すのは、私に

江を渡るからで、まことに氣の毒だといふので、斷橋を修復するのに千金を費し、それで人を渡す樣にしたのは、まことに、感ずべきことである。

淨名(一)毗耶(二)中。妙喜(三)恆沙外。 淨名は毗耶の中、妙喜は恆沙の外。

初無來往相。二士同一在。 初めより來往の相なく、二士、同一に在り。

云何定慧師。尙欠行脚債。 云何か定慧師、尙ほ行脚の債を欠く。

請判(四)維摩憑。一到東坡界。 請ふ、維摩の憑を判し、一たび東坡の界に到れ。

【字解】〔一〕淨名 維摩詰の漢譯。〔二〕毗耶 即ち毗耶離城、維摩の居る處。〔三〕妙喜 妙喜世界、維摩經に「維摩詰、神通力を現じ、妙喜世界を斷取して、この土に置く、この土に入ると雖も、しかも、增減せず、この世界に於ても亦た迫隘せず、本の如く異なるなし」とある。〔四〕請判維摩憑 憑は公憑、即ち手形。

【詩意】淨名居士の稱ある維摩は、毗耶の中に居るし、妙喜世界は、恆河沙の外に在つて、世の變異と毫も關係しない。維摩は妙喜世界に沒して、この人世に生まれたのであるが、初めより、來往する樣な相もなく、妙喜世界も、この人世も、同一の處に在るものと考へて居た。如何なれば、定慧院の欽長老は、行脚する旅費を借りに行く處が無くて困つて居るのか、それよりも、維摩の處に往つて、通行自由の手形を貰つて、そして、一たび、この東坡世界に來ては如何か。

和陶歸園田居六首

陶の歸園田居六首に和す

三月四日、游白水山佛跡巖、沐浴于湯泉、晞髮于懸瀑之下、浩歌而歸、肩輿却行、以與客言、不覺至水北荔支浦上、晚日葱曨、竹陰蕭然、時荔子纍纍、如芡實矣、有父老年八十五、指以告余曰、及是可食、公能攜酒來游乎、意欣然許之、歸臥既覺、聞兒子過誦淵明歸園田居詩六首、乃悉次其韻、始余在廣陵、和淵明飮酒二十首、今復爲此、要當盡和其詩、乃已耳、今書以寄妙總大士參寥子。

【訓讀】三月四日、白水山佛跡巖に游び、湯泉に沐浴し、髮を懸瀑の下に晞かし、浩歌して歸る。肩輿却行、客と言ふを以て、水北荔支浦上に至るを覺えず。晚日葱曨、竹陰蕭然、時に荔子纍纍として芡實の如し。父老あり、年八十五、指して以て余に告げて曰く、この食すべきに及んで、公、能く酒を攜へて來り游ばむかと。意、欣然として之を許す。歸臥して、すでに覺め、兒子過が淵明歸園田居の詩六首を誦するを聞き、乃ち悉く其韻に次す。はじめ、余、廣陵に在り、淵明の飮酒二十首に和す、今復た此を爲す。要するに、當に盡く其詩に和すべし、乃ち已まむのみ。今書して以て妙總大士參寥子に寄す。

環レ州多二白水一際レ海皆蒼山。　州を環つて白水多く、海に際して皆蒼山。
以二彼無盡景一寓二我有限年一。　彼の無盡の景を以て、我が有限の年を寓す。
東家著二孔丘一西家著二顏淵一。　東家に孔丘を著け、西家に顏淵を著く。
市爲不レ二レ價。農爲不レ爭レ田。　市、爲に價を二にせず、農、爲に田を爭はず。
周公與二管蔡一。恨不二茅三間一。　周公と管蔡と、恨むらくは、茅三間たらず。
我飽二一飯一足。薇蕨補二食前一。　われ一飯に飽けば足れり、薇蕨、食前を補ふ。
門生饋二薪米一。救二我廚無一レ煙。　門生、薪米を饋り、わが廚に煙なきを救ふ。
斗酒與二隻雞一。酣歌餞二華顚一。　斗酒と隻雞と、酣歌して華顚を餞す。
禽魚豈知レ道。我適物自閒。　禽魚、豈に道を知らむや、われ適すれば、物、自ら閒なり。
悠悠未二必爾一。聊樂二我所一レ然。　悠悠、未だ必ずしも爾らず、聊か我が然るところを樂む。

【字解】〔一〕白水　淸流。〔二〕東家　前に代レ書答二梁先一の詩中に注して置いた。〔三〕不爭田　虞芮の故事を暗用したのであらう。〔四〕茅三間　宋武の二王傳論に「襄陽の龐公、劉表に謂つて曰く、もし周公と管蔡となして、茅屋の下に處り、藜藿の羹を食はしむれば、豈に斯の若きの禍あらむや」とある。〔五〕食前　孟子に食前方丈とあつて、食事の際、前に列べてある肴核の類を云ふ。〔六〕華顚　前に數ば見ゆ、白髮頭の老人。

【題意】引の意味は——紹聖二年三月四日、白水山の佛跡巖に游び、溫泉に沐浴し、瀧の下で、少憩して髮を乾かし、然る後、浩歌して歸つた。さきに、乘つて往つた駕籠で戻つたのであるが、途すがら、同行の客と話をして居たから、案外早く、知らぬ間に、水北なる荔枝浦上に到著した折から、夕日は薄くかぎろひ、竹の陰は、蕭然として居る。その時、荔子が纍纍として多く實り、その大さは、鬼蓮の實ほどもあつた。すると、八十五になる父老があつて、荔子を指しながら予に告げ、これが食へる樣になつた頃、酒を攜へて來游されますかといつたから、欣然として之を諾した。やがて、家に歸つて、ひと眠りして覺めると、倅の過が、陶淵明の歸園田舍の詩を朗誦して居たから、悉く其韻に次して六首作つた。さきに、予の揚州に在りし時、陶淵明の飲酒二十首に和したことがあるが、今、復た此詩を作つたので、要するに、淵明の詩に、すツかり次韻して後に、はじめて已むべきである。今、これを書して、例の妙總大士參寥子に寄せることにした。

【詩意】この惠州を環つて淸流多く、海の際まで蒼山が續いて居る。かの盡くるなき好景を以て、年壽限ある我が身を寄寓せしめたのは、まことに有り難い仕合である。孔子も、その故土に於ては、東家の丘といはれ、西家には、その弟子の顏淵が居ると同じく、予は門生と共に、東西相鄰つて住んで居るが、士人も、頗る好意を寄せるらしく、市では掛け値をせず、農夫も、田畝の境界を爭ふことはない。何でも、人は、足らぬ勝の場合に限つて、極めて親密なもので、周公と管蔡二叔と、三間の茅屋の中に一緒に住んで居たならば、必ず相親んで、反目することも無かつたらうに、まことに殘念な

ことである。予は、一飯に飽けば足れりとし、薇などが、飯の菜として前に竝べてある。門生輩は、薪や米を贈つて、僅だに上らぬ我が貧廚を救つて呉れるし、一升の酒と一羽の雞と、まことに輕少ではあるが、御年寄に上げて、醉つて歌ふ樣に願ひたいといつて、特に呉れた人もある。魚鳥は、道を知つて居る筈はなく、予が自適すれば、あらゆる物は、自然淸閒である。悠悠として、未だ必ずしも此の如くならずとも、聊か我が今日然る所以を樂んで居る次第である。

【餘論】紀昀は「愈よ平實、愈よ高妙を見る」といつて居る。

窮猿既投林。疲馬初解鞅。　窮猿、すでに林に投じ、疲馬、初めて鞅を解く。

心空飽新得。境熟夢餘想。　心、空しく、飽いて新に得、境、熟して夢に想を餘す。

江鷗漸馴集。蜑叟已還往。　江鷗、漸く馴れ集まり、蜑叟、すでに還つて往く。

南池綠錢生。北嶺紫筍長。　南池、綠錢生じ、北嶺、紫筍長ず。

提壺豈解飮。好語時見廣。　壺を提ぐるも、豈に飮を解せむや。好語、時に廣めらる。

春江有佳句。我醉墮渺莽。　春江、佳句あり、われ醉うて渺莽に墮つ。

【詩意】困んで居る猿が放たれて林に投じたるが如く、疲れた馬が鞍を卸された如く、予も、此處に來て、やッと落ち付いた。心空なるが故に、すでに飽きはてた物でも、新に得たる心地し、境、すでに熟すれば、夢にも之を忘れない。江上の鷗は、漸く馴れて集まり、蜑人の年寄りも、時たま訪問して呉れる。南の池には、綠錢と見まがふ蓮の小さな葉が生じ、北の山には、皮の色紫なる筍が伸びて居る。酒壺は提げても、飮を解する譯ではなく、面白い駄洒落など、時時、諸方に廣められる。春江に臨めば、自然、佳句も出來るが、やがて、われは、醉うて、草木渺莽たる中に、倒れて寐て仕舞つた。

【餘論】紀昀は「淡宕、覺に佳めて好し」といひ「この種、是れ東坡の獨造」といつて居る。

新浴覺身輕。新沐感髮稀。　新浴、身の輕きを覺え、新沐、髮の稀なるを感ず。

風乎懸瀑下。却行咏而歸。　風か懸瀑の下、却行、咏じて歸る。

仰觀江搖山。俯見月在衣。　仰いで觀れば、江、山を搖かし、俯して見れば、月、衣に在り。

步從父老語。有約吾敢違。　步して父老に從つて語る、約あり、吾、敢て違はむや。

【詩意】新に浴すれば、身の輕きを覺え、新に頭を洗うて、年を取つて髮の少くなつたことを感ずる。風は瀧の下に吹きすさび、却行して、高詠しつつ歸つて來た。仰いで觀れば、大江は山を搖かし、俯して見れば、月影が衣上に在る。步して、父老と話し、約束は、決して違へないといつた。

【餘論】紀昀は「極めて平淺にして深味あり、神、陶公に似たり」といつて居る。

老人八十餘。不識城市娛。　老人八十餘、城市の娛を識らず。
造物偶遺漏。同儕盡邱墟。　造物、偶ま遺漏、同儕、盡く邱墟。
平生不渡江。水北有幽居。　平生、江を渡らず、水北に幽居あり。
手插荔枝子。合抱三百株。　手づから、荔枝の子を插み、合抱三百株。
莫言陳家紫。（一）甘冷恐不如。　言ふ莫れ、陳家の紫、甘冷、恐らくは如かずと。
君來坐樹下。飽食擕其餘。　君、來りて樹下に坐し、飽食、その餘を擕ふ。
歸舍遺兒子。懷抱不可虛。　舍に歸つて兒子に遺る、懷抱、虛しうすべからず。
有酒持飲我。不問錢有無。　酒あり、持して我に飲ましむ、錢の有無を問はず。

【字解】〔一〕陳家紫　蔡君謨の荔支譜に「興化軍は、風俗園池、勝れたる處、惟だ荔支を種ゑ、尤も陳紫を重んず。富室大家、歲に或は售めず、別品千計と雖も、意に滿つと爲さず。陳氏、採摘せむと欲すれば、必ず先づ戶を閉ぢ、牆を隔て、錢を入れて得るもの、自ら以て幸となし、敢て其直の多少を較べざるなり」とあつて、陳家の荔子は、閩中第一の絕品としてある。

【詩意】老人は年八十有餘、まだ城中の娛樂を知らない。造物者は、偶然、手落があつて、その老人の仲間を盡く死なしめて、唯だ邱墟を剩すばかり、老人は、かつて江水を渡ることなく、江北に幽居を構へ、手づから荔支の種を蒔いて、一抱もある大い木が三百株もある。閩中では、陳家の紫荔支が第一等で、甘冷の味、とても及ばぬといふな、老人の作つたのも、仲仲好味である。それで、老人は予に向ひ、君、來つて樹下に坐し、勝手に採つて食ふが善い、殘つたのは、みやげとして擕へて家に歸り、令息に贈つたら善からうといひ、折角の好意、虛しうすべからざるに因つて、その通りにした。その上、酒が有るからといつて、持ち來つて予に飲ませ、錢の有無などは、少しも問はなかつた。

【餘論】紀昀は「質朴、古に入る」といつて居る。

坐倚朱藤杖。（一）行歌紫芝曲。（二）　坐しては、朱藤杖に倚り、行いては、紫芝の曲を歌ふ。
不逢商山翁。（三）見此野老足。　商山の翁に逢はず、この野老を見れば足れり。
願同荔支社。長作雞黍局。（四）　願はくは、荔支の社を同じうし、長く雞黍の局と作らむ。
教我同光塵。（五）月固不勝燭。（六）　我をして、光塵を同じうせしめ、月、もとより燭に勝たず。
霜飈散氛祲。廓然似朝旭。　霜飈、氛祲を散じ、廓然として、朝旭に似たり。

【字解】〔一〕朱藤杖　赤色をした藤蔓の杖、白居易に朱藤杖吟がある。〔二〕紫芝曲　商山の四皓が自ら作つて歌つた詩。〔三〕商山翁　卽ち四皓、前に書王定國藏畫の詩中に注して置いた。〔四〕雞黍局　局は家に同じ。〔五〕同光塵　和光同塵の略語。〔六〕月固不勝燭　東坡の自註に「莊子云ふ、月、もとより火に勝たず、と。郭象曰く、大にして闇きは、小にして明かなるに若かず、と。陋なるかな斯言。予、爲に之を更へて曰く、大に明かなるものは、必ず小に晦、月、能く天地を燭らして、毫釐を燭らす能はず、これその火に勝たざる所以なり。然れども、これを杳にして、火勝つか、月勝つか」とある。

【詩意】立つて居る時は朱藤杖に倚り、散歩する時は紫芝の曲を歌つて居る。商山の四皓には逢へないが、この野老を見れば、それで澤山である。願はくは、同じく茘支栽培の組合に入り、そして、雞黍の御馳走で寄合をする時は、一處に成らうと思ふ。そこで、予をして、和光同塵、甘んじて、その仲間に入らしめたのであるが、月は、もとより燭に勝たざると同じく、暢氣に世わたりをすることに就いては、この老人の方が立ち優つて居る。やがて、霜を帶びた旋風が、鬱積したる忌はしき氣を吹き飛ばすと、天宇の間、がらりと晴れ亙つて、さながら、朝日の出さうな景色である。

昔我在廣陵。悵望柴桑陌。　むかし、我、廣陵に在り、悵望す柴桑の陌。

長吟飲酒詩。頗獲一笑適。　長吟す飲酒の詩、頗る一笑の適を獲たり。

當時已放浪。朝坐夕不夕。　當時、すでに放浪、朝に坐して夕は夕ならず。

矧今長閒人。一劫展過隙。　矧んや、今、長閒の人、一劫、展べて隙を過ぐ。

江山互隱見。出沒爲我役。　江山、互に隱見、出沒して我が役となる。

斜川追淵明。東皐友王績。　斜川に淵明を追ひ、東皐に王績を友とす。

詩成竟何爲。六博本無益。　詩、成つて竟に何をか爲す、六博、本と益なし。

【字解】【一】柴桑陌　柴桑里は潯陽郡に屬して、陶淵明の故鄕である。陌は阡陌の陌、卽ち田間。【二】飲酒詩　陶淵明の集に、この題の詩が二十首ある。【三】夕不夕　夕になつても夕らしく臥することが出來ない。【四】一劫　隋書經籍志に「一成一敗、これを一劫といふ」とある。【五】過隙　白駒の隙を過ぐるといふを略して云ふ。つまり、光陰。【六】斜川　前に游斜川、及び立春日小集の諸詩中に注して置いた。【七】東皐　東の澤地、唐書王績傳に「北山の東皐に游び、書を著して自ら東皐子と號す」とあり、又王績の詩に東皐薄暮望とある。【八】六博　卽ち博奕。

【詩意】むかし、予が揚州に在りし時、悵然として、遙に對岸なる柴桑の田舍を望み、陶淵明の作つた飲酒の詩を長吟して、一笑、頗る自適した。その時は、すでに放浪の身であつて、朝には、落ち付いて坐つて居るものの、夕には、夕らしく臥すことも出來ず、まことに情ない境涯であつて、この詩に慰められたことは、大したものであつた。まして、今は、長閒の人であつて、白駒の隙を過ぐる短き時に、あらゆるものが一成一敗するのを悠然と眺め過ごし、愈よ淵明の詩の妙を悟つた。江山は、互に隱見しつつ、その出沒するは、すべて、我が爲に役を爲すものと思はれた。されば、斜川に游んだ淵明の眞似をするも善いし、東皐に游んだ王績を友とするも善い。そこで、詩が出來ても、何の役にも立たぬが、博奕とても全く益なく、それに比すれば、はるかに勝つて居る譯である。

【餘論】紀昀は「これ、六首の總結」といつて居る。

聞正輔表兄將至以詩迎之

正輔表兄の將に至らむとするを聞き、詩を以て之を迎ふ

生逢堯舜仁。得作嶺海遊。　生きて堯舜の仁に逢ひ、嶺海の遊を作すを得たり。

雖懷跫(一)然喜。豈免跕(二)墮憂。　跫然の喜を懷くと雖も、豈に跕墮の憂を免れむや。

莫雨侵重(三)腿。曉煙騰鬱(四)攸。　莫雨、重腿を侵し、曉煙、騰つて鬱攸。

朝槃見蜜(五)唧。夜枕聞鵂(六)鶹。　朝槃、蜜唧を見、夜枕、鵂鶹を聞く。

幾欲烹鬱(七)屈。固嘗饌鉤(八)輈。　幾たびか、鬱屈を烹むと欲す、もとより嘗て鉤輈を饌す。

舌音漸獠(九)變。面汗嘗騂(一〇)羞。　舌音、漸く獠に變じ、面汗、かつて騂羞。

賴我存黃(一一)庭。有時仍丹(一二)邱。　賴に、我、黃庭を存し、時あつて、仍ほ丹邱。

目(一三)聽不任耳。踵(一四)息殆廢喉。　目、聽いて耳に任せず、踵息、殆んど喉を廢す。

稍欣素月夜。遂度黃(一五)茅秋。　稍や欣ぶ素月の夜、遂に黃茅の秋を度る。

我兄淸(一六)廟器。持(一七)節瘴海頭。　わが兄、淸廟の器、節を持す瘴海の頭。

蕭然三(一八)家步。橫此萬斛舟。　蕭然たる三家の步、この萬斛の舟を橫ふ。

人言得漢吏。天遣活楚囚。　人は言ふ、漢吏を得たりと、天は、楚囚を活かさしむ。

惠然再過我。樂哉十日留。　惠然として再び我を過ぎ、樂しいかな、十日留まる。

但恨參(一九)語賢。忽潛九原幽。　但だ恨む、參語の賢、忽ち潛む、九原の幽。

萬里儻同歸。兩(二〇)鰥當對耰。　萬里、もし同じく歸らば、兩鰥、當に對耰すべし。

强歌非眞達。何必師莊(二一)周。　强歌は眞達に非ず、何ぞ必ずしも莊周を師とせむ。

【字解】【一】跫然喜　莊子に「空虛に逃るるものは、人の足音跫然たるを聞いて喜ぶ、況んや、昆弟親戚の其側に謦欬するものなや」とある。【二】跕墮　前に山村五絕の詩中に注して置いた、飛鳥などの水中に落つること。【三】重腿　脚が腫れる。【四】鬱攸　前に詠ニ湯泉ーの詩中に注して置いた、蒸氣の立ち罩めた貌。【五】蜜唧　鼠の胎兒を蜜に漬けたもの。朝野僉載に「嶺南の獠人、好んで蜜唧を爲る。卽ち鼠胎未だ瞬せず、通身赤蠕なるもの、これを飼ふに蜜を以てし、これを筵上に飣し、囁囁として行く。箸を以て挾み取つて、これを咬めば、唧唧聲を作す、故に蜜唧といふ」とある。【六】鵂鶹　梟の類、嶺表錄異に「鵂鶹、卽ち梟なり、乃ち鬼車の屬。皆夜飛び、晝藏し、好んで人の爪甲を食ひ、すなはち吉凶を知る、凶なるものは、輒ち屋上に鳴く」とある。【七】鬱屈　蛇を云ふ、韓愈の南食の詩に惟蛇舊所ㇾ識、實憚口眼獰、開籠聽ニ其去一、鬱屈尙不平とある。【八】鉤輈　鷓鴣、その鳴き聲に因つて名づく。【九】獠變　獠人の聲音に變ずる。【一〇】騂羞　赤面して愧ぢ入る。【一一】黃庭　前に遊ニ羅浮山一の詩中に注して置いた。【一二】丹邱　前に仙都山鹿の詩中に注して置いた。夜も常に明かなる仙界。【一三】目聽　視聽に耳目を用ひずといふ義。【一四】踵息　前に正月蔡州道上の詩中に注して置いた。至人は喉で息をせず、踵で呼吸する。【一五】黃茅秋　南方草木狀に「芒茅枯るる時、瘴疫大に作る、交廣皆爾るなり。土人、呼んで黃茅瘴といひ、又黃芒瘴といふ」とある。【一六】淸廟器　唐書に「李珏、殿中侍御史たり。宰相韋處厚曰く、淸廟の器、豈に擊搏の才ならむや、と。禮部員外郞に除せらる」とある。【一七】持節　節は天子より賜はりし節信。【一八】三

家歩　王註に「廣南、江の滸、凡そ舟の際して上下すべきものを歩といふ」とあつて、三家とは、その小にして人家少きを云ふ。【一九】參語賢　漢書楊敞傳に「霍光、田延年を遣し、敞に報ずるに、昌邑王を廢するの事を以てす。敞、汗洽れて背を浹し、言ふところを知らず。その夫人、東廂より出で、敞及び延年と參語して許諾す」とあつて、その註に「三人共に言ふ、故に參語といふなり」とある。ここでは、東坡が其妻を指して云ふ。【二〇】兩鰥　二人の男やもめ、東坡の自註に「軾、婦を喪ふ、すでに三年、正輔、近く亦た亡綾の戚あり、故に云ふ」とある。【二一】莊周　莊子が、その妻死せし時、盆を鼓して歌つたといふことで、前に奪守擱レ酒見レ過の詩中に注して置いた。

【題義】程正輔は、東坡の母舅程濬の子、又東坡の妹が嫁して居たから、元來從兄弟で、重緣の間柄である。東坡の嶺南に謫せられた時、本路の憲となつて惠州に來やうとして居たから、東坡は、この詩を作つて、歡迎の意を表したのである。

【詩意】予は、堯舜仁政の目出たき御代に逢うて、嶺南の游を爲すことを得たので、今しも、惠州に留まつて居る。人の足音を聞いてだに、喜ぶ位であるが、地は夷獠に近く、飛ぶ鳶が水に墜ちて死ぬ様な心配を免れない。暮の雨は、脚氣の重い脚を侵し、曉の煙は、もやもやして居る。朝の食膳には、鼠の腹子の蜜漬があるし、夜眠る枕もとには、忌はしき梟の聲が聞こえる。幾たびも、蛇を煮て食はせられかかつたこともあるし、鷓鴣の御馳走などは、固より言ふまでもない。いつしか、言葉の訛りが、蠻音に變じて愧かしく、顏に汗をかいて眞赤になることを免れない。しかし、予は、幸に黃庭と名づくる精神を存して居て、時あつて、心魂を丹邱の仙界に馳せることがある。すでに視聽とも に耳目を用ひず、聽くに目を以てして耳に任かせず、足のかかとで息をして、喉で呼吸することを廢した位。月の明かなる夜は、流石に少しは喜ばしいが、それでも、どうやら黃茅瘴の秋を經過した。わが表兄の程君は、淸廟の職に居るべき人柄で、今回天子の旌節を持して、瘴煙吹き迷ふ南海の邊を巡視され、蕭然たる寂しき埠頭に、萬斛の巨舟が横づけにされた。人人は噂して、漢廷の循吏の様な人が御出でに成つたといふが、その實、天は楚囚を活かさむが爲に、差し遣されたのである。そこで、惠然として、再び予を訪うて、十日も逗留されるのは、まことに樂しいことで、今から、御待受をして居ります。但だ恨むらくは、亭主に代つて、三人で打合せをする様な、賢しい我が妻が死んで、九泉の幽處に潛み、事ごとに不自由である。もし幸にして、萬里の旅路を一處に歸ることが出來たならば、男やもめ同士、相對して、畑を耕さうではないか。元來、無理に歌つて悟り顏をして居るのは、眞の達者ではなく、かの莊周の如き、何も必ずしも、師とするには及ばない。

【餘論】紀昀は「雖レ憤二筌然喜一を許して「二句、斡旋、轉た跡象を著く」といひ、又結末に近く「楊斂の事を用ふる、親切ならず」といつて居る。

正輔既見レ和、復次二前韻一、慰二鼓盆一、勸レ學レ佛

正輔、既に和せらる、復た前韻に次し、鼓盆を慰め、佛を學ばむことを勸む

稚川眞長生。少從二鄭公一游。　稚川、眞に長生、少にして鄭公に從つて游ぶ。

孝章(二)偶不死。免爲文學憂。
餘齡會有適。獨往豈(三)相攸。
由來警(四)露鶴。不羨撮(五)蚤鶹。
願加視(六)後鞭。同駕躅(七)空輴。
寧殘墮(八)齒董。勿憶齊(九)眉羞。
何時遂縱壑。歸路同(一〇)首邱。
東岡松柏老。西嶺橘柚秋。
著意尋彌(一一)明。長頸高結喉。
無心逐定(一二)遠。燕頷飛虎頭。
君方卒功名。一汎范(一三)蠡舟。
我亦霈(一四)濡渥。漸解鍾(一五)儀囚。
寧須張(一六)子房。萬戸自擇留。
猶勝嵆(一七)叔夜。孤憤甘長幽。
南窗可寄(一八)傲。北山早歸耰。

孝章、偶ま死せず、文學の憂となるを免る。
餘齡、會ま適するあり、獨往、豈に相攸せむや。
由來、露を警むるの鶴、蚤を撮るの鶹を羨まず。
願はくは、後るるを視るの鞭を加へ、同じく空を躅むの輴に駕せむ。
寧ろ齒を墮すの董を殘はむや、齊眉の羞を憶ふ勿れ。
何の時か、遂に壑を縱にし、歸路、首邱を同じうせむ。
東岡、松柏老い、西嶺、橘柚秋なり。
著意、彌明を尋ね、長頸高く、喉を結ぶ。
定遠を逐ふに心なく、燕頷、飛虎の頭。
君、方に功名を卒り、一たび汎ぶ范蠡の舟。
われ亦た霈渥に濡ひ、漸く鍾儀の囚を解かむ。
寧ろ須ひむや張子房、萬戸、自ら留を擇ぶを。
猶は勝る嵆叔夜、孤憤、長幽に甘んずるに。
南窗、寄傲すべく、北山、早く歸耰。

此語君勿疑。老(一九)彭跨商周。
この語、君、疑ふ勿れ、老彭、商周に跨る。

【字解】【一】 穎川　晉書に「葛洪、字は稚川、從祖玄、吳の時、道を學んで仙を得、その鍊丹の祕術を以て弟子鄭隱に授く。洪、隱に就いて學び、悉く其法を得たり」とある。【二】 孝章　盛憲、字は孝章、孔融、字は文擧の爲に救はれしこと、前に次韻林子中の詩中に注して置いた。【三】 豈相攸　詩經に爲韓姞所攸とあつて、その箋に「攸る所を相見るなり」とある。王注に此句を解して「興、適するところあるを以てして、獨り往く、豈に更に其處所を相見むや」とある。【四】 警露鶴　周處の風土記に「白鶴、性警、八月露降つて草葉の上に流れ、滴滴として聲あるに至れば鳴く」とある。【五】 撮蚤鶹　荘子に「鴟鵂、夜、蚤を撮り、毫末を察するも、晝出づれば、目を瞋して邱山を見ず」とある。【六】 視後鞭　後るるものに注目して打つ鞭、前に書孝牧園後の詩中に注して置いた。【七】 躅空輴　空中をかけ行く車。【八】 墮齒董　唐書張果傳に「帝、高力士に謂つて曰く、われ聞く、董を飲んで苦なきものは奇士なり、と。時に天寒、因つて取つて以て果に飲ましむ、三進、頽然として曰く、佳酒に非ざるなり、と。乃ち寢ぬ。しばらくして齒の燋縮するを見、左右を顧み、鐵如意を取つて、擊つて之を墮し、更に藥を出して、その斷に傅くれば、良や久しうして、齒、すでに生ず」とある。【九】 齊眉羞　孟光の故事、前に明日重九の詩中に注して置いた。羞は饈、卽ち食物。【一〇】 同首邱　禮記に「君子曰く、禮、その本を忘れず、狐、死して正しく首を邱にするは仁なり」とある。【一一】 彌明　軒轅彌明。韓愈の石鼎聯句の序に「侯喜、新に能詩の聲あり、夜、劉と詩を說く。彌明、その側に在り、長頸にして高く喉を結ぶ、中文楚語を作す、喜、これを視れば、人なきが若し」とある。【一二】 定遠　班超、定遠侯に封ぜらる。前に聞喬太博換左藏の詩中に注して置いた。【一三】 范蠡舟　史記に「范蠡、すでに會稽の恥を雪ぎ、乃ち喟然として歎じて曰く、計然の策、すでに已に國に施す、吾、これを家に用ひむと欲す、と。乃ち扁舟に乘じて江湖に游ぶ」とある。【一四】 霈渥　恩澤に同じ。【一五】 鍾儀囚　前に陳州與文郎飲別の詩中に注して置いた。【一六】 張子房　卽ち張良、漢書に「高祖、自ら齊の三萬戸を擇び、以て張良を封ぜむと欲す。良曰く、はじめ、臣、下邳に起り、上と留に會す。臣、願はくは、留に封ぜらるれば足れり」とある。【一七】 嵆叔夜　卽ち嵆康、獄に下つて幽憤の詩を作つた。【一八】 寄傲　陶淵明の歸去來辭に見え、前に與趙陟同過歐陽の詩中に注して置いた。【一九】 老彭　世本に「彭祖、商に在つては守藏史たり、周に在つては柱下史たり、

年八百餘」とあり、神仙傳に「彭祖壽八百、三代を閲たり」とある。

【題義】前の詩を程正輔に贈つた處が、正輔は直に之に和した。そこで、東坡は、再び前韻に次し、正輔が妻を喪つたことを慰め、且つ佛を學ばむことを勸めたのである。

【詩意】むかし、葛稚川は、長生の道を得たが、その少時、鄭隱に從つて道を學んだのであるし、盛孝章は、偶然にも死を免れ、再び孔文擧の憂となることを免れた。予と正輔との關係も、丁度かくの如く、少時は、隨分、その世話に成り、官に任じた後も、數ば正輔の救助を得たのである。予は、ここに餘生を樂み、悠悠自適して居て、氣が向けば、獨りで出かけて、人の事には、あまり關係しない。元來、露を警む高天の鶴は、夜、蚤を取る梟を羨まぬもので、予は、全く世人と趣向を異にして居る。そこで、後れ勝なれば、鞭を加へて與れれば善いので、出來得べくんば、中天を走る車に乘じて、飛行自在になりたいと思つて居る。齒を落す樣な烏頭の毒は、決して食はぬが善いが、妻君が膳を眉に齊しく差し上げて薦めるのを今更思つた處で、死んだものは仕方がない。いつかは、魚が放たれて一壑を縱にするが如く、貶謫より赦され、歸路をたどつた後は、君と共に、首邱の義を守つて、その本を忘れぬ樣にしたい。東岡には松柏年古りて生ひ茂り、西嶺には橘柚熟する樣な處が、隱居には相應しく、注意して、軒轅彌明の如き道士を尋ねたいが、その人は、頸が長く、喉の骨が高く突出して居るから、直に分かる。もう老年になつては、燕頷虎頭、飛んで肉を食ふといふのが封侯の相だといはれた班超が、果然、定遠侯に封ぜられたのを眞似やうと思ふ心もない。君は、今しも、功名を終つたのであるから、これから、范蠡の如く舟を泛べて去るが善いので、我も亦た恩澤に霑うて、南冠を戴ける鍾儀の囚を赦されたならば、上述の事も、必ず實現されるであらう。むかし、張子房は、齊の三萬戸に替へて、自ら留の地を擇んだが、予には、そんな希望は、毛頭なく、唯だ嵇康の如く、いつまでも獄中に居て、幽憤の詩を作る樣なことの無いのを、まだしも勝つて居ると思つて居る。南窓に倚つて、傲然と構へるのは、まことに暢氣であるし、早く北山に歸つて躬耕したい。さうすると、かの老彭が八百歳の長壽を得、商周二代に跨つて生存して居た樣に、屹度成れるに相違なく、君は、決して、この語を疑つてはならぬ。

【餘論】紀昀は「牽獨の跡を免れず、古人の名を用ふる、亦た太だ多し」といつて居る。

同正輔表兄游白水山　正輔表兄と同じく白水山に游ぶ

偉哉造物眞豪縱。　偉なるかな、造物、眞に豪縱、
攫土摶沙爲此弄。　土を攫み、沙を摶して、この弄を爲す。
劈開翠峽走雲雷。　翠峽を劈開して雲雷を走らしめ、
截破奔流作潭洞。　奔流を截破して潭洞となす。

【字解】【一】化人　仙人に同じ、前に甘露寺の詩中に注して置いた。【二】巨跡　大きな足跡、前に佛跡の詩中に注して置いた。【三】飛鞚　鞚はくつわ。【四】救霜葉　この救の字は一寸無理の樣だが、韓愈

因隨化人(一)履巨跡(二)。　因つて、化人に隨つて巨跡を履み、
得與仙兄躡飛輕(三)。　仙兄と飛輕を躡むを得たり。
曳杖不知巖谷深。　杖を曳いて、知らず巖谷の深きを、
穿雲但覺衣裘重。　雲を穿つて、但だ覺ゆ衣裘の重きを。
坐看驚鳥救(四)霜葉。　坐に看る、驚鳥の霜葉を救ふを、
知有老蛟蟠石甕。　知る、老蛟の石甕に蟠するあるを。
金沙玉礫粲可數。　金沙玉礫、粲として數ふべし、
古鏡寶奩寒不動。　古鏡寶奩、寒、動かす。
念兄獨立與世疎。　念ふ、兄が獨立、世と疎なるを、
絕境難到惟我共。　絕境、到り難く、惟だ我と共にす。
永辭角上兩蠻觸(五)。　永く辭す、角上の兩蠻觸、
一洗胸中九雲夢(六)。　一洗す胸中の九雲夢。
浮來山(七)高回望失。　浮來山は高く、回望失し、
武陵路絕無人送。　武陵、路絕えて、人の送るなし。

の林村有二脫葉一、欲レ隨鳥驚救に本づいたのである。【五】蠻觸　前に眞公濟和の詩中に注して置いた。【六】九雲夢　前に司竹監の詩中に注して置いた。【七】浮來山　羅浮山を指して云ふ、前に白水山の詩中に注して置いた。【八】筠籃　竹製の籠。【九】素綆　粗朴な綱。

筠籃(八)擷翠爪甲香。　筠籃、翠を擷して爪甲香しく、
素綆(九)分碧銀缾凍。　素綆、碧を分つて銀缾凍る。
歸路霏霏湯谷暗。　歸路、霏霏として、湯谷暗く、
野堂活活神泉湧。　野堂、活活として、神泉湧く。
解衣浴此無垢人。　衣を解いて、この無垢の人を浴す、
身輕可試雲間鳳。　身輕く、試むべし雲間の鳳。

【題義】この詩は、程正輔と共に白水山に游んで作つたのである。白鶴故居圖に「白水山は羅浮山の西、瀑布懸る」とある。

【詩意】造物主の豪快放縱を極むることは、まことに偉なりと稱すべく、土を攫み、沙を丸めて、戲にこの谿山を造り上げた。一條の瀑布は、翠色深き急峽を劈き開いて、雲雷を走らしめ、そして、奔流を立ち截つて、深い潭洞を湛へた。予等二人、仙人に案內されて、石上に殘れる佛跡を履み、そして仙人仲間と一緒に、馬を飛ばす樣に、さッさと、その地に躡み入ることが出來た。杖を曳いて、段段山に入ると、巖谷の深さをも知らず、雲中を穿ち行けば、唯だ衣裘の溼うて重くなつたことを覺ゆるのみである。霜を帶びた木の葉が落ちると、鳥は驚いて之を救はむとする風情があるし、下を窺へば、石が甕の樣になつた深淵に老蛟が蟠まつて居る。水底の沙礫は、金玉の如く、粲然として一一數

ふべく、淵は箱を開いて古い鏡が出た樣で、極めて寒げに見えて、少しも動かない。君は、超然獨立、この世とは疎濶で、もと俗人ではないが、かういふ絶境には、仲仲到り難く、そこで、予と共に來たのである。されば、蠻觸二國が蝸牛角上で爭ふが如き世上の紛鬪は、斷然止めて仕舞ひ、雲夢八九を呑んで悶へて居る胸を一洗するが善い。羅浮山は高けれども、顧みれば、いつしか見失ひ、たとへば、武陵の路絶えて、誰も迷る人の無い樣である。竹籠を持つて來て、草を摘めば、爪の甲までも香ばしく、粗末な綱で碧流を汲めば、極めて冷たくて、銀瓶も凍るばかり。歸路は、蒸氣霏霏として暗き湯谷の中をたどり行くと、一寸した小屋がけの中に、靈泉が活活として湧き出て居る。ここで衣を解いて、無垢の軀を浴すれば、愈よ身が輕くなつて、雲間の鳳の如く、中空を自由に飛び行くことが出來るであらう。

【餘論】乾隆御批に「直に瀑布の發する處より、波平かに水靜かなるに寫し到り、前の佛跡巖の詩と別に是れ一般の境象、游跡同じからず、詩亦た隨つて異なり。知るべし、絶唱高蹤、强ひて索むるに由つて得ざるを」とあり。紀昀は「筆筆奇矯」といつて居る。

與正輔游香積寺　正輔と香積寺に游ぶ

越山少松竹。常苦野火厄。　越山、松竹少し、常に苦む野火の厄。
此峰獨蒼然。感荷佛祖力。　この峰、ひとり蒼然、感荷す佛祖の力。
茯苓無人采。千歲化琥珀。　茯苓、人の采るなく、千歲、琥珀に化す。
幽光發中夜。見者惟木客。　幽光、中夜に發し、見るものは惟だ木客。
我豈無長鑱。眞贋苦難識。　われ豈に長鑱なからむや、眞贋、識り難きに苦む。
靈苗與毒草。疑似在毫髮。　靈苗と毒草と、疑似、毫髮に在り。
把玩竟不食。棄置長太息。　把玩、竟に食はず、棄置して長く太息。
山僧類有道。辛苦嘗谷汲。　山僧、有道に類す、辛苦、かつて谷汲。
我慚作機春。鑿破混沌穴。　われは機春を作すを慚づ、鑿破す混沌の穴。
幽尋恐不繼。書板記歲月。　幽尋、恐らくは繼がず、板に書して歲月を記す。

【字解】〔一〕越山　越は南海地方。〔二〕長鑱　長い鋤。〔三〕機春　水を溜めて碓磨を動かすこと。〔四〕混沌穴　前に次韻秦太虛見戲の詩中に注して置いた。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】南方越地の山には松竹が少いが、そは、毎毎野火の害を被るからである。しかし、この山だけは、ひとり蒼然として居て、全く佛祖の力を有り難く荷つて居るからであらう。松の根に生ずる茯苓

は、誰も採る人がないから、千歳の後、化して琥珀となり、夜半に幽けき光を放つて居るが、これを見たものは、唯だ木客のみである。予は、長い鋤を持つて居るが、眞贋を判別し兼ねて、まことに閉口至極。元來、靈苗と毒草とは、全く善く類似して居て、どうかと思ふ點は、毫髮の如き微細な處に在るのである。そこで、いぢくツた揭句、遂に食はず、その儘、棄てて仕舞つてから、長い溜息をした。山僧は、有道の人らしく、骨を折つて、毎毎、谷底の水を汲み上げて來る。これを見ると、水を溜めて碓磨を作ることは、自然に背いて、混沌の穴を鑿破すると同じく、まことに愧づべきことが分つた。この幽處を尋ねることは、多分繼いで爲し難く、そこで、板の上に名を題し、且つ歲月を志し、いささか他日の記念とする次第である。

【餘論】乾隆御批に「眞贋疑似の辨じ難き、偶ま采藥を借りて長歎を發す、その人を感ずるもの微なり」とあり、紀昀は、全篇を評して「頗る古意あり」といひ、又「末二句、上文と甚だ貫かず、遂に草草收束して住まらざるを覺ゆ」といつて居る。

次韻正輔同游白水山　正輔の同じく白水山に游ぶに次韻す

祇知楚越爲天涯。　祇だ知る楚越の天涯たるを、
不知肝膽非一家。　知らず肝膽の一家に非ざるを。

此身如綫自縈繞。　この身、綫の如く、自ら縈繞、
左旋右轉隨繅車。(一)　左旋右轉、繅車に隨ふ。
誤拋山林入朝市。　誤つて、山林を拋つて朝市に入れば、
平地咫尺千褒斜。(二)　平地咫尺、千褒斜。
欲從稚川隱羅浮。　稚川に從つて、羅浮に隱れむと欲し、
先與靈運開永嘉。(三)　先づ靈運の與に永嘉を開く。
首參虞舜款韶石。(四)　首に虞舜に參して韶石を款き、
次謁六祖登南華。(五)　次に六祖に謁して南華に登る。
仙山一見五色羽。(六)　仙山、一見す五色の羽、
雪樹再摘南枝花。　雪樹、再び摘む南枝の花。
赤魚白蟹箸屢下。　赤魚白蟹、箸、屢ば下し、
黃柑綠橘籩常加。(七)　黃柑綠橘、籩、常に加はる。
糖霜不待蜀客寄。(八)　糖霜、待たず蜀客の寄するを、
荔支莫信閩人誇。　荔支、信ずる莫れ閩人の誇るを。

【字解】【一】繅車　絲を繰る車。【二】褒斜　王註に「梁州記、萬古城より、漢上を泝ること七里、褒谷口あり、南口を褒といひ、北口を斜といふ」。白樂天の詩に云ふ、「蜜割平谷險、梁ゞ足銅褒斜」とある。【三】靈運　南史に「謝靈運、永嘉の守となる、名山水あり、意を肆にして遊遨す。かつて、始寧の南山より、木を伐り、徑を開いて、直に臨海に至る」とある。【四】韶石　前に宿ニ建封亭ーの詩中に注して置いた。【五】六祖　前に南華寺の詩中に注して置いた。【六】五色羽　卽ち五色の雀、前に次ニ韻欽長老ーの詩中に注して置いた。【七】籩　竹で造つたたかつき、祭祀燕享に用ふ。【八】糖霜　砂糖の類、前に送ニ金山鄉僧ーの詩中に注して置いた。【九】白蜜收五稜　馮應榴の案に「本草、五斂子、五稜子と名づく、又陽桃と名づく、李時珍の註、南人稜を呼んで斂となす。五斂子は、嶺南及び閩中に出づ、その

恣傾(九)白蜜收五稜。　恣に白蜜を傾けて五稜を收め、
細劚黃土栽三椏(一〇)。　細に黃土を劚りて三椏を栽う。
(一一)朱明洞裏得靈草。　朱明洞裏、靈草を得たり、
翩然放杖凌蒼霞。　翩然、杖を放つて蒼霞を淩ぐ。
豈無軒車駕熟鹿。　豈に軒車の熟鹿に駕するなからむや、
亦有(一二)鼓吹號寒蛙。　亦た鼓吹の寒蛙と號するあり。
山人勸酒(一三)不用勺。　山人、酒を勸めて勺を用ひず、
石上自有尊罍窪。　石上、自ら尊罍の窪めるあり。
徑從此路朝玉闕。　徑に此路より玉闕に朝し、
千里莫遣毫釐差。　千里、毫釐をして差はしむる莫れ。
故人日夜望我歸。　故人、日夜、わが歸るを望み、
相迎欲到(一四)長風沙。　相迎へて、到らむと欲す長風沙。
豈知乘(一五)槎天女側。　豈に知らむや、槎に乘ず天女の側、
獨倚雲機看織紗。　獨り雲機に倚つて紗を織るを看る。

味、初め酸、蜜を以て之を漬ければ、甘酢にして美」とある。【一〇】 三椏　人參、東坡の自註に「正輔、人參一苗を分つ、歸つて韶陽に種う。來詩、木と椏の字を用ふ。惠州書なし、この字の出づるところを見ず、故に木に從つて奉和す」とある。【一一】 朱明洞　前に「游羅浮山」の詩中に注して置いた。【一二】 鼓吹　前に「次韻述古夜飲」の詩中に注して置いた。【一三】 不用勺　勺は栝杓。【一四】 長風沙　李白の長干行に「相迎不道遠、直到長風沙」とあつて、長干より遙か上流の江上に在る。【一五】 乘槎　博物志に「天河、海と通ず、海島に居るものあり、毎年、槎を浮ぶるを見る、來往期を失はず、人、これを異み、遂に糧を齎し、槎に乘じて、忽ち一處に至り、宮中、織婦多きを望み、俄にして、一丈夫、牛を渚

世間誰似老兄弟。　世間、誰か似む老兄弟、
篤愛不復相疵瑕。　篤愛、復た相疵瑕せず。
相攜行到水窮處。　相攜へて、行く〳〵到る水の窮まる處、
庶幾一見留子嗟。　庶幾はくは、一見、子を留めて嗟せしめむ。
(一六)千年枸杞常夜吠。　千年の枸杞、常に夜吠え、
無數草棘工藏遮。　無數の草棘、工に藏遮。
但令凡心一洗濯。　但だ凡心をして一たび洗濯せしむ、
神人仙藥不我遐。　神人仙藥、我に遐からず。
山中歸來萬想滅。　山中歸來、萬想滅し、
豈復回顧雙雲鴉(一七)。　豈に復た回顧せむや雙雲鴉。

【詩意】 從來、楚越は天涯だといふことだけを知つて居たが、身は今越南の南に居る、そして、肝膽と雖も、一家に非ざることを知らなかつたが、時に反目して身體の調和を缺くことを頃ろ體驗した。この身は絲の如く、自ら縈繞し、それを繰る車のまにまに、左右に旋轉する。誤つて山林を拋つて朝市に入つてより、平地咫尺の間に、褒斜の險が幾つもあつて、仲仲、これを度り行くことが出來ない。

次に牽いて之に飲ましむるを見る。後、復た返つて蜀に至り、嚴君平に問ふ、君平曰く、某年月日、客星あり、牛宿を犯す、と。年月を討ぬるに、正に是れ、此人天河に至るの時なり」とある。【一六】 千年枸杞　前に「次韻飲長老」の詩中に注して置いた。【一七】 雲鴉　雲髪鴉鬢の義、卽ち美人。

そこで、葛稚川の如き仙人に從つて、羅浮に隱れむとし、謝靈運に比すべき我が表兄の爲に、永嘉ならぬこの惠州を開いて、路案內をすることになつた。第一に、虞舜に參して、韶石山を訪ひ、次に六祖に禮拜せむが爲に、南華寺に登つた。仙山に於て五色の雀を見たことは、唯だ一度であるが、雪の如き梅が咲いて、南枝の花を摘むことは、すでに二回。赤魚白蟹など、珍らしい肴にも、數ば箸を下し、黃柑綠橘は、每每、皿に滿ちて居る。ここにも糖霜があつて、蜀客の寄贈を待たず、荔支の佳味さへ閩人の誇るを信用せぬ位。それから、蜜を注ぎかけて楊桃の實を食ひ、又黃土を鋤きかへして、人參の苗を植ゑた。朱明洞中に靈草を得たから、これを餐すれば、飄然として、杖を投げ出したまま、蒼霞を淩いで空中を飛行することが出來るであらう。大きな車を曳かせる爲には、馴れた鹿も居るし、寒蛙は、例の如く、鼓吹に當つべく、山人は、酒を勸めるにも、桮杓を用ひず、石の面が自然窪んで居るから、罇罍に代用することが出來る。そこで、この路より、直に天上の玉闕に朝すべく、毫釐の差は、千里の謬を生ずるが故に、さツさと立ち去らねばならぬ。わが知人どもは、そんな事とは知らず、日夜、わが歸るを望んで、長風沙までも、出迎へに來やうとして居るが、われは、槎に乘じて銀河を溯り、やがて織女の側に至り、機に倚りかかつて、その紗を織るのを眺めて居やうと思ふ位。世間の廣きも、わが老兄弟の如く親密なるものはなく、篤く愛して、惡口などは互に言はぬことにし、そこで、相攜へて、溪水の窮まる源頭に至り、一見して、あツと言はせる程の佳景を見せて遣りたいと思つて居る。千年を經た枸杞の根は、化して狗となり、そして、夜常に吠え、無數の草や棘の間に、巧に其身を隱して居る。ただ凡心を一度洗濯して仕舞へば、神人の仙藥も、われを去ること、決して遠からず、容易に手に入れることが出來る。かくて、山中に入らば、萬の塵念は盡く灰滅し、お互に、昨今妻に死なれたものの、頭を回らして、雲鬟鴉鬢の女に見惚れる樣なことは決して無からう。

【餘論】乾隆御批に「白水を離却して、別に虛空縹緲の想を作す、層巒疊浪、輿會淋漓、屈子遠游の遺なり」といひ、紀昀は末段を許して「この處、程を入る、太だ自然ならず、龍脚に牽かるるが故なり、然れども、此は是れ叱緊の處、此處一も勢を得ず、遂に全篇をして色を削らしむ」といつて居る。

次韻程正輔游碧落洞

程正輔の碧落洞に游ぶに次韻す

空山不難到、絕境未易名。
空山、到り難からず、絕境、未だ名づけ易からず。

何時謫（一）仙人、來作鈞（二）天聲。
何の時か、謫仙人、來つて鈞天の聲を作す。

胸中幾（三）雲夢、餘地多恢宏。
胸中幾雲夢、餘地、恢宏多し。

（四）長庚與北斗、錯落綴冠纓。
長庚と北斗と、錯落、冠纓を綴る。

（五）黃公獻（六）紫芝、（七）赤松餽（八）青精。
黃公、紫芝を獻じ、赤松、青精を餽る。

溪山久寂寞、請續離騷經。
溪山、久しく寂寞、請ふ離騷經を續がむ。

抱枝寒蜩咽。繞耳飛蚊清。　枝を抱いて寒蜩咽び、耳を繞つて飛蚊清し。

謫仙撫掌笑。笑此羽皇銘。(九)　謫仙、掌を撫して笑ひ、この羽皇の銘を笑ふ。

我頃嘗獨游。自適孤雲情。　われ頃ろ嘗て獨游、自ら適す孤雲の情。

君今又繼往。霧雨愁青冥。　君、今又繼いで往く、霧雨、青冥を愁ふ。

感君兄弟意。尋羊問初平。(一〇)　君が兄弟の意に感じ、羊を尋ねて初平に問ふ。

玉牀(一一)分箭鏃。不忍獨長生。　玉牀、箭鏃を分ち、獨り長生するに忍びず。

詩成輒寄我。妙絕陶謝幷。　詩成つて輒ち我に寄す、妙絕、陶謝幷す。

孤鴻方避弋。老驥猶在坰。(一二)　孤鴻、方に弋を避け、老驥、猶ほ坰に在り。

鳥獸如可羣。永寄槁木形。　鳥獸、羣すべきが如し、永く寄す槁木の形。

何山不堪隱。飮水自修齡。　何の山か隱るるに堪へざらむ、水を飮んで自ら齡を修くす。

【字解】【一】謫仙人　李白を云ふ、前に讀杜詩の詩中に注して置いた。【三】鈞天樂　鈞天は天上、前に水樂亭の詩中に注して置いた。【三】幾雲參　前に司竹監の詩中に注して置いた。【四】長庚　卽ち太白星。【五】黃公　四皓の一、夏黃公。【六】紫芝　四皓の作に紫芝歌がある。本草に「紫芝は味甘温、神を保ち、精氣を益し、久しく服すれば、身を輕くして老いず」とある。【七】赤松　赤松子の略。【八】青精　南天飯、南天の汁を交ぜて炊いた飯。【九】羽皇銘　查註に「唐の周燮、字は羽皇、かつて碧落洞に遊び、銘篇を作る。公の詩、正に此事を用ふ」とある。【一〇】初平　卽ち黃初平、前に和子由送將官の詩中に注して置いた。【一一】玉牀分箭鏃　前に贈張師正所蓄辰沙の詩中に注して置いた。【一二】在坰　坰は郊外。

【題義】說明に及ばぬ。碧落洞は、東坡が既に游んで、前に其詩があつた。

【詩意】空山の奧は、到り難い譯でもないが、この世を懸け離れたる絕境は、名を付けることが容易でない。何時か知らぬが、謫仙人の李白が此に來て、鈞天の樂を奏したといふので、今でも、洞中、時に其聲を聞くことがある。胸中、すでに、幾雲參を吞んだが、餘地は、なほ廣く、山水の氣を吸ふ爲に、そこに游びに往くと、太白と北斗とは、錯落として冠の紐を綴り、我ながら、登仙した樣な心持。すると、四皓の一人なる夏黃公は、紫芝を獻じ、赤松子は、青精飯を送つて具れる。溪山久しく寂寞として、誰も之を賦詠するものがないから、せめては、珍らしい花草を拾ひ出して、屈原の離騷に續がうと思つて居る。寒蟬は枝を抱いて咽び、飛蚊は耳を繞つて、その聲、却つて淸く聞こえる。すると、謫仙は、手を拍つて笑ひ、むかし、周燮、字は羽皇といふものが到難篇を作つて、石に銘する考であつたらうが、あまり傑作でもない、そんな物では仕方がないといつて笑つた。予も、頃ろ獨り此地に游び、孤雲の情を縱にして、優游自適した。今や、君も繼いで往かれたが、霧の如き雨は、しぶきかかつて、青天愁ふるが如く、十分の眺を爲さざりしは、遺憾の至である。君が兄弟の樣な厚意を寄せ、羊を尋ねて、黃初平は如何して居るかと問うて見られ、辰砂は石牀の上に在つて、箭鏃の形をして居て、これを服するは善いが、ひとり長生した處で仕方がないと云はれる。そこで、詩成つ

て予に寄せられたが、その絶妙なることは、陶淵明・謝靈運、二人の所長を併せた樣で、しばらく、郊外に居る。この浮世に交つては、到底、受け付けられないが、鳥獸と共に羣を作ることが出來るならば、枯木の樣な此形骸を寄せたいと思ふ。どこの山でも、隨分隱れることが出來るので、予は、水を飲み、自然、齡を長くして仙人に成りたいと思つて居る。

次韻正輔表兄江行見桃花　　正輔表兄の江行桃花を見るに次韻す

(一)曲士賦懷沙。草木傷莽莽。　曲士、懷沙を賦し、草木、莽莽を傷む。
德人無荊棘。坐失嶺嶠阻。　德人、荊棘なく、坐に嶺嶠の阻を失ふ。
我兄(二)瑚璉姿。流落瘴江浦。　わが兄、瑚璉の姿、流落す瘴江の浦。
淨眼見桃花。紛紛墮紅雨。　淨眼、桃花を見る、紛紛として紅雨を墮つ。
蕭然振(三)衣裓。笑問散花女。　蕭然として衣裓を振ひ、笑つて問ふ散花の女。
我觀解語花。粉色(四)如黃土。　われ、解語の花を觀るも、粉色、黃土の如し。
一言破千偈。況爾(五)初不語。　一言、千偈を破る、況んや、爾、初めより語らざるをや。
可憐一轉話。他日如何擧。　憐むべし、一轉話、他日、如何が擧げむ。
故復此微吟。聊和(六)鳴鴉櫓。　故らに復た此に微吟、聊か鳴鴉の櫓に和す。
江邊閒草木。閒客當爲主。　江邊の閒草木、閒客、當に主となるべし。
爾來子美瘦。正坐作詩苦。　爾來、子美の瘦、正に詩を作るの苦なるに坐す。
袖手焚筆研。清篇眞(七)漫興。　手を袖にして筆研を焚く、清篇、眞に漫興。
願君理北轅。六轡去如組。　願はくは、君、北轅を理め、六轡、去つて組の如し。
上林桃花開。水暖鴻北翥。　上林、桃花開く、水暖にして、鴻、北に翥る。

【字解】【一】曲士　屈原を云ふ。史記に「屈平、すでに絀けられ、乃ち懷沙の賦を作る」とあつて、その辭に陶陶孟夏兮草木莽莽、傷懷永哀兮汨徂南土とある。【二】瑚璉　論語に、孔子が子貢を評して「汝は器なり」といひ「瑚璉なり」といはれたことが記してある。【三】衣裓　形、函の如くにして、一の足あり、花を盛りて佛に捧ぐる具。【四】如黃土　全然價値なきを云ふ。【五】初不語　「桃李言はず」及び息夫人が絶えて口を開かず、死後、桃花夫人と稱せられしことを暗用す。【六】鳴鴉　嘔啞に同じ、櫓聲を云ふ。【七】漫興　杜甫の詩に老去詩篇渾漫興とあつて、すべて不用意なるを云ふ。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】むかし、一曲の士たる屈原は、懷沙の賦を作つて、夏の初、草木の莽莽たるを傷んだが、德人の胸中には荊棘なく、嶺嶠の行く手を隔つるも、全く意に介することがない。わが兄の程正輔は、

天晴、瑚璉の器に比すべき風姿を持つて居ながら、瘴氣立ち迷ふ江浦に流落し、淨い眼で桃花を見ると、落英紛紛として、紅雨の落つる樣である。そこで、蕭然として佛前に供へてある花いけを振ひ、笑ひながら、散花の天女に問はむとした。われ、解語の花と稱する美人どもを見るに、おしろいの色は、黃土の如く、丸で價値が無い。わが一言は、以て千偈を破るに足るべく、まして、汝、桃花は、初めより、物言はず、とても、予に敵することは出來ない。しかし、この一段の話は、まことに詰まらぬことで、他日、如何にして之を擧げやうか、程なく、忘れられて仕舞ふのは、勿論のことである。そこで、わざと再び微吟して、いささか、江上を通る櫓聲に和するのである。江邊には、不用の草木が多く、これに對しては、閒客、宜しく其主となるべく、まことに、よく似合つて居る。元來、杜子美の痩せて居るのは、平生、あまり苦吟するからで、予も亦た其通り。しかし、君の詩が不用意の間に成つて、淸篇を以て稱すべきを見ては、手を袖にし、はては筆硯を焚く外はない。願はくは、君よ、早く北歸の車を整へ、六つの手綱を組み絲の如く手に卷いて、急いで行くが善いので、今しも、御苑の桃花が丁度盛りで、春の水もぬるみ、雁は北に向つて歸り行く頃である。君の才ありながら、區區として、こんな田舍の花を詠ずるのは、まことに惜しいことである。

【餘論】紀昀は、起首を評して「語意洒然、禪偈に同じからず」といひ、故復此微吟、聊和嘔鴉櫓に就いては「和意を淸出す、轉轉利便」といひ、最後に「結、稍や應酬に落つ」といつて居る。

追餞正輔表兄至博羅賦詩爲別

正輔表兄を追餞して博羅に至り、詩を賦して別を爲す

(一)孤臣南游墮(二)黃菅。　孤臣、南游して黃菅に墮つ、
君亦何事來牧蠻。　君、亦た何事ぞ、來つて蠻を牧す。
艤舟蜑戶(三)龍岡窟。　舟を艤す、蜑戶・龍岡の窟、
置酒椰葉桄榔間。　酒を置く、椰葉・桄榔の間。
高談已笑衰語陋。　高談、すでに笑ふ衰語の陋なるを、
傑句尤覺淸詩孱。　傑句、尤も覺ゆ淸詩の孱なるを。
(四)博羅小縣僧舍古。　博羅の小縣、僧舍古く、
我不忍去君忘還。　われ去るに忍びず、君、還るを忘る。
君應回望秦與楚。　君、應に回望すべし、秦と楚と、
夢涉漢水愁秦關。　夢に漢水を涉つて秦關を愁ふ。
我亦坐念(五)高安客。　われ亦た坐に念ふ高安の客、
神游(六)黃蘗參(七)洞山。　神は黃蘗に游んで洞山に參す。

【字解】【一】孤臣　東坡自ら謂ふ。【二】黃菅　卽ち黃茅。【三】龍岡　地名、一統志に「惠州に龍岡あり、長樂に在り」と見ゆ。【四】博羅　名勝志に「博羅縣に泊頭墟あり、羅浮を距つること十五里。廣惠二州の舟楫、及び陸路より至るもの、皆ここに于て岸に登る、舊と圓照堂あり、山僧、以て游客を主る」とある。【五】高安客　高安は筠州、時に子由は南京に分司として筠州に住んで居た。【六】黃蘗　筠州に在る大木山。【七】洞山　卽ち良价禪師、傳燈錄に見ゆ。【八】曠蕩　赦恩を蒙つて自由になることを云ふ。【九】髻鬟　山を譬へて云ふ。【一〇】膠嶺　同上。【一一】玉牀丹竈　本草

何時曠(八)蕩洗瑕垢。　何の時か、曠蕩、瑕垢を洗ひ、
與君歸駕相追攀。　君と駕を歸して相追攀。
梨花寒食隔江路。　梨花寒食、隔江の路、
兩山遙對雙煙(九)鬟。　兩山、遙に對す雙煙鬟。
歸耕不用一錢物。　歸耕、用ひず一錢の物、
惟要兩脚飛孱(一〇)顏。　惟だ兩脚、孱顏に飛ぶを要す。
(一一)玉牀丹鏃記分我。　玉牀の丹鏃、記して我に分ち、
助我金(一二)鼎光爛斑。　我が金鼎の光爛斑たるを助けよ。

【題義】この詩は、程正輔が出立した後を追ッかけ、餞別の意を表せむが爲に、博羅縣に至り、そこで、賦して贈り、愈よ手を分つたのである。

【詩意】予は、孤臣を以て南に遷謫して、黃茅の茂れる間に住んで居るが、君も亦如何なる故で、ここに來て、蠻人を牧御したのであるか。君は、舟を蜑人の羣れ住む龍岡の下に用意して、今や將に出發せむとし、仍つて、椰子の葉や檳榔の繁き間に於て、別筵を開いた。高談の最中、わが褻語の賤しきを愧ぢ、君の詩は、傑句に富み、その體は、特に淸孱なるを覺えた。ここ博羅の小縣に於て、圓照堂は、すでに年古りて、まことに寂しいけれども、われは、去るに忍びず、君も亦た還るを忘れて、しばらく踟躕して居る。君は、これから行く秦楚の方を回望されるであらうが、早くも、夢に漢水を渉つて、秦關の風物、愁ふるが如きを見ては、流石に、感慨に堪へられぬであらう。われも、亦た高安に居る弟を思ひ出で、神魂は黃蘗の本山に遊んで、洞山の良玠禪師の下に參禪した。いつに成つたら、恩赦を蒙つて、罪科を洗ひ去り、君と共に、駕を促して北に歸り、互に追隨することが出來るであらうか。今しも、梨の花咲く寒食の時節で、對岸には、驛路斜に通じ、そして、兩山遙に相對して、煙れる雙鬟を峙てた樣である。予が歸耕するには、一錢の物だに不必要で、唯だ兩脚に山の孱顏を蹴飛ばして、早く鄕里に行きさへすれば善い。その後は、心のどかに仙術を修行する積りであるから、忘れずに、かの石牀に產する箭鏃狀の辰砂を分けて吳れ、わが金鼎の光爛斑たるを助けて、その材料とせられむことを希望する。

【餘論】紀昀は「氣機、自ら暢ぶ」といつて居る。

再用前韻　再び前韻を用ふ

(一)樂天雙鬢如霜菅。　樂天の雙鬢、霜菅の如く、
始知謝遣素(二)與蠻。　はじめて知る、素と蠻とを謝遣せしを。

圖經に「丹砂は、辰州の者、最も勝る。深山石崖の間に生ず、土人、これを采るや、地に穴すること數十丈、はじめて苗を見る、乃ち白石のみ、これを朱砂といふ。辰砂は、石上に生じて、箭鏃の若し、紫翳瑩にして光明瑩徹なるものは、眞の辰砂なり」とある。〔一二〕金鼎　鉛を鍊つて丹を造る鼎。

【字解】〔一〕樂天　白居易の字。〔二〕素與蠻　樊素・小蠻、前に和蔡郎中、及び海州石室の諸詩中に注し

我兄綠髮蔚如故。
已了夢幻齊人間。
蛾眉勸酒聊爾耳。
(三)處仲太忍茂宏孱。
三杯徑醉便歸臥。
海上知復幾往還。
連娟(四)六幺趁蹋踘。
杳渺三疊縈陽關。
酒醒夢斷何所有。
落花流水空青山。
忽驚鐃鼓發半夜。
明月不許幽人攀。
贈行無物惟一語。
莫遣瘴霧侵雲鬟。

わが兄、綠髮、蔚として故の如く、
すでに夢幻を了して人間を齊しうす。
蛾眉、酒を勸む、聊か爾るのみ、
處仲は太だ忍、茂宏は孱。
三杯、徑に醉うて、便ち歸臥、
海上、知る復た幾たびか往還せしを。
連娟、六幺、蹋踘に趁き、
杳渺、三疊、陽關を縈る。
酒醒め、夢斷え、何の有るところ、
落花、流水、空しく青山。
忽ち驚く、鐃鼓の半夜に發するを、
明月許さず、幽人の攀づるを。
行を贈るに物なく、惟だ一語、
瘴霧をして雲鬟を侵さしむる莫れ。

て置いた。【三】處仲　晉書に「王敦、字は處仲、王導、字は茂弘。王愷、美人をして酒を行らさしめ、客、飲んで盡さざれば、輙ち之を殺す。導、素より飲む能はず、酒を行らす者の罪を得むことを恐れ、遂に勉強して觴を盡す」とある。【四】六幺趁蹋踘　王註に「蹋踘の字は晉書傳に出づ、今の蹴踘なり、六幺に於て之を言ふ、すなはち、舞に蹴踘六幺あるなり」とある。【五】傾蓋　前に和邵同年の詩中に注して置いた。【六】香案吏　天上の仙吏、前に送穆越州の詩中に注して置いた。【七】蓬萊班　仙人の班列。

羅浮道人一(五)傾蓋。
欲繫白日留君顏。
應知我是(六)香案吏。
他年許綴(七)蓬萊班。

羅浮の道人、一たび蓋を傾け、
白日を繫いで君の顏を留めむと欲す。
應に知るべし、我は是れ香案の吏、
他年、綴るを許す蓬萊の班。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】白樂天の雙鬢が俄に白く、丁度、霜を帶びた茅の樣に成つたのは、何故かといふに、樊素・小蠻といふ兩家妓に暇を吳れて遣つて、獨り寂しく居るからで、わが兄の刻下の境涯も、先づ其通りであるのに、綠の黑髮、ふさふさとして元の如く、少しも樣子の變らないのは、この世が夢幻に齊しいといふことを悟り澄まされたからであらう。そこで、蛾眉の美人が酒を勸めても、一向平氣で、何とも思はず、かの王敦の殘忍なるも、王導の氣の弱いのも、全く頓著しない。ここに、三杯の酒に醉つた後は、はるばる北地に歸臥せむと思ふ外、一事なく、海邊の難路も、從來幾たびか往還されたから、何とも思つては居らぬ。この別筵に於て、幾多の女は、六幺の調に合はせたる蹴踘の舞をなし、陽關三疊の曲は、杳渺として餘韻が殘つて居る。酒醒め、夢斷えし後は、何も殘つて居らず、ただ青山の下に、花落ち、水流るるのみである。やがて、眞夜中に鐃歌の聲、騷がしく、出立を促すに驚かされ、中天の明月は、皎皎たれども、幽人でも、攀ぢて登ることは出來ず、矢張り、この世を離れられぬ上

は、今さら仕方がない。君に餞せむと欲するも、一物なく、唯だ一語、瘴霧をして雲なす君の鬢を侵さしめぬ様にと、ただそれだけである。羅浮の道人は、一たび車蓋を傾けて、知り合に成つて居るから、君の爲に、白日を繫ぎ留め、歲月の移らぬ樣にし、いつまでも、紅顏を留むる様にと祈るであらう。予とても、本はといへば、天子侍從の臣であつたから、他年、恩赦を蒙れば、元の通り、宮中の班列に加はることが出來るので、その時、再び御目にかかりたいと思つて居る。

【餘論】 紀昀は「起六句、當に本事あるべし。大抵、程の姬人を指すのみ」といつて居る。成程、もし程が妻君に死なれたことを云ふだけならば、もツと切實なる典故もあるだらうと思はれる。

戲和正輔一字韻

戲に正輔の一字韻に和す

故居劍閣（一）隔錦官（二）。　故居劍閣、錦官を隔つ、

柑果薑蕨交荆菅。　柑果薑蕨、荆菅に交る。

奇孤甘挂汲（三）古綆。　奇孤、甘んじ挂く古を汲むの綆、

僥覬敢揭鉤（四）金竿。　僥覬、敢て揭げむや、金を鉤するの竿。

已歸耕稼供藁秸。　すでに耕稼に歸して藁秸を供し、

公貴幹蠱（五）高巾冠。　公は幹蠱を貴んで巾冠を高くす。

改更句格各蹇吃（六）。　句格を改更して各蹇吃、

姑（七）固狡獪加間關（八）。　姑、もとより狡獪、間關を加ふ。

【字解】【一】 劍閣　劍閣記に「梁山の險は、蜀の恃んで外戶となすところ、大劍山・小劍山と相屬す。秦、蜀を伐たむと欲して道通ぜず、迺ち五石牛を造り、金を以て尾下に置き、能く金を糞すと、詐に以て蜀に遺らむとすと言ふ。蜀主、力を負んで食り、五丁をして道を開き、引いて之を入れしむ。秦、因つて閣を架して棧道となし、これに由つて蜀を伐つ」とある。【二】 錦官　錦官城の略、蜀の成都を指す。【三】 汲古綆　韓愈の詩に汲古得修綆とある。【四】 鉤金竿　諸註に金錐竿の事を用ひて、敵に逢ふを希ふ意であらうが、よく分からないとある。【五】 幹蠱　易に見えて、子が善く其家を承くること。【六】 蹇吃　どもる。【七】 姑固狡獪　東坡の自注に「王方平、麻姑に謂つて云ふ、姑、もとより少年、吾老いたり、了に復たこの狡獪變化を作すな肯ばざるなり」とある。【八】 間關　難儀する。

【題義】 この詩は、程正輔の作つた一字韻の詩に和したのである。一字韻とは、諸家の註に、古しへの雙聲とある。雙聲とは、はじめの子韻が皆同じなので、この詩の五十六字は、ともに、はじめの子韻がKである。換言すれば、Kの字が頭に付く字ばかりを竝べて作つたのである。そして、內容は、東坡自身の感慨を述べたものと見えるし、なほ全體は、普通の平仄を破つた七言律である。

【詩意】 わが故居は、劍閣の彼方で、錦官城を隔て、もとより、田舍の事で、柑橘だの、薑蕨だのが、棘や茅に交つて居る。予は、此に生まれ、奇を好んで友もなく、古しへを汲む繩を垂るるに甘んじ、今や屢ば貶謫に遇うて、恩赦の敕諚の下らむことを待つて居るが、苟且に之を得やうとは思はぬ。やがて、幸に歸休すれば、耕稼しても、藁秸を供するに過ぎぬが、君が、幹蠱の才あつて、巾冠を高くし、天晴、榮達されたのは、まことに賴母しい。ここに、句格を改めて、雙聲の詩を作つたが、さ

ながら、蹇吃に類し、麻姑の狡獪を眞似た樣なものの、これを作ることも、隨分、難儀であつた。

桄榔杖、寄張文潛一首、時初聞黃魯直遷黔南、范淳父九疑也

桄榔杖、張文潛に寄する一首。時に初めて、黃魯直は黔南に遷され、范淳父は九疑なるを聞く

睡起風淸酒在亡。　睡起、風淸くして酒在る亡し、
身隨殘夢兩茫茫。　身は殘夢に隨つて兩つながら茫茫。
江邊曳杖桄榔瘦。　江邊、杖を曳いて、桄榔瘦せ、
林下尋苗華撥香。　林下、苗を尋ぬれば、蓽撥香ばし。
獨步倘逢勾漏令。（二）　獨步、もしくは逢はむ勾漏の令、
遠來莫恨曲江張。（三）　遠く來つて恨む莫れ曲江の張。
遙知魯國眞男子。（四）　遙に知る、魯國の眞男子、
獨憶平生盛孝章。（五）　ひとり憶ふ平生の盛孝章。

【字解】【一】蓽撥　前に寄虎兒の詩中に注して置いた。【二】勾漏令　卽ち葛洪、前に王頤の詩中に注して置いた。【三】曲江張　王註に「唐書、張九齡は韶州曲江の人、天下稱して曲江公といふて名いはず。相となつて、放臣は宜しく善地を與ふべからざるを建言す。故に八司馬の竄、皆險地に在り、劉禹錫、詩あり、これを追恨す、今の詩、戒むるに劉禹錫の如くなるなきを以てするなり」とある。【四】魯國眞男子　卽ち孔融、後漢書楊彪傳に「融、曹操に謂つて曰く、孔融は魯國の男子なり」とある。【五】盛孝章　會稽典錄に「盛憲、字は孝章、天下に大名あり、孫策、これを誅せむと欲す、孔文擧、曹公に書を與へ、意、曹公をして書を致して之を救はしめむと欲す、書、未だ至らずして、すでに誅せらる」とある。

【題意】この詩は、桄榔の杖を張文潛に贈るに就いて作つたので、その時、黃魯直は黔南に、范淳父は九疑に遷されたことを聞いたから、併せて之に及んだのである。

【詩意】晝寢が醒めると、涼風大に至り、酒なきも毫も意とせず、身は殘夢に隨つて、兩つながら茫然として居る。やがて、君に贈る積りの細い桄榔の杖を曳いて、江邊に出かけると、林下に植ゑた蓽撥の苗は香ばしくて、勢が善い。獨步して、もしや勾漏の令たりし葛洪の樣な人に遇ひはせぬかと思ひ、こんな遠方に來ても、むかしの張曲江を怨むには及ばない。魯直・淳父、ともに魯國の眞男子、卽ち古しへの孔融の如き人物であるから、平生の交誼淺からざりし盛孝章に比すべき予の事を懷うて、さまざまに、心を煩はして居るであらう。

【餘論】紀昀は「後半、筆力健擧、沈鬱頓挫の致を極む」といひ「杖を寄するの意、隱約の間に在り、原と重んずるところに非ず、故に脫略を以て嫌となさず」といつて居る。

四月十一日、初食荔支

四月十一日、初めて荔支を食ふ

南村（一）諸楊北村（二）盧。　南村の諸楊、北村の盧、

【字解】【一】南村諸楊　楊は楊

白華青葉冬不枯。　白華青葉、冬枯れず。
垂黃綴紫煙雨裏。　黃を垂れ、紫を綴る煙雨の裏、
特與荔子爲先驅。　特に荔子の與に先驅を爲す。
海山仙人絳羅襦。　海山の仙人、絳羅の襦、
紅紗中單白玉膚。　紅紗中單、白玉の膚。
不須更待妃子笑。　須ひず、更に妃子の笑を待つを、
風骨自是傾城姝。　風骨、自ら是れ傾城の姝。
不知天公有意無。　知らず天公、意ありや無や、
遣此尤物生海隅。　この尤物をして海隅に生ぜしむ。
雲山得伴松檜老。　雲山伴ふを得たり、松檜の老いたるを、
霜雪自困樝梨麤。　霜雪自ら困む、樝梨の麤なるを。
先生洗盞酌桂醑。　先生、盞を洗うて桂醑を酌み、
冰盤薦此赬虬珠。　冰盤、この赬虬の珠を薦む。
似聞江鰩斫玉柱。　聞くに似たり、江鰩の玉柱を斫るを、
更洗河豚烹腹腴。　更に河豚を洗うて腹腴を烹る。
我生涉世本爲口。　わが生、世を渉る、本と口の爲なり、
一官久矣輕蓴鱸。　一官、久しく蓴鱸を輕んず。
人間何者非夢幻。　人間、何者か夢幻に非ざらむ、
南來萬里眞良圖。　南來萬里、眞に良圖。

梅。【二】北村盧　盧は盧橘。【三】絳羅襦　赤い羅の下著、蔡君謨の七月二十日食荔支の詩に絳衣仙子過中元、別葉空枝去不還とある。【四】紅紗中單　中單は今の汗衫。【五】妃子　楊貴妃を云ふ。【六】樝梨　樝はかりんの類。【七】赬虬　赤龍、荔支の善く熟したるを云ふ。【八】江鰩斫玉柱　査注に「江鄰幾の雜志、四明の海物、江鰩柱第一。介甫云ふ、鰩の字、當に珧に作るべし、蛤蜊の類の如し。韓文公の謂はゆる馬甲柱なり」とある。すると、はまぐりの貝柱。【九】腹腴　魚腹下の肥肉。

【題義】　說明に及ばぬ。査註に「荔支譜、六七月の時、色、綠に變ず。又火山は、本と廣南に出づ、四月熟す、閩中、亦た近く亦た之あり。東坡の云ふところ、四月十一日、これ特に廣南火山の者のみ。太平寰宇記、火山は直に梧州城に對す、山上、荔支あり、四月先づ熟す。その地、熱するを以て、故に火山といふ、核大にして味酸」とある。

【詩意】　南村には楊梅あり、北村には盧橘あり、花は白く、葉は青く、冬になつても枯れず、その實は、黃を垂れ、紫を綴つて、煙雨の中に隱見し、特に荔支の爲に先ぶれをして居る。荔支は、さながら海山の仙人が赤い羅の襦を著けて居て、紅紗の汗取の下から白い玉の膚が透いて見える樣である。楊貴妃の一笑を待つまでもなく、その風骨は、傾城の美人といつても善い位。天公は、果して意ありや否や、どういふ譯で、この尤物をして邊鄙な海隅の地に生ぜしめたのであるか。雲山の中に雜植せられて、松檜の老いたるを伴ふ時、霜雪は、かりんや梨の荒荒しきものは困めるが、流石に、この

荔支だけは、特に見逃がして居る。ここに、予は盞を洗うて、佳酒を酌み、氷盤の上に赤龍の珠と見まがふ荔支を盛つて薦めさせた。その味の美なることは、はまぐりの貝柱を斫つた如く、又河豚を料理して、その腹下の肥肉を烹る樣な安排。予が世を渉るは、その一、口腹の爲であつて、すでに官に在つて、蓴鱸位は格別とも思はない。人間、何者か夢幻に非ざるべき、たとひ罪を得て貶謫されたにしても、萬里の南なる惠州に來て、本當の荔支を味ふことの出來たのは、まことに良圖である。

【餘論】乾隆御批に「絳羅紅紗、語、刻鏤の跡を露はさずして、形容、備さに至る。江鰩河豚の比、特に其同じく異味たるを以てす、深意あるに非ず。陳敏政、これを駁す、もとより謂なし、胡仔、これを辨す、亦た强ひて解事を爲すのみ」とあり。紀昀は「生香異色、毫端に湧現す、この筆に非ざれば、この果を寫すこと能はず」といひ「結、乃ち無聊中、自ら慰むるの語。宋人の詩話、これを太豪に失するを以て、これを少とするは、謂はゆる詞を以て意を害す。荔支を食ふ、何に由つて愆を省み、過を悔ゆるの語に攙入せむや」といつて居る。

答周循州

周循州に答ふ

蔬飯藜牀破衲衣。
　蔬飯藜牀、破衲の衣、

掃除習氣不吟詩。
　習氣を掃除して、詩を吟ぜず。

前生自是盧行者。
　前生、自ら是れ盧行者、

後學過呼韓退之。
　後學、過つて呼ぶ韓退之。

未敢叩門求夜話。
　未だ敢て門を叩いて夜話を求めず、

時叨送米續晨炊。
　時に叨りに米を送つて晨炊に續ぐ。

知君清俸難多輟。
　知る君が清俸多く輟め難きを、

且覓黄精與療飢。
　且つ黄精を覓めて與に飢を療せむ。

【字解】【一】破衲衣　破れたる僧衣。【二】盧行者　即ち曹溪の六祖。【三】晨炊　漢書韓信傳に「亭長の妻、晨炊蓐食」とある。【四】黄精　前に入峡及び贈賀耘老の諸詩中に注して置いた。

【題義】説明に及ばぬ。周彥質、字は文之、その時、循州の守であつた。

【詩意】野菜ばかりで飯を食ひ、藜で造つた臥牀に倚り、そして破れた僧衣を著け、悟道の邪魔になる習氣を掃除せむことを力めて、詩さへ吟じない位。わが前生は、定めて曹溪六祖の盧行者なるべく、然るに、後學の弟子どもは、誤つて、韓退之だといつて居る。予は、まだ君の門を叩いて、夜、御話を承りに參上したこともないが、時時、米を送つて、晨炊を續がしめられた御厚意は、まことに感謝するところである。君とても、あまり豐かならぬ俸祿を久しく他の爲に輟めることは出來兼ねることであらうから、予は、山中に黄精を探し、それで飢を救はうと考へて居る處である。

荔支嘆

荔支嘆

十里一置（一）飛塵灰、　十里に一置、塵灰を飛ばし、

五里一堠（二）兵火催。　五里に一堠、兵火催す。

顚阬仆谷相枕藉、　阬に顚し、谷に仆れて相枕藉、

知是荔支龍眼（三）來。　知る是れ、荔支龍眼來る。

飛車（四）跨山鶻横海（五）、　飛車、山に跨り、鶻、海を横ぎり、

風枝露葉如新採。　風枝露葉、新に採るが如し。

宮中美人一破顏、　宮中の美人、一たび破顏、

驚塵濺血流千載。　驚塵濺血、千載に流る。

永元（六）荔支來交州、　永元の荔支は、交州より來り、

天寶歲貢取之涪。　天寶の歲貢は、これを涪に取る。

至今欲食林甫（七）肉、　今に至つて食はむと欲す林甫の肉、

無人擧觴酹伯游（八）。　人の觴を擧げて伯游を酹するなし。

我願天公憐赤子、　われ願ふ、天公、赤子を憐み、

莫生尤物爲瘡痏。　尤物を生じて瘡痏となす莫れ。

雨順風調百穀登、　雨は順に、風は調うて、百穀登り、

民不飢寒爲上瑞。　民、飢寒せず、上瑞となす。

君不見武夷谿邊粟粒芽（九）、　君見ずや、武夷谿邊、粟粒の芽、

前丁後蔡（一〇）相籠加。　前丁後蔡、相籠加。

爭新買寵各出意、　新を爭ひ、寵を買うて、各意を出す、

今年鬪品（一一）充官茶。　今年鬪品、官茶に充つ。

吾君所乏豈此物、　吾が君の乏しきところ、豈に此物、

致養口體何陋耶。　養を口體に致す、何ぞ陋なるや。

洛陽相君（一二）忠孝家、　洛陽の相君、忠孝の家、

可憐亦進姚黄花（一三）。　憐むべし、亦た進む姚黄花。

【字解】【一】一置　史記に「田横、尸郷の廐置に至る」とあつて、その註に「馬を置いて以て驛を傳ふるを謂ふなり」とあり、風俗通に「漢、郵を改めて置となす」とある、置は宿場。【二】一堠　堠は一里塚、唐時の制、十里を雙堠となし、五里を隻堠となす。尤も六町一里だから、五里といつても三十町位。【三】龍眼　交州記に「龍眼、樹高さ五六丈、荔支に似て小」とあり、廣州記に「荔支、大、桂樹の如く、實は雞子の如く、甘くして汁多し」とある。【四】飛車　前に金山妙高臺の詩中に注して置いた。【五】鶻横海　船をいふ、吳書に「海鶻は、頭低く尾高く、前大に後小、鶻の狀の如し」とある。【六】永元　後漢和帝の時の年號。

【七】林甫　唐書李林甫傳に「楊國忠を以て御史大夫となす。林甫、國忠の材孱を薄んじ、畏るるところなく、又貴妃の故を以て之に善し」とある。この句は、林甫が相となつて專ら諂諛を事とし、一言も其弊を救ふなきを言つたのである。【八】伯游　東坡の自注に「漢の永元中、交州、荔支・龍眼を進む。十里に一置、五里に一堠、奔騰死亡、猛獸毒蟲の害に罹るもの無數。唐羌、字は伯游、臨武の長たり、上書して狀を言ふ。和帝、これを罷む。唐の天寶中、蓋し涪州の荔枝を取り、子午谷の路より進む」とある。後漢書に羌の上書を記して「死者生くべからず、來者猶ほ救ふべきなり、この二物、殿に升る、未だ必ずしも年を延ばし、壽を益さず」とあり「遠國の珍羞、本と以て宗廟に薦奉す、苟くも傷害あらば、豈に民を愛するの本ならむや、其れ太官に勅して復た獻を受くる勿れ」とある。【九】粟粒芽　王註に「武夷山は建州に在り、粟粒芽は、茶の絶品なるものなり」とあり、武夷山記に、「山

に茶を產す、粟粒の如きものは、初春の芽茶なり、品最も貴し」とある。【一〇】前丁後蔡　東坡の自注に「大小龍茶、丁晉公に始まつて、蔡君謨に成る。歐陽永叔、君謨の小龍團を進むるを聞き、驚嘆して曰く、君謨は士人なり、何ぞ此事を爲すに至れるか」とある。【一一】闘品　東坡の自注に「今年、閩中の監司、闘茶を進めむことを乞ふ、これを許す」とある。【一二】洛陽相君忠孝家　錢惟演を云ふ、東坡の自注に「洛陽、花を貢する、錢惟演より始まる」とある。惟演は、五代吳越の後。吳越王が忠孝を以て稱せられしことは、表忠觀碑等に見えて居る。【一三】姚黃花　牡丹の新種、歐陽修の牡丹譜に「姚黃は、千葉黃花、民姚氏の家に出づ」とあり、查注に「鴻雅、牡丹の名、姓を以て著はるるもの、姚黃・左黃・牛黃・魏華。姚黃は、姚氏に出づ。姚氏の居を司馬坂といひ、地、河陽に屬し、而して花は洛陽に傳ふ、一歲、數朵に過ぎず。錢思公、かつて謂ふ、人、牡丹を謂うて花王となす、今姚黃は眞に王たり、而して魏紫は乃ち后なり」とある。

【題義】この詩は、茘支進貢の事を敍したので、詠歎すべきことが多いから、特に題を命ずるに、歎を以てしたのである。

【詩意】十里に一の宿つぎを設け、五里に一里塚を築き、その間を進貢の使者が馬を馳せて、塵灰を飛ばし、たとへば、兵火催せし爲に、その急を報ずる樣な騷ぎ、その使者どもは、穴に轉げ込み、谷に仆れて、相枕藉する位。後漢の頃、茘支・龍眼を進獻した時の有樣は、ざツと此の如くであつた。飛ぶ樣に馳する車が山に跨がり、兵船が海を横ぎつて、茘枝を進獻し、風を帶びた枝、露にぬれた葉は、新に採つた儘の通りで、宮中の美人は、これを見ると、おもはず、ほほゑんで顔を開いたが、その爲に、驛路に驚塵が飛び、鮮血が濺いだことは、千年の後までも、語り傳へられる位。唐の玄宗の時、南方から茘支を進獻せし時の事情は、先づこんな風であつた。後漢永元の時の茘支は、交州から來たのであるが、唐の天寶の時の歲貢は、これを涪州に取つた。唐の時、李林甫は、宰相の位に居て、專ら諂諛を事とし、一言も諫を納れなかつたから、今に至るまで、人人は、林甫の肉を食つて、恨を散じたいと思つて居る。しかし、漢の時、唐羌、字は伯游といふものが上書して、茘支の進貢を止めさせたことは、すでに忘れられて、今日、誰も杯を擧げて、その在天の靈に薦めるもののなきは、まことに遺憾の至である。われ願はくは、天公は、その赤子たる人民を憐むを第一とし、茘支などいふ尤物を生じ、はては、人民をして瘡痏に惱ましめることの無い樣にして貰ひたい。何は兎もあれ、風雨、時を以て至り、百穀實のりよく、人民が饑ゑず、寒がらずに居るのは、最上の祥瑞である。おもへば、武夷溪邊に粟粒茶を產し、前には丁晉公、後には蔡君謨といふ樣に、當時の名臣でさへ、之を籠に入れて爭つて進獻し、新を爭ひ、君寵を買はむが爲に、各〻意匠を出し、今年は、又茶の品評會を開いて、その最上品を官に進獻するといふ計畫をさへ催して居る。元來、主上に於て缺かせられるのは、決して、この種の者ではなく、口體を養ふことは、まことに賤むべきことである。錢氏は、洛陽に居る宰相の家柄で、加ふるに、代代忠孝の家として知られて居たに拘はらず、近ごろ、牡丹の新種たる姚黃花を進めたのは、まことに宜しくないことで、到底識者の批難を免れぬ次第である。

【餘論】乾隆御批には「君不見の一段、百端交も集まり、一篇の奇横、ここに在り。詩、本と茘支の爲に歎を發し、忽ち說いて茶に到り、又說いて牡丹に至る。その胸中鬱勃、以て已むべからざるものあり、惟だ以て已むべからずして言ふ、これ至言至文なり」とあり、查初白は「耳聞目見、その揮霍

に供せざるなし。香山諷諭の詩作、題を以て題に還るに過ぎざるのみ、那ぞ許の如きの開拓を得む」といひ、紀昀は「鮑、杜を襲がずして、神、これに似たり、出沒開口、純平たる杜法」といひ、飛車跨山の一解を許しては「精神飛舞」といひ、洛陽相君の二句に就いては「結處、又一波を帶ぶ、更に言を長うして足らず」といつて居る。

六月十二日、酒醒步月理髮而寢

六月十二日、酒醒めて月に步し、髮を理めて寢ぬ

羽蟲見月爭翾翻。　羽蟲、月を見て爭うて翾翻、
我亦散髮虛明軒。　われ亦た髮を散す虛明の軒。
千梳冷快肌骨醒。　千梳、冷快にして肌骨醒め、
風露氣入霜蓬根。　風露の氣は入る霜蓬の根。
起舞三人漫相屬。　起舞三人、漫に相屬し、
停杯一問終無言。　杯を停めて一問、終に言なし。
曲肱蘄簟有佳處。　肱を曲ぐれば、蘄簟、佳處あり、
夢覺瓊樓空斷魂。　夢覺めて、瓊樓、空しく斷魂。

【字解】【一】虛明軒　杜甫の夏夜歎に「仲夏苦二夜短一、開レ軒納二微涼一、虛明見二纖毫一、羽蟲亦飛揚」とある。【二】霜蓬根　霜を帶びたる蓬の如き白髮の根元。【三】三人　われと月と我が影とを云ふ、李白の詩に見え、前に「和二王晉卿一」の詩中に注して置いた。【四】停杯一問　李白の詩に「靑天有レ月來幾時、我今停レ杯一問レ之」とある。【五】蘄簟　白居易の詩註に「蘄州、好笛、并せて蘄葉簟を出す」とある。蘄葉の様な色をした竹むしろであらう。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】羽蟲は、月を見ると、爭うて翾翾として飛び出し、われも亦た髮を風に吹かせて、虛明水の如き軒頭に倚りかかつて居た。そこで、櫛で髮をすくと、冷快にして心地よきこと、肌骨も醒むるばかりで、風露の氣は、白髮の根元まで浸み込んだ。起つて舞ふと、われと月と我が影と、三個が相連り、杯を下に置いて、一たび月に問ふも、月は遂に一言もしない。肱を曲げて寢ると、蘄簟も、流石に佳處があつて、樂樂と眠られるが、夢が覺めると、天上の瓊闕、杳渺として卽き難きを思うて、自然、斷魂するばかりである。

【餘論】乾隆御批に「語簡にして靜、紙上、涼氣あつて人を撲つ」といひ、紀昀は「鬱律の中、淸氣呑吐、老手興到の作」といつて居る。

和子由次月中梳頭韻

子由に和し、月中梳頭の韻に次す

夏畦流膏白雨翻。　夏畦、膏を流して白雨翻る、
北窗幽人臥羲軒。　北窗の幽人、羲軒に臥す。

【字解】【一】羲軒　羲は太皞伏羲氏、軒は黃帝軒轅氏。【二】春鵲節　東坡の自註に「或は予に謂つて

風輪曉長春（二）筍節。　風輪、曉に長ず春筍の節、
露珠夜上秋禾根。　露珠、夜上る、秋禾の根。
從來白髮有二公道一。　從來、白髮、公道あり、
始信丹經非二妄言一。　始めて信ず、丹經、妄言に非ざるを。
此身法（三）報本無レ二。　この身、法報、本と二なし、
他年妙絕（四）兼二形魂一。　他年妙絕、形魂を兼ぬ。

曰く、草木の長ずる、常に昧明の間に在り。早く作つて之を伺へば、乃ち數寸を拔起するを見る。竹筍尤も甚し。又夏秋の交、稻、方に秀を含む、黃昏、月出で、露珠、その根に起る、纍纍然として、忽ち自ら騰上し、或は莖心に入り、或は葉端に垂る、稻、乃ち秀實すと。これを推するに、信に然り。この二事、子由養生の說と契す、故に此を以て寄となす」とある。【三】法報　法身報身を云ふ。維摩經に「佛に三身あり、法・報・應といふ、法報二身は、佛自ら受用す」とある。【四】兼形魂　東坡の自註に「傳燈錄、形神ともに妙なるものあり、乃ち復た解化の事あらず」とある。

【題義】子由詩の敍に「轍、白髮あり、二十年に近し、然れども、止だ百餘莖、增さず、減せず。虔州の道人王正彥、敎へて拔き去らしめ、眞水火を以て之を養ふ、當に復た更生せざるべし、と。その言に從ふ。すでに數月にして、白髮出です、年歲を更るも見えず、豈に眞に生せざるか。子瞻兄、われに月中梳頭の詩を示さる、戲に來韻に次して、拔白の驗を言ふ」とあつて、その詩は左の通り。

水上有レ車車自翻。懸流如レ線垂二前軒一。霜蓬已枯不二復綠一。有レ客勸レ我抽二其根一。枯根一去棠茸出。珍重已試幽人言。紛紛華髮不レ足レ道。當レ返六十過去魂。

そこで、東坡は、その韻に次したのである。

【詩意】夏の畦は、暑さの餘り、膏汗をかく位であるが、折から白雨が翻ると、まことに心持がよく、幽人は、北牕に臥して、自ら羲軒時代の人の積りで居る。すべて、草木の長ずるのは、昧明の際に在るので、風が輪をなして、そよ吹く頃、曉に筍の節の間が伸びるし、露の珠は、夜、秋禾の根により、見る間に、下から持ち上げられる樣である。元來、白髮には公道があるし、丹經の決して妄言ならざることを始めて信じた。法報二身は、もと同じものであつて、決して、二つに分れるのではなく、他年、道を修して、形魂ともに妙絕なるに至らば、卽ち長生を希ふべく、決して、解化の事は無い筈である。

【餘論】紀昀は「これ便ち佳ならず、太だ相を著くるを以ての故」といつて居る。

和二陶貧士一七首　陶の貧士に和す　七首

余遷二惠州一一年、衣食漸窘、重九伊邇、尊俎蕭然、乃和二淵明貧士七篇一、以寄二許下高安宜興諸子姪一、幷令二過同作一。

【訓讀】余、惠州に遷る一年、衣食漸く窘む、重九伊れ邇く、尊俎蕭然、乃ち淵明貧士の七篇に和し、以て許下・高安・宜興の諸子姪に寄せ、幷せて、過をして同じく作らしむ。

(一)長庚與殘月。耿耿如相依。　長庚と殘月と、耿耿として相依るが如し。
以我旦暮心。惜此須臾暉。　我が旦暮の心を以て、この須臾の暉を惜む。
青天無今古。誰知(二)織烏飛。　青天、今古なく、誰か知らむ織烏の飛ぶを。
我欲作九原。獨與淵明歸。　われ、九原を作し、獨り淵明と歸らむと欲す。
俗子不自悼。顧憂斯人飢。　俗子、自ら悼まず、顧みて憂ふ斯人の飢ゑたるを。
(三)堂堂誰有此。(四)千駟良可悲。　堂堂、誰か此ある、千駟、良に悲むべし。

【字解】〔一〕長庚　太白星、卽ちあけの明星。〔二〕織烏　侯鯖錄に「東坡、かつて言ふ、鬼詩、佳なるものあり、一篇を誦して云ふ、流水涓涓芹吐芽、織烏西飛客還家、深村無人作寒食、殯宮空對棠梨花と。かつて、織烏の義を解せず、王性之、少年博學、これに問ふ、乃ち云ふ、織烏は日なり、往來、梭の織るが如し」とある。〔三〕堂堂誰有此　史記齊世家に「景公三十二年、彗星見はる。景公、柏寢に坐して、歎じて曰く、堂堂、誰か此を有するか」とある。〔四〕千駟　論語に「齊の景公、馬千駟あり」と見ゆ。

【題意】引の意味は——余、惠州に遷つてより、すでに一年、衣食漸く窘み、重陽の佳節が近くなつたのに、樽俎蕭然として、何も物がない。そこで、陶淵明の貧士の詩七篇に和し、許下に居る遲・适、高安に居る遠、宜興に居る邁・迨等の諸子姪に寄せ、併せて、ここに居る末子の過に命じて、同じく作らしめたといふので、紀昀は、これを稱して「序、亦た陶潛に似たり」といつて居る。

【詩意】あけの明星と殘月とは、耿耿として相依るが如くである。旦暮、ともに愁を去り得ぬ我が此心を以て、暫時、留まつて居る此光暉を殘り惜く思ふのである。靑天に今古なく、唯だ太陽の飛び亙ることを誰か知つて居るか。われは、九原より作して、ひとり淵明と共に歸らうと思つて居る。俗物どもは、その身の果敢なきことを悼まずして、貧士を賦した斯人の饑に苦んで居るのを氣の毒に思つて居る。しかし、齊の景公は、馬千駟を有せしに拘はらず、堂堂として、誰か此を有せむやといつた位、富貴長しへに在らず、淵明は、決して、貧を憂ふべきものではない。

【餘論】紀昀は「意、深く至つて、氣、渾成」といひ「後四句、亢に過ぐるを覺ゆ、以て淵明を借りて說き出づ、尙ほ甚だ露ならず」といつて居る。

(二)夷齊恥周粟。高歌誦虞軒。　夷齊、周の粟を恥ぢ、高歌して虞軒を誦す。
(二)產祿彼何人。能致綺與園。　產祿、彼れ何人、能く致す綺と園と。
古來避世士。死灰或餘煙。　古來、世を避くるの士、死灰、或は煙を餘す。
末路益可羞。朱墨手自研。　末路、益す羞づべし、朱墨、手自ら硏す。
淵明初亦仕。絃歌本誠言。　淵明、初め亦た仕ふ、絃歌、本と誠に言ふ。
不樂乃徑歸。視世差獨賢。　樂まず、乃ち徑に歸る、世に視ぶれば、差や獨り賢。

【字解】〔一〕夷齊　史記伯夷傳に「武王、すでに殷の亂を平らげ、天下、周を宗とす。而して、伯夷叔齊、これを恥ぢ、義、周の粟

を食はず、首陽山に隱れ、薇を采つて之を食ふ。餓ゑて死せむとするに及びて歌を作る。その辭に曰く、神農虞夏、忽焉沒兮、我安適歸矣、吁嗟徂矣、命之衰矣」とある。【三】産祿 漢書張良傳に「呂后、呂澤をして、辭を卑くし、禮を厚くして、この四人を迎へしむ」とあつて、顏師古の注に「園公、綺里季、夏黃公、甪里先生を云ふ」とある。しかし、合註に「漢書、呂后の兄二人、長兄澤、周呂侯となり、次兄釋之、建成侯となる。産は澤の子、祿は釋之の子。この二人、四皓を迎ふる事と與るなし」とある。

【詩意】 伯夷叔齊の二人、義として周の粟を食ふを恥ぢ、死ぬ前に歌を作つて、虞舜軒轅の時代を回顧した。これに反して、呂産・呂祿等、彼は何人であるか、呂后の命に因つて、綺里季・園公等謂はゆる四皓の人人を招致した。して見ると、古來世を避くるの士でも、全く世事と絶縁せず、死灰、或は煙を餘して燃え出すこともあるので、四皓の如きは、即ちさうである。その末路は、益す羞づべく、ここに、朱墨を磨して、自分で其事柄を抹殺したい様な氣がしたであらう。淵明は、初めに出仕し、聊か絃歌して三徑の資と爲さむといつたのは、蓋し、實情に相違ない。しかし、面白くない處から、直に罷めて歸つて來たので、この點は、世人に比較すると、差や立ちまさつて、ひとり其賢を稱すべきものである。

【餘論】 紀昀は「淵明を借りて、以て自ら況す、愈よ說いて平易、愈よ身分の高きを見る」といつて居る。

誰謂淵明貧。尙有一素琴。 誰か淵明を貧といふ、尙は一素琴あり。

心閑手自適。寄此無窮音。 心、閑にして、手自ら適し、この無窮の音を寄す。

佳辰愛重九。芳菊起自尋。 佳辰、重九を愛し、芳菊、起つて自ら尋ぬ。

疎巾歎虛漉。塵爵笑空斟。 疎巾、虛しく漉すを歎じ、塵爵、空しく斟むを笑ふ。

忽餉二萬錢。顏生良足欽。 忽ち餉る二萬錢、顏生、良に欽するに足る。

急送酒家保。勿違故人心。 急に酒家の保に送り、故人の心に違ふ勿れ。

【字解】【一】一素琴 昭明太子の作つた陶淵明傳に「淵明、音律を解せず、しかも、無絃琴一張を蓄へ、酒適する每に、輒ち撫弄して以て其意を寄す」とある。【二】愛重九 淵明の九日閑居の詩の敍に「余閑居、重九の名を愛す」とある。【三】虛漉 陶淵明傳に「郡將、かつて之を候す、その酒、熟するに値ひ、頭上の葛巾を取つて酒を漉し、酒を漉し畢るや、還た復た之を著く」とある。【四】二萬錢 南史陶潛傳に「顏延之、潯陽に在り、潛と情款。後、始安郡となる。去るに臨み、二萬錢を留めて潛に與ふ、潛、悉く酒家に送り、稍く就いて酒を取る」とある。【五】酒家保 即ち酒保、漢書欒布傳に「傭を齊に賣つて、酒家の保となす」とある。

【詩意】 誰か淵明を貧なりといふか、なほ一つの粗朴なる琴を持つて居る。心閑なる時、手、自ら適し、その琴を彈じて、無窮の音を寄せる。そこで、重陽の佳辰を愛し、起つて芳菊を尋ねて居た。ある時は、疎末な頭巾で酒を漉すを嘆じ、ある時は、塵にまみれた杯で斟まうとしても、酒が無かつた。ここに、二萬錢を送つて遣つた顏延之は、まことに、欽慕すべき人である。淵明は、その錢を酒保に預けて置いたが、故人の厚意に違はぬ樣にしたのは、流石に善くしたものである。

【餘論】紀昀は「その事を翻用して、朋友に寄す、これが慨を助くる莫からむや」といつて居る。

人皆有耳目。夫子曠與婁。　人、皆、耳目あり、夫子、曠と婁と。
弱毫寫萬象。水鏡無停酬。　弱毫、萬象を寫し、水鏡、停酬なし。
閒居惜重九。感此歲月周。　閒居して重九を惜み、この歲月の周るを感ず。
端如孔北海。只有尊空憂。　端に孔北海の如く、只だ尊空しきの憂あるのみ。
二子不竝世。高風兩無儔。　二子、世を竝ばず、高風、兩つながら儔なし。
我後五百年。淸夢未易求。　わが後、五百年、淸夢、未だ求め易からず。

【字解】【一】曠與婁　師曠と離婁。【二】水鏡　襄陽記に「龐德公、先主に語つて曰く、司馬德操は人の水鏡なり」とある。【三】孔北海　卽ち孔融、常に座上客常滿、樽中酒不空といつて居たので、前に首夏卽事の詩中に注して置いた。

【詩意】人人、皆耳目を有して居るが、耳目の聰明を極めたものは、師曠と離婁とだけで、いはば、萬人の手本である。陶淵明は、弱い筆先に宇宙間の萬象を寫し、その人物は、人の水鏡として、少しも臆面なきものであつた。淵明は、閒居して重陽の佳節を惜み、歲月の周り行くをつくづくと感じたが、まさしく、孔北海の如く、樽中酒の空しからむとするを憂へただけである。陶淵明と孔北海と、二人、同時に世に在らず、そして、その高風は、兩つながら儔なきものであつた。わが後五百年、夢の中に、予に逢はうと思つても、到底駄目な事である。

【餘論】紀昀は「忽ち一陪賓を拉して竝び說く、恣逸の至」といつて居る。

芙蓉雜金菊。枝葉長闌干。　芙蓉、金菊に雜はり、枝葉、長く闌干。
遙憐退朝人。餻酒出大官。　遙に憐む、退朝の人、餻酒、大官に出づるを。
豈知江海上。落英亦可餐。　豈に知らむや、江海の上、落英亦た餐すべきを。
典衣作重陽。徂歲慘將寒。　衣を典して重陽を作す、徂歲、慘として將に寒からむとす。
無衣粟我膚。無酒嚬我顏。　衣なくして、我が膚に粟し、酒なくして我が顏に嚬す。
貧居眞可嘆。二事長相關。　貧居、眞に嘆ずべし、二事、長く相關す。

【字解】【一】闌干　垂れる貌。【二】餻酒　施註に「國朝の故事、九月九日、花餻の法酒を以て近臣に賜ふ。方言、餌、これを餻といひ、或は之を餈といふ」とある。【三】大官　主膳寮の長官。【四】落英　離騷に朝餐秋菊之落英とある。

【詩意】秋半なる頃、芙蓉は黃金色の菊に交り、その枝葉は、長く垂れて居る。この日、退朝の人人が、主膳寮から餻酒を頂いて歸るのは、まことに結構なことである。處で、江海の上に居るものは、秋菊の落英を餐して、それで滿足して居り、衣類を質入れして、心ばかり、重陽のお祝をなし、歲將に徂かむとする折から、慘として將に寒からむとする景色。衣なくして、我が膚には粟だち、酒なく

して、覺えず我が顏をしかめる。貧居、まことに嘆すべく、衣なきと酒なきと、この二事は、長しへに相關して居る。

【餘論】紀昀は「これを陶集に置くも、幾んど辨ずべからず」といひ「落英の句、これ餐花を以て苦況となし、餐花を以て高致となすに非ず、下の六句を觀て見るべし」とある。

老詹亦白髮。相對垂霜蓬。　老詹、亦た白髮、相對して霜蓬を垂る。
賦詩殊有味。涉世非所工。　詩を賦して殊に味あり、世を涉るは工とするところに非ず。
杖藜山谷間。狀類渤海龔。　藜に杖つく山谷の間、狀は類す渤海の龔。
半道要我飲。意與王弘同。　半道、われを要して飲む、意、王弘と同じ。
有酒我自至。不須遣龐通。　酒あり、我、自ら至る、龐通を遣すを須ひず。
門生與兒子。杖屨聊相從。　門生と兒子と、杖屨、聊か相從ふ。

【字解】〔一〕老詹　東坡の自註に「惠州の太守詹範、字は器之」とある。〔二〕霜蓬　白髮を形容して云ふ。〔三〕渤海龔　龔は龔遂、前に從王歆之の詩中に註して置いた。〔四〕半道要我飲　南史陶潛傳に「江州刺史王弘、これを識らむと欲して、致す能はざるなり。潛、かつて廬山に往く、弘、ひそかに潛の故人龐通之をして、酒具を齎して、半道栗里に於て之を要せしむ。潛、脚疾あり、一門生、二兒をして籃輿を舉げしむ、至るに及びて、欣然として、便ち共に飲酌す。俄頃にして、弘至る、亦た忤ふなきなり」とある。

【詩意】惠州の太守詹範も、亦た白髮頭で、予と相對すれば、霜を帶びた蓬の如き毛を垂れて居る。この人は、詩を賦すれば、殊に妙味があるが、世を涉ることは、決して上手といふ譯には行かぬ。藜に杖ついて、山谷の間に逍遙し、その狀貌は、むかしの渤海の龔遂に似て居る。ある時、半道に予を要して酒を飲み、その意は、かの王弘と同じである。しかし、予は、酒だにあらば、何處にでも往くので、態態、龐通を使として差遣されるにも及ばず、門生と倅どもとを引き連れ、杖をつき、屨をはいて、聊か相從つて往くのである。

【餘論】紀昀は「手に隨つて綰合し、一一妙に入る」といつて居る。

我家六兒子。流落三四州。　わが家の六兒子、流落三四州。
辛苦見不識。今與農圃儔。　辛苦、見て識らず、今農圃と儔し。
買田帶修竹。築室依清流。　田を買うて修竹を帶び、室を築いて清流に依る。
未能遣一力。分汝薪水憂。　未だ一力を遣して、汝の薪水の憂を分つ能はず。
坐念北歸日。此勞未易酬。　坐に念ふ北歸の日、この勞、未だ酬い易からず。
我獨遺以安。鹿門有前修。　われ獨り遺すに安きを以てす、鹿門に前修あり。

【字解】〔一〕六兒子　東坡には男子は三人しか無かつたが、これは、女子をも併せて言つたのであらう。〔二〕一力　一人の小者、

即ち家僕、陶淵明傳に「執事者、これを聞いて、以て彭澤令となす、家累を以て自ら隨へず、一力を送つて其子に給す」とある。【三】遺以安　後漢龐公の事、前に詠二龐所一及び贈二袁陟一の諸詩中に注して置いた。【四】鹿門　山名、龐公の隱居せし處。【五】前修　前例。

【詩意】　わが家には、六人の子どもがあつて、三四州に流落して居る。その辛苦の程、予は、實際に就いて知つた譯ではないが、今、農圃の仲間に入つたことであるから、隨分、骨も折れるに相違ない。田を買へば、修竹、これを繞り、室を築けば、淸流に依り沿うて居る。處が、一人の小者を遣して、汝等の薪水の憂を分たしむるに及ばず、この點は、陶淵明にも劣つて居る。おもへば、北歸の日、汝等の此勞は、仲仲、容易に酬いられぬ位。顧みれば、われは、汝等に遺すに安きを以てしたので、それは、鹿門の龐德公に於て、すでに前例のあることである。

【餘論】　紀昀は「亦た純乎たる古音」といつて居る。

食檳榔

檳榔を食ふ

月照無(一)枝林。夜(二)棟立萬礎。
月は照らす枝なきの林、夜棟、萬礎に立つ。

眇眇雲間扇。蔭此八月暑。
眇眇たる雲間の扇、この八月の暑を蔭す。

上有垂房子。下繞絳(三)刺禦。
上には房子を垂るるあり、下には絳刺を繞らして禦ぐ。

風欺紫鳳卵。雨暗蒼龍乳。
風は欺く紫鳳の卵、雨は暗し蒼龍の乳。

裂包一墮地。還(四)以皮自煮。
包を裂いて一たび地に墮し、還た皮を以て自ら煮る。

北客初未諳。勸食俗(五)難阻。
北客、初め未だ諳んせず、食を勸めて、俗、阻み難し。

中虛畏(六)泄氣。始嚼或半吐。
中、虛にして泄氣を畏れ、はじめ嚼んで或は半ば吐く。

吸津得微甘。著齒隨亦苦。
津を吸うて、微甘を得、齒に著いて、隨つて亦た苦し。

面目太嚴冷。滋味絕媚(七)嫵。
面目、太だ嚴冷、滋味、絕えて媚嫵。

誅(八)彭勳可策。推(九)轂勇(一〇)宜買。
彭を誅す、勳、策すべし、轂を推して、勇、宜しく買ふべし。

瘴風作堅頑。導利時有補。
瘴風、堅頑を作し、利を導いて、時に補ふあり。

藥儲固可爾。果錄詎用許。
藥儲、もとより、可なるのみ、果錄、詎ぞ許すを用ひむ。

先生失膏粱。便腹委(一一)敗鼓。
先生、膏粱を失ひ、便腹、敗鼓に委す。

日啖過一粒。腸胃爲所侮。
日に啖うて一粒に過ぐ、腸胃、侮るところとなる。

蟄雷殷(一二)臍腎。藜藿腐亭(一三)午。
蟄雷、臍腎に殷たり、藜藿、亭午に腐す。

書燈看膏盡。鉦漏歷歷數。
書燈、膏の盡くるを看、鉦漏、歷歷として數ふ。

老眼怕少睡。竟使赤(一四)眥弩。
老眼、睡少きを怕れ、竟に使ふ赤眥の弩。

渴思梅(一五)林嚥。飢念黃(一六)獨擧。
渴しては、梅林の嚥を思ひ、飢ゑては、黃獨を擧げむこ」とを念ふ。

奈何農經中。收此困羇旅。　奈何か、農經の中、これを收めて、羇旅を困む。
(一七)牛舌不餉人。一斛肯多與。　牛舌、人に餉らす、一斛、肯て多く與へむや。
乃知見本偏。但可酬惡語。　乃ち知る、本の偏するを見る、但だ惡語に酬ゆべし。

【字解】【一】無枝林　檳榔には枝なきが故に云ふ。【二】夜棟　檳榔の林を夜見ると、丁度、家の棟木の立つて居るに似たる故に云ふ。【三】綷剝　赤色のとげ。【四】澀以皮自煮　檳榔を食ふに、その皮を剝ぎ灰を交ぜるを云ふ。【五】俗羅阻　南方草木狀に「檳榔は、林邑に出づ、凡そ貴勝族客、必ず先づ呈す、若し邂逅するも設けざれば、用つて相嫌恨す」とある。【六】長澀氣　柳子厚集に「多く檳榔を食へば、人をして氣を破らしむ」とあり、又李翰林に與ふる書に「南人、檳榔、餘甘破決、甕隔太だ過ぐ、陰邪敗ると雖も、すでに正氣を傷つく」とある。【七】娟姝　前に於潛女の詩中に注して置いた。【八】誅彭　李注に「本草、檳榔は主として穀を消し、水を逐ひ、痰澼を除き、三蟲を殺し、臟腑の壅滯を宣利し、胸中の氣を破るを治む。閩廣の人、當に果實以て瘴癘を祛るべきなり、一名洗瘴丹。按ずるに、彭は三尸の姓、彭質・彭蟜・彭居なり」とある。【九】推轂　古樂府に腸中車輪轉とあるから、推轂の字を借用したのである。【一〇】勇宜賈　前に再送「胡正徵」の詩中に注して置いた。【一一】委敗鼓　鼓腹の意を翻用したのであらう。【一二】殷脾腎　腹、雷鳴の如しの意を用ふ。【一三】亭午　三丹田の中宮に喩ふ。【一四】赤眥琴　雲笈經に「日中の赤脩、內臂より始まる」とあり、唐語林に「薛道衡、沙彌に問うて曰く、金剛、何すれぞ努目をなし、菩薩、何すれぞ眉を低る。沙彌曰く、金剛努目、四魔を降伏する所以、菩薩の眉を低るるは、六道に慈悲なる所以」とあり。なほ類名に「努は怒なり」とある。【一五】梅林　世說に「魏武行役、汲道を失し、軍皆渴す。乃ち令して曰く、前に大梅林あり、子饒く、甘酸以て渴を解くべし、と。士卒、これを聞いて、口、皆水を出す、これに乘じて前源に及ぶを得たり」とある。【一六】黃獨　本草拾遺に「陳藏器云ふ、黃獨、霜雪を過ぐれば枯れて苗なし、蓋し蹲鴟の類」とある。【一七】牛舌　梁の劉孝綽集詠に「人あり、牛舌乳を乞ふ、付せず、因つて檳榔を餉る、詩云云」とあり、南史に「劉穆之、貧時、妻の兄江氏に從つて檳榔を乞ふ。江曰く、檳榔、食を消す、君、乃ち常に飢う、何ぞ忽ち此を須ひむや、と。後、丹陽に尹たり、金盤一斛を以て之に誇示す」とある。

【題義】設明に及ばぬ。

【詩意】檳榔は、枝もなく、幹ばかりで林をなして居る、そこを月が照らすと、棟木が多くの礎の上に立つて居る樣に見える。その葉は、眇眇として、雲間の扇となつて、この八月の暑さに影を與へて居る。その上には、數房を綴つて垂れ、その下部には、赤た刺が圍繞して居る。形は紫鳳卵の如く、色は蒼龍の乳の如く、そして、風雨を得て追追に成熟する。その包を裂いて、中の實が地に落ちると、その皮あるが爲に、自然煮えて來る樣な譯である。北方から來た人は、初め、その食ひ方さへ分からぬ位であるが、これを勸めるのは、その邊の風俗であつて、決して、止めることが出來ない。しかし、檳榔は、中が虛しくして、正氣を泄らす虞があり、はじめ、嚼んだ時は、大抵半ば吐き出して仕舞ふが、唾液を吸ふと、一寸甘くなり、齒に著くと、隨分苦い。その見た形は、甚しく嚴冷であるが、その滋味は、極めてなまめかしく、三彭の蟲を退治することに就いては、特功があつて、無理にも食ふと、餘程效果がある。熱地の風は、堅頑にして、時時、人に害を爲すが、檳榔を食つて居ると、利を導いて、時時、補ふことがある。藥の儲蓄としては、もとより然るべく、果物の事を記載したものには、特に許して貰ふまでもなく、第一に書くべき筈である。予は、膏粱の美味を失ひ、まずいものを無理に食ひ溜めたから、腹は便便として敗鼓の皮の如くなつて居る。そこで、毎日、檳榔の實を食つて、一粒を過ぎると、腸胃は忽ち侮られ、脾腎の間に、雷鳴殷殷として聞こえ、食ひ込んだ藜藿の類は、腐敗して、三丹田中の中宮から排泄されて仕舞ふ。夜、讀書の爲に點じたる燈火も、油が盡きかかり、鉦の聲

は、漏刻の響と共に、歴歴として數ふべき時に當り、老眼は、兎角睡られないが、檳榔を食ふと、內眥の赤くなつて痛むのを直して仕舞ふことが出來る。檳榔は、まことに、結構なもので、渴しては、梅林を思うて唾を飲み込むが如く、饑ゑては、黃獨を掘り出したことを思ふが如く、甚しく熱望して止まぬ次第である。如何なれば、農經の中に、この檳榔を收め、かくの如き效果を載せず、つまらぬものとして、羇旅の人を困めるのであるか。むかし、牛舌乳を乞うても與へず、仍つて、檳榔を與へたものがあるが、この者に對しては、金盤一斛を以て謝禮としても、決して、多過ぎはしない。元來、根本の了見が曲つて居る上は、但だ惡語を以て酬ゆべく、彼は、檳榔の貴きを知らずして、此に及んだのである。

【餘論】紀昀は「雋語あり、亦た累句あり、分別して之を觀よ」といひ、更に細說して「起四句、畫の如し」といひ「上有の四句、月照の四句と同一寫狀にして、語に仙凡の別あり」といひ「下續の句妥ならず」といひ、その以下を稱して「寫照、微に入る」といひ、又「努、當に努に作るべし」といひ「飢念の句、妥ならず」といつて居る。

送惠州押監

惠州押監を送る

一聲鳴雁破江雲。　一聲の鳴雁、江雲を破る、

萬葉梧桐卷露銀。(一)　萬葉の梧桐、露銀を卷く。

我自飄零足羇旅。　われ自ら飄零、羇旅に足る、

更堪秋晚送行人。　更に堪へむや、秋晚、行人を送るを。

【字解】(一) 露銀　銀露に同じ、呂令問の金臺賦に、清夜無塵兮銀露自圓とある。

【題義】職方分紀に「御前忠佐軍頭、都監監押の名あり、朝官を都監となし、京官幕職の者を監押となす」とある。その人、姓名不詳。この詩は、惠州の軍幕に居る下役の出發を送つたので、その行く先は分からぬが、多分、管內を巡行するのであらう。

【詩意】一聲の鳴雁は、江雲を破つて聞こえ、桐の葉の垂れた上には、銀の如き露が置きあまつて居る。われは、飄零の餘、常に羇旅の氣分で居るから、秋晚に行人を送るのは、愈よ以て堪へられない。

【餘論】紀昀は「これ陳陳相因るの窠臼、以て盛唐の高調と爲さば、之を失す」といつて居る。

江月、五首

江月　五首

嶺南氣候不常、吾嘗曰、菊花開時乃重陽、涼天佳月卽中秋、不須以日月爲斷也、今歲九月、殘暑方退、既望之後、月出愈遲、予嘗夜起、登合江

樓、或與客游豐湖、入棲禪寺、叩羅浮道院、登逍遙堂、逮曉乃歸、杜子美云、四更山吐月、殘夜水明樓、此殆古今絕唱也、因其句作五首、仍以殘夜水明樓爲韻。

【訓讀】嶺南、氣候常ならず、吾、かつて曰く、菊花開く時、乃ち重陽、涼天の佳月、卽ち中秋、須らく、日月を以て斷と爲すべからざるなりと。今歲九月、殘暑方に退く、旣望の後、月出でて愈よ遲し。予、かつて、夜、起きて合江樓に登り、或は客と豐湖に游び、棲禪寺に入り、羅浮道院を叩き、逍遙堂に登り、曉に逮びて乃ち歸る。杜子美云ふ、四更山吐月、殘夜水明樓、と。これ殆んど古今の絕唱なり。その句に因つて五首を作り、仍つて、殘夜水明樓を以て韻となす。

一更山吐月。(一)玉塔臥微瀾。一更、山、月を吐き、玉塔、微瀾に臥す。

正似西湖上。湧金門外看。正に似たり、西湖の上、湧金門外に看るに。

冰輪橫海濶。香霧入樓寒。冰輪、海に橫はつて濶く、香霧、樓に入つて寒し。

(二)停鞭且莫上。照我一杯殘。鞭を停めて、且つ上る莫れ、わが一杯殘せるを照らせ。

【字解】〔一〕玉塔　查註に「卽ち大聖塔、豐湖の上、棲禪寺の東南に在り」と見ゆ。〔二〕停鞭　王註に「鞭を停むとは、以て月御を言ふなり」とある。

【題義】引の意味は――嶺南の氣候は、一定しない。吾、かつて曰く、菊花の開いた時が重陽、涼天の好い月が中秋、と。かうする外なく、日月を以て斷定する譯には行かない。今年の九月、殘暑方に退き始めた頃から、十六夜の後、月の出ること愈よ遲くなつた。予は、かつて、夜、起きて合江樓に登り、或は客と豐湖に游び、棲禪寺に入り、羅浮道院を叩き、逍遙堂に登り、そして、夜あけ頃に歸つて來た。杜子美の詩に、四更山吐月、殘夜水明樓とあつて、これは、殆んど古今の絕唱である。今、その句に因んで五首を作り、仍つて、殘夜水明樓の五字を以て韻とした。

【詩意】初更の頃、山が初めて月を吐くと、大聖塔は、微瀾の上に臥して居る。その景色は、丁度、西湖の邊で、湧金門外に見たと同じである。氷輪は、海に橫はつて大きく見え、香霧は、樓に吹き入つて寒い。そこで、月に向つて、鞭を停めた儘、しばらく上らず、ここに、我が杯の空に成つて居るのを照らして吳れろといつた。

二更山吐月。幽人方獨夜。二更、山、月を吐く、幽人、方に獨夜。

可憐人與月。夜夜江樓下。憐むべし、人と月と、夜夜江樓の下。

風枝久未停。露草不可藉。風枝、久しく未だ停まらず、露草、藉くべからず。

歸來掩關臥。唧唧夜蟲話。歸り來つて、關を掩うて臥す、唧唧として、夜蟲話る。

【詩意】二更に、山が月を吐くと、幽人は、獨り夜を過ごす寂しい想に堪へ兼ねて居る。人と月と、夜夜、江樓の下に於て逢ふのは、まことに可憐の至。風に搖らめく枝は、久しくして停まらず、露にぬれた草は、藉くことが出來ない。歸り來つて、門を閉して寐ると、蟲の聲、かごとがましく聞こえた。

三更山吐月。棲鳥亦驚起。　三更、山、月を吐く、棲鳥、亦た驚いて起つ。
起尋夢中游。清絶正如此。　起つて尋ぬ夢中の游、清絶、正に此の如し。
驅雲掃衆宿。俯仰迷空水。　雲を驅つて衆宿を掃ふ、俯仰、空水に迷ふ。
幸可飲我牛。不須違洗耳。　幸に、我が牛に飲ふべし、須らく耳を洗ふに違ふべからず。

【字解】飲我牛　逸士傳に「堯、天下を許由に讓る、許由、これを逃る、巢父、これを聞いて其耳を洗ふ。樊仲父、牛を牽いて之に飲ましめむとす、巢父の耳を洗ふを見、乃ち牛を驅つて還る、牛をして下流を飲ましむるを恥づるなり」とある。

【詩意】三更の頃、山が月を吐くと、木に棲む鳥が驚いて騷ぎ出す。そこで、自分も起きて、夢中に游んだ跡を尋ねると、まことに清絶である。雲を追ひまくつて、衆星を掃ふと、俯仰の間、空と水との界も分からぬ位。この水は清くして、わが牛に飲ましむべく、人が耳を洗つた爲に止めるといふことはない。

四更山吐月。皎皎爲誰明。　四更、山、月を吐く、皎皎として、誰が爲に明かなる。
幽人赴我約。坐待玉繩橫。　幽人、わが約に赴き、坐して玉繩の橫はるを待つ。
野橋多斷板。山寺有微行。　野橋、斷板多く、山寺、微行あり。
今夕定何夕。夢中游化城。　今夕、定めて何の夕、夢中、化城に游ぶ。

【字解】（一）玉繩　銀河を云ふ。（二）化城　この世ならぬ境地に在る寺、法華經に「一導師あり、方便力を以て、險道中に於て三百由旬を過ぎ、化して、一城を作る。衆人に告げて言ふ、汝等、怖るる勿れ、退還を得るなし、と。ここに於て、衆人、前んで化城に入り、已度の想を生じ、安隱の想を生ず」とある。

【詩意】四更に山が月を吐いたが、皎皎として、誰が爲に明かなのか。幽人は、我が約に赴かむとし、銀河の影斜ならむとするを待つて居る。野橋は、大分古くなつて、板の斷えたのが多く、山寺に夜來るのは、もとより微行である。今夜は、如何な夜であるか知らぬが、夢中、幸に、化城に游ぶことを得て、しばらく、この世を忘れたのは、まことに嬉しかつた。

五更山吐月。窗迥室幽幽。　五更、山、月を吐く、窗迥にして室幽幽。
玉鉤還挂戶。江練却明樓。　玉鉤、還つて戶に挂り、江練、却つて樓に明かなり。
星河澹欲曉。鼓角冷如秋。　星河、澹として曉ならむと欲し、鼓角、冷、秋の如し。

不眠翻五詠。清切變蠻謳。　眠らずして五詠を翻し、清切、蠻謳を變す。

【字解】〔一〕玉繩　月を云ふ。〔二〕江練　江水潔くして練に似たるを云ふ。〔三〕五詠　本題の五首を指して云ふ。

【詩意】五更に山が月を吐くと、窓は迥にして、室中には薄明りがさして居る。月は、遠く戸に挂り、練に似たる江水は、却つて樓に映じて明かである。そこで、眠らずして、五首の詩を作り、清切なる聲調を以て、鄙びたる蠻地の歌謠を變せしめる積りである。

【餘論】紀昀は「詩、亦た清脈、ひとり、五更五首、未だ小樣を免れざるのみ、六朝人、從軍五更轉あり、亦た大方の規格に非ず、口を藉るを得ず」といつて居る。

送佛面杖與羅浮長老　佛面杖を送りて羅浮長老に與ふ

十方三界世尊面。　十方三界、世尊の面、
都在東坡掌握中。　すべて、東坡掌握の中に在り。
送與羅浮德長老。　送與す、羅浮の德長老、
攜歸萬竅總號風。　攜へ歸つて、萬竅、すべて風に號ぶ。

【字解】〔一〕十方　東西南北・東南・西南・東北・西北・上下を合稱す。〔二〕三界　楞嚴經に「三界とは、欲界・色界・無色界なり」とある。〔三〕世尊　釋迦を云ふ、法華經解に「世尊十號具足、世出世間の家主とするところ、故に世尊と名づく」とある。

【題義】この詩は、佛面を刻んである杖を羅浮の長老に贈進するに就いて、それに添へる爲に作つたのである。

【詩意】十方三界に、それと知らるる世尊の面を刻んだ杖は、東坡の掌握の中に在る。今、これを羅浮の德長老に贈呈するが、これを攜へて歸ると、天地宇宙、皆その威に服し、あらゆる穴には、風が吹き入つて、號呼するであらう。

十一月九日夜、夢與人論神仙道術、因作一詩八句、既覺、頗記其語、錄呈子由弟、後四句不甚明了、今足成之耳

十一月九日夜、夢に人と神仙の道術を論じ、因つて、一詩八句を作る。すでに覺め、頗る其語を記す、錄して子由弟に呈す。後四句、甚だ明了ならず、今、足して之を成すのみ

析塵妙質本來空。　析塵の妙質、本來空し、
更積微陽一線功。　更に積む微陽一線の功。
照夜孤燈長耿耿。　夜を照らして、孤燈、長く耿耿、

【字解】〔一〕析塵　東坡の自註に「夢中、この句に於ては、了然として、得るところあるものの如し」とある。〔二〕千息　晉書に「許遜、

閉門千息自濛濛。　門を閉ぢて、千息、自ら濛濛。
養成丹竈無煙火。　丹竈を養ひ成して、煙火なく、
點盡人間有暈銅。　人間を點じ盡して、暈銅あり。
寄語山神停伎倆。　語を寄す、山神、伎倆を停めよ、
不聞不見我何窮。　聞かず、見ず、われ何ぞ窮せむ。

氣を服す、一氣千餘息」とある。【三】暈銅　雲笈七籤金丹部に「赤銅あり、暈を去るの法、熟銅を取り、打つて葉となし、牛皮の膠を以て之を煮ること粥の如く、銅葉を以て中に納れ、膠を以て之を封ず、爐中、これを火して燻盡くさしめ、極めて赤し、冷砧上に出して之を打てば、黑皮自ら落つ」とある。【四】停伎倆　傳燈錄に「壽州の道樹禪師、法を北宗の秀に得たり、壽州の三峰山に在り、茅を結んで居る。一野人あり、常に化して、佛及び菩薩羅漢天仙等の形と作り、或は神光を放ち、或は聲響を呈す。かくの如くして、十年を渉りし後、寂として形影なし。師、衆に告げて曰く、野人多色の伎倆を作して人を眩惑す、只だ老僧が見ず聞かざるを消ふ、伊の伎倆、盡くるあるも、吾が見ざる、聞かざるは、盡くるなし」とある。

【題義】十一月九日の夜、夢に人と神仙の道術を論じ、因つて、八句の詩一首を作つた。すでに覺めて後、その語を覺えて居たから、錄して子由弟に呈した。但し、後半四句は、甚だ明瞭でなかつたから、今驟かに作り足して、完成したのである。

【詩意】塵埃を分析して始めて現出する妙質は、本來空なものであつて、更に微陽一線の功を積んで成形するのである。孤燈夜を照らせば、長しへに耿耿として居るし、門を閉ぢて兀坐すれば、千息、自ら濛濛として、わづかに、神仙の術を得たものである。丹竈を養成して、煙火なきに至ると、人間に於ては、暈銅を生ずる樣なものであるから、しばらくも油斷する譯には行かぬ。ここに、語するが、さまざまの伎倆を弄して、人を眩惑しても、仕方がないので、これに對するに、見ざる聞かざるを以てする上は、決して、極まり盡くることはない。

【餘論】紀昀は「これ只だ說部に入れて、談柄と作すべきのみ」といつて居る。

章質夫送酒六壺書至而酒不達戲作小詩問之

章質夫、酒六壺を送る、書至りて酒達せず、戲に小詩を作りて之を問ふ

白衣送酒舞淵明。　白衣、酒を送つて淵明を舞はしむ、
急掃風軒洗破觥。　急に風軒を掃うて破觥を洗ふ。
豈意青州六從事。　豈に意はむや、青州六從事、
化爲烏有一先生。　化して烏有一先生とならむとは。
空煩左手持新蟹。　空しくた手を煩はして新蟹を持し、
漫繞東籬嗅落英。　漫に東籬を繞つて落英を嗅ぐ。
南海使君今北海。　南海の使君、今、北海、

【字解】【一】白衣送酒　王弘の事、前に和郎同年の詩中に注して置いた。【二】舞淵明　苕溪詩話に「白衣送酒舞淵明」人、舞の字、太だ過ぎたるを疑ふものあり。庾儲の答王襃論酒の詩を觀るに及びて未能扶畢卓、猶足舞王衣、舞の字、本づくところあり」と見ゆ。【三】青州六從事　六個の青州從事、即ち六壺の酒、前に次韻王鞏の詩中に

定分百榼餉春耕。　定めて、百榼を分つて春耕に餉る。

注して置いた。【四】烏有一先生　烏有は烏ぞ有らむやの義、前に李公擇過高郵の詩中に注して置いた。【五】左手持新蟹　畢卓の事、前に莫笑銀杯小の詩中に注して置いた。【六】東籬嗅落英　陶淵明の事、前に和郡同年及び和陶貧士の諸詩中に注して置いた。【七】今北海　北海は孔融、その地の太守たりしが故に云ふ、前に首夏卽事の詩中に注して置いた。

【題義】宋史に「章楶、字は質夫、浦城の人、仕へて資政殿學士に至り、莊簡と諡す」とあり、又「紹聖の初、應天府に知たり、集賢殿修撰を加へられ、廣州に守たり」とあり、陳師道の談叢に「東坡、惠に居る、廣守、月ごとに酒六壺を餽る、吏、かつて跌いて之を失ふ」とあつて、その時、この詩を作つたのである。

【詩意】君が白衣を遣して酒を送らしめたと聞いて、陶淵明に比すべき予は、驚起して舞はむとし、急に風の吹き入る小軒を掃除し、缺けた盃を洗つて待ち構へて居た。然るに、料らざりき、六壺の青州從事は、一の烏有先生となり、全然玉なしに成つて仕舞はむとは。そこで、左手に新しい蟹を持つて居ても、何にもならず、東籬に落英を嗅いだ處で、今さら仕方がない。南海の廣州に知たる君は、さながら、古しへの北海太守の様な人であるから、その上は、定めて、百榼を分つて、春耕にいそしむ予に餉つて呉れるであらうと、唯だそれを待つて居るのみである。

【餘論】乾隆御批に「青州烏有、偶然拈して對偶を作す、集中、尚ほ通印子魚を以て披綿黃雀に對し、日斜庚子を以て歲在巳辰に對するあり、竝に宋の詩人に稱せらる、その實、軾の詩、卓絕の處、盡く此に在らず」といひ、紀昀は、この聯を以て「纖にして俚」となし、後聯に就いても「亦た太だ纖」といつて居る。

小圃五詠

人參

（一）上黨天下脊。遼東眞井底。
元泉傾海腴。白露洒（二）天醴。
靈苗此孕毓。肩股或具（三）體。
移根到羅浮。越水灌清泚。
地殊風雨隔。臭味終（四）祖禰。
（五）青椏綴紫萼。圓實墮紅米。
窮年生意足。黃土手自啓。
上藥無炮炙。齕齧盡根柢。

小圃五詠
人參

上黨は天下の脊、遼東は眞に井底。
元泉、海腴を傾け、白露、天醴を洒ぐ。
靈苗、ここに孕毓し、肩股、或は體を具ふ。
根を移して羅浮に到り、越水、清泚を灌ぐ。
地殊にして風雨隔り、臭味、終に祖禰。
青椏、紫萼を綴り、圓實、紅米を墮つ。
窮年、生意足れり、黃土、手、自ら啓く。
上藥、炮炙なく、齕齧、盡く根柢。

(六)開心定魂魄。憂恚何足洗。
靡身輔吾生。既食首重稽。

心を開いて魂魄を定む、憂恚、何ぞ洗ふに足らむ。
身を靡して吾が生を輔く、すでに食うて、首、重ねて稽す。

【字解】【一】上黨　王註に「本草、人參は、上黨及び遼東に在り」と記し、査註に「本草別錄、人參は、上黨の山谷及び遼東に產す」とある。【二】天醴　天の甘酒。【三】具體　人體を具備するを云ふ。隋書五行志に「高祖の時、上黨に人あり、宅後、每夜、人の呼聲あり、これを求めて得ず、宅を去ること一里の所、但だ人參一本枝葉峻茂するを見、因つて之を掘り去れば、その根、五尺餘、體を具へて人狀」とある。【四】祖禰　王註に「宗の因つて出づるところを祖といひ、祖に次ぐを禰といふ、參祖禰とは、その遠からざるを言ふなり」とある。【五】靑椏　本草圖經に「人參、初めて生ずるものは、一椏兩葉、年深きものは四椏を生じ、各ゝ五葉、中心一莖、花あり、細小にして粟の如く、蘂、絲の如く、紫白色、秋後、子を結ぶ、大、豆の如し、生靑熟紅、自落」とある。【六】開心　王註に「人參は、精神を安んじ、魂魄を定め、心を開き、智を益すを主る」とある。

【題義】小圃は、東坡居宅の後園で、そこに種ゑてある植物五種を分詠したのである。

【詩意】上黨は、天下の脊髓と稱すべく、遼東は、四方山に包まれて、まことに井の底の樣な處。人參は、この兩地に產するものを上品として居る。兩地に於ては、元泉が海水の肥腴なる處を傾け、白露は、さながら天の甘酒を降り注ぐが如く、仍つて、人參の靈苗は、ここで育て上げられ、自然、人體を具へて、肩股の區別が、はツきりして居る。今、その根を遙かなる羅浮に移し、越水の極めて淸洌なるを灌ぎかけた。上黨・遼東とは、地味異にして、風雨遠く相隔つるものから、どうやら、うまく出來て、その臭味も、相去ること遠からざる位。その人參の靑い葉の間から、紫蕚の花が咲き出で、圓い實のこぼれるは、赤い米を落した樣である。年を窮めて、生意自ら足り、手づから、黃土を掘り起して、これを採取した。もとより、最上の靈藥であるから、炙る必要もなく、根元までも嚙みしめることが出來る。その效驗、幸に虛しからず、鬱せる心胸を開き、魂魄を落ち付かしめ、憂恚は洗ふにも及ばぬ位。抑も、人參は己が身を潰して、吾吾の生命を輔けて呉れるものであるから、すでに服用して後、自然、重ねて稽首して、謝意を表する次第である。

地黃

地黃飼老馬。(一)可使光鑒人。
吾聞(二)樂天語。喩馬施之身。
我衰正伏櫪。垂耳氣不振。
移栽附沃壤。蕃茂爭新春。
(三)沈水得稚根。(四)重湯養陳薪。
投以(五)東阿淸。和以(七)北海醇。
(六)崖蜜助甘冷。山薑發芳辛。

地黃

地黃、老馬に飼すれば、光、人を鑒せしむべし。
われ樂天の語を聞く、馬に喩へて之を身に施す。
わが衰ふる、正に伏櫪、耳を垂れて氣振はず。
移栽、沃壤に附く、蕃茂、新春を爭ふ。
水に沈んで稚根を得、重湯、陳薪を養ふ。
投ずるに東阿の淸を以てし、和するに北海の醇を以てす。
崖蜜、甘冷を助け、山薑、芳辛を發す。

融爲寒食餳。嚥作瑞露珍。　融けて寒食の餳となり、嚥して瑞露の珍となる。
丹田自宿火。渇肺還生津。　丹田、自ら火を宿し、渇肺、還た津を生ず。
願餉內熱子。一洗胸中塵。　願はくは、內熱の子に餉り、一洗す胸中の塵。

【字解】【一】可使光鑒人　白居易の採地黃者の詩に、凌晨荷鋤去、薄暮不盈筐、攜來朱家門、賣與白面郎、與君啖肥馬、可使照地光、願易馬殘粟、救此苦飢腸とある。【二】樂天語　猗覺寮雜記に「抱朴子に云ふ、韓子子治、かつて地黃甘草を以て、五十歳の老馬に哺す、三駒を生み、百三十歳、乃ち死す。東坡、地黃の詩、吾聞樂天語、樂天、抱朴子の語を用ふるのみ」とある。【三】沈水　王註に「水沈を以て之を試むるを言ふなり。本草注、日華子に云ふ、生者は水浸を以て驗す。浮ぶものは天黃と名づく、半沈半浮のものは人黃と名づく、沈むものは地黃と名づく、その沈むものは佳なり」とある。【四】重湯　王註に「鼎釜水中に於て、更に器を以て水を盛つて煮る、これを重湯といふ」とある。【五】東阿清　王註に「本草、陶隱居云ふ、阿膠は東阿に出づ、その皮を用ふる、老少あれば、膠に清濁あり」と見ゆ。【六】崖蜜　王註に「崖蜜は、蜂が崖石上に於て作るところの蜜、成州、最も之を出す」とあり、李註に「本草、崖蜜は、南方崖嶺の間に生ず、藥に入れて最も勝れり」とある。【七】山蜜　王註に「山蜜は丸の名、古方、丸を用ふるなり」とある。【八】寒食餳　餳は餹の清きもの、卽ち飴。【九】瑞露珍　酒の名、搜異記に「田曙、鄧韶、二書生に逢ふ、謂つて曰く、われに瑞露の酒あり、百花の中に醸すと、與に飲む、その味、甘香なり」とある。【一〇】丹田自宿火　本草に「地黃、性膩、砂仁を得て宜合すれば、五臟の氣を和らげ、丹田に歸宿す」とある。【一一】還生津　津は唾液、天寶遺事に「楊貴妃、玉を含み、津を嚥んで、以て肺渇を解く」とある。

【詩意】地黃を老馬に食はせると、毛の色澤が增して、その光彩、人をして鑑せしむるばかりになる。われ、白樂天の語を聞くに、馬に喩へて、これを人の身に施すと、その效驗は、大したものであるとのこと。予は衰へて、さながら老馬が槽櫪の間に伏するが如く、耳を垂れて、氣が振ひ立たない。そこで、地黃を移植して、肥沃な土に附せしむると、枝葉が茂つて、新春と其生氣を爭ふ位。そこで、その根を掘り、水に沈んだものを善いとして、その若いのを擇び取り、古い薪を燃やして、二重の仕かけで之を茹で、東阿に參する透明なる最上の膠を投じ、そして、北海の醇酒をませ、崖蜜を加へて甘冷を助けしめ、山薑を混じて芳辛を發せしめる。だんだん煮つめると、寒食の時の飴の如くなり、これを嚥み下すと、瑞露の酒の樣な味がする。丹田の中、自ら火を宿して精氣を增し、渇して居た肺も、潤を生じて、自然、唾液を分泌する樣になる。願はくは、內熱に困つて居る人人に、之を贈つて、胸中の塵を一洗して遣りたいものである。

枸杞

神藥不自閟。羅生滿山澤。　神藥、自ら閟ぢず、羅生して山澤に滿つ。
日有牛羊憂。歲有野火厄。　日に牛羊の憂あり、歲に野火の厄あり。
越俗不好事。過眼等茨棘。　越俗、事を好まず、過眼、茨棘に等し。
青荑春自長。絳珠爛莫摘。　青荑、春、自ら長じ、絳珠、爛として摘む莫し。

短籬護新植。紫筍生臥節。　短籬、新植を護し、紫筍、臥節を生ず。
根莖與花實。收拾無棄物。　根莖と花實と、收拾、棄物なし。
大將玄吾鬢。小則餉我客。　大に將に吾が鬢を玄せむとす、小は則ち我が客に餉る。
似聞朱明洞。中有千歲質。　聞くに似たり、朱明洞、中に千歲の質ありと。
靈厖或夜吠。可見不可索。　靈厖、或は夜吠ゆ、見るべくして索むべからず。
仙人儻許我。借杖扶衰疾。　仙人、もし我に許さば、杖を借りて、衰疾を扶けむ。

【字解】〔一〕青莢　青色の細い幹。〔二〕絳珠　赤い實。〔三〕借杖　本草に、枸杞、一名仙人杖とある。

【詩意】枸杞は神藥であるが、自ら閉ぢかくすことなく、つながり生じて、山澤の間に滿ちて居る。日ごとに牛羊に踏まれる憂があり、歲ごとに野火の厄がある。越地の俗として、好事の風なく、この枸杞を見過すことは、茨や棘に等しく、誰も、その效驗を知つて、大切にするものはない。そこで、青色の細い幹は、春になると自然に伸び、そして、赤い實は、爛然として居ても、誰も摘むものはない。予は之を短籬に植ゑて保護して居ると、筍が、その臥したる節の間に生じた。枸杞の根莖は勿論、花實までも收拾して、すこしも、すたり物はなく、これを食つて吾が鬢を黑くして、大に若がへらうと思ひ、すこしばかりの時は、わが客にも振舞ふことにして居る。朱明洞の中に千歲を經た奇質の枸杞が有るといふことは、兼ねて聞いた樣であるが、その根の化した靈狗は、ひよツとすると、夜を守つて吠え、見るべくして採ることが出來ない。幸にして、仙人が予に許して吳れたならば、一名を仙人杖といふ位であるから、その杖を借りて、老衰して疾に惱む予の軀を扶けて貰はうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「忽然、變じて題外に出で、方に變化あり、もし首首板結、便ち章法なからむ」といつて居る。

甘菊

甘菊

越山春始寒。霜菊晚愈好。　越山、春、はじめて寒く、霜菊、晚、愈よ好し。
朝來出細粟。稍覺芳歲老。　朝來、細粟を出し、稍く芳歲の老いたるを覺ゆ。
孤根蔭長松。獨秀無衆草。　孤根、長松に蔭し、獨秀、衆草なし。
晨光雖照曜。秋雨半摧倒。　晨光、照曜すと雖も、秋雨、半ば摧倒。
先生臥不出。黃葉紛可掃。　先生、臥して出でず、黃葉、紛として掃ふべし。
無人送酒壺。空腹嚼珠寶。　人の酒壺を送るなし、空腹、珠寶を嚼む。
香風入牙頰。楚些發天藻。　香風、牙頰に入り、楚些、天藻を發す。

新荑蔚已滿。宿根寒不槁。　新荑、蔚として已に滿ち、宿根、寒槁れず。
揚揚弄芳蝶。生死何足道。　揚揚として芳を弄するの蝶、生死、何ぞ道ふに足らむ。
頗訝(六)昌黎翁。恨爾(七)生不早。　頗る訝る、昌黎の翁、恨む、爾が生の早からざるを。

【字解】【一】田舗粟　甘菊が小さい花を開きしことをいふ。【二】晨光　朝日。【三】㑹秀　左傳に「松柏の下、その草、植ゑずして、菊、その下に生ず、㑹秀といふべし」とある。【四】珠實　本草註に「菊に、一種、小花を開くあり、瓣下、小珠子の如し、これを珠子菊といふ、藥に入れて亦た佳」とある。【五】楚些　些は南方の語助、楚人の歌辭。楚辭に夕餐二秋菊之落英一とあるを云ふ。【六】昌黎翁　韓愈は昌黎の人と稱して居る。【七】生不早　韓愈の秋懷の詩に、鮮鮮霜中菊、旣晩何用好、揚揚弄二芳蝶一、爾生恨不早とある。

【題義】本草に「陶宏景曰く、菊に二種あり。莖紫、氣香にして味甘きものを眞菊となし、青莖にして、大さ蒿艾を作し、氣味苦きもの、苦薏と名づく、眞菊に非ざるなり、葉相似たり、惟だ甘苦を以て之を別つ」とあり、菊譜甘菊の條に「凡そ菊は、味、極めて苦、惟だ此は、香味ともに勝る。羹と作し、及び茶に泛べて、極めて風致あり」と記してある。

【詩意】越山、春はじめて寒き折から、霜に傲る菊は、末になつて、愈よ目出たい。朝來、粟の如き小さな花を綻びて、漸く芳年の老ゆるを覺える。その根は、長松に蔭せられ、ひとり秀容を拔き出でて、外に衆草もない。朝日の光に照らされて居るが、秋雨の爲に半ば摧け倒されて仕舞つた。ここに予は、臥して出でず、紛紛たる黃葉は、掃ふべき程である。この時、誰も酒壺を送り來るものなく、空腹に堪へ兼ねて、小さな菊花を嚙むと、香風は、齒と頰との間に吹き入り、天の華藻を欺くべき楚辭の文句を發せしめるばかりである。今や、新しい柔幹は、蔚然として滿生し、古い根は、寒いながら、枯れもしない。揚揚として芳を弄する蝶は、生死ともに關せず、唯だ此花の前を飛んで居る。それだのに、汝が生、恨むらくは早からず、ここに、秋に逢つて、死にかかつて居るのは、まことに氣の毒だといつた彼の韓愈の了見こそ、頗る訝しいものである。

【餘論】紀昀は「寓慨、深く至る」といつて居る。

薏苡

伏波飯(一)薏苡。禦(二)瘴傳神良。　伏波は薏苡を飯し、瘴を禦いで、神の良きを傳ふ。
能除(三)五溪毒。不救讒言傷。　能く五溪の毒を除くも、讒言の傷くるを救はず。
讒言風雨過。瘴癘久亦亡。　讒言、風雨過ぎ、瘴癘、久しうして亦た亡ぶ。
兩俱不足治。但愛草木長。　兩つながら、俱に治するに足らず、但だ愛す草木の長きを。
草木各有宜。珍產駢南荒。　草木、各〻宜しきあり、珍產、南荒に駢ぶ。
(四)絳囊懸荔支。雪粉(五)剖桄榔。　絳囊、荔支を懸け、雪粉、桄榔を剖く。

不謂蓬荻姿。中有藥與糧。　謂はざりき、蓬荻の姿、中に藥と糧とあらむとは。

春爲芡（六）珠圓。炊作菰（七）米香。　春いては芡珠の圓を爲し、炊いでは菰米の香を作す。

子美拾橡（八）栗。黃（九）精誑空腸。　子美、橡栗を拾ひ、黃精、空腸を誑る。

今吾獨何者。玉粒照座光。　今、吾、ひとり何者ぞ、玉粒、座を照らして光る。

【字解】【一】伏波　卽ち馬援、前に次韻王鞏六首の詩中に注して置いた。【二】瘴痺　瘴は毒熱の氣。【三】五溪　水經に「武陵に五溪あり、雄溪・樠溪・無溪・酉溪・辰溪を謂ふ」とある。【四】詩囊　赤い囊、蔡君謨の荔支の詩に、厚葉纖枝雜詩囊、使君分寄群人忙とある。【五】雪粉　臨海異物志に「桄榔皮中、白粉あり、糯米に似たり」とある。【六】芡珠　鬼蓮の實、王註に「芡實、珠の如く、今謂はゆる雞頭なり」とある。【七】菰米　眞菰の實、王註に「菰中、米あり、これを彫胡といふ、飯と爲す、極めて香ばし」とある。【八】橡栗　とちと栗の實、杜甫の寓居同谷縣の詩に歲拾橡栗隨狙公、天寒日暮空谷裏とある。【九】黃精　前に入峽、次前韻、贈賈耘老、佛跡巖等の諸詩中に注して置いた。

【題義】薏苡は和名ずずだま、本草綱目に「薏苡仁は、所在之あり。二三月、宿根自ら生ず、高さ二三尺、葉は芭蕉の葉の如し。五六月、莖を抽き、紅白花を開き、實を結ぶ。青白色、形、珠子の如くして、稍や長し。小兒、多く線を以て穿ち、貫珠の如くして戲となす。その中の米、白色にして糯米の如く、粥飯となすべし。麪に磨いて食ふも、亦た可。交趾に出づるもの、子、最も大。馬援、交趾に在りし時、これを餌し、載せ還つて種となし、人、以て珍珠となす」とある。

【詩意】むかし、伏波將軍馬援は、薏苡を飯に炊いで食し、それで瘴氣を禦ぎ、精神も爽快であつたといふこと。かくの如くして、五溪の毒を除くことは出來たが、讒口に傷められるのを救ふことは出來なかつた。しかし、讒言は風雨の如く過ぎ去り、瘴癘も久しうして亦た亡び、兩者ともに、今日では、その跡を留めねば、もとより、治むるに足らず、ただ孟夏の頃、草木の丈長きを見るばかりである。草木とても、各〻宜しきところがあつて、南荒の地に於ては、殊に珍產が竝列して居る。荔支は、赤い囊を雜へて懸くべく、桄榔を斷ち破れば、中には雪の如き粉があつて、とりどりに珍らしいが、ここに蓬や荻の姿をした草で、藥となり糧となるものを產する一種がある。舂けば、鬼蓮の實の如く圓く、炊げば、菰米の如く匂やかである。むかし、杜甫は、橡や栗をゆで、黃精を食つて、空腹を誑つて居たといふが、それに比すれば、予は、まことに幸福なもので、玉なす薏苡の粒は、座邊を照らして光つて居る。

【餘論】査初白は「一筆筆開き、句句轉ず」といひ、紀昀は「忽ち議論を以て頭を裝ふ、章法又別」といひ、又五首の總評として「五詩、皆語質にして味腴、東坡用意の作」といつて居る。

雨後行菜圃　　雨後、菜圃を行る

夢回聞雨聲。喜我菜甲（一）長。　夢、回つて雨聲を聞く、我が菜甲の長ずるを喜ぶ。

平明江路溼。竝岸飛兩（二）槳。　平明、江路溼ひ、岸に竝んで兩槳を飛ばす。

天公眞富有。乳膏瀉黃壤。　天公、眞に富有、乳膏、黃壤に瀉ぐ。
霜根一蕃滋。風葉漸俯仰。　霜根、一に蕃滋、風葉、漸く俯仰。
未任筐筥載。已作杯盤想。　未だ筐筥に載するに任へず、すでに杯盤の想を作す。
艱難生理窄。一味敢專饗。　艱難、生理窄く、一味、敢て專ら饗せむや。
小摘飯山僧。淸安寄眞賞。　小摘、山僧に飯し、淸安、眞賞を寄す。
芥藍如菌蕈。脆美牙頰響。　芥藍、菌蕈の如く、脆美、牙頰響く。
白菘類羔豚。冒土出蹯掌。　白菘、羔豚に類し、土を冒して蹯掌に出づ。
誰能視火候。小竈當自養。　誰か能く火候を視む、小竈、當に自ら養ふべし。

【字解】〔一〕菜甲　菜の葉。〔二〕兩槳　槳は舟を漕ぐ櫂。〔三〕乳膏　雨を云ふ。〔四〕筐筥　二字ともに籠。〔五〕淸安　李白の詩に天人淸且安とある。〔六〕芥藍　からし菜、本草註に「芥心嫩薹、これを芥藍といふ」とあり、嶺南異物志に「南土、芥、高さ五六尺」とある。〔七〕菌蕈　陳仁玉の菌譜に「芝菌を最も上品となす、蕈、凡そ九種、味、極めて香美」とあり、海錄碎事に「江東の人、地菌を呼んで土菌となす」とある。〔八〕白菘　卽ち白菜、本草註に「李時珍曰く、按ずるに、埤雅に云ふ、菘、性、冬を凌いで晩に凋む、故に菘といふ。今、俗、これを白菜といふ」とある。〔九〕蹯掌　熊の掌、說文に「獸足、これを番といひ、通じて蹯に作る、左傳に、宰夫、熊蹯を胹て熟せず」とある。〔一〇〕火候　火の加減、酉陽雜俎に「唯だ火候に在り」と見ゆ。〔一一〕自養　公羊傳に「炊烹を養となす」とある。

【題義】行はめぐる。この詩は、雨晴れし後、菜圃をめぐり歩いて作つたのである。

【詩意】夢が醒めて雨の音を聞き、自分で作つて居る菜の葉の大きくなつたのを喜んだ。夜あけに江邊の路は濕ひ、岸に平行して、兩槳を飛ばしつつ、舟を漕ぐものがある。天公は、まことに富有であつて、惜氣もなく、乳膏に比すべき雨を下して、この黃土に注いだ。そこで、霜を帶びた根は、直に勢よくはびこり、風を受ける葉が俯仰する樣になつた。まだ摘み取つて、筥に載する程には成らないが、すでに、杯盤の間に在つて、酒の肴としたら善からうと想はしめた。身は、今、艱難に際し、生計も行き詰つて苦しい處から、一味と雖も、敢て專ら受用することはない。すこしばかり摘んで、山僧に飯を薦め、淸安の心持を以て、眞賞を寄せて居る。からし菜は、菌の如き味がして、その脆くして美なることは、牙頰の間に響をなさしめ、白菜は豚に類し、土を冒して大きく成つたのは、熊の掌にも勝つて居る。かういふものを調理するには、火加減が大切であるから、小さな竈で、ゆツくりと自分で烹なければならぬ。

【餘論】紀昀は「淳古中、自ら本色を作す、霜根の四句、寫し得て生動」といつて居る。

殘臘獨出二首

殘臘、獨り出づ　二首

幽尋本無事。獨往意自長。　幽尋、本と事なし、獨往、意、自ら長し。

釣魚豐樂橋(一)。采杞逍遙堂。　魚を釣る豐樂橋、杞を采る逍遙堂。
羅浮春欲動。雲日有清光。　羅浮、春、動かむと欲し、雲日、清光あり。
處處野梅開。家家臘酒香。　處處に野梅開き、家家、臘酒香ばし。
路逢眇道士。疑是左元放(二)。　路に逢ふ眇道士、疑ふらくは是れ左元放。
我欲從之語。恐復化爲羊。　われ之に從つて語らむと欲す、恐らくは、復た化して羊とならむ。

【字解】〔一〕豐樂橋　翁方綱の註に「西新橋、舊名豐樂橋、紹熙中、通判許蹇の西新橋記に見ゆ」とある。〔二〕左元放　神仙傳に「左慈、字は元放。呉の徐墮といふもの、道術あり、丹徒に居る。慈、これを過ぐ。墮の門下、客あり、慈を欺いて云ふ、徐公在らず、と。慈、便ち去る。客、卽ち徐公に報ず、一老翁あり、眇目、吾、その不急の人なるを見、因つて之を欺いて云ふ、公在らず。公曰く、咄、咄、これは是れ左公、我を過ぐ、汝曹那ぞ之を欺くを得む」とある。

【題義】この詩は、殘臘、卽ち師走の終に、獨り外出散歩して作つたのである。

【詩意】幽を尋ぬるは、本と事なく、閒なる餘りにするので、獨り出かけて、心が伸伸した。先づ豐樂橋に魚を釣り、次に逍遙堂に杞菊を摘んだ。羅浮の山には、春も稍や景色だち、雲日相映じて清光を放ち、處處に野梅が綻び初め、どこの家でも、臘酒が熟して香ばしい。道で眇目の一道士に逢つたが、疑ふらくは、左慈であるかも知れぬ。そこで、之に從つて語らむと欲し、復た羊に化して、其羣中に見えなく成らむことを恐れて居る。

【餘論】紀昀は「味なし」といつて、一口にけなして居る。

江邊有微行(一)。詰曲(二)背城市。　江邊に微行あり、詰曲して城市を背にす。
平湖春草合。步到棲禪寺。　平湖春草合し、步して到る棲禪寺。
堂空不見人。老稚掩關(三)睡。　堂は空しうして、人を見ず、老稚、關を掩うて睡る。
所營在一飽。食已寧復事。　營むところは一飽に在り、食已む、寧ろ事を復せむや。
客來豈無得。施子淨掃地。　客來つて豈に得るなからむや、子に施して、淨く地を掃ふ。
松風獨不靜。送我作鼓吹。　松風、ひとり靜ならず、われを送つて鼓吹を作す。

【字解】〔一〕微行　微細の徑道、細みち。〔二〕詰曲　うねうね曲る。〔三〕掩關　門を閉ぢる。

【詩意】江邊に細みちがあつて、うねうね曲りつつ、城市の後に出られる。平湖の岸には、春草しげり合ひ、そこより步して棲禪寺に往かれる。堂は、がらんとして人を見ず、老いたるも、若きも、門を閉ぢて眠つて居る。汝等の營むところは、唯だ食に飽くことで、食事が濟めば、何を致さうといふのでもない。しかし、ここに來る客は、寺の物靜かなる有樣を見て、得るところが無い譯でもなく、心ばかりの喜捨をして、そこらを掃除して遣らう。松風のみは、獨り靜かならず、われを送つて、鼓吹の樂を奏して居る。

【餘論】乾隆御批に「通首、酷だ靜境を寫す、結に云ふ、松風獨不靜、これは是れ反托の法、元微窅深、妙處尋ぬべし」といひ、紀昀は「この首、自如の致あり」といつて居る。

贈包安靜先生茶二首

包安靜先生に茶を贈る　二首

皓色生甌面。堪稱雪見羞。

皓色、甌面に生じ、雪見羞と稱するに堪へたり。

東坡調詩腹。今夜睡應休。

東坡、詩腹を調し、今夜、睡、應に休すべし。

【字解】〔一〕睡應休　東坡の自註に「偶ま大中精藍中の故人に謁す、日注茶を恋る。果して、虚しく示さず、故に詩以て之を記す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】この茶を沸かすと、白色の沫が甌の面に生じ、雪見羞とでも名づくべき程である。東坡は、この茶を飲んで詩腹を調攝したから、今夜は、快く睡つて、休むことが出來るであらう。

建茶三十片。不審味如何。

建茶三十片、味の如何を審にせず。

奉贈包居士。僧房戰睡魔。

奉贈す包居士、僧房、睡魔と戰へ。

【字解】〔一〕戰睡魔　東坡の自註に「昨日、日注を點す、極めて佳、ここに復た云ふ、罏中餘るもの、示して舟中に及び、睥を滌ふべきのみ」とある。

【詩意】ここに建寧の茶が三十片ほどあつて、味は如何か分からないが、取り敢へず、包居士に奉贈するから、これを飲んで、僧房の中で、睡魔と戰つて行ひ澄まされむことを希望する。

309
65

終